# 奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

8

成人向
NO!

昭和四十六年七月二十日印刷　昭和四十六年八月一日発行　八月号（第二十五巻第八号）　毎月一回一日発行　昭和三十一年四月二十五日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

奇譚クラブ

1971・8

# 奇譚クラブ＝臨時増刊

## ＝〈女体緊縛写真集〉＝定価一〇〇〇円（送30円）

### 天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄……前田真知子
首縄横臥二態……前田真知子
典型的後手縛り……前田真知子
自由な肢のもだえ……前田真知子
麻縄と絖肌の明暗……前田真知子
厳しい縄目を味う……前田真知子
準備態勢OK……前田真知子
股間縛りの表情……前田真知子

### 女体緊縛の華……本誌写真部構成

金髪碧眼の美女……シーラ・ケニー
答打ちの態勢……関谷富佐子
鞭撻の痛苦……関谷富佐子
浣腸責の序曲……長井葉津子
亀甲縛りの美態……左近麻里子
麻縄と白肌の対照……中河恵子
陽を浴びた柔肌……左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ……中河恵子
責め疲れの放心……梨花悠紀子
緊縛裸身の翳り……中河恵子
没我の心境……中河恵子
痛打の末の悦虐……関谷富佐子
沖縄美人の緊縛……座間明子
剝玉子の縛り……佐々木真弓
狂変する裸女……川路叢子
責めくたびれて……佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める……シーラ・ケニー
海老責の狂態……川路叢子
ボリウムに挑戦……座間明子
鞭打の下に……関谷富佐子
祭壇の人身御供……渡部好美
稚妻は縄を知りぬ……金原加奈子
開股の正面と背面……中河恵子
華麗な開股責め……中河恵子
イルリガートルを前に……長井葉津子
非情な責めの終末……長井葉津子
両手吊りの晒し……中河恵子
柱縛りの完了……川路叢子
処女縛にとまどう……三浦純子
麻縄に身をゆだね……中河恵子
盗視するSMの目……佐々木真弓

### 緊縛女体の光と影……編集部構成

日本式高手小手縛……シーラ・ケニー
猫の目のような女……絹川文代
足吊りのある風景……中河恵子
亀甲縛り媚態……中河恵子
M女二輪の花……渡部・川路
苛責に乱れた黒髪……中河恵子
開股縛りの幻想……中河恵子
鏡の前での放恣……前田真知子
愉悦のひととき……川路叢子
ハリツケ晒し……左近麻里子
両手挙げ棒責め……川路叢子
柱宙縛りに浮く……長井葉津子
後手吊りに苦しむ……中河恵子
どこでも責めて……佐々木真弓
鞭の法悦境……関谷富佐子
ムチが痛い、許して……関谷富佐子
柱を挟んだ連縛……渡部・川路
花と蛇の静子です……中河恵子
針責めをして頂戴……渡部好美
二つ折りの女体……長井葉津子
猿ぐつわの哀歓……中河恵子
日本式縛りの白人……シーラ・ケニー
マゾの女王に笞……関谷富佐子
柱しばりに恥らう……金原奈加子
夫婦プレイの慈味……渡部好美
長襦袢の艶姿……花坂道子
豊満ボインを誇る……愛川悦子
美女今縛られる……梨花悠紀子
受入態勢充分……関谷富佐子
折檻にも汚れず……前田真知子
海老責への展開……佐々木真弓
責めてみたい碧眼の女……シーラ・ケニー

### カメラ・ハント楽我記……辻村隆

### 女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三

これから、どうするの？……長井葉津子
美しき吊り……前田真知子
苦痛か悦楽か……関谷富佐子
一筋の縄の魔術……中河恵子
逆エビ縛りに入る……三浦純子
愛撫の責め……渡部好美
俯瞰撮影……前田真知子
黒縄と白肌……中河恵子
身動きできぬ境地……関谷富佐子
ボリウムを縛る……座間明子
浮上した女体……中河恵子
麗しき背面……中河恵子
汚辱の縄……金原奈加子
高手小手本縛り……佐々木真弓
責めの陶酔境……川路叢子
失神したマゾ女……関谷富佐子
前手縛り悶悦……関谷富佐子
柱の彼方の天国……中河恵子
荒縄の海老責……三浦純子
美と縛の女神……前田真知子
はずれた猿轡……梨花悠紀子
可憐な置物……長井葉津子
ながし目の天使……佐々木真弓
酒の肴になる……川路叢子
妖蛇の洗礼……関谷富佐子
弄されるままに……前田真知子
海老縛りの妙味……川路叢子
柱につながれた女……長井葉津子
痛さをこらえる異国の女……シーラ・ケニー
責の果の諦観……前田真知子
痛打の一瞬……関谷富佐子
ホステス裸人生……佐々木真弓

# ◇本誌創刊二十五周年記念◇ 百万円懸賞原稿募集

▽賞　金△

入選作品　第一席　二十万円　1篇
入選作品　第二席　十万円　1篇
入選作品　第三席　五万円　3篇
入選作品　第四席　三万円　5篇
入選作品　第五席　二万円　10篇
佳作優秀作品　一万五千円　15篇
選外佳作作品　5千円　10篇

▽内　容△

一、創刊以来二十数年、終始広く読者の方々から原稿を募集し、幾多の傑作を飾ってまいりましたが、ここに再度皆様の力を募り〈読む雑誌〉として最近急速に発展更に一層充実してまいりました本誌をして、更に一層、傑作を心からお待ちいたしております。

一、生長してまいりました本誌の前衛的な内容にふさわしい力作、読むごたえのある読みピール出来る読者の作品を標榜して一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば何でも結構ですが、サディズムに関連して、各種フェテッシュ一般、同性愛、生首狂、祟、妊婦嗜好、見世物性風俗、アブノーマル・テクニック風俗、女相撲、女斗美、奇習珍奇風俗、古今東西を問わず特異風俗に関するエッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最も得意とされるものを選んで御執筆下さい。

一、いずれも模倣や亜流を排して、あくまで新分野の開拓に意欲的な野心作を求めてお待ちいたします。この際我と思わん自信のお持ちの方は奮ってご応募下さるよう、お願い致します。

▽規　定△

一、応募作品は編集部に於て慎重銓衡の上、入選決定しましては速かに筆者に通知致しまして掲載の如何に拘らず、入選作品に対しては掲載の上賞金を贈呈致します。

一、入選作品の著作権は当社に移行することを前以て御承知おき願います。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品でも他社へ投稿されたものは絶対に限ります。たとえ未発表の作品でも他人の作品を引用するものはお断りする部分を明記して下さい。作品の中に出処（作者、書名など）を明記して下さい。

一、原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚以上に亘ると三百枚までで。

一、締切日は毎月十五日、入選作品は出来る一応事前にご照会願いだけ早く誌上に掲載致します。

一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と区別するため第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。

一、ペンネーム、匿名は必ずお書き願います。応募者の氏名（連絡先）氏名は必ずご自由ですが、住所絶対に公開したり他へ洩らしたりなどは一切ございません。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

一、応募作品は編集部に於て慎重銓衡の上、入選決定しましては速かに筆者に通知致しまして掲載の如何に拘らず、入選作品に対しては掲載の上賞金を贈呈致します。

一、入選作品の著作権は当社に移行することを前以て御承知おき願います。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品でも他社へ投稿されたものは絶対に限ります。たとえ未発表の作品でも他人の作品を引用するものはお断りする部分を明記して下さい。作品の中に出処（作者、書名など）を明記して下さい。

一、原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿用紙をご使用下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上三百枚以上に亘ると三百枚までで。

一、締切日は毎月十五日、入選作品は出来る一応事前にご照会願いだけ早く誌上に掲載致します。

一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と区別するため第一頁に〈懸賞〉とお書き下さい。

一、ペンネーム、匿名は必ずお書き願います。応募者の氏名（連絡先）氏名は必ずご自由ですが、住所絶対に公開したり他へ洩らしたりなどは一切ございません。

一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第41号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種郵便にて）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断り致します。

# 女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壱万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さるよう願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに関してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先＝大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

奇譚クラブ
昭和四十六年七月二十日印刷　昭和四十六年八月一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号
八月号（第二十五巻第八号）　毎月一回一日発行

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan

雑誌コード2805

8月号 ￥350

# ☆読者通信のうら若き美女を緊縛する

読者通信に或は本文の告白文に登場した若々しい本誌愛読者の鮮明な印画紙焼付の変った緊縛姿態を要求される方々に捧げます。

## 逆エビ縛吊り上げ

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろて〉
後手首と足首を締めつけた切点を吊り上げ弓のように反らせる。

## 縄付きで愛してネ

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろせ〉
縛られたままで愛されるのが最高という彼女のマゾヒムズ要望。

## 棒責めの開股縛り

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろひ〉
棒の両端に左右の足を括りつけた開股羞恥責めの最高傑作姿態。

## 可愛い牝犬の珍芸

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろり〉
両手の自由を奪われた可憐な牝犬が全裸の肢体で演ずる珍芸。

## 開股責めの種々相

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろみ〉
羞恥責めの極致である開股縛りの数々を三枚で御覧に入れます。

## 肌に喰い込む麻縄

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろし〉
もがけばもがく程黒ずんだ麻縄はぐいぐい柔肌に喰い込みます。

## 海老責めで虐める

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろめ〉
全裸の海老責めは両腿を一直線に開ききって羞恥の中心を晒す。

## 責め抜かれた結末

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろに〉
あくなき羞恥責めの末、ぐったりと放心状態になった緊縛肢体。

## 股間縛りにあえぐ

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろち〉
柔らかき女体を縦に真っ二つに割った妖しくも艶やかな縄一筋。

## 高手小手首縄悦楽

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろと〉
首縄は顔面を紅潮させマゾヒズムの女の薔薇の花をしとど濡す。

## 脚吊り柱強烈縛り

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろも〉
柱を利用して脚線美の片足を或は両足を吊り上げた羞恥の姿態。

## 白ロープの亀甲縛

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろへ〉
鮮やかな白縄がふくよかな肌を妖しい亀甲縛りの綾模様で彩る。

## 逆エビに晒す美形

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろす〉
柔軟な若々しい肢体が逆エビ縛りで悶えながら美しくうねる。

## 開股開陳羞恥責め

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろは〉
そこを露出するのが目的の羞恥責め好みの開股縛りを披露する。

## 白縄強烈縛り地獄

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろそ〉
白太縄が強烈に肌を埋め弘田三枝子ばりの美貌が苦痛にゆがむ。

## 牢舎へ引回す囚女

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろい〉
牢舎へ通う冷たい階段を全裸の囚女を縛ったままで引回す。

## 菱縄縛りで責める

大手札三枚一組　四〇〇円
深田　菊子　略号ハろふ〉
麻縄を用いて整然とした菱縄を白肌にきびしく喰い込ませる。

## 荒尾慶子のすべて

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハろほ〉
可憐な慶子未亡人のすべてをばっちりと捉らえた緊縛フォト。

## 浣腸溶液受入態勢

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハふし〉
この格好で浣腸液をドクドクと体内に注ぎ込まれるのです。

## 剃毛の美女を縛る

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハふん〉
童女のようにスベスベと剃毛された跡もあざやかに晒して……。

## 私をよく観賞して

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハふな〉
全裸で縛られた私の隅々までを開くほどよく御覧になって。

## ベッド上での狂態

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハふは〉
全裸で縛られた彼女がベッドの白いシーツの上でもだえ抜く。

## 強烈菱縄股間縛り

大手札三枚一組　四〇〇円
荒尾　慶子　略号ハふい〉
麻縄で厳しく締めつけた菱縄と股間縛りは柔肌を痛めつける。

◎御注文はすべて前金にて略号記載の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。

## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう、十分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順次整えて参りましたが、更に挿入写真の検討及び見出し、キャッチフレーズの改訂などによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いものは極力掲載しないようにするのは勿論、掲載した文章は十二分に検討を加え、いやしくも青少年の健全なる育成に支障を与えないよう努力いたします。尚、本誌の発行部数は最低限度にとどめ、その増大を企るための努力はいたしません。

# 奇譚クラブ

〈第二五巻 第八号・通刊第二八二号〉

（昭和四十六年） 八月号 目次

〈本 文〉


扉で一言「SとMの双曲線」……花井 潤子…（9）
「妄想の自画像」に寄す『誘 惑』……諏訪大路健…（10）
懸賞入選創作 〃フォーグレート城〃……松浦 弘義…（14）
告白 マゾ耽溺の半生（下）……黒田 貴夫…（35）
SMドキュメント 女を責める怪盗……佐原陽一郎…（38）
SMカメラ・ハント〈越路智之・小松景子の巻〉
『交 歓』（ある夫婦プレイのSMの生態）……辻村 隆…（44）
交換プレイの現実？ 踏みにじられた夢……山形 阜地…（74）
懸賞入選創作『ペット』（下）……銀河 三郎…（76）
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」（18）……鬼山 絢策…（82）
被虐の旅シリーズ〃ロスの夜〃……由利美千子…（92）
ニュース・スクラップ アブ的たわごと……虹丸 虹吉…（99）
連載小説「大噴火」〈第三十五回〉……千葉 青鬼…（104）

# 奇クラブサロン

…(232)…

私のSM傾向断片……菅野　守男
詩「私はロープ」……縄木縛太郎
私の手製拘束具『太股錠』……佐原陽一郎
サロン楽我記　〈第八十六回〉……辻村　隆
写真集に望む　古書店街ブラッ記……鈴木　容
純子のプレイ・フォト……三浦　敬一
わが緊縛美感　SMへの憧憬……川田　鬼吉
短歌「雌犬の歌」……北川まりこ
写真　麗しき女神の乗馬……佐野　寿
フォトの思い出「妻とのプレイ」……小田原一郎
マニア記　独り楽しむ縛り……早木　夢二
悦楽の使者　〝雲のいざない〟……城　章夫
編集部だより……編集部
六月号読後感「初読者の弁」……坂本　晃一
イメージ画「くつわ装着」……絹川美代子
短歌　〝変身のよろこび〟……中村　純
美少女無惨絵秘帖「串刺自決」……桐原　紫門
私の情感　お灸と若肌……亀山　敏雄
イメージ画「苦悦の懸垂」……府和　糸男
M女を求めて　〝縛りの善悪〟……公原　務
短信往来　再び、みさ子さんへ……中宮　栄
妻をお貸し致します……東京YY生
柴利好氏へ「奴隷妻」について……小竹　一浩
女責め図絵の系譜　〝東西残酷秘抄〟……南　彦造
今田・山本・橋本の御三家を羨む　奴隷妻慕情……柴　利好
連載M小説「則天武后」(終)……真砂十四郎
睡眠薬常飲の少女　〝キミいずこに〟……浜松アニキ
古文書より　『宝暦美女相撲』……須田　司
水田真紀子習作シリーズ　娘十八土蔵の奥で……水田真紀子
我が蒐集の記「浣腸のコレクション」……清水　暗星
連載小説『パノラマ島秘譚』(終)……藤見　郁
カメラ・ルポ「Mの天使とその瞳」……塚本　鉄三
連載小説『花と蛇』〈続篇第七十七回〉……団　鬼六
随想　ポルノ思いつくまま……長谷田亀治
連載創作「幻想帝国」(5)……花影　叢
読者通信……編集部選
読者ギャラリー＝「人犬の図」……室井亜砂路
「よこしまな恋」岡　たかし・「新入り虐め」小川　茂正・「リンチ」宮城　昌子・「苛責」千草　緋笛・「コワレ物注意」名古屋S生・「臣従の礼」岡　たかし・「妊婦用被虐ランチ」須板　旭・「皮革の乱舞」黒田　縛
目次カット「愛　縄」越原　秀美・「猿　轡」あらいかず
扉カット「しがらみ幻想」……黄泉　鳥

## 本誌愛読者の美女たちの緊縛責め姿態

### 離島の乙女浩子嬢

芳紀まさに二十才の穢れなき乙女の肌に妖蛇の縄はからみつく。

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひら〉

### 膨満なる乳房責め

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひむ〉

### 片足吊りにもだゆ

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひな〉

### 初縛りの羞らい

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひれ〉

### 縛りは大好きなの

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひつ〉

### 二十才の羞恥縛り

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈ひよ〉

### 恥しき緊縛ポーズ

大手札三枚一組
高村　浩子
四〇〇円
略号〈へや〉

### あどけなき妊婦

五月号のカメラハントで紹介された稚妻富田由美子さんの初産の妊婦腹とその縛りを開陳します。

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈へえ〉

### 蠟燭責めの妊娠腹

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈へふ〉

### これが妊婦縛りだ

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈へら〉

### 前手縛りの太皷腹

大手札二枚一組
富田由美子
三〇〇円
略号〈ひえ〉

### 臨月腹を縄で縛る

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈へれ〉

### 稚妻の太皷腹観賞

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈ひま〉

### 妊婦全裸の羞らい

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈ひの〉

### メロンのような腹

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈ひこ〉

### 一糸まとわぬ妊婦

大手札三枚一組
富田由美子
四〇〇円
略号〈へう〉

### ベテランと新進

Mの快味に慟哭する谷山久美子とほのかなSMに憧憬する美女前田真知子の最新縛り責め紹介。

大手札三枚一組
谷山久美子
四〇〇円
略号〈ひあ〉

### 強烈エビ縛り地獄

大手札三枚一組
谷山久美子
四〇〇円
略号〈ひて〉

### 開股縛りの強烈さ

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひえ〉

### 麻縄開股責め地獄

大手札三枚一組
前田真知子
三〇〇円
略号〈へら〉

### 白肌に喰い込む縄

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひま〉

### 後手吊上げに呻く

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひの〉

### 開股責めの醍醐味

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひこ〉

### 縄で汚す清純乙女

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひふ〉

### エビ責に映える肌

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひう〉

### 捕われの美女泣く

大手札三枚一組
前田真知子
四〇〇円
略号〈ひや〉

### 夫婦プレイの華

男性のSに馴致された女性のMは次第にセックスの前戯的段階から本格的なSMプレイへと移行して絢爛たる春の花を咲かせる。

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひす〉

### 惨酷海老胡坐縛り

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひせ〉

### 亀甲と後手柱縛り

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひし〉

### 足挙げ開股を拒む

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひみ〉

### 臀部責めの悦楽境

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひも〉

### 胡坐縛りで責める

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひさ〉

### 髪を摑んで苛める

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひん〉

### 化粧室とトイレ責

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈ひゆ〉

### 股間縛りと臀部責

◎お申込方法◎御注文は前金にて郵便局私書箱14号天星社宛へ略号を記載してお申込み下さい。（送料は当方負担）大阪市阿倍野

大手札三枚一組
三浦　純子
四〇〇円
略号〈へよ〉

奇 譚 ク ラ ブ

1971年 8 月号

黄　泉鳥・画

## SとMの双曲線

何も言わないでも、一言も喋り合わないでも、ただその方の側にいるだけで、温い心の通う異性がある。

私の肌と彼の肌との間に通いあう電流のようなものがあって、それでお互いに心と心が触れ合い、いたわりの心が通い合うのだろうか。

いじめられたい私、そして、そんな私の心を百も承知で、じらしにじらし抜いて、結局私の身も心も、ずたずたに切り裂いてしまう心憎いばかりの彼。

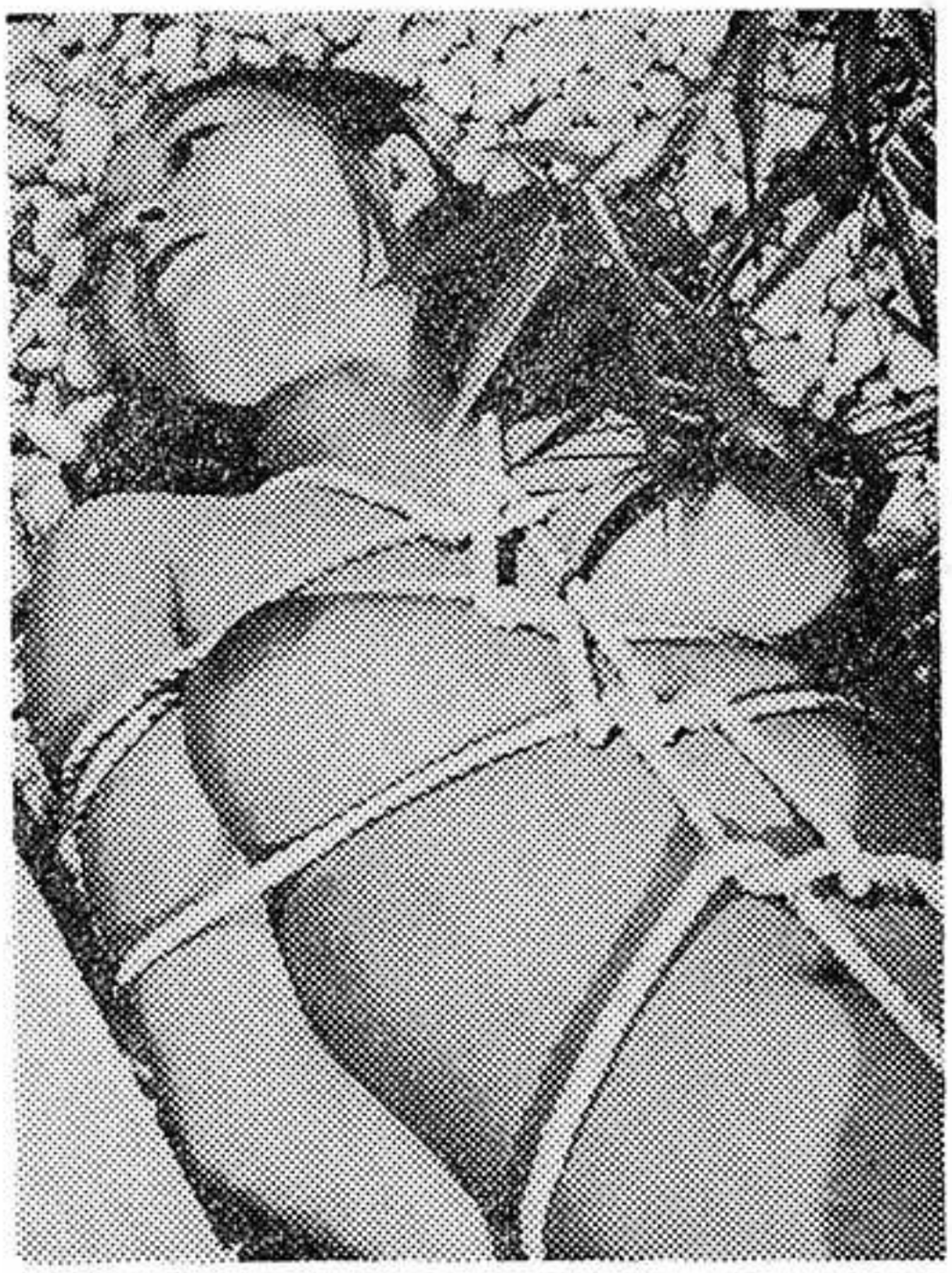
私は婚期を逸した二十八才のハイミスのOL。彼からの電話を心待ちにしながらも、自分の方から積極的に受話器をよう把らないマゾ性の女は私。

黄昏のオフィス街で、掛かって来ない電話を待ち佗びた末、たった一人で、とぼとぼと雨に濡れたペーブメントを踏んで帰途につく私の心は重い。

誰かにいじめられたい、と、そう思っても、私にはそうしたプレイメイトを求めるすべは知らない。

重苦しい夜の帳りが立ちこめる時、私の胸は被虐を想って妖しく息づく。私には、今の私には彼しかいない。そう考えると、何もかも犠牲にしても彼だけは手放してはならないと決心するのだった。

（花井潤子）



# 「妄想の自画像」に寄す

## 誘惑

諏訪大路健

のこされしサンダルあわれ暗闇に

悲鳴はきえて行方はしれず（初子）

「誘拐」連作中のこの一首が、実際に女性作者の願望であったとは、五月号の告白記を読むまで疑わしかった。詠みは良いが女性を装う男性の作ではないか……と知人は憶測し、本当に女性なら、余程逞しい異性の出現を望んでいる人に違いない……と、私は答えた。しかも内心、既婚者か、未亡人となった不遇を嘆く身の上ではあるまいか、との想像も働いて——。

しかし誌上に全貌を現わした時、意外さに驚いた。甘い追憶を夢みて不甲斐ない夫をなじったり、恍惚今一度と憧れる境遇とすぐ結びつけてしまう自分の感覚が滑稽に思われたほど、あなたの若さに腑抜けてしまった。と同時に、大きなミスを犯したという懊悩が、心を覆った。読みが浅かった……ということで——。

以前にもっと関心を湧かし、注目し、こんな歌を詠む人は誰れと問いかけていたなら、或いは、親しく口をきき合える位に歩み寄れたのではあるまいか……。人と人との信頼にらせずにはいられなかった私なのに。

あなたは「空想癖」が強いと云う。それに対する私の癖というものは「渉猟」か。又は魂の漂泊——これだという満足と、納得がゆくまでの完全な掌握が果たされるまで、水藻のように揺れ動く。

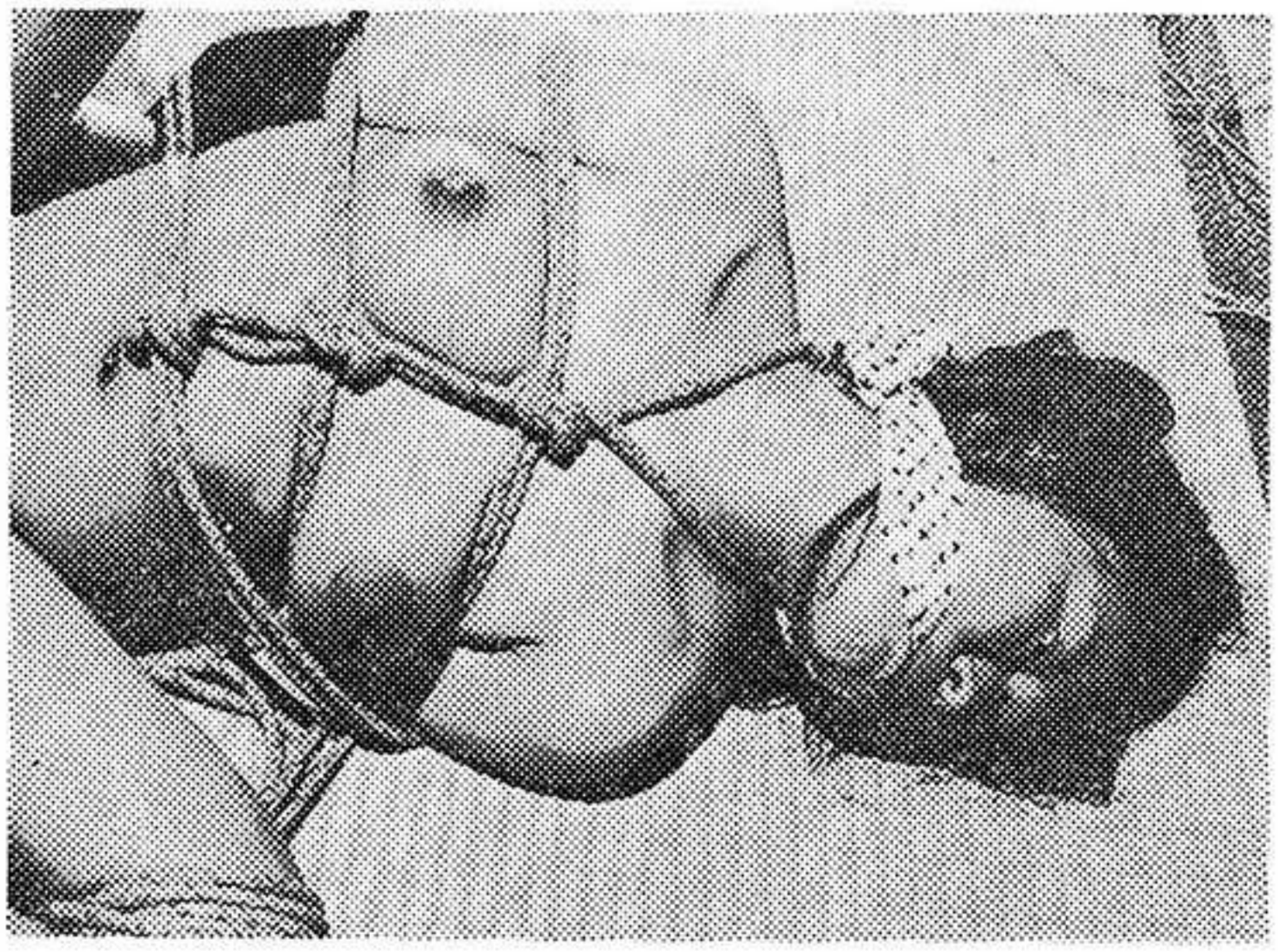
アブノーマルなという但し書を置くのは業腹だが、この希有な雑誌によって通好するからには「奇ク」と呼ばれる水鉢の中で、飢えた観賞魚に啄まれる水草でありたいとすら思う。優美に遊泳するのは、瀬戸の内海で獲れたあなたという桜色に魚鱗が映える魚なのだし、「……文通した上で、私がこの人こそ、

と思った方に実際に責められた上で、私がそのときの告白を書いてもいい……」の、実現の暁には、不様な残骸を曝すことになるのは私の役回りだったとしても、流浪の旅の、ひとときの安らぎは求め得られよう。

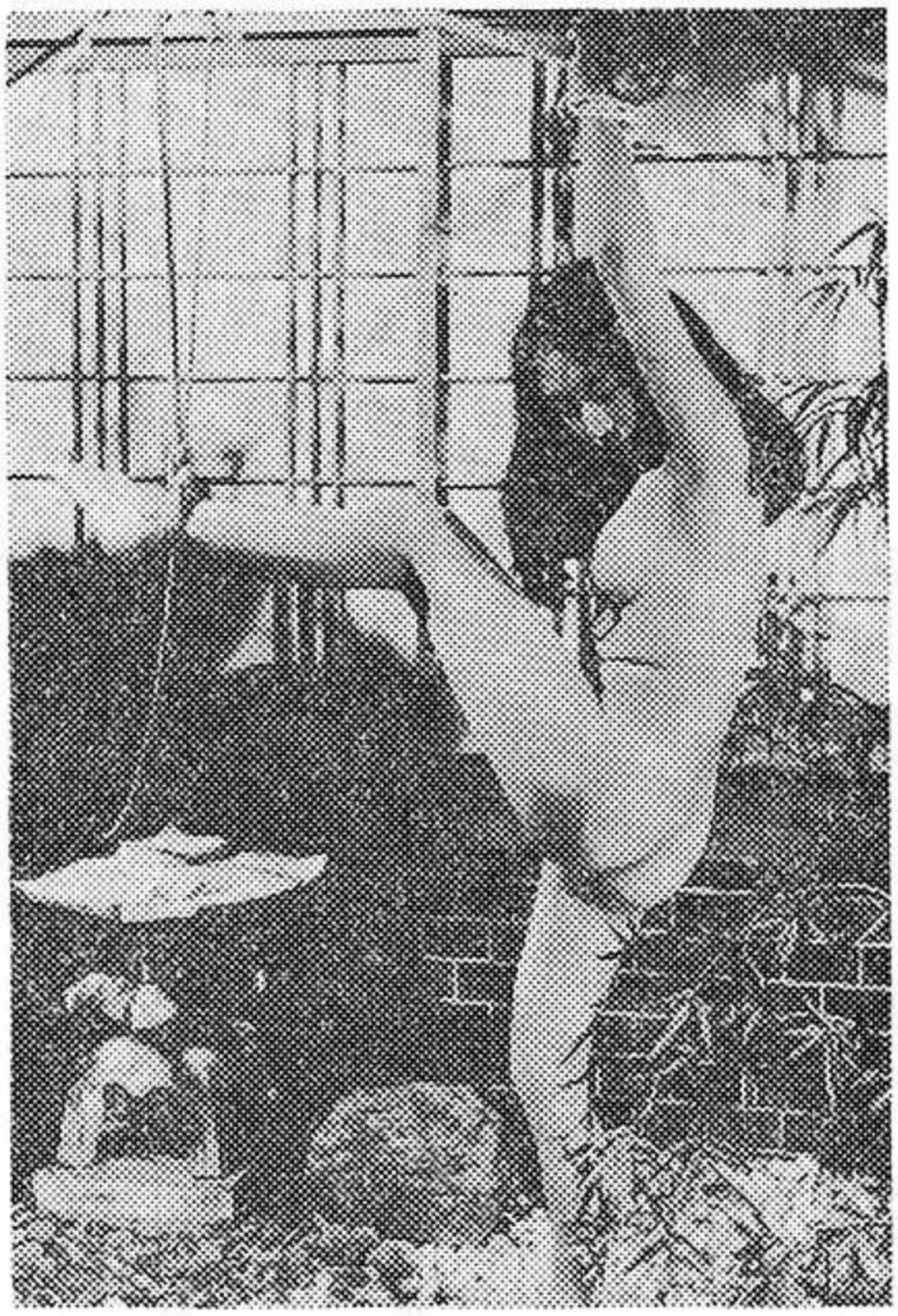
「誘拐」される程に機を狙い、つけまわされる乙女でありたいと希っていたあなたを見過ごした私は今になって「誘惑」願望が昂まっている。否、既に「どうぞ私を煽りたてて、高嶺の花を手折るような激情を刺戟して欲しい。そうしたら有無を云わさず拉致してしまう」という条件つきの瀬踏みの時は過ぎたと思う。相互の願望成就は目前、と思うのは独りよがりも甚しいことには違いないが、「こんな我侭をきいてもらえるのでしたら……」という、あなたの言葉に誘発された一文を、エッチラオッチラたどたどしく綴り、一番最初に目を通す編集子諸氏に嗤われるのも覚悟の上で投稿の次第。

さて、「処女のみの恐怖一汐（入）身に滲むも肌に覚ゆる縄目ぞかなしき」が愉悦であると分かったからには本物へ挑む気慨を示さなければ白けてしまうに違いない。

嘗て、今も大活躍の辻村氏と技を競っていた山本一章氏が、緊縛記を発表される度に私は時間を費して括り上げたと思われる縄目に舌を巻いた。残念乍ら私には、太刀打ち出来るそこまでの緊縛を試みた事はないし、また耐え得るパートナーにも巡り会わなかった。自分では上出来と思った縄掛けも、比較すると、全く顔色ないものだらけというのが、偽らざる、成果なのだ。あなたの「妄想の自画像」の挿入写真から推して、かなりハードな緊縛を試みさせていただけるように思えるし勝手だが、今からその記録作りに胸がときめいてならない。折角のよきお相手を前に「はて、次ぎはどうしたらよかろうか……？」と思案投げ首することなく、「誘拐」して来た処女を玩弄しつくすようにプログラムを展開し、体験を玩味させつつ淀みなく〝密室の秘め事〟に耽ってみたい、と思う。小説「花と蛇」に憑かれた、ということが判明している以上、こうする……ああすると、イメージを羅列することは無意味だし、東京で云う〝桜田門さん〟＝警視庁＝の探照は、極力避けたい。ただ名指しの例は失礼だが、武智鉄二氏のビックラコクほど高価な写真集よりは、内容充実のアルバムを作製次第謹呈する、という自負あるお約束だけは果たしたい。



普段は真面目、勤勉、というあなたが無口のままであっていいから私の前に出現して下さる事を切望する。精勤の中の解放感、俗にいう生命の洗濯が叶えられたなら、お手伝いさんとしての休日を、快く門外へおくり出して下さった主家に対しても、喜々として働くあなたの姿となって還元されると信じるし、水鉢の中で爽明な姿を、本当に未来の伴侶となる男性が現われるまで見続けさせてくれる



だろうと思う。尤も平凡な、一般的女性のように平和な家庭が安息の場として欲しいとは云っていないのだしセリ落とされた女奴隷がその後の運命を全て所有者の意のままに変えられて行く姿を妄想の中に織り込んでいるあなたなのだから、流転の人生こそ望みなのかもしれない。服飾の勉強を続け、末は一流のデザイナーかドレスショップのマダムになるかもしれないし、次かもしれないし、好きな文筆で、赤貧の中から名を成した林芙美子のように、文芸史上に残る女流作家となるかもしれない。ただその程の詮索好き……不見識な人間がまつわりつかない限り、あなたは変身した人間でいられる。……私の取越し苦労かもしれないが、「私に対して、お便の一節は、下手すると読者大衆を侮るが如くに映るかもしれないが、家事の合いりを下さった愛読者の方々に、私の責められ間に書き記されるあなたのペンで、リている、あられもない、顔のはっきり写った写真を焼増して頂いてお送りする……」希望アリスティックに、或いはファンタジックにがあなたにあることを知って、いささか分別彩られて、奇ク誌上に現われる、かもしれなさながらのあなたがいたのだが——。を欠いたものを感じたのだが——。

放埒三昧が過ぎて後顧だにしない人士とだけは、無縁であって欲しい。

被飼育的な境遇に甘んじても、高邁な生活指針さえ失わなければ目下の欲望に身をこがしても三十代の人生から、あなたは過去を滅却して、不死鳥の如くその時代の中に飛び立って行けるだろう。余

その白日夢の感興は、やがて、家事の合い

女の武器は〝化粧〟かもしれないし、最近の高度に開発された美容整形は、将来の安堵となるかもしれないが、私などから云えば楽しめるSMフォトなら素顔は見なくてもいいのだ。勿論、一枚でもベールを剝ごうとする隠蔽の中心部も問題ではない。嗜好の事柄だが、何か工夫がしてあるらしい、と思わせる装填描写を見せてくれた方が性別上の差異からの雰囲気（残酷・哀調）を強めるように思える。

木曜日、正午近く、

有楽町、日劇脇の高架で減速したペンシル型の新幹線ひかり号が東京駅に滑り込む。

ホームに降り立つ人影と、出迎える慇懃な男。

八重洲口のステーション・ビルの車寄せから走り出る車中には「助けて」の悲鳴、とだえて、くくられし娘かつぎて男らは消えぬ、さながらのあなたがいた……としたら——。

アリスティックに、或いはファンタジックに彩られて、奇ク誌上に現われる、かもしれない。写真と、日程の構成程度が私のパートとなって——。

あなたが、初めて「奇ク誌」を手にしたのは〝御主人の書斎で積まれた本を崩した時〟

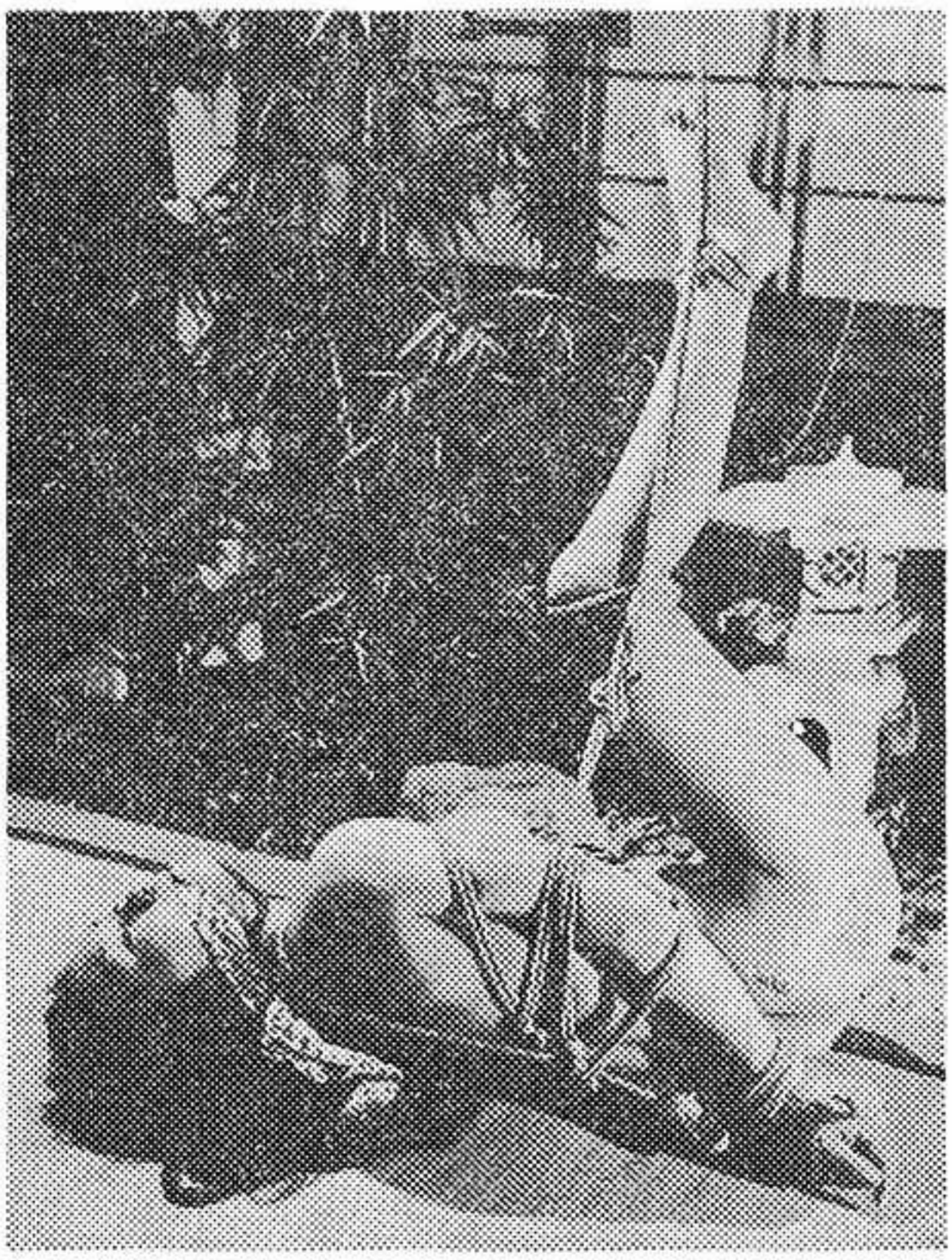
とか。彼、家長にはソノ気がないとは云えない。嗅覚鋭敏な主人は、やがてあなたの存在を見直し、灯台下暗しだったか……と北叟笑む、そんな空想が浮かぶ。あなたの冒険欲が予断を許さない実現性で処かの甍の下で封じられてしまうとしたら、あなたのファン一同愁嘆に暮れるだろう。だから一層のこと、「奇クサロン」に、設けて貰って欲しいとさえ思う。人には飽満の時が訪れる。魔風を避けて寂々の石窟に潜むことを最上と思うまで縄で美装したあなたは誘惑の芳香を掻き消さないで生きるあなたよりも、たの方が尊いのだから。

「良識はSMをプレイ化する」――二月号に載った阿部亘氏の一言には同感だ。良識によって理性化された、といってもあって、氏の人品が窺われて好ましい。

ただ、分かって貰える生活のリズムの中に調和させようとする知性人相互の「遊戯」とするにしても、単純な神経でSMを美風化し、淡泊して、安逸に理解するのでは危険だし、人間的には物足りないということを。「我は欲望人なり」との公言は、控えるが、「好み」から緊縛という一見〝強制強要〟の形は借りても、そこには人間性の能動と受動の関連や求め合い出会った、当事者間の無上の幸福感が覗き、プレイ経過の記述や写真記録には、それの象徴されたものが示されなければならないということを――。

そうでなければ、本質的な性錯倒者の蛮行と何等変わりない己が醜行を、白日の下に晒し出すことになろう。

あなたは「花と蛇」に憑れて空想する娘。私は、名もない〝O〟とだけしか判っていない女性の物語を聖典化し漂泊する男。この異質、不相似の小説に別々な立場で共鳴していても、あなた自身の〈告白記〉では〝O嬢〟的な傾向こそふさわしく、可能性があるように思えてならない。



そこで、他人の褌で相撲をとるようだが書架から引出し、この一文と共に贈呈の便宜、よろしくお取りはからいを懇望して編集部に送った。御一読いただき、折あらば誌上にて初子記の御感想など御発表願えればと、楽しみにお待ちする。

○

（編集部註）呼びかけ形式の味わい深い一文だと思いますが、筆者は『高村初子』さんと「高村初子」さんとを混同されておられるようです。本文に挿入した写真は編集部撮影の分ですので、念の為。

懸賞創作入選作品

# フォーグレート城

松浦弘義

カット・黒田　縛

秋の日が落ちて、あたりが、みるみる暗くなってきた。そして二人は、自分達が道に迷ったことに気がついた。

山道は細く一すじにつづいている。道の両側は、高くそびえたブナの深い林だ。黄色く輝いていた木々は、山の端に日が隠れると、で大体、方角の見当がついていたのだった。

えなくなったのは、あの紅葉した木々が、とりわけ、うっそりと、のしかかるようにして生い立っていた谷を過ぎた時だったろうか。ともかく、野宿するにせよ、歩けるところまで、行ってみる以外、なかった。

気味わるいような漆黒に変わった。そういえば、この地方は黒森（シュヴァルツヴァルト）の名前が地図にしるされていたのだった。

昼頃までは、遥かな山脈の向こうに、白いチューリヒの峰が見えていた。それも近くに人家があるらしい様子だった。

朝からの山歩きでは、遥かな山脈くたに疲れている。二人の重かった足が、小一時間ほどして、道が次第にゆるやかな勾配で傾斜し始めた。道幅も広くなる。どうやら松田も同じだ。二

「マツダ。灯りが見えるわ」

と、レベッカが嬉しそうな声をはりあげた時は、彼もほっとした気持を隠せなかった。一日の行程だと思っていたから、食料とか野宿の仕度とか、とうに充分なものではなかったし、なんと言っても屋根の下で眠る方がいいに決まっている。

林をぬけると、確かに屋敷があった。そこは建物の裏手らしい。四階建ての高さの、黒々とした石壁には小さい窓が二つ三つ、あったが、灯りは、ついていない。暗い中でも鉄格子が嵌まっているのが、微かに分かる。

屋根の向こうに尖塔が二つ、シルエットで立っている。こんな山の中に、こんな建物があるとは思いがけなかったが、これは中世の城なのだろう。

横手には、現代風の平屋が建て増されていて、灯りは、そのカーテンを閉め切ったテラスから漏れていた。

松田とレベッカは、庭に敷きつめられた落ち葉をふんで、玄関の方へ回った。白い扉に獅子の口から鉄輪のノッカーが、ぶら下がっていた。

松田は、ためらうことなく、それを摑んで数回、叩きつけた。

何も返事がない。

だが、扉にすき間が出来て、明かりが、さした。鍵がさしてないのだ。二人は中へ入った。同時に扉の陰で息を殺して棍棒を振り上げていた男が、それを思い切り、松田の頭に打ち降ろした。

○

松田は頭が割れそうな、がんがんする痛みと共に意識を回復した。そして自分を含めた周囲の状態に驚いた。どれくらいの間、気を失っていたのかは判らないが、この様子ではなんだか相当な時間であるらしい、と彼は思った。

全裸にされたレベッカは、尻から太腿のへんにかけて、一面に赤いミミズ腫れを刻まれていた。松田が愛した、なめらかな彼女の肌は無残にも、めちゃめちゃな鞭打ちを受けたことを物語っているのだ。

あれだけ打つには一時間は、かかるに違いない。

部屋は広かった。壁と天井は、病院のような不粋な白一色に塗ってあり、床には平凡な茶に青い模様の入った、じゅうたんが敷かれてあった。右の壁の中央には大きい暖炉があり、その大理石の棚の上には油絵の風景画がかかっていた。それがこの部屋では一番大きい絵だ。まだ壁には、小さい絵や、ガラスばりの額ぶちに入った写真やらが、いっぱい並んでいた。

暖炉の中は、からっぽだった。とんがった鉄製の火よけが嵌まっている。

レベッカは、その暖炉の前に吊るされていたのである。松田の方には背を向けている形だったから、その表情はわからなかったが、両手を後ろに高く縄で引っぱられて跪いた姿勢だ。

気を失っているらしく頭は、がっくりと垂れている。時々吊られた体が、ゆれる。そのたびに、彼女の二つに分けた長い金髪が、きらきらと光った。

松田も全裸にされていた。彼は、ひじかけ椅子に両手両足を縛りつけられているのだ。

その二人を囲んで、ずらりと人が集まっている。ソファに坐っている者、立っているもの、床のクッションに腰を降ろしている者などだ。

男は、みんな黒のタキシードなどを着ている。太った腹に、幅広の腹帯を光らせているのもいる。女はパーティー用のドレスだ。

女は、殆ど三十前に見えたが、男は五十代くらいのが多かった。

松田が頭の苦痛に呻きながら首を振っている間、彼等は、一様に押し黙って、松田を見つめていた。松田が、ようやく周囲をひととおり見まわした時、誰かの声がひびいた。

「男の方が目を覚ましたわ。次は、こいつを

お仕置きしましょう」

それで、彼等の緊張がとけた。ガヤガヤ言う声が出始めた。

「縄を、ほどいてくれ。君達は何者なんだ」

松田は叫んだ。

「女の隣に吊るすのよ」

さっきとは違う声が聞こえた。

松田は、ひじかけ椅子から解放された。改めて後手に縛られる。がっしりした体格の男達が、四人がかりで松田を縛った。

レベッカと並んで、彼女と同じ恰好に吊るされる。

「よせ、気違いめ」

松田は必死になって抵抗したのだが、自分より頭ひとつも大きい男達ばかりが数人がかりでは、どう仕様もない。彼等にとっては、子供を扱うようなものであるに相違ない。

男が、松田の首に縄をつけて引っ張った。すると、すっ裸のまま両手は縛られて、尻をつき出した、何ともみじめな姿勢になった。

松田は恥かしさのあまり、声も出ない。

男達の一人が、松田の髪の毛を摑んで頭を引き起こした。そいつは鼻の長い、ひげのない、のっぺりした顔だ。なんとなく皮膚が、なめし皮のように部厚い感じがする。

「最初は細鞭を使いますよ」

男は意味もなく、にやっと笑って松田に、ささやいた。嘲笑するとか言うのではなく、物をしゃべる時の癖らしかった。

男が松田の頭を突き放すやいなや、松田の尻に鞭が、とんだ。

「ううッ――」

思わず声が漏れた。鞭は硬い革製の、ごく細いものだ。あとになって使われたヤツに比べれば、オモチャみたいなものだった。

男は、あとからあとから、打ちつける。松田は呻きながら、こらえた。

二十発くらい打たれると松田は、もう尻の感覚がなくなった。

それでも、時として鞭がそれて、まだ無傷な太腿に巻きついた場合などは、とび上がるくらい、痛かった。

「そろそろ、乗馬鞭を使いましょうよ」

「いよいよ、本格的ね」

そんな声が聞こえた。松田の尻は真赤になっていたが、今のところ、血は全然、出ていなかった。

鞭打ち係が一休みした。だが、松田が苦しい息をついたかつかないうちに、すぐ、その本格的な鞭が振り降ろされた。

「ああ――ッ」

松田は恥も外聞もなく、大声で叫んだ。それほど、今度の鞭は痛かったのである。

「ひい――」

と松田は、もう打たれるたびに、悲鳴をあげた。鞭が当たる瞬間は、息が止まるような気がした。息を吸い込もうとすると、自然に悲鳴が出るのだ。

さっきまでは、打たれても恥かしさから身を堅くしていたのが、ひたすら、鞭打ちの打撃から脱れようと、めちゃめちゃにもがく。頭の痛みも、どこかへ行ってしまって、ただ一打ちごとの、焼け火箸を当てられるような臀部の痛覚があるだけである。

バシリッ。

「ひい――ッ」

バシリッ。

「ひいっ――」

そのように、しばらく打たれると、松田の尻は、となりのレベッカと同じように、すっかりミミズ腫れだらけになった。ところどころ皮膚が裂けて、血が流れている。

「伯爵夫人、今度は、あなたの番ですわ」

「そうよ。たまにはご自分でなさってごらん

なさいよ」

女達が言った。

ひと通り痛めつけてから、次は、今まで観客だった御婦人方が楽しむらしい。

外国では鞭打ちも愛撫の一つとして行なわれている、という事は松田も聞いていたが、細い鞭ならともかく、こんなものすごいのでは快感などはなかった。これでは、打ち殺されてしまう、と松田は思った。

鞭を握らされたのは、まだ二十二、三くらいの若い女性だった。金髪をアップにした美人で、胸や背中を気まえよく露出した、白いドレスを着ている。なめらかな曲線を持ったそそるようなスタイルだ。小麦色の肌が、白い布地で、よけい魅力的に引きたてられている。そう言えば、どういうわけか、ここにいる人間達は、男も女もみんな非常に日焼けしていた。

「フォン・ボルツ夫人だぜ」

さっきの鼻の長い男が松田にささやいた。

ピシリッ。

「ああっ」

女は打ち始めた。腫れ上がった尻には、ちょっと触れられてさえ痛いのに、懲戒用の鯨の骨が心になった本格的な鞭をふるわれては、たまらない。

だが、松田にとって有難かったことは、この女の打ち方は前の男よりも、ずっとやさしかったことだ。性格がおとなしいのか、鞭打ちも、いやいやしているという調子だった。

松田が、ちょっと振り返ると、ツンととがったいい恰好の鼻と、つつましそうな青い目とが映った。

その次に打った女は、ひどかった。

中年の太った女で、男顔負けの力で松田を打ちすえたのだ。

松田は鞭の連打をあびながら、あたりが真暗になってゆくような気がした。気を失う前兆である。目の前にある暖炉の黒い鋳鉄製の火よけが、電燈の光を、にぶく反射しているのだけが見えた。

松田は真剣に、死の恐怖にとらわれた。無我夢中で助けを呼ぶ声を、はりあげた。

しかし、それがよかった。

「まあ、これは何をしているんですか」

誰かが、ドアをあける音といっしょに、その声がひびいた。

と、とたんにまわりにいた連中があわてふためき出した。松田を責めていた太った女も鞭を捨てて逃げ出した。

「さあ、みんな部屋へ帰るのよ」

と、言う声がして、どやどやと彼等が出てゆく。松田は、それを夢うつつで聞いていたが、やがて失神状態に陥っていった。

○

「本当に申しわけ御座いませんわ」

と、女院長のアンナ・ハウプトマン(オーバーエールッテイン)が言った。彼女のきれいな灰色の瞳は、実際心配そうにくもって、じっと松田を見つめていた。

「もう大丈夫です。まったく僕も、ここが精神病院だとは知りませんでしたよ」

松田はベッドに、うつぶせに寝た恰好だった。レベッカはその隣で、ぐっすり眠り込んでいる。彼女はショックがひどいというので睡眠薬を与えられていた。

「この病院では、夜になると患者を、あの部屋で自由にさせておくんです。でも、今夜はどうして、あんな乱暴なことをしたのかわかりませんわ。ふだんは凶暴性など全然、見られなかったんですから……」

松田は気がついてから、レベッカと尻を並べて、鞭痕の治療を受けたのである。この精神病院は、やはり十四世紀ごろに建てられた城だそうだ。病院もその名前をとって、フォーグレート城病院と呼ばれているという。

松田がいるのは、独房を臨時の病室にしたものらしい。床にマットがしいてあるだけの殺風景な石の部屋だ。ベッドも鉄製だし、窓には鉄格子が嵌まっている。陽が、その窓から垂直に近い角度でさし込んで、壁に近い床に鉄格子の影を作っている。光線の中を埃が静かに舞っているのを見ていたら、今までは感じなかったのに、急にすえたようなカビの臭いがしてきた。

「では、看護婦（シュヴェスター）があなた方の面倒を見ます」

「ありがとう、先生」

と言って松田は、彼女がグラマーなヒップをふりながら出てゆくのを横目でにらんだ。

アンナ院長は、三十をすぎたばかりと思われる智的で体格のいい女性だった。髪はごく薄いブロンドで、灰色の目は、きびきびした彼女の動作とよく調和している。頬骨の高いきりっとした顔立ちの美人だったが、口紅以外は化粧などしていないのだった。

「いかがですか、マツダさん」

と言って入れかわりにはいってきた看護婦も、アンナにおとらぬ美人だったので、松田は少し、どぎまぎした。

「おかげさまで。フロイライン……」

「インゲと呼んでください」

彼女は笑いながら言った。さっき、松田の尻に軟膏をぬったりして、手当てしてくれたのも彼女だった。彼女は暗い色の髪の毛をひっつめにして、唇を赤くぬっていた。ここの患者達と同じように、よく日焼けした小麦色の肌をしている。

「もう一度、診てみましょう」

インゲは、そういうと、さっさと松田のズボンを脱がせる。

彼女のやわらかいけれど、しっかりした指先が、松田の尻から太腿についている鞭痕をまさぐり始めた。灰色のぴったりしたスカートにつつまれた彼女の腰が、そのたびに微妙に揺れた。彼女は、まるで愛撫するみたいに優しく触れるので、松田は平然とはしていられなかった。

「まあ、いけない人ね。となりに奥様がいらっしゃるというのに」

松田は真赤になってしまった。

「でも、これは、あなたが元気になった証拠ですわね」

そう言いながら、彼女はさらに手を伸ばして、松田を抱くようにした。

「あ、な、何をするんだ」

驚く松田の口を、インゲの赤い唇が、ふさいだ。松田を抱きしめた。

「あなたには、とても、ご迷惑をおかけしたから、これは、そのおわびですわ」

彼女は灰色の看護婦の制服を脱いだ。下には白いレースのパンティだけだ。彼女の、陽なたに置かれた、ほし草のような体臭が感じられた。

「この病院では、みんな、よく陽焼けしているね。下着の跡も見えないようだけど、全裸になって焼くのかい」

「ふふふ、目が早いわね。これが何だか、わかるかしら」

よく注意して見ると、彼女の体には、とこどころどころに細い線が焼け残っていた。乳房の上下、腹のまわりなどに、それがある。

「おや、これは何の跡だろう」

「教えてあげましょうか……」

と、そのときだ。レベッカが残念にも唸り出した。

「あっ、いけない。奥様が目を覚ましたわ」

インゲは、ギョッとして、とび上がった。

「また、あとでね」

という声も、そこそこにインゲは、裸のまま服をかかえて逃げ出して行ってしまった。

松田は、その後ろ姿を、あぜんとして見送るばかりであった。

その日は、尻の打たれた傷が、まだ痛むまに、一日中ベッドで、ごろごろしていた。

○

次の日も、よい天気だった。十時頃になって、インゲが散歩に迎えに来た。レベッカは気分が悪いと言うので、松田だけがインゲのあとに、したがった。

松田の病室は二階だったから、石の螺旋階段を下り、一階の長い廊下に出る。片側は上と同じように白く塗った扉がつづき、片側はロマネスク風の柱が立ち並んでいるだけで、そのままテラスになっている。太くて何の飾り気もない丸い円柱にそって、モミの並木があり、さらにその向こうは、落ち葉を敷きつめた庭だ。モミの木ごしに、日光がさし込んで、廊下一ぱいに、あふれている。

話には聞いていたが、ヨーロッパのこういう病院は、日本の癲狂院などというイメージから、まったく外れていると松田は思った。すみからすみまで、とにかく清潔だし、厳格な修道院のような上品さがある。一階は院長の部屋や研究室だそうだ。それにしても静かである。三百人からの患者がいるというのに物音一つ、聞こえないのだった。

インゲは、二人きりになると何もしゃべらず、先に立って歩いて行く。廊下のいちばん端に来た時、ようやくガヤガヤいう人声がした。その角を曲がると玄関なのだ。

「さあ、御覧なさい。すっかり用意は出来ているようですわ」

インゲが、ちょっと気どった声で言った。

松田は彼女の指さす方を見た。ドキリとして息をのむ。思わず知らず、体が棒のようになった。

「これから患者達を散歩に連れて行くのよ。みんな、あいう風に縛ってあるから、今度は何も出来ませんわ」

と、彼女は事もなげに言うのだった。

その男達は、テニス服を着ているものや、ゴルフへでも行くような小ざっぱりした服装で、精神病者とは思えない。彼等も看護婦達も、手に細い鞭をにぎっているのが異様である。松田とインゲが行列のあとについてゆくと、中にこの前、松田を鞭で打った鼻の長い男がいて、片眼をとじて松田に笑いかけた。

「ふふふ。どうです、みんな楽しそうにしてるでしょう。あなたもいかが」

などと、インゲは松田をからかった。こう

「そうよ。日光浴にもなるし、とても健康的じゃないかしら。……さあエルナ。みんなを出発させて」

彼女がそう言うと、灰色の制服を着た看護婦達が出て来たのはいいとして、いっしょにぞろぞろと男達があらわれて、それぞれ縛られた女性を引き立て始めたのに、松田は驚いた。

「ああ、あれも患者よ。なにしろ、ここも人手が少ないのよ。だから、軽症のものには補助看護員として、いろんな事で手伝ってもらっているわ。連中も、けっこう楽しんでやっているようだけどね」

あからさまに、グラマーな女性達の堂々とした全裸を見せつけられては、松田でなくてもおかしな気持になると言うものである。近くで見ると、彼女達は革の手錠で後ろ手に縛られ、さらにそれに付属した革紐で乳房や、なめらかな腹をくくられているのだった。首に嵌められた、ごつい輪からは、革紐が一すじにのびて、形よく盛り上がった腹部を吊り上げるようにして、背中で手首と連結されている。女達の中には、その上、まだ、きつそうな猿轡をかまされているものもあった。

こんな厳しい縛り方をされては、ただ歩くだけでも辛そうだ。みじめに、ぎくしゃくした腰のふり方で、それがまた、妙に扇情的だった。〝補助看護員〟と同じに彼女達も、いっこう気が変だとは見えない。髪型などは、それどころか、この屈きちんとしているし、それどころか、この屈辱的な縛り責めを、さかんに恥かしがっている気配さえ、感じられるのだった。

そう言えば松田が鞭打たれた時も、彼等の話し方が教養のある人間のそれだったので、ずいぶん、不思議に思ったものである。だが考えてみれば、こんな目にあわされても、誰もひと言も文句を言わないのは、やはり気が狂っている証拠なのだろうか。

「あっ、インゲ。あいつが女をいじめているよ」

松田が見ていると、一人の男が、縛られた女の縄尻をつかんで、彼女のプリプリしたヒップをまさぐったり、鞭の先で責めつけたりしたのだ。

「バカを言わないで。あんな事が何だと言うの。あれじゃあ懲罰にもならないわ。しっかりした規律を保つために、男達には一応、懲罰権が与えられているのよ。指導に服従しない者には、当然、罰が加えられますわ」

と、インゲは平然としていて、全然とりあおうとしないのだ。

病院の門を出てから、林の中の道をしばらく行進がつづいた。だんだん道が、のぼり坂になって来た。その頃になると、後ろ手に縛られ体の自由を奪われている女性達は、つまづいたり、よろけたりするものが出始めた。すると、男達は得たりとばかり彼女達の乳房やヒップをつねり上げ、また鞭の柄を革紐の間にさし込んで、こづいたりするのだった。

「あら、一人補助員が足りないようね。マツダ、ちょっと待っていてね」

そうつぶやくと、インゲは列の前へ走って行った。

「この女が余っているから、これはあなたがよ」

インゲが連れて来たのは、あの晩、松田を引率して下さらない」

女の縄尻をつかんで、彼女のプリプリしたヒップをまさぐったり、鞭の先で責めつけたりしたのだ。

「しかし、僕は……」

「遠慮しなくてもいいのよ」

松田は、むりやり彼女の縄尻と鞭を押しつけられた。

「きれいな体でしょう。この人はフォン・ボルツ伯爵夫人。彼女のご主人はシュツットガルトの市長さんなのよ」

ボルツ夫人は、長い睫毛を、つと伏せていた。羞恥のためなのか、それとも、ただ長いこと歩いて来て上気しただけなのか、彼女の頬は真赤に染まっている。縛られた上に、さらに彼女は、残酷にも強いバネを使った鉄製の嵌口具で、その唇を極限状態にまで引き割られていた。ツンとすました上品な美貌も、これでは、だいなしだ。彼女も眉と眉のあいだに、なやましそうに一すじの皺を、きざんでいる。首に嵌められた革具から、はみ出したブロンドの、おくれ毛が風になびく。

松田と夫人とは、いわばおなじみなわけだが、夫人は松田のことなど覚えているだろうか。あまり縛り方が強烈なので、松田はちょ

っと彼女が可哀そうだった。そんな身分もある若くて美しい女性が、ここでは、まる裸にされて縛り上げられ、男達のされるままになっているなんて。

「この人は本当に患者かい？　なんだか気違いとは思えないね」

と、松田は低い声で言った。松田はボルツ夫人のグラマーな全裸を間近に見て、やはり胸が、どきどきしていた。夫人は、両手を肩の方に高くあげて縛りつけられていたが、そのスンナリした手の指の一本一本には、指輪が光っているし、爪もきれいにマニキュアされているのだった。

「何を言っているの。ほら、もっと厳しく引き立てなきゃあ、だめよ」

インゲは松田の手から鞭を取り上げた。少し前かがみになっているので、特に大きく見えるボルツ夫人のヒップを、手加減なくピシピシ打って責める。

夫人は鞭が当たるとく息をつきながら、かすかに身をもだえた。それでも、こうした、れているのか、おとなまに歩くのだった。

山道をのぼりつめた一行は、太いあか樫の木々に囲まれた陽当りのよい草地に出た。林の中で、さかんに鳥の声がしていたのが、ぴたっと静まり、またすぐ松田達が来ると、ちょっと等は、ここで日光浴をさえずりはじめた。彼するのだという。草地て、山のふもとにフォふいた屋根が見えた。近くのは緑だが遠くへ最後には殆ど空の色と地が吸いこまれるのだくキラキラ光る一本のれと、しれる。

自然は美しい、と松

そして、異様なパー始まったのである。

「マツダ。いつまでもりながめていないで、よ」

松田は草地のはしにこと動かなかったからあきれたように叫んだ

「おや、皆んなは、どへ行ったんだろう」

松田は立ち上がると、辺りを見廻した。

「教えてあげるから、ついていらっしゃい」

とインゲは、樫の林へはいった。

黒っぽい小鳥が、すぐそばからハタハタと飛び上がったと思ったら、その潅木のかげで、男が全裸の女を責めつけていた。方々で〝補助看護婦〟達は、女を木に縛ったり、数人がかりで吊るし上げたり、地面に押し倒したりして、慰みものにしているのだった。

男ばかりでなく、制服の看護婦達もいっしょに協力していた。看護婦の中には、持ってきた黒革の鞄から異様な形の器具を取り出して、それで責めているのもいる。松田は、その回診用に持ち歩くみたいな鞄には、てっきり医療品がはいっているのだろう、とばっかり思っていたのだ。わざわざ責め道具まで持ってくるなんて……と、松田は分別くさい顔を作って、首をふる以外ない。

「おきまりの体操ですわ。女達は、ああいう具合に裸で縛られた、どんなことでもされるままのハレンチな恰好ですもの。それを見せつけられていれば、男の方だっていろんなことを仕出かすわよ。それに患者は男も女も、すっかり断種手術をしてありますから、何をしても別に害はないんですの。せいぜい運動になるくらいね」

「しかし……」

「さあ、私達は見物しながら、お昼ごはんにでもしましょう」

などと言って、インゲはバスケットを拡げた。

深く生い茂った枯れ草の間に、あちこちで数十人の陽に光る白い肌が見えかくれしているのは、モザイク模様みたいで壮観だった。男達も、すでに衣服を脱いでしまっているらしい。

だが松田にしてみれば、こんな光景を、さかなにしての食事など、のどを通るはずがない。松田はもう、興奮に声が上ずってきているのに、インゲは、にくらしくも平気な様子で話しつづけるから、とりつくしまもあらばこそだった。

一時間ほどすると、〝体操〟は第二段階に入ったようだ。

今まで、男といっしょに患者の女性を責めていた看護婦達が、裸にむかれ出したのである。彼女達もあまり抵抗せず、全裸にされると女の患者と同じように、雁字搦めの後ろ手に縛りあげられていった。

「まあ、いよいよ始まったわね。看護婦達もたっぷりと準備体操をしたから、もう男達の言うなりなのよ」

「しかし、何をするかわからない気違いに、あんなに縛られちゃあ危険じゃないか」

「看護婦は、それがまた、たのしいのよ。完全に思いのままにされるってことがよ。相手は気違いだから、どんな恥かしいことでも、お互い出来るでしょう。女って、誰でも本当は、そんな風にメチャメチャに、いたぶられることを、心のどこかで望んでいるのね」

インゲの話は、最後の方は大分、あからさまな告白である。これは彼女自身が、そうされたいという意味だなと松田は思った。さすがに、今は彼女の声も、息がつまるようなふるえを帯びている。

そのうちに、二人が並んで坐っている方へぐに縄をかけた。美しい、なめらかな腕を容赦なく、思いきり後ろに、ねじ上げて縛りつけ、首と連結した。それから胸や腹にも幾重にも縄を巻きつけて最後の仕上げには、厳しく股間縄を締め上げた。

インゲの苦しそうにばたつかせていた足も縛りつけられた。松田が今まで長いこと、よだれが垂れそうにしてながめるだけだった形よく引き締まった筋肉質の足に、どす黒い縄が、からくるぶしの所を縛って、その縄尻は肩から回した縄に結えつけられた。

「い、あ、君を縛る気だよ」

松田は思わず立ち上がって、身構えた。

「いいのよ。私だって、いつも皆んなといっしょに縛られているんですもの。私の肌に縄のあとがついていたのを、御覧になったでしょう」

「え、じゃあ、あれは……」

大男は松田の存在など、まったく無視していた。いきなり、インゲの手首をつかんで背中へねじ上げたから、彼女の上体はぐっと前かがみに折れ曲がった。そして男の片手は、乱暴に彼女の灰色の服にかかってゆく。

インゲは眉をしかめながらも、されるままになっていた。スカートを脱がし、無雑作に下着もとり去る。グラマーな、プリプリした乳房やヒップが、練り絹のような光沢を持って、むき出しにされた。

男はインゲを枯れ草の上につき倒して、す

「ああ、逆エビ責めにするつもりなのね」
インゲのハスキーなつぶやきが聞こえた。
大男の、額に汗を滲ませた無表情な顔が、その時、始めてニヤッと笑った。もっとも、奇怪な木彫の面みたいな顔がゆがんでは、いっそう、ものすごいだけなのだ。男は、足首と上体を連結した縄をつかんで、ぐいとばかり引き上げた。
「グッグェーッ」
インゲは目をむいて、呻いた。首が締まって苦しいらしかった。
「エッエ――ッ」
面白いんだか面白くないんだか、男は無言のまま何回も、それをくり返した。縄を高く持ち上げると、インゲの体は、臍を中心に、全くそりかえってしまい、豊かな乳房は、とんがったピラミッドのような形になって天をにらんだ。彼女の顔面は朱をそそいだようだったし、こめかみには血管が浮き出した。
責めるあい間には、男の手はインゲの乳房やヒップから体中を、いとおしそうに、だがずい分と荒っぽく撫み上げ、ひねり上げるのだ。その豊かなヒップには、本当にちぎれるくらい縄が噛み込んでいた。
松田は、インゲが余り苦しそうな悲鳴をあげるので、何度か止めに出ようかとも思ったが、実行は出来なかった。相手は松田の二倍もあるような、たくましい大男だから、腕力では勝ち目はないだろう。また、インゲの前々からの話では、どうも彼女もこうして責められることを愉しんでいると思える、ふしがある。第一、松田自身が、インゲのすさまじいエロチックな姿に魅せられてしまって、責められている彼女の苦痛などは、うわの空になっていた。
どれくらい、その逆エビ責めが続いたのかもう松田には、よく判らなかったが、次に男は、いったん、足首の縄をほどいて、ぐったりしたインゲの体を仰向けにしてから、また肩に力をいれて縛り始めた。
「まあ、こんどはエビ縛りにされるようよ。恥かしいわ」
インゲは、せつなそうな息をつまらせながら、実は案外、弱ってもいないのか、そんなインゲの縛られたままの体の上へ、おし倒したことを松田に解説してくれた。
新しくインゲに強いられた姿勢は、彼女の意外に親切な人間だった。
有無を言わさず松田の衣服を引きはがすと言うとおり、全く女性にとって羞恥の限界を示すようなものだった。
仰向けのまま、尻を高くつき出して、太腿は別々に開いて首と結えつけられ、内側を向けた膝の間から、そうされても、なお美しい顔が、のぞいていると言うわけだった。
男は松田をつかまえて、その手に鞭をにぎらせた。インゲの尻を打てという身ぶりをする。
「マツダ、遠慮なんかいらないわ。思いっきり打っていいのよ」
と、縛られているインゲも口をそえる。
松田は夢見ごこちで二、三回、鞭をふるった。彼女の、大理石の彫刻みたいな感じがする、すこしもくずれていない整った形のヒップに、パシリパシリと乾いた音が響いた。だが、松田の振り降ろす鞭には、あまり力は入っていないから、小麦色のはり切った肌にもたいして跡がつかない。
大男は、おそろしげな外見にもかかわらず意外に親切な人間だった。
有無を言わさず松田の衣服を引きはがすとインゲの縛られたままの体の上へ、おし倒した。松田の骨ばった体が、インゲの豊かな弾力に支えられた。
男は、例の責め具の入った鞄を松田の脇へ置くと、気をきかせるつもりか、林の中へ帰ってゆくのが松田の視界のすみに映った。
「マツダ、キスして」

インゲの顔は、汗で油をひいたように、なめらかに光っていた。睫毛の長い黒い瞳は大きく見開かれて血走っている。おそらく、自分も同じ顔をしているんだろう、と松田は思った。

「インゲ……」

松田は彼女の赤い唇を吸った。松田の舌とインゲの舌は、なにか別の軟体動物ででもあるかのように、ぬめぬめとふれ合い、からみ合った。彼女の口の中は、とても熱かった。

「白状するわ。私はマゾヒストなんですの。さあ、その鞭で私のお尻の皮がさけるまで打ってちょうだい。それから、そこにある責め具や木の枝で、思いきりみじめな、なぶり物にしてちょうだい」

インゲは欲情した声で、うわ言のように叫んだ。

松田は、彼女の希望することを、すべてかなえてやった。

松田がインゲのヒップを鞭で打つと、彼女は、あまり痛くないものだから、そそるようが、一回、鞭に腰をふって松田をからかったがそれて彼女の予期しなかった内腿に、したか当たった時には、彼女も耐えきれず大きな悲鳴をあげた。

○

昼は、とうに過ぎて、二時頃になった。静かだった草地から、ようやく、ぞろぞろと皆んなが、おり始めた。松田とインゲも腰をあげて、あとに続く。

帰りは、患者も看護婦も女性達は全員、縛り上げられて、男に引きたてられた。秋の光に満ちた野の中を、全裸で歩く女体が、まぶしく輝く。彼女達の汗ばんだ肌に、時々風が快く通りすぎる。

来る時とは違う道だったが、壁のようにづいた山肌が、壁のである。道の片側には、岩の間を白く泡立ちながら、溪流が下っている。その流れが、だんだん広くなって、しまいに滝になって落ちている所へ出た。

一行は、そこでまた、止まった。滝壺にはどうどう、ざあざあと水が落下し、岩にぶち当たる音がやかましく、こだましている。だが水量は、それほどでもなさそうだった。滝は広い巾があるのに、その真中を一すじになって落ちているだけだったが、大きな声で叫んだ。

インゲが、滝の音がすごいので、

「ほら、マツダ。あそこを見て御覧なさい」

インゲの言うのは、滝の落ちている裏の岩壁である。そこには、黒い鉄の輪がいくつもとりつけられ、しぶきに濡れて光っている。

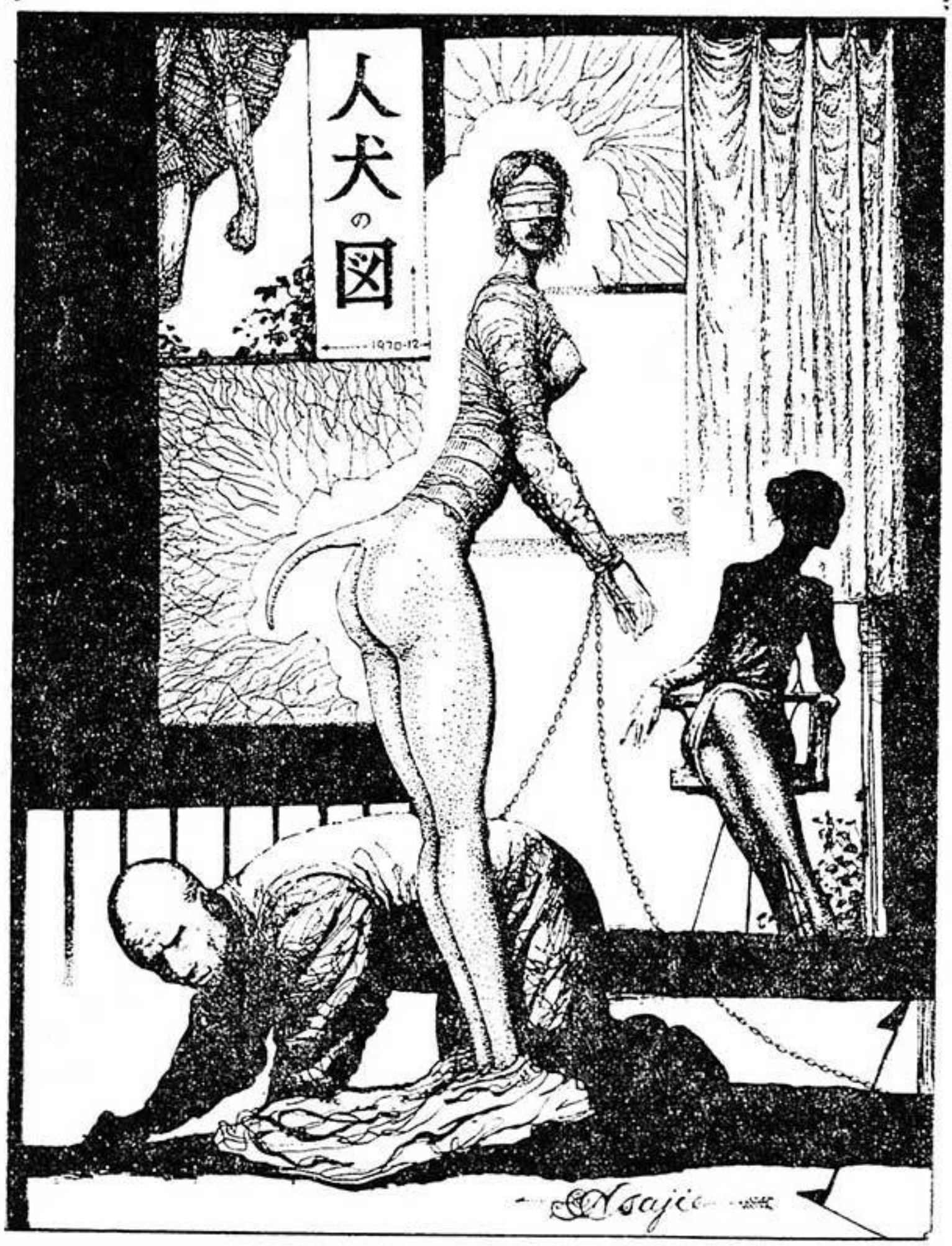
「ここで、よく水責めにされるのよ。あの輪に結えつけられたりして……」

インゲが、そう言っている内にもう三人の全裸の女性が、その滝壺へ連れて行かれた。彼女達は水が激しく落ちる下で並んで鉄の輪に縛りつけられた。縛り上げてしまうと、男達は鞭などで責めるのだった。鉄輪は彼女達の頭の上あたりについていて、そこに後ろ手に縦横無尽に縛られたまま、爪先立ちくらいに半ば吊るされた恰好だった。水しぶきの中で、女達が、なにか猥褻な踊りでも踊っているかのように、身をもがくのが見える。

方々で、きゃあきゃあ云う声がおこった。清流のつるつるした岩の上へ女を押し倒して責めている者、深い滝壺へ両手両足を縛ったままの女性を落とし込んで、本格的な水責めにしている者など、皆んながお互いに愉しみ始めたのだ。

松田もインゲの縛りつけられた裸体を、いだいた。あたり一面は、滝の飛沫で、しっとり濡れている。そこの数十人の人間達も、文字どおり濡れそぼっているのである。

僕のイメージ画集『人犬の図』　室井　亜砂路




今、滝壺に吊るされている女は、一人だけだった。白い水しぶきをあびて、金髪を長く曳いているその女は、ボルツ夫人かもしれない。彼女は両手を斜め上にあげて、そこで鉄輪に結えつけられていた。体に、その他の縄は、かかっていない。確かアングルの絵にもこんなポーズで、縛られているのがあった筈だ。あれと同じ姿勢なのである。

彼女は、眼前にくりひろげられているハレンチな儀式のために捧げられた、いけにえのように、頭を垂れたままで、じっと立っている。

翌日、松田は、昼近くになって院長のアンナが起こしに来てくれるまで、目が覚めなかった。一日中、歩いたため……というよりはあの強烈な刺激による疲労で、昨晩は自分の部屋へたどりつくやいなや、死んだように眠りこんでしまったのだ。

松田達の一行が〝遠足〟から帰って来たのは、何時頃か正確な時間は分からないが、あたりは、もう真暗になっていた。玄関のホールで、女達がようやく縄目をほどいてもらっているところへ、別の一行が帰って来たのを覚えている。インゲの話では、病院中の患者が何組かに別れて出かけたのだそうだ。だが驚いたことには、後から来たその組は、裸で縛られているのが全員、たくましい男で、引率しているのが女性なのだった。松田がインゲにこの変なやり方について質問しても、彼女は笑って答えてくれなかった。

「ちょっとレベッカのことで、お話があるのですが、後で院長室までいらしてください」

と、そんなことを、アンナは少し改まった調子で言って帰って行った。どうしたのか、松田が起きた時にはレベッカの姿は部屋になく、彼女のベッドや荷物も、すっかり片づけ

○

られていた。

松田は二日酔いでもしたみたいに重い頭をかかえて、のろのろとベッドから降りる。彼女は院長なのだから、ここでいつも、あんなものすごい事が行なわれているのを知らないはずはないだろうに、昨日の事については何も言わなかった。見て見ぬふりで通すから、お前も余計な事は聞くな、というつもりかなと松田は思った。

看護婦の用意してくれた、おそい朝食をとってから、院長室へ行った。

部屋の、白く塗った高くて素っ気ない扉をノックする。すぐ声がして、向こうから扉をあけてくれた。

「レベッカ、君か。なんだい、その恰好は」

扉をあけて松田を迎えたのはレベッカだった。彼女は灰色の看護婦の制服を着て、にこにこ、笑っていたのである。

この部屋の正面は、中庭に面した大きな窓だ。窓には白いカーテンがおりている。横にどっしりした机があって、院長のアンナが、そこから立ち上がって来た。

「マツダさん。突然ですけど、レベッカは、この病院の仕事が気に入って、ここで働いてもらうことになったんです」

「えっ、そんな馬鹿な。彼女は看護婦の経験なんかないし、第一、僕の妻なんですよ」

アンナは妙な微笑を、うかべた。

「まあ、お掛けなさい。レベッカの話によれば、あなたとは一緒に生活しているだけで、正式な届けは出していないと云うことですわね。それに、あなた方は、いつでも、お互いの自由な立場を尊重し合うことにしていらっしゃるんでしょう。それなのに、相手が別れると言い出すと、やれ自分の妻だとかなんとかいうのかい」

だが、松田がなんと言ってもレベッカは反応がない。彼女は、ただ伏目がちに力なく笑うばかりなのだ。それを見て、アンナが勝ち誇ったように言う。

「わかったでしょう、マツダ。レベッカは、もう私の言うことなら、何だって従うのよ。ひとつ、証拠をごらんに入れますわ」

そう言うと、アンナは机のところへ歩いて行き、インターフォンのスイッチを入れて、一言、二言しゃべる。

それを待っていたかのように、じきにノックの音がした。部屋へ入って来たのはインゲだった。

「インゲ、浣腸室の用意は出来ているそうだね。マツダさんを、ご案内しなさい。私も、

あとから行きます」
「な、何だって、浣腸？」
松田は不思議そうに聞き返した。
「インゲが説明してくれますわ。それでは」
○
松田はインゲと院長室を出た。インゲのあとについて地下室（ケラー）へ降りて行く。
廊下の天井は高く、螢光灯の照明が、ゆきとどいていた。ここも清潔で、地下室特有のじめじめした感じはない。それでも、どこか地下の拷問室という雰囲気がするのは、まわりが、ごつい石の壁で、そのところどころにある白く塗った扉が、がんじょうな鉄製であるためだろうか。
壁には電気配線の細いパイプや、スチームの太いパイプなど、さまざまな太さのパイプが何本も走っている。歩いてゆくに従って、松田はカビ臭さともまた違うにおいを嗅いだ。
「ここでは、患者達は排泄も一定の時間に浣腸されて、すますことになっていますの」
と、インゲが言う。
「これも、つまり清潔さを保つため、と云うわけなのね。ほら、患者の中には、そういうことに、だらしのない人もいるでしょう。だから、そういう者は浣腸室で排泄させて、それ以外の時は、いつもおしめを当てがっておくのよ」
インゲは美しい顔をあからめもせず、そんなことを説明してくれた。
時々、鉄扉の向こうから、よくは聞きとれないが悲鳴のような声がもれて来た。インゲにたずねると、ショック療法ですと言う。大方、電気か何かを使っているのだろうが、その悲鳴は、どこか嬌声に似て、人にみだらなものを想像させるのだった。
「やっぱり〝補助看護婦〟とかが、責めているんだろうね」
と、松田が言った。
「責めるだなんて……やれやれだ」
松田は肩をすくめた。
〝浣腸室〟は長い廊下の突き当たった所の、観音びらきになった大きな扉の向こうだ。中へ入ると、またしても思ったとおりの光景だった。
この部屋の床はタイル張りだった。水を流したタイルは濡れて、螢光灯の光が、うつっている。近くの流しでは湯をわかしているらしく、湯気が立ちのぼって、なんだか日本の銭湯みたいな感じがする。そして、その床の上では、はりきった白いヒップが十いくつも空中に浮かんでいた。女性患者達は全裸で後ろ手にいましめられたまま、キラキラ輝くステンレスチールのパイプと歯車を複雑に組み合わせた器械に、ヒップを高々と突き出した恰好で固定されているのだ。
足も、やや開きぎみに、しっかりとくくりつけられたポーズは、確かに浣腸には絶好である。見ると、彼女達が、ずらりと並んで吊るされている真下にはタイルがなくて、代わりに幅四十センチメートルくらいの溝が切ってあった。つまり、それが便器になるのだろう。もちろん、水で流すに違いない。さすがはドイツ式に能率的なものだ、と松田は感心した。
例のとおり男達がいて、無防備な女性患者を、なぶっている。女性達があげる悲鳴とも嬌声ともつかぬ声が、風呂場と同じ具合に、高い天井へ、ひびきわたっている。
ここでは責める彼等も、長ぐつにビニール引きの白衣という姿だった。
「みんな、いいかげんになさい。早くイルリガートルの準備をするのよ。これから、院長先生がいらっしゃるわ」

とインゲは声を、はり上げた。

インゲは最後の一言を、いやにゆっくりと低い声で発音した。だがその院長先生と云う言葉が彼等に与えた影響は、甚大だった。〝補助看護員〟達は、あわてて働き始めた。彼等が女性患者達の後ろに、それぞれ一個ずつ大きな三リットルはいりそうなガラス容器を吊るし終わったところで、院長のアンナがレベッカと入って来たのである。

「よろしい、仕度は出来ているようね。すぐ始めなさい」

と、アンナの声が地下室にひびいた。

かすかに泡立つ青い液体が、ガラス容器に三分の二ぐらい入れられた。次に器械のハンドルを回すと、女達のすでにもう女性達は、たっぷりとマッサージするように、ワセリンを塗られている。

男達は、ガラス容器から、のびた黒色の嘴管で、手際よく液を注入した。松田が来る前、姿勢は、しゃがみこんだような形にされ、溝の上へ降ろされた状態になった。

松田には、それからあとは、もう見ていられなかった。

異臭が部屋にただよう。すると、またアンナが叫んだ。

「さっさと洗浄しなさい。インゲ。あなたは終わったら患者を引率して、ちゃんと独房まで連れてゆくのよ」

補助看護員達は、ぶっかけ、スポンジでいているやつを使うのもいる。

それからガラス容器には、もう一回、こんどは湯らしい透明な液が満たされた。それは女性の汚ればかりでなく、腸の中まで洗浄する役目だった。

○

やがて患者達は皆出て行って、広い部屋に松田と、アンナにレベッカだけが残された。

「ほんとうに、ひどい責めですわ。あんな羞かしい恰好で、みじめに排泄させられるなんて、女性にとってはどんなに辛いか、お判りかしら」

アンナは、鞭を持った手を腰にあてて、松田に言った。

「これから、レベッカにもあの器械にかかってもらうわ。彼女は私の命令なら、何でも服従する、と言ったでしょう。これが、その証拠です」

アンナはレベッカの方へあごをしゃくって

「話は聞こえたでしょう。最初に、まる裸になるのよ」

と、言った。

「でも……マダがいる前で」

「何を言っているの」

アンナは、ピシリッ！と怒った。

アンナの手にした鞭が、レベッカの太腿を打った。レベッカは真赤になりながら、あわてて衣服を脱ぎ始めた。

下着の一切が脱ぎ捨てられた。レベッカは小柄な方だが、女性として発育すべき部分は充分、発育している。特に彼女は乳房が、他人の物をくっつけたように、すごいのだ。その彼女の裸身を、アンナは、きびきびと革紐で縛り上げてゆく。きゃしゃな体つきのレベッカと、男のように肩幅の広いアンナでは、レスビアンの関係になくても、もとから勝負は決まっている、という感じだ。

松田は嫌な顔を作って言った。

「もう、よく判ったよ。僕は手を引くから、レベッカは許してやってくれ」

だがアンナは、押し黙ったまま、レベッカを、あの屈辱的な姿勢に縛り上げる。

「レベッカ。まず、どういう風にしてもらいたいの。言ってごらんなさい」

と、やさしい声で聞く。

「は、はい。私のお尻を、鞭でお仕置きしてください」

レベッカは、首をうなだれて消えいるような声で言った。ちゃんと、いちいちのセリフまで教えこんだんだな、と松田は思った。

アンナは真直にのびた、硬そうな鞭をヒュッヒュッと空中に振る。まだ鞭を当ててもいないのに、その音だけでレベッカが裸の体をふるわせるのが判った。

アンナは松田に見せつけるように、鞭の先で彼女のふっくらした頬や、その豊満な乳房を、なぶった。そして一歩、下がって間合いをとり、いよいよレベッカを打ち始める。

「ひいっ」

レベッカは打たれるたびに悲鳴をあげた。彼女の尻を突き出した体が、ガクガクと器械の上で、おどる。情容赦のない打ち方で、みるみる彼女のヒップは赤く色どられた。松田は、自分も打たれたことがあるものだから、その苦しむさまも実感を持って映った。見ているだけで痛くなるようだった。

それにしてもアンナは、みごとな打ち手だった。彼女のは、松田や補助看護員達が打つような、なりふり構わぬ、めちゃめちゃな打ち方ではない。ピシリッと鞭は、アンナの狙ったところへ正確に当たる。そして赤い筋がきれいに並ぶのだ。ともかく相当な熟練を積んでいるらしい。

「あぁ――」

と、レベッカの悲鳴が、ひときわ高く部屋に、こだました。

「レベッカ、少しうるさいわよ。静かにさせてあげましょうか」

アンナは鞭打ちの手を休めるとレベッカに近よって、彼女の、ひりひりと灼けつくヒップを、おもしろそうにひねり上げた。

「ひッ。い、痛い」

「うるさい人ね」

アンナは、馴れた手つきでレベッカの鼻をつまみ上げた。思わず、ひらいた彼女の口に素早く、と同時に、ずいぶん荒っぽく、白い布切れを押し込んだ。それは、もちろんレベッカの脱ぎ捨てた下着である。アンナはさらに、太めの革紐を幾重にも、ぎりぎりとレベッカの頬に巻きつけた。

「残酷だ」

松田は目を見張って、つぶやいた。

「まだまだ、これからよ。レベッカも、これくらいのことじゃあ満足しないんだから、責めるのも大変よ」

と、アンナは真面目くさって言うと、壁ぎわにある戸棚から、いそいそとローソクだのクリップだの、長い針だのを持って来た。

アンナはローソクに火をつけた。片手にローソク、片手に針を持って、レベッカの上にかがみ込む。アンナの体のかげで、呻き声と共に、レベッカが激しく身をもだえる。レベッカの白い肌に、ひと筋の血が流れた。このままアンナはレベッカを血だらけにしてしまうのだろうか。

「残酷すぎるな……」

と低い声でつぶやきながら、松田は二人を残して浣腸室を、あとにした。

○

こんなことになった以上、松田は翌朝にでもフォーグレート城を発つつもりだった。だが、その夜おそくなってから、松田が荷物の整理をしているところへ、看護婦が伝言を持って来た。院長のアンナが、松田に会いたいそうだから、と云うことである。

松田が院長室へ行ってみると、昼間とは打って変わって、アンナはずっと淑かな態度だ

った。何か言いたいことを口ごもっているような、勝気な彼女にも、ふさわしからぬ様子なのである。

「レベッカは、のびちゃったわ」

ようやくアンナは舌うちして言った。部屋のすみによせた皮張りの長椅子の上に、レベッカは、毛布を一枚敷いただけで、うつぶせになっていた。血をふいて薬を塗ったらしいが、全裸の背中から尻、太腿にかけて、傷あとが一ぱいだった。眠っているらしく、長々と手足を伸ばして身動きもしない。

「ひどいことをするね」

松田は穏やかに言った。

アンナはちょっと肩をすくめただけで、意味もなく部屋の中を二、三歩、歩き回った。確かに、彼女は松田に用があるのだ。松田はサジスチンの彼女を憎みながらも、そののびやかな姿態の美しさには、感嘆せざるを得なかった。

と、突然、アンナは松田に背を向けてベルトの辺りをいじくっていたかと思うと、スカートを下ろした。上着を脱ぎ、ブラウスを脱ぎ捨てた。ブラジャーとパンティーだけになる。ストッキングは穿いてなく、盛り上がったブラジャーは黒で、パンティーはビニールのような透明だった。

松田は口をつぐんでごくりと、つばを飲み込んだ。ブラジャーが床におちる。それから優雅な身のこなしでパンティーも脱ぎ捨てられた体をかがめると、パンツに目が釘づけになった。体操選手のような筋肉質の、みごとに整った体だ。

アンナは大またで横の大きな机のところへ行く。そこには白っぽいロープが、きちんと束ねられてあった。アンナは、その束を摑みしろ松田の縛りに協力して体を動かした。

松田は狂ったように縛り続けた。彼女の大きいけれど、くずれていない乳房を縛るのは面白かった。乳房の回りを、めがねのようにしめ上げ、さらに、その上から二重三重に縄をかける。乳房はプクンと飛び出て、血管が肌へ浮き出るくらいになる。

彼女の腹は、女性らしい形のよい丸みを帯びていた。胴はくびれて引きしまっており、そこから、たくましいくらいな感じで、腰がはり出している。松田は、そのなめらかな腹にも、ぐいぐいと二重になったロープを、くい込ませた。脇のところで結び目を作って、そこから一すじに縄を下ろし、ついでヒップの方へ、思いきり引き上げた。

「あっあああ」

アンナは、耐えきれずに呻いた。いつもツ

「君は……」

松田は縄束を持ったまま、口ごもる。

「女性が裸になっているというのに……」

アンナの目が大きく、見ひらかれた。

ピシャッ！

ンとすましていた気品のある彼女も、今は美しい体を剝き出しにして、ヒップも乳房も縦横に縄で、くびられているのだ。

「アンナ、いい恰好だよ」

縛り終えると、松田は喉が、からからに渇いていた。松田はアンナの縄尻をつかんで、部屋中、彼女を、こづき回してやった。

「君も、やっぱり女だね。本当は、いつも男にこうされるのが望みだったんだろう」

「ああ、そ、その通りですわ。私も一度、誰かに完全に自由を奪われて、思いきり痛めつけられてみたかったの。女同志の時は拷問する役ばかりだったので、今度は私が、される側にまわってみたくなったのよ」

松田に責めたてられて、アンナは喘ぎながら言った。

「さっきは松田にも色々と悪いことをしましたわ。その代わり、私はインゲなんかより、ずっと責めがいがあると思います。私は男の人は勿論、女性にだって縛られるなんてことは始めてなんですもの。でも、浣腸室みたいな、ああいう、みじめな責めは嫌よ」

松田の顔に嬉しそうな笑いが浮かんだ。急に松田は、縛られて立っているアンナに、足ばらいをかけた。彼女の体が、ずしんとばかり床に打ちつけられた。

「うッ、痛い」

アンナは悲鳴をあげた。あられもなく、ぶざまに、ころがったグラマーな縛られ女だ。

「君は何を言うんだい。院長先生じゃあなく、みだらな女奴隷の状態にいるんだよ。どんなことでも、僕のされるままになるしかないんだ。自分で、さんざん、レベッカなどには、やっておきながら、許してもらえると思っているのかね」

そう言いながら、松田は革靴の底で、アンちらっと廊下を、うかがった。テラスの立木の影が、人気のない長々とした廊下に縞のようになって写っている。空には明るい満月が輝いている。虫の声が盛んにした。

「ぐずぐずせず、言いなさんな。もっと、その大きなヒップを振って歩きたまえ」

松田は机の上にあった鞭を取って、アンナの尻にピシピシ音を立てさせた。

彼女が、おずおずと廊下に立つと、剝き出しの石の床に、素足が冷たそうだ。この地方では、そろそろ、夜ともなれば火が恋しくなる季節だ。だが、もう少しすれば、雪が降てっているアンナには、寒さなど感じられないらしい。

「よし、立て」

松田は邪慳に縄尻をつかんで、アンナを引きずるようにして、起こした。まだ足は縛っていなかった。

「そのまま、地下室まで行くんだ」

「途中で看護婦に会わないかしら。こんな恰好を見られたら……私は、ここでは厳格な院長先生ということになっているのよ」

アンナは、うらめしそうに言う。

「見られたら見られたで面白いよ。そしたらその看護婦も、いっしょに責めてやるさ」

そう言いながらも、松田は扉をあける時、ちらっと廊下を、うかがった。テラスの立木の影が、人気のない長々とした廊下に縞のようになって写っている。空には明るい満月が輝いている。虫の声が盛んにした。

「ぐずぐずせず、言いなさんな。もっと、その大きなヒップを振って歩きたまえ」

松田は机の上にあった鞭を取って、アンナの尻にピシピシ音を立てさせた。

彼女が、おずおずと廊下に立つと、剝き出しの石の床に、素足が冷たそうだ。この地方では、そろそろ、夜ともなれば火が恋しくなる季節だ。だが、もう少しすれば、雪が降てっているアンナには、寒さなど感じられないらしい。

「ゆっくり姿勢をただして、歩くんだ」

と松田は、ともすれば足早になるアンナの

縄尻を、意地悪く手前に引きとどめる。月の光が彼女の白っぽい裸体に濃い陰影をつけ加えた。明るい部分では、肌のうぶ毛が、きらめいて見えた。

浣腸室へ入ると、さっそく例の器械に縛りつけてやる。

「ふふふ。自分が、どういう恰好をしているか判っているだろうね。記念に写真を撮っておきたいよ」

と松田は、アンナがレベッカにしたと同じく、鞭の先を使って彼女を苦しめた。

「ううっ」

「ご立派な院長先生ともあろうお方が、なんて姿だろう。……ところで、前から聞きたかったんだが、この精神病院にいる連中は、本当に皆んな気違いなのかな。僕は何か有りそうに思うんだが。今日はいい機会だから、その質問にも答えてもらうよ。どうせ、君も直ぐには答えないだろうがね」

そうして松田は、彼女の、あらわに突き出したヒップを、力を込めて打ってやった。

「口では何とか言っても、体は正直だねえ」

松田は、アンナの顎をつまみ上げて、言った。

「ひ、ひどいわ。待って、お願いだから私にサルグツワを嵌めてちょうだい。どんなことをされても仕方がないけれど、あなたのされるままに悲鳴をあげるのは、恥かしいわ」

「不思議だなあ。こんなにハレンチな恰好に縛られてからでも、まだ、そんなことが恥かしいのか。他に感想はあるかね」

「縄の絞りかたが、きつすぎるわ。体を曲げていると、くい込むのよ。それに、もう両手は、しびれちゃっているわ」

彼女も、その嵌口具が苦しいものであることは知っているのだ。それは、三日月型の鉄の板二枚で、舌を挟みつける残酷なものだ。

松田は、だが、ちょっと考えた後、やおら無理矢理に、それを装着してしまった。鋼鉄の輪で容赦なく、彼女の頬を、ぎりぎり縛って、うなじのあたりで止めた。

「うっ、ううう」

彼女は眉に、しわを刻んで苦悶している。この部屋用のものだから、浣腸器を始めとして拡張器などの類が多い。尿道カテーテル、アンナのツンと高い鼻梁が上を向いた。空気を求めて鼻腔が、ひくひくするのが、松田には何か誘惑しているようにうつって、彼に、子宮鏡、肛門鏡などを変形したような、不気味な責め具ばかりである。

松田は、それらを一抱えと、鉄製の奇妙なあるヒントを与えた。

「鼻輪だ」

と、つぶやくと、松田はその黒い不気味な形をした嵌口具を持って来た。

「まず、猿轡だ」

と言うと、アンナは、おとなしく、赤い唇を、ひらく。

「舌を、のばすんだ」

「えっ、あの猿轡なの……」

アンナの声が少し慄え、おびえた調子になった。

「あれは男のマゾヒストでも、よっぽどの人でなけりゃあ、要求しないわ。あれは許してちょうだい」

彼女も、その嵌口具が苦しいものであることは知っているのだ。それは、三日月型の鉄の板二枚で、舌を挟みつける残酷なものだ。

松田は、だが、ちょっと考えた後、やおら無理矢理に、それを装着してしまった。鋼鉄の輪で容赦なく、彼女の頬を、ぎりぎり縛って、うなじのあたりで止めた。

「うっ、ううう」

彼女は眉に、しわを刻んで苦悶している。アンナのツンと高い鼻梁が上を向いた。空気を求めて鼻腔が、ひくひくするのが、松田には何か誘惑しているようにうつって、彼に、あるヒントを与えた。

「鼻輪だ」

と、つぶやくと、松田はその黒い不気味な形をした嵌口具を持って来た。美しいけれど曲線をもった道具を手にした。

も、意志が強そうで少し、いかつい感じがしたアンナの顔も、鼻輪に舌責めの嵌口具をはめられては、滑稽な感じさえ起こさせる、みじめな変形ぶりだった。

松田は、さっきの責め具を一つ一つ、アンナに装着して、とっかえひっかえ、その後しばらく彼女に屈辱の涙を流させたのである。

○

彼女は、すでに何回も被虐の悦びを表現したので、一たん、猿轡をはずしてやった。

松田も、だいぶ満足したので、

「これから浣腸して差し上げようと思うんだけど、ちょっと、ご気分は如何、と云うわけでね」

松田は汗のしたたる、油切った顔で、にやにやした。そしてアンナと舌をからませる濃厚なキスをしたのは、ひどく責められていた彼女の舌に対する、慰藉のつもりなのだろうか。

「苦しかったわ。まるで息が出来ないんですもの」

アンナは、すっかり屈服した様子の、やさしい声で言った。

「そうだ、アンナ。ここには勿論、水責めの道具があるんだろう」

「まあ、なぜですの。この上、私を水に漬けるおつもりなの」

と言ってアンナは、せきこんだ。

「だけどね、君だってこの恰好で排泄するのだけは辛いんじゃないかね」

と、松田は眉を上げてみせた。

「それで、君に浣腸したら、すぐそのプールの中へ、ほうり込んでやるよ。水の中なら少しくとも、このままよりは救われるはずだ」

「そんなの、よけい、ひどいですわ」

アンナは、くやしそうに縛られた体を、もだえた。

松田は舌なめずりをした。

「アンナ。あの水槽は、どうだい」

「あ、あれは……。あれは水責めの中でも、一番、苦しいのよ。ほら、縁から鎖が垂れているでしょう。あの鎖は水底で滑車をくぐりそれから、ああいうふうに天井の滑車へ繋がっているわね。人間を、あの鎖の端に縛りつけて、天井からの鎖を引っぱると、その人は嫌でも水の底へ引きずり込まれるのよ。そうやって沈めたり、浮き上がらせたりしているうち、しまいには苦しさのあまり、浣腸なんかしなくても、たいていの人が脱糞してしまうわ」

「それは、願ったりかなったりだ」

松田はアンナの話を聞きながら、太い浣腸器を、いじくっていた。

「用心のため、薬を入れる前に、ちょっと試してみようか」

などと言って、松田は嘴管をつきつける。

「あっ、ああ」

とアンナは腰を振った。

「いよいよだね、アンナ。この責めで君は、

る。深さは五、六メートルもあり、傍に、そこへ昇って行く、階段のついた台が、置いてある。

「アンナ。あの水槽は、どうだい」

松田は舌なめずりをした。

「あ、あれは……。あれは水責めの中でも、一番、苦しいのよ。ほら、縁から鎖が垂れているでしょう。あの鎖は水底で滑車をくぐりそれから、ああいうふうに天井の滑車へ繋がっているわね。人間を、あの鎖の端に縛りつけて、天井からの鎖を引っぱると、その人は嫌でも水の底へ引きずり込まれるのよ。そうやって沈めたり、浮き上がらせたりしているうち、しまいには苦しさのあまり、浣腸なんかしなくても、たいていの人が脱糞してしまうわ」

「それは、願ったりかなったりだ」

松田はアンナの話を聞きながら、太い浣腸器を、いじくっていた。

「用心のため、薬を入れる前に、ちょっと試してみようか」

などと言って、松田は嘴管をつきつける。

「あっ、ああ」

とアンナは腰を振った。

「いよいよだね、アンナ。この責めで君は、

---

奥の方に、松田があるだろうと想像していたものがあった。それは電燈の下で、にぶい光を、はなっている大きなガラスの水槽であ

使うらしい器械が据えつけてあった。

直径三メートルくらいの丸い穴が、いくつか切ってあり、その横に、それぞれ、水責めに

切ってあり、その横に、それぞれ、水責めに

うな高い丸天井を持った造りだった。床には

器を、いじくっていた。

「用心のため、薬を入れる前に、ちょっと試してみようか」

などと言って、松田は嘴管をつきつける。

「あっ、ああ」

とアンナは腰を振った。

「いよいよだね、アンナ。この責めで君は、

道具があるんだろう」

もう女としての尊厳を一切、打ち破られてしまうといってもいい。この仕上げで、完全にメス豚になってしまうんだ」

松田は興奮して言った。

「さあ、君をメス豚にしてくれる可愛い浣腸器にキスするんだ」

彼女の形のよい唇が、そっと、いまわしい嘴管に重ねられる。それでも足らず、松田はグイグイと口中に、ふくませたりした。

ようやく台の上までアンナを引き立てた。松田はガラス管いっぱいに満たした液を一気に注入した。そこで、あまり早く終わっては面白くない、と一瞬、考えて、きつく股間縛りにする。膝の上、足首も縛り合わせてから水の中へ蹴り落とした。

バシャン。

と、しぶきが上がる。一たんは、盛んな白い泡立ちと共に、半ば水底へ沈んでしまう。やがて、ゆっくり水面まで上がってくると、もがきながら息をついている。

「よし、あと十分は、がまんするんだ」

と、松田は大声でどなって、段を降りた。実際のところ、彼はアンナが、よく落下のショックで漏らしてしまわなかったものだと感嘆しているのである。

○

松田は、両手で鎖をジャラジャラさせて引き下ろした。それにつれてアンナの体も、また、ゆらゆらと水底に引き込まれる。じきに泡は、おさまる。そして均整のとれた、ふるいつきたいような緊縛女体が、しゃくとり虫のように水中で躍る。しかも、彼女は背中を鎖で引っぱられているから、こちらにヒップを突き出してみたり、よそ目には、それはまるで松田をからかっているとしか思えない姿なのである。

もちろん、彼女にしてみれば死ぬ苦しみだろう。松田は、いい加減なところで、鎖をはなしてやる。そのくり返しに、いったいアンナは何回ぐらい、耐えられるだろうか。

数回目に、松田が彼女を水底に沈めている時、彼女の腰のあたりから、煙が湧き起こった。松田は、烏賊が墨を吐くような激しさだろうと思っていたが、縄目が遮っているためもあるらしく、とても、ゆっくりだった。

しかし、非常な量である。

松田が鎖を握っていた手をはなすと、自分の汚物が、ただよう水の中を、彼女は気を失ったように、ぐったりして浮き上がっていった。

あくる朝、松田は眠い目をインゲに揺り起こされた。十一時だった。昨夜アンナの始末をしてやって部屋へ帰りついたのが、四時から五時ごろだったから、一応、もう目を覚してよい時刻ではある。

インゲが、にこにこ笑いながら言った。

「また、散歩に出かけるのよ。今日は、私達の組に院長先生もついてこられるそうよ」

戸口にアンナが姿を現わした。昨日、あれだけ、ひどい責めを受けた女であるとは思えない。きちんとスーツを着込んで、美しく微笑んでいる。彼女の後ろにレベッカもいた。

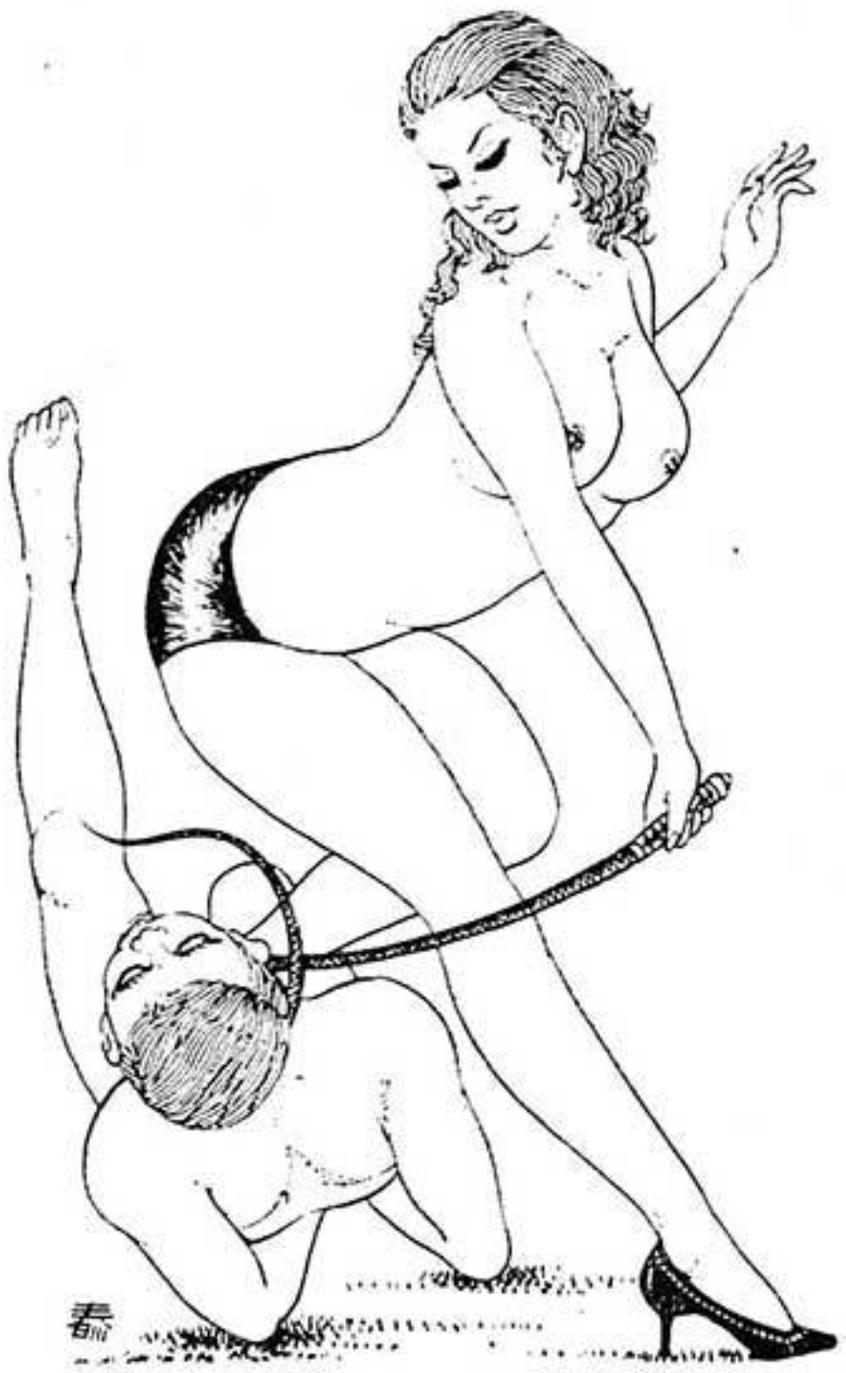
松田は皆んなと廊下に出た。今日も上天気で、すでに高くなった日ざしが、そこいら中に溢れている。

「ご一緒させて下さい。これからは、あなたにも補助看護員になっていただきたいわ」

と、アンナが言った。

松田は部屋の扉に新しくつけられたプレートを眺めた。患者一〇三二号・イチロー＝マツダ、とその真鍮の板には刻まれていた。松田が扉をしめる時、それは秋の光をうけてキラリと輝いた。

―〈オワリ〉―



カット・春川ナミオ

# 告白　マゾ耽溺の半生（下）

黒田貴夫

私の入った〝男性MSの会〟に、K氏を中心とする六、七人のグループがあって、会以外にプレイの機会を持っていた。相当に強度のS派であるK氏は、自宅でのプレイ集会に私を誘ってくれたが、そこで私は、本格的な苦痛と歓喜を叩きこまれることとなった。

その夜、集まったのはK氏を含めて六人であったが、責められ役は私一人で、全裸で後ろ手に縛られた上、開脚逆さ吊りにされ、グルリと取り囲んだ五人から、一斉に同時責めの攻撃を受けたのだが、たちまち五体の感覚が悦びに狂い、マヒしきってしまった。

このグループでの責められ役は、二年ほど続いた。この二年の間に私は、縛りと責めに関しての形の殆ど総てと思われる体験をし、マゾの歓喜は尽きることがなかったのであるが、中心的存在であったK氏が、突然半身不随の中風になってしまったため、自然解散の形になってしまったのであった。

しかし、グループ員との付き合いは続き、その一人から〝女装クラブ〟のあることを聞いて、早速入会して借衣裳の女装をしたのがきっかけで、衣裳からカツラ、下着や小道具まで揃えるところまで行ったのだが、それというのも、このクラブの会長がSで、よく女装した私を縛って嬲ってくれたからである。

これが自分の顔かと疑うほどの化粧をし、湯文字、肌襦袢、長襦袢と着込んで、何本もの しごきで体を締めつけ、カツラをつけるとまるで自分ではないような女が出現するのだが、その姿で更に後ろ手に縛りあげられて、さまざまな責めを受けると、とても、もう男に戻る気持も失くしてしまう程だった。

事実、その遊びにふけり出して、しばらくしてから、女房との性生活に不能的状態を来たすことに気付き、それがどうも進行するようなので、これは大変とばかりに、止めたのだが、揃えた衣裳類は全部会にやってしまった。それでも一年ぐらいは

続いたようだった。

女装は止めたが、マゾの快楽は忘れられなく、SMグループの一人から、横浜にその道の先生がいるというのを聞いて、連れて行ってもらうよう頼んだ。

最初の夜、その先生の家に集まった五人の同好者の仲間に加えてもらい、SとMに別れての奴隷遊びで一夜を明かしてしまったが、それが、鞭にとりつかれる始まりとなった。

以後、何回か通うようになったのだが、ここで受けた縛りは、それまでの縛られ体験にはなかったような強烈なもので、縛り自体が責めであるといえそうなぐらいであったし、更に必ず鞭打ちが加わるのである。

初めの内は特に柔らかい鞭で、痛みの少ない打ち方から入り、慣れるに従って本格的な革鞭数種類を使い分け、数十日間も痕が消えないくらい、打ち込まれたものだったが、強烈な拷問的縛りと共に、しびれ切った五体に炸裂する鞭の激痛を、いつの間にか快感として感じられるようになっていた。

先生は自作の鞍を使って、私を馬にすることも度々あったが、金属製の轡を噛まされ、体力の限界ぎりぎりまで、乗り廻された後で入浴し、皆揃って会食したりしながらの歓談は楽しかった。

ある時、先生は私に、男を責めている女性の写真を見せて、SM女性に興味はないか、と問いかけてこられた。私が〝ない〟と答える筈はない。これが〝女王様とのプレイ〟の、きっかけとなったのだった。

胸をときめかせながら、指定された日にと んで行った私に、先生は用意してあったらしい脚本を出されて、その通りにやれといわれた。それに依れば、私はブリーフ一つで、首輪、手錠、足枷をつけられ、物入れの下に鉄パイプで作ってある奴隷小屋に押し込まれて女王様の到来を待つことになっていた。

脚本通り手足を拘束されて、狭い檻に体を折り曲げ、冷たい鉄パイプを肌に感じながら初めてお目にかかる女王様の入室を迎えた時の気持は、名状しがたいものだった。

だが、入ってこられた女王様は、私を無視したように、テーブルに向かい合った先生と雑談にふけって、私が檻から曳き出してもらえたのは、ずいぶん経ってからだった。

女王様の足元に、いざり寄ることを許された私が、最初にしなければならないことは、脚本に書かれてある、ゴアイサツであった。手錠の鎖をジャラジャラいわせながら私は、そのブーツを捧げ持ったが、おたまでは、女王様の足が動いて、アッという間に私は女王様の足で踏みつけられ、首筋の辺りに足裏を感じながら、床板を舐めていた。これは脚本には書かれていないことだった。

頭の遥か上の方で、女王様と先生が何か話しているような気配だったが、踏みつけられていた女王様の足が離れるのと殆ど同時に、肩から腰にかけて激痛が走った。鞭であることは咄嗟にわかったものの、予期していなかったこの一撃は、今でも忘れられないほどの痛烈なショックだった。続いて、脚本にはない鞭の乱打を浴びたが、これが、私のゴアイサツに対する女王様の返礼だったようだ。

ようやく鞭が止んで、ホッとする間もなく私は先生に四つ這いになることを命じられ、例の鞍をつけられた。息苦しい轡を噛ませられてから、目の前に真赤な革のブーツが置かれ、先生は、これを女王様にお穿かせしろといわれた。横手に近よられた白い素足に気付いて見上げた私は、思わず唸った。輝くような素肌を晒して、ブラジャーとパンティのみの女王様が、スックと立ちはだかっていたのだった。手錠の鎖をジャラジャラいわせながら私は、そのブーツを捧げ持ったが、お

穿かせし終わっても、小刻みの慄えがとまらなかった。

女王様の騎り方は、先生以上の激しさだった。重さこそ、さすがに先生には及ばないようだったが、駈足、止まれ、走れなどと、矢継早な命令と共に、容赦のない鞭がビシビシ尻に振り降ろされて、私はたちまち、ヘバッてしまったのだった。いくら命令通りにしようとしても、体がいうことを聞いてくれないのだ。しかも、手錠、足枷のままだから、さして長くない鎖が、からみついて一層、動きにくいし、打たれ続けた尻がカッカと火照って、足の先まで、しびれ上がるようなのだ。

大きくあえぎながらノビてしまった私の背中から、鞍が外ずされたが、轡の代わりにロープが噛まされ、ようやく解放された手錠、足枷の代わりに、後ろ手の高手小手に縛り上げられたのだった。仕上げを先生が代わって縛ったから、その縄目は厳しかったが、女王様の手でネジ上げられた後ろ手は、こころよかった。

この縛りは、私が馬として落第だったことのお仕置きをするためのものだったらしく、厳しい拷問縛りにあえぐ私は、更に鴨居に吊られて鞭打ちにもだえ、ようやく降ろされてからも、乱打にのたうち廻らねばならなかったのだが、しびれ上がった全身の感覚がマヒして、意識もモウロウとし始めた頃に引きずられて、鏡の前に据えられた自分自身の姿を見せられたのだった。強烈な後ろ手縛りの縄目と、縦横無尽に走っている鞭痕、赤黒くなった、みじめな自分の姿の後ろにスンナリと形よく白い女王様の太腿が映り、真赤なブーツが私の肩にかけられたのを見た、とたん、ことはないと思った。

この女王様とのプレイは、その後、一週間か十日ぐらい毎に何回か続いた。その度に、私はなんとも名状しがたい快美感に襲われて思わず恍惚の世界にのめりこんだのだった。

縄が解かれても私の手足は、しびれ上がっていて、動かせるようになるまでの間は、とても痛いのだが、その痛さがまだ残っているにも拘らず、私はソファに深々と腰を沈められた女王様のおみ足をマッサージするようにして、足の先まで、しびれ上がるようなのだ。命じられた。勿論、私は一生懸命に務めた。

真赤な革ブーツをお脱がせすると、汗ばんだ素足から、なんともいえない匂いがして、マッサージの後、その足指を口中に含んで、一本一本、ていねいにお掃除する私を、この上ない幸福感に、浸らせてくれたものであった。何年もの間に縛られたり責められたりした体験は数えきれない私だったが、女性の足舐めは初めてのことで、その甘ずっぱい香りと、そういう責め方をされているという悦びが混じり合って、本当に犬か猫かに変身して、女王様に躾られているのだという実感に、心の底から陶然としたものであった。

念を入れた足舐めが済むと、女王様は入浴され、私に洗身を命じられた。私は耳を疑うほど嬉しかった。まぶしいくらいの白肌を洗いながら、これほどの〝マゾ冥利〟につきる

その時も、いろいろな責めを受け、一連のプレイに陶然となっていた私は、縄を解かれて、後ろ手高手小手に縛り直されて仰向けに寝かされ、いきなり直接、注ぎ込まれたのだったが、あれほどの感激は、以後、味わえないのが不思議である。〈終〉

カット・堀　真彦

## SMドキュメント

# 女を責める怪盗

佐原陽一郎

夕刻から降り続いていた雨は、どうやら小降りになったが、風は相変わらず強く、家々の雨戸をゆすぶり、ところどころに水溜りのできた路地裏を吹きぬけていた。

警視庁刑事、郷間周平は、羽織っていた黒い外套の襟をかき合わせ、一軒の大きな商家の軒先に佇んでいた。雨宿りといえばいえないことはなかったが、彼はもう一時間近くも同じ姿勢を保ったままであった。

大正十五年十二月十六日午前二時。場所は東京府北豊島郡上板橋一一九番地先である。

郷間刑事の背後には、土蔵の白い壁が、冷たく雨に濡れ、薄黒いシミが、地図のように広がっていた。竹簀があり、水かさを増した小川が流れ、田園地帯に続く低い家並が思い出したように点在する寂しい所であった。

ほのかな軒灯の光に、商家の壁に書かれた、精米商、小室松之助の文字が見えた。

「どうも気になる……」

郷間刑事は低く、つぶやいた。

彼は、いわゆる第一線の、花形刑事ではない。これといった学歴もなく、いつも下積みの地味な捜査ばかり押しつけられてきた。

当時の警視庁は事件が起きると腕に覚えの名人肌の刑事が駈けつけ互いに功名心を競って捜査は横の連絡もなく行なわれていたから、これといった実績のない若い刑事は、かなり辛い思いをしなければならなかった。

米屋だけに頑丈な造りの家であるが、一カ所だけ板戸に小さな透き間があり、ほのかな明かりが、外へ洩れていた。黄色を帯びた光が、時折チラチラするのは、どうやら懐中電灯であることがわかる。それに、かすかな人の気配がする。衣ずれの音に混じって、畳の上に何かを引きずり上げるような様子も感じられる。

郷間刑事は、ひょっと思いに板戸を蹴破って家の中にとび込みたい誘惑にかられたが、職業的なカンから、もう少し待った方がよいと感じて、ねばり強く張り込みを続けているのであった。

当時の世相は、大正九年春からの大恐慌がやっと治まりつつあるとはいえ、株式市場を

始め各種の商品相場は暴落後のかめないまま低迷しており、加年の関東大震災は、五十億円の人命を奪ったので、不景気はとなり、この年に成立した民政は、不況対策として銀行界の整としたため、それがかえって大呼び、各地で取り付け騒ぎが起てが重苦しい黒雲に包まれていた時代で、こうした政治、経済両信感を背景に犯罪は急激に増加人や強盗などの凶悪犯罪が、東ても相次いで発生していた。

郷間刑事は、その夜ちょうどっていた。やはり北豊島郡の郊の待つ自宅へ帰る途中で、あやる米屋の前を通りかかったので突然、光が消えガラスが割れその瞬間、郷間刑事は背中をるような勢いで路地裏を走り抜木戸にまわった。板戸が風にあたんばたんと大きな音を立てて「しまったッ」

郷間刑事は、舌打ちしながら、素早く家の勝手口から土足のまま、畳の上へ馳け上がった。

つま先に柔らかいものを感じてマッチを擦ると、長襦袢一枚の若い女が後手に縛り上げられ、裾を乱して転がっているのが浮かび上がった。

「どうしたっ。大丈夫か？」

マッチは直ぐに燃え尽きて、座敷は、また元の闇に戻ったが、電灯のある場所を、どうやら見当をつけ得られたので、手探りで手繰り寄せ、スイッチをひねった。

八畳ほどの部屋に夜具が敷いてあったが、一部は隅の方に丸められ、一面にしわだらけの掛け蒲団は、かなり踏み荒した跡があり、縛られた女は、手拭いで口にサルグツワをされていた。

しかも、女は一人だけではない。丸められた蒲団の下から白い太股が突き出て、しきりに空を蹴りながらもがいている様子であり、半分あいている押入れの中からも、女の黒い髪が覗いていた。

「わしは警察の者だ。もう心配はない」

といいながら郷間刑事は、押し入れから女を引き出そうとしたが、驚いたことに三人の女が数珠つなぎに縛られており、いずれも後手に首縄が掛けてあり、小手が高々と吊られているという厳しい縄目だ。

座敷に二人、押入れに三人、あわせて五人の、うら若い女が、いずれも細引で後手に縛られていたわけである。

郷間刑事は、女たちのサルグツワだけは外したが、手足は解かなかった。縄目は、そのままにしておく方が、賊の手口や、その他を知る上で捜査の役に立つと考えたからであった。

唾液で、ぐしょに濡れた手拭いが取られても、女たちは放心したように、うつろな表情をしたまま、しばらくの間は、おびえたように郷間刑事の顔を、見上げるだけの状態であった。押入れに投げ込まれていた女の中には、腰巻ひとつにされているのもあり、豊かな乳房に縄目がきつく喰い込んで、かなり痛そうであった。緋色の腰巻が、ゆらゆら揺れる電灯の下に拡がり、かなり底冷えのする寒さだというのに女の白い肌は、うっすらと汗ばんで光っているのだった。

その後の調べで女たちは小室家の娘の、いく（21）みつ（19）その（16）と、店の手伝いにきていた親類の清水みね（23）女中の石井ヨシ（17）の五人とわかったが、いずれもあまりの恐怖のため犯人の人相などは、さっ

ぱり覚えていないような状態であった。

この夜、小室家の主人夫婦は留守で、家には娘たちだけが残っていたのである。

ほかに男の使用人が二名いたが、いずれも通いで、自宅へ帰ってしまっていた。

賊は戸締まりがしていなかった勝手口から雨戸を外して侵入し、三尺ぐらいの竹棒と懐中電灯をもって、まず女中部屋に寝ていた石井ヨシを脅迫、二階の娘たちの部屋まで案内させて現金三円二十銭を奪った後、女中に命じて娘たち三人を、つぎつぎに縛らせた。

最後に自分の手でヨシを縛り上げた時、階下の八畳間で物音がしたので、賊は急いで降りて行き、目を覚ました清水みねに縄をかけようとしたが、みねは、かなり抵抗したので腰巻一枚になってしまい、上半身は裸体のまま縛られてしまった。賊はまた二階に戻り、いろいろ不思議な点があった。女たちの縄尻をとって引き立て、階下の八畳間へ連れていった。

賊は、縛られた女五人を座敷の真中に坐らせ、持っていた竹棒で腰を突いたり、先端を胸の縄目にこじり入れたりして、しばらくの間、なぶりものにしたが、清水みねと石井ヨシ、末娘の小室その、を数珠つなぎにして押し入れに閉じ込め、長女いくと次女みつだけを、あらためて後手に縛り上げ、座敷の中を引き廻したり、竹棒で尻を叩いたりして二時間以上も責めてから、入ってきた勝手口から逃走している。

ここで注目すべきことは、賊は娘を責めるに際に、履いていた地下足袋で、かなり、しつこく顔を踏みつけたり、髪を踏みにじって、元結を切り、ざんばら髪にしていることである。二人の娘は本格的な首縄をサルグツワをはめられ、抗をすることもできず、両肩や襟足などに土足の泥が、こびり付けられていた。

郷間刑事が懐中電灯の光に気付いて張り込みを始めたのは、もう娘たちへの責めが終わりに近づき、二人とも恐怖のために失神状態になっていた時分と思われる。

この事件には、いろいろ不思議な点があった。帳場には現金が二百円も置いてあり、犯人は当然それに気付いていた筈であるが、それには手をつけようともせず、奪ったのは娘たち三人が持っていた小銭だけであった。

また、妙齢の婦女が五人もいたのに、犯された形跡がないのである。警察でも最初は女たちが世間体をはばかって隠しているのではないかと疑ったが、その後の調べで、賊は、かなり手荒いことはしたが、身体は奪ってないことが明らかになったのである。

## 2

郷間刑事は、せっかく張り込みをしながら賊に逃げられたのは、職務に忠実ではないとして戒告処分を受けたが、この強盗事件は、それまで警視庁があつかってきた犯行とは全く異なる次元から成り立っているのではないかと、おぼろげながら考えたのである。

「説教強盗」が新聞の見出しになり始めたのは、昭和二年の春が過ぎようとする頃からである。当時、目白、板橋、豊島等の住宅地で同一手口の強盗事件が続出したのである。

この種の犯罪が行なわれるには、犯人によって、それぞれ得意の時刻があり、昼、宵、夜中の三種類がある。この犯人は、必ず午前一時過ぎの深夜に押し入り、凶器は出刃庖丁海軍ナイフ、竹棒など、時によって異なっているが、いつも欠かさず持っているのは懐中電灯であった。そして目的を遂げて引き上げる時、彼は、きまって被害者に向かって「戸締まりに用心しなさい」「犬を飼った方がよい」などと、いわゆる「説教」をするのが常であった。

読者ギャラリー　『よこしまな恋』　岡　たかし

「説教」の犯行は、

▼昭和二年三月十九日、午前三時三十分頃、府下高田町雑司ケ谷六六〇、高橋松太郎方に侵入して家人を脅迫し現金十五円と銀側懐中時計を強奪した。

▼同年三月二十六日、午前一時三十分頃、野方町江古田六八〇、山本良吉方から現金七十八円と金縁眼鏡一個を奪う。

▼同年三月三十一日午前二時頃、府下北豊島郡下練馬字正窪二八九三、奈良崎浅太郎方に押し入って現金百十円と貴金属を強奪。

この年だけで三十五件の強盗事件が記録されている。

新聞は連日社会面のトップに「説教強盗」の記事を持ってきて、大きな社会問題にもなり、警視庁は全力を挙げて逮捕しようとしたが怪盗は巧みに捜査網を潜り抜け、犯行を重ねていった。

翌昭和三年に入っても「説教」の被害は相次ぎ、同年暮までに二十八件を数え、当局の無能振りを非難する声は、いよいよ高まって遂に議会の問題となり、帝都治安維持のため特別決議案が提出されそうな事態になった。

当局は、もはや背水の陣を強いられ、刑事は「説教強盗」一人のために、文字通り不眠不休の捜査態勢に入った。なにしろ、昭和二年三月から、犯人が逮捕された同四年二月までの間に動員された専従刑事の延人員は五、六七八名に達したのであるから、三億円事件の捜査より、大がかりだったわけである。

捜査はそれまで、前記の昭和二年三月からの犯行を「説教強盗」とみてきたが、それ以前の大正十五年ごろからの事件も徹底的に洗いなおすことになった。

そこで当然、郷間刑事が犯人をとり逃がした強盗事件が注目されることになった。彼は上司に呼ばれ、当時の報告書を、もう一度、作成するように命じられた。

小石川区小日向台町の一隅にある食料品商

に出向く郷間刑事の足は重かった。

そこには、強盗の被害にあった小室家の次女みつが嫁いでいた。職務とはいえ、当人にとっては、やっと忘れかけた、いまわしい事件を今になって思いださせようとするのは、どうしても、むごい仕打ちのようだった。

しかし、三年振りに見る彼女は、すっかり落ち着いた若妻になっており、何のわだかまりもなく、はきはきした口調で事件を語ってくれたのである。

「そうねえ。もう恐ろしいというより、身体全体が麻酔にかけられた様に、犯人の思うままになってしまうのですね。縛られたのも生まれて始めてだし、足で押さえつけられたりして責められても、まだ自分が夢の中にいるような気分だったのです」

「姉と二人で縛られたまま座敷中を引き廻されましたが、犯人は何もいわず、倒れたら足で踏みつける以外は、肌に手をかけるようなことはしませんでした」

当時のことにて、商家の生娘が強盗に襲われたとなると、世間のうわさとなって縁談も遠のくのが常であるが、姉妹とも相次いで嫁に行ったのは、やはり二人とも色白で、まつ毛の長い美貌の持主であるせいかも知れなかった。それに、この事件に関する限り犯人は女を縛っただけで、肌を汚してはいないことが郷間刑事らの証言によって明らかにされていたからであろう。

――このヤマは、やはり説教とは別線だ。説教は金だけが目当てだ。五円出せば、十円というし、十円出せば十五円と、しつこく強要している。しかし、あの時の犯人の奪ったのは、女の帯締めの中に折り畳んであった白粉の匂いがしみついた一円紙幣だけだ――。

結局、彼女の証言から新しい手掛かりは得られなかったが、郷間刑事は本当の説教強盗が踏んでいるヤマのほかに、もう一人別の犯人がいるような気がしてならなかった。

## 3

いうまでもなく強盗犯とは、暴行とか脅迫とかの手段によって金品類を奪取する犯行であるが、その種類について捜査上は、

(一) 強盗（凶器を携帯せずに脅迫する）
(二) 持凶器強盗（ナイフなどを用いる）
(三) 居直り強盗（窃盗犯が居直る）
(四) 剽盗（ひょうとう）（路上で強奪する）
(五) 強盗殺人及び傷害

の五つに分けているが、もちろん、刑法上のこのような罪名があるわけではない。しかしこのように分類しておけば、手口から前科者を洗い出すことができる。説教強盗は二番目に該当したが、数千枚にわたる前科者カードからも、ついに犯人を割り出せなかった。

だが、さすがの怪盗も悪運のつきる時がきた。昭和四年二月二十三日、北豊島郡西巣鴨字向原三三四八番地に住む左官職、近藤松吉こと妻木松吉は、踏み込んだ八人の刑事によって逮捕された。

四年間にわたって、七十件以上の強盗をはたらいた彼は、普段は真面目な職人として信頼され、家庭にあっては二児の父親として近所の評判もよく、隣家に現職の巡査が住んでいて四年間、何も気付かない程であった。

妻木松吉は、取調べの係官に、婦人に対する暴行事犯について次の様に自供している。

――ことに夏の夜はいけませんでした。薄物の誘惑は直ぐに私を悪魔にしました。中には全裸の寝姿を見ることがあります。しかもそれらの女たちが、いずれも申し合わせたように、こちらの意志通り、命令通りになって、柔順に起居動作するのを見ますと、何ともいえぬ優越感、支配欲から、どうしてもこれを犯さずにはいられないようになるのでありま

した――。

説教強盗の婦女暴行で最も代表的なのは、昭和三年七月二日、午前三時頃、上高田露梨五〇番地、木村ハマ（仮名）方に押入り、現金七十八円、金時計一個を強奪の上、被害者が、ある僧侶の愛妾であることを知って、荒縄で縛り上げ、脅迫して目的を達している。

郷間刑事の見込み通り、小室松之助方の強盗事件は説教強盗の犯行ではなかった。彼にとっては苦い思い出の一駒となったこの事件は迷宮入りとなり、いつか人々の記憶から消されていった。

昭和五年六月の神田神保町の本屋街を歩いていた郷間刑事は、ある本屋の店先に提げてある芝居のビラを見て突然、足を止めた。

それは、その当時でいう〝十銭芝居〟で、あまり有名な一座ではなく、演し物も「高橋お伝」とか「夜嵐お絹」といった興味本位の劇であった。郷間刑事の注意を引いたのは、そのビラ一面に描かれた若い女が、後手に荒縄で縛られており、高島田が、かなり乱れている画なのであるが、その表情が小室家の二女みつに生き写しだった点である。

苦痛に耐えているその女が、やがて苦痛を超えた、ある恍惚の境地へ入ってゆく瞬間でもあろうか、切れ長の目に何ともいえない艶があり、唇は、なかば開いていた。

郷間刑事が、その画を描いた人物について調べてみると、それは単なるポスター描きなどではなく、かなり名のある日本画家で芝居道楽が嵩じて自分の一座を組織し、巡業しているのであった。

津島浮木、それが画家の雅号である。ある日、郷間刑事は、絵の愛好者ということにして、浮木を訪れた。四十才前後の長い髪をした浮木は、郷間刑事を快く自室に招き入れ、黙って一冊の画帖を手渡した。

そこには、様々な姿体の縛られた女の姿が好きで、婦人画報社の描く女が、たまたま被害者に似ているだけで、まるで雲をつかむような話であった。

――あの事件は、お宮入りで、いいんだ。俺は、一様に切れ長の目を持っていた。

郷間刑事も無言で画を浮木に返した。浮木はどうも、むきになっていたようだ。よしんば浮木が犯人だとしたって、このとてつもない気さえする。刑事の俺が、こんなことを考えるようじゃあ、もうおしまいだな――。

浮木の家を出てからも、彼は幾度となく、一人ごとを、つぶやいていた。私は刑事さんが何かしゃべったらシラをきるつもりで、いろいろ逃げ口上を考えていたのです。ところが、その刑事さんは私が出した画を、じっと見たまま、一言も口をきかず、私は自分の罪を始めて人に見せてしまったような感じで、もう逃げられないと思いました」

浮木は生来、縛られた女の姿が好きで、婦女のいる家を狙って押し入っていたが、説教強盗が有名になるにつれ、説教だぞというと女が、おとなしくなるので、名前をかたっていたのである。

郷間刑事は、この事件で始めて部長賞を授与されたが、少しも嬉しそうではなく、むしろ、不気嫌であったといわれる。（完）

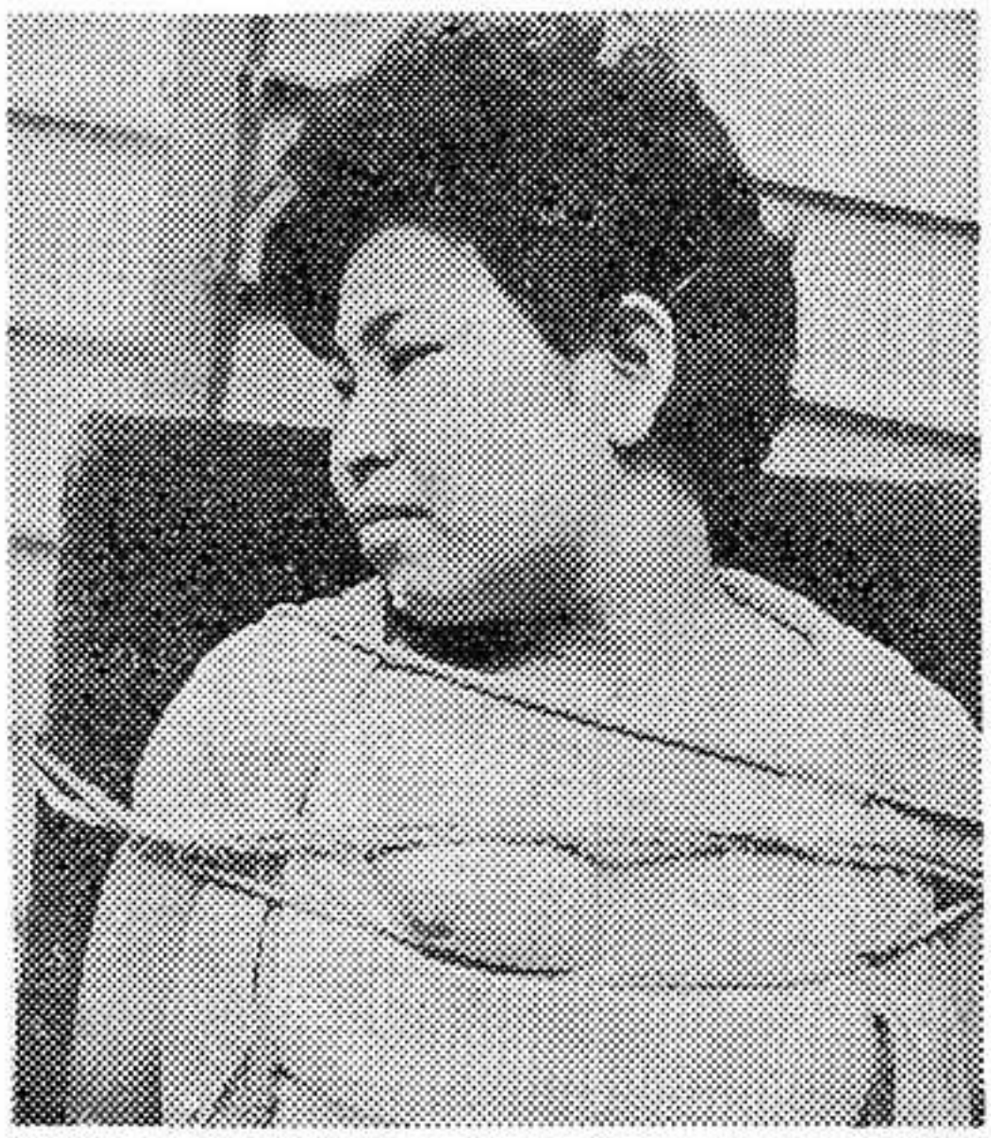
〈参照資料〉
警視庁資料
強力事犯昭和十年版
東京日日新聞保存版
被害者名の一部は仮名を用いた。

# SMカメラ・ハント

（伊予の旅）

## 交歓の巻

越路智之・小松景子の
交歓（こうかん）
歓喜
―或る夫婦プレイのSMの生態―
辻村隆



以前に〝楽我記〟欄でも触れた様に、吾人の深奥に潜むSMの欲求には、急々緩々の時期があって、静かにそっと、心の奥深く息づいていた欲望が、何かの刺激によって矢も楯もたまらなくなり、まるで休火山が突然、火を噴き始めたように、激しく燃え上がる一時期があるものである。そして、燃えるだけ燃え尽きてしまうと、又、静かに緩々の内潜に戻ってゆく――。

越路智之氏とは、もう八年来の交遊が続いていて、〝奇譚三十九夜物語〟中の、ナイロン氏を通じて知った、伊予松山の人である。

商用で一年に数回、来阪された時、気が向けば、ひょっこり電話をかけてくるか、帰郷のひとときの時間があると時々訪問されたが総じて物静かな人で、伊予絣を家内の土産にと持参して、私宅を訪れられたのは、もう四年前の秋のことであった。その後、やはり商用の来阪は続いているかに見え、私との儀礼的な葉書のやりとりも、半ば惰性のようにも思えるのであった。謂わば、すっかり沈潜した彼は、緩々の冬、愛妻に先立たれてからというもの、最早、SMに対する意欲を、すっかり喪失しんと御無沙汰勝ちになり、年賀状と暑中見舞最低線に沈んで、SMの性癖は、まさに休火山そのものであったようである。

が、私との絆をつなぐ、唯一の手がかりでもあるかのようになっていた。SMの両面を共有する越路氏の、良き理解者であり、パートナーでもあった奥さんの死去が、彼にとってこの上もない悲しみのショックであったらしく、少なくとも私の観察する限りでは、彼は

いつか彼が語ったところによれば、亡き越路夫人は、永年の飼育の結果、ＳＭ両面の愉しさを理解するようになり、彼は日によっては妻を縛り、様々の愛虐のプレイに耽溺し、又、或る日は主客転倒して、彼は妻の手によって雁々と緊縛され、被虐の悦楽に溺れて、陶酔と恍惚に浸って行くのであった。Ｓ性とＭ性は正に紙一重の感覚で、夫婦プレイの場合、往々にして、その双方を兼備する夫婦が多く、かつての増田喜代司夫妻らも、ＳＭ双方を、お互いに愉しんでいた、いい例であったが、越路夫妻も、ＳＭ交歓プレイの典型的な人達であった。

彼はカメラの方は苦手で、専ら夫妻、相協力して、綿々とプレイを愉しむたちの方で、その為、残念乍ら彼等夫妻のＳＭプレイフォトは、私の手許には一枚も存在しなかった。

彼が私を訪れてきた時など、目を細めて、こまごまとＳＭプレイの奥義を語り、ウンチクを傾け、それに附随する褌趣味、浣腸、神酒奉戴と、行く処、可ならざるはなく、それは相寄る魂の信頼と、お互いの体の隅々までも知り得た、ＳＭに激しく燃焼する夫婦ならではの遂行出来得ない、ＳＭの極致のようであった。

私は、しばしばプレイのフォトを撮ることを奨めたが、彼は、さも困惑げな表情で、カメラの撮影によって、折角、白熱したプレイが中断される非を説いて、遂にカメラには走らなかった。唯、彼はいつも、若し私が松山に来てくれるのであれば、自分達夫婦のプレイ振りを、いつでも撮ってもいいといっていたが、その頃の私には、その目的だけで、遥々伊予の松山まで出掛ける程の熱意もあるので、是非、話したいこともあり、お伺いしてもよいかという。久し振りの事とて私に異存もなく、歓迎の旨を伝えた。

松山市内の目抜き通り、大街道の商店街や県下のスーパー向きにも、かなり手広く卸商を営んでいる彼の生活は安定している。既に出発前より、私宅への訪問を予定していたのか、末娘にでもと仰有って、かなり大きな姫達磨の男女一対を土産に、さげて来られた。

一別以来の挨拶。そして、何がなし愉しげな、生々とした表情に、私は彼にＳＭの機能が回復したことを逸早く感知した。その思いの生態を、残る隈なく撮りまくっておくのだったのにと、還らぬ愚痴の心で、その当時、ひたすらに悔まれたのを覚えている。私は遂に亡き夫人の顔すら知らずじまいであった。

その休火山の越路智之氏のＳＭの欲求が、夫人を亡くして四星霜を経た今、突如、激しく火を噴き始めて燃え上がったのであった。

商用で上阪した彼が、数年振りで電話してきたのは、四月の半ばのことであった。

受話器から流れる彼の声が、心なしか若やいで弾んでいるように私には思われた。確か五十路を越して、私より数才、上の彼の声にしては、ハリがあったが、その頃の私には、その目的だけで、遥々伊予の松山まで出掛ける程の熱意もあるので、是非、話したいこともあり、お伺いしてもよいかという。久し振りの事とて私に異存もなく、歓迎の旨を伝えた。

松山市内の目抜き通り、大街道の商店街や県下のスーパー向きにも、かなり手広く卸商を営んでいる彼の生活は安定している。既に出発前より、私宅への訪問を予定していたのか、末娘にでもと仰有って、かなり大きな姫達磨の男女一対を土産に、さげて来られた。

一別以来の挨拶。そして、何がなし愉しげな、生々とした表情に、私は彼にＳＭの機能が回復したことを逸早く感知した。その思いを裏書きするかのように、世間話や近況もそこそこに、彼は自ら核心に触れていった。

「どうです、辻村さん。一度、道後の湯にでも、ゆっくりつかるつもりで、松山へ来ませんか。こんな言い方、失礼かも知れませんが

旅費は私が負担します。亡くなった家内の生前中から度々お願いしておりましたが、その叶えて貰えなかったものを、今度は是非とも叶えてほしいんですよ。もう私も若くないですからね。今のチャンスを逃すと、もうダメなような気がするんですよ」

「と仰有ると、SMプレイのパートナーが出来たということなんですね」

「そうなんですよ。もう亡き妻も私のプレイを許してくれるでしょう。今更、孫の四人もおる年ですから、再婚などとは改まりません

が、SMに理解のある人に出会いまして、何とか口説き落として、今の処、内縁関係の同棲生活中なんです。子供達も、不自由している私の生活を理解してくれて、案外あっさりと諒承してくれたのですよ」

「へえー、よくそんないい相手の方が見つかりましたね。だからといっちゃ何ですが、越路さんのお顔の色艶がすごくいい。SMプレイ再開ってわけですね。それで、新しく奥さんになられた方は、おいくつなんです?」

「一寸、照れ臭いのですが、私との年令が、まるで親娘程も違いましてね。嫁いだ長女より未だ一つ若いのですが、愛情なんてヤツは不思議なもので、娘のような者と一緒に暮していてもいつしか、それが不自然でなくなってしまうもんですね。勿論、プレイが、すべてではありません。仕事に対するハリというか、気力というか、一緒に暮すようになってから、又ぞろ、やる気になり出したのですから現金なものです。雀百までの譬えで男はいくつになりましても、女なしでは生甲斐のないものなんでしょうかね。独り暮しで、時偶、巷の女や温泉芸者を相手にしたところで、所詮は浮草の遊びに過ぎませんからね」

「正にその通り、大いに結構。残された人生を大いに愉しむべきですよ。それでその女性の方、最初からSMのケがあったのですか」

「なかったでしょうね。最初の頃は、仲々言い出せなかったですが、根よく口説いたら、どうやら理解してくれたようですが、変態的な助平オヤジだと、吃驚したそうです。二十六才では無理もないでしょうね」

「そもそものなれそめは?」

「西宇和郡の農家の娘ですが、ここも過疎現象で、年頃になると働きに出るのです。道後の温泉土産屋の店員でしたが、装飾品の卸しで、ちょくちょく立ち寄るうち、何となく親しくなりましてネ、年甲斐もなく口説いてしまいました。商用ついでに高知へゆく時、車にのせてやりまして、桂浜の一夜で遂に出来てしまいました。娘ではなかったようです。道後で、どうやら騙されたようですが、私にとって過去は問題ではありません。彼女自身自分を傷ものだと諦めていたそうです。私達は将来、結婚の前提で同棲したのですが、息子や娘の手前もあって、現在、内縁ですが、孰れは籍を入れるつもりでおります。子供達

には、別段、義母と思って貰わなくてよい。父親である前に、一人の男としての配偶者であり、世話する女性と思ってくれといったら未婚の末の息子だけ一寸、抵抗があった様ですが、案外それでも、あっさりと分かってくれました。長男に本宅を仕切らせて、私達二人は、松山市の郊外に、狭い建売住宅を見つけて移り、二人暮しの生活をしています。本宅にくらべると問題にならぬくらい狭いですが、今の私の心境は、第二の青春をみつけて毎日々々が頗る愉しいのですよ」

さも楽しげに語る越路氏の第二の人生に、私も心底から、祝福してあげたい気持であった。況してや、若い妻はSMプレイを理解しているとなれば、これはもう願ってもない喜びではなかろうか。

確かに、彼にしても私にしても、残された人生の方が少なくなりつつあるのだ。今日という日が、残された人生の第一日目であると考えれば、良かれ悪しかれ、一日一日を、何かハリのある、充実した一日にしたかったのは、彼も私も、齢い既に五十の峠を越えた者の、等しく感じる心境であった。

私はいつしか彼の熱意に負けて、有耶無耶のうちに松山行きを約束する恰好になってしまっていた。

「ああ、私の愉しみが一つ、ふえましたよ。いや、最大の愉しみかな。亡くした家内で果たせなかったものを、今この年になって、やっと果たせそうです。短時日で飼育したSMの成果を、あなた自身のカメラで、冷徹にとらえて下さい。アレのいいところは、私に対して実に献身的なのです。SMの行為の究極が、例えハレンチそのものであっても、それによって私が歓喜すると知れば、敢然と実行に移します。ノーマルな人間なら顔をそむける様なことでも尻込みしないのです。私に被虐の快感を与える時も、私がその行為に悦びを感じていることを、よく察知して、何か痒いところへ、手の届く、いじめ方をしてくれます。SMの両面を持ち合わせているとはいうものの、私はやはり、どちらかというと、M性の強い方です。自然、彼女はS気の方が昂進しつつあるようです。しかし私の気の向くまま、女の方も構わないと思います」

私の心が急速に傾斜しつつあることを逸早く感じて、越路氏の要請は熱心であった。

私には私なりの別の思案で、いつしか一つの計画が纏まりつつあった。

男性天国、台湾でハントして来た私の行状を、その心です。

「ええ、それは是非。しかし、私がお二人の傍で、第三者として、SMプレイの生々しさを、カメラに撮ること、奥さんは御諒解済みなのですか？」

「それは未だ判っきり告げてはおりません。いや、最大の愉しみかな。亡くした家内で果たせなかったものを、今この年になって、やっと果たせそうです。短時日で飼育したSMの成果を、あなた自身のカメラで、冷徹にとらえて下さい。アレのいいところは、私に対して実に献身的なのです。SMの行為の究極が、例えハレンチそのものであっても、それによって私が歓喜すると知れば、敢然と実行に移します。ノーマルな人間なら顔をそむける様なことでも尻込みしないのです。私に被虐の快感を与える時も、私がその行為に悦びを感じていることを、よく察知して、何か痒いところへ、手の届く、いじめ方をしてくれます。SMの両面を持ち合わせているとはいうものの、私はやはり、どちらかというと、M性の強い方です。自然、彼女はS気の方が昂進しつつあるようです。しかし私の気の向くまま、女の方も構わないと思います」

「カメラ・ハントには、ダメでしょうね」

「なるべくはプライベートのプレイにしたいですが、辻村さんのことだ、折角の夫婦プレイの取材なら書きたくなるでしょう。あなたを信じて、私という人間を判っきりさせず、且、顔を判っきりうつさない約束なら、いいでしょう。秘すべきことは是非、隠していただけたら、女の方も構わないと思います」

私の心が急速に傾斜しつつあることを逸早く感じて、越路氏の要請は熱心であった。

私には私なりの別の思案で、いつしか一つの計画が纏まりつつあった。

男性天国、台湾でハントして来た私の行状を逐一、知って一言の文句すら言わぬ、家内

である。そのあとも再度に亘り、女性ハントに出掛けているが、自分を殺して妻は、さりげなく従順であった。この伊予の松山へのハント旅行を、妻の慰労に利用したい気持が、しきりに起きるのであった。越路夫妻のハント所要時間は、長くても四、五時間であるとすれば、あとの一人旅の徒然が、やり切れなかったのも、原因の一つであった。降って湧いたような思いがけぬ旅行に、欣然とする妻の顔を想像した時、私のハラはきまった。

私は越路氏に、その考えを述べ、彼の申し出た、旅費負担という親切を固辞した。その方が、私の行動が自由である。家内との旧婚旅行の旅の道草に、ハントのひとときもあってよかろう。そんな軽い気持と共に、いつしか私の心は、浮々と愉しく弾んでいった。

× × ×

旅に出ると、風までもが甘い。水平線の夕映えも、今は薄墨色に消えた七時半——。

関西汽船〝ゆふ丸〟は、私の車を船底につんで、五月初めの、連休利用の行楽客を、ぎっしり積み込み、弁天埠頭を出帆した。

学生時代の同級が旅客課の課長で、彼に頼んで何とか一等を確保してもらったが、やはり昔の古い仲間は有難いもので、船内の主だった人々にまで、声をかけておいてくれていた。二等を覗くとギッシリの寿司詰めで、それこそ立錐の余地もなく、やはり一等の値打ちを、しみじみと感じるのであった。

ガレージ付きの観光船だけに、若い男女が多く、溢れた若者達は、それも一向、苦にならないらしく、カフェテリヤやホールで、ジュークボックスのホットジャズに合わせて、愉しそうにゴーゴーを踊っていた。

車庫にスペースをとられてか、特等室はなく、一等は四名の定員になっていて、ベッドは左右に上下二段式であった。

甲板から私達夫婦は、五彩にいろどられて仄かにあかい大阪の空が、徐々に遠ざかってゆくのを、快い汐風に吹かれて、みつめていた。思いもかけぬ四泊五日の旅に、妻は若やぎ、傍から眺めると世帯のやつれもなく、旅行中の髪の乱れを気にして、急拠、買い求めたヘヤ鬘も案外に似合って新鮮さが漂っていた。留守は二人の子供と、嫁いだ長女と婿が泊まりに来ていて、後顧の憂いもない。旅に出て船に乗り込むと、最早、心掛かりもなく連休の谷間で、仕事も中休み状態とあってはすべてに好都合であった。

妻にとって、松山での、越路夫妻とのプレイのひとときの、独りきりの時間帯が空虚で不満らしかったが、旅行の目的の初期がそれから始まったとあっては逆らいも出来ず、道後の宿で、日頃より少し多いめに晩酌をのんで、先に寝て待っていると、皮肉でもなくあきらめていた。

出帆の時は二人切りの一等室であったが、神戸から、新婚らしからぬアベックのカップルが乗り込んで、同居状態になった。

中年の私達夫婦に、彼等は最初、気拙げに遠慮勝ちであったが、窓に面したテーブルに相対して坐って、暗い海をみつめ乍ら、私の方から柔らかく話をきり出して喋ってゆくとすぐ親しくなってしまった。袖摺り合うも他生の縁の旅は道連れである。彼等は婚前旅行であった。神戸で知り合った二人は恋愛し、娘の故郷の長崎へ、青年を親に紹介しがてら甘い旅を愉しむつもりらしかった。

青年は二十二、三才、娘はハタチ前後であろうか。狎れると私達を無視して、二人は互いに手を握り、頬を寄せ合い、果ては娘の方から青年の肩に顔を凭せかけて、片時も離れているのが辛いかのように、喃々たる様子を臆面もなく、みせつけるのであった。それがすべてに好都合であった。妙にジメジメせず若さの特権かも知れない。

照れもせず、堂々と愛情を示す彼等の態度に現代の世相を感じた。懼らく二人の関係は、プラトニックでないことは確かであろう。私達がバスから戻ってくると、堅く抱き合った二人は、私達をみとめても離れようとはしなかった。微苦笑で妻と顔を見合わせ、私達は気をきかせて、夜更けのエントランスホールを彷徨し、スモーキングルームで時を費やした。

戻ってくると、彼等の上下段のベッドともカーテンは閉ざしてあったが、ひそやかな二人の睦言が、狭い下段のベッドから流れていた。黙って目配せして、妻は下段、私は上段のベッドに横たわり、カーテンを閉ざしたが波の音と振動するエンジンの響きで仲々寝つかれず、やっとウトウトとしかけた時、娘の甘い悦楽の忍び音が、私の耳朶を微かに打った。ハット耳冴えてすますと、あきらかに愛技のさまが、まざまざと伝わってくるのであった。若い二人は大胆である。私達夫婦の存在を意識し乍らも、尚かつ、遂行しようとするのか——。そこに、現代に生きる若い群像の性態を、私はありありと感じた。

別府港で車と共に吐き出されて、朝のやまなみハイウェーを、城島高原へと走る——。妻。

「眠れませんでしたねえ」と

「知ってたのかい？」

「嫌でも聞こえますわ。近頃は大胆なのね」

妻はポッと頬を赤らめた。

「刺激されたよ。カセットテープでも持ってくると面白かったのだがね。今夜はひとつ、別府のホテルで我々も、久し振りにプレイをやるか」

「随分長い間忘れていたでしょ、私に……」

確かに妻の言う通り、ハント女性には汲々としてプレイしていても、既に三年前、銀婚式を迎えた糟糠の妻とのSMプレイは、この処、忘れる程、遠ざかっていた。何もかも忘れての旅の一夜に、それもよしと、私のプレイの心は、その時、ひたすらに妻に走っていた。

城島高原——地獄巡り——そのありきたりの観光コースの中で、一際、光ったのは、地獄巡りから外されている、私設地獄神和苑での、露天風呂のひとときであった。混雑する団体客から離れ、京風の庭を散策し、フト見掛けた露天の湯に魅せられ、尻込みする妻を誘って、燦々たる陽光の下で、滝口から落下するコバルト色の湯につかり、カメラをセルフタイマーにして、カラーフィルムに納めた二人の露天の裸身は、地獄巡りのゲテ趣味に比して、ひどく清冽なる感興を与えた。ホテルを予約していなければ、ここに泊まりたい気持になったが、のびのびと清遊したあと、私達は予定通りHホテルへ到着した。

その夜の久方のSMプレイ。それは所詮、私達のプライベートであろう。

×　×　×

午前二時まで続いたプレイの疲れが朝に残っていた。八時にホテルを出発すると、途中の高崎山の猿の見物もかけ足で、一路九州と四国を結ぶ佐賀関へと、未知のルートを飛ば

してゆく。九四フェリーの発着場に到着して十一時、私達は車と共に九州をおさらばしていた。慌しい、僅か一日の滞在であった。

四国の細長く突き出た尖端の三崎に上陸すると、一車線の九十九折りの道を、真剣に走る。段々畑に夏柑が、たわわに実り、山腹を縫う狭い道路の、右手の遥か下には、無数に海水浴場にふさわしい、おだやかな浪打際の海辺が遠望出来た。

素朴な人情の中に過疎現象をみつめ、この大自然の景観に、忘れていた故郷を見出した思いを抱いて、私は一路、松山へと走り続ける。道端に夏柑が、ゴロゴロと転がり落ちていても、誰一人、拾おうとはしない。試みに車を停めて、一つ拾って皮を剝けば、甘酸っぱい夏みかんの香りが舌に、しみ渡った。

三崎―八幡浜―そして、大州へとぬける夜昼峠の難路に辟易して、大州から松山へは、一路、快適な二車線が、山あいを縫って、つづいている。精しく書いてみたい紀行の一文も、カメラ・ハントには凡そ縁遠く、私は巳むを得ず省略せざるを得ない――。

越路氏は私達の為に、ホテル奥道後を予約しておいてくれてあった。

五時前に、バカでかい歓楽境、奥道後に降り立った私は、折柄の連休の団体客で、殺人的に雑踏するフロントで、氏名を告げることすら、一苦労であった。テレビ『大将』や、『ガードマン』のロケで、最近、特にクローズアップされただけに、人々は古い名湯道後の、いで湯を素通りして、皆一様に、ここへ集まってくるかのようであった。

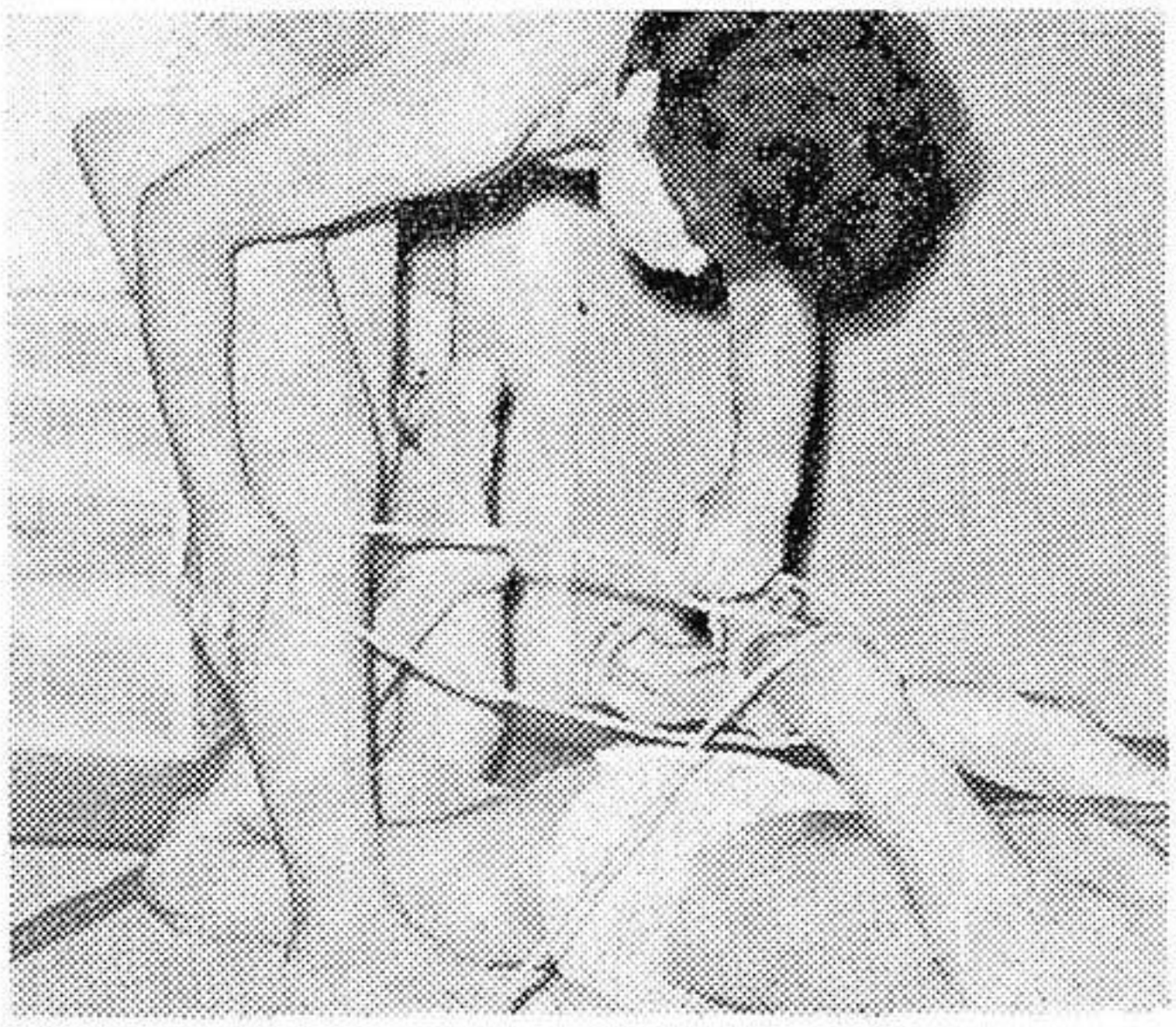
やっと通された道を引き返し、道後温泉へと辿りついた。

予約もなく、飛込みであったが、幸い中流クラスの旅館が、快く未知の私達を迎えてくれた。やはりここには、温泉宿の情緒が残っていた。奥道後の豪華さを見せようとした彼と、いで湯を求める私達の観念は喰い違っていたようである。

早速、奥道後のフロントに電話すると、恐惶した口振りの越路氏の声にすぐ代わった。今からすぐ、そちらへ行くというので、Mホテルの名を告げ、私達は百数十キロの走行の疲れをいやすべく、大浴場へと下がっていった。

やっと温泉気分を満喫して戻ってくると、部屋に越路氏が待っていた。

私の勝手な行動を詫びると、彼は恐縮し、



「少し出掛けてくるからね」
と妻に告げると、むしろホッとしたように頷き、
「先に休んでいていいよ？」
ときく。
「いいとも。大分、酔ったようだね」
「ええ少し……ここへは帰ってくるのでしょう？」
「勿論さ。戻って来たら起こしてやるよ」
「きっとよ、起こして。その侭、朝まで眠ってしまうのは惜しいから……」
それは暗に昨夜のプレイの愉しみの再現を望んでいる言葉であった。旅に出ての解放感が、妻をして斯くも大胆にさせているようであった。
未知の街の夜を酔っての運転は出来ようもない。越路氏はタクシーの手配をしてくれていた。服装をつけかけたら、
「往復タクシーじゃないですか」
彼は気軽にいって、私に目配せすると、
「この袋、二つですね」
と、プレイ道具の入った革袋と、ショルダーバッグをとり上げ、
「じゃあ奥さん申訳ありませんが、少しの時間、御主人をお借りしますよ」
と妻に声をかけると、
「いいんですのよ。どうぞ、ごゆっくりと」
妻は心得て、笑顔で私達を送り出した。
タクシーは忽ち道後の湯の街を出外れて、夜の松山市内を走る。宵の口を過ぎていたがネオンの輝きも鮮かに、銀天街、大街道のあたりは、ゆきかう人々で賑やかに、ざわめいていた。タクシーは郊外へと走る。
彼に拉致されたような恰好で、旅館の浴衣の上へ、ウールの着物をきた侭の下駄履きで車に揺られていた。
一戸建ちの建売住宅が並んでいる住宅地の一画で車を降りると、もうすぐ目の前に彼の愛の棲家があった。
インターホンを押すと、
「ハーイ」と応答があって、
「おい景子――辻村さんをお連れしたよ」
と越路氏は声をかけた。
須叟にして扉が開くと、痩身の彼とは正に対照的な、肉感的なボリュームに溢れた若い女性が玄関に私達を出迎えた。
「妻です」
彼は、あっさりと紹介する。彼のよきパートナー小松景子さんは、こわばった顔に懸命

温泉に対する観念の喰い違いで、笑い話になった。彼は既に自分の料理も注文しておいたのか、やがて三人前の料理が通され、旅の疲れと空腹で、旨酒が腹にしみわたり、私は急速に酔っていった。妻も奨め上手な越路氏の酌で、既にトロリとした眼になり、彼がそこにいなければ、その侭その場に横たわりたかったに違いなかった。
女中が床をのべに来たのをシオに、

に微笑みをたたえて頭を下げた。半ばベソを掻いた様な表情には、来るべきときが遂に来たという真剣さが、満面に溢れていた。

×　×　×

茶の間に通ると、小松景子さん——いや、私はやはり、彼女を奥さんと呼ばねばならぬだろう——は、ビールと、大皿に手際よく並べたオードブルを運んできた。さしつさされつするうち、彼女はいつしか、私にも愛想よくすすめるようになり、初対面の気愧しい硬さもほぐれたのか、柔和な笑みを、漂わせていた。

越路氏と彼女とは、三十才以上、年令の開きがある筈であったが、今こうして茶の間で食卓を挟んで坐り、彼等の行動を観察していると年令の隔たりは、さして感じなかった。彼は自然に夫らしく振舞い、この若き内縁の妻も又、いかにも妻らしい、しぐさが身につ いていた。

「景子。お前もずっと本を読んでいて、よく知っているだろう。この人がカメラ・ハント を書いている辻村さん、本人だよ。私と年は さして変わらないんだよ」

「それにしては意外とお若いですわ。私、本を読んだイメージでは、鋭い、スゴく怖い人の様に思えましたけど、お会いしてみますと案外そうでもないのですね」

「辻村さんは、ああ見えてもフェミニストなんだ。だからこそ、次々と、ああしてハントが出来るのだと思うよ。今度も私が頼んで、わざわざ来てもらったのだが、是非、私達のプレイ振りを撮って戴こうと思ってネ。私とお前の思い出のよすがにね」

ビールの泡を口辺にへばりつけて、越路氏は最高に御機嫌のようであった。

妻はクスッと笑って豊頬を染め、羞かしいという風に、片手で眼を蔽った。洗練されたセンスには乏しかったが、健康的で素朴な逞しさが、彼女の全身から溢れていた。短くカットした髪も活動的で、形よくキリリと走る濃いめの眉にも、逆流にめげぬ意志の強さが感じられた。

痩躯の彼と野性的な健康美の彼女との、このカップルは、どうみても、一見ふさわしくない取り合わせであった。

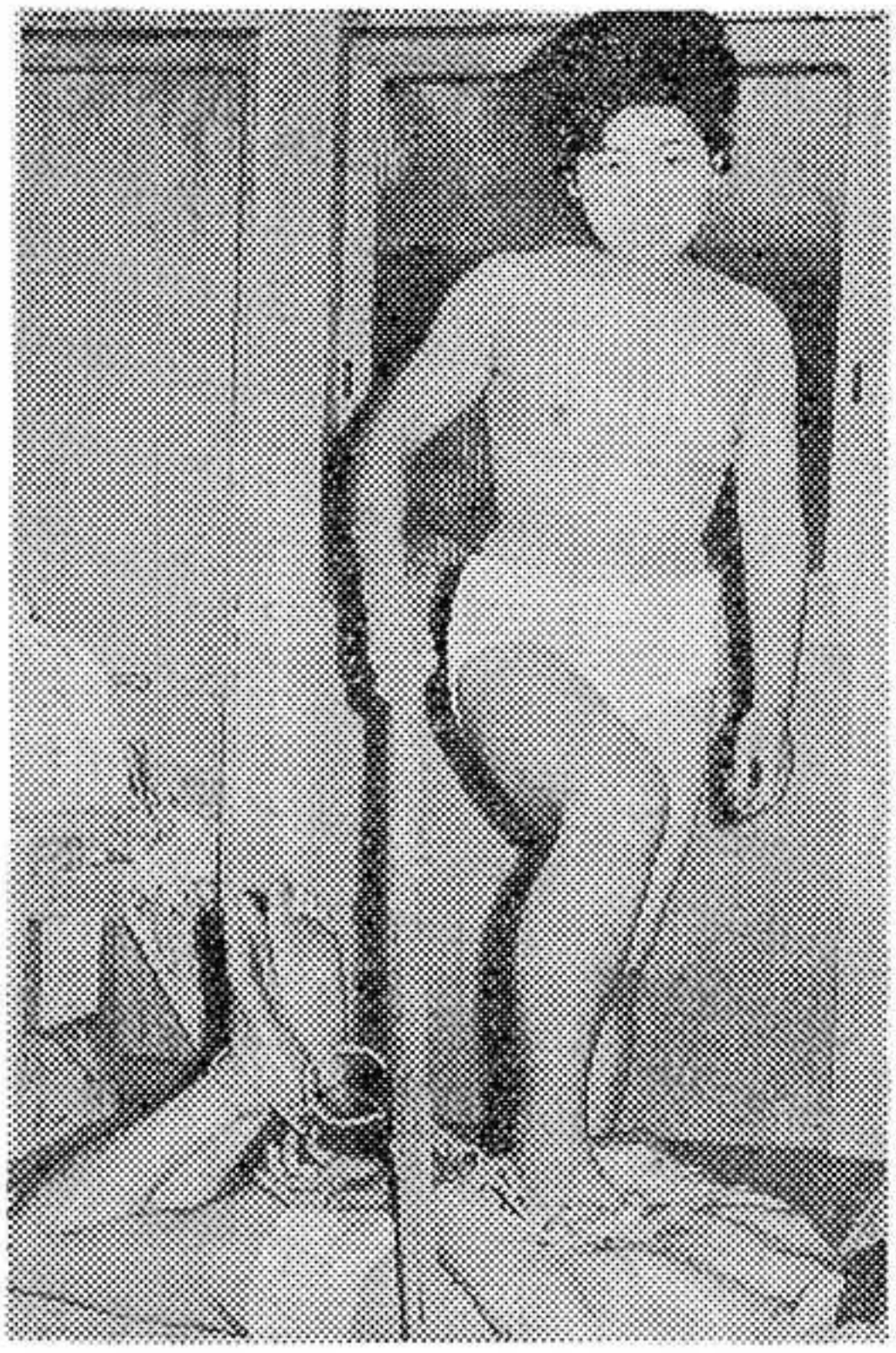
それでいてこの妻は、つつましく献身的に中年過ぎの夫に、従順にかしずいている事実を、私は奇妙に錯綜した気持で、受けとめていた。

「いやいや、私なんて、ごく平凡な猟奇の探究者に過ぎませんよ。越路さん御夫妻の御招待は、光栄の到りです。所詮は第三の傍観者の私ですが、どうぞ存在を気にしないで下さい」

「こんなこと、生まれて始めてですわ」

彼女はうつむいた侭、小さく呟いた。

「私だって勿論、第三者を交えてなんて始めてさ。だが、そこに新鮮な刺激と、人にはい



えぬ歓びが潜んでいる。そうじゃないかね」

「絶後とはいえぬかも知れませんが、この空前の行為が、より深き、お二人の結びつきになると思いますよ。ところで奥さんは、どこかへ働きに出ておられるのですか？」

「いえね、私は働かせる気は毛頭ないのですが、朝から夕方まで、独りポッチじゃ退屈だし、勿体ないと申しましてね、この近くの洋裁店で、ミシン掛けの手伝いをやってるんですよ。本人は結構、気が紛れるらしい」

「その方がいいですよ。しかし、羨ましいな。こんな若い奥さんと、二人切りの生活が出来て――。木々高太郎の提唱した、人生二度、結婚説を地でいらっしゃる」

「そう。私自身も思いがけない第二の人生です。これは見掛けはガサツにみえますが、意外に心は優しく、従順ですよ。料理も近頃は大分、上手くなってきました」

越路氏は手離しの、のろけようである。いつか三本のビールが忽ち空になっていた。

私はその時、旅館でカラになっていた。ト心が走り、こうして独り待ち兼ねる妻に漫然と経過してゆく時間が気になり、プレイを促すかのように、わざとらしく時計を覗き込むのであった。

心の逸る越路氏も、さていざとなると、やはりSMプレイのきっかけが摑みにくいらしかった。彼女が台所に立ったのをシオに、

「あなたが奥さんを縛ってみられたら」

「ウン、じゃあそれから兎も角、始めてみましょう。一寸、お待ち下さい」

彼はソワソワと立ち上がると、台所の方へ消えたが、しばらくは戻って来ない。私は詮方なく、独り手持無沙汰に煙草をふかしていた。

十数分近くも経ったであろうか、顔面を紅潮させて戻って来た彼は、

「台所の奥に三帖の間があるのですが、さあどうぞ一緒に来て下さい。物置代わりで、ガラクタが散らかっておりますが、そこの椅子に縛りつけてきましたから――。ああ、そうそう、カメラの方をシオを、お忘れなく」

彼は、しきりに大きく息を弾ませていた。新鮮な昂奮が体内をつらぬき、今こそ愛する若妻の縛られた姿を、私に見せることに、異常な感慨にひたっているかのようであった。

私も流石に何がなし胸を弾ませる。禁断の花園に足を踏み入れるような鮮烈な気持で、彼のあとについて、台所をよぎると、奥の板戸の前に辿りついた。彼は私に懐中電灯を渡した。

「この中に縛ってあるんですよ。電池で照らして、じっくりと見てやって下さい」

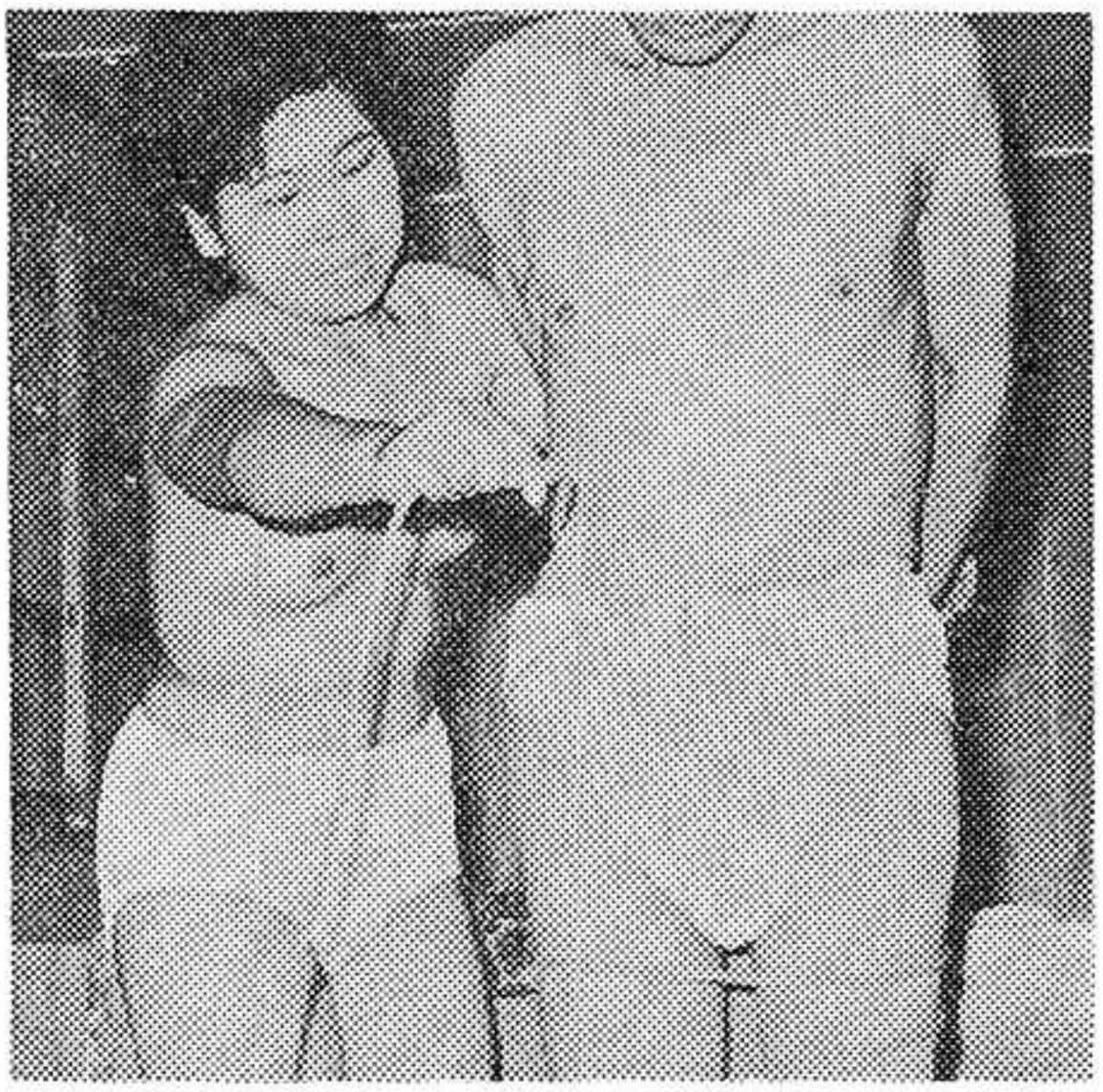
「えっ、そうしたいのですが、何しろ他人様に、私達のプレイをお見せするのは始めてのことなので、今更どうって柄じゃないのですが、この歳になって、羞かしいも勝手が悪くて……」

「というと、部屋は、真暗にしてあるのですか？」

「ええ、あれも明るい下で、いきなり縛られた姿を曝すのは恥かしいと、いいますし、私もその方が、むしろ効果的に思えましたので――暗闇の中から、ポツンと懐中電灯の光の輪の中に浮かび上がる緊縛の女なんて、一寸変わった趣好で、いいじゃないですか」

彼は彼なりの演出効果を考えての上であったようである。確かにそれは、未知に対する神秘性があった。

渡された懐中電灯を握りしめ、私は静かに板戸を開けた。戸の隙間から台所の灯が忍び込んだが、逸早く彼は後手に板戸を閉めた。真暗闇の中で、懐中電灯のスイッチを入れると、弱い光が、仄かに狭い部屋の中を照らし出した。ぐるっと光の輪を一巡させて、ピタッと焦点の合った処に、後手に縛られ、乱雑に胸縄をかけられて椅子に坐った、景子さんの姿が浮かび上がった。マザマザと羞恥を泛かべ、流れる光の輪の中で、彼女は眩しげに眼を細め、光の背後の二人の男の直視を意識して、面映ゆげに顔をそむけた。日頃の使い古した縄で縛ったらしく、それは緊縛といえる程の強さでないものの、シュミーズを押しわけて、ムッチリとはみ出した豊かな隆起は心なしか慄え、ポツンと突起した乳首は、つやかな桃色に色づいていた。カーディガンを脱がせ、半袖のブラウスの胸をはだけさせただけの、慌しい着衣の侭の縛りであったがむしろ、その緊縛フォトにふさわしからぬ素朴さに、私の心はメラメラと感動した。その諦観の姿の中には、夫の性癖に合わせようと努めて、懸命に努力する若妻の、いじらしい心づかいが、ありありと窺えたからである。



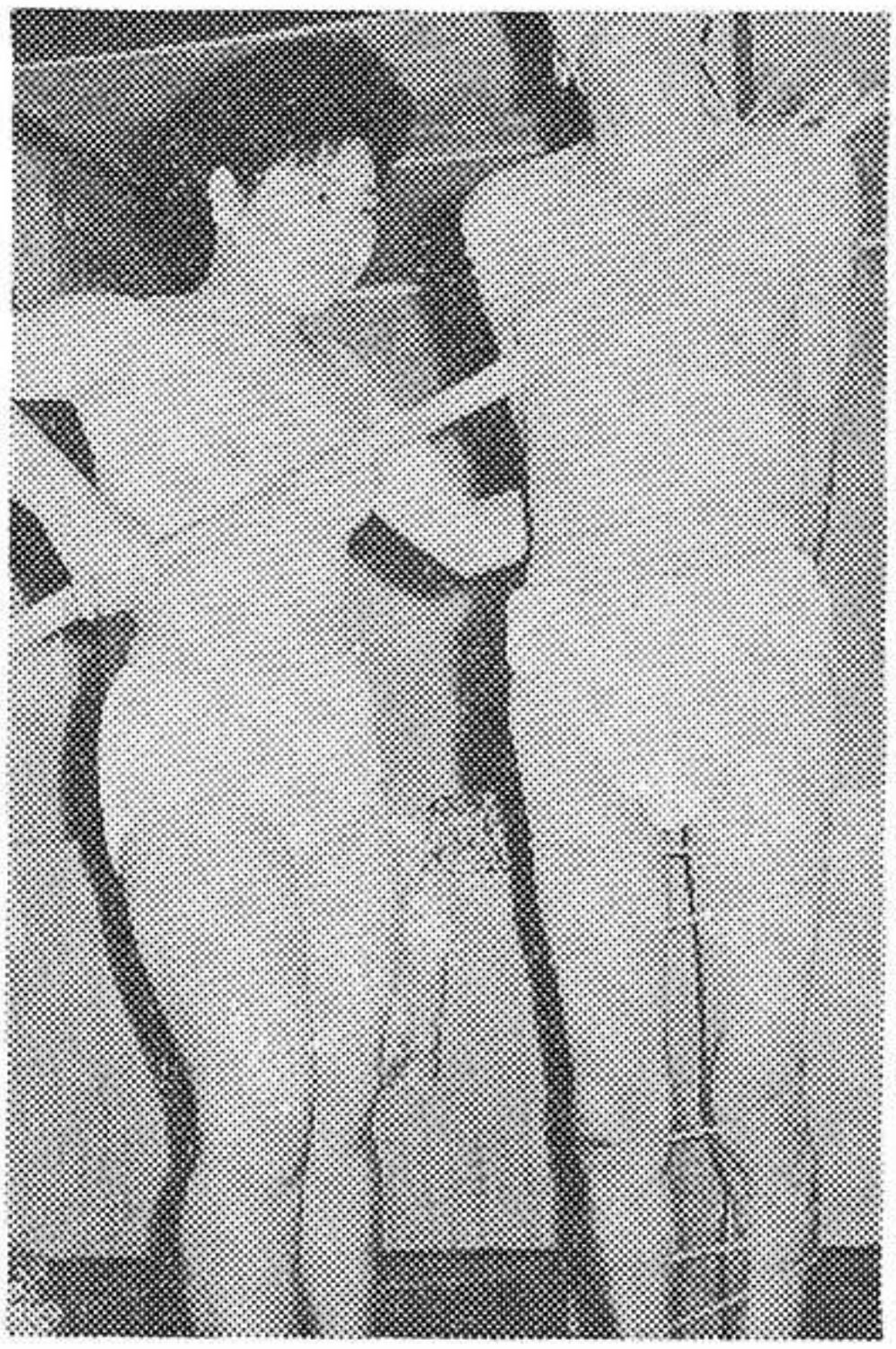
くらやみの中に仄かに、うかび上がった豊満な妻の乱れた肢態に、縛った越路氏自身、感激の態で、私の傍で佇立した侭、喰い入るように熟視していた。暗黒が神秘めいた雰囲気を醸し出して、プレイに明け暮れする私にも、妻の裸身の隅々まで知っている筈の彼にも、改めて見直すような斬新さを感じさせるのであった。

つかつかと彼は妻のそばへ近づくと、顔を両手で抱えこむようにして、さもいとおしくてたまらぬかのように、唇をよせていった。

私は、さりげなく光の輪を双つの顔から外し、くろぐろと蠢く二つの影の動きを、眼を凝らして見守っていた。甘い露に酔い痴れて啜り合う鼠啼きに交じって、昂ぶりの切迫した呼吸が、息を嚥んでみつめる私の耳朶を擽り始めた。

越路氏は、やって体を離すと、手探りで螢光灯の紐を引いた。点滅して白昼光が部屋に漲り、神秘のベールは無残に剝がれて、肉付きのよい彼女の姿が、生ま生ましく判っきりと私の視野に入った。一瞥して私は直ちにカメラを構え、むしろ越路氏の為に、その愧じらいのポーズに閃光を走らせた。

既に肚をきめての覚悟の上か、胸の亢ぶりを押えて彼女は、化石の様に動かなかった。



彼は部屋の片隅から一条の縄をとり出してくると、私につきつけ、

「さあ、辻村さん。あんたの手で妻を縛ってやって下さい」

と昂ぶりの声を挙げるのであった。うなずいて近よると、無雑作に縛った彼の縄を、とき放った。景子は、あわてて乳房をシュミーズの奥へ押し込み、そそくさと、ブラウスのボタンをかけようとした。黙々と縄をしごいて二重にすると、無言の侭、胸縄をかけ、さっと背後に廻し両手を縛って、簡単な縛りをすませ、蹲踞の姿勢をとらせると彼女は、まるで操り人形の如く、私の意のの侭に動いた。

この平凡な着衣のポーズもやはり越路氏に対する一抹の遠慮が働いていたことは否めない。全裸を内心、望んでも、彼の愛する若妻をその眼前で裸にするほどの勇気はなかったのである。軽い愧じらいの笑みを泛かべ、うっすらと唇を開いた彼女の前歯に、金冠が光った。

嗜虐の炎がメラメラと、体内から噴き上がってきたかのように、越路氏は矢庭に鋏を握って妻の体にかけよると、ブラウスに鋏の刃を挿し入れ、一個所をきって、シューッと引き千切った。つづいてシュミーズも又、彼の手によってズタズタに引き裂かれて飛散した。呀っという間の出来事である。脱がす手も、もどかしげに、いきなりパンティを、さっと毟りとって、着衣の簡単な縛りは、一瞬にして全裸に変貌してゆき、私は唖然として彼の行為をみつめていた。この荒々しい一連の行為に、妻は拒否もせず彼のなすが侭に任せ、突如、前触れもなく襲った全裸の羞恥に、唯、頬をこわばらせ、身をかがませて潔ぎよく耐えていた。

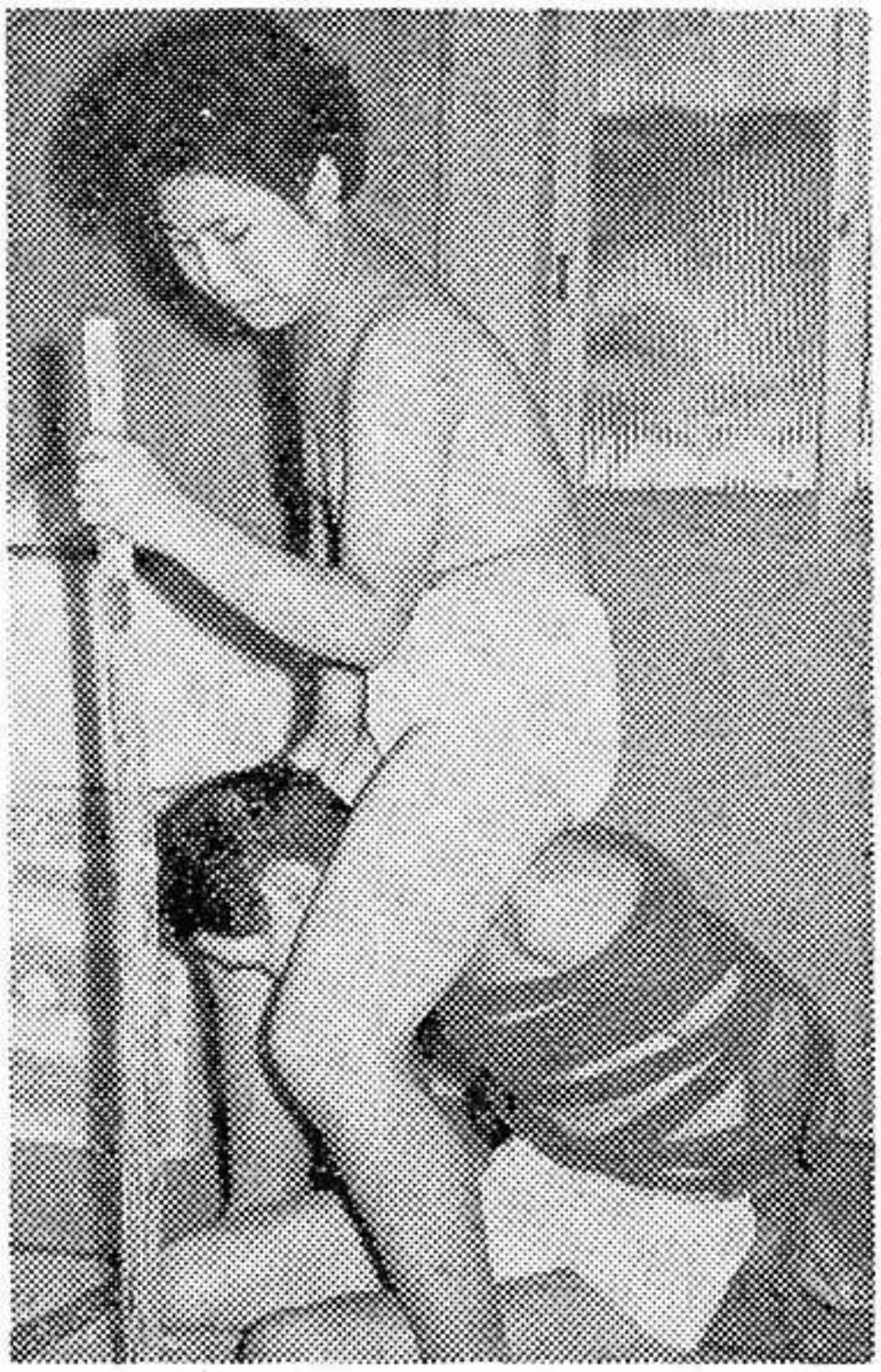
夫の暴力に繙弄されながら、妻は耳朶を赧らめ、微かな媚すら泛かべて、チラッと私に視線を投げ、慌てて眼を伏せた。

制禦する理性を忘失したかの如く、むき出しの本性を発揮して、彼は私の縛った縄をサッと解くと、使い馴れた日頃の愛縄で縛ってゆく。ルールも何もない奔放な縄のかけ方で細い麻縄が妻の両手を背後で犇と締め上げ、いきなり襲った苦痛に、彼女は微かな呻きを洩らした。

呻く口を塞ぐかのように、頬がくびれる程に手拭いでしめつけ、強く猿轡をかませると荒々しく、ドスンと音をさせて、椅子に彼女を嵌めこむように坐らせ、こじあけるように豊かな肉づきの両腿を大きく切裂いて、左右の肘掛けに堅く結びつけてゆくのであった。

衝撃の羞恥の極が、思いもかけず私の眼前に展開した。豊かなる艶肌は絢爛とひらけ、甘い泉の芳醇を求めて、夫の顔が、ひそやかに埋没していった。

私の顔は火照り、無意識のうちに、呼吸は乱れて荒くなっていた。駭きと共にカメラはとめどなく、めくらむ白光を投げかけて、この刹那に全神経を集中していった。所詮は禁



昂ぶりの感情をむき出しにしていうと、彼は妻の開股の縄を解き、だき抱えるようにして立たせると、縄尻を握って、ぐいと体ごとすように歩かせた。

打ち伏した越路氏の臀部に足を掛け、彼女は今、夫の両手を背後に捩じり上げて縛りにかかっているところであった。ハントの意識が咄嗟にひらめき、私は素早く、カメラを構えた。気配で私の侵入を知った彼女であったが、チラリと振り返って私を一瞥すると、淡い、はにかみの視線を投げたが、すぐさま恬然と、SMのプレイに没入していった。いつしか私への憚りは消えて、それが願望の、彼の悦虐の炎をかき立てるべく、緊縛の作業をつづけてゆくのであった。

パッパッと傍から閃光を走らせても、一向意に介する風もなく、意外に彼女の縄捌きは鮮かで、さも手馴れたように緊縛をつづけて行く。

私に被虐体を直視されて、俄かに彼の息は激しく弾み、いやが上にもマゾ性は、猥ら火となって狂おしく燃え上がって行くかの様であった。部屋の片隅の大きな茶櫃の中には、或いはSMのプレイ道具一式が納められているのかも知れない。井戸縄に匹敵する太々しはずですから」

断のシーンであっても、何か撮らずにはおれぬ衝動にかられ、激しく嗜虐の想念を燃焼させて、被写体のあからさまな位置を求め、右往左往する私であった。

激しい欲望の虜になった彼は、ようやくにして立ち上がり、舌なめずりして私に近づくと、

「ああ辻村さん、どうもむしょうにMの虫が疼き始めて、苛められたくなって来ました。あれを縛った侭、座敷の方へ引き立ててゆきますから、しばらくしたら、お出で下さい。おそらく私達のSMのプレイが始まっている

この若妻は一言の抗弁もなく、むしろ微かに欣びの羞らいすら、裸身にうかべ、立てられていった姿を見送り、譬えようもない駭きに振り廻されて、唯私は呆然と、無言の侭、立ち尽していたのである。

×　　×

数分の時間をおいて、座敷の襖を開いた私は、予知したように、そこに主客転倒の一変した様相を見出し、予期しながらも矢張り眼を瞠る思いで、正に始まろうとしているプレイの進行を凝視した。

越路氏は六尺褌一本の裸となり、妻の景子

い縄が、どさりと大きく、トグロを巻いてお り、茶櫃の傍には、ささら竹、日傘、樫の丸 棒など、およそ座敷にふさわしくないものが 立てかけられてあった。

手際よく縛り終わり、屈折した両足首と、手首の縄を繋いで、緊縛を完成すると、彼女は軽く誇らしげな笑みを私に投げかけ、ボリュームたっぷりの豊満な女体を惜しげもなく曝して、立てかけてあった、ささら竹を手にした。打ち伏している彼の耳許に口を寄せ、

「いつもの通りでいいの？」

と小さく問いかけている。

「ああ、しかし今夜は思いきり激しく苛めてくれ。さあ、早く奴隷にしてくれ」

越路氏は声を昂ぶらせ、私という第三者の存在が尚更に、被虐の愉悦を喚起するのか、まるで酔い痴れたように叫ぶのであった。

「いいわ」

その時、彼女に一瞬、逡巡の色が浮かんだが、それも束の間、バシリと、ささら竹が小気味よい音を立てて、彼の背に炸烈した。

景子の眸は、俄に生き生きと蠱惑的な輝きを増し、きりりと吊り上がった眉の気魄に、Sの激しい表情が横溢して、豹変する女心の妖しさに、私は息をのむ思いで、みとれていた。

「私を縛った上、あの様な辱かしめを与えた罰は分かっているネ」

驕慢に妻は、うそぶく。

「ハイ、女王様――どうぞ女王様のお好きなように、この不心得な奴隷めを責めさいなんで下さい」

「よし、よく言うた。お前の希望通り、思いきり苛めてやる」

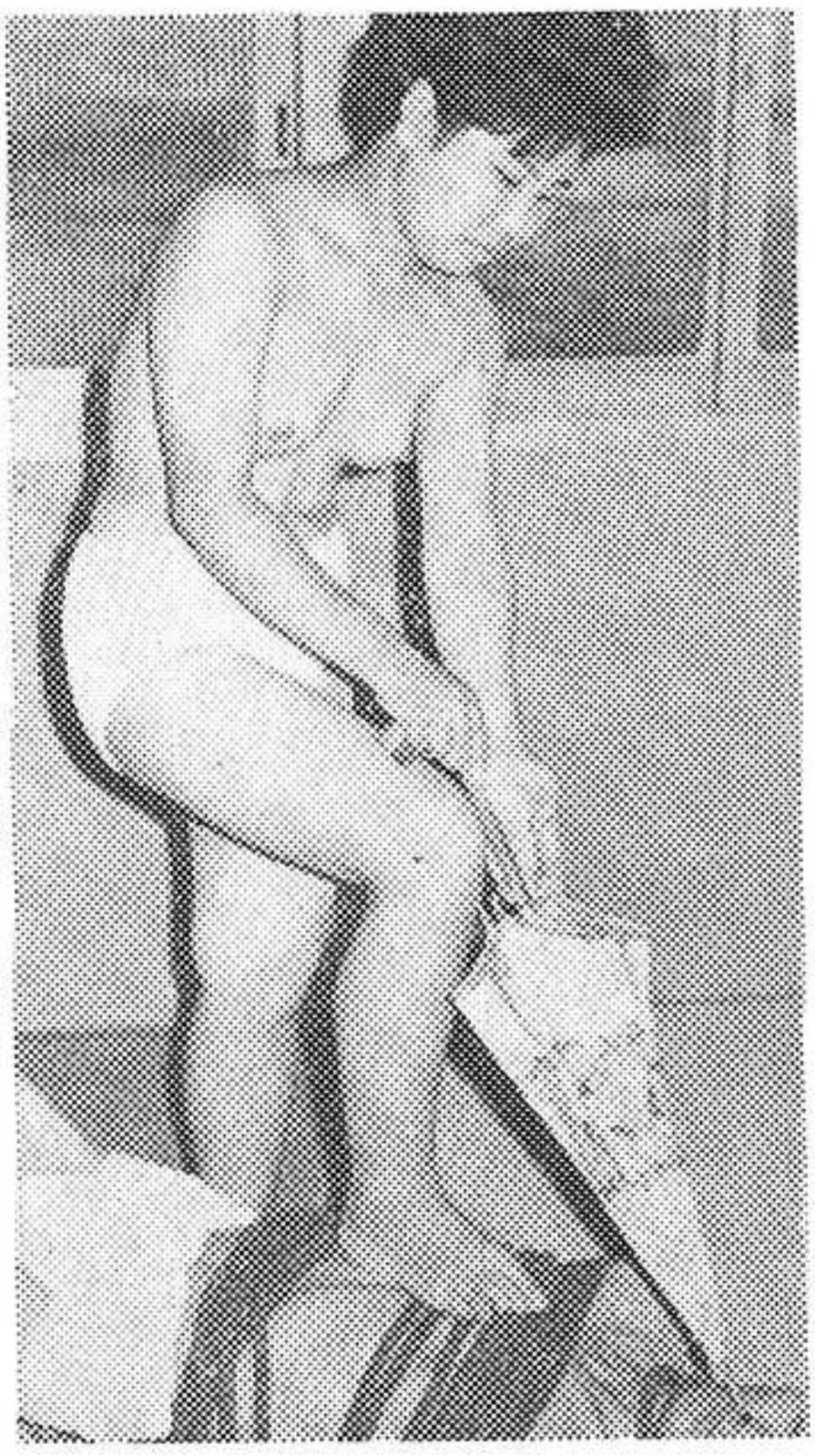
スラスラと澱みのない対話――。それは今夜が始めてのものでない事は、すぐ察しられた。全裸に少し冷たい部屋の空気も、二人の熱情の前では、ものの数ではなく、私自身、そっとウールの丹前を脱ぎ捨てて、仮寝の浴衣一枚の姿になっていた。

不躾にみつめる私の眼前で、SMの倒錯したプレイが開始される。

彼女は、牝豹が獲物をいたぶるように、夫の五体をささら竹でバシリバシリと叩いて廻り、足指で男の顔を踏みにじり、拇指をぐいぐい口中に押し込んで、しゃぶらせている。

その叩き方に、強弱を加減していることが私には判っきりと感じとれた。何もかもプレイである。快い苦痛と、凌辱にのたうつ中で彼の計り知れぬ歓喜と悦虐の陶酔が交錯しているのである。

景子は男の背に片足をのせると、ぐいぐいと揺さぶって力をこめる。絶え間なく、痩身のあちこちに、ささら竹の炸烈する音が響く。果ては、ささら竹を杖にして痩せた彼の臀部に両足共のせ、全身の重みをかけて、ぐりぐりと双臀を、こね廻すのであった。圧縮の摩擦が彼に微妙な変化をもたらすかの様に、ハ



アハアと喘いだ。

「どう。一寸は、こたえたかい」

「ハイ、かたじけのうございます女王様―」

「では次は、お灸を据えてあげよう」

マッチを擦って、フッと吹き消すと、熱さの残った、燃えかすの軸木の頭を足裏にこすりつけ、数秒で熱がさめると、矢継早にマッチを擦って消しては、臀部や、後手の掌、横腹、頸筋へと押しつけてゆくのであった。

刹那の熱さに、ジーンと体内の被虐の血がかき立てられるのか、夫は呻きをたかめ乍らも、恍惚の甘い陶酔の表情を泛かべていた。

すべては彼によって計画され、演出されたSMのプレイを、景子は順序正しく遂行しているかのようであった。

「あッ、女王様――このような手ぬるさでは未だまだ責め足りません。私を責め柱に雁字搦目にくくりつけて、思い切り辱かしめて下さい」

「よろしい。では責め柱に縛りつけて、うんと責めてあげます」

従順な女王様は、奴隷の望むが侭に、しなやかな手付で縄をとき、尻に一発、くれてやると、彼は四ツン這いに這って、よたよたとこすりつけ、締め上げ、片掌でパシパシと男の頬を叩く。抜いた、ささら竹が彼の胴に鳴り、褌の上を叩いた。感激にわなわなと打ち震えて、ヒイヒイと快虐の呻きを洩らし、全身の骨のとろけそうな甘い苦悶にのたうつ彼を、妻の手は容赦なく責めつけていった。景子の頬は紅潮し、これみよがしの打擲は、むしろ私の視線への挑戦の様にすら思える程、激しかった。

一休みするかの様に、彼女は丸い小さな腰掛けを持ち出してくると、柱に縛りつけられた夫の眼前に坐って、みじめな姿で、全身に赤く、みみず腫れをつくっている彼に、じっと眼をそそいだ。その眼が時々、私のカメラを意識するかのように、チラッと私に流れては正面に戻った。こうしてしばらくの時が経

願望を果たしてくれる女王――そんな若妻を得た歓びが、くびれた顔面に溢れ、彼は世にも幸福そうな、満足しきった顔付であった。

確かに、初老に近い男の、マゾの願望を、存分に果たしてくれる若い女性など、そうザラには、みつかるものではない。野性美溢れる逞しい若妻景子は、彼にとって、又と得がたい稀有の存在であったことであろう。

縄目にささら竹を押し込んで、こじ上げ、

過するのが、いつものならわしであるらしく
坐った彼女の手の位置に、蔽われた六尺褌の
相対するのが、日頃のプレイを連想させた。
流石に私の存在を憚かってか、彼女は手を出
しかねて眼を落としている。第三者の介在で
やはり景子は、やり辛いらしく、フッと困惑
の表情が、かすめるのを私は、見逃さなかっ
た。それでも、よく調教され飼育された景子
は、確実に被虐のフルコースを忠実に遂行す
べく、次の動作に、かかり始めようとした。
一瞬の躇跙のあとに、決然と景子の顔が上が
り行き先に、迷っていたような手が、すいと
伸ばされた。

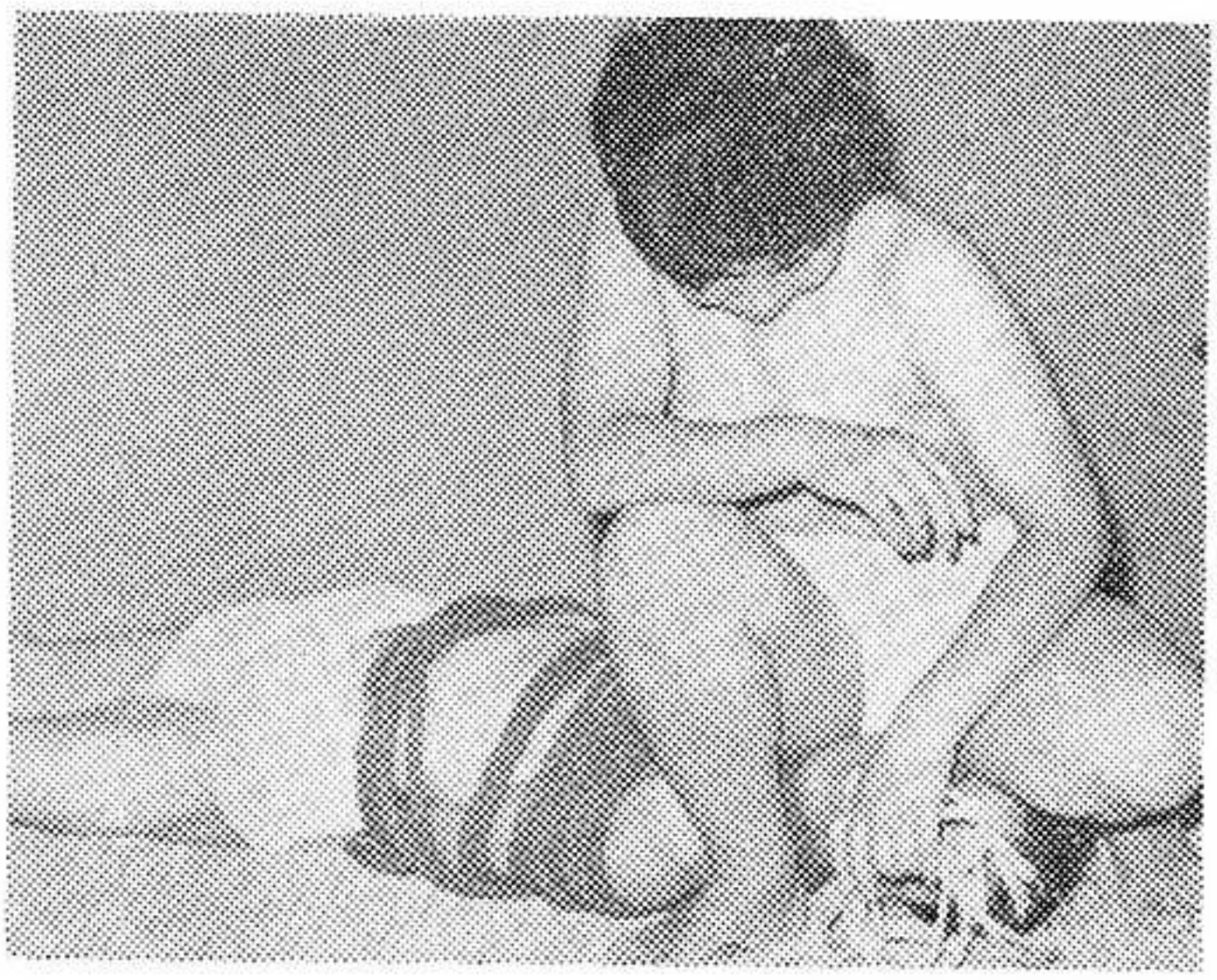
　犇々と縛られた侭の慇懃な愛撫と玩弄は、
初老の彼にとって、最高の快感につながるも
のであったに違いない。

　情感溢れる、うら若き女人に、私もああさ
れてみたい——Sを自認する私ですらも、そ
れは羨望を覚えるプレイの一コマであった。

　愛する妻によって緊縛され、悦虐の快感を
噛みしめる、世にも幸せなる奴隷。その快感
を盛り立てるべく、ひたむきにフルコースを
提供する女王。彼の謂う、妻の献身的なサー
ビスとは、これなのか——。

　男は快虐の愉悦に溺れ、Sの女王は、奴隷
の快感を助長するため、ひたすらに努力して
も、今の段階では、少なくとも自身の快楽に
は余りつながらない様に思えるのであった。

　専らマゾ性の方が強い彼の欲求をみたして
やるが為に、Sの女王は、せっせと献身的に
奉仕しているに過ぎなかった。いうなれば、
彼を苛めるという行為自体に、飼育されたS
の女王は、殆ど快楽の恩恵を蒙っていないの
である。夫が喜べは喜ぶ程、彼女は、大いな



る献身的な犠牲を払っているということであ
った。

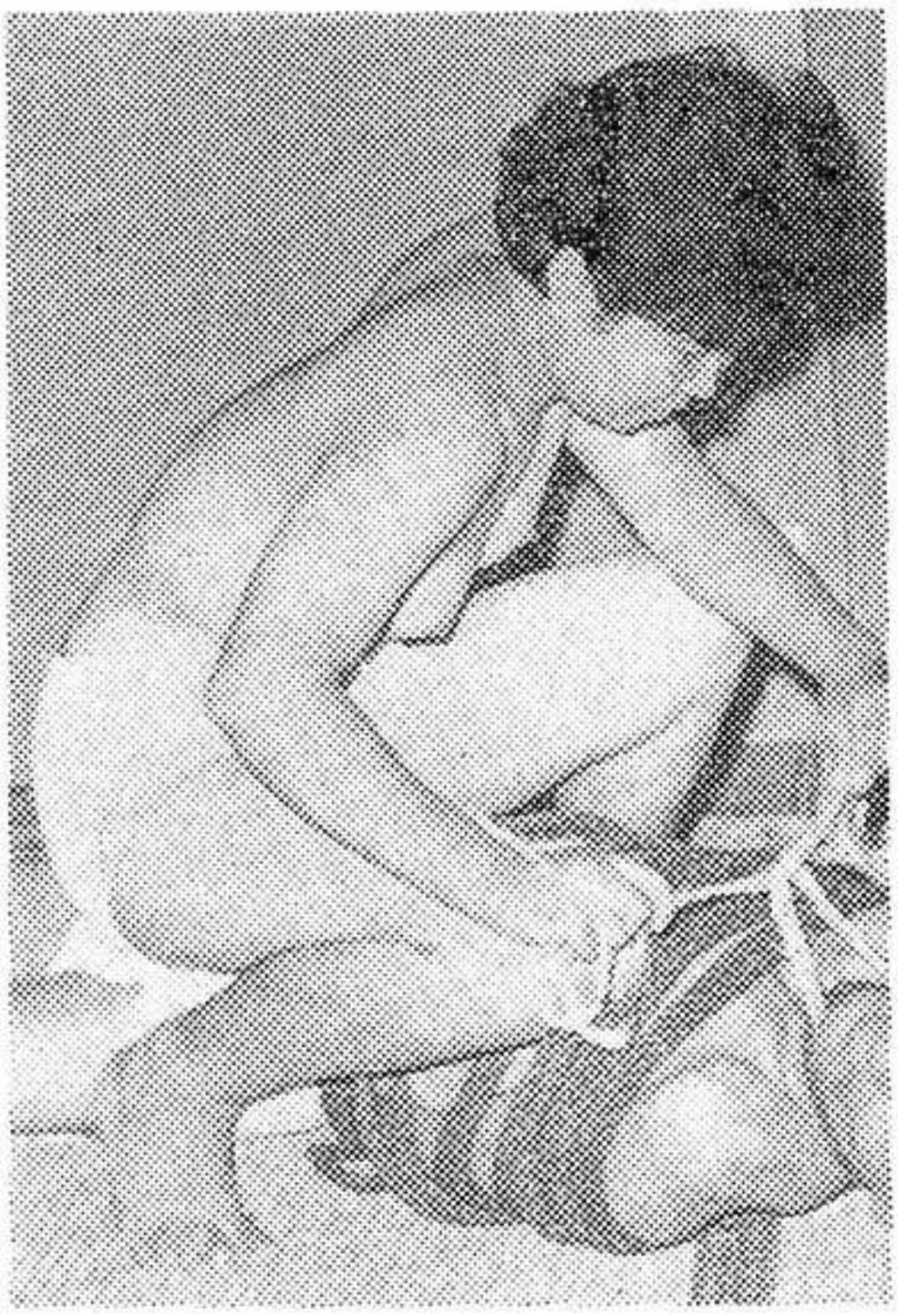
×　×　×

　運送の貨物車にでも使いそうな、太く逞し
い麻の縄が、細身の越路氏の上半身を、ぐる
ぐる巻きに締めつけていった。言うまでもな
く、景子によって縛られたものである。首に
かかった縄は、かなり強く、彼のノド元を圧
迫していた。

　ささら竹を手にした彼女は、片足を、坐っ
た彼の背にのせて、ぐいぐいと押し潰してゆ
く。

　柱に立ち縛りにされて、景子の手練によっ
て情熱をかきたてられた男の欲情は否応なく
悦虐のプレイをエスカレートさせていった。

　勿論、未遂であるが故に、そこにあった。
の終局に辿りつこうとする、燃え上がった情
欲の前途は、これからであった。女性と男性
の、Mの相違は判っきりと、
女は数限りなく頻繁に、陶酔の極致に到達し
得ても、男の場合——とりわけ中年過ぎの彼
の場合など、特に唯一回に、すべてを賭けざ
るを得ない。その許された一度の恍惚の瞬間
が、最高の状態のものでなければならなかっ
た。



束縛された肉体を、女の蹂躙に任す時、男のマゾ性は極度に昂揚してゆく。

彼は既に息づかいも荒く、甘えて泣き声めいた。許しを乞う言葉を、絶え間なく、うわ言のように口走っていた。それが妙にいやらしく耳触りであったが、忘我の境地で、被虐の悦楽に耽溺する彼にとっては、その許しを乞う言葉自体が、更にそれを求める愉悦の表現でもあったに違いなかった。

力一杯、背を踏みしめて、ぐいぐいと反動をつけてゆさぶると、男の顔が膝に突き当たる。パシリパシリと、思い出した様にささやかな強い彼から調教を受け、飼育されて、この柔順な若妻は、ひたすら彼を歓ばせる手段を忠実に実行しているようであった。

時々思い出したようにストロボを光らせ乍ら、私はこの演出されたプレイを見続けていたが、どういうものか感激に乏しかった。いわばこれはSMの交歓プレイではなく、Sを強要され、Mを強要されているプレイの真似事ではなかろうかと思えてきたのである。M七S三の、越路氏の趣味に迎合して、若い妻は、夫の命ずる侭に働いている様に過ぎないのではないか——。そこには、若い景子の自己の意志による主体性がなかった。

実の処、彼女のSMに対する観念なり欲求は、未だ未だ未熟の域を出ていない。それなりに振舞っていても、おのずから表情なり動作に、それが如実に現われていた。

同棲以来、SM性に飼育して、僅か半年そこそこであれば、彼女自身、SMの自主性をもって存分に振舞うには、余りにも短い歳月である。しかし年月の経過は、演出された遊戯のSMではなく、真の主体性を持ったSMの感情が彼女の心裡に醸成され、女体の爛熟と共に、教えられ、演技していたSの女王振りが、いつしか本物となって開花し、苛める歓び、愉しさを覚えて、越路氏に君臨する日がくることを私は確信した。

彼女がSの女王を誇示する、そんな未来を想像し乍ら私のSMプレイ観察は続く——。

景子は彼の体をいきなりドサリと横倒しにして踏みにじると、ささら竹を日傘に替え、その石突きの尖端を、越路氏の鼻腔深く押し

込んで、ぐりぐりとこね廻し始め、果ては口中に突込んで頬に突起をこしらえ、屹立した頬肉をひねり上げて、越路氏に大袈裟な苦悶の声を立てさせたりした。

トントン、トントンと、全身を打診するように石突きで叩き、その尖端は、徐々に下腹部に移行していった。絶え間なく彼の唇から猥らな哀歓の悲鳴が、うわ言めいて流れ、醜態を曝す凌辱のこの行為を、歓喜で甘受して尽きなかった。

ハントの感覚とは、凡そ異質のこのSMプレイの生態を、私に立ち会わさせようと計画したのは、夫婦プレーヤーが、やがて誰しも陥る昂進状態に、彼も又、同じ轍を踏んで落ち込んでいったようであった。秘めたる戯れが、いつしか二人きりのプレイでは飽きたりず、第三者に見られたいという露出の欲求を覚え、マンネリ化してゆく夫婦プレイに一抹の新鮮さを求め、と共に、新たなる刺激へと漸次エスカレートの一途を辿ってゆくのであった。とすれば、強烈なる夫婦のSMプレイを期待して、わざわざ四国くんだりまで、ノコノコと出向いて来た私は、体のいい刺激培養のピエロ的存在に外ならないのではなかろうか。

事実、二人のプレイに、私の介入する余地もなく、徒らに拱手傍観しているに過ぎないように思えるのであった。

彼は私の来松の意図を確かめて以来、せっせと当日のプランを練って景子に吹き込み、すべては彼の予定通り進行しているかの様であった。

その演出は、私にとっては始めてのものではあったが、彼が猥らな言葉を口走り、泣声を放てば放つ程、むしろ何か空々しく感じられ、反比例して、SMの情熱は冷却してゆくのであった。

その思索を裏書きするかの様に、私は如何にも手持ち無沙汰である。行動派である私が、何もすることがないというのは、どうにも恰好がつかず、ましてや、毎度女体の緊縛に心を燃やす私が、中老の男が縛られて悶えるのをみては、正直いって興醒めであった。もともと、私自身S性であるだけに、女体に対する責めや緊縛には、必然的に心を動かしても、中年男の被縛の姿は、どうにも対象外であった。

そうは言うものの、景子の野性的な豊満な女体が、種々の姿態を交錯させて、さまざまに男をいたぶってゆくのを見ては、やはりそれに心を惹かれるものがあった。

カメラ・ハントも、SMと銘打っているからには、時には、こうしたM男性がリードするプレイの一幕を見つめておくのも、SMの心理考察の面から無駄ではないと腹をきめ、折しも、打伏した彼の顔面に、どっかと重量たっぷりの尻をのせ、腿で彼の顔面を挟み込

み、ささくれ立った細い麻縄の束で、ゴシゴシと顔をこする彼女の手許を、私はファインダーの奥から、興深く覗き込んでいた。

ひとしきり、ゴシゴシと縄の束をこすりつけたあと、男の顔にぐいと坐り、白いパンティが、男の口腔を塞いでいった。呼吸が切迫し、アウアウと、もがく顔を、どっかと抑えつけ、息詰まる苦悶に、のたうつ男の顔を、じっと見守る若妻。

頃合を計ってヒョイと腰を挙げ、どうだというように、ポンと頭を足蹴にするのであった。

カメラを意識してのパンティ着用であったが、懼らく連夜のプレイは、殆ど景子の全裸のもとに行なわれていることを推察して、微かに私の胸は疼いた。或いはこの瞬間、景子のハルンが重要な役割りを果たす可能性も、十分に考えられることであった。

私という第三者の存在に、刺激を求める越路氏を以てしても、カメラ・ハントを頭に入れて、やはり一枚のパンティを、彼女に着用させたように、思えるのであった。同好者同志の赤裸々な交歓プレイであれば、懼らくは在りの侭に開陳していたであったろう。

生ま生ましいプレイをこの眼で見たい私にとって、それは正に隔靴掻痒の感であった。

カメラ・ハントの辻村隆という虚名が、この場合も禍いして、越路智之氏に一抹の警戒心を抱かしめていることは確かであった。しかしプレイの実権は彼等にあり、私は何もいえなかった。

景子は、どっかりと腰を、彼の上に落としたプレイのみで終わってしまった。軽い息詰まりで激しく喘いだ男をみつめ、あっさりと景子は彼を抱き起こして、縄を解いていった。

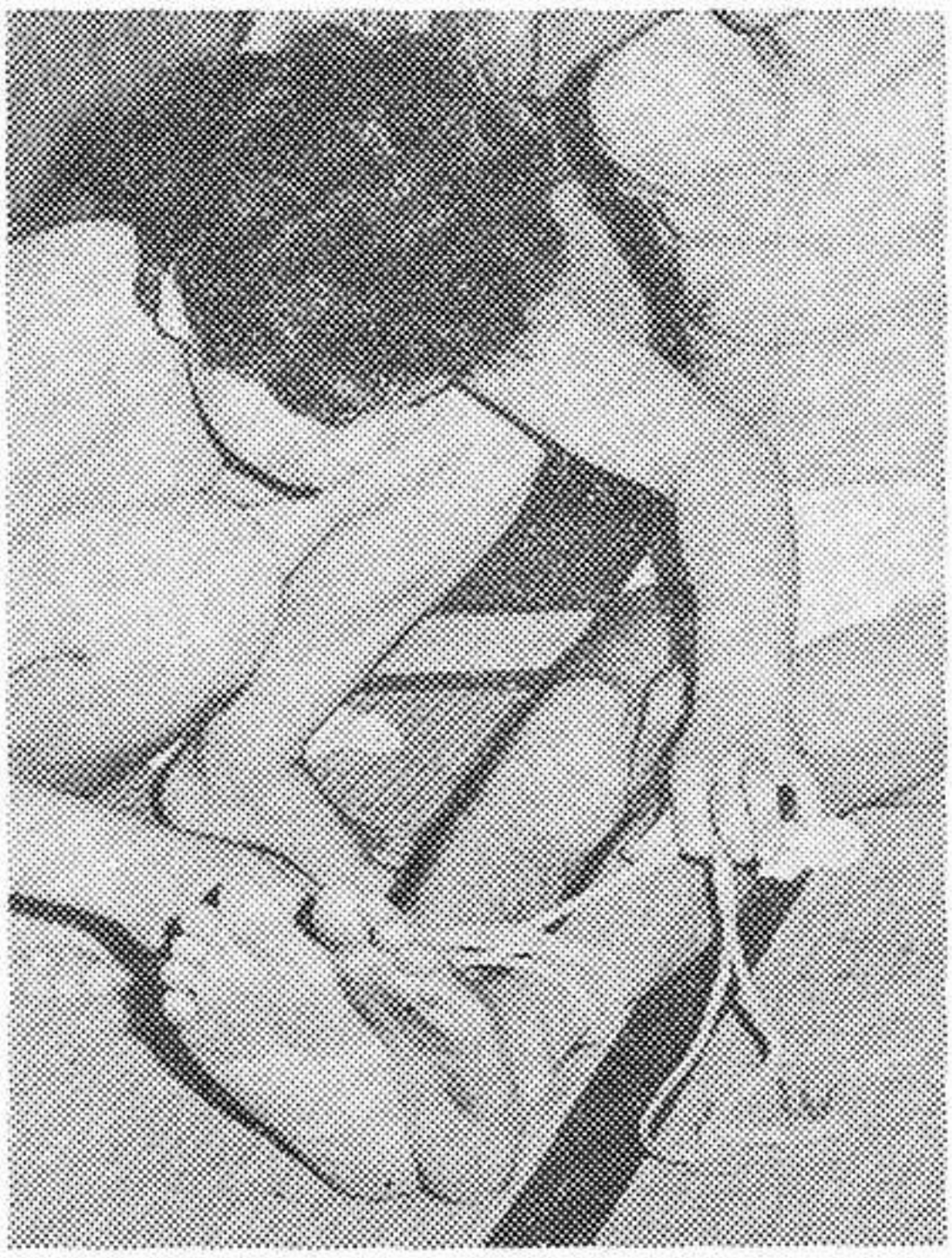
物足りなさが、私のモヤモヤとした気分に拍車をかけたのは事実である。

×　×　×

「如何です辻村さん、私達のプレイ振りは」

越路氏は縛られていた細胸を撫し乍ら、期待をこめて、たずねた。

「大いに愉しかったですよ。しかし、若し判っきり言わせていただくとすれば、どうも貴



方の演出がお上手すぎて、幾らかつくられたプレイという憾みがありますね。正直いってパンティと褌は、大いに眼触りでした」

「ハハハ、でしょうな。私もプレイの合間に辻村さんの顔色を窺っていて、すぐにそれを感じました。でも誌上に発表されることを考慮に入れますと、やはりこれがなくては、さまにならないでしょ。だから今迄のSMのプレイで、褌とパンティのないのを想像して下さったらよいのですよ」

「想像は飽くまで想像、現実は現実ですからね。私は現実の方を拝見したかった」

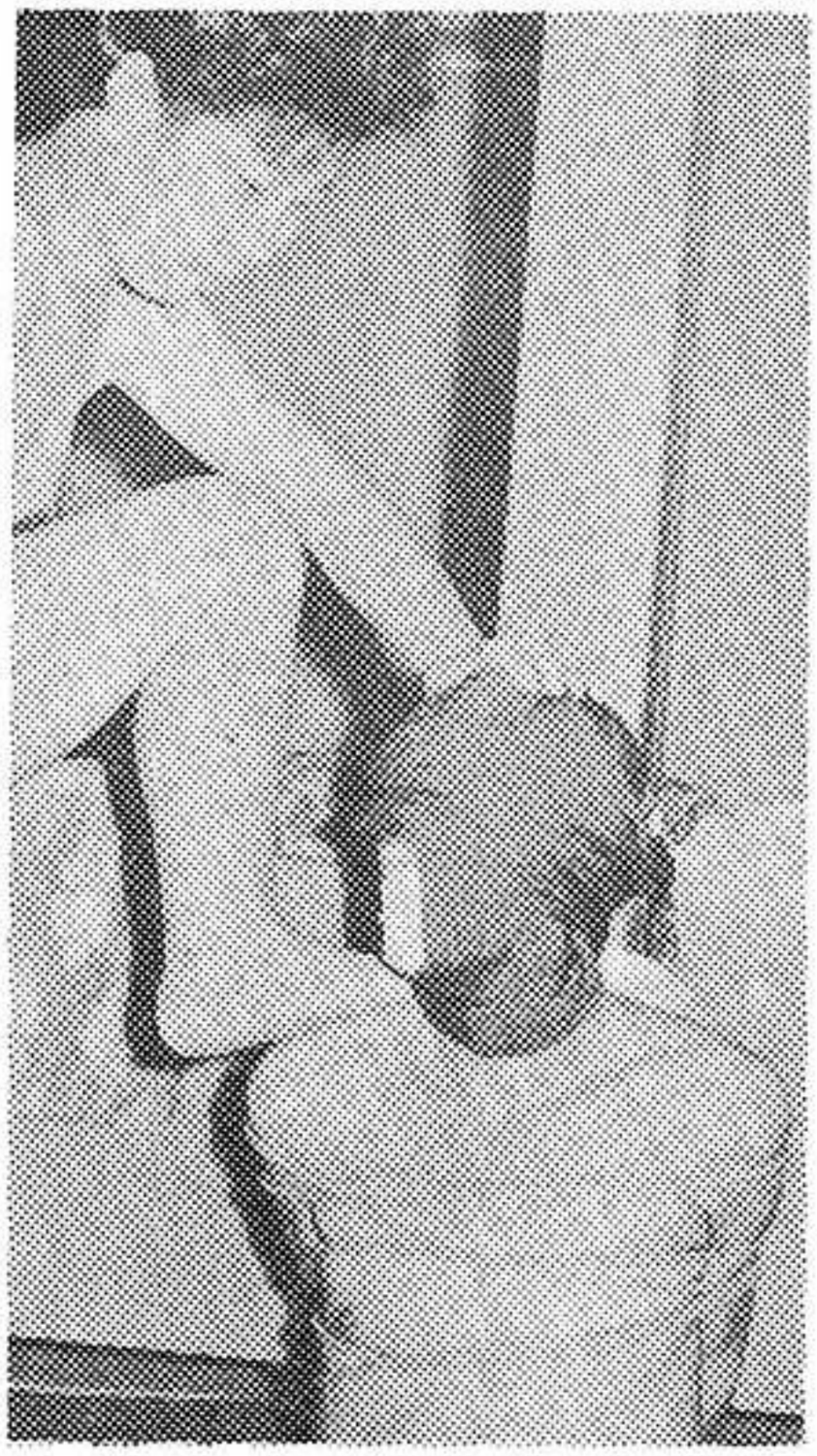
「お見せしましょう、赤裸々なのを――景子も覚悟はしておりますから、反ってその方が羞恥が走って、プレイに迫真力が増すでしょう。その前に、こんと景子を、一緒に連縛してほしいのですが、縛っていただけないでしょうか」

「いいですとも。何かポーズに御注文は？」

「背中合わせに縛りて、出来れば辻村さんによって二人を虐めてもらえたら……」

「さあ、その方はどこまでお約束出来るか分かりませんが、兎も角、縛りましょう」

浴衣のはだけを直すと、請われる侭に私は両手を揃えさせ、左右に引き下げると、あっという風に、彼女の頬に羞恥がよぎったが、声は立てなかった。長々と観戦させられた当然の権利の様に思えて焦点をしぼっていったが、景子に拒否の色はなかった。うっすらと細眼を開いて、私のカメラを構える姿をみつめていた。



大きく開股をさせようと思えば、すっかり脱がしてしまわねばならない。膝近くまで引き下げたパンティが開股をさまたげ、諦めざるを得なかった。背中合わせの背下で呻吟する彼の存在が、この時、急に邪魔なものに思えてきたが、縛り合わせた連縛なら、これ以上どうにも仕様のない形態であった。

カメラを置いたあと、パンティをそっと引き上げ、二人の体を、やっとの思いで元通りに坐らせて、太縄を解いて行く。彼は私の、一寸した、さやかな行為に気付いたところ

景子の眉間に苦悶が流れた

縄の数が上るにつれて、彼

で、この程度は許容されるだろうと、自分自身に納得させていた。

既に時計は十時を過ぎている。独り旅館に放置してある妻のことも、幾分気掛かりになり出しつつあった。

小憩で、景子が台所へ飲物をとりにいった隙に、彼は私の心の動きを忖度したのか、

「景子を全裸にさせましょう。私も、本当はこれ（褌）を外したいのですが、何分にも第三者に始めてプレイをお見せするという刺激で、大脳神経の方がすっかり萎縮してしまいまして、お愧かしくてどうもー。私の貧しい醜態を曝け出すことだけは御勘弁願って、あれの裸体で御辛抱下さい。時間も気掛かりでしょうが、もう少し続けたいのです。やはり私は私なりにプレイの結末をつけたいのですよ。生殺しで終わるより、貴方の前で私の最後をお見せしたい。どうも変な欲望なんですが……」

「いいですよ、どうぞ御自由に。大いに私も愉しんでいるのですから——。しかし奥さんはいい人だ。羨ましき限りですよ」

「そう仰有って下さるか。私もこの年です。謂わば、回春剤の役目を果たしてくれるあれは、私にとってもいい女です」

越路氏は、しかも確かに得難い存在ですよ。景子夫人に対する評価は、正に私も同意見で大いに期待をかけても、よさそうであった。

彼は景子に、何事か小声で囁いた。頷いた彼女は、素直にクルクルとパンティを脱ぐと、惜しみなく全裸を私の眼前に曝した。

彼は、みずから縛り柱へ歩を運んで、柱を背にして足を伸ばして坐った。細縄を握った景子が近づくと、素早く彼の上半身を、かなり強く締めつけてゆき、両手を背後で縛りあげてゆく。剝き出しの裸身が、彼の被虐体のあからさまに躍動していた。縛ってゆく行程を、私のカメラは適確に捉える。カメラアイは、縛られている越路氏よりも、縛っている景子の方に、より多く向けられるのは、無意識の私の心の在り方を示していた。

男の伸ばされた細い脛を揃え、彼女は足首をしっかりと縛り終わって、一応、縄の動作は完結した。

一瞬の躊躇のあと、彼女は柱を抱きかかえるようにして、男の両肩に太腿をかけて跨がると、ぐいぐいと押しつけていった。

圧迫された男の呻きが、くぐもっている。揺れる双臀を背後から眺め、私の心は激しく熟していった。

ピタリと躍動は止まり、異様な静止が続いた。その時、男の胸をハルンが尾を曳いて伝れまにたる　た稀し甲あ

冷たいファンタで、のどをうおすと、プレイに対する、新なる期待が、蘇ってくる。既二人のプレイは、かなり煮つっている——。とすれば、こから始まるSMのプレイに、

い始め、腰を締めた褌で溜まって、布に吸い込まれていった。振り向いた彼女の、羞恥を矯めた横顔に、始めて感動が流れていた。私の存在を意識して、神酒奉戴の儀式を行なったところに、彼女の自意識が芽萌えていた。やおら彼女はパッと身を離した。大きく頬をふくらませ、口中一杯に溢れる甘露の旨酒を嚥下しかねている彼に白い手拭いでキリと猿轡をほどこした。真紅の布で、ぐるぐる巻きに覆面してしまうと、鼻腔のみを出して、顔面のすべてを蔽ってしまった。これも果たして計算されたプレイなのだろうか——と、私はめくるめく思いで、景子の心は確かにSにっと、みつめていた。弾んでいた。いきなりパッと足を挙げて、彼の肩に高々と掛けると、片手で頭を押えつけゴツンゴツンと柱に後頭部をぶつけさせ、昂揚する女の意欲は、激しく私に迫った。高く揚げた片足のポーズに、これみよがしの、私への挑戦を感じた。

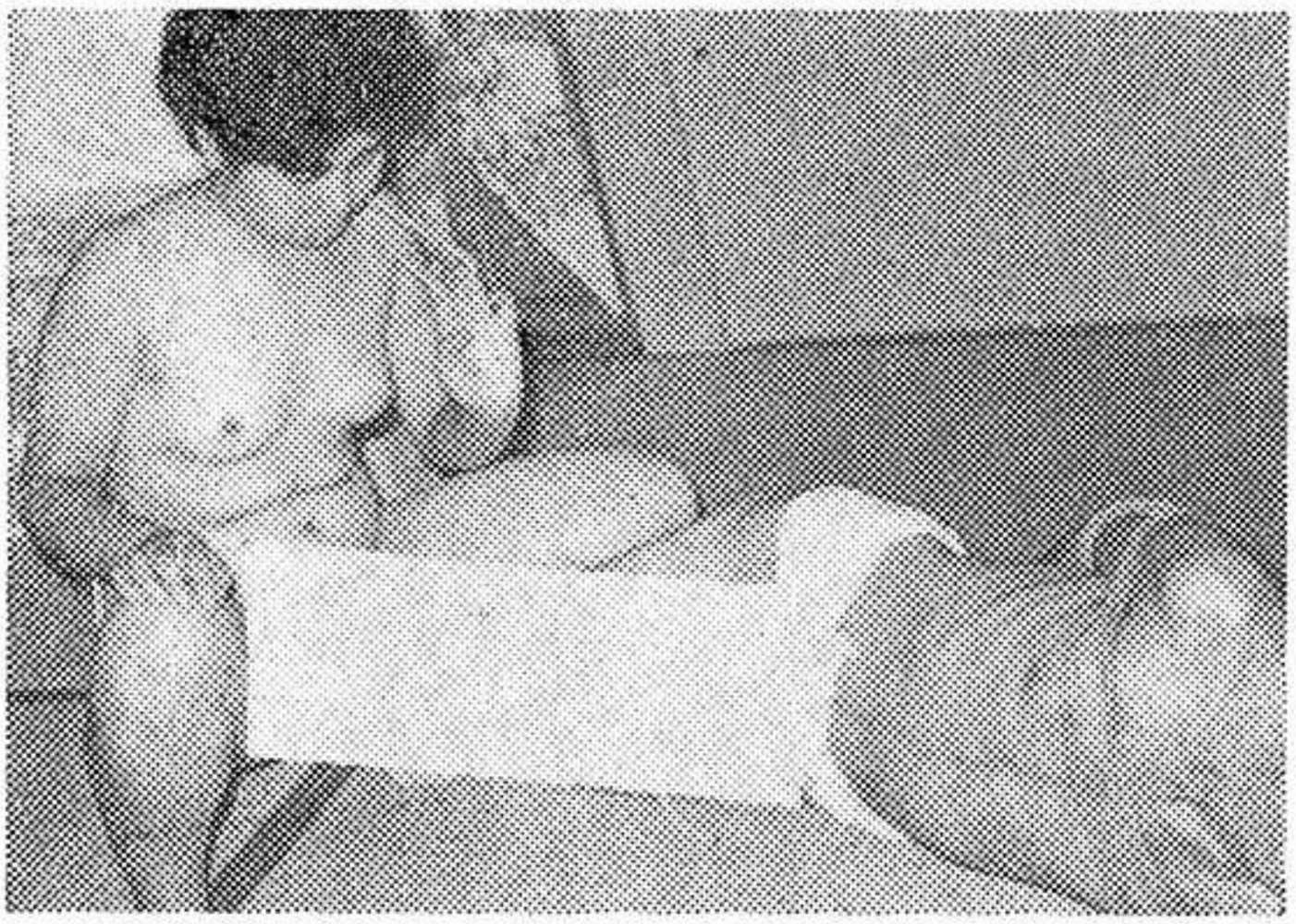
景子は今や、判っきりと私を意識して、彼に覆面したようであった。夫の視界を奪って、自由に振舞おうというのであろうか。

この若妻は私の眼前で私は彼女の意図を察して、俄に胸が騒ぎ始める。待っていた時期がやっと到達した思いで、カメラを握る手に思わず力が篭っていった。

景子の眼尻に、いつしか猥らな影がさし、媚を含んだ、まなざしが、熱っぽく私を直視した。それは許容の送り、彼の体の上へ、こで私は眼でサインを、手振りで伝えた。はにちら向きに坐るようかみの笑顔で彼女も又、無言。私のしぐさを諒解したのか、秘密めいたパントマイムのポーズを、とり始めていた。縛られた彼に背を向け、伸ばした膝の上に腰を落とすと、両手を大きく後ろにそらせ、覆面の顔ごと柱を抱えて胸をのけぞらせると、男の膝の上で大胆に豊かな太腿を大きく開いたのであった。その行為は、少なくとも夫の指示にない、彼女の意思による、私をみせる為の、あからさまなポーズであった。私の手は思わず硬くなり闇雲にシャッターが次々きられ、いつしか、いざりよって、そのクローズアップに、近々と体を近づけていた。

ここに景子の、夫を恐れぬ意志が働いている。女心の動きの妖しさは、私に何を求めようというのであろうか。

女体をくねらせたり、景子は、さっとみるや、とポーズを変え、覆面の夫を抱き抱えるようにして、彼女の左脚は、高々と夫の頭上で宙に躍った。ローマ字の〝L〟の字に似た鮮烈のポーズは、女の若さを誇示して、私に挑んでいるかのようであった。中老の男に忍従的に仕える若妻の、それは無言の反逆なのであろうか。急変した妻のこの態度を、縛りつけられた夫は、覆面の暗黒の中で、何と感じとっていたことであろうか——。



暗黙の諒解のもとに、更に彼女の飛躍はつづく。これみよがしの禁断のポーズが、又しても眼前に展開されてゆく。

覆面の頭上に、背伸びするようにして跨がるや、ぐいと腰を押し出すポーズをとった。まるで人が変わったように大胆奔放に誇示する心裡の豹変を推しはかりかねて、私はむしろ、うろたえ気味に、慌しく閃光を撒きちらしていた。

その猥らなポーズは、決して私から求めたものではない。最初に指示したパントマイムが次々と尾を曳いて、無言のうちに、彼女は自からの意志で、私に示してくれていたのである。

天恵の如くその時、私に一瞬の推理が走った。そうだ、そうに違いない。

献身的な彼女は、わざわざ四国を訪れた私の為に、自分の体で出来る唯一のサービスを私に与えてくれていたのだ。化粧とてせず、素肌をむき出しにした、野性的な南予の情熱的な女は、私の手持無沙汰げな様子を早くから、みてとり、越路氏が一方的のプレイを私に押しつけていることを悟って、チャンス到来とばかり、戯れのままに、こうした唐突のハプニングのポーズを演じてくれたに違いなかった。

眼で感謝のまなざしを送り、大きく彼女に頭を下げると、バツの悪そうな、戸惑いの表情を泛かべて、彼女は越路氏の頭上から、颯っと体を、翻した。解きますよというしぐさを私にみせて、真紅の覆面、猿轡を素早く外して縄を解いていった。勿ちにして景子の表情は元通り見事に還元していた。知るや知らずや、彼は、よだれと神酒のミックスで口辺をベタつかせ、眩しげな顔で私達を、みつめるのであった。

景子は彼を再び縛り直すと、座敷の方へ引っ立ててゆき、足払いを掛けるようにして、ドサリとたたみへ転がした。先程、猿轡に使った手拭いが今度は眼隠しに変わって、彼の両眼を包み込んでしまった。惜しげもなく裸身を曝して、縄をとり上げた彼女は、奇妙な作業を始めにかかった。それが演出か、彼女自身の思いつきかは分からぬにしても、うって変わる迫真力が、あった。少なくとも全裸が、私の眼前で作業を続けるとき、否応なく私の胸は、熱い疼きを催してくるのであった。

柔軟な一個の物体の気力を、振い立たせようとするかのように、彼女の持つ縄は強く、刀の柄を巻く如く、しめつけてゆく。動物的な呻きを挙げて、男が歓喜にのけぞるのを、吊り上げ、引っ張って、玩具の如く弄び、私にチラチラと淫靡な、ながしめをなげてよこす。キラッと金冠を光らせ、昂ぶる心を押えかねるようにして、景子は妖しく笑った。

男の顔が、景子の腿に挟まれて蠢めいている。長く余した縄を肩にかけたり、立ち上がって、ぐいぐい吊り上げたりして、彼女は気侭自由に戯れて遊んだ。私はそこに、彼女のS性を、はっきりと見出した思いであった。越路氏の計画されたプレイを、忠実に実行するのみと受け取った私の感覚は、間違っていたのだろうか。訂正を余儀なくせずにはおられないのだろうか。いや、あの時点では、まぎれもなく傀儡に過ぎない筈であった。しかし女は、心の奥底に魔性のものを秘めているのであろうか。今こうして喜々と眼を輝かせ子供が楽しい玩具を与えられた様に、ひたぶるに戯れる彼女の生態には、越路氏の計画の余地はない様であった。この遊戯も、時によっては、日常のプレイの範疇に入るには違いなかろうが、生き生きと振舞う彼女の姿に、抑圧と忍従のかげはなかった。

自由な思いの侭のプレイこそ、越路氏が真

底、願うMの願望であるとすれば、景子自身知らぬ間にS性を自ら涵養していたのかも知れない。そして又、今こに開陳されている遊戯が、私へのサービスの一端であるとすれば、女心の持つ異妖な心理に、激しく動揺せざるを得なかった。

たまゆらの戯むれに、彼は上ずった声で、景子、景子と、眼隠しされた侭、あらぬ方に向かって叫んだ。顔を近づけた彼女に、動悸も激しく、彼は最後の一縷の望みを托して、唸るように、呟いていた。潔く頷き、浅黒い野性の素顔に赧らみをのぼせて、景子は大胆な行動に移っていった。

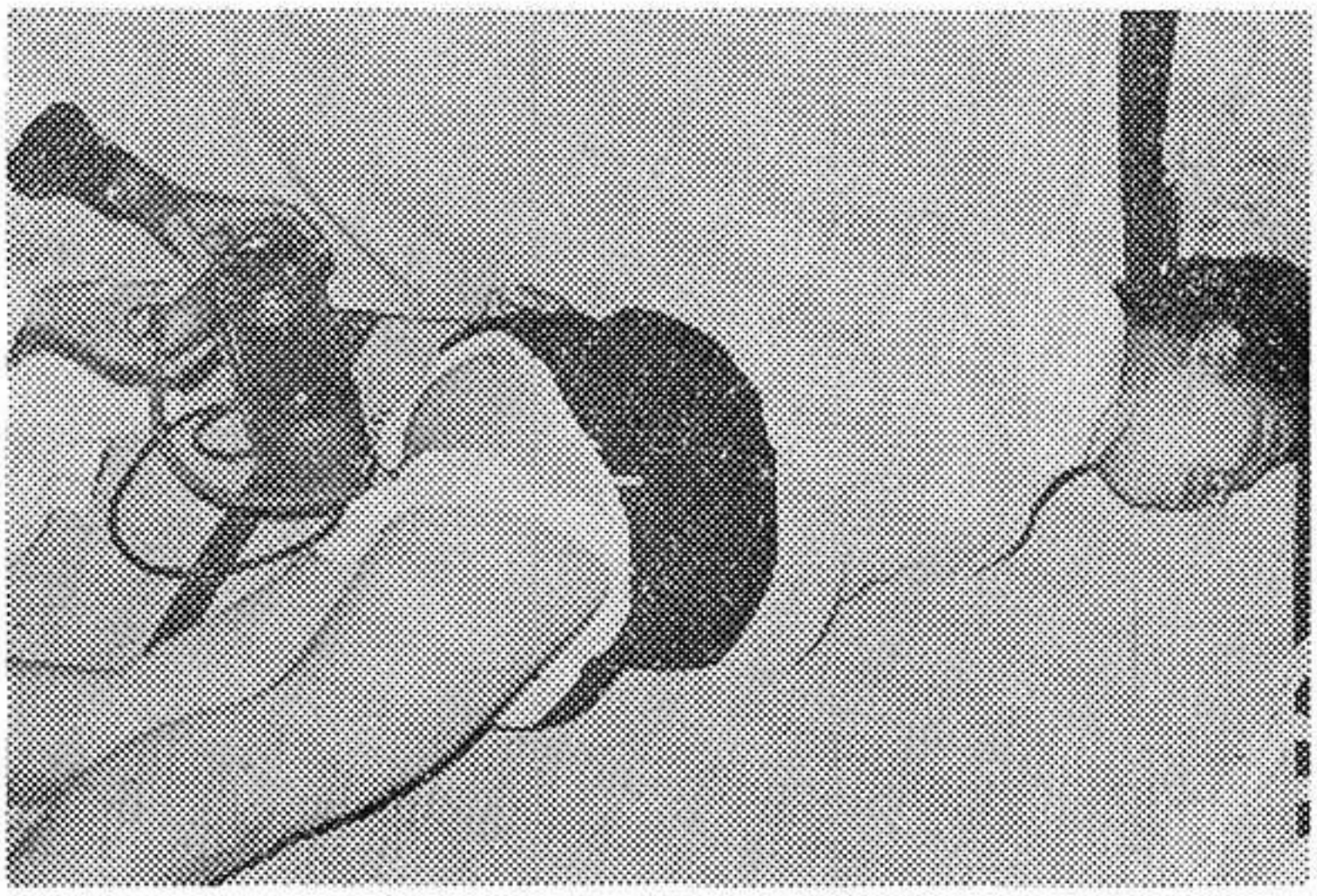
女上位の鴛鴦の戯れを眼前にみやり、真剣な表情の彼女を、熱いまなざしで追いつづけ乍ら、私の嗜虐の情熱は、完全に昇華していったのである。

×　　×

やっとタクシーにありついて、道後の宿に戻ったのは午前零時に近かった。電話で帰館を知らせておいたので、眠たげな中年の女がドアを開けてくれる。

おそらく寝もやらず妻は待っていたのであろうが、素振りには見せず、ぐっすりと今まで眠っていたと答えた。その嘘を、ありありと物語っていた。

×



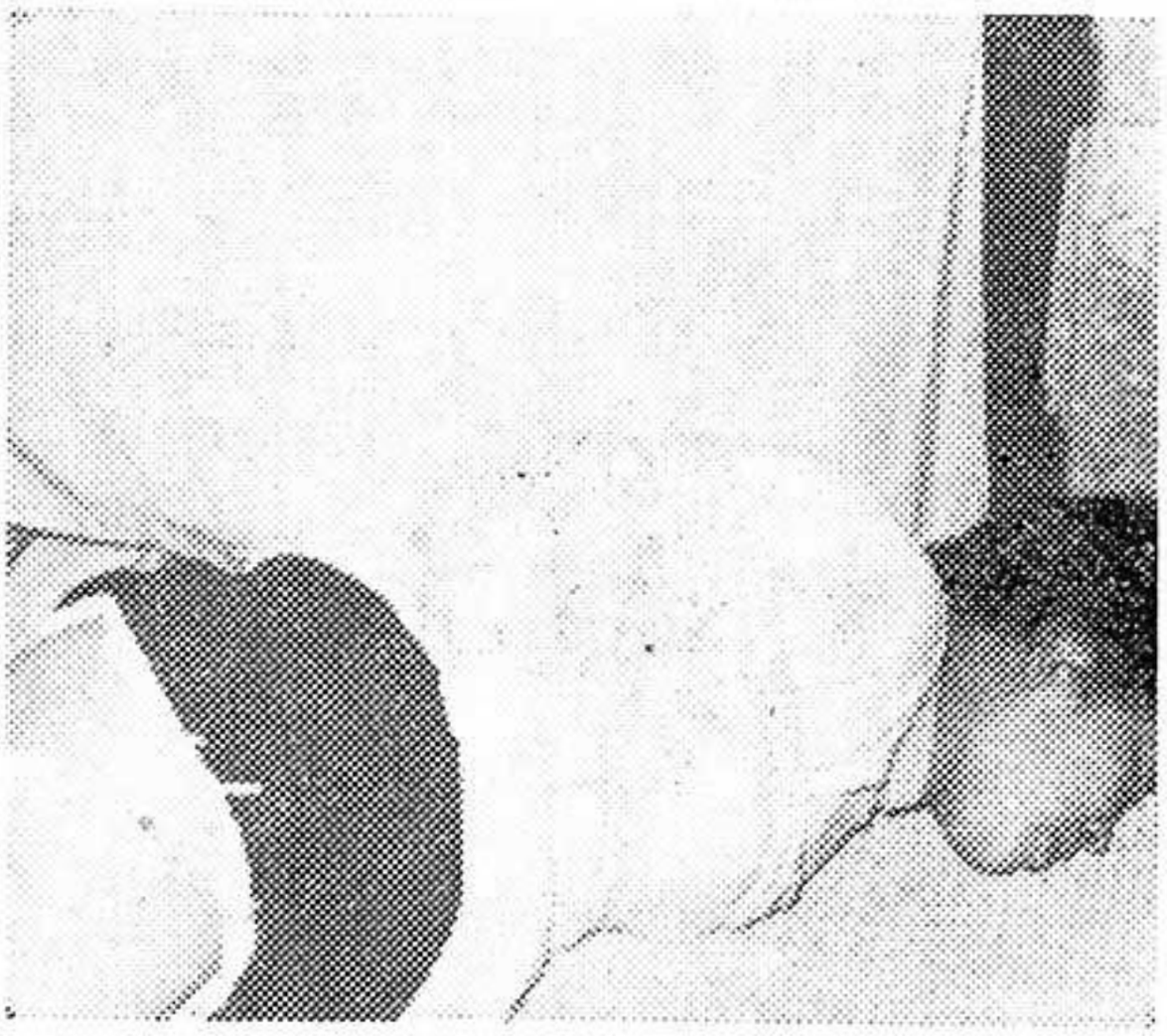
激しい鴛鴦の戯れを眼前に眺めた余波が尾を曳いて、前日に引続いて妻に激しく求めた。午前二時を過ぎた頃、私の興奮はさめ、ぐったりと伸びた侭の、半ば夢見心地で睡魔に襲われていった。

眼が醒めると、赤々と朝の陽の光が窓からさし込み、午前八時を廻っていた。

帰阪は、松山港に夜の十二時前に寄港する往きと同じ観光船の〝ゆふ丸〟に予約してある。それだけに今日の一日は長い。

越路氏は、昨夜別れ際に是非もう一度、今日の数刻を倶に過ごしたいと熱望していた。店の方に終日居るから、折をみていつでも電話してと言う。昨夜のプレイで既に飽和状態であったが、彼の懇望もあり、私もう一度、電話する気であった。

夕方頃まで、高縄半島を一周する気であったが、そこも憶劫になり、チェックアウトの時間を超える迄ゆっくりして宿を出る。観光巡りも、松山市内だけに絞ると、そう多くもない。昨日、通った奥道後への道をとり、その途中にある石手寺へ立ち寄る。弘法大師が石を手にして誕生したという、いわれの寺に和讃のテープが、のどかに流れていた。とって帰して二分足らずのロープウェイが、見ようによっては霊柩車めいてみえ、リフトで昇る人々を眺め乍ら頂上に降り立つと、松山城が春霞の青い空に屹立している。旅をすれば必ず城を求めて立ち寄る、私の城好きを知っていて、妻は、ゆっくりと私に、つき合ってくれた。



伊予の城に天守閣の風格は乏しく、豪勢な大名の大邸宅めいた様相や構えが、一風変わった印象を与えた。これは戦時中の城というより、平時の暮しにふさわしい城のように私には思えた。

名物の坊ちゃん団子、五色素麺、薄墨羊羹など、土産物を買い整えたあとは、午後一時に、風流極道軒氏と大街道街の喫茶Mで出会う手筈になっていた。彼に訪松の連絡の葉書を出しておいたら、松山まで出て来てくれたのである。初の出会いであったが、彼の方ですぐ私を見つけてくれた。そばが名代という店の二階へ昇り、民芸風の桝席で、うどんすきの会食をして、奇クを中心の四方山話に華が咲く。

詩を愛し、風流を論じ、時代を考証し、縄の伝授にまで話を飛躍させる極道軒氏は、半面、青年の如き夢多き多感な紳士であった。私達は始めて出会ったにもかかわらず、まるで十年の知己の如く語り合い、妻は、せっせと喰べ乍ら、私達の会話を微笑ましげに見守っていた。彼の呑みっぷりは豪快である。忽ち十数本の銚子が机上に立ち並び、尚も話題は尽きるところがなかった。細い華奢な体に似合わず酒は強く、正義を愛する風流の士であった。

再会を約して私達は別れると、酒の酔いさめるまで、大街道街から銀天街へと散策をつづけた。歩き疲れて喫茶で時を稼ぎ、私の顔から酒気の赦らみが消え、どうやらもう大丈夫とモータープールへ戻り、そこから越路氏の店へと電話すると、待ち兼ねていた様に彼が出た。

景子に夕食の準備をさせてあるから、是非立ち寄って欲しいと、店の位置を精しく伝えてくれた。うどんすきの飽食で満腹であったが、彼の好意を無にも出来ず、電話できいた店の位置の説明を、思い出し乍ら車を走らせて、午後五時過ぎの、あわただしい折柄、店舗にやっと到着する。彼は、そそくさと店員に残務をいいつけ、伊予絣の着尺らしい反物の包みを、妻に手土産だと手渡して助手席に乗り込んだ。

昨夜は宿の借着の侭の姿で、タクシー任せで夜の街並みを走ったが、今、自分が運転してゆく松山市内の道は、すべてが未知のように思えるのであった。

彼の指図通り走って、見覚えの家に近づいて、どうやら記憶の断片が、蘇ってくる。松山観光港までは、車で十数分の距離のところに彼の家はあった。私は再度、彼の家の門を潜った。妻は場違いめいた面持ちで、ついて来たが、如才のない越路氏の歓迎の言葉に、どうやら腰が落着いたらしかった。

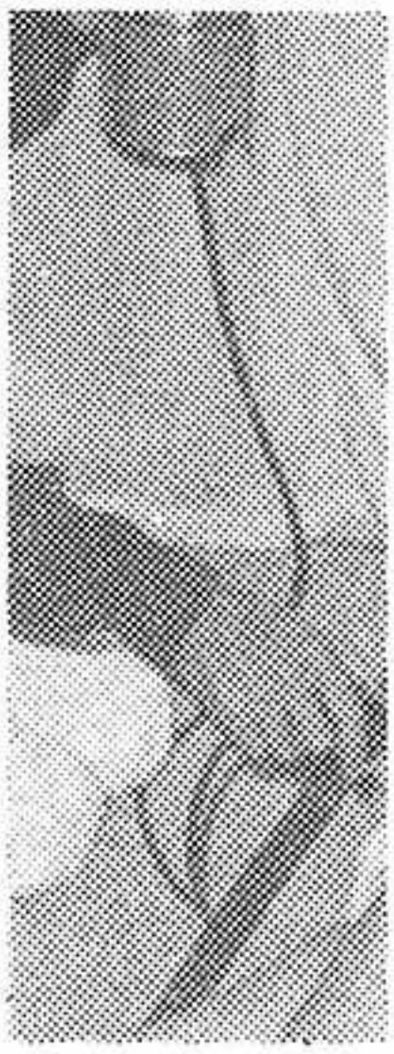
景子は昨夜、大胆奔放な痴戯を繰り拡げた気恍しさもあってか、ややこわばった表情で何とはなく私から顔をそむけるようにしていた。憶い出せば、羞恥の塊りがこみ上げてくるのであろう。初対面の妻との挨拶にも、何処となく硬さはとれなかった。

早くから沸かしていたらしい風呂を奨めら

れて、遠慮なく私達は入れて貰う。湯から出て、彼の浴衣を拝借し、床の間の食卓へと導かれてくると、彼女の心尽しの料理が、机上狭しと並んでいた。海が近いせいか、新鮮なハマチやイカの刺身、海老の天婦羅、茶碗蒸しなど、すべては彼女の手料理であった。

再び酒が机上を往来し、妻もすすめられる侭に枡酒をのみ、景子も又、健康そのものの浅黒い頬を、ポッと酒気にほてらせていた。放談しながらの食事であったが、最後の茶をのみ終わっても九時前で、松山港に一時間前に到着するとしても、二時間ばかり余裕があった。

彼は、さりげない口調で夫婦の交歓プレイを望んでいたが、心の用意のない妻には、その意志もなく、私にしても、もう二時間すれば、車をかって松山港へと走らねばならぬかと思うと、慌しいひとときの間に、そうした心の余裕は持てなかった。



彼は残されたこの二時間を有効に使いたいらしく、しきりにプレイに私の心を走らせようとして、何かと興味を惹くような話題を見出しては持ちかけてくるのであった。SMプレイとはいえ、昨夜の様な、彼のM性を満足させるプレイは、何かもう沢山だという気がする。

妻は、追々と露骨に迫る彼の言葉に、内心辟易したらしく、そっと立ち上がると応接間へと遁れ、酔余のひとときの時間待ちに、彼等の愛のアルバムや、女性週刊誌に目を通し始めていた。

彼にとっては、このまま放談しながらの食事で終わるのが頗る惜しいらしく、根よくプレイへと私を勧誘するのであった。

「ところで、辻村さんはアレを縛っておいて下さい。浣腸専門の部屋へ景子をゆかせますから」

浣腸専門の部屋は可怪しいと思ったら、それは茶の間の事であった。慌しく片付けたのに、かなり興味を、おもい想念に、私の心は動揺から景子に浣腸を試みてやらせますよ」

「強引なんですねえ。そうだ、この機会に、私に奥さんを縛らせて呉れますか」

「ええ、望むところですよ。景子は喜ぶでしょう」

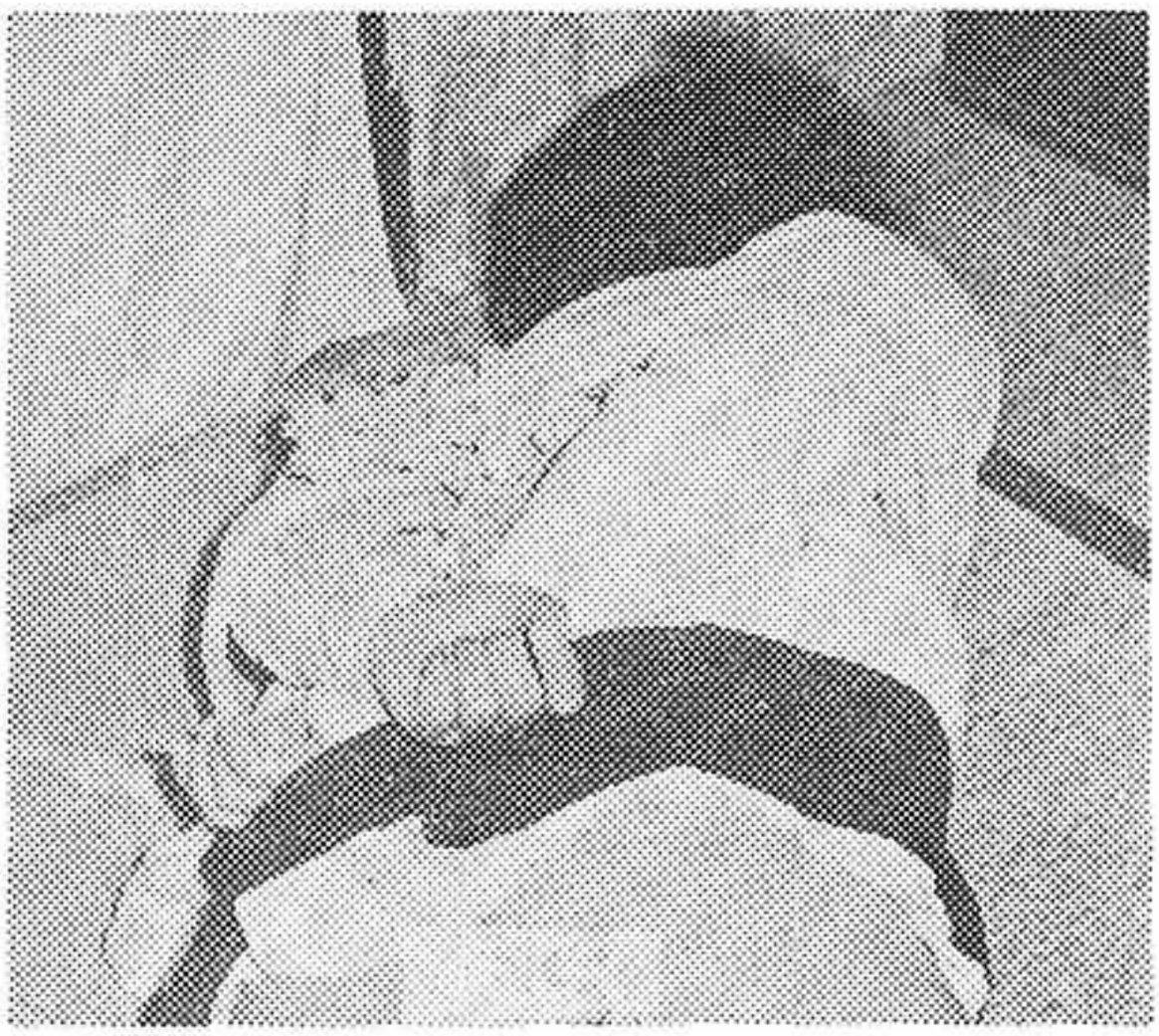
喜ぶという言葉に、奇妙なニュアンスがあった。彼は、景子が昨夜、パントマイムで示した奔放な姿態に、鋭敏に気付いていたのかも知れない。

「さあ、善は急げだ。こうなると一分一秒が惜しい。すぐ準備をして来ますから、辻村さんはアレを縛っておいて下さい。浣腸専門の部屋へ景子をゆかせますから」

浣腸専門の部屋は可怪しいと思ったら、それは茶の間の事であった。慌しく片付けたのか、食後の跡は、とり払われ、机も立てかけてあった。上敷の敷いた三帖の茶の間は、すぐ板張りの台所へと続いていた。窓のカーテンのみでは覗かれる懼れを考えてか、更に上から水色の幕をピンでとめてある。

流石に浣腸の場合は、不用意の排泄を考え座敷では実施しないらしかった。

台所で片付けものをしていた景子は、茶の間へ現われた私をチラッとみて、躊躇っている風であったが、夫に命じられていたのか、



濡れた手を拭うと、気まり悪げに、うつむき加減で私に近寄って来た。数条の縄が、人待ち顔に茶の間の片隅に積まれてある。

「縛っていいんですね」

「ええ……」

うつむいた侭、微かにうなずく。もじもじと指を絡ませているのは、心の相剋と戦っているらしかった。

昼間の暖かさに比べて、夜になると冷えてうすら寒かった。景子はカーディガンの下に薄めの毛糸編みのブラウスをつけていた。全裸にして縛りたいが何故ともなく心が、ためらう。命じたら、懼らく裸になる覚悟をきめていたに違いなかったが、昨夜の私に対するパントマイムの協力振りを、まざまざと思い出し、心の慌しさもあって、脱がすに忍びず、黙って縄をとり上げると、着衣の上から、太縄で、かなり犇々と私流に縛っていった。（ロマンチックなフェミニストの辻村よマジメにやれッ！）と、そんな声が大向こうから、かかりそうな、私のプレイの甘さであった。潔く私に縛られた彼女の心の奥底には、或いはSMに調教された習性が、奇クを通じて、私という一人の人間に対する、仄かな憧憬となって、その態度に現われていたとしても、その不貞をなじる権利はない。SMプレイという異常な体験を通じて、時によって女は、或る種の均衡を失った、不意の情感を抱くのは当然であった。私はいつしか、縛った景子を柔らかく抱きしめていた。甘美な息づかいが、私の首頸を快く撫でた。

「痛くない？」

「ええ、短い時間なら、辛抱出来そうです」

「よく浣腸されるの？」

「私は余り好みませんけど、主人の気が向いた時は仕方ありません」

「そのうち、好きになるのじゃないかな」

「分かりません、夫との短い会話――。フト愛縛り終わったあとの短い会話――。フト愛」

隣の情きざしてみるみる顔面を紅潮させてく頬にくちづけると、ハッとしたように彼女は私をみつめた。

双眸をうるませてあれば、二人きりでプレイしてみたい気がするよ」

言ってはいけない言葉であったが、反応を確かめるように囁くと、

「……」

返事は還らず、景子は無言で凝っと私をみつめた。所詮は二度とは会えぬ人かも知れないっ。旅のゆきずりの仮初めのプレイであっても、そこはかとなき情感と、心の交流が、私と景子の間に流れているように思えるのであった。

その時、満々と液をたたえたイルリガートルと、エネマシリンジ、ビニールパイプ、洗面器などを両手に抱えた、越路氏が入って来た。パッと離れると不自然なので、今、縛り

終わったが如く、縄のしまり工合などを確かめた風によそおい、私はそっと離れた。彼は医師の着る白衣を身につけて、すっかり医者気取りなのが、いかにも茶番めいて、おかしかった。

「おや、服の上から縛ったのですか？」

案に相違したという面持ちで、彼はマジマジと私をみつめる。辻村らしくもないと言いたかったのであろう。

「ええ、夜の風が冷たいですし、浣腸なら全裸でなくてもいいと思いましてね」

「それもそうですが……」

稍々不満げに応えて、それでも彼はイソイソと景子を抱き、その緊縛ぶりを、しみじみとみつめて、

「やはり、辻村流は違いますね。迫力が段違いですよ。どうだ、景子。辻村さんに縛ってもらって嬉しいだろう」

と上気嫌である。在りきたりな縛り方でも私という人間に対する潜在意識で、よく見えるものらしい。景子は無言の侭、立ちつくしていた。

「さあ、浣腸して下さいというのだ」

逡巡していたが、細い声で、

「ハイ、浣腸して下さい」

「ハハ、よしよし、これからたんまりと浣腸してやるぞ」

プレイづいた越路氏は、さも愉しくてたまらぬ様に、矢庭に景子をその場に押し倒すとスカートをパッとまくり上げ、パンティを腿へ引き下げると、むき出しになった双臀を、平手で軽くパチパチと叩き、イルリガートルの嘴管に唾して、水止めを握った手を近づけていった。

既に注入が始まったのか、高々と片手で揚げたイルリガートルの液瓶から、液体は減量しつつあった。

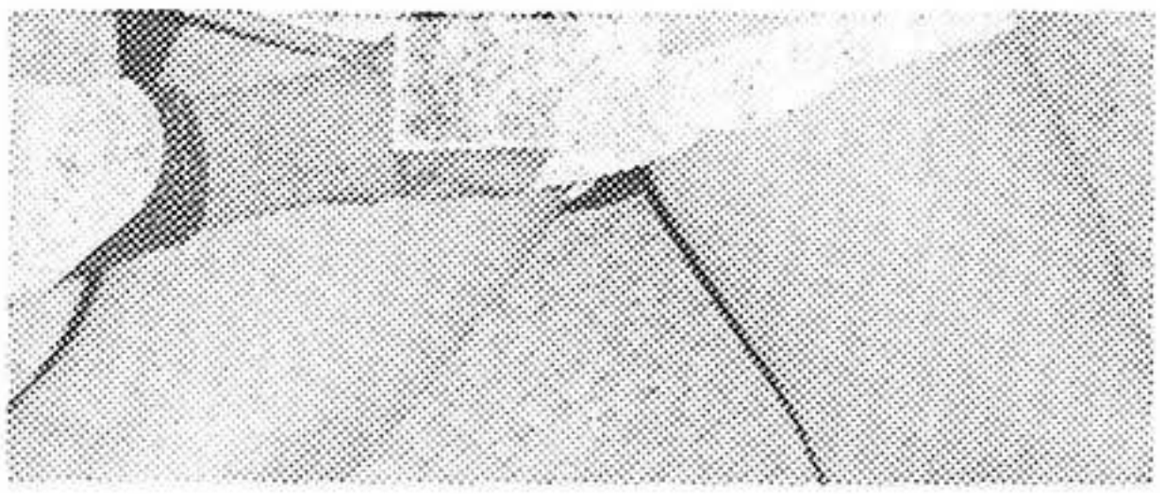
「液は何ですか？」

「石鹸液ですよ。洗面器に補充分もありますが、エネマで注入してもよし、ビニールパイプもよしです」

「貴方に浣腸趣味まであるとは知りませんでしたよ」

「いうなれば、これもSMプレイの一環でしょうかね。やって見れば愉しいものですよ」

越路氏は愉しいかも知れぬが、注入を受ける当の景子の眉間に、嫌悪と苦痛が刻み込まれていた。縛られた身を微かに悶えさせて、彼女は唇をかみしめ、じっとこのプレイに耐えているようであった。慌てて、私はカメラ



をとり上げ、その刻々の表情を捉えて行く。

液瓶が半ば減量した頃から、注入の速度は弱まってくる。彼はエネマに交換すると、一方を液瓶に投げ込み、球をぐっと握りしめ、チュルチュルと、微かに液の走る音に耳をすませながら、執拗に注入を続けていった。

洩れた液が、パンティや、畳を濡らしていたが、彼は一向、気にかける風もなく、作業をつづけていた。補充の洗面器の液も彼女の体内に吸収されていった。二リットル半は、確実に景子の腸管内に満ち満ちていた。たくし上げたスカートで蔽われた腹部は、かなりの膨らみをみせているに違いなかった。

膨満の不快に、苦悶の喘ぎが、遂に彼女の唇を裂いて流れ始め、それは次第に切迫した呻きに変わっていった。

じっと見下ろす越路氏の脂光りのひたいに

うっすらと汗の粒が浮いていた。その顔は生き生きとした嗜虐の歓びにみなぎっていた。

Sにもそれなりに、快楽を見出している事実に、私は形容しがたい驚きを感じると共に、下半身を曝して苦悶する景子の姿に私も又、いつしかジーンと心に疼くものを自覚していた。

「SもMも、所詮は表裏一体ということを、私は越路さんのプレイで、つくづく感じましたよ」

「案外、夫婦プレイには、それが多いのじゃないでしょうか。いずれ折をみて、同好の士と交歓プレイをやりたいと思うとります」

語る越路氏の表情は真剣であった。

「どうです、辻村さん。景子の苦悶する羞恥の姿を、あなたの奥さんにお見せしては」

「さあ、見るでしょうか」

「いや、見せて上げて下さい。私は奥さんのその時の感情の起伏をみつめてみたい」

彼の強引さに断わりかねて、応接間へと行き、妻にその旨を告げると、いやと首を振ったが、越路氏のたっての要請だからと納得させ、しぶる妻を伴って茶の間へと引返していった。

打ち伏して剝き出しの臀部をくねらし、苦しげに肩で息する景子の姿を、襖ごしにチラリとみやり、案外平然としている妻の様子を越路氏は感嘆の面持ちで、じっと見つめていた。

私の様な異能人間と一緒になって、既に銀婚式も過ぎた妻にしてみれば、プレイについては既に知り過ぎる程知っているし、過去、数えきれず私のSMの実験台になってきていた。今更、着衣の浣腸後の排泄をこらえるシーンに、心動かす妻でないことは、私も先刻承知であった。妻は越路氏に軽く会釈して戻っていった。

「いや、驚きました。流石に辻村さんの奥さんです。平気なんですかね」

「今更、どうってこともないのでしょう」

そうはいったものの、私も妻の平然さには内心、驚いてはいたのである。心動かす妻でないとしても、幾許かの反応は期待していたのであった。

景子は必然的な排泄感に、耐えに耐えている様子であったが、いよいよ限界を感じたのか、恥かしげに訴えた。事実、見るも苦しげであった。二リットル以上をのみこんで、もう五分近い時間が経過していた。打伏せになって、尚一層圧迫される腹部の不快の充満さは、景子の最大の忍従をもってしても限界に達していた。グルグル、グルグルと、腸管内で液の流動する異様な音が、判っきりと私の耳にも入った。

越路氏と私と二人がかりで景子を抱き起こすと緊縛の姿のまで彼は板の間へ連れてゆき幼児用の、動物に模して作った便器をとり出してきて、しゃがませたのであった。

左右から排泄の瞬間を窺う男達に、景子は羞恥と屈辱にまみれて顫慄し、撫然として顔を落とした。そこにはもう、羞恥を飛び越えての嫌悪が、まざまざと走っていた。

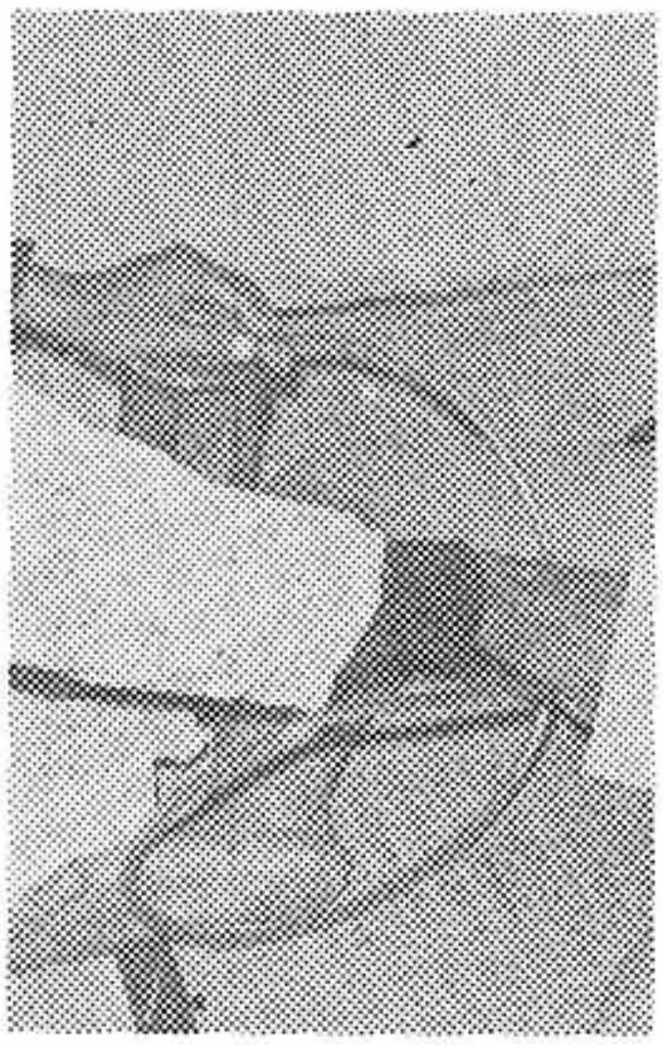
「さあ、早く……」

越路氏は、臀部に平手打ちして急がせる。

「ああ、苦しい……でも」
「構わない、やるのだ」
「お願い――二人とも、あちらへ行って」
「ダメだ。早くしろ」
「許して……」
唇を顫わせて景子は哀願しても、越路氏の嗜虐の感情の究極は、そこにある。今はもう一縷の望みすら絶たれた彼女は、固く眼をつぶり、羞恥の汚辱にまみれて、激しい澱音と共に、一瀉千里に撒き散らしていった。
特有の異臭が漂う中で、女の臀部は怨めしげに打ち震えていた。
浣腸プレイに屈辱と羞恥の塊を吐き出して景子は顔も挙げ得ず、消え入りたげに、豊満な肩を落として、後手の十指を、きつくきつく握りしめていた。

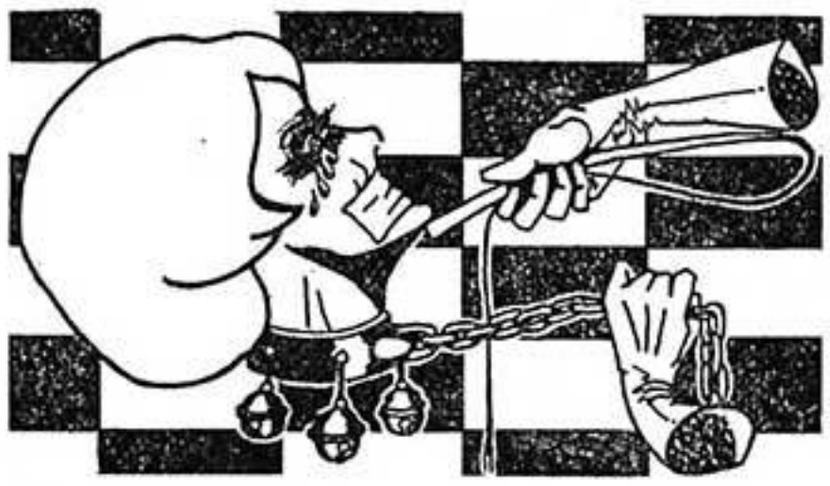
×　×　×

一等船室に落着いて、船窓から眺める深更の松山港は、微かに佗しい灯をまたたかせて春もやの中に暗く埋もれていた。
同室の二人の先客は、既に上下共カーテンを閉ざして眠りについているようであった。
午前零時五分前、港を出帆した〝ゆふ丸〟は次第に暗黒の海上へと遠ざかりつつあった。
「嘸かし愉しい思いをしたのでしょう」



皮肉でない妻の小声に景子の面影が、ありありと、甦って来た。家を出て車に乗り込む時、そっと交した彼女との握手を、越路氏も妻も気付かなかった。女の指先に万感の力がこもっていたのを思い出しつつ、
「ウン、まあネ。お前は、どうだった?」
と、さりげなく問い返す。
「愉しいといえば愉しいし、独りきりの時間があって、物足りないといえば物足りないようですわ」
「これも今度の旅のスケジュールの一つさ。しかし、浣腸シーンを覗いて、案外平気そうだったじゃないか」
「あんたの女房でしょう。あれくらいでビックリしていたら、越路さんの手前、あんたの沽券にかかわると思って……。だけど、本当は内心、ドキドキしていたの。一緒に並んで浣腸されやしないかって。でも、あんたならそんなことといい出し兼ねないから……」
私は黙って苦笑した。妻は妻なりにプレイに心を走らせていたのを感じて、いつか似た者夫婦になっていることに、安堵に似た微笑ましい喜びを覚えるのであった。
「さあ、そろそろ眠ろうか。すごく疲れた」
「ええ――」
と、うなずいて、しばらく部屋の様子を窺っていたが、
「眠っている人達は、新婚さんじゃなさそうね。靴がどちらも中年風の男靴ですわ。下段のベッドで一緒に寝たら狭いかしら」
往きのアベックを思い出したのか、妻はそう言うと、柄にもなくポッと頬をそめて、はにかんだ。
「寝てみるか――狭いけれど、寝られぬこともないだろう」
「何も出来ないわね」
妻は若やいでそう言うと、ヘヤーのかつらを脱いだ。
ゆふ丸は滑るように、夙いだ夜の海を走りつづけている――。

――(了)――



カット・矢川祥彦

# 踏みにじられた夢

## ――交換プレイの現実？――

山形　阜地

最近の誌上では、交換プレイを希望する人達の投書が多いようです。私もその内の一人で、一月号の読者通信に呼びかけを載せて頂きましたが、仲々、良い相手には恵まれませんでした。

ここ二年ほど、私のプレイの相手をしてくれているU子が、いよいよ今年中に結婚する予定であるだけに私は焦り、つい無理をして交換プレイらしいことを二回行なった？　のですが、その結果〝交換プレイの成功〟に類する話は何か作りごとのように思わざるを得ない気持を味わされたのでした。

そこで、このような気持にさせられた二回の経験を報告し、相手が悪かったといえばそれまでですが、同希望者の御意見を伺いたいものと思います。

最初は山形市のO氏宅で行なったプレイのことですが、私は常々から、何かテーマーを作って、それに沿ったプレイの進行を好んでおります関係上、その時のテーマーを、酒席での集団による羞恥責め、というつもりで行なおうとしたのでした。というのも、私のプレイ・メイトU子が、いよいよ今年中に結婚するかの若者と一緒に酒を飲み、相当のワルサをされたという話を聞き、異常な嫉妬と興味を感じていたからなのです。

ところが、最初から酒が入りすぎ、三文映画にみられるような芸者嬲り程度のことで、一人を除き、女を含めた他の三人は、私がその気分を出させるべく努力したにも拘らず全然反応なく見事に失敗に終わりました。しかし正直いって、この場面は私もあまり期待していなかったプレイの相手で、失敗のショックは殆どありませんでした。

問題は二回目のことです。

相手は前記の場に同席していて、ただ一人プレイ意欲をみせた人で、小さい乍ら、工場を経営するT社長です。三年ほど前からの奇クファンだそうで、プレイ相手も居るとのことで、交換プレイの話は一挙にまとまりましたが、互いにその時が初対面ですので、一応次のようなことを確認し合いました。

責めは交互に行なうこと。部屋は隣合って二つにすること。絶対に体を、傷つけないこと。浣腸、剃毛、ＳＥＸは避けること。

この相互の諒解事項に加えて、私が胸をはずませたのは、当日の私達の模様を総べて写真に撮ってやろうという先方の申出で、写真技術のない私には有難いことでした。

いよいよその当日、約束の天童温泉Ｉ荘に私達が着いたのは、約束の時間より一時間程遅れ、申訳ないと思っていましたところ、T社長達は、更に一時間も後に来ました。

そして、到着するや否や「時間もあまり無いから、すぐ始めよう。私が先でいいでしょう」というのです。

彼は四十才前後で、私より十才は、たしかに年上ですが、何か会社の上役から押しつけられたみたいな感じで、私はＯＫしました。私としては、プ

レイに入る前に四人がもっと打ち解けたかったし、気持の通じ合うムードを盛り上げる時間を持ちたかったのですが……。

U子も、ムードのないプレイは好まないのですが、性急なT社長の促しぶりに困ったような顔付で、しぶしぶ彼に従って隣部屋に行ったのでした。

彼の連れである女性は、U子より年上とみえる二十六、七で、やや細身ながら、セーターの盛り上がりは相当なものでした。

しばらくして、隣の部屋から「イヤー」とか「アー」とかいう悲鳴と、何かで打つ音が聞こえたかと思うと、「山形君もT子も来いよ」とT社長が呼びました。私はとび立つ想いで隣室へ走りました。

そこに見たU子は、ベランダの方から障子を抱くようにして縛られ、不安定らしく障子がガタガタ揺れていました。そしてU子の乳房が、障子枠の間からつかみ出されており、下の方の障子紙が一カ所破られていました。

その姿でU子は、T社長から即席のテレビアンテナ鞭で打たれたり、タバコの火を押しつけられたりしたらしく、その責め痕がU子の肌に、ありありと、ついておりました。

体に傷をつけないという申し合わせは最初から破られたわけで、この時の火傷の痕は、まだU子の太腿から消えていませんでした。

その後、一段落したら呼ぶからということで、私だけが追い出された形になりました。

いらいらした気持で三、四十分も待たされ、ようやく呼ばれた時に見たU子は、控えの間と奥の間との境に持ち込まれた、ベランダの椅子に、開股縛りにされていました。そして丁度、体を上下に割るようにして、腹の辺りにシーツが吊り下げられていて、U子からは見えないようになっている下半身の方に、T氏と女性が居るようでした。

私は、涙をためて見上げるU子の肩に手をかけて、私が入ってもともせずに続けているU子の手を取るなり旅ろ想像しておりました。

「シーツは焦がすなよ瓶じゃ駄目なのね」なと時に、U子が悲鳴をあとで聞いたところイブ責めも受けたそうしかしまずここまでして……という意気込館をとび出してしまいました。

あの日、私はいろいろと案を練って、楽器掃除用の羽根、細身のローソクの束、バイブ等の用意をしていたのですが、それらを使用のが本当ならば、いつか掲載されると信じるこの告白を読まれることでしょう。誠意を持って交換プレイを望んでいる者の夢を踏み躙って、貴方は平気で居られるのでしょうか？猛反省を促します。

せてやるからというので、ついて来ただけなんだから……」

余りに違いすぎる話に、私はT社長を見ましたが、彼は知らん顔です。女は更に言葉を続けましたが、

「そりゃあ、もしかしたら乱交パーティみたいになるかもって、いわれたことはいわれたわ。でも、あんなヘンなことは絶対イヤッ」

と、とりつくしまもありませんでした。

それに、肝心のT社長までが、

「本人がイヤというんだから仕方がない。まあ、たの機会でどうだろう」

と、ぬけぬけといい出す始末でした。

私はカッとなって、U子の手を取るなり旅

あってもプレイであるばいえそうですが、そ弁解の余地はない筈です。

交換プレイであるからというつもりで、U子の縄が解かれた後、私がT子なる女性を部屋に来るようにと誘ったところ、その返事にびっくりさせられたのです。

「イヤヨ！　あんなこととされる理由はないわって、貴方は平気で居られるのでしょうか？よ。わたしはただ、T社長殿、本誌ファンであるという

カット・緑　JOE

懸賞入選創作

# ペット

（下）

銀河三郎

## 鬼のようなパパ

「あたしだって、女の子よ。どうして私だけが、みんなやってることをしちゃあいけないのよッ！」

と、あたしはうつ伏せのまま、必死でいったの。でもパパ、やっぱり鬼だった。

「いけないんだよ。お前は女の子じゃあないんだから――」

「じゃあ、あたしは、なんなの――」

「お前は胸がふくれて、女の服を着て女のことばを使ってはいるけれど、ほんとは男なんだよ。女の子ではないんだ。だから、吉川っ

て男とつきあうのはパパが許さん」

「じゃあ、あたしは一生、男の子を好きに、なってはいけないというの？」

「そうだよ」

とパパは、いった。

「お前には、パパがいる。それで十分じゃあないか」

「いや。そんな生活、いやだわ」

と、あたしは泣いた。

「あたしは女よ、女の子よ。女の子としての幸せがほしいわ」

「だから、それはパパがあげる」

パパは大きな注射器みたいなものを机の上の箱から、とりだしていた。それに液体を入れると、パパはそれを、あたしに見せた。

「注射は、いやッ」

あたしは、すねていった。

「これは注射なんかじゃないよ、浣腸器というものだ」

パパはそういって、それを持ったまま、あたしのおしりのほうに回ったの。

「いやっ、なにをするのよ。いや、いや、いやよッ」

奇妙な異和感に、あたしは叫んでいた。しかし、あたしはパパから、のがれられはしなかった。

生あったかいものが、あたしの体内に次々と流れこんできた。

いつか、あたしは、あえいでいた。

「いやっ、パパ、変なことよして――」

あたしは、うごめいた。

くなっていた。

「いやッ！」

と、あたしは、そのなんともいえない切迫感に強く一声、叫んだ。唇から一条のよだれが流れ落ちるのを感じた。

次の日、あたしは吉川君やクラスの子の顔を、はずかしくてまともに見られなかった。その日、あたしは一日中ぼんやりしていて、先生にあてられても、とんちんかんなことを答えたりしてクラス中の失笑をかった。

その笑っている中に吉川君がいたことは、あたしを一層みじめにした。

吉川君の一緒に帰ろうという、さそいを無理にけって、淋しくひとり、帰り道の橋の下を通る電車を見ていたら、急にあたしは死にたくなった。

フラフラッと、あたしはそこから飛びおりようとしたが、でも、結局、自殺するのは失敗してしまった。

みじめで、とてつもなく自分がみじめで、あたしはセーラー服のまま新宿へでて、ゴーゴーホールに、はいった。

パパのわからずや。鬼。きちがい。

あたしはパパを、のろっていた。

うんと不良になってやる。うんとパパを心配させてやる!!

あたしは、セーラー服のまま踊り狂った。でも、みだらな昨日のできごとは頭を去ってくれないの。

ぐるぐるとおなかが鳴って、あたしは便意を、もよおした。あたしは、それを必死にこらえていた。

「パパ、あたしの体に、あたしの体になにをしたの――、一体なにを――、ああ、パパッ」

おねがい、トイレに行かせて――」

「そうはいかん。その吉川って子と別れるというのなら、行かせてやろう」

「いや、いやッ」

あたしは、おしりに力をこめてこらえていた。でも、まだ半分も解き終わらない時、波は、あたしの限界を越しかけた。それは、もう駄目だと思った。しかし、あたしは必死でこらえた。

「自分のことはぼくというんだ――。あたしじゃないだろう」

パパは、そういった。あたしは体中を真赤にして、のがれようとした。

「ぼくが、ぼくがいったい、なにをしたというのよッ」

「吉川って男とつきあってパパを裏切ったじゃあないか。別れるというなら便所へ行かせてやろう」

「いいわ、わかれる。だから行かせて。いうとおりにするから――」

あたしは、そう叫んでいた。波は引きかけている。だが、もうすぐ、前より一層強い波となって返ってくることは見えていた。

「そうか、いい子だ。お前はやっぱりパパの子だ」

とパパはいうと、ゆっくりロープを解きだした。でも、まだ半分も解き終わらない時、波は、あたしの限界を越しかけた。それは、じわじわと強くなるようだった。

「パパッ、はやくして、お願い」

動けるようになると、あたしは、あわてて立ち上がろうとした。でも、ベッドの上に四

つんばいになった時、
「ああっ、もう、もうおそい」
と、あたしは叫んだ。純白のシーツの上に、一度出はじめパッと汚物が散った。そして、一度出はじめると、それはとめどもなかった。
「パパ、見ないで、見ないで――」
あたしははずかしさに泣きながらいった。でも知ってるの。パパの眼は、じっとあたしを見つめていたことを……。
やがて、不思議な気持があたしを包みはじめた。それは、あのバレーの時の気持と似ているようだった。シーツの汚物の上を忘れてあたしは、あえいだ。
パパは何を考えたのか、あたしの上に、脱がせたセーラー服をかけてくれた。

## 男たち

あたしは狂っていたのだ。ゴーゴーホールで知りあった三人の男にさそわれるまま、真赤なスポーツカーに乗せられて、あたしは高速道路をドライブした。
「モーテルへ行こうか？」
うしろの席の髪の長い男がいった。
「金がねえよ」
運転席の赤シャツの男がいった。
「しゃあないなア」
ちょっと吉川君に似てる、一番親切そうな男がいった。
「どっか、さがすさ」
と赤シャツ。
「高速道路だぜ」
と髪の長い男。
「つっきらなきゃあ」
と吉川君みたいな男。
「なあに、どっかいいとこがあるさ」
この人たちが何を話してるのかわからないけれど、ドライブは少しも、おもしろくなかった。
「どこへ行くんです？」
「おもしろいところですよ」
と赤シャツが親切そうにいった。ちょっとしていると、車は、いきおいよくストップした。次の瞬間、シートが後に倒れ、あたしはひっくりかえっていた。
「やることをやっちまえばな」
「な、何をするの――!!」
あたしは始めて、自分が今、何をされようとしているかわかったの。でも、もうおそかった。三人の力には女のあたしは、とうていかなわなかった。
赤シャツの手がセーラーのリボンの下にもぐり込んだ。スカートがめくられた。そしてまず最初に靴がとられた。ハイソックスがとられた。セーラーが上からめくられて、頭から

パパ、パパ、ごめんなさい。あたしはパパのところへ帰るわ。吉川君とも別れるわ。あたしパパだけのものになるわ。だから許してね。パパ、――ああ、パパ。いつまでも、朱美をそばにおいてね。
車は、さびしい道に、さしかかっていた。どこかわからない場所にいるということは、あたしを、とっても不安にした。
「帰して、新宿に帰して」
「帰してやらあ」
乱暴な口調で、赤シャツの男が、どなるようにいうと、車は、いきおいよくストップした。次の瞬間、シートが後に倒れ、あたしはひっくりかえっていた。
「やることをやっちまえばな」
「な、何をするの――!!」
あたしは始めて、自分が今、何をされようとしているかわかったの。でも、もうおそかった。三人の力には女のあたしは、とうていかなわなかった。
赤シャツの手がセーラーのリボンの下にもぐり込んだ。スカートがめくられた。そしてまず最初に靴がとられた。ハイソックスがとられた。セーラーが上からめくられて、頭から

読者ギャラリー　『新入り虐め』　小川　茂正

らとられた。ベルトが外された。

「いやっ、やめて、変なことしないで」

ジャンパー・スカートがとられた。スリップ一枚のあたしに赤シャツがキスした。

あたしのその日の下着は、ブルー一色だった。赤シャツの手がスリップをむいて、ブラジャーのカップを押し下げた。

あたしは身をもんで逃れようとした。ちょっと赤シャツがひるんだすきに、あたしは赤シャツを押し返して、すり抜けた。しかし、あたしは吉川君みたいな男に、つかまれた。

「離して、あんたなんかきらいよ」

と、あたしがいった。

「きらいでけっこう。好かれようたア思っちゃあいねえよ、うすぎたないメスなんかにゃあな」

と、そいつは吐きすてるようにいった。ああ、これが、きっと吉川君の正体だ。これが、パパ以外の男の正体だったのねパパ――、朱美はパパのものになります。

あたしは力を抜いた。赤シャツの男の手によってパンティが取られた。

あたしは気がとおくなっていくのを感じていた。

「見ろ!!」

遠くで誰かが話していた。

「こいつは男だぜ」

「しかし――」

「なるほど――」

そうよ、そうよ。あたしは男よ。だからもう許して――。もう解放して――。お願いだからもうお家へ帰して――。

でもあたしは解放されなかった。あたしは男たちに様々なことをされた。男は三人しかいないはずなのに、あたしは十人の男がいるのではないかと思った。

――パパ、朱美は今、悪い男たちに犯されています。パパ、ああ、パパ――。

あたしは、パパに縛られている時の気持を思い出しながら、必死でパパの幻想を追いもとめていた――。

あたしが正気に還った時、草むらに泥だけで投げ出されていた。セーラー服と下着は泥まみれで投げ掛けられてたけど、パパに買

ってもらった腕時計とブラジャーと、一万円はいっていた、さいふはどこにもなかった。

## 三たびパパ

——あたしは、パトロール中のおまわりさんに保護された。

おまわりさんはわけを聞くと、すぐにパパに連絡してくれた。一時間ほどで青い顔をしたパパがやってきた。

「パパッ」

と、あたしパパにすがって泣いた。

「悪かった。みんなパパが悪かったんだ」

とパパは、あたしの泥まみれの破れたセーラー服をなでながら、いった。

「だから朱美、パパと帰ってくれるね」

「ええ、パパ」

あたしは涙のたまった眼でうなずいた。あたしは、パパの用意してきたツーピースに着換え、一時間にわたって調書をとられた。あたしは自分が男であること以外は、ありのままを答えた。

パパはあせっているみたいだった。あたしが取り調べられることが不安だったのね。でも、パパの瞳は今まで一度も見たことがないほど、やさしく光っていた。あたしは調書を取られる間中、痛いほどよくそれを感じていた。一時間後、あたしとパパは解放された。

あたしをささえて車に乗せてくれると、ぐったりシートに坐りこんだあたしに、パパはやさしくいった。

「朱美、許してくれ。パパのために長い間つらかったろう」

「いいえ」

あたしは、かぶりをふっていった。

「悪いのは、みんなあた——いやぼくだわ。あたし、パパがあんなにいってくれたのに、悪い人がどんな人なのか見抜けなかった。ごめんなさい、パパ」

「仕方のないことだ」

とパパはやさしくいった。あたしもパパを愛してるとやさしいパパを一度も見たことがなかった。

「この世の男という男がすべて悪人なのだから。今更こんなことをいいたくはないが、朱美、お前の本当の父親だって悪人だった。パパはお前をそんな男に育てたくはなかった」

「いいえ、ぼくはパパの子供だわ」

あたしは、すがるようにいった。車を運転しながらパパは、やさしくあたしをみた。

「そうだったな、朱美。お前はパパの子供だったな。——朱美、パパはこれからお前を世界中の誰よりも、しあわせにしてあげる」

「ぼく、今でもしあわせよ」

と、あたしはいったの。

「朱美、だがこれだけは信じてくれ。パパはお前を愛していた。信じてくれるね？」

「ええ、パパ」

あたしはうれしくて、湧いてくる涙をためて、うなずいた。あたしもパパを愛してるといいたかったけれど、声がでなかった。

馬鹿な朱美。ああ、ほんとに馬鹿な朱美。こんないいパパを裏切るなんて——。

「パパのためなら、あたし——」

と、あたしは小さくいった。

「ぼく、死んだって」

「死んでくれるね」

とパパがその時タイミングよくいったの。あたし、ええ、と胸はずませていったの。まるでパパから結婚の申し込みを受けたみたいな気持、あたしとっても幸せなの。

「わかってくれたんだね、朱美——」

とパパは、いった。

「パパが、お前をにくくて殺すんじゃあないことを——」

「朱美」

全裸で、家の地下室の壁にかせを使って大の字にはりつけられ、肩をあえがせているあたしに、パパはいった。とってもやさしい声だった。パパの手は電気ドリルのスイッチにかかっていた。

「覚悟はいいね、朱美」

「ええ」

と、あたしはいった。パパはやさしく、あたしを見ていた。

パパの瞳は、吉川君と公園のベンチで見た北極星のように輝いていた。

「朱美、パパもすぐ行く。二人でしあわせになろうね」

「ええ、パパ」

あたしは、喜びにふるえながら大きく、うなずいた。

パパの手が、思いきったように電気ドリルのスイッチを入れた。

「ああ、パパ、パパ」

あたしは体をよじって、うめいた。電気ドリルの先が近づいてくる。

パパは本当にあたしを殺す気かしら。いいえ、そんなはずはないわ。あたしを殺す気なら、どうしてあんなにやさしいの――？　愛するあたしを失うというのに、どうしてあんなに落ちついていられるの――？　でも、もしかしたら――。

ドリルの先が、ますます迫ってきた。

「ああ、パパ」

と、あたしは、いった。

「パパ、すぐ来てね。あたしひとりじゃいやよ――」

――完――

毎月確実に入手されるために
本誌予約購読者を募る
毎月二十五日確実発売！

一月分　1冊　三五〇円(送20円)
三月分　3冊　一〇五〇円(送共)
半年分　6冊　二一〇〇円(送共)
一年分　12冊　四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約講読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず〝現金書留〟にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約講読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約講読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に〈本号にて前金切〉の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とをお知らせ下されば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替』、発送人に返戻されます。

連載・アブ紳士行状記

# M派交友録

荒木高実の巻 (1)

鬼山 絢策

(18)

## 旅行先のハプニング

地方の新聞社では、スポンサーを招待して毎年、旅行をやっていた。

もう十年以上も前のことであるが、東北の新聞社の招待で青森、秋田方面を旅行した。約三十名の団体で、招待されたのは、出版社、薬品、電機、自動車等の会社である。

青森のねぶた祭を見て花巻温泉に泊った。一行の中に非常に目につく男が一人いた。ねぶた祭では、揃いの浴衣から白足袋、鉢巻の手拭いまでくれて、祭の一行に加わり、市内を練り歩いたが、そんな中でも、一人でおどけて愛嬌を振りまき、街の人や新聞社の連中からも喝采を浴びていた小肥りでオールバックの丸顔の男で、ロイド眼鏡の奥から、まるい目をキョロキョロさせて始終、冗談や駄洒落をとばしていた。

花巻温泉では、その男と同室になった。「よろしく御願いします」と差し出した名刺には「博通社特信部広報課長荒木高実」とあった。広告取次では一流の全社で、地方新聞関係を受け持っている人だと分かった。博通社なら私の会社とも、取引きがある。

東北の新聞社の招待旅行というと、朝から晩まで酒びたしにしてしまう。

飲める口ならよいが、私のような飲めない者にとっては、むしろ苦痛なくらいである。

花巻温泉では、芸者を二十人もよんでドンチャン騒ぎを始めた。何せ朝から飲んでいるのだから、座は最初から相当、乱れていた。

芸者の手踊りがはじまると、千鳥足で立ち上がった連中がワイワイと一緒になって、長唄の踊りが盆踊りと化してしまった。

その頃、はやり出した野球拳が始まる。そ

ういう時に、真っ先におどり出るのは荒木君だった。

野球拳に飽きると「尻角力」を始めた。

荒木君が若い十八、九の芸者を摑まえて、尻角力の、やり方を教えている。

一枚の座布団の上に背中合わせに荒木君と芸者が立って、お互いの尻で、相手を座布団の外へ押し出す遊びである。

荒木君は背は低いがガッチリした身体で、尻角力は強かった。三味線に合わせて、お尻を振っているが「ヨイのヨイ」でドンと尻をぶっつけ合う。代わる代わる芸者が出て来たが、みな尻ではじきとばされてしまった。終いには、客の中から、大兵の男が挑戦したが、コツがあると見えて、これも負けてしまった。ひと所で始まると、あっちでもこっちでもマネして尻角力が始まる。

最初、荒木君に負けた若い芸者が向こうの座布団で勝ち抜いている。荒木君は十人も抜いて、さすがにくたびれたと見えて、やめようとした時、若い芸者が、もう一回、と挑戦してきた。

「だめだよ。いくらやったって勝てやしないよ。キャリアが違うからな」

「勝ったら、どうする？」

「俺を負かしたらか。俺が負けたら、お前の馬になって、この座敷を三べん、廻るよ」

「ワア、面白い。やろう！」

「その代わり、お前が負けたら、どうする？　今晩、俺と寝るか？　タダでだぞ」

「ワア、イヤだあ――」

「そんなチョボイチあるか。なら、やめた」

「うん、いいわよ。寝床の中で馬にしてやっから。ウフフフ」

「ようし、来い。イザ、来たれ！」

荒木君は、尻をピョクピョクと振って構えみんな、ドッと笑った。

この勝負は簡単についた。彼女のまるいお尻に吹っとばされて、荒木君は、派手に転がり、座布団から二、三米、転がって、両足を広げてノビてしまった。ワアーッという大喝采である。芸者は手を叩いて、とび上がって喜んでいる。

「サア、約束だよ。馬になれ」

荒木君は大広間の真ん中に大の字になってノビてしまっている。芸者は傍へ来て、足でピシャピシャ叩いた。

「ホラ、走れ。ドウドウ」

「重いな、こいつ。意外にグラマーだな」

「んださあ。おれ、十六貫あるもん」

ドタドタ満座の中を這い廻る。誰かが、お祭に使った豆絞りの手拭いをわたすと、みい子は、それを手綱にした。

「やだなあ。小便芸者の馬になるなんて」

「言ったな、コイツ。自分から言い出しといて約束を破るなんて男らしくないよ」

みんなに、せっつかれて荒木君は、しぶしぶ四つん這いになった。だが、その顔は存外明るく、ニコニコ笑っている。

若い芸者は裾を、ちょいと捲って高々と足をあげ、

「よいしょ――」

と荒木君の背中に跨がった。

「みいちゃん。うんといじめてやんなさい」

姐さん芸者から声援がとぶ。

「ようよう、日本一ッ！」

と新聞社の連中は、はやしたてる。一人の芸者が扇子を持ってきて、みい子という若い芸者にわたした。

「これ、鞭よ」

みい子は、その扇子で荒木君の丸いお尻を

両膝で荒木君の太った胴中を締めて、

「ハイシ、ハイシ」

と、かけ声をかける。裾が、だんだん捲れてきて、白い張りのある太腿が、かなり上の方まで現われたが、みい子はヘッチャラである。

新聞社の連中の中からカメラを持ったのが出てきて、パチリパチリとフラッシュをたいて撮り出した。荒木君は平気で、ヨタヨタと這い廻っている。みい子は扇子を開いて頭の上に、かざした。見ると日の丸の扇である。

「ようよう、日本一ッ」

満場笑いころげて大喝采。お客の中からもカメラを持ち出してパチパチとっている。

荒木君は座敷を、ひと廻りすると、

「ああ、もうダメだ」

眼鏡が鼻からズッコケて荒い息を吐いた。

「だめだめ。三べん廻ると約束したろ。あと二回、廻れ」

「一ぱい、飲ませてくれ。水だ、水だ」

「馬に飼いばを、やっか」

芸者のひとりが徳利を持って出てきて、みい子にわたす。

みい子は腰をずらせて、荒木君の首を両股で挟んで、あごに手をかけてグイと、あお向けにさせた。

「ホレ、飲め！」

「おいおい、手荒にすんなよ。首が折れちゃうよ、荒っぽい女だな」

荒木君の口へ徳利を、あてがう。

「あ、だめだ。酒はもうだめだ。水をくれ」

「いいから、いいから。ホレホレホレ、お飲み」

「酒は、なお、息がきれちゃう」

「何でもいいから、飲め。ひとのこと、小便芸者だなんて……小便、飲ましてやっか」

ワアワアと、みんな大笑いである。

「キャァー」と嬌声をあげる。うつ伏せに倒れた、みい子は両足を大きく拡げている。その私も、おつき合いに、笑ってはいたが、内心、荒木君の勇敢さに驚いていた。私も馬になりたいが衆人環視の中では、とてもできない。

## ユーモアのある M

「キャァ、いやだあ、スケベェ！」

みい子は足をバタバタさせて、クルリと仰向けになって身体を起こした。

裾がパッと割れて、赤い腰巻から白い足が剝き出しになった。その足の間に荒木君の頭が、はさまっていた。

荒木君はヘラヘラ笑いながら、身体を起こした。また、皆は大笑いだった。

実に明るいユーモアに富んだ風景である。

男も女も皆、腹を抱えて笑い転げている。

「そおら、元気が出たろ。歩け、ヨタ馬ッ」

「何だか首ンとこがモジャモジャして、気色わるいな」

「コラッ、バカッ！」

みい子は扇子で荒木君の頭を軽く叩いた。

首へ跨がったまま、ハイシハイシと、しごいている。荒木君は、半周もしないうちに、

「ワア、だめだあ――」

と悲鳴をあげて、ガクンと頭を前へおとして、おじぎをするような恰好になった。

とたんに、みい子は前へつんのめって、ドタンと頭の前の方へ放り出された。

「キャァー」と嬌声をあげる。うつ伏せに倒れた、みい子は両足を大きく拡げている。その着物の中で、モクモクと荒木君の頭が動いている。

「キャァ、いやだあ、スケベェ！」

みい子は足をバタバタさせて、クルリと仰向けになって身体を起こした。

裾がパッと割れて、赤い腰巻から白い足が剝き出しになった。その足の間に荒木君の頭が、はさまっていた。

荒木君はヘラヘラ笑いながら、身体を起こした。また、皆は大笑いだった。

実に明るいユーモアに富んだ風景である。

男も女も皆、腹を抱えて笑い転げている。

「そおら、元気が出たろ。歩け、ヨタ馬ッ」

「何だか首ンとこがモジャモジャして、気色わるいな」

「コラッ、バカッ！」

みい子は扇子で荒木君の頭を軽く叩いた。

首へ跨がったまま、ハイシハイシと、しごいている。荒木君は、半周もしないうちに、

「ワア、だめだあ――」

と悲鳴をあげて、ガクンと頭を前へおとして、おじぎをするような恰好になった。

とたんに、みい子は前へつんのめって、ドタンと頭の前の方へ放り出された。

「キャァー」と嬌声をあげる。うつ伏せに倒れた、みい子は両足を大きく拡げている。その着物の中で、モクモクと荒木君の頭が動いている。

「キャァ、いやだあ、スケベェ！」

みい子は足をバタバタさせて、クルリと仰向けになって身体を起こした。

裾がパッと割れて、赤い腰巻から白い足が剝き出しになった。その足の間に荒木君の頭が、はさまっていた。

荒木君はヘラヘラ笑いながら、身体を起こした。また、皆は大笑いだった。

実に明るいユーモアに富んだ風景である。

男も女も皆、腹を抱えて笑い転げている。

「そおら、元気が出たろ。歩け、ヨタ馬ッ」

「何だか首ンとこがモジャモジャして、気色わるいな」

「コラッ、バカッ！」

みい子は扇子で荒木君の頭を軽く叩いた。

首へ跨がったまま、ハイシハイシと、しごいている。荒木君は、半周もしないうちに、

「ワア、だめだあ――」

と悲鳴をあげて、ガクンと頭を前へおとして、おじぎをするような恰好になった。

とたんに、みい子は前へつんのめって、ドタンと頭の前の方へ放り出された。

「キャァー」と嬌声をあげる。うつ伏せに倒れた、みい子は両足を大きく拡げている。その着物の中で、モクモクと荒木君の頭が動いている。

「キャァ、いやだあ、スケベェ！」

みい子は足をバタバタさせて、クルリと仰向けになって身体を起こした。

裾がパッと割れて、赤い腰巻から白い足が剝き出しになった。その足の間に荒木君の頭が、はさまっていた。

荒木君はヘラヘラ笑いながら、身体を起こした。また、皆は大笑いだった。

実に明るいユーモアに富んだ風景である。

男も女も皆、腹を抱えて笑い転げている。

「そおら、元気が出たろ。歩け、ヨタ馬ッ」

「何だか首ンとこがモジャモジャして、気色わるいな」

はドキドキするほど興奮していた。カメラで撮っていた一行の客が、座敷の中央から、まわりの輪の中に戻ってきたが、その男の顔は笑っていなかった。

やはり私と同じような興奮を抑えることができなかったのだろう。

こういう明るい滑稽な衣をかぶせたMのシーンは、たのしいものである。

映画も、こういう狙いを見逃がさず、いろいろなテクニックで捉えている。

その頃、清川虹子と伴淳の夫婦が（いや、もう別れていたかもしれなかったが）弥次喜多の喜劇映画に出演していた。伴淳は喜多さんで、弥次さんは森繁だったか、旅の道中先でふぐに中毒して、二人とも海岸の砂浜に首だけ出して埋まっている。ふぐに当たった時の療法だ。

喜多さんの女房に扮したのが清川虹子で、弥次さんの女房に扮したのは誰だったか忘れたが、女房二人、亭主が旅先で浮気してやしないかと後を追ってくる。

暗い夜の浜辺に女房二人がやって来て「あ、くたびれた」と、ふと見ると手ごろな石ころが二つ転がっているので、女房二人はその上に腰をおろす。これが何と弥次さんと喜多さんの頭なのである。男の方は女房二人がやってくるのを見て逃げようと思うが、首まで埋まっていて逃げることができない。

頭の上に女の大きなお尻がドッシリとのっかったので、二人とも苦しいが、声を出すことができない。声を出せば人間の頭だと分かって、女房に捕まってしまう。そこで重さをこらえる伴淳と森繁の顔がクローズアップされる。「ほんとに、どこへ行きやがったんだろうねえ」と女房二人は亭主の、うわさをする。森繁の頭に腰かけた女優さんの方は、そそとして足をそろえ、横坐りのような形で軽く腰かけている（だから、印象に残らず、名前も忘れてしまった）のだが、清川虹子の方は、本当の亭主の頭だから遠慮がない。両足を広げて、ドッカと尻をのせている。あのボリュームをモロに受けて目を白黒させる、伴淳の真に迫った珍妙な表情は、いまだに忘れられない。

これなども、Mを明るく巧みに利用した巧妙な場面だった。

荒木君の〝演技〟を見ながら、私は伴淳のこの喜多さんを想い出していた。

宴会が終わって私は麻雀に誘われ、二時頃部屋へ帰ったが、荒木君は、まだ帰っていなかった。うつらうつらしていると、三時頃になって荒木君が、ソッと足音を忍ばせて帰ってきた。

私が目を覚ましているのを知ると、荒木君はテレながら、

「どうも、ひどいめにあっちゃいましてね」

さっきの、みい子を、いただいてしまったのである。

「場所がらもわきまえず、あたりかまわず大きな声を出しやがるんでみっともなくてね」

「イヤ、あなたの勇気のあるのには感心しましたよ。私も彼女の馬になりたかったけど、とても、あれだけの目のある中で、やる勇気はありませんでした」

「いや、皆さんが喜んで下されば、それでいいんですよ」

「待って下さい。そう話を、はぐらかさないで下さい。しかも平気で写真まで撮らせてたんだから、大したもんです。実は私も、ああいう場面の写真を蒐集しているんです。さっきの写真が欲しいな。フラッシュを持ってれば、私も撮らしてもらったんだけど」

「あんなの欲しいですか。それなら、新聞社で撮った奴に話してあげましょうか」

「ああ、是非、お願いします」

とにかく荒木君は底抜けに明るい性格だ。だからMについて話すと、包みかくさず、自分もMの傾向にあることを話してくれた。ただ彼の場合、普通のMと少し異なっているところは、女性から屈辱を受けることを望む点は同じであるが、それだけにとどまらず第三者に見ていてもらいたいと言う欲望が強かった。

つまりマゾヒズムと、エキジビジョニズムとがミックスされているのだった。

「その見物人というのは、同性と異性と、どちらを好むのですか」

「イヤそれは、どっちでも、いいんです」

「では、その数は？　できるだけ多い方が、いいのですか。例えば、今夜のような」

「そうですねえ。多い方が、いいのかな。それよりも見物人の質の方が一番、大切かな。単的に言えば一番、見られたくない人に見られたいという欲望の方が、強いですね。例えば、女房とか、子供とか、母親とか、恋人とか、これはダメなんですね。それと、目か、といったところですね。しかし、これは欲望はそうであっても現実には困るから、まだ見せたことは、ありませんがね」

「つまり見ず知らずの大勢の人に見られるよりも知人に、知人よりも更に親しい友人に見られる方が、刺戟が強いということですか」

「そうです、そういう人を見るとそうです。そういう人を見るとしびれちゃうんだなあ」

「それじゃ、カメラのモデルになるのなんか好きでしょう」

「ウーム、好きですね」

「実は私はMの写真を撮っているんですが、協力して頂けますか」

「モデルの相手によりますね。ぼくには、特定の好きなタイプがあるんです。それは、いわゆる、美人と称するタイプには当てはまらないんです。例をあげると、西田佐知子、淡島千景、安藤孝子といった、全然セックス・アッピールを感じませんね。恐らく裸で傍へ寝られても、手も触れないでしょう。しかし、彼女等が美人であることは認めますよ」

「じゃ、好きなタイプは？　知ってるんですか」

「イヤ、舞台で見ただけですがね。あの子はすばらしい。だけど、あの子が、そんなことやるんですか」

「エッ？　知ってるんですか」

「玉井ひろ美という、ひとです」

「ああ、内外ミュージックに出ていたんでしょう」

「へエ、何て、ひとですか」

「実は、もう一回、撮影ずみなんです」

「へエー、驚いたな。あのひとなら、いいですなあ」

「じゃあ、東京へ帰ったら、改めて御連絡します」

ひと、そういうタイプですね」

しびれちゃうんだなあ」

ストリッパーといっても、ピンからキリまで、あるけど、これは一級品ですよ。歌も踊りも本格だし、第一、凄い美人で、グラマーなんです」

## 作家の勘

東京へ帰って、すぐ私は玉井ひろ美に電話

したが、留守だった。その晩は、内外ミュージックに出かけて見た。九時を、ちょっと廻っていたから、もう舞台を見るのは遅いが、ハネてから、ひろ美に会おうと思った。

もう切符売場は閉まっていて、小屋の前はガランとしている。何となく正面から入って行くと、

「あら、センセ」

何と玉井ひろ美が売店の前のソファに浴衣すがたで腰かけていて、声をかけてきた。銀杏返しのかつらをかぶって、メーキャップをしている。よくある手で、客席から舞台へ上がって行くらしく、出を待っているところだった。

「あ、ちょうど、いいや。ハネたら、あんたと会おうと思って来たんだよ。また、お願いしますよ」

「ああ、アレ？　いいわよ。いつ、やるの」

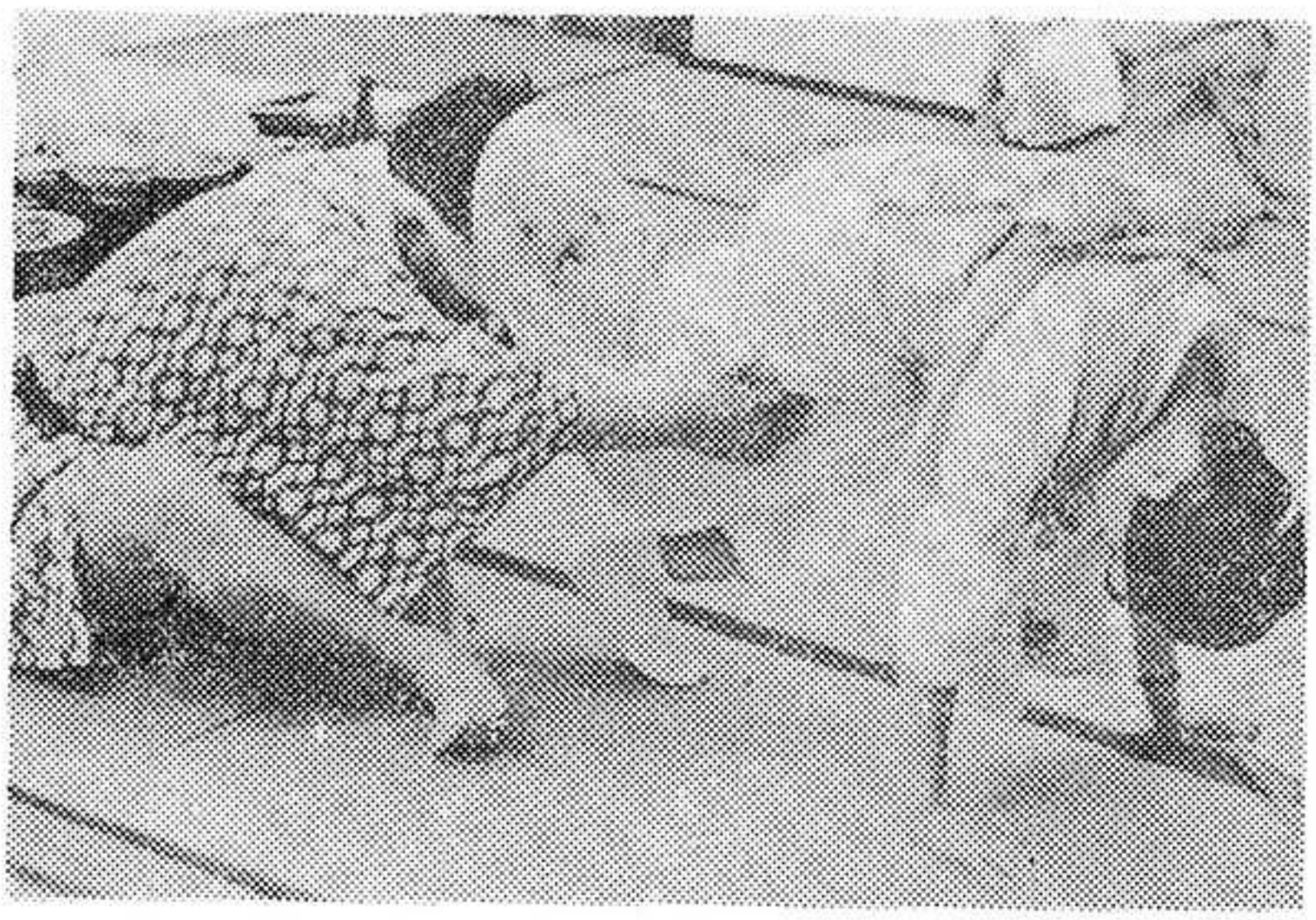
「まだ向こうの都合を聞いてないけど……」

「明日でも、あさってでも、いいわよ。また違う人なの」

「今度は君のファンなんだ。舞台の君を見て知ってるんだよ」

「フフフ」

ひろ美は不敵に笑って、相手が誰だろうと



てんで意に介しない風だった。

「ところでね、センセ。あたし部屋を探してるのよ。どこか、いいとこ、ないかしらね」

「いまんとこ、ダメなの？」

「ウン、ちょっとね」

「二間は欲しいんだろう。部屋代は、どのくらいのが、いいの？」

「一万円までね」

「二間なら、そんなに要らんよ。八千円で十分だ」

「だって、いまんとこ、二間にお勝手がついて一万円よ」

「四谷だろう。高いな」

「もっと安いとこ、あるかしら」

「新宿から、あまり離れちゃ、だめなんだろうな。中野なら、二間にダイニング・キッチンがついて八千円のが、あるけどね。新しくて綺麗な部屋だよ」

「あら、そう。センセ、紹介してよ」

私の友達で、アパートを建てたばかりのがいたから、まだ空いてるか、聞いてみてやろうと思った。

「あッ、いけねえッ！」

部屋の話に夢中になっていた玉井ひろ美は突然、私に挨拶もせずに立ちあがると、バタバタと駆け出して客席の扉をあけ、入って行った。〝出〟のきっかけを忘れていたのだろう。私は苦笑しながら、舞台も見ずに外へ出た。

翌日、話がまとまって、夜の九時に新宿の「キューピドン」というクラブで、荒木氏と

おち合った。私が行った時、荒木氏は作家の近藤啓太郎と飲んでいた。

コンケイさんは私も知らない仲じゃないからと三人で飲みはじめたが、十時になったので私は荒木氏に目顔で合図した。コンケイさんは、これから銀座で飲み直そうと言うのを、体よく断わった。

「何だい。何か、よっぽど、いいこと、あるんだな。何だよ。言ったって、いいだろ」

コンケイさんは一流の鋭い勘で荒木氏と私の顔を等分に見つめて探り出そうとしたが、私達がこれからやることは、いくらコンケイさんでも、顔色からでは見抜けない。

私は渋谷の千春荘という旅館へ電話して、部屋を予約した。この旅館は前にも使ったことがあるが、隣室と音響が完全に遮断されているし、部屋も八畳と六畳と、かなり広い部屋なので使いよい。

内外ミュージックの小屋の前の喫茶店で、芝居のハネるのを待った。

十時四十五分ぐらいに玉井ひろ美が黒のワンピースを着て、やってきた。

「この人は、君の大のファンなんだよ」

「一度、あなたの大きなお尻の下に敷かれてみたいと思ってたんだけど、ようやく望みが叶えてもらえるんで、胸がワクワクしてますよ」

「フフフ、よろしく――」

玉井ひろ美と荒木氏とは、パッと顔の合った瞬間から、こんなやりとりをして、堅さというものが全然、感じられなかった。

## Mの主権性

千春荘につくと、まず酒を注文して、暫く話をした。

「あなたはストリップもやったことあるの」

荒木氏は部厚い眼鏡の奥から人なつこそうな目で、ひろ美の豊かな乳房の辺りを見ながら聞いた。

「やったことあるのじゃなくて、あたしはストリップが本職よ。芝居もやることがあるというわけよ」

「関西ストリップ？」

「ええ、大阪が地元ね」

「特出しもやった？」

「フフ、やったわ。お金が要る時ね。サツにあげられたことだってあるわよ」

「ヘエ、どんなこと、やったの」

「それがね、あげられた時は、大したこと、やっちゃいないのよ。もっと、いろんなことやってやったけど、そういう時は見つからないんだからね。あんなもん、運よ。それから取締まりの時期にぶつかると、まずいのね」

「サツに摑まるのは、さすがに嫌じゃない」

「平気よ。あたしね、ストリッパーになる前はズベ公だったもん。サツにくらいこんだことなんか、何度もあるよ」

玉井ひろ美は野太い声で、さされる酒をコップでグイグイやりながら、喋っている。

ちょっと背伸びして喋っているのではないかと思ったが、あとになって、だんだん深くつき合うようになってから、それは、ほんとうのことだと、分かった。

荒木氏が人見知りしないたちの性格で、ひろ美に対しても、初対面から非常に馴れ馴れしい態度である。

いままで、ひろ美と共にモデルになった男性は、阿麻君にしても、春木君にしても、女王の前に跪く奴隷として、ひろ美を畏敬し、一歩下がって応対する態度をとってきた。

だから、ひろ美の方も、モデルになる男性はすべて奴隷扱いするもの、それが当然と思うようになった。ところが今度の荒木氏は、ひろ美をバーの女か田舎芸者と同じような扱

いで、話をしている。それが、ひろ美にはカチンときたものか、ちょっと凄がったような素振りを見せた。

私はフィルムを入れたり、電球をアームにはめこんだり、準備をしながら、二人の話を聞いていたが、やはり荒木氏の態度に、いままでのものと、異質なものを感じた。

荒木氏のMは、あくまでも自分が主体となって行動する。

女性から屈辱を受けたり、苦しみを受けたりすることを好む点は、Mに相違ないが、それは彼の方から好んで積極的に求めて行く。

この調子で行くと、これから撮影に入ってからも、彼の好むポーズの写真しか撮れないのではないか——。

という疑惧を抱かせられたのである。

そうであってはならない——。

Mというものは本質的に、あくまで女王に従属的であらねばならない。

いや、そうであってはならないと思うのは私のエゴかもしれない。そういうMもあるのだ。しかし、それは女性がSでなく、通常の女性であった場合、それを誘導するために、Mの男性がリードする。リードしなければできない状態——だから、やむをえず主体性をとってきた。

荒木氏は、いままでに、そういう体験しかなかったのではあるまいか。まだ、ほんとのSの女性との経験がないのだろう。

だが、玉井ひろ美とは違う。彼女は立派なSである。

ほんとうに価値のあるSの女性とは、どういうものか。今夜は荒木氏に、そういう体験をしてもらおうと思ってもいましょう」

のペースで行かなければならない。

荒木氏は、あぐらをかいて、浴衣の袖を腕まくりし、ニヤニヤしながら、

「ところで、あんたの旦那さん、あるの」

ひろ美の方へグッと顔を近づけるようにして、無雑作に聞いている。彼女もバーの女をしたり、リベートをとったりして、ぜいたく三昧に暮している。二号さんは、その秘密を知っているが、この重役さんは、会社の金を悪用せびるが、この重役さん、ケチで、なかなかオイソレと金を出さない。そこで、脅したり虐めたりして、小出しに金を吐き出させている。重役さんはマゾだから、そうされることが楽しいのである。

「フフフ、どう答えたら、いいの。あるってでもやりましょう」

言った方が、いいの？　それとも、ないと言った方が、いいの？」

ひろ美はチラと荒木氏の方を見ながら、巧みにはずした。

うっちゃっておくと荒木氏は、どこまで突っ込んでくるかわからない。どうやら準備もできたので、

「じゃ、ボチボチ始めましょうか」

「今日は、どんなストーリーでやるの」

私はライトの準備をしているうちに、今夜のストーリーを組み立てておいた。

「そうですね。荒木さんは、或る会社の重役さんで、新劇の女優さん。いいですね。

「ヘエ、僕が、どういう会社の重役？」

「広告の会社です。ひろ美さんは重役さんの二号さんで、この重役さんは、会社の金を悪用

さんになってもらいましょう」

だが、玉井ひろ美

「そりゃ、いろいろあるよ。会社の金を浮き貸ししたり、ピンはねしたり、もっとひどいのは、横領したり、使いこんだり、いくらでもあるさ」

「委しいのね。センセも、やってるの」

「冗談じゃない。私は、それほどエラくないし、それだけの度胸もない」

「このひとは、やってるのね」

「ああ、荒木さんはエライから、何でもやっている」

「悪いヤツだね。ようし、そんなら、うんといじめてやる」

「おやおや、ひでえことになったな。でも全く、それくらいのこと、できたら、やって見たいな」

「何言ってんのさ。やってるくせに！」

ひろ美は真顔で荒木氏を睨みつける。早くものってきている。

## さまにならぬ縛り

「さてと、そいじゃあファースト・カットから行きますか」

いつものやり方だと、二人で対話しているところから入って、謝らせたりしている場面などから、次第に強烈な場面に盛りあげて行くのだが、今夜の荒木氏は、そんなテンポの遅いことをやっていると、まぜっ返したり、おちゃらけられて、折角のってきているムードを、こわされる恐れがあるので、いきなり責めの場面から入ることにした。

ひろ美も、どうやら荒木氏の肥った身体をヒイヒイ言わせたくて、うずうずしている様子である。

まず、荒木氏に裸になってもらった。

全裸を要求したのだが、その場になると、強心臓にも似合わず、羞恥の色を見せて、パンツだけは勘弁してくれと言うので、そのままにした。

「今日は、あたし、何も衣裳、持ってこなかったわよ」

「いや、あんたは、そのままでいいよ。そのワンピース、凄く恰好いいもん。今日はパンティは？」

「はいてきちゃった。フフフ」

ひろ美は私達の目の前で、パッとスカートを捲ってパンティをグイと押し下げ、足の先にひっかけると、荒木氏の顔へ蹴とばすように、ぶっつけた。

顔に当たったパンティを両手で受けとめた荒木氏は、顔を埋めて匂いをかいでいた。そして人なつこい目を眼鏡の奥から細めて、ひろ美の方を見て、媚びるように笑った。

これも荒木氏流の、やり方である。匂いをかけてもニコリともせずに、怒ったような顔で見下ろしているのでなく、自分から嗅ぎに行くムードには敏感で、荒木氏が笑いそして、そのことが、ひろ美の気に入ったかどうかを、確かめようとしている。

これは私の思いすごしかもしれない。だがその時は、そう受け取れたのである。ひろ美もそういうムードにはマゾヒストとして一番わかりやすいポーズから行きましょう」

「さてと、マゾヒストとして一番わかりやすで見下ろしている。

私は、かつて仁科君から聞いたポーズを思い出した。

荒木君の両手を拡げさせて、別々に縛る方法である。

八畳の和室の方では広すぎて縛る支えがないので、六畳の洋室の方で、カーテンの前に坐らせて、一方の手を扉のノブに、一方の手を椅子のアームに縛りつけた。ひろ美も手伝って、片方を縛った。

「何か殴るものはないかな。鞭の代わりになるものは」

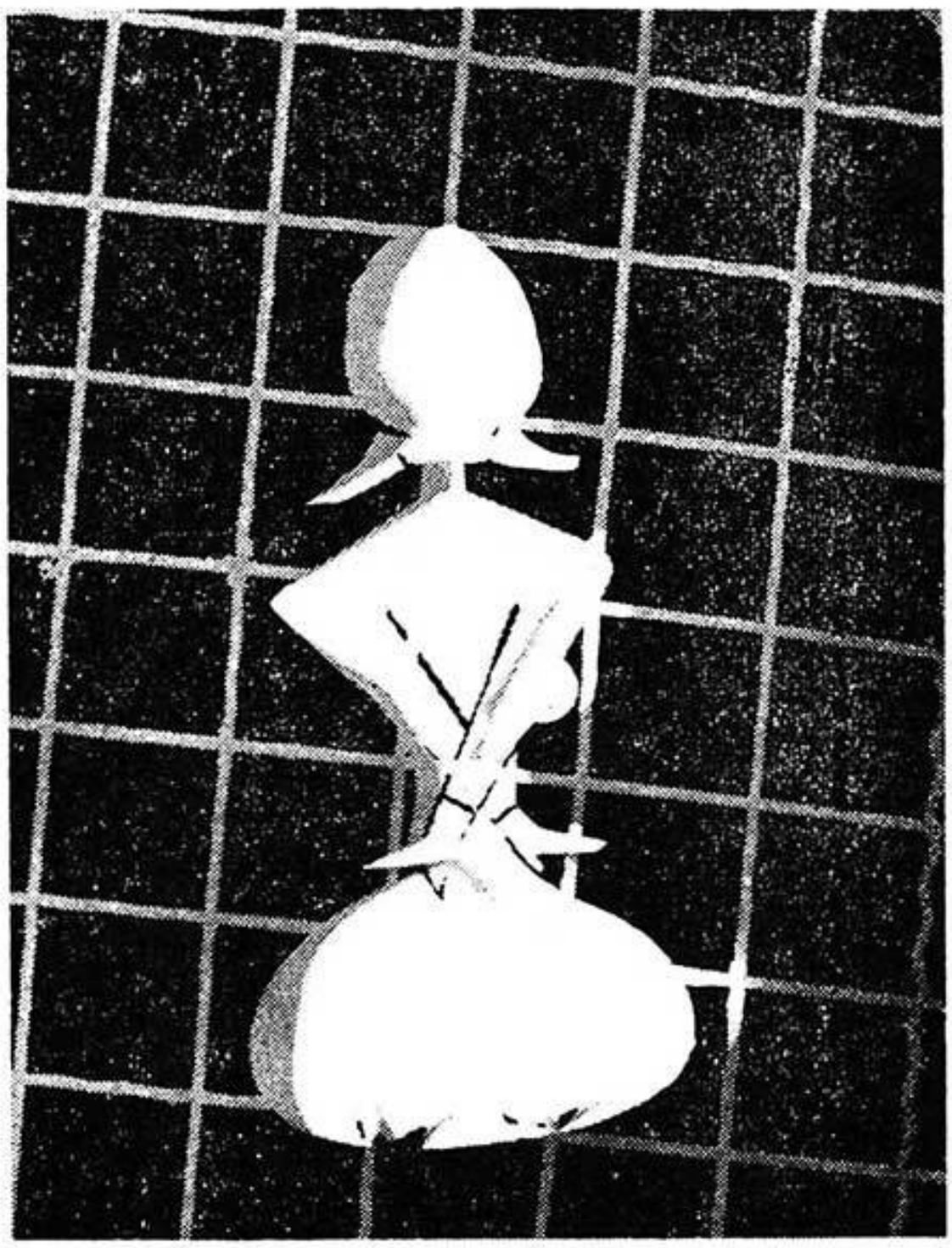
「あ、これが、いいわ」
ひろ美が上がり框から、長い柄のついた金属製の靴べらを持ち出してきた。ちょっと見ると、乗馬用の鞭に、よく似ている。
「ああ、いいものが、あったね」
荒木氏の顔を見るとニヤニヤしていた笑いが消えて、恐怖に似た表情に変わっていた。
「ハイ、ひろ美さん。男の人の後ろの方へ回って。足をあげて肩を踏んで下さい。そして鞭を振り上げる。もっと怒ったような顔をして――」
「この野郎ッ！」
ひろ美の野太い声が荒木氏の頭の上から浴びせられた。
「ハイ、鞭を振り下ろして――」
ビューッ！
と唸りを生じて鞭が振り下ろされた。だが荒木氏の肩へ当たる瞬間でとめて、肩へは軽く触れた。
「ハイ、次は頭を踏んで、鞭を頬へ当てる」
「やい、この野郎。頬ぺたが、えぐれるほどぶっ叩いてやるからな。覚悟、おし！」
「ああ、眼鏡は、まずい。眼鏡を、とって下さい。そうだ。鞭で叩かれて、眼鏡が吹っ飛ぶ方が、いいな」
眼鏡の片方を耳からはずして、ブラ下げ、そこへ靴べらを当てた。
「ほんとに殴られたい？　殴ってやろうか」
ひろ美は上から荒木氏に聞いた。
「イ、イヤ、それは、勘弁して下さい」
荒木氏は、ひろ美に圧倒されて、声まで女のようにオクターブが上がって、どもりながら答えた。
「フン、いくじがないんだね」
「ひろ美さん。そこで頭をグーッと踏んで、床へつくまで踏みつけてみて下さい」
これは実に、いいポーズだった。いままで水平だった両手が羽根のように上がって突っ張り、緊迫感が出た。
「こんちき生ッ！　これでもかッ」
グイグイ、踏みつける。頭を踏んだ足の力が弛むと、頭が床から持ち上がる。そこを、また力を入れて踏みつけると、ゴツン！　と音がして、額が床へ、ぶつかった。
だが、ひろ美の上げていた足が下がったので、スカートが下りてしまった。
「スカートを捲って！　スカートを思いきり捲り上げる。これは実に、いいポーズだった。
「ハイ、背中へ跨がってみて下さい」
「ヨッコラショッと――」
ドスンと尻を背中へ乗せると、両腕が逆手をとられたように反り返る。かなり、痛いのではないかと思うが、荒木氏は、よく耐えている。跨いだままで、片足を上げて、頭をポンポンと踏みつける。
「ムッ、痛ててッ！」
かなり両腕が、しなったので、さすがに荒木氏も悲鳴を上げた。
「痛いですか。じゃ、仰向けで、やりましょう。それなら、腕が逆にならないから」
ひろ美は立ち上がり、苦痛に歪んだ荒木氏の顔を〝どうだ！〟という風に見下ろした。
〝どうだ！〟という風に見下ろした。
縛った両手を解いて、カメラに向かって後向きに向きを変えて、改めて右と左を反対にして、手を縛る。私はライトの位置を変えるので、縛りは、ひろ美が一人でやった。
ライトを真上から、あてた。
後向きになった身体を仰向けに倒す。
倒れた顔の上を、ひろ美が大股に跨いで、ノブの結び目を直す。それは、ひとつの巧まざる示威であった。ひろ美の方は無意識にやったことだが、下から見上げた荒木氏にとっては次に迫る女の兇器をチラリと見せつけられた思いであった。

（続く）

# 被虐の旅シリーズ

# ロスの夜

由利美千子



カット・西水玉二郎



ロスアンジェルスのメキシコ村で私はジョンに会った。

その時、お互いに何かしらん、ひき合うものを感じたのは、男女の、いわゆるラブではなく、お互いの体の奥底に秘めている希求のせいだったのかもしれない。

アブノーマルといわれる希求……。

しかし、私たちにとって、ラブよりも、もっと神秘であり、耽美的であるのだ。

私とジョンは、お互いの希求にひかれてジョンの家へ行き、フレッドと三人で遊びに、ふけった。

ジョンが被虐を好んだのは私にとって意外だったが、フレッドが加わると、それはそれで興を損うものではなかった。

しかし、十時に私はホテルへ帰らなければならなかった。

「朝まで、ここへ、とどまれないのか」

とフレッドが、きいた。

「さあ……？」

と私は迷った。

洋裁学校で募った団体へ渡ったのだが、一緒に来た人の中には、ホテルへ泊まらないで、知人の家へ泊まりに行った人もある。なかなか来られない外国だし観光よりも、親戚や知人を訪問したくて、この団体に参加した人もあった。個人でくるよりも、団体の方が安かったからだ。

だから、学校の団体といっても、未成年者は少なかったし、それほど規則づくめでもなかった。ただ、未知の町で迷い子になっているといけないから、一応、夜十時に点呼をするという話だったのだ。

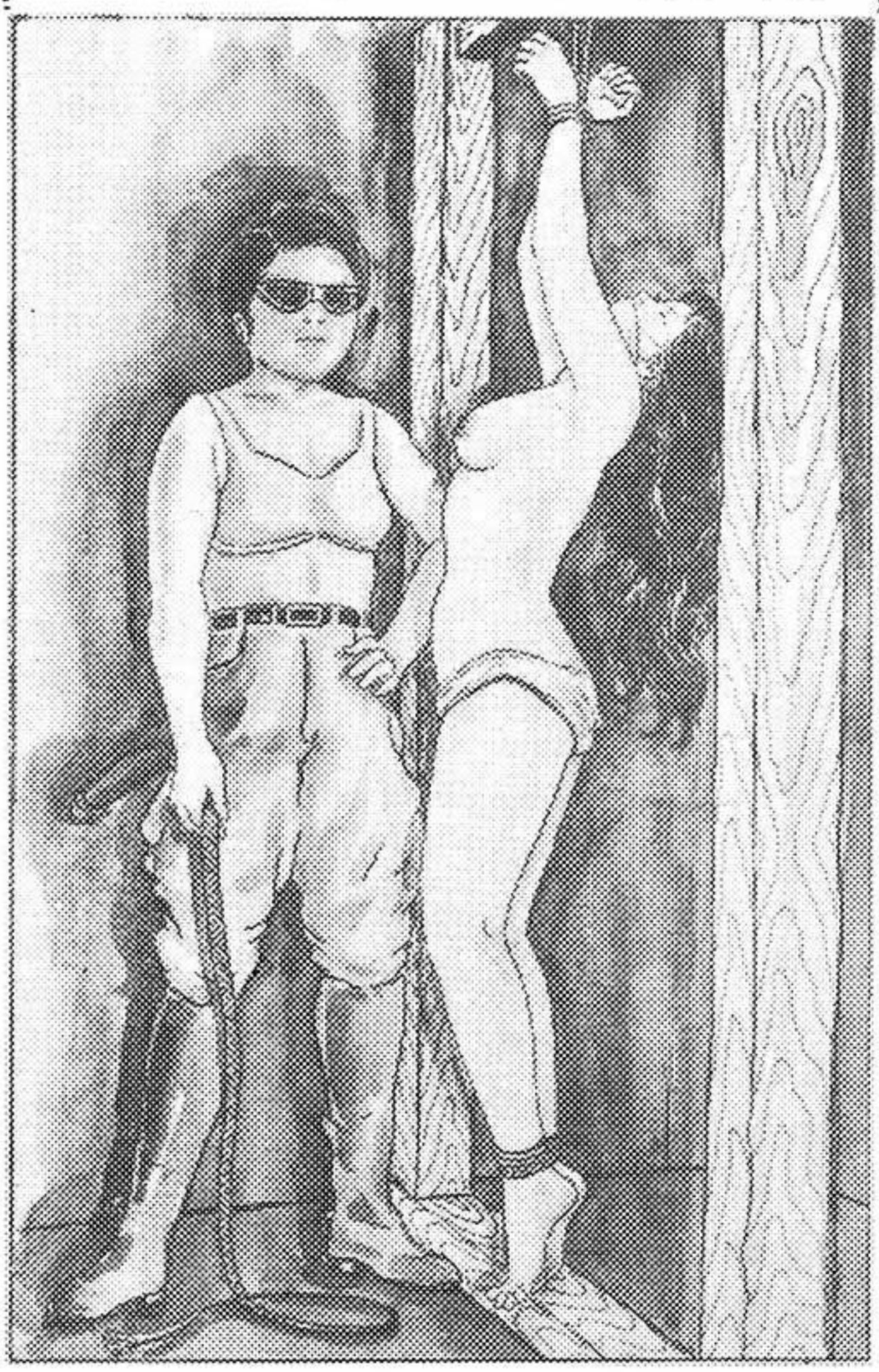
「電話してみるわ」
私は言った。
今の今まで悲鳴をあげ、痛さに、あえいでいたのに、まだ、いじめられても、いいようにに思うのは、何故だろう。
不死鳥のように私の希求は羽ばたくのだ。
しかし男二人と一緒に夜を過ごすことに一抹の不安があった。
それをジョンは敏感に感じたらしい。
「僕もフレッドも学生だ。これは、僕たちのたのしい遊びだと思う。アブノーマルかもしれないが、僕たちだけにわかる、たのしさを猥褻な行為で、そこなうことはしない。安心して下さい。ただ僕たちにとって、日本の娘さんと、こういう遊びをする機会は二度とない。それを大切にしたい」
ジョンは言った。
フレッドも、うなずいた。
私は、ふと彼、葉山のことを、その瞳に彼も私の心の、ほんの小さな動きを敏感に、とらえたが、ジョンも、また同じだった。そして、猥褻に落ちない真面目さを、持っていた。
私が始めて会ったジョンにひかれたのは、その瞳の色だったのかもしれない。
「とにかく電話するわ。私の服をかえして」
私は言った。
「ホテルへ送る時、かえしてあげる。今は、そのままでいい」
フレッドが言った。
「厭……この恰好ではいくら電話で姿が見えないといっても、この馬小屋から電話のある部屋へ行くだけでも裸では厭だった。
「じゃあ、これを着なさい」
フレッドは小屋の隅にあったドングロスの袋を、とりあげた。
「こうして、首と手の出る所を切ればいい」
彼はドングロスの袋を大きな、はさみでジョキジョキと切った。
「さあ」
彼は、それを私の頭から、かぶせた。
荒い布目がザラザラと肌を刺戟した。
私は、ふと、その上から縄をかけてほしいと思った。
汚れた荒い布に包まれた私は、囚人よりもみじめな姿だった。しかし、ギザギザに裁たれた首の穴から出ている首や手足が、奇妙な美しさを持っているのを、我ながら、みとめられた。
その美しさを追求するには、縄が必要なのだ。
囚人のような菱形の縄をかけられたら、乳のふくらみが、もっと強調されるだろう。そして、ドングロスの布目は、もっと肌をチクチクと刺戟するだろう。
しかし、アメリカ人は日本人のように器用ではない。彼等は、日本人のような縛り方は出来ないのだろう。亀甲型の縄のかけ方なんか、とても彼等には期待することは出来ない相談だった。
私は避難民のような姿で、素足で居間の絨毯をふんだ。
外泊の許可を得るには、わけなかった。
私は、あくる日の朝八時にホテルへ帰って朝食をとり、自分の荷物をまとめて九時にフロントへ集まれば、いいのだ。
「さあ、馬小屋へ戻ろう」
フレッドが言った。
「ジョン、馬になれ。馬になって、彼女を、のせていくのだ」
ジョンは、いわれた通りに四つん這いになった。
「さあ、乗りなさい」

フレッドは私を促した。
私は躊躇した。私の袋製の服はショートもなかった。
馬乗りの恰好でも、私は決して加虐者ではまるで、囚人が引廻しをされているようなものだった。
私がジョンの背に、またがったら、私は生らずには乗っていられない。それなのに、ポそして、日本人なら、やっぱり高手小手にまれたままの姿で、またがるのと同じことにットは片手で持つには持ちにくかった。縛ることを、考えるだろうにと思った。しかうっかりポットの底をジョンの背につけるなる。私の尻をジョンが裸の背に、じかに感し、そうして欲しいとは羞かしくて口に出せと、
じるわけだ。私も又、ジョンの皮膚を自分のなかった。
皮膚でさぐることになる。
ジョンは私を背にのせて、フレッドに鞭打「ううっ！」
「なにを、ぐずぐずしているのたれながら居間から廊下に出て、台所を通り と、ジョンが呻いた。
なさい」外へ出ようとした。 ゼリーの箱の、はしをくわえているので、
フレッドは、うながした。「一寸、待て。腹が空いた。食料を持っていけないのだ。
それでも、まだ私が、そこに立っていると こう」熱いという声が出せないのだ。
彼は、じれったそうにして、一番手近にあっフレッドは冷蔵庫をあけて、フルーツゼリ特別に痛いというわけでも、苦しいという
た、カーテンを一つにまとめるーの入った器をとり出した。わけでもない。
とって、私を打った。「これを口に、くわえろ」 しかしこれも、たしかに一つの拷問に似
組紐の先に房のついているタと、ジョンに命じた。ていた。
わらかい鞭のようだった。「私が持つわ」 ジョンの背に汗が、にじみ出てきた。
私はジョンに、またがった。と、見かねて私が言うと、 私も又、ポットの湯を、こぼさないように
ジョンの背は、熱でもあるかのように熱「キミは飲みものを持つ。さあ、行くんだ」 さえていると、腋の下に汗がにじんだ。不
った。と、紅茶のポットに、熱い湯を注いで手渡 自然なポーズが、だんだんに苦しくなってき
「さあ、歩け」した。 た。
フレッドは、タッサーを振った。「コップはボクが持つ。さあ、行くんだ」 やっとの思いで、私たちは中庭まで来られ
房の芯が体に当たると痛かった。ジョンはノロノロと這い出した。 た。
タッサーの鞭はジョンの尻にも当たった。私は私で、ジョンの背で紅茶のポットをも 大きな木の根元にベンチがあった。
いていた。 私たちは、そこで小休止した。
星が、日本で見るのと同じように、またた

夜風の匂いも同じだった。
夢の中にいるような気持で、私は紅茶をのみ、ゼリーを食べた。果物の豊富に入ったゼリーは、すばらしく、おいしかった。
お茶が終わると、ジョンは、又すぐに馬にされた。
それは馬小屋へ入ってからも続いた。
「ジョン、お前は馬なのだ。そのまま、四つ足の姿でいなければいけない」
フレッドは言った。
そして私の手は前で揃えさせられて、一つに縛られた。
「ジョン、尻をあげろ」
フレッドは、いうと、
「さあ、その上へ、のるんだ」
と私に命じた。
私は、手を縛られたまま、曲芸師のようにジョンの尻の上に立たされた。
フレッドは、その縄尻を天井の棟木にかけて引いた。私は両手を高く上へあげて、ジョンの尻の上で吊りあげられたのだ。
「ジョン、もっと尻を高くしろ。もっと高くだ……」
フレッドはジョンの尻を棒の先で突いた。
ジョンは、お尻を高くあげて、四つ這いになっている。その上へ、わずかに足をのせて私は吊られた。
「暑くなってきた。涼しくしてあげよう」
フレッドが大きなハサミをとりあげた時、何をされるのかと、私は不安でおののいた。
何に使うハサミなのか、しらない。
植木のハサミだろうか。それとも動物の毛を刈るハサミなのだろうか。
彼は、その大きなハサミで私の胸のまわりの布を、ジョキジョキと切った。
丸い乳房があらわになった時、私はその乳首まで、そのハサミで切られそうな、おそれを感じた。
しかし、彼はジョキジョキと、もう片方の乳房のまわりの布を切り出した。
金属が肌にふれると、私の体はピクッと動いた。ハサミは布を切っているのに、肌を切られでもするように、私の体が勝手におそれてピクッと動くのだ。胸が波打つような恐ろしさが、苦痛のように、ひろがった。
ジョンは、尻をあげているのが苦しくなってきたのだろう。
馬になっているか、よく見えない。
私の悲鳴に、ジョンがフレッドをとめようと立ち上がった時、私は完全に宙吊りになった。
と私は悲鳴をあげた。
手首が、もぎとられそうに痛かった。
ジョンは驚いて、再び尻をあげた。
フレッドは、そんな二人を、たのしそうに見ていた。
そして、又してもハサミをとりあげて、私のまとっている布をズタズタに切りきざむことに、夢中になった。
おヘソのまわりを、まるく切られた時、裸体にされるより羞かしいような感じがした。
そしてそれよりも、もっと羞かしかったのは裾を一糎、二糎と除々に短くされていった時だった。
両手を縛られて、ジョンの尻の上に乗っている以上、私にはそれを止めることも出来なかった。
「やめて、やめて……」
私は絶叫した。
私の絶叫に驚いてジョンがポーズを崩すと
「ああっ！」
と私は別の悲鳴をあげた。
ジョンが尻を下げると、私の足は宙で舞った時、私は完全に宙吊りになった。
「あっ！」

てしまった。
「ああっ……ああ」
私の手首は火傷をしたように痛かった。
ジョンが驚いて私の足をかかえ、抱くようにしてくれた。
「ジョン、馬がそんなことするか、はなせ」
フレッドは叫んだ。
しかし、ジョンは私を抱き上げて、手首が吊られるのを、ふせいでくれた。
「どけ、ジョン」
フレッドは鞭でジョンをピシッ！
と鞭が鳴る。
しかし、ジョンは私の足を放さなかった。
ピシッ！
と振り下ろされた鞭が私の体にも当った。
「ああっ！」
と、私は叫ぶ。
ピシッ！
ピシッ！
私たちは何回、打たれたろう。
そして、フレッドが無理やり、ジョンを私から引き放すと、その反動で、くるくると宙に廻ってしまった。
馬小屋と称していたが馬は、いなかった。
しかし責め道具になるものは一杯あった。
第一、丸太が長いのや短いのや、何本も、ころがっていた。
フレッドはジョンを私から引き放すと、ジョンの手を十字に開いて丸太へ縛りつけた。
フレッドは叫んだ。
丸太は固定されているのではない。ジョンは手を一杯にのばして、丸太の枷をつけられたような恰好になった。
フレッドは私を吊っていた縄をといてくれたが、ジョンと背中合わせに、同じように私の手を十字に開いて、丸太に縛りつけた。
ジョンより私の方が背が低かったから、私は爪先で、やっと立っているようで、丸太に吊られているのと同じようなものだった。
「歩け」
とフレッドは、いう。
でも、どうやって歩けるのだろう。
ジョンが前へ歩くことは、私が、あとずさりすることだし、私が前に歩けばジョンはうしろ向きに歩くことになる。
どっち向きに歩こうかとためらっていると鞭がなった。
ピシッ！
と、鞭がとぶ。
「早く！」
「ああっ！」
と私は、うめいた。
支えになっている。よせあっている背中が熱かった。
「歩けなければ、廻れ」
フレッドは言った。
私たちはノロノロと、その場で足を動かしてまわった。
「もっと早く」
フレッドの鞭が、
ピシッ！
私たちは、曲芸をしこまれているケモノのようだった。
太い丸太の枷をつけられ、ぐるぐると、みせものの縄を上へ引くと、手首を結わいつけている丸太へかけて、まきつけた。
フレッドは、ジョンの足首に縄をまきつけた。そして、その縄を上へ引くと、手首を結
ジョンは片足で立っていることになる。
「さあ、廻れ」
フレッドは鞭を、ならした。
ジョンは片足で、まわり出した。
ピョンピョンとぶようにしてジョンがまわるのにつれて、私は爪先で動いた。

読者ギャラリー　『リンチ』　宮城　昌子



あげている手が、だるく、腋の下が、ひき吊られるように痛かった。

それなのに、鞭の痛さは又、別の痛さで体に火をつける。

フレッドは私の足音まで縄をかけた。

私も又、ジョンと同じように一本足で立たされた。

何という、おかしな姿だろう。

「廻れ！」

フレッドは、いう。

しかし重い丸太につながれて、片足で立つのは、つらかった。

短い瞬間は何でもないが、二分、三分と、つらさは増す。

片足でまわるのは、踊りのふりにもあることだから、出来ないわけではないが、ジョンの重さまで、私の片足で、くいとめなければならないのだ。

爪先立っている足の指がキューッと、けいれんを起こした。

「あっ！」

と思わず私は、よろめいた。

ジョンが、やっと、

「よし、もっと重くしてやろう」

フレッドはバケツに水を満たした。

それを丸太の両方の先へ、かけた。

ズシリと丸太の先が重くなり、のばしている手の、腕のつけ根の痛さが増した。

「水を、こぼさずに、まわれ」

フレッドは、いう。

しかし、私の体は、もうとても片足では立っていられない程、どこもかも痛くなってきていた。

「もうダメ……」

私は思わず、日本語で言った。

「ゆるして……」

ジョンも荒い息を、この奇妙な遊びをやめようとしなかった。

しかしフレッドは、

「さあ、早く、廻るんだ」

私の目から涙が出てきた。

私はピョンピョンと、片足を動かして、体をまわした。

ジョンも、ピョンピョンと片足で、とんでいる。

バケツの水が今にもこぼれそうにゆれた。手も、足も、バラバラになってしまいそうに痛い。

フレッドの鞭がとんだ時、私の足は思わず乱れた。

ジョンにも、もうそれを支える力は、なかった。

二人は一本の丸太に縛りつけられたまま、上下に重なって転倒した。水に濡れる冷たさを感じるよりは、不自然に、まげられた足が折れそうに痛かった。

風呂へ入って寝台の上へ横になったのは、何時頃だったのだろう。

遠くの部屋で目覚ましのなる音に目が、さめた。よく眠れたのか、気持のよい目覚めだった。

八時にホテルへ帰って朝食をとる予定だったが、食堂には朝食が用意されていた。

いつの間にかフレッドは帰ったらしい。

ジョンが、はにかんだような瞳で、私を待っていた。

「もう一度、会いたい」

ジョンが言った。

「会えるわ」

と私は、いう。

まだ一日はロスアンジェルスの近くを見てまわる予定だった。しかし、もう再び、昨日のような遊びは出来ないだろう。

カリカリに焼いたベーコンに玉子、ひき肉と一緒に煮た豆が朝の食卓に並んでいる。輪切りにしたグレープフルーツは、日本の柑橘類より水気が多くて、おいしかった。

しかし、ジョンは名残りを惜しんで泣き出しそうな顔をしていた。

私もまた、何となく、心残りなものがあった。

「僕が日本へ行ったら、あなたに会えるだろうか？」

ジョンが、きいた。

「ええ、会えるわ」

「アドレスを、これに書いて下さい」

ジョンは、ノートを出した。

私は、それに住所と姓名を書いて渡した。

「日本には、あなたが興味をもちそうなショーがあるわ」

私はジョンが日本へ来たら、SMショーというのを見せてあげようかと思った。

しかし、ジョンはMショーは男性がSを演じるらしい。

私自身、らしいというぐらいしか知らないのだ。

しかし手を縛るにしても、ただ、ぐるぐると縄をまきつけることしか知らない、この人たちに、縄のかけかた自体に変化のある日本の責め絵を見せてあげたいように思った。

「僕は必ず、近いうちに日本へ行く、約束する。あなたも約束して下さい。その時は僕に会うことを……」

「いいわ」

私は言った。

そして、Sだったフレッドにひかれるものが残らないのに、ジョンにひかれるのは何故なのだろうと思った。

それはSMをこえた男と女の好き好きというものがあるのだろうか。

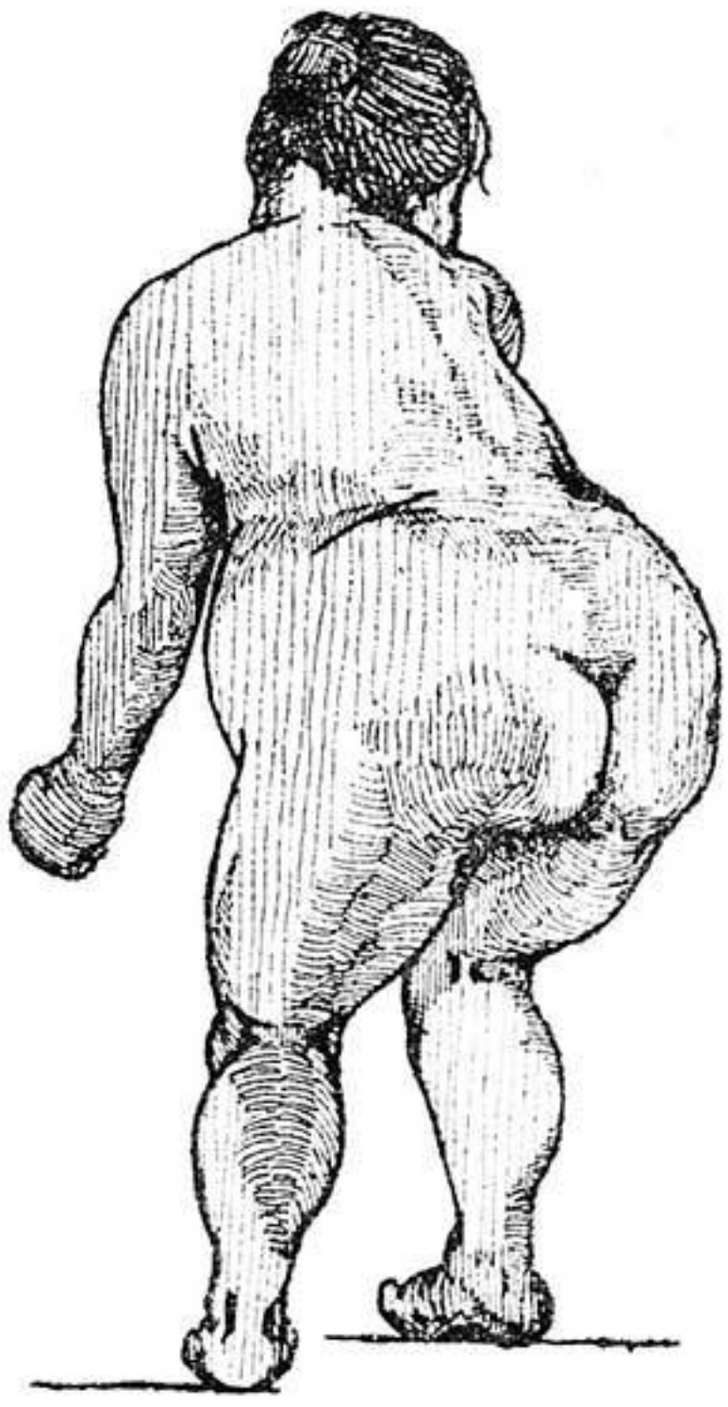
しかし、ジョンが、もしSだったら、私は葉山に対して、何かしらん、心苦しさを感じるだろう。

ジョンがMでよかったのだ。

そしてロスアンジェルンの朝は、グレープフルーツのように新鮮で、かぐわしかった。

# ニュース・スクラップより

# アブ的たわごと



カット・緑　JOE

吉虹丸虹

海外ニュース記事こそ、アブの宝庫、なんていうと、いささかオーバーにきこえるけれど、アブの色眼鏡をすかしてみないでも、たしかに屡々面白い記事にぶつかる。例えば、「ワニを使って婦人を拷問」（46年4月10日海外こぼればなし―毎日）などは、まことにショッキングというほかない。

○

〝ブラジルで中世さながらの残酷な拷問が政治犯に加えられている――とカナダの若い婦人がリオデジャネイロの裁判所で証言、国民に大きな衝撃を与えた。この婦人はカナダ・バンクーバー出身のタニヤ・チャオ・チャーターズさん㉒で、彼女は夫のホセ・チャオ氏とともに破壊活動をした容疑で昨年8月以来ブラジルの刑務所に拘留されていた。公判第一日の7日、彼女は、「私は電流の通ったコードをからだに巻きつけられ、床にころがされたり、生きているワニのそばに置かれたりした」と証言した。ここ数年間、キリスト教関係から過激派グループに至る各種団体が、ブラジル当局の政治犯に対する弾圧や、拷問の記録を発表しているが、ワニを拷問に使っているという報告は初めてで、人を驚かしている〟（AP＝共同）

○

インドシナの某地での、虎による、あの世にも残虐きわまりない行為のニュースは世を驚かせ、憤激させたものであるが、爬虫類特有の、あの不気味さを考えただけでも、この「ワニ」を使っての拷問というのは、たしかに戦慄をおぼえる。特異な方法、特に動物によるファンタジーに於いて我がニークさを記憶される、黒田寿男氏の作品などフィクション内でとどめてはしいもの。（モア的な、かんじもしないでもない）

――×――×――

**『カエルでしかえしを』**

〝ソ連にいるユダヤ人に対する処遇が悪いというので、アメリカあたりでは、ソ連人に対するユダヤ人の、いやがらせが続発しているが、子供たちまで、この波に悪乗り。つい最近ニューヨークで、ソ連国営航空の事務所に

ユダヤ人の子供たちが押しかけ、カエルの大群を放って逃げた。ピョンピョンはね回るカエルを全部つかまえるのに、一時間半もかかるという大騒ぎにソ連側はカンカン。つい先頃もソ連貿易事務所に50匹のハツカネズミが放たれ、大騒ぎしたばかりだ〝（サンデー毎日5月9日号、**外信部のクズかご**）

○

というのもあった。

カエルが跳んで何がアブチックか、と言われそうだが、これだけでもアブ好み？　特有の勝手な空想潤色をくりひろげれば結構面白い？　ストーリーだってでっちあげられるだろう、というもの。大型、狂暴、その上、爬虫類の持つ、うす気味悪さのワニなんかとは別に、こうしたカエルやネズミのような小型動物（カエルの場合は、あのヌルヌルとした気味のよくなさも加味される）それらがチョロチョロ、おびただしく這い出てきたり、肌にまつわりついたり、なんて考えただけでもぞっとするもの。そう言えば、こうした動物（全般に）を道具立てに使ったSM小説、アブ小説というものは、勿論あるにはあるだろうが、案外そう多くは、ないような気がするが、うだろうか？　これは怪奇探偵小説であるが、香山滋氏の猟奇味横溢した小説のいくつかや、チャペック作「山椒魚戦争」が、いつまでも印象強く残る所以であろうか。

奇ク旧号時代に、回想告白記事だが、ネズミ責めを女体縛りに加味するサディストが書かれていた「責めの自画像」なる記事が、強い印象に残っている。（そう言えば、懐古趣味的と言われそうだが、この作品ののっていた時代の奇クは、すばらしかった。（勿論、現在もすばらしいが）所謂、正統的？　SM以外にも、灸（相当な頻度であったが、現在では殆どお目にかからぬようだ。もとより、二十年前と時代が大分、変わっている。だから奇クのバック・ナンバーなるもの、それ自体一つの世相を反映する歴史でもあり、特筆に価する）糊フェチシズム、腋窩狂崇、耳環鼻環狂崇、蛙腹幻想（申すまでなく、羽村氏の独壇場だが）等々、驚嘆もオーバーでないような、変わった狂崇のヴァラエティ次々と登場して楽しかったものだ。

私の最も、ひそかに常に待望していたものは、といえば、上述の時代、奇ク誌上にのった、題は確か「義母の思い出」という告白もの。義母が肥満してしまって大儀だもんだから、厠での後始末を少年時代の作者にさせたそんな告白。肥満体狂崇癖ある私でもあり、こんな記事には全くエキサイトさせられてしまう。つまり、肥満しすぎて手が後ろにとどかぬ（実際にとどかないし、ないし、手でも不自由であれば妊娠時とか、でもない限り、余程ものすごく肥満でもすれば別だけれども、厳密にいえば、大ていは難儀である、苦しい、というのが正しいかも知れない。何故って、ネコほどじゃないが、人間の身体なんて、関節から成り立っていて？　意外と柔軟に出来ている）ために、従者をちゃんと用意しておいて彼に後始末させる、というのは、余り品はよろしくなさそうだが、ものすごくアブ的、SM的（特にM的）ではないか？

こんなバカバカしいようなことに何故、空想しちまってはエキサイトさせられるのか。後始末の下郎に自分がさせられるという空想的マゾ的な興奮に、肥体狂崇がプラスさせられるにすぎぬ、といってしまえばそれまでだけれど、やっぱり我乍ら、よくは判らない現象ではある。

考えてみれば、始末させる太っちょ様の方でも、一番汚いものを、自分でやらずに、下男役の男にさせて、ふんぞりかえっている。

（ふんぞりかえって、うそぶくのは、でぶちんが、うってつけであり、下男役の男から言えば、眼前、いや眼上に、そびえ立つ臀部がより巨大で肥え太って山のようなのほど、屈辱的、マゾ的効果は大にちがいないので、こういうシーンは、それ自体、マンガ的な要素を含んでもいる）――もちろん、紙など使用させぬ、舌でやれ、なんていいつけちまったりすれば最上だが、――なんて至上のサディスティックな快感であろう。

いや、よく考えてみるとこんなことは、こちら側の勝手な空想も、いいところかも知れぬし、もともと、手が届かん程に肥満したいなんて思う人物は（特に女性では）まるで存在しそうにもないにきまってるので、一種の病気？　で仕方なしに肥満しすぎちまったにすぎぬのだろうから、滑稽ではある。だから私みたいなマゾ的肥体狂崇者は、一種の心理的サディスティックな、肥満体への眼差しも自分では気づかずに内在させているにちがいない、としか思えぬ。つまり、肥満体をもてあまして苦しんでる、のを眺めて、ゲラゲラ笑ってることでもあるのだろう。（だから、こういう性癖は始めから矛盾を内包させている）

アブ誌「U」のあった頃、コラム記事の中にたった一つ、実にすばらしいのがあった。歌手（小唄）Kが、近頃（元来、豊満美女のほうだったが）とみに肥満し、ために厠での作業に難渋、つまり、豊臀へと手を廻すときに脇腹などで圧迫され苦渋至極。ために彼女には常に実に便利な男が一人、文字通り尻の後に従っている、というもの。この男、どういう心境なのか、聞きたいな、と切に思って、どうしようもないことがあった。私は、このなんてところは何とも傑作だったし、巨臀狂男性をこの上なく、うらやましく思ってならなかったものである。

この短い記事を、私は一体、何遍、読んだものだろうか。そして、これを長々とした小説にしたようなのがないものか、と思ってばかりいた。勿論、こんな肥満臀部奉仕小説なんて、探し求めたって殆ど、だめで、半ば、あきらめたことがあったが、僅かに、同じUの後身Sのある号に、悦虐作家南村蘭氏と同一人と思われる文体の題名は忘れたが、巨臀へのなんとか、というのがのっていて、ゾクゾクした。

プロレス・ショーの肥満美女？　が、奉仕を願望し遂に弟子入り？　を果たしてやってきた少年を召使いにし、ショーでの、この肥満美女をひき立たせるマゾ的役割りの他、私生活上でも、このサディスティン肥満女の弄みものとなる。特に、トイレの中からの「チッ、チッ」と合図するうち合図で、すぐに伺候し、後始末を舌で行なう」なんて世にもステキなことが書かれていたが、翌月の同誌読者評欄に〝うらぶれて、うす汚いのも、いいところ〟だなんて書かれてあって、思わずゲラゲラ笑っちまったものだった。

それにしても、「チッ、チッ」と合図するなんてとこころは何とも傑作だったし、巨臀狂崇的な私にしてみては、作品的にも、こんなに軽快でスポーティな文体のマゾ小説も、たんとないだろう、という程に惚れこんじまった。

M派、その三者関係的M作品とあらば、コプロ趣味的。サディスティンの美女の命令でマゾ男が舌で後始末させられて悦に入る、なんてのは珍しくもないのだが、このように明らかに、でぶちんの女性がサディスチンというのは、一般には、グロ的とされるのだろうし、上述読者評のような非難を浴びるのが予想されることもあって、ごく珍しいのではないだろうか。厠への伴の往復は、彼女をのっけて這って行く人間馬なら、もっとすばらし

い。「コレ、お前。早く、お歩き。出ちまうじゃない」なんて、こいつは、しかし少々、品がなさすぎるかな。

だが実は私という人間、少年時代から、こういう、余り品よくない？　現象ばかり空想していたものだ。

だれから聞いたのか忘れたけれど、少年の頃に聞いたことがある。関取というものは、ふんどしかつぎに後始末させる。それが力士への修業の一つなのだ……ということをだ。少年の私は何故か、ひどく赤面し、その後々まで、そのことを頭に浮かべては独りドキドキし、それが本当か否か、ばかみたいに毎日それればかり、考えていた思い出がある。そして、どうしてこんなことに、とてもこだわるのか、我乍ら不思議だった。更に、うぶ毛でないものが密生したのを知った頃、私は同じ空想の光景を自然に脳裏に浮かべては、激しく興奮するのだった。

空想する私の顔上に君臨するのは、常に、ぶ厚い肉のボリュームの、あの逞しく、ばかばかしいほど誇張された山の如き巨臀、そして、その排泄物なのだ。……ということで、少年時の私は相撲とりに、とても関心を抱いた。といっても昔のこと、地方都市住いの私にとり、実物の相撲取りを見れるのは地方巡業に来た時のみ。力士の何やらは巨体に比し大変、貧弱だ、なんて悪友にきかされたこともあり、関取りが、くそを垂れる際、本当にふかせるか否か、及び、貧弱は真実なりや否やというのを、じかに確かめてみたくて、たまらなくなった。

私は、そっと、よしずでかこった、臭気たちこめ、溢れ出そうになっている仮設トイレの蔭で長いこと待った。やっと、ふんどしかつぎでない、巨漢がやって来た。確かに大関のS。

息をこらす。向こうから、こちらは見えぬ場所に、ちゃんといるから大丈夫……とは思うが、少年の私は、やはりドキドキする。残念ながら小の方。が、かえって貧弱か否かのテスクな感じが面白くないこともないが、そういえば、力士なんて、どいつもこいつも先ずグロテスクさを多少は持っている。

あの際、よしずの内部に入りやがった関取りが、Sでなく、元横綱だったTかKのような肥満NO1力士であったなら、そして、そのTかKが大をやりやがったとしたなら、どんなにすてきであったろう（もっとも、小とは興味があったが……。そしてS関というのが、体躯雄大ではあるが、アンコ型ではなかったので、例のサイズへの考察資料には余りならなかった。勿論、二度と、よしずの内部をのぞくなんて、考えただけで身ぶるいがするばかりであったから、あのSが一人きりで、小の方をやりやがった不運もあって、私はこの眼でたしかめるべき私好みの貴重にして、唯一のチャンスを永遠に、逸してしまったのではあったのだ。もっとも、あのとき、あのS関が、小でなく大を、お伴を従えてから、上述のようにSは、腹も突出しておらず、どちらかと言えばアクロメガリック（末端肥大症的）な巨人型の形相の持主ともいえぬことともないからだ。そんな少しばかりグロ好みとは余り言えないのは確かだった。何故

してもTかKであれば太鼓腹がすてきに突出しすぎてて、それによって、ひょっとして、さえぎられてしまい、さだかな観察は無理であったかも知れぬが……）ということを、後々まで、残念に思ったのも、我乍ら奇怪にしてなつかしい、思い出というほかないのである。

ともかく、この私にとって、肥満体すぎて手が達しない尻ふき下郎採用、という、世にも奇妙にしてバカバカしいような、しかし、実に明解な空想のパターンこそ、最上のものであることを告白せねばならないのだ。もし相撲とりがそうであるならば、臀部へのリーチに難点あり、又は苦渋あるのを利用、又は苦肉の策として、かえって力士への欠くべからざる修業（考えてみれば、大相撲なんてのは日本独得であるのは当然で、相撲みたいにひどい階級差別スポーツ、いや興行？　は、タテ割り社会の典型でしかないような、日本国でしか成り立つ筈もないのにすぎない。いや、存在理由は、おそらく、もう一つある。元来、体躯貧弱な日本人の巨人への意識的、又は無意識的憧憬？）だなんて、何とも巧妙というほかはなく、多分に我ながらグロテスク趣味というほかはない。

手がとどかぬくらいの太っちょになっちまった人間などと、全く以て奇怪、且、哀れというほかなさそうだし、肥満といえば、ビヤ樽や河馬や象は先ず先ずとして、やっぱり、すぐに連想するのは、おそらく豚（去勢豚からの連想もされて、ローマ時代のかんがんも）ぐらいであろうから、豚を崇拝、三拝九拝するなんて、ばかばかしいもいいところ。何しろ「M派のなかに三つあり。その一つ、ブタこそ、人糞を平らげるは……」なんて、ブタこそ、人糞を平らげる哀れな家畜ではないか、なんてところに落着いたりして、相手にしてもらえないと困るから、たわごとともこの辺でやめねばならぬけれど、河馬やビヤ樽や豚を連想すること自体が既にマンガ的、そして始めから我が趣味も矛盾に満ちているといわざるを得ぬ。

例の如く、何を書いてるのか自分でもわからなくなってきたが、河馬登場で、アブ的動物記事を無理やりにこじつけ、しめくくることにする。

## 新発足　懸賞〈告白、手記、体験〉原稿募集

☆賞金☆

| | | |
|---|---|---|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千円 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千円 |

☆規　定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものが大切だと思いの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。

一、締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

# 松の木丸太

この物語の発端近く、カンヌ沖でキャロリーヌ二世号が沈没した際、ネプチューン号に収容、捕獲された映画女優、望月レイ子を思い出していただきたい。（第二回参照）

アラビア海での脱走事件は彼女の罪には、ならない。野生の獣が逃げようとするのは当り前のこと。むしろ、隙をあたえたアマゾン女兵の責任とされた。しかし、レイ子にしても、その後、長い間、全身の日焼けやタダレで苦しまされたから、脱走の罰を受けたのも同じことだったといえるかも知れない。（第四回）

それ以来、彼女は人が変わったようになってしまった。レセプションの印象も悪くなかったので、拷問檻を免がれて、いきなり懲治檻に渡され、大牢内で約一カ月を過ごして来た。その間、一員となるパティシペイト「お調べ」と称して喚び出されることが平均して十日に一度位、「懲治の目的を果たすために最も力が注がれるのが課せられる牢名主や、その他、少数の役人を除いて、懲治檻は女囚を長期間、拘束するためのものではないのだから、カリキュラムの消化に重点が置かれている。約百人を十日で処理するためには一日、十人ずつが喚び出される勘定になる。

カリキュラムといっても、有明に対する忠誠心と、この国の一員となるパティシペイトの精神を涵養することに最も力が注がれるのである。すなわち、建国の理想とか、憲法などを徹底的に、叩き込む教育が行なわれる。又、表面だけの屈従にゴマカされないために種々科学的チェックも併用される。たとえばキーラーのポリグラフを改良して、呼吸、血圧、皮膚電気反射、脳波などのデータをコンピューターで綜合的に判断できるような装置が開発され、すぐれた効果を発揮しているの

も、その一例といえよう。この国では豊富な生体実験の蓄積があるので、薬物によって本心を露呈させる手法にも、格段の信頼が寄せられている。要するに、心の底からこの国の秩序に服し、積極的に参加しようという意欲を抽き出すことが求められているといってよいであろう。したがって、早いものでは一カ月で、出て行く場合もあるし、反面、一年経っても、まだ出られない者も出てくるのである。

「ノーワン・ウイル・ディナイ・ザット・マン・ハズ・ヒザトゥ・クリエイテッド・ザン・ヒズ・オウン・スピーシス」

素敵な発音だった。

今日も大牢からひき出された望月レイ子を含む八名の女囚たちは、休養所の中にある研修室に集まって憲法の講義を受けていた。隠惨な牢内とは打って変わって、極度に洗練された豪奢な雰囲気だった。何よりも、スチームバスやマッサージをはじめ、ゆっくりと時間をかけたメイクアップで八人とも生きかえったようになっていた。地上の暮しといっても、彼女たちが、かつて体験したものとは雲泥の相異があった。それは昔の女王様か大富豪の暮しに匹敵していた。何というコントラスト。タッタ一枚の畳に十人以上も、それも正坐して長い毎日を過ごさなければならない牢内、たまに呼ばれれば何かオゾましい、恥かしい行為を強いられる生活。その中で十日にイッペンだけ、ここで極楽の時間が過ごせるのである。牢内が厭悪すべきものであればある程、休養所での短い、ひと時が熱烈に希求される筈である。

先生は、このため、特に有明から任命されている教育部の高官だった。高官といっても女性ばかりのこの国では、三十才を越す者は殆どいない。松谷綾子も未だ二十五才になっていなかった。何しろ、いきなり長編小説でデビューして日本のサガンと騒がれたのは、まだ在学中、十九才の春のことだった。大学を出てから文芸座に入り、ミッチリ新劇を仕込まれながら、傍、資金嫁ぎのテレビ出演をして、この方面でも相当に知られていた。

それが三年前に南米訪問中、突然、失踪してしまったのも、まだ耳あたらしいニュースだった。思いもかけず、彼女が生きていて、この国にいる。――と知った望月レイ子は、今更ながら有明の組織の大きさを知って吃驚するのであった。

**前号まで＝有明の独裁する秘密国家では、世界中から誘拐されてきた美女が、その材質に応じて五段七階級に分類されて、夫々の立場で有明に奉仕することが求められる。麻薬事件で死ぬ程苦しみ抜いたイーラ、学生運動の女斗士、和製ジャンヌこと小林敏子などは、今やこの国の自由人になるための、いわゆるエリートコースを進んでいる。このコースといえども、まず懲治檻での、おそろしく古風な仕置きを受けなければならない。**

松谷綾子の眼は知性に輝き、その言葉には強い説得力があった。公平にいって、英語を主文とした憲法前文は素晴しい名文とされている。松谷は女囚たちに暗記することを求めて発音やイントネーションを直してやった。そして又、その意味を次のように邦訳した。

――人間は何といっても、人間の肉体以上に美しいものを未だかつて、創造することが出来なかった。就中、女体美に表現される繊細で、しなやかな美しさは、何ものにも替え難い宝物である。しかるに現代の人間社会は、衣服や知識を鼻にかけることによって、その本質的な自然の美しさを冒瀆している。マスターは、若く美しい女性を、真なる希望に蘇らそうと企図した。しかし、不自然な地上生

活、汚染された文明の中では、純粋な裸体美を主調とする社会を造り出すことは不可能であった。ここにマスターは独自の理想による秘密国家を建設することになったのである。きわめて理想主義的な、この国の一員となるためには、並大抵なことでは駄目であった。すべて自由意志に反して拉致捕獲され、複雑な教育訓練を経て、はじめて自由人たる資格を得るのである。このこと自体、マスターの広大なる慈悲心から与えられるのであるからすべての国民は悉く、マスターに対する絶対従順の義務を負わなければならない。このことを誓い、約束することによって、契約神的なマスターの僕（しもべ）となることが許される。――

きわめてドグマに満ちたレトリックではあるが、ここに来てしまうと、これを異とする女囚は殆ど気の強い女囚でも、思わず吐息をついてうなだれてしまう。つかの間の天国は、そのあとに来る地獄を一層、耐え難いものにしてしまうらしい。

フカフカした肘かけ椅子に身を沈ませ、松谷先生の講義を聞きスライドを見て夕食前のひととき、女囚たちは裏鞘へ出ることを許される。戸前口と裏鞘を仕切る格子が開放されるからである。勿論、外鞘へ出るのだけれど、砂を敷きつめた土間は足のいいし、第一、ふんだんに人工太陽の光が、注がれている。そして、ここでは先輩、後輩の区別もなく、ぐるぐる歩き廻っていればいい。窮屈な牢内生活の、いって見れば、ストレス解消の効果が期待されているのである。

望月レイ子たち八人が帰牢したとき、皆はまだ裏鞘にいた。

午后四時、イヤでも牢内に帰らなければならない。原則としてカリキュラムは朝九時から午后四時の七時間、内、三時間はタップリと昼食や入浴に費やされる。だから、午前中二時間、午后二時間が教課時間である。

再び看守によって、赤白ダンダラの本縄でピシピシと上体がシメつけられると、どんな気の強い女囚でも、思わず吐息をついてうなだれてしまう。つかの間の天国は、そのあとに来る地獄を一層、耐え難いものにしてしまうらしい。

格子は施錠されているから、逃げることは出来ない。

裏鞘といっても、広さは牢内と変わりはないのだけれど、砂を敷きつめた土間は足のうらに心地よいし、第一、ふんだんに人工太陽の光が、注がれている。そして、ここでは先輩、後輩の区別もなく、ぐるぐる歩き廻っていればいい。窮屈な牢内生活の、いって見れば、ストレス解消の効果が期待されているのである。

望月レイ子たち八人が帰牢したとき、皆はまだ裏鞘にいた。

ガヤガヤという声が一段と高くなる。
又しても、例の新入りイビリが始まっていた。犠牲者は、いわずと知れたイーラで、彼女は太い松の幹を跨がせられていた。
切口五十センチばかり、長さ二メートル程の磨いた丸太だった。見えない下部に深い切れ目が入れてあるから、上面にはワレ目一つない。ただ、峰の真ん中に枝が出ていたのを利用して突起がこしらえてある。約四十五度に傾いた枝は、タンネンに削られ、ヤスリがかけられている。
丸太は裏鞘の一隅に、心持ち斜め水平にして、上端で約一メートルの高さに鉄ヤグラを組んで固定してあった。
イーラは丸太に跨がらされていた。
「ゆ、ゆるして。もう……」
噴き出す汗に髪はヘバリつき、彫りの深い顔は一層、凄艶だった。
動きが鈍ってくると、例のキメ板で、したたか殴られる。
イーラは、かつて麻薬シンジケートに、つかまって酷い羞かしめを受けてよいだろうが、しかし全く奇蹟とでも言って来た。それだけで来た。それだけ純潔だけは冒されずに済んだ。恋しい新津謙介にプレゼントするために、が彼女の救いだった。
思っていた。ところが、今やその希いも、まことに呆気なく、踏みにじられてしまった。
牢名主は、いつまでも止めさせてくれない。
「ヨイショ、ヨイショ……」
非情な連中が、まわりで拍子をとる。いや非情といっては、可哀そうであろう。こうしなければ、自分たちまで仕置きされる立場だった。
「イヤ、もう……イヤ」
遂に狂ったように暴れて、丸太から逃れようとしたので、四人が飛びかかって、もちろん、イーラは立つことさえ、できなかったので、当番に支えられて辛うじて戸前口を、くぐる。
が、より適切でシャニムニ、押え込んで、ひっぱり込まれたといった方「嫌とは言わさないよ」
牢名主が、スゴんでみせた。
「何さ、ツルも持って来なかったじゃない。ご牢内のご定法を教えてやってんのが、有難くお受け出来ないというんなら、それでもいいよ。こっちの気が、済むまでやってやるから。サァ、おまえたち、お嬢さんが、お疲れだとさ。サッサと手助けをして、おあそびを続けさせてあげな」
「応（オウッ）」
と怒鳴った役人女囚たち、よってたかってたちまちイーラの両腕をおさえたり、足を摑んだり、そのあげくの果てに、
「ワッショイ、ワッショイ」
と、ゆさぶり始めたから、たまらない。
「アッ、痛い。イーラが、あわりったけの声をふりしぼって悲鳴をあげはじめた。
騒ぎは鍵役が、内鞘に戻ることを命じたので、ヤッとおさまった。

## 修行

ジャンヌの懲治檻生活はキッカリ一カ月で終わった。審問判定の通りだったのである。
牢内生活では誰でも、意地の悪い牢内役人のし、そうでなくても何かボロを出してしまうタクラミによって何某かの罰点がつけられ、不可避的に刑期が延ばされてしまうことが通

例だったから、ジャンヌが判定通りに出牢を許されたのは、極めて異例だったといわなければならない。彼女が所謂、マスターのお手付だったことも考慮されたのであろうが、それが牢内に知れていたら、ジメジメとした嫉妬心から、彼女は余計いじめられたに違いない。その秘密は「ツル」にあった。上からの指示で看守長がジャンヌにツルを持たせたのである。入檻検査のとき、カプセル（マイクロフィルム）と「黄金の卵」を交換しておいた。入牢者に許される隠し場所は一カ所だけしかないからである。

江戸時代の大牢では、ツルは金であった。しかし、貨幣のないこの国では金とか銀とかいっても、装飾用以外の何ものでもない。とすれば、黄金の卵といっても、それだけでは価値を持たない。価値を持つのは、その内容だった。如何に大きな権限を与えられているからといって、所詮、牢内役人は囚人にすぎない。彼女たちだって休食所へ行って地上の生活を、とり戻したい気持は熱烈だった。黄金の卵は、寄木細工のように、複雑な部品をハメ込んで出来上がっていた。分解すると、全部で十二箇に別れる。どの一箇をとってもその一箇につき、一日の休養所送りが認められることになっていた。牢名主は、この権利を自分でもとり、又、部下の誰彼に与えることが出来た。このことは懲治檻の中では、金銭に替えることの出来ない恩恵だった。

ツルは内鞘へ入るとすぐ尻をひっぱたかれる前に、戸前役が発見して、

「ツルありました」

と牢名主に声をかけ、嫌も応もなく取り上げてしまう。高いところの牢名主は手渡された卵をシゲシゲと見ながら、

「新入り、よく来たね。楽にしていいよ」

ジャンヌには畳一枚が、あてがわれた。前にも述べたように、一畳に十人以上も坐らされる牢内では、これは破格の待遇だった。

収檻中は厳しいトレーニング兼テストの連続だったけれども、はじめから、この国の異様な秩序、体制を肯定し、一刻も早く同化しようと願っているジャンヌにとっては、むしろ易々としたことであった。

こうして、記録的な短期間で刑期をつとめあげた彼女には、次の関所が待ちうけていたのである。

それは、忠誠心（有明に対する絶対、従順を意味する）を徹底的に叩き込むためのオリエンテオーション、乃至は、修行であった。機械や設問によるテストの結果が如何に抜群であったとしても、それは、その時点におけるジャンヌの気待を示すにすぎない。要求される忠誠心とは、マスターのためなら火にも水にも飛び込む隷従であり、且また、それが生涯、変わることなく持続するものでなければならぬ。そこに忠誠修行の意味がある。

修行は二つのクールから成り立っている。一つは「静の修行」と呼ばれ、座禅を主体にした自己凝視、自己反省の修法である。もう一つは「動の修行」と呼ばれ、等身大の有明像に触れながら立礼、伏礼を繰り返すのである。ともに七日間を要する。

出牢の日、ジャンヌは看守長から、その旨を言いわたされ、はじめて本縄を解かれた。戸前口から僅かの距離ではあっても、規則によって本縄を打たれなければならない。身分証明のマイクロフィルムを入れたステンレスのカプセルを返してもらう。例の通り、たった一つきりしかない、ポケットに、しまわなければならない。看守長に見守られて、そうするのである。ジャンヌは全身を赤く染めて羞らいを見せるのであった。

休養室で斎戒沐浴をして心身を浄める。浣腸をして腸内を空にし、胃の中まで洗滌するという徹底ぶりには、今更ながらジャンヌを、おびえさせる何かがあった。特にやって来たエミー司令が指揮して、医務局のナースが二人、まるで生命のない人形をとり扱う様に、ジャンヌを洗い抜いた。

これだけでタップリ一日は、かかる。水のほか食事は一切、あたえられない。

深夜、零時から静の修行に入った。

四畳半ほどの狭い部屋が行場だった。まん中に一メートル四方の硝子のテーブルが設けてある。その上に、あがって座禅を組むことが求められた。両足首を腿の上にのせる完璧な膝組みである。もちろん、一人では出来ないので、ナースが手伝った。膝がミリミリとして、ジャンヌが小さく悲鳴をあげた。天井から下がって来たパイプに、後手にロックして、ギリギリまでに引きあげる。高手小手になってしまうので、更に頭部を革帯でパイプに固定する。顔がグッとひかれるので、嫌応なく胸を張った姿勢になった。

次にテーブルの四隅から硝子がセリ上がってきて、約一メートルの高さまで、ジャンヌをスッポリ包み込むようにしてしまった。いいかえれば、ジャンヌは硝子板で出来た一メートル立方の箱の中で座禅をしていることになったのである。

外の照明が消され、箱の中だけスポットが当てられると、硝子は忽ち鏡に変わって、数

「今から四限りないジャンヌの裸身を映し出すのだった。

更に、ジャンヌの正面は実物幻灯のスクリーンを兼ね、一定時間毎に、ジャンヌの前后左右上下まで、次ぎ次ぎと大映しに投影して行く。床面の硝子に圧しつけられた身体が、床下の鏡を経て正面に映る。我が身の哀れさをあからさまに見せつけられ、顔を真赤にして目を、そむけようとするけれども、頭を押さえている革帯は、ビクともしない。

エミー司令が厳しい口調で

姿勢のままたきをしてない。一分の光電管がす。同時にまだ目をあとになってません。見つめるのスしなけれ

昼夜の間、飲まず喰べずに、この、自分をみつめていなさい。まばもいいけれど、目をとじてはいけ以上、目をつぶっていると、正面感じて、警告のブザーをならしま、それは記録されます。それでもけないと、電撃があなたを襲うこいます。ですから、眠ってはいけして、自分の肉体を隅から隅までです。いいですね。この関門をパば、あなたは自由人になれないの

ですから」

と言いつけて、出て行ってしまった。

あとには、身じろぎも出来ず固定されたジャンヌが、必死に両眼を見ひらいて鏡に映し出される自らの肉体を、複雑な気持で眺めているだけであった。

四日、経って、やっとのことで桎梏から解放されたとき、ジャンヌは下半身が萎えたようで、足腰が全く立たなくなってしまっていた。一日に一回、栄養補給の注射が行なわれながら、肉体のみずみずしさを保ったのだけれども、はげしい渇きと空腹感は、どう仕様もないことであった。用便もタレ流し放題で、長さ十センチ、巾三センチくらいの長方形穴が、下の硝子にあけられてあったので、そこから床下の容器へ落ちるように出来ていた。いずれにしてもそうした排泄の生理が、目前のスクリーンに映し出されて、もとの美しいこれでもか、これでもかというように、体と体とを一生懸命である。

健康な脚線を取り返そうと一生懸命である。それでも、ジャンヌの心は悶々として楽しまなかった。何か生きる張り合いがなくなってしまったからである。愛する相手は人間でなければならない。対等の位置で、体と体とをブツけ合うものでなければならない。有明がいよいよ小さく、とるに足りぬ虫ケラのようであるという自覚潜在意識の中に定着して行った。それと反比例して有明は、いよいよ大きく、彼女に畏怖の念を起こさせることになる。

ここで、彼女の心の片隅に僅かながら残っていた自惚、つまり、自分は有明に抱かれたのだ。他の女たちとは、ちがうのだという自意識がスッカリ落ちてしまったのである。

虚脱したようなジャンヌは、再び休養室に戻されると、三日間、いたれりつくせりの手当を受けた。断食のあと、急に喰べると身体をこわすので、軽い流動食から徐々に普通食に戻して行かなければならない。萎えた両足にはマッサージが繰り返されるしですから、唇を次第に

で刻み込んでありますから、覚えるまでは、それを読んで結構です。ただし、一字一句も間違えることが許されません。いいですね。こうお唱えするのです、大きな声で。

≪ひとつ、身も心も、わたくしのすべてを、マスターにお捧げいたします。（心）

≪ひとつ、身も心も、精根をつくして、マスターにお仕えいたします。（技）

≪ひとつ、身も心も清潔に、美と健康を保ちます。

これは、この国では『心技体の誓い』といって大変に重要なものです。台座に仕掛けられているマイクを通して、コンピューターが正しく唱えられたかどうかを判断します。パスすると、リーンと美しい鈴の音が聞こえてくる筈です。それを聞いたら、スグまた立ち上がって、はじめの動作を繰り返すのです。これを七日間のうちに、壱万回以上、行なわなければなりません。一日にして一五〇〇回が目標です。すから、どこまで果たしたかは、すぐわかります。とに角、最低が壱万回で、これ以上、多ければ多い程、忠誠度が高いと評点されます。はじめのうちは、ともかく、お終まいに近づくにつれて大変ですよ。でも、これが最後の関門ですから、あなたも、どうか頑張って下さいね」

有明の大理石像は床下からの、フットライトだけを浴びて、神秘な隠影を作っていた。少なくとも、ジャンヌにとって、それは痺れるような雰囲気だった。

エミー司令が、御像の前の床に長跪用の小さな絨氈を敷いてくれた。

その上に、ジャンヌがスラリとした裸身をそれだけで、もう御像とのコントラストとが融合して、見事なカップル像を創りあげてしまった。

生き生きとしたジャンヌは叫んだ。

「おお、マスター！」

（未完）

## 川路むら子の狂態

≪強烈な被虐女性≫

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあっと驚いた典型的なM女性川路むら子さんの要望によって彼女のあらゆる被虐の狂態を再び刻明に描写し、ここにファンの手元に提供することにします。

### 股間縛りにうめく

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むつ≫

一糸もまとわぬ裸身に只悪魔のような執拗な縄目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

### 羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むな≫

如何に被虐を求めているとはいえ余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

### 妖気溢れる開股責

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むま≫

ねっとりと脂肪を浮かした素足に縄をからませて、左右に引き開けば忽ち妖気が充満してくる。

### 全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むや≫

縄尻をとられて追い立てられれば、もう貴め手の意のままに、どうしょうもなく開陳してゆく。

### 臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むわ≫

後手に縛られたまま、臀部を高々と持ち上げて肛門を晒せば恐ろしい浣腸器が近々と迫ってくる。

### 露出した全裸肢体

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むゆ≫

諦めきった表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

### 両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むえ≫

自分の顔面より上に両足を開いて挙げさせられた姿態をかくすすべもなく身悶えして耐える。

### 壮絶臀部責の妙技

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むお≫

ありきたりのM女性であったらこのような責めは許容しないものであるが彼女はやはり違った。

### 悶悦海老縛り地獄

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むも≫

身体が二つ折りになった苦痛もさることながら羞恥の個所があからさまになる無防備感はひどい。

### 片足吊りの全裸像

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪むみ≫

不安定な片足吊りで全身を戒めるように見られる羞しい苦痛。

## 再びむら子の狂態

本誌五月号で塚本鉄三のペン≪片えくぼのマリア≫で再登場した川路巽子は耐え難い被虐の妄想に駆られて三度、四度、鮮鋭なレンズの前に、その緊縛の裸身を晒らしたのであった。お申込みは代金同封の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号、天星社宛へ、どうぞ。

### 開股責と強烈縛り

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かる≫

両膝を棒にて開股縛りにしたり横臥にて開股させたり椅子を用いた裸縛りなどむら子好みの責め。

### 緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かう≫

身動き出来ぬまで縛られたむら子の鼻を煙草、ドライバー、手指などにて徹底的にいじめぬく。

### トイレの排泄縛り

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かり≫

全裸で後手に縛られたむら子をトイレに追い込んで無理矢理排泄させるところをスナップする。

### 逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かぬ≫

縄を用いて逆エビ縛りで責め抜けば流石のむら子も「痛い痛い」と悲鳴を挙げて泣く。

### 棒責めの全裸女体

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かそ≫

豆絞りの猿轡以外一糸まとわぬ女体に厳しい縄縛り、棒を使って激しく責めて強烈に悶えさす。

### 椅子責でいためる

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かよ≫

椅子を使ったグルグル巻きで乱れた髪を縛られ転落の恐怖に激しく悲鳴を放つむら子の妖しい顔。

### 柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かれ≫

部屋の中央にある柱に全裸のまま前面立縛りにされたむら子は周りの視線を全身に浴びるのだ。

### 後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かほ≫

厳しい縛りに恍惚として悦楽の境をさまよっているむら子の髪を掴んでいたぶり続ける悪魔の触手

### 両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かや≫

両手を揃えて頭の上へ挙げさせぐるぐる縛りにすればむら子は振り解こうとして、もがき狂う。

### 悦楽責めアップ集

大手札三枚一組　四〇〇円
川路むら子　略号≪かわ≫

柱と棒利用の開股責めを初めとして柱縛り棒責め、両手挙げ責めなどで痛めつけた大写し。

女責め図絵の系譜

# 東西残酷秘抄

南彦造（カットも）

英雄色を好む——と云うが、彼等英雄の行為が、偉大であればあるほど、その「残酷ぶり」も到底、凡人では考え及ばぬほど、奇想天外な趣向を見せ、その独創ぶりには愕く。

古代エジプトの王者や、中国三千年の歴史を彩る各皇帝。蒙古大王クビライなど屈指に余りある英雄が、創案した残酷無比な刑罰の種々相はやはり第一級で鬼気迫るものだ。

太平洋戦争で、日本軍が、残虐行為をしたからといっても、彼等英雄たちの行為に較べたら、とても太刀打ち出来まい。彼等の演じた惨酷趣味旺盛な刑罰の数々は、まさに動物的だった。

だから彼等の築いた華麗な文化と、神秘的な美と謎の歴史は、人間の血や肉の呻き声がする。

だが……それは、また私の責め図絵の構想を、堪能させてやまない。栄光と繁栄に満ちた王朝史の裏面には、何時も、暗く悲しい、残酷な事実が、渦を巻いているのだ。だからそんな秘められた部分にスポットを当てたくなる。人間とは、生来『覗き趣味』なのだ——そうである。

○

紀元五世紀の後半。黒海の北に発し、民族ぐるみ大挙移動する遊牧人種だった——フン族が、アッチラ大王をいただき、花の都ローマに侵入し、全土を席捲した。ローマ帝国はフランスを含むヨーロッパ各国と連合し、アッチラと戦ったが、このフン族の残した残忍酷薄な〝女体凌辱〟の歴史は、映画や演劇の好材料で——「高い鼻、豊満な乳房、象牙肌の美女」を求め、飽くなきヨーロッパ侵攻と酒池肉林の夢を結び、艶て、亡んだ姿は、木曽の山猿と蔑まれ、義経に敗れた、源義仲に

も似て、哀れだが、彼等が瀬田川に追いやられたように、ヨーロッパ連合軍のため、ライン河の東へ撃退されるや、捕えた女たちを、ヌードとなし、珠数つなぎにして、河中に投げ込んだのである。

水の冷たさと疲労で、溺れそうになる女たち。彼女等は、鼠捕りの網に掛かったドブ鼠が水につけられたあの苦悶よろしく、河中でのたうち、転転し、ラインの人魚よろしく、断末魔の水中輪舞を展開したのであった。

その頻死の人魚たちが演ずる水中踊りの妙技を十分たのしんだあげく、生殺しの女たちを、河岸に引き上げ、こんどは、放れ馬の尻尾に女たちのブロンドを結びつけ、馬と一緒に走らせたのだ。

巨大なお尻を振り、豊かな乳房をプリプリさせて必死で走る白い裸女たち——鞭打たる仭に、疾駆する馬、馬、馬——だが、女たちは、馬について走っては行けず、力つき、バタバタと地面に打伏したのである。馬は、情容赦なくこの白い女体を引摺り走る——阿鼻叫喚、悲鳴の交響楽だ。手足の皮は剝げ、肉は飛び、破裂した内臓は、鮮血の尾を引きやがて女たちの白い体は、惜しげもなく四散した。

フン族の東洋的な野蛮性は、当時の白人どもを震えあがらせたと云う。そして、彼等の残した、女体惨虐の数々は、後世の刑罰や、刑具の秘史に、一つのエポックメイキング的なショックを与えたのであった。

○

美濃（岐阜県）稲葉山城主、斎藤道三は、一介の油売り商人から身を起こし、土岐氏の家老職長井の家来となり、更に、この長井を殺して、土岐氏の家老となった男だ。

戦国時代には、数多の英雄智将が輩出したが、この道三ほど残酷無惨な成り上がり者もあるまい。自分の立身出世のためには手段を選ばず、続いて土岐氏を追い出し、美濃の国主となったのであるが、おまけに土岐氏の寵妾、お由の方をも自分のものにして終まったと云う曰くつきの男。

皮肉なもので、この道三は道三を討ち、稲葉城主となった。義竜は道三を討ち、稲葉てたく父の仇を討ってたわけで、道三のような非道にして無法者の最後は、時代を問わず哀れと云うほかない。

しかし、この道三と云う男は、色白で柔和な割にサド癖があり、何処となく凄味があったと伝えられる。

機嫌の悪い時、ふとした落度を理由に、愛する家来まで、なぶり殺しにしたと云うし、これでは命運がつきるのも仕方あるまい。

彼は、意に従わぬ女があれば、家族もろとも熱湯で煮殺したと云う惨刑は有名で、明日の生命をも知れぬ戦国の英雄たちが、女を求めてさいなみ、責め苦しめる時だけが、死に直面している己を忘れることが出来たのだと想えば、南ベトナムに於ける米軍が起こした、現地民虐殺の〝ソンミ村事件〟の顛末など、あながち分からぬでもない。

何はともあれ——衆人環視の竹矢来の中で一糸纒わぬ女たちが、身内の者たちを煮殺す湯水を、大釜いっぱいにたいている。

しばらくして、水は熱湯に変わる——固く縛られた者たちは、泣いても喚いても逃げられるものではない——見物人が、どよめいたと湯釜の中に沈んでいった。

天文二十三年——義竜は道三を討ち、稲葉城主となった。義竜はたく父の仇を討ってたわけで、道三のような非道にして無法者の最後は、時代を問わず哀れと云うほかない。

聴て、女の番だ。下郎どもが気を失った裸の女たちを軽々と抱きあげ、煮えた死体の浮かんでいる熱湯の中へと投げ落とし、気付い

て悲鳴をあげ藻掻く白い肢が虚空に躍った。湯玉が、はね散った。白い肉の塊りが、次々と湯釜の中で煮えたぎっては、揺れ動いていた。

秀吉の生命を狙った石川五右エ門の『釜湯での酷刑』は有名だが……中国のインのチュウ王の〝釜ユデ〟は最も惨烈を極めている。熱湯ではあきたらず、熱し切った大釜の中へ罪人を入れ、下駄を履かせて直立せしめてから、真赤に焼けた釜の中に食用油を注ぎ込んだ——と云うから、人間のフライが、簡単に一ちょう出来あがって終まう形だ。

○

一四五三年にはフランス革命が勃発した。牛肉屋の一主婦が起こしたと云われる、この革命は、また残酷な刑罰の方法でも知られている。

その代表的な処刑具ギロチンは、皇后マリー・アントアネットの豊満な襟首をボトンと斬り落としたので有名になったが、極く最近まで欧米諸国で使用されていたのだから、妙な曰くつきの刑具と云えよう。

この革命でルイ皇帝を始め、多くの宮廷関係者、及び官女たちまでが惨めに殺されたのだが、就中、美食で美肌の塊りのようだったアントアネット后を、群衆の面前で、ヌードにした挙句、ギロチン台に乗せて首を落とした。見事なブロンドの髪は刈り奪り、編糸にして敷き物を造り、下賤の者が、尻の下に敷いた——とも云うし、見事な双ツの胸の隆起は、その余りの美しさの故に切り奪られ、ペアで使える洋酒の変形カップに変わった。

それは、形を崩さずに大きなワインカップとし——中味の脂肉だけを抜き取った上でなめし、乳首を下に、切り取り口を上にした自然の形、その侭の豊満さで——眺める者をして垂涎の的たらしめると云う。

私も、ある文献誌の写真でそのプロフィルの一端を見聞し得たが、その形態の美事さ、乳首のポイントを生かした〝逆円垂〟の豊かさは、熟れた〝西洋梨〟を想わせた。その大柄な、たたずまいは眼に鮮かだ。

その他の肉体については、詳細を避けたいと思うが、憎しみと、上流社会の女体に対する好奇心とにとり憑かれた群衆が、それをどう扱ったか？　美形であればあるほど、群衆は飽くなき苛酷の手を加えたであろうことは——論ずるまでもあるまい。

○

群衆はベルサイユ宮殿に雪崩れ込み、凌辱の限りを尽した。

余談中で記憶に残るのは、群衆が美しい宮廷女に挑み掛かり、裾の円いロングスカートを剝ぎ奪ると、下着やコルセットに附着した香料に酔い痺れ、時を忘れた。

だが飽きると、その口中を拡げ、閉じないようにクツワを噛ましておいてから、水桶で何回も井戸水を呑ませる。たちまち、ひき蛙のように脹んだ胃袋の上に、ドンと男が飛び乗ると、噴水のように音をたて、吐き出される水——再び注水が加えられる。

やがて、尿意を覚えた女体は、凄い形相で耐えようとし、上品な女の表情が硬直した。

「ギャーッ」

不意に一人の男が女体の腹部に飛び乗った。これで上品な礼儀作法を身につけた淑女は最後の膀胱を破裂させて終まったのだ。

○

こうした、所謂「水責め」の方法は、我が国に於いても、特権階級や、獄吏、遊廓の楼主などが、好んで弱い女たちへの見せしめに利用した。

「車井戸に縛られ、何回も井戸水に漬けられては引き上げられる腰元」――番町皿屋敷のシーンではないが、苛酷な大名の仕打ちや妓夫太郎などの変態刑罰の種々相を、私たちは田舎芝居やピンク映画のシーンなどで眺めることが出来る。

それは昔から手近な道具で、簡単に責めたてることが出来たからであって、私の知人で戦時中は中国戦線で特務機関員の手先だったHは、敵のゲリラの拷問に――よく「水」を使ったものだよ――と話したくらい、ポピュラーなもので、一般的になっている。

Hは、その時の状態に就いて――「人間の胃袋って奴は、奇妙なもンで、何杯呑ましてもゴム袋のように、腹らんで、水が入って終まうもンだ。すると、やっぱり胃袋の辺が妙に腹らンできて蛙腹になるから、相当入ったな？　と大体の処が外見で分かる。だから頃合いを見計らって、そいつの腹の上に乗る。ガッと呑んだ水を口をつまんでおいて、ドッと噴き出す。また、鼻だ。忽ち蛙腹になる処から、槍で突いたり、遠くから弓矢で射たり」したというから――人間ルーレットと云った処か（？）

とにかく、こうして血と欲に飢えた蒙古人たちは、長い時間をかけて人間の苦悶を肴に酒を呑み、狂気の如く白人を虐んだ――のであった。

この蒙古軍が日本の博多に来襲したのは、文永と弘安年間の二回に亘ってだったが――見遥るかす、蒙古軍船の船端に艶にはばたく白い蛾のような装飾品が、眼に映った。よく見れば、白蛾と見たは見事な婦人の裸像で、それが上になり、下になり、あるいは横更に大陸に逃れて、逆しまに吊られて舷側を飾り、釘でになったのだ――と伝えられるほど、彼の勇猛果敢振りは、洋の東西に知れ亙っているがその残虐振りに於いても、彼等は壱岐島や対島があったらしい。

だから、あの婦女に優しく、紳士的だった義経のなれの果てとは、どうしても結びつかないのだが、彼は捕虜を「車責めの刑」にかけ、女を捕えて楽しむのを、戦争目的の一ツにした――と伝えられる。

その方法だが――「大きな車輪に、捕虜の体を大の字形に縛りつけて回転させ、離れた処から、槍で突いたり、遠くから弓矢で射たり」したというから――人間ルーレットと云った処か（？）

とにかく、こうして血と欲に飢えた蒙古人たちは、長い時間をかけて人間の苦悶を肴に酒を呑み、狂気の如く白人を虐んだ――のであった。

この蒙古軍が日本の博多に来襲したのは、文永と弘安年間の二回に亘ってだったが――見遥るかす、蒙古軍船の船端に艶にはばたく白い蛾のような装飾品が、眼に映った。よく見れば、白蛾と見たは見事な婦人の裸像で、それが上になり、下になり、あるいは横しまに、逆しまに吊られて舷側を飾り、釘で打ちつけられていたのであった。云わば〝女体キリスト〟の、大量生産と云った処か？

とにかく酷いもので、彼等は壱岐島や対島を攻略した時に得た「戦利品」を、さんざん楽しんだ挙句、生殺しにしたまま船の横腹に宙吊りとなし――浜辺の鯖やサンマの干物よ

ろしく――珠数飾りとなして来襲し、九州武士の心胆を寒からしめようとの算段だったのだ。

当時の文献によれば――「武士道精神とか一騎討などと云う形式ばった戦斗に酔い痴れていた日本武士の戦法などでは、到底、抗し切れず、苦戦の連続であったから、外敵との戦いを知らぬ日本武士は迷夢を醒まされる想いであったろう。

○

もともと、裸女を血祭に侵略する例は、諸外国には多いのだ。

十五世紀から十六世紀にかけて、ポルトガルやイスパニアが世界の大勢を二分していた頃――イスパニアは、表に貿易、裏に「武装商船団」を配し、商売しつつ悪虐の限りを尽していたのだ。

イスパニアのレガスピと云う海賊は、御承知のように、フィリッピン諸島を占領して、マニラ市を築き上げた男である。

そして、あるインドの港でのことだ。王国の姫を始め、若い女性だけに襲い掛かり、これらの女たちをすべて船に拉れ去った。その数、三百とも云い五百とも伝えられるが、それを船首や帆柱などの各所に一人一人縛りつけ、長い槍などで思うまま、気侭に突き立てたのだ。

予期通りの、阿鼻叫喚の悲鳴――その派手な女の交響楽でエキサイトした男たちは、自分の槍先で突いた女体を引降ろして獣欲を楽しむのであった。

かくて、彼等は諸外国で得た女体ともども金銀財宝など時のイスパニア王にも献上したのだから――想ってみれば『勝者の歴史』はど、インチキなものはない。

○

中世紀のヨーロッパに於ける君主たちは、こうした略奪や強奪で得た土産に、うつつを抜かしていたから〝十字軍〟などと云う、キリストの美名を借りた侵略戦争まで起こったのだ。

一〇九五年に十字軍により、エルサレムが占領されると回教徒はすべて殺され、女子供は人肉市場で〝奴隷〟として売却された。

しかも、なお十字軍は二回、三回と醜い掠奪戦争を続け、肝心のエルサレムの占領などどうでもよい結果となって終まったのだ。

こうして、やがて『少年十字軍』を生み、ヨーロッパ各地から集められた純心無垢な少年少女はパレスチナ戦線へと出征することになるのだが――皮肉にも軍船の持主が私利私欲にたけた海賊あがりの男や、奴隷商人だったから、エジプトに運ばれハレムの〝奴隷〟に売られて終まったのだった。

この美しい少年少女の大部分が、ヨーロッパ各国での名門、領主、貴族などの子女だったと云うから、子孫はザンキに耐えまい。

○

「アイ・ゴー・アイ・シー・アイ・コンカート」（来た、見た、勝った）――これは有名なジュリアス・シーザーの言葉だが、最後の――勝った――を、――犯した――と訂正する方が正しいと思えるほど彼等は〝女狩り〟に終始した。それが侵略の現実かと思うのだが、蒙古族などは、広大なゴビ砂漠の真只中で、放牧の羊を飼い、時には牝羊と同衾し、食欲の侭に愛畜の羊を打ち殺して〝ジンギスカン料理〟などと云う〝残酷鍋〟を楽しむ大陸人種だ。

従って戦争で、食糧が無くなれば、「心配するな、行く手に敵兵の肉がある」と喝破。

「男は皆殺し、女は捕えて、脇を擽る、何とも楽しきことよ！」――と兵の士気を鼓舞したる。

## 読者ギャラリー

### 『苛責』

千草　緋笛

脐を撫る——と云えば、遊廓制度、花やかなりし大正から昭和にかけ、女郎屋で流行った〝脐酒〟などと申す〝遊女虐め〟の男の珍技は、兵隊映画の内容にも、採りあげられ、勝新太郎が、嫌がる淡路恵子の脐酒をなめたサービス場面だから撮影技には流石の恵子も泣いて拒み出演を断わったそうだが、観客への(?)そうだ。この演出にせがまれ涙ながらに脐をなめさせた(?)——と監督から、無理いわけにいかないと云うから、女にとっては如何に屈辱的な男好みの、嘘虐たっぷりの悦楽であるか、想像出来よう。

○

「女の脐に酒を注いで飲む」——楽しみは、酒の味より羞恥で苦悶する女の痴態に興味があったであろうことは分かるのだが、私が、終戦時まで出動していた新橋界隈には、刺戟的な風情が漂い、奇抜なニュースも耳に入った。いまは派手さの失ビルには、妙な想い出がある。

本当か嘘か知らぬが——一週間に一度〝定時刻になるとモンペ姿の老若芸娼妓が、かたまって検番に向かうのを、ちょいちょい目撃しても、関心のなかった私は別に気にもしなかったのだが、ある時、上司の課長から「また検査やな?」との呟きを耳にしてから変に気になった。

噂によれば、芸娼妓には「従業規則」と云うものがあり、定期検診を受けに行くのだ、とのこと。ヒョンなことから女体に関心を持ち始めると、矢も楯も堪まらず文献資料の蒐集に夢中となった。

なるほど「内務省予防衛生局」の〝娼妓検診規程〟によれば——東京地方に於いて行なわれる検診では、概ね次のような点に重きをおいた——と述べてあった。

まず「身長」「体重」「体格」「栄養」「皮膚」「淋巴腺」「頭髪」「腋毛」「〇毛」「月経初潮」「特徴」「骨盤計測」「春機発動期の疾病の有無」「既往の花柳病」「各臓器の健否」「〇部〇門に於ける異常」及び、「疾病の有無」——などだ。

また〝受診者〟を「合格」「不合格」「絶対不合格」の三種に分け、無難な「合格者」

は、医者から「診断書」を貰い受け「各警察署」に提出するのだ。

その沿革史を見れば、「大正五年に警視庁が実施した〝私娼撲滅〟以前には、凄い病毒の蔓延――当時の〝大私娼窟〟は浅草十二階下であって、当局は吉原病院の検査医を十二階下まで出張させ〝検診〟を行なうと100人中80人までが有毒者だったのに愕き、撲滅に入った結果――大正七年の末期には「私娼」を少なくすることが出来た――とあった。

昭和三年九月には「花柳病予防法第5条」が出来上がり、内務省の調査で、295万6千4百38人中「有毒者数は62万1人」だったとある。

また「娼妓取締り規則」では「七日に一回の検診」を受けねばならなくなった。

結果として、昔は梅毒が多かったのに、この頃になると「淋病」が多くなっているので当局は、娼妓の就業に当り「登録証」を貰う前に〝検診〟を受けさせ、就業後は庁府県連の規定により「定期検診」を強制――しかも検診治療には、担当警察医が当たることになった。また「娼妓稼業登録申請書」を作成すると〝検診〟することになり、すると〝梅毒患者〟の多いことが判明した。

〝有菌者〟は、以前――芸妓とか娼妓、または接客婦をしていた者に多かったので、警視庁は、吉原病院で（昭和8年から9年9月まで）の14カ月間――登録申請者651人に対し、専門語で云えば「血清反応検査」（俗に血液検査）を実施すると、最も多いのが〝芸妓〟だった。次点は、酌婦と云う名の娼妓が60％で、更に「新就業者（登録申請者）に対し行なった臨床的性病患者の検診結果は「女給、酌婦、芸妓、女中、娼妓」の順であった。

臨床的には〝女給〟が多くなっている。やはり、当時「カフェーは全盛期」だったし、〝女給〟の数は増える一方だった。そんな情勢に鑑み、昭和九年三月三十一日――警視庁は、告示第88号で「接客婦健康診断に関する件」を定め。また同日――東京府例第50号は「花柳病診療規程」を定め――翌年四月一日から〝玉の井〟や〝亀戸〟の私娼窟に、週に1回あて「女体検査」をし、局所の病毒を定期的に調べることにした。

○

私は彼女たちの〝検診結果〟を是非、垣間みたいと思ったが、終戦後のある早朝。渋谷界隈の俄造りの「検番」で寝巻姿の水商売の女達や芸娼妓等が多勢集まっているのを散見した。

粗末な建物なので夏などは部屋の奥まで、すっかり覗けた。部屋は待合室だったらしく横坐りの煙草をふかす年増女、スカート姿の若い芸妓、崩れた高島田の和服姿、見るからに艶っぽい中年増の女、など、如何にも〝集団検診〟に集まったらしい女の階層が珍しかった。

ふと、私は路地の前方から急ぎ足でくる白足袋の美しい芸者に気付いた。彼女は、バタバタと草履の音をたて、検番に入ると、男から紙片を受け取り、白いカーテンの見える扉部屋に馳け込んだ。

部屋では世話役らしい、しなびた老婆が、その紙片を受取り、白い診察着の見るからに逞しい医師を開いた。奇妙な形をした椅子が見えた。その高い上に、乗るための踏台がチラリと見えた。そこで背中を見せ、堅い帯を締めている日本髪。白い診察着の見るからに逞しい医師の顔が見える。私は、ふと親切だった南方戦線での、軍医中佐のプロフィルを想い出していた。芸者が、何事か医師の耳に囁いた。医師は紙片を見ていたが、その芸者は扉子でバタバタと胸の辺りを煽ぎ乍ら、カーテンの奥に消えた。すれ違いにカーテンを出る

先刻の日本髪。心なしか上気した表情が堅かった。

私は、調べた警視庁の条例や告示の内容を想い浮かべ、彼女たちの置かれた立場を名状しがたい残酷さで解釈してみた。

この辺りは、占領軍将兵相手の芸妓も多くGHQの女体検査は厳重を極めていたのだから、警視庁も追従して、その検査の方法も、多分に人権無視的な姿勢だった。

勝者の快楽＝犠牲者は常に女性＝という不文律は、現代も変わらないのだ。

五月三日（月）NETテレビ（夜10時）から、日本初の女医（荻野ぎん）さんの生涯は『恥かしい！　死んで終まいたいような検診台の屈辱からたちあがり第一号女医への道を志した』――それは燃えるような〝女の一生〟だった――と伝える。

とすれば、女にとって拷問以上の拷問は、恥辱・屈辱・凌辱――などの羞かしめ以上のほか、あり得ない――と云う結果になる。

第二次大戦中、ヨーロッパを占領したドイツ軍が、何の罪もない若い女性を捕えて行なった、文字通り〝死よりも辛い拷問〟の様相は、血を見るような肉体の苦しみでなく、英知を振り絞った――精神的なもの――つまり――耐えかねて自殺するような――女のデリカシイを突いたものばかりだった。

○

駿河町奉行（彦坂九兵衛）が考案した〝駿河責め〟と云うのは、人間の手足を背中に曲げ、一纏めにして縛り、宙吊りにする方法だが――更に、その背に重い石を乗せ、コマのように回転させた――と云うのだ。男はともかく、それが女の場合には、羞恥心が先にたつのだから見るに忍びないであろう。

その上、相手が貞淑であり、男の前で肌など見せない堅さであればあるだけ、効果もあり――女の頭脳は混乱し――狂乱の果てに悶絶するのも有り得る――とのことだ。

まして、全裸に剝かれた時に於いておや。――前に蹲んで隠すのもならず――大の字なりに宙空高く、反りかえさせられるのであった。

女体にしても、逆海老に反るので、小柄な乳房でも見事に隆起するであろうし、ましてや、豊満な乳房であったろうし、鐘乳石よりも円錐状に垂れ下がり凄まじい形相で藻掻（もが）いたものと想われる。

彼女は、南町奉行所の庭で、この責めにあったと云う、が立合いの者共は、その破廉恥的性格をじっくりと、噛みしめたことであろう。

しかも、それだけでは済まされまい。肉厚い腹部の皮膚は押し伸ばされてはち切れんばかり。むっちりと肥った両太腿はV字型に拡った侭――私たちは美容体操などで演ずる婦人たちの見事な太股が床に反り返った瞬間の緊迫した肉の怒張や横に伸びた脹脛の雪の白さや、膝小僧の意外に広い逞しさに驚嘆させられるが――その現実の形が、獄吏の眼前にあるのだった。想えば「獄吏冥利」に尽きるものがあったであろう。

○

寛永の頃――水戸藩士（曽根甚六）の妻が姦通を疑われ「駿河問（するがどい）」に掛けられた――と伝えられるが、藩内でも美貌の聴こえ高い女房であっただけに、その光景は、とりわけ凄艶、極美の限りだったろうし、重味と惰性で左廻り、右廻りと振子のように回転すればするたびに――絹裂く悲鳴が流れ、もとどり切れた黒髪が――宙に躍るのだ。そして眼瞼は吊り上がり凄まじい形相で藻掻（もが）いたものと想われる。

彼女は、南町奉行所の庭で、この責めにあったと云う、が立合いの者共は、その破廉恥的性格をじっくりと、噛みしめたことであろう。

○

「破廉恥」と云えば、徳川大奥のような男子禁制の場所とか、男子寮や、獄舎などで行なわれた拷問、刑罰の種類は数知れまい。

男だけの気安さが、そうさせるのか？　はたまた、男子の見えない女だけの城だから、安心して同性を虐むことが出来るのか？　とにかく、こうした世界の特質でもある。

これは去る時代の江戸城大奥での秘話だが——新入りの女中が来ると、よってたかって裸に剝き、肌身の良否を検査する——たまたま、その女性美が見事であればあるほど、嫉妬の余り、間男が出来ないように「まじない灸」をすえることであった。

現代のように医学の発達していない時代だったから、病気の治療には「加持祈禱」とか「漢方」「針」「灸」などの類しかなかったので、子供の〝お医者遊び〟のような、原始的施治療院が多かったのだ。

従って、現在のように〈刑法第212条＝懐胎ノ婦女薬物ヲ用ヒ又ハ其他ノ方法ヲ以テ堕胎シタルトキハ一年以下ノ懲役ニ処ス〉と云ったような「堕胎罪」なんかはなかったし、投薬も医者の技術も幼稚で、堕胎は生命とりのようなものだったから、妊娠しないことの方に重点が置かれていたのは止むを得まい。

その「まじない灸」として、大奥女中の間では〈会陰（えいん）に灸をすえる〉とか〈下腹部の筋目に灸をすえる〉——と云った迷信をまことしやかに信じていたのであった。

まだ勝手を知らぬ〝新入女中〟は、よってたかって押えつけられ、かねてから灸のすえ易いよう考案された点灸台（？）に縛りつけられた。縛りつけると云っても、目的に便利なように、炬燵櫓もどきの枠の中に、逆立ちをしなければならないのだ。

ヒイヒイ、泣き叫んで拒むのを、手どり足どり櫓の中に押し込んで、数人掛かりで押えつけているから微動だに動けない。

熱痛が襲いかかり、消えるとまた一ツ、更に大粒の灸を……こうして、まじない灸にこと よせ新参者を私刑する大奥女中の楽しみは年中行事の如く繰り返されたのだが——もとをただせば、先輩の老女中たちが慰みに呼んだ男性のまじない灸師に欺されて、すえて貰ったのが病みつきとなり、あらぬことか、何も知らぬ新入女中の「灸責め」に利用し、女性的な愉悦に浸っていたのだ。

○

しかし、これに輪をかけた奇想天外な私刑の方法も生まれ、下町の芸妓置屋とか女衒の秘法として、現在に到っているものも多い。

何時だったかラジオ放送が花やかなりし頃——ある売春女性のヒモ男が、逃げた女への私刑の手段として、この「灸責め」を利用し多大の効果をあげたとか？——得々と喋っていたのを知っている。

昔から芸妓置屋の女将が、新規抱えの若い芸者の良否を調べる方法として、同性を凌辱まがいの方法で苦しめたり、医師の門を叩き検査を依頼した例は多い。

医師に委せたのは、まだ良いとせねばなるまい。何故ならば検査にことよせ、女の一生を台なしにする、病的な女体貫めの犯罪行為が後を断たなかったからだ。

私の中学時代の後輩で、警察官になりたかった奴がいた。体格が悪く採用されなかったが、理由を訊くと〈殺人現場を見たかった〉からと云うのであった。

率直に云って殺人現場ほど悲惨なものはない。不幸にして、私は十数年前ではあるが、鎌倉の知人宅に下宿していた頃、隣家の上品な奥さんが、何者かの手で絞殺された事件に出合わした。近所の知らせで、私の両肢は悚み、ガクガクと遥れたのを記憶している。

と云うのは、隣家の邸内は広大であったしそれに鬱蒼と樹木が生い繁っており、玄関の扉から部屋にかけて、夕暮れだったから薄暗く、何となく無気味だったのだ。その上、犯人が、まだ何処かに潜んでいて何時襲い掛かられるやも知れん状態だったからだ。

幸い小学校の先生だった息子さんが、早急に帰り「人工呼吸」を始めたので、私も手伝うことにしたが、鼻血が飛び散り、点々と畳や襖を染め抜いて、凄惨であった。被害者の顔色が次第次第に死相を呈してくる。散開した両眼の瞳孔。はずれた顎骨。吐き出された長い舌――これが、何時もモナリザの微笑みを浮かべ、私にも親切だった隣家の上品な奥さんの最後の姿かと思えば今更ながら事件の重大さに慄えた。奥さんは助からなかった。

結局、翌朝の新聞で公表されたが、それ以来、殺人現場などと云うものは二度と見るものではないと思い知った。かなり長い間、奥さんの死顔が眼に残り、消えなかった。

現場の鑑識官が「このホトケ様なんか綺麗なもンだよ！」と説明したが、あの惨状が綺麗なもンだとしたら（？）と思えば、ゾッとすることがあった。

見ようによれば〈本当のサディスティック背筋が冷たくなる想いであった。

〈腐った死体の検視の時には、気をつけてますよ。例えば都電に乗るような帰り方はしませんね。乗客が鼻をつまんで逃げますからね。死体の臭気が、私の体に泌み込んでいるんでしょうに……。二、三日ぐらいでは、私の体から逃げ去らないのでしょう〉とも云った。

○

私は「奇ク」掲載の緊縛写真などを眺めると、モデルさんの表情や、手足の屈曲伸を美しいと思う。

それは、造られた美だからなのである。創造美と云ったら、造型的でおかしいかも知れないが、決して悲惨さや殺気がない――と云うことだ。だから、見ても楽しいし、見せられる写真になっているのだ。素人の撮ったのは見られない――と云うのは、そうした差違のせいである。

それは魂の相違でも云おうか――、云わば芸術性がないのだ。

私は、異常性格の殺人狂が、ある美貌の婦人を素裸にして縛りあげた上、なぶり殺しにした「殺人現場の鑑識写真」を見せて貰ったことがあった。

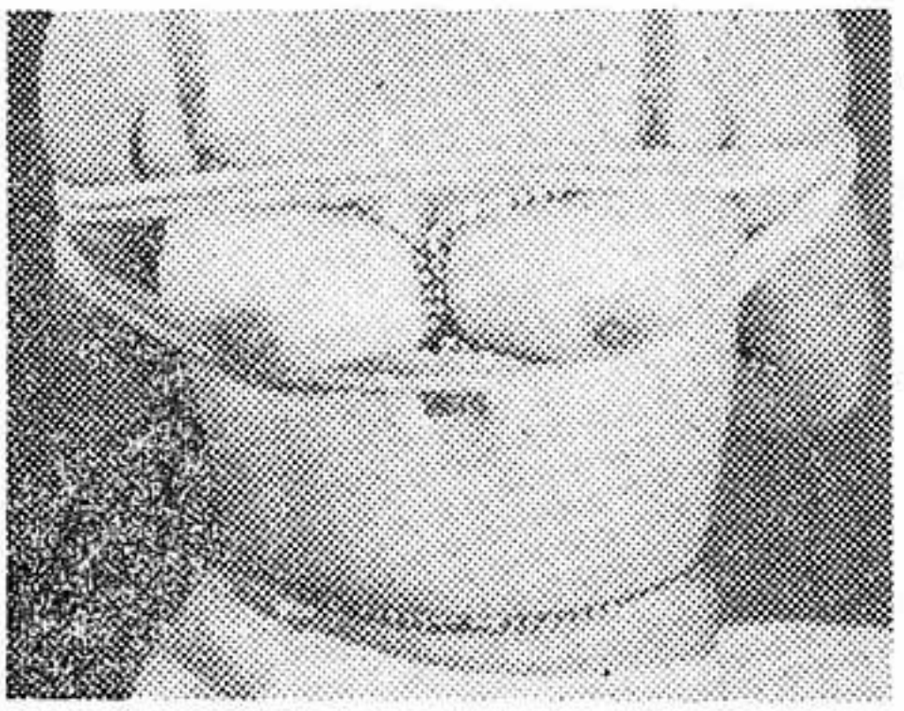
見ようによれば〈本当のサディスティック〉と云う事になるのだが、気色が悪くて二度と見られたものではない――恐ろしいのだ。死体の霊魂が、いまにも私に襲い掛かって来るような気配がして、いてもたってもおられないのであった。

恐らく正常な生活を営む人間だったら、最初は好奇心で眺めても、思わず〈ヒャーッ〉と叫んで逃げ出すであろう。

太平ムードの江戸時代の俚謡に〈打つなと、いいよにさんせ。苦楽まかせた、蹴りなと、いいよにさんせ。苦楽まかせた、この体〉と云った、どんな人にも認められそうで健康的な生理的範囲のサドマゾを唄ったものが多いが、愛情の増進とか恋の悦楽を覚えるような情緒が、やはりこうしたものには必要なのではなかろうか。

（終）

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。



今田夫人の胴鎖

# 今田・山本・橋本のご三家を羨む

# 奴隷妻慕情

柴利好

## 1

本年四月号のサロンで、今田雄三様の玉稿を拝見させて戴きました。このご寄稿によって、私がかつて、僭越にもその奥様方を、奴隷妻第一号、第二号、第三号と命名したが三家の方々から、洩れなくご返信を頂戴したことになります。しかも尚、有り難いことは皆様から私宛のご指名さえ賜っているのです。投稿者としてこれ以上の幸福はありません。この得難い喜びを記念し、ご三家へのささやかな感謝の印として、重ねて、本稿の筆を採り、上記奥様方の素晴しい奴隷妻振りを復習旁、分析してみました。

私は、夫妻生活の在り方の中で、夫を愛する妻が、その愛情の深さを立証する手段として、甘んじて悦虐の渕に一身を沈めて悔いない奴隷妻の生活を、一番美しく、好ましいものと存じております。奴隷妻が甘受する愛の証には色々ありますが、中でも「四六時中鎖で縛られて日常生活を送る」ことが、私の嗜好に合致し、これこそ「奴隷妻」の名に最も相応しいと確信し、且、その存在を秘かに空想の世界に求めて参りました。

## 2

処が、去る四十二年の本誌二月号で、初めて私が永年心に求めて止まなかったこの理想的奴隷妻の実在が、その飼育者である今田雄三氏によって報じられたのでした。更にこの記事を追い駈けるようにして、同年七月号に山本武男氏による「奴隷妻」が発表されたのです。これら二篇の実録を拝読した時の私の喩えようもない驚きと嬉しさが、拙稿「奴隷妻に魅せられて」となり、「胴鎖あれこれ」ともなった次第です。

## 3

私が本誌上で奴隷妻第一号として認めた今田夫人は、ウエストはハンダ付けされた胴鎖で、乳房は錠付の鎖ブラジャーで、素肌を固く締めつけられ乍らも、「身体がしまって気持が良い」とまで申しておられるのでした。

その時発表されたお写真では、ブラジャーは良く見えましたが、偶々胴鎖の方が印刷の具合で判然としていませんでしたので、「胴鎖あれこれ」でその点に触れたものです。それかあらぬか上掲の五月号サロンに於いて、再び夫人の麗姿に接する機会に恵まれましたことは、なんという感激でしょう。新らしいお写真で夫人は、パンティー一つに剝がれた裸身を、後ろ手、高手小手に縛られて正面を向いて引据えられておられます。夫人のウエストには正に相違なく胴鎖が厳しく嵌め込まれている有様が判然と示されています。豊かな胸にも鎖ブラジャーが両乳房に掛け渡され、その乳房の谷間には、可愛らしい南京錠まで良く見えます。

夫君の夫人に対する愛を肌身にしっかりと受け止めた、自信に満ち溢れた夫人は、眉根を高く上げ、美しいかんばせを誇示されています。そして胸を張り、上体を反らすようにして

「さあ柴さん！　これを見てでもいるかのよ鎖なのよ！」

と、まるで私に語り掛けてでもいるかのように、胴鎖を示しておられるではありませんか。あっ、これが胴鎖なのです。読者通信によるご夫君からのご連絡によれば、この胴鎖こそは、かつて夫人の腰に、奴隷妻の証として厳重にハンダ付されて以来実に三年有余の歳月の間一度も脱がすことを許されずに、今日まで、夫人の細腰を締め続けているものです。私はその正体をつくづくと眺めては飽きることを知りません。正直の話、少なくとも週に一度や二度は、この号を手に取って、胴鎖を嵌められた夫人の麗姿を、押し戴くようにして拝見しているのですよ。

富子夫人が奴隷妻として飼育され始めたのは、確か四十年からでしたから、今年で、既に七年目に這入ることになります。更に遡って、悦虐プレイに身を任せられるようになってから数えると、早くも足掛け十年を経過している訳です。つまり夫人は、女性として最も爛熟し切った、三十代の全期間を通じて、「奴隷誓約書」の誓いの通り、愛するご夫君のために、愛の証（あかし）を一身を捧げて実証して来られたのです。

しかも、奴隷妻になられてからの富子夫人は、犬の鎖でその豊満な肌身を縦に、横に、斜めに厳縛されました。この鎖は絶対に奥様の力では脱ずすことも切ることもできないように、固くペンチで締め上げられているのです。従って昼間はこれを鎖下着として着装を

3

奴隷妻第二号は勿論山本富子夫人です。前号で告白しました通り、四十二年七月号の玉稿とお写真とを拝見したその夜は、昂奮の余り眠られなかった私でした。

国川栄一氏は「美しき緊縛妻女を羨む」の中で、こう申されております。

「今田氏の美しい奥さまも堂々とお顔まで撮影されていますが、その勇気あるご態度にはおそらくSMの真のあり方を理解し、愛する気持がさせたワザでしょうか……」

と。全くご同感です。同氏は夫人に対して「貞女」という言葉を使っておられます。夫人が貞女である所以は当然名伯楽としての良き飼育者があればこそと拝察されます。ご夫婦相信じ、愈々S・Mの道に、励まれますようにに。

尚、今田氏は、これまでの三度のご通信の中では、何故か奥様のお名前を出して下さいません。私は奥様に対して、お名前ではお呼び掛けできないのが、残念で堪まりません。次回ご寄稿の折りにでも、ご尊名をお洩らし下さらんことを切望します。

強いられ、夜は「奴隷妻の制服」として着け通さなければなりません。その上、犬の首輪を嵌められ、足には足鎖、口には猿ぐつわ、手は革手袋の上から後ろ手錠を施され、鎖で繋がれた侭お寝みになるのが、飼育日の日課になっているとのことです。

しかも、鎖下着を除く他の全ての緊縛作業は、皆夫人ご自身の手でなさらなければならない哀れさです。後ろ手錠はお仕事の時に限って前手錠に嵌め改められるのでしたね。手袋も就寝時以外は脱がされて、両手首に、じかに手錠を掛けられるのです。四十三年六月号による二度目のご通信では

「鎖の数も増し、きつくもしました」

と記されており、添付のお写真によって、これらの事実を明白に知らされました。そして

「私の考え方も柴様とピッタリ同じであることを告白いたします。奴隷用ユニフォームにつきましても柴様のおっしゃる通りです。ハンダ付けもしたし、いわれる様に施錠もしました」

と拙稿に対する返信の形を取って述べられています。

これらの事実に基づいて畏友、芳野眉美氏によって描かれたのが、先号を飾った「鎖の衣裳」です。同氏の相も変わらない名文で富子夫人をモデルとした奴隷妻の拘束生活が仔細に描写されていて、特に夫人を憧憬する私にとって本当に楽しい一文となっています。

その後、夫人の不測の事故に対処するための交替などで提案申し上げましたが、如何でしょうか。又当時、奴隷専用室のご計画も承りましたが、三年を経た現在では、既に完成使用されておられることと推察されます。どんな設計で、そこでの奥様へのお仕置はどんなな風しょうか。一生涯奴隷妻として、鎖で縛られて暮したいと念願しておられる富子夫人のご決意は、益々強固と思われますにつけても、奴隷専用室でのご近況を承り度く存じます。

熱海の温泉旅館での羞恥責めのことや、信州美しケ原高原での屋外プレイのことなど、委細拝承し度いことが色々あります。何卒、引続いてのご通信にて近況をお聞かせ賜りますよう鶴首しております。

## 4

「胴鎖あれこれ」の中で、私が「奴隷妻第三の女（ひと）」として指名した方は、橋本八重子夫人です。文中私は如何にも仔細らしく数々の注文を橋本氏ご夫妻に申し述べ、奴隷妻としての八重子夫人の大成を熱望したのです。然る処、昨年十二月号で、ご夫君橋本二郎氏から夫人の近況をお伺いできました。貴稿では、私の無躾について聊かのお咎めもなく、それを何らの抵抗もなく諾々と受容れておられる処か、真に謙譲なご厚誼に接し得ましたことを感謝致します。

その折のお写真によれば、「縛り方」そのものが、高度な独創性を発揮されておりましたし、「縄目の処理」も格段の精進の跡が窺われて、貴ご夫妻の熱心な求道振りに心を打たれました。

その上、白い牢格子を前面に配した、八重子夫人の羞らいに満ちた艶姿は抜群です。写真では見えませんが、両手首は首縄から連なる縄尻で後ろ手に固く十字に縛り上げられているのでしょう。鎖丁字帯こそ見当たりませんが、心憎いばかりに夫人のM性が感じられる逸品です。

貴信によれば、夫人に対する飼育の目的が肉体的な苦痛にではなく、羞恥責めと、ご夫君への献身的奉仕にあると申されています。しかもこうした目的で行なわれる数々の折檻を何らの抵抗もなく諾々と受容れておられるらしい夫人のいじらしい迄の従順さ。従って

ご夫君への一途の献身と底知れない愛情の深さを偲ばれるのです。それでも時々丁字帯の胴鎖や縦鎖の締めつけを文字通り厳しくなさるとのこと。嘸かし楽しい日常であろうとご推察されます。ご高説の通り肉体を傷つけ病気にさせるような乱暴は、たとえ奴隷妻に対しても許されません。がここで愚生の偏向した嗜好に基づいて一言いわせて戴きます。以下は先に「胴鎖あれこれ」において今田様宛の文章の中で記したものと同じ趣旨であることをお含み下さい。

扨て、人間の身体は実に面白くできているもので、常日頃の訓練次第で、殆ど想像もつかない位、変化するものです。例えば人間の胸は、長らく締め続けて行くうちには驚く程細く締まるようになります。その理由は、腹腔内に在る臓器が漸次その正位置から転位するからなのですが、少なくとも女性ならば、その腰囲を正常値の三分の一は細められるとは一般に認められています。この基準はかつての西欧での実例ですから、その侭今日の我我に当て嵌まらないかも知れません。その上締め付けは、人それぞれの肉体的特質とそれに伴う限界の相違がありますし、嗜好もとりどりなのですから、一概には、何とも申せません。

処で八重子夫人は、雁字搦めに縛られて街にお出掛けになる位M性をお持ちの方です。そのM性は、羞恥に喘ぐという精神的な性向に由来しているらしいことは、貴稿の趣旨からも良く理解できます。しかし夫人は、縛られ締めつけられる肉体的な苦しさを、単に苦痛とのみ感得するのではなく、悦虐の境地にまで昇華できる資質を備えた方ではないのでしょうか。勝手な想像に基づいて論旨を進めるは少なくともその胴鎖の部分について、より一層の緊搾が行なわれても何らの不思議はなさそうに思われます。その締めつけに際しては、最初から胴鎖だけを頼りとしてギリギリ締め上げたのでは、どんなM女性でも堪まったものではありますまい。鎖に代わる広巾の革ベルト、弾力の強いゴムバンド、ウエスト・ニッパーなどで慎重かつ丹念に、時間を掛けてお仕込みになれば、健康を害することもなく、聡ては眼を奪うばかりの細腰に変身できるかと考えます。但し、ご当人が

「私には、そんな趣味はないわ。ウエストを厳しく縛られても、苦しいばっかりで、ちっとも快感が湧かないのよ」

とおっしゃるのでしたら、又何をか、いわんやです。若しも

「いいわよ！　ウンと締めつけて丁戴。それが二郎さん、貴方のお好みなら、どんなに苦しくったって私、我慢しますわ」

と、ご快諾を得ましたなら思い切った緊縛をなさって欲しいものです。そうして得られた細腰を、服の上から物凄いウエスト・バンドで締め上げて、盛り場に往き交う人々にその細さを誇示なさっては如何でしょうか。或る無礼をお赦し戴けるならば、夫人の丁字帯この細腰晒しは、一つの羞恥責めともいえるかも知れませんよ。拝察する処、貴ご夫妻は幾多春秋に富む方々とお見受けされます。この一筆に限らず、決して焦ったり、慌てたりなさることはありません。歩一歩、青い鳥を「悦虐の世界」に求めて円満に、お幸せにお過ごし下さい。

## 5

以上の三人の奴隷妻を各々仔細に観察すると、その折檻の趣旨や、受け止め方の内容に若干の相違が認められます。それは虐げられること自体に至高の喜びを感じるものと、他方では悦虐の目的が羞恥責めにあるものとの相違です。

奴隷妻の生活でのこの二つの区別は、厳密

に誰彼とその相違を指定することはさ程意味はないことかも知れませんが。何故なら少なくとも奴隷妻として甘んじてげうつ位のM性豊かな女性ならば、本能的にその何れの傾向をも兼備しておられるに違いないからです。要はその程度、割合の問題ではないでしょうか。

それにしても、山本富子夫人の徹底した嗜虐性向には頭が下がりますの境地にまで至らしめたものは何か。それには多々数えられる原因があろうかと思われますが、帰する処、お子達と別室の寝所をお持ちであるといった、夫人をして現在に由来するものと想像されます。そこで仮に同じ環境で今田夫人がお過ごしになったとしたら、必ずと申してはいい過ぎでしょうが、夫人は恐らく現在より以上に、激しいM女性を発揮しておられるのではないでしょうか。八重子夫人に関しては、ご家庭の事情が判りませんから、何とも、申しようもありませんが、「飼育されている」ということを常時意識することは、必然的に日常の倒錯度を高める原因になります。「本格的緊縛の実施」や「バイブと愛咬、鞭」の折檻が積れば、奴隷化は益々激化の一途を辿ることでしょう。檻の中に入れられて観念し切ったような夫人の可憐な面差しを拝見するにつけても、「虐められるタイプの女」という、ージが湧いて来て仕方がないのです。

今田夫人にしろ、橋本夫人にしろ、そういう機会にさえ恵まれれば、山本夫人が、かつて美しケ原で赤松の太枝に、全裸で四ツ手吊るしで高々と縛り吊るされたと同じ程度の折檻を、喜んでお受けになるだけのご自身の素質と、ご夫君への献身度をお持ちのことと信じて疑いません。又そういう風に飼育することにこそ、奴隷妻所有者としての至上の楽しさがあろうかと思われます。

ここで一つ特に考えなければならない問題は「乳房に咲くほりもの桜」における和泉五郎氏による奴隷妻弥栄夫人に対する残酷極まりない暴虐です。こ既に、今二郎氏が述べておられますから贅言を重ねませんが、要するに「奴隷妻」とは何か、という言葉の定義に関する問題でもあります。

「SMプレイはその底にはSとMの共通の快感追求の姿勢があり、この一致こそが求められる」

と今氏は喝破されました。弥栄夫人に加えられた折檻の数々は、正に鬼畜の行為で、それは相互の愛情や信頼が全く欠除した虐待のための一方的加虐なのです。夫人はその虐待に対して、快感どころか憎悪を感じられたのでした。これは確かに、サディズムの基本的一形態には違いありません。その相手女性が配偶者であれば正しく奴隷妻に間違いはないのです。しかしそれは、私が駄筆を弄して、常々述べているプレイとしての所謂、奴隷妻の概念とは全く似ても似つかないものなのです。その行為は、最早プレイの範囲を遥かに逸脱した蕃行に過ぎないことは、ご諒解戴けるでしょう。

## 6

羞恥責めについても、山本夫人は決定的ご経験をお持ちです。夫人は例の熱海の温泉旅館で、部屋付の女中のいる前で、鎖下着の侭床柱に緊がれていたり後ろ手縛りの侭で食事をさせられたりなさいました。恐らくその時の夫人に取っては、旅館滞在中は、そこの従業員は無論のこと、同宿の他の客達の眼さえ堪え難かったに違いないと思われます。急性盲腸炎で、鎖下着姿の侭入院なさったご経験は、偶発的事故とはいえ、余りにも劇的であ

読者ギャラリー　『コワレ物注意』　名古屋　S生

り、決定的であったといえます。その時、ご夫君の懸命の努力にも拘らず、鎖下着の秘密を医師や看護婦に見付けられてしまったのでした。富子夫人の羞らいの光景が眼に見えるようです。

それに較べると橋本夫人の羞恥責めは、至って穏和で微笑ましく感じられます。本来羞恥とは、精神的な作用ですから、その原因は必ずしも肉体や性と関連がなくても宜しい訳です。今田夫人に対する羞恥責めの実際は分明しませんが、その内容は「いっそうのこと死んでしまい度い！」といったような極限的な激しい状態ではなさそうに推測されます。

八重子夫人に関する「夫への奉仕の観念は単に、性的、肉体的な場合に限定されていない」ということは、重要な意味が認められます。いうまでもなく、これこそ真の奴隷妻として行住坐臥の心得がなければならない精神的基盤に外ならないからです。

## 7

羞恥責めは、家庭内で専らご主人のみを対象として行なわれる場合と、家庭外の外部で第三者を対象としてなされる場合と二通りに分かれます。この両者を比較すれば、後者即ち第三者に対する羞恥の方が、より強烈であることは当熱です。家庭内の内輪の秘事は、夫々のご家庭にお任せするとして、ここでは暫く第三者を対象とする羞恥責めに就いて述べてみたいと思います。

女性に対する羞恥責めの極め手は、常識的にはその肉体に関連して来ます。下着をつけさせないとかスケルックの強制などが、

これに由来して採られる事柄です。これと並行的に行なわれるのが常規を逸した異常な行為、行動の強制です。これには必ずしも肉体の露出度に関係なく行なわれているようですが、それが併用されることによって、折檻の効果を一段と高められるでしょう。

異常な行為、行動による羞恥責めとして代表される卑近な例としては、犬の首輪を嵌められて、鎖で引かせて歩くことが、昔の罪人同様に、枷をかけられたり鎖や縄で縛られた姿を晒すとかいったような惨めな行為が挙げられます。こうした事は男女を問わず、恐らく強いM性を持つならば、その殆んどが希求して、己まないものと思われます。まして高度に飼育された奴隷妻に与えられる羞恥責めに、これが採用されたとしても、決して驚くことではない筈です。先に掲げた山本夫人の羞恥責めの中に、数個の実例を見られます。しかし、一般的には、そのような強烈な行為は、社会的、人間的立場に制約されて、おいそれとは実行し難いというのが現実ではないでしょうか。

## 8

そこで、それ程深刻な折檻ではなく、私好みの妄想で、もっと簡単に手軽に実行できる方法を幾つか考えて見ました。

思い掛けない所で、思い掛けない物事を見聞きすることは、仮令それが些細であったとしても、案外印象深く、いつまでも楽しい記憶として残るものです。「胴鎖あれこれ」で記したブリジット・バルドーの素肌に締められた胴鎖の印象など、私にとってはその最たるものの一つです。これと同様に、ハップニングで楽しい見物を提供してくれた映画に「女奴隷の復讐」がありました。この映画の中で、フーマンチュー博士配下の一人の女奴隷が、敵方を暗殺するために派遣され、逆に殺されてしまう場面がありました。全身を投げ出すようして敵方の足元に女奴隷が倒れ臥し、超ミニのワンピースの裾が高腿近くまでずれ上がりました。その時、女の左腿の素肌に、黄金色に輝く、太い腿環が、厳重に嵌められていたのです。多分この腿環は、凶器を偲ばせるためのサポーターとも思われます。が私はこの太い黄金の腿環を大変エロチックに感じたと同時に、マゾヒスチックにも受け取ったものでした。

女性の脚部、就中太腿は、その肉付の豊かさと肌合の艶やかさで、特に異性にとって魅力的です。本来羞恥とエロチシズムとは密接不可分の関係にあると考えられるのですが、この太腿に対して羞恥責めをしては如何でしょうか。今や世はミニスカート時代で、それに伴い、女性の靴下もパンティストッキングが全盛です。従って靴下止を太腿に嵌めた女性は随分、少なくなって来ました。実はここがこの発想の眼目なのです。つまり靴下を穿かない素肌の腿に、ガーターを嵌めてやるのです。彼女の立居振舞の都度、ミニスカートの裾から、使用目的不明のガーターが否応なしに覗きます。ガーターの代わりに革製のバンドや綺麗な布テープの類を使ってもいいと思うのですが、更に進んでプチ・ネック用の金属製の首環や革紐、それから時計バンド用の鎖を幾つか繋いで腿環として使ったら面白いと思います。この腿環の存在は観る者に何等かの不審と刺戟を与えずにはおかないでしょうし、嵌められている女性に取っても、軽度とはいえ、羞恥を感じさせること請合いです。私はこの腿環をサイ・リング又はサイレットと名付けていますが、この腿環は一本に限らず、同時に二本も三本も並べて嵌めてみたいと思っています。それだけ不審な締めつけの異常性が人眼につく筈ですから。この腿環は全く実用を離れた装飾的なものであると

同時に、それを嵌める真の目的が他の所にあるという訳なのです。

足首に嵌める装身具としてはアンクレットがあります。これはどういう訳か、我が国では殆ど使われていませんが、これも使用法次第では、足枷的な羞恥心を催させて、良い物だと思います。かつて、米国の白奴隷の中には、その奴隷女の所有者名を刻んだ金属製の札を足環の環の間に繋いで嵌められていた事実があったことを、最近知りましたが、私に許されるならば奴隷妻の証として、羞恥貴めを兼ねてこのような足環を作って「所有者柴利好」と刻んで、嵌めてやりたいものです。

その他にも腿を責めて、至極簡単に羞恥を味あわせる方法も考えています。近頃はブーツその他の女性用の靴が、随分S・M的傾向を強めて来たことは楽しい限りですが、その中で、締め紐の長いサンダル式の靴をご存じでしょう。革紐は膝頭の上から下にまで厳重に紐を交互に渡して締め上げていきます。この靴を長時間履いていると、革紐が脚に喰い込んで、皮肉に深々と、陥没する位になるのです。そんな時、脚部の肌色は淡いピンク色に染まって締め紐の間から張り出した肌は脂肪で艶やかな光沢を帯びていることさえあるという結構な代物です。私の考えた方法とは、この締め紐の長さを二倍にして履かせるのです。そうすると、締め紐は足の甲から組み始まり、足首、膝を超えて腿に達し、遂にはその付根まで届きます。その紐尻はガードル裾の吊り具や、胴鎖から降ろした吊り紐に繋ぐか、或はいっそのこと、ギリ巻きに縛りつけたら、彼女のS・M的脚線美が、いやが上にも増すと同時に、締め紐が何処まで締め上がっているか分からない所に、衆目の好奇心が集まって、自然と羞恥度も弥増しに高まるのではないかと思っているのです。

このような各種の腿の締めつけは、ミニスカートの時だけに限らず、ホット・パンツではより以上の効果があると思いますし、ホット・パンツの場合には、剝き出しの素肌に彩管を振るって、縄目やら鎖のボディ・ペンテイングをする方法も思いついています。

このような、お笑い草とも思える羞恥責めをご披露します。既に一言したように前項に掲げた各種の腿締めの責めは、それ自体を折檻として当人に意識させずに済むものばかりです。が、今度のは明白に羞恥心を植付け、奴隷化を強いる非情さを持つものだと思います。

今流行のプチ・ネック。これは既にこの物自体でも「犬のようだ」と批判する論者もあるが位ですが、これを敢えて本物の犬の首輪を嵌めてやるのです。M性嗜好を持つ女性は、犬の首輪を嵌められると殆ど例外なく畜生にまで成り下がった感覚に陥って、全く奴隷意識の虜になってしまうのです。これが、この発想の狙いだったのです。もっと意地悪くして、その首輪についている金属板に、白奴隷の事例に慣って「所有者柴利好」と刻み込めば、尚効果的だろうと考えています。足首のアンクレッドでは場所的に下過ぎ、名前を彫り込むスペースも小さいので、人目にも付き難いのですが、首輪なら嵌められた位置も良し、金属プレートのサイズも、理想的ですから……。

私はゆくりなくも、随分以前に見たワールド・ニュースの一齣を思い出しました。それは英国の上流階級で行なわれた仮装舞踏会に

9

次ぎに私の妄想の内で、中級と思われる羞

一組のペアーが犬とその所有者とを演じていた光景です。犬は勿論夫人です。夫人は全身をタイトなボディストッキング様の衣裳で包み、頭に犬の形の冠り物を、お尻に長い尾を着けていました。顔から首は、丸出しの侭です。その細首には無惨にも犬の首輪が嵌められていて、首輪に繋いだ長い鎖尻は、礼服に身を固めたご主人に固く握られているのでした。夫人が首輪の鎖を引かれて車を降り、玄関のホールを通って舞踏会場に連れられて行く姿を、カメラが執拗に追っていました。その時、周囲に群がる群衆の驚異と嘆声のどよめきを、首輪に繋がれて引かれて行ったこの淑女はどんな気持で受け止めていたのでしょう。少なくともその女性にM性が無ければ到底実行できない仮装なのでした。S・M的嗜好を存分に凝らしたる光景は、羞恥責めの実技に一つの示唆を与えるものと思います。

今のプチ・ネックが流行りますが、一時です。かれこれ十年余り前になりますが、人出で混み合った期、先端的女性の間に首環装飾が使われたことがありました。私は通勤電車の中で、巾広の革の首環を、その細首に嵌めた美しい若い女性を見たことがありました。その首環は色は緑色でしたが、形も質も全く犬の首輪そっくりでした。尾錠を項の所で締め込んでいるその姿は、当時としては珍奇な風俗として映ったのも致し方なかったでしょう。直ぐ近くにいた、男同志の乗客の無遠慮な会話の中で「まるで犬じゃないか」という聞こえよがしの侮蔑の言葉が私にはっきりと聞き取れました。多分首輪を嵌めたご当人の耳にも入ったでしょう。ですから、まず大抵は「厭よ！　そんな羞かしいこと、私にはできませんわ。許して！」と哀願することでしょう。入浴中の皆から、胴鎖をじろじろ眺められる場面を思い巡らして、羞恥に悶える奴隷妻の姿は、それだけでも捨て難い味わいがあると思います。

もし、この命令に服従できる女性であるとしたら、それこそ立派なものです。更にそうすること自体の内に、自ら奴隷妻としての誇りを以て「私はこんな風にして、夫に愛されている幸せ者よ！」と、その麗姿を平然と衆目に晒すことができる女性となれば、奴隷妻大学最優秀の資格を授与するに足りましょうが、卒業証書に、どんな文言を書きましょうかねえ。

しかし、私の空想の中では、昨年夏から市販され出した海辺用の胴飾りを腰に固く締めて、腕や首にも幾つか同種の環を嵌めたままの日の羞恥責めの楽しい思い出として残ることができるかも知れないと思われてなりません。



私の願望的妄想は更にふくらんで、上級課程に進みます。先ず私は奴隷妻を説得して、胴鎖を腰に嵌めた侭銭湯に行かせる場面を想定します。これは、大変勇気の要ることでしょう。ですから、まず大抵は「厭よ！　そんな羞かしいこと、私にはできませんわ。許して！」と哀願することでしょう。入浴中の皆から、胴鎖をじろじろ眺められる場面を思い巡らして、羞恥に悶える奴隷妻の姿は、それだけでも捨て難い味わいがあると思います。

もし、この命令に服従できる女性であるとしたら、それこそ立派なものです。更にそうすること自体の内に、自ら奴隷妻としての誇りを以て「私はこんな風にして、夫に愛されている幸せ者よ！」と、その麗姿を平然と衆目に晒すことができる女性となれば、奴隷妻大学最優秀の資格を授与するに足りましょうが、卒業証書に、どんな文言を書きましょうかねえ。

しかし、私の空想の中では、昨年夏から市販され出した海辺用の胴飾りを腰に固く締めて、腕や首にも幾つか同種の環を嵌めたままの日の羞恥責めの楽しい思い出として残ることができるかも知れないと思われてなりません。

ませんし、そうして置いてから本当の胴鎖、奴隷妻として胴鎖へと進む段取りにしたいものだと思っています。若し前述の如き奴隷妻大学最優秀生たる有資格者で、本当の胴鎖に進んだ奴隷妻に向かって

「まあ奥様！　今日のは、いつものと違いますわねえ」

と問い掛けられたら、即座に

「そうなんですよ。これはホンノ普段締めなんざあますの！」

と切り返せるような女性は、居られないものでしょうか……。

扱て、復式プレイ、交換プレイは、大学卒業程度の羞恥歴を持った奴隷妻が進む、いわば大学院課程といえるでしょう。今田夫人、橋本夫人など、何れもこれらのプレイを進んでご志望なさる程の強いM性の持主です。ところが山本夫人は、そうしたご意向をお持ちでないのか、一向伝えられておりません。恐らく富子夫人は、ご主人以外は一切眼もくれず、只管一途の愛に生き抜く奴隷妻として終始しておられるのでしょう。それでこそ一生奴隷妻として終わり度いとのご決意も生きてきます。私はこの二つの奴隷妻の生き方に対して、敢えて言葉を挟み得ません。その双方共、夫々に存在理由を認めざるを得ないからです。元より奴隷妻ファンの一人としてこうしたプレイに参加する機会があれば、喜んでお相伴に預り度いと念願していますが、もし仮に夢が実現するとしても、昨今の道徳的、倫理的観念の稀薄化傾向に鑑み、勢いの赴く侭、遂々理性を失って取り返しのつかない結果に陥ることのないように注意しなければならないと思っています。仮令、姉小路俊介氏の説かれる「複婚讃美論」が理論上瑕疵がなかったとしても、守るべき点は必ず守って、慎重の上にも慎重にとの心掛けだけは絶対に忘れては、なるまいと考えているのです。

以上で、ご厚情を賜った奴隷妻ご三家に対する讃仰文を終わります。摺筆に当たって、どうか、この一文が各位のお眼に止まりますように。

更に奴隷妻各位からも、是非共ご自身の筆によって、奴隷妻としての喜びや悲しみの体験記とか、飼育生活の実際と、そのご感想などをご寄稿下さいますように、心からお待ち致します。最後に各位のご多幸をお祈り申し上げ、今後も重ねて誌上にてお眼に掛かりますことを楽しみに、今回はこれにて失礼致します。

――(完)――

〔伝言板〕　○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申上げます故、今暫くお待ち下さるよう願います。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既刊の臨時増刊号〈花と蛇〉第一回分（続篇小説絵画写真と絵画特集）第二回分（前篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましても最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

カット・岡　たかし

連載

M小説

# 則天武后

## 天武

## 真砂

## 十四郎

（4）

10

この戦い以来、半島は高句麗はもとより、新羅も百済も完全に唐朝に臣従し、女御様（によご）は役人を派して平壌に安東都護府をおき、半島の全地域を統治することになりました。これより前、唐軍は西突厥（とっけつ）も討伐しており、いずれも女御様のご英断による成果ですから、庶民たちも、女御様の御威徳をあげて讃えました。倭国人十人の挽仕が挽く女御様の玉輿にも、庶民は一様に土下座して頭を地につけ、とばりの内で、お横になられている女御様を伏し拝んだのでした。

庶民の中から〝武后様は弥勒（みろく）菩薩の御下生である〟という声が拡がってきました。

拡がってきた……と許敬宗が女御様にお伝えしているのを聞いたのですが、本当に庶民が等しく、そう思っているのかどうかは私は知りません。しかし、私にとっては、天上天下、ただ女御様お一人こそ、最高にお尊き御方なのですから、弥勒菩薩が尊き仏様なら、その仏様が即ち女御様だという声に、とやかくいう筋は、まったくありません。無条件に「女御様は弥勒菩薩様」と伏し拝むばかりです。

許敬宗のご報告に、女御様はお笑いになって、

「弥勒菩薩といえば、釈尊入寂ののち、五十六億七千万年を経た末世に、この世に現われ庶民を救う……と経典にあるけど、五十六億七千万年なんて、はるか彼方の後の世のことよ。今ごろ弥勒菩薩が現われるわけはないじゃないの」

と仰有いました。許敬宗は真面目な顔をして女御様のお言葉を、さえぎりました。

「そう説いている経典もありますが、また、そう説いていない経典もあります。陛下、大方等無想大雲経を、ご一読ください。仏陀あるとき浄光天女に告げ給わく、わが滅後七百年を経て、南天竺に王女生誕、名づけてショウという。これこそ弥勒菩薩の下生にして、やがて王位につき、四方諸国みな来たり承奉す……とあります。このショウという王女こそ武照様の照であり、武后様が弥勒菩薩であられることをその人です。いま私の目の前にいられる皇后陛下こそ弥勒菩薩のお生まれかわりであることから綺麗なお歯をおみせになって「ほほほほほ」とお笑いになりました。

「まあ……」

女御様は、しばらく許敬宗の顔を見つめていられましたが、紅のお口もとから綺麗なお歯をおみせになって「ほほほほほ」とお笑いになりました。

「庶民の声というけど、お前自身は、どう思っているの？」

「もちろん、弥勒菩薩の御下生と思っております。また仮に、武后様が弥勒菩薩ではございませんとしても、武后様のご聖徳は四方に光り輝き、弥勒菩薩と同じ位におられます。弥勒菩薩とおよびして、なんの間違いがございましょう」

許敬宗の顔色には誠実の容相があらわれてご気嫌とりや追従で言上しているとは思われませんでした。

「沓、お前はどう思う？」

「はッ、申しあげるまでもございません。女御様こそ弥勒菩薩様でございます。私は、ただ御尊き天女様から経典の内容をうかがいしたが、許敬宗が弥勒菩薩であられることを初めて知りました。まったくもって、もったいないというほかはありません」

私は、あらたまって女御様の御前に両膝をつきまして、女御様を伏し拝みました。

女御様は、お片足をおあげあそばし、平伏する私の頭の上に、お片足をおのせになられて、お笑いになりながら、軽くお蹴りになりました。

「うまいことを言うのね。お前たち二人が、ほんとにあたしを弥勒菩薩だと思っているというのなら、他の者はともかく、すくなくともお前たちにとっては、あたしは弥勒菩薩かもしれないわ」

「二人だけではございません。天下万民、ことごとくが仰ぎたてまつる弥勒菩薩でございます」

許敬宗が、かたわらから申し上げました。

庶民の声……と許敬宗は申しましたが、長安の庶民たちが本当に女御様を弥勒菩薩下生と思っているかどうかはわかりませんものの、その後、御下生の声は、ある程度、ひろまっていったようです。

そのためかどうか……女御様は皇宮大極宮に接して〝弥勒殿〟の造営をお命じになりました。その弥勒殿に弥勒菩薩の御像を安置して、一般庶民も御門の前から礼拝することができるように……との仰せで、長安の大工、左官などが一せいに動員され、大工事がはじまりました。

さて、その弥勒菩薩の御像ですが、長安の仏師来慶が選ばれて製作に当たることになりました。

「弥勒菩薩は、すなわち武后様なのでございますから、武后様のお姿をそのまま模した御像を……」という許敬宗の提案を女御様はお許しになりました。来慶は約一カ月間、女御様のお姿をおうつししました。そして一刀三礼、精魂こめて女御様の御像を彫りあげたのです。

菩薩像は白檀材に金銀丹青をちりばめた御

等身像で、白象の背にお腰をおろされ、お片足を組み、お片足はお前に、右手の指を軽く頬にあてられている半跏思惟像で、女御様そのままのお顔、お姿。女御様が玉座から一同をお見下ろしになっている、そのままの御容姿が燦然と輝いて、私も思わず、その前にひれ伏してしまったほどの、みごとな出来栄えでした。

新宮殿の構造は、南面の総門から、一直線に中門、宮殿、弥勒殿と、それぞれ廊下を通して貫き、東西へ回廊をめぐって、役人、侍女、衛士、奴仕らの建物が並んで、その中央の宮殿が謁見の間、お居間、御寝室など女御様ご専用のお住居となり、女御様はこの宮殿を蓬莱宮とお名づけになりました。

女御様の御寝室の奥が弥勒殿で、ここに弥勒像を安置しましたが、庶民たちが礼拝するのは総門の前からですから、弥勒菩薩を礼拝することは、すなわち女御様を礼拝することになります。

もっとも奥殿の菩薩は木の像であり、蓬莱宮の菩薩は御生身なのですから、礼拝のご正身は蓬莱宮におわします生菩薩の女御様といっていいのではないでしょうか。

なお、この宮殿の変わったところは、女御様のお居間から、隣の大極宮の高宗帝のお居間へ、地下道で通じるようになっており、女御様が高宗帝のお許へ、帝のおのおの、ご自由にお通いになれる構築で、この廊下とされ、おは両陛下ご専用の地下の許しのあった侍女などのほられておりました。

私も女御様のお供の場合は、通行を禁じ通りましたが、ずいぶん長い廊下で、さあ、二百歩ぐらいありましたか、女御様のお居間や、ご寝室と、高宗帝のお居間と、こんなに離れていていいものか、私も首をかしげましたが、このころは、帝の御健康が前より、さらにすぐれぬようになりまして、風眩（ふうげん）というお灸（しとね）も、続けてお交りできませんでした。これは近ごろご病気だそうですが、ご政治やお裁きごとにも、まったくご気力がなくなったに、おまかせになっておりほとんど女御様一人、大極宮のご自分の寝日が多くなっておりましたに身を横たえられて、うとうとされている時が多く、いわば前ほどのお元気がなくなったものと拝察されます。

ご病気のため……というばかりではありませんが、ご政道の諸事も、許敬宗、李義府などの、すべて蓬莱宮へ参内し、女御様に、おうかがいをたてて、女御様のご意向のままに、ご裁断をくだされるようになりました。

皇宮の妃嬪は、皇令によれば四夫人、九嬪以下百人以上の女性が儀定されており、帝のご一存で、何人でも側室をお持ちできるわけですが、女御様が皇后になられて以来、妃嬪は名のみ残って、教養係のような女性が配され、ご閨房の実は、まったくありませんでした。帝は女御様お一人で、ご満足あそばし、女御様以外の女性は、お求めになりませんでした。これは帝ご自身のご所存でか、女御様のご希望によるものか、しかとわかりませんが、おそらく、その両方であったものと思われます。

蓬莱宮へ女御様がおうつりになってから、帝は大極宮で、女御様は蓬莱宮でとお休みになるところが別々になりました。帝は毎夜、蓬莱宮へ、お通いになるものと思っていましたが、それほどのこともなく七日に一度ほどのお通いにすぎませんでした。これは近ごろの帝のご病状によるもので、お昼間でも寝台に身を横たえられて、うとうとされている時

かがいをたて、それが帝への、ご報告もないままに決採されて実施されてしまいます。大唐帝国の定令万端、すべて女御様お一人の思いのままに動かされてゆくのでした。

とすると、高宗帝は昼は政治もおとりにならず、夜は女御様ともはなれて、おそばに他の妃嬪もはべらぬままでお過ごしになっているのですから、よほどおからだの状態がおわるくないかぎり、ご退屈の時を、もてあますことも時にはあることもやむを得ますまい。

帝は、ひそかに女御様のお姉上、韓国夫人の娘の魏国夫人と、お仲がよろしくなりました。

魏国夫人は、このとき十八才。女御様の姪にあたられる方ですし、宮廷へも、ご自由に出入りして、高宗帝とも楽しそうにお話しあったりなさっていましたが、お若い、溌剌とした魏国夫人の魅力に、お惹かれになったのでしょう。帝は女御様に内密で魏国夫人と特別の時を、お持ちになるようになりました。

別に内密になさる必要もないのです。貴妃でも淑妃でも、よろしい。堂々と妃としてお迎えになったらいいのではないかと思うのですが、なぜ内密になさるのでしょう。内密になさるから、かえってそれが悪い結果を、よぶのではないでしょうか……。

帝と魏国夫人が特別のご関係を結ばれたことが女御様のお耳に入ってから数日後、魏国夫人は突然、死亡されたのです。

このときは、帝も嘆き悲しまれました。

「朝、ほがらかに笑い興じていた者が、夕には、もう息絶えて、もの言わぬ死体（むくろ）となっている。人の生命（いのち）の、なんとはかないものであることか……」

と、ほろほろとお泣きになりましたが、魏国夫人が何故、死んだか、どうして死んだかご究明にはなりませんでした。しかし帝のお心のうちでは（この犯人は皇后だ）と、お思いになっていられたことは、間違いありません。

それにしても帝は、なぜ黙っていられるのでしょうか。女御様には一言も強いお言葉を仰有らず、はれものにさわるようなお態度をおとりになっているのです。

どちらにお味方するのかといえば、私は申すまでもなく、女御様のお味方といえばお味方ですが、しかし、多くの廷臣の中には、まだまだ女御様のなさりかたに不満を抱いて、折あらば帝に進言し、事あらば帝にお味方して、皇后を退けようと思っている者も相当おりました。たとえば、西台侍郎の上官儀です。

高宗帝は魏国夫人の死に強い衝動を受けられましたが、それればかりでなく、なにかにつけて女御様に頭のあがらない、わが身を、うとましくお思いになったのでしょう。お気にいりの上官儀をよんで「はてさて、どうしたものだろう？」と、ご相談になったのです。

上官儀は西台侍郎の宰相でしたが、詩人としての才能もすぐれ、特にその五言詩は多くの人々に愛誦されておりました。

上官儀は帝のご下問に対して、

「皇后の専横には国中の者が反対しております。帝が王皇后を廃したことは間違っておりました。武皇后こそ、廃さなければいけません」

と申し上げたのでした。そのときばかりはさすがの高宗帝も「うーむ……」と目をとじて考えこまれました。

「それがいいかもしれないな……」

帝は、かぼそい声で、つぶやくように仰有いました。

「お前は文章が達者だ。武后廃位の詔文……の草案を作ってみてはくれないか」

「はい、仰せとあれば作文してみましょう」

上官儀は自邸へ帰って、武后廃位の詔文を草し、これを帝のもとへ届けたのです。

断乎、こうする……という気は帝にないのです。廃位の詔文をお机の上において、はてどうしたものか、とつおいつ、心乱れる帝なのでした。

このとき、蓬萊宮から地下のお廊下をつたわって、帝のお居間に女御様が、お越しになったのです。これは、いつも気脈を通じている侍女の報告によってか、あるいは女御様が偶然、お越しになったのか、よくわかりませんが、女御様は机の上の草案を、おとりあげになりました。

帝は「しまった……」と、お思いになったのでしょうが、かくそうとする帝のお手よりとりあげる女御様のお手の方が早く、女御様は帝の前にお立ちになったまま、黙って文章をお読みになりました。帝は身を縮めて下を向いておられました。

「あなた、これ、なんですの……？」

「……」

「これ、あなたがお書きになったの？」

「いや……違う……」

「誰かが書いて、持ってきたの？」

「……そうだ」

「で、あなたはどうなの？　あなたも、こう思っていらっしゃるの？」

「……いや」

「じゃ、誰かが勝手に書いてきたものね？」

「……」

女御様に問いつめられて、帝は、ただ下を向くばかりでした。

「こんなもの、破ってしまいますわ。破りますわよ。よくってね……」

「……うむ」

女御様は詔の草文を二つに裂き、四つに裂き、こまごまに引き裂いてしまわれました。

「誰が書いたの？」

「……」

「誰が持ってきたの？」

「……」

女御様のお調べはきびしく、それに対する帝のお答えは、しどろもどろでした。

女御様は力をこめて帝を抱きしめました。帝のご命令で上官儀が書いたのでありませんか。この詔文の責任は、もとより帝にある筈です。お答えは、しどろもどろでも、上官儀の名前は、あくまで隠しておいてやるのが当然でしょう。

しかしまた、帝が作文者の名を、あかさぬままで、うやむやにすましてしまう女御様ではございません。蛇に睨まれた蛙のごとき高宗帝でした。

「わしに、そんな気はない。上官儀が書いてわしのところへ持ってきたのだ」

「まあ……。そう……。あの上官儀が……」

女御様は、お口もとに微笑みをお浮かべになられて、

「あの男がねえ……。そんな男だったの、上官儀は……」

と、ひとりごとのように仰有いました。そして、恐れ縮こまっている高宗帝の膝の上へおやさしいしなをつくって、お腰を下ろし、両手を帝のお肩にまわして、しっかりと、お抱きつきあそばしました。

「あなたは逃うわね。あたしの大好きな人。あなたも、あたしが好きなんでしょう？」

「……」

「あなた、あたしを、しっかり抱いて……」

帝も、ぜひなくこれに応えて、女御様をお抱きになりました。女御様のお口が帝のお口へ近づいて、隙間も洩らさぬ、ご接吻が交されました。

「ねえ、あたしが好きなんでしょ？」

「ああ、好きだとも……」

「二人の仲は、他人の誣告などで壊れるものではなくってよ」

その夜は大極宮の帝のご寝室で、お二人お睦まじくお抱きあいになって、おやすみになりました。

数日後、上官儀は〝癈太子（陣王李忠）と謀って大逆を企てている〟という理由で〝死刑に処する〟という勅令が、発せられたのです。

高宗帝は女御様のご処置に、なんの弁護もなさらず、ただご自分の目を蔽い、口をふさいで、なんのご沙汰もなさいませんでした。

このため、上官儀は長安で、又、かねてから女御様のご計画の中にあった癈王忠は黔州の配所で、それぞれ死をたまわったのです。

死をたまわったことになっているのですが実は、上官儀は死にませんでした。ひそかに連行されて蓬萊宮の地下牢に投げこまれたのです。

上官儀は地下室の鉄の檻の中に、衣服を全部はぎとられ、裸のままで、おしこまれました。高さ、巾、おのおの三尺、長さ六尺ほどの鉄の檻で、上官儀は檻の中で立つことができません。両手、両足を床につけて、犬のように四つ這いの姿でいなければなりませんでした。自殺しようにも身につけるもの何一つなく、強いて方法を求めれば、鉄の柵に自ら頭をうちつけて死ぬほかはありませんが、上官儀は、それも出来なかったのでしょう。この檻の中に五日、十日……と生をつづけていたのです。

食べものは倭国人の奴仕と同じ様に平皿に残飯で、檻の前に首をつきだせる程の穴があり、上官儀は、そこから首をつきだして、前に置かれた平皿の残飯にかぶりつくのです。

この食物を運ぶ役が私でしたが、女御様はときどき、私に上官儀の様子をおききになりました。

「はい、犬のようにして這ったまま、いつも苦しそうにうなっております」

「食べものは、食べているかい？」

「はい、はじめの二日間は食べませんでしたが、三日目からは、むさぼるように食べております」

「穴から首をつきだして、犬のよってかい？」

「穴から首をおききになって、ご気嫌よく、お笑いになりました。

「まあ、ほほほほほ」

女御様は私の報告に従えて、しずしずと地下の牢へ玉歩を、おはこびになりました。そして上官儀の檻の前にお立ちになりました。

「上官儀、元気かい？」

「……」

出来て参りました。〝聖神武后〟と刻印した鉄のコテでした。女御様はこのコテを真赤に焼いて、上官儀の額に押すよう、お命じになりました。

私には苦がてに仕事です。私は、食べもの穴から顔をつきだした上官儀の首筋を、おさえる方の役にまわりました。焼ゴテを持った衛士が上官儀の額に容赦なくコテを押しつけたのです。

ジリジリ……と皮膚が焼ける煙が、あがりました。

「あ、あーッ」

不自由な檻の中で上官儀は転がりまわって苦しみました。女御様はこのコテを真赤に逃げ帰ったのです。そして数日後、その腫れがひいた上官儀の額には、鮮かにも、くっきりと〝聖神武后〟の御名が焼き込まれていたのです。

女御様は私を従えて、しずしずと地下の牢へ玉歩を、おはこびになりました。そして上官儀の檻の前にお立ちになりました。

「上官儀、元気かい？」

「……」

「お前はもう、一生、あたしの犬なんだよ。毎日、あたしの残飯を食べて、犬の暮らしをつづけていくほかに、お前の生きる道はないのよ」

「……」

「わかったわね。あたしのご主人の標をつけてやったのだよ。お前の額に、なんて書いてあるのか？　私は、武后様の飼い犬ですという標を掲げているんだよ。あ、お前自身には鏡がないと見えないわね。沓、鏡を持っておいで。せてやるんだから……」

私は大急ぎで女御様のお部屋に引き返し、鏡を持参して女御様に、

「ほら、見てごらん。見てあるか……」

上官儀は、おそるおそる首をあげて、鏡にうつる自分の顔を見上げました。そこには、〝聖神武后〟と女御様のお名前が黒々と刻みこまれていたのです。

「あ、あーッ」

上官儀は両手で、わが額をおさえて呻吟しました。

「ほほほほは、わかったろ。その字は一生消えないんだよ。お前が一生、消えずにいているんだよ。お前へのお裁きは死刑だったが前へ出て、遂に首穴から首をつ

のお名が一生、お前の額の上に輝

私は、さらに突きたてます。そのたびに上官儀のからだが前へ出て、遂に首穴から首をつき出しました。そのとき女御様は前へおすみになって、飛び出した官儀の首筋をお右足で、ぎゆっと、お踏みつけあそばしました。

「さあ、どう？　可哀そうに、これでは動けないわね。食べものがいやだったら、あたしの沓でも嘗めるがいい」

頬を床におしつけられて、いびつになった官儀の片頬から口の方へ女御様はおみ足を、おずらしになります。女御様のお沓先が官儀の口の上を蔽いました。

「女御様、もったいのうございます」

私は思わず、はらはらしました。

「なにが、もったいないの？」

「女御様の玉体が、罪人の口に触れますのが……」

「ほほほほは、この犬は、まだ馴れていないから、あたしの足に噛みついてくるかもしれないわね。沓、ちよっとお前、あたしの馬におなり」

「はい」

私は直ちに女御様の前に四つ這いになりました。女御様は、お身も軽やかに私の背の上に、おまたがりになり、おみ足で私の脇腹を

読者ギャラリー　『臣従の礼』　岡　たかし

おけりになりました。私は女御様をお乗せし
「ひひーん」と、いななないて牢屋の床の上を
這いまわりました。
「上官儀、見たかい？　お前も、いまに馴れ
たら、こうして、あたしの馬にしてやるから
ね。喜んで、その日を待っているんだよ。あ
あ、おもしろかった」
女御様は私の背からお下りになって、階段
をお上がりになりました。私も久しぶりに女
御様のお重みを身にうけて、ぞくぞくとした
喜びに胸をふるわせつつ、女御様のおあとに
従ったのでした。
こうして女御様は時おり、牢舎へお下りに
なって、上官儀の様子を眺められました。こ
れに対して上官儀の心のうちは、どうだった
のでしょう。依然として食物は、むさぼり食
べていますし女御様の飼い犬となっても生へ
の執着は、たちきれないのでしょうか。いっ
そのこと、早く女御様の前にひれ伏して奴仕
の誓いをした方が、少なくとも、こんな窮屈
な檻から解放されるものをと思うのですが、
私などと違って、かりにも西台侍郎の宰相だ
った男ですから、李義府のように、たちまち
態度を豹変することも、しにくかったのかも
しれません。
しかし、結局は李義府と同じことでした。
李義府は高官に用いられましたが、いったん
処刑されたと発表された上官儀を、ふたたび
復職させることも、出来にくかったでしょう
し、また賢明な女御様のことですから、この
男に陽の目をみさせてはいけないという、ご
配慮があったのでしょう。女御様の、おみ足
を平伏した頭に戴いて、奴仕の誓いをした上
官儀は、その後、蓬莱宮の奴仕として、女御
様のお下着類の、洗いもの係を命じられまし
た。
宮廷の役人などとも会う機会もなく、奥裏
の洗い場で、額まで蔽う、かぶりものを冠っ
て、黙々と女御様のお下着を洗っている男が
おりました。これこそ、西台侍郎宰相上官儀
の、なれの果てだったのです。

12

一方、高宗帝のご病状はすすむばかりで、一向、ご恢復の模様はありませんでした。

ご政治上のことも、女御様がすべて、ご決裁なさいますし、このころ、許敬宗の進言で女御様を皇后の御称号から〝天后〟とおよびすることを、お許しになりました。従って高宗帝は〝天皇〟とおよびすることになったのですが、中国の皇帝で天皇という御称号は、今までなかったそうです。これも、女御様を〝天后〟とお名づけ申しあげたついでといっては失礼ですが、つり合い上、そういうご称号が生まれたわけで、このあいだ、倭国人にききましたら、倭国の王は天皇と称するそうです。なんだか、その真似をしているようで面白くありませんが、もっとも天皇などというお名は、どっちでもいいことで、私にとっては女御様が〝天后〟であらせられることこそ、まことに意義深く、女御様こそ天の神であらせられるわけですし、先に弥勒菩薩であらせられた女御様が、今また天の神であらせられ、仏、神、人三界の最高の尊い御方として君臨あそばすのですから、まことに有難くも、もったいない極みと申しあげるほかはないわけです。

女御様の、天后お名のりにより、新しい治世がはじまるとされ、これを契機に年号も〝上元〟と改められました。そして、そのご治世の第一歩として大赦令が発令されました。

条文を発して、庶民にお示しになりました。

第一条　農業、養蚕業を振興し、賦役を緩和する

第二条　北西地区の税を免除する

第三条　徳化をはかって、平和を重んずる

第四条　着侈を禁止する

第五条　徴兵を軽減する

第六条　庶民は等しく言論の自由を持つ

第七条　不正を行う官吏、役人は追放する

第八条　すべての官吏、役人は、唐王朝と同じ李姓を頂く〝老子〟を学ばねばならぬ

第九条　男女平等の本旨により、母の死にも三年の喪に服すること

第十条　官吏の官を退いた者は、その官爵が保持される

第十一条　中央官吏の俸給は、八品以上のものを増給する

第十二条　永年勤続の埋れた官吏を調査して昇進の道をひらく

第一条から第六条までは一般庶民に対してご政治上のことも、女御様がすべて、ご決裁なさいますし、このころ、許敬宗の進言で女御様を皇后の御称号から〝天后〟とおよびすることを、お許しになりました。従って高宗帝は〝天皇〟とおよびすることになったのですが、中国の皇帝で天皇という御称号は、今までなかったそうです。これも、女御様を〝天后〟とお名づけ申しあげたついでといっては失礼ですが、つり合い上、そういうご称号が生まれたわけで、このあいだ、倭国人にききましたら、倭国の王は天皇と称するそうです。なんだか、その真似をしているようで面白くありませんが、もっとも天皇などというお名は、どっちでもいいことで、私にとっては女御様が〝天后〟であらせられることこそ、まことに意義深く、女御様こそ天の神であらせられるわけですし、先に弥勒菩薩であらせられた女御様が、今また天の神であらせられ、仏、神、人三界の最高の尊い御方として君臨あそばすのですから、まことに有難くも、もったいない極みと申しあげるほかはないわけです。

女御様の、天后お名のりにより、新しい治世がはじまるとされ、これを契機に年号も〝上元〟と改められました。そして、そのご治世の第一歩として大赦令が発令されました。

条文を発して、庶民にお示しになりました。

第一条　農業、養蚕業を振興し、賦役を緩和する

第二条　北西地区の税を免除する

第三条　徳化をはかって、平和を重んずる

第四条　着侈を禁止する

第五条　徴兵を軽減する

第六条　庶民は等しく言論の自由を持つ

第七条　不正を行う官吏、役人は追放する

第八条　すべての官吏、役人は、唐王朝と同じ李姓を頂く〝老子〟を学ばねばならぬ

第九条　男女平等の本旨により、母の死にも三年の喪に服すること

第十条　官吏の官を退いた者は、その官爵が保持される

第十一条　中央官吏の俸給は、八品以上のものを増給する

第十二条　永年勤続の埋れた官吏を調査して昇進の道をひらく

第一条から第六条までは一般庶民に対して、第七条から第十二条は主として官吏役人に対する方針をお示しになったもので、たとえば第二条の北西地区の免税など、北西地区は前年イナゴの大群が襲来し、農作物の大半が被害をこうむって大飢饉となったことからの、ご配慮であり、第九条の母の死に三年の服喪とは、従来は父の死にのみ三年の服喪があって、母の死については一年とされていたものを、女も男も平等であるという女御様のご識見から、父と同じ服喪に改められたのです。

この御条令が発令されるや、庶民も役人も挙げて天后様の御聖徳を仰ぎ讃えました。

毎日毎夜、皇宮の御門の前には庶民の人垣が列をつくってうずくまり、天后様のおわします蓬莱宮に九拝の礼を捧げたのでした。

高宗帝は、もうご自分の力で女御様を動かすことは、不可能になりました。ご病気のため、ご気力を失ったせいもありましょうが、その昔、お二人の間の秘めごとで女御様に臣従を誓った余波は、何年もつづいて遂に最後まで消すことができなかったのです。

帝は退位の意志を女御様にお洩らしになりましたが、女御様はお受けいれなさいませんでした。まだその時期でないと、お思いにな

ったのでしょう。こういうご識見は、女御様は、まったくもってすぐれておられ、余人のうかがいはかることが出来ないお賢さを、お持ちになっていられるのです。

女御様は、高宗帝ご養生のためとして、湿気の多い長安の風土をさけ、お二人でしばらく洛陽の別宮で、お暮らしになることになりました。

洛陽は前々から女御様のお好きな都で、洛陽遷都の案も、しばしば話に出ていたくらいなのですが、遂にそこまでにはいたりませんでしたが、女御様は長安の政治を弘皇太子におまかせになり（弘様もこのときは、すでに二十一才におなりあそばし、母君に似て、ごまことに立派な皇太子に、ご成長していられました）お好きな洛陽で、しばらくの間、のんびりとお暮らしになってみたいと、お思いになったのでしょう。非公式の行幸で、表向きには発表せず、ご側近の役人、医師、それに、ごく少数の衛士と侍女、私など総数二十五、六人の、ご微行で都を、あとにしたのでした。

帝は、ほとんど終日、ご寝台で横になっておられましたが、女御様は洛陽のお暮らしを大そう、お楽しみになっていました。政治のわずらわしさもなく、格式ばった儀式もなく、ほんとに気随気侭に、その日を送ることができて、いわば、籠から飛び出た小鳥のように、晴れ晴れとした、お気持だったのでしょう。梅園、桃林のお花見など、庶民の女の風をされ、私一人をお供にしてお出ましになったりして喜んでおられました。

ある祭りの日の夜でした。

普通、夜おそく女性の外出は許されていなかったのですが、この祭りの日には男女ともの、そのもしものことが実際に出現してしまったのでした。

町の女に戯れている、たくましい男の様子を女御様はお立ちどまりになって眺めていられました。男は酒に酔っているとみえて、少々足もとは、よろよろしておりましたが、女を抱きあげたりする力は、並はずれて強いようでした。

「まあ……。省、とめておやり」

女御様が私にお命じになりました。

「はッ」

と答えはしましたものの、いかにも強そうな男です。年のころなら三十七、八才。眉の濃い、口の大きな、なんの職についている者かわかりませんが、少々下卑（げび）と猥せつな男で衛士の五、六人もお供につけていらっしゃるのなら、私も安心なのですが、なにしろ、お供は私一人です。また、皇后様とわかっておれば、男もおそれて手が出ません。しかし庶民の女の服装をした、この夜の女御様は庶民の女で、皇后様ではないのです。もしものことがあったら、どうしよう……と、私は内心ひやひやもので、一刻も早くお屋敷へお帰りになることを念じておりました。

もしものことがあったら、どうしよう……の、そのもしものことが実際に出現してしまったのでした。

町の女に戯れている、たくましい男の様子を女御様はお立ちどまりになって眺めていられました。男は酒に酔っているとみえて、少々足もとは、よろよろしておりましたが、女を抱きあげたりする力は、並はずれて強いようでした。

「まあ……。省、とめておやり」

女御様が私にお命じになりました。

「はッ」

と答えはしましたものの、いかにも強そうな男です。年のころなら三十七、八才。眉の濃い、口の大きな、なんの職についている者かわかりませんが、少々下卑（げび）と猥せつな男で

す。

しかし女御様のご命令があった以上、黙って立っているわけにもいきません。

「おい、やめろ。可哀そうなことをするな」

私はその男と女の間に割って入りました。

「なにッ」

男は私をつきとばそうとしましたが、私も必死で男の腕にしがみつきました。この隙に男の抱擁から放れた女は、一目散に暗闇の中に逃げて行きました。

「あッ、こやつ！」

女に逃げられた男は、あらためて私を鷲づかみにして、その場に、どうと投げつけました。私は、したたか地上にたたきふせられ、しばらくは起きあがることも出来ませんでした。

男はひよっと、かたわらにお立ちになって いる女御様に目をつけたのです。私には目もくれず、つかつかと女御様のお腰を抱きしめました。

「あッ、なにをする！　無礼なッ」

女御様は、おもがきになりましたが、男のたくましさの前には、鷲につかまれた小雀のあがきにも及びませんでした。私は懸命の努力で起きあがり、ふたたび男の腕にしがみつきましたが、一ぺんに突きとばされてしまいました。

「おい、姐さん、お腰を抱いたまま、おみ足をバタバタさせて逃れんとする女御様をかかえて、暗闇の中を歩きだしました。私は、ようやくのことで起きあがり、男のあとを追いましたが、女御様のあとを追うばかりで早く、私は二度ほど追いすがりましたが、そのたびに、したたか地上にたたきふせられ、ただ夢中で男と女御様のあとを追うばかりでした。

一軒の陋屋の戸をあけて、男は女御様を、その家の中におしこみました。どうやら、この男の住居のようです。家の中は飾りものも敷物もない、あばらやでした。

「姐さん、こうなったら袋の鼠だ。もう逃がさねえよ」

男は女御様のお腰から手を放しません。そのおからだから離れて、その横に酒樽を転がすようにゴロリと寝転がりました。女御様もじっとお横になったまま動きませんでした。私も今さらバツがわるく、そのまま気絶した態で、じっとしていました。

そのうち、酒の酔いに加えて、先ほどからのはげしい動きに、男もさすがに疲れたのでしょう。そのまま大きなイビキを、かきはじめたのです。女御様が、そっと起きあがって「うるせえッ！」と私の肩をつかみ、うしろへ突きとばしました。

男は右手で私の肩をつかみ、うしろの柱に後頭部をいやというほど打ちつけ「あッ」と気絶してしまいました。いや、気絶するほど目がくらみましたが、気絶はしなかったのです。気絶するような目のくらみかたで、私はボーッとして、その場に倒れてしまったのでした。

もう邪魔者がいないと見るや、そのやくざ者は女御様の上にのりかかり、女御様を羽がいじめにしてしまいました。女御様が、おみ足を右に左にバタバタと、おもがきあそばしているお姿を、もうろうとした意識で眺めながら、私は夢のような状態で、その場に倒れていたのです。

事が終わりました。男は、はじめて女御様のおからだから離れて、その横に酒樽を転がすようにゴロリと寝転がりました。女御様もじっとお横になったまま動きませんでした。私も今さらバツがわるく、そのまま気絶した態で、じっとしていました。

そのうち、酒の酔いに加えて、先ほどからのはげしい動きに、男もさすがに疲れたのでしょう。そのまま大きなイビキを、かきはじめたのです。女御様が、そっと起きあがって

乱れたお裾を、おなおしになりました。音のせぬように私のそばへおいでになり、私の頭を軽くお蹴りになりました。私はハッと気がついたふりをして目をあけました。「さ、早く逃げよう」という、ご動作をお示しになって、女御様は戸口の方へ、しのび足ですすみました。私も無言で女御様の、おあとへ従いました。外へ出るや、女御様と私は駈けるようにして、その家から退参したのです。

お屋敷へ帰ってからも、女御様は昨夜のことを私にさえ、ひとこともお触れになりません。私は心のうちで、いずれ屈強の衛士四、五人を、あのやくざ者の家へ派して、秘密のうちに男の首を、はねてしまわれるものと思っていましたが、いっこうに、その、ごさたもありませんでした。

やがて、四、五日たってからでした。

「沓、この前の祭りの夜の、あの男……」

「はい……？」

「お前、あの男の家をおぼえているだろうね」

「はい、うろ覚えですが、探せばわかると思います」

「あの男が、どんな素性の男か、どんな素性の男かとか、種々の薬を売り歩いて、いわば大道商人なのですが、力を見せるために、人より並みはずれて筋骨たくましく、私など一撃で、ふつ飛ばされてしまったのも成程と、うなずけた次第です。

このことを女御様にご報告しますと、女御様は「ふーん」と、おうなずきになっただけで私を引き下がらせ、そのほかのご沙汰は、なにもありませんでした。

それからまた四、五日たちました。女御様は、ふたたび私にお命じになったのです。

「お前、あの、祭りの日の男……ね」

「は、はい」

「あの男に会って、話をしてみてごらん。私の身分は、まだ言わない方がいいよ。さるお屋敷のお方とか言っておいてね。そんなことか言っておいたら、この屋敷へ連れてきておくれでないか」

そんなことをしていいのでしょうか。あの男をお屋敷へ連れてきて、女御様とお会いしたら、女御様がどんなお方であるか、すぐに男に知れてしまいます。女御様は、どういう

---

**――ご投稿下さる方へお願い――**

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつきかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

おつもりなのでしょう。私は、あの男に抵抗して突きとばされたときと同じ不安の念にかられましたが、女御様の、ご命令です。私はただ、お言いつけ通りにするだけ……と自分に言いきかせて、私は馮小宝の家を訪れたのでした。

女御様と馮小宝は、女御様のお居間で長い間、話しあっておられました。どんなお話かうかがえませんでしたが、馮小宝も吃驚したことと思います。しかし後刻、私がお居間によばれましたときは、女御様も馮小宝も、きわめてなごやかなご様子で、お話はどうやらうまい具合にすすんだもののようでした。そのときの馮に対する女御様のご態度は、いつも臣下に接するときのご様子と、まったく異なって、私といえども今まで一度も見たこともない、女らしいやさしい、おしなをおつくりになった女御様が、そこにおられたのでした。

その後、馮小宝は白馬寺の僧、節懐義としてお屋敷の者に紹介されました。お屋敷へはお出入り自由となり、しばしば女御様のお部屋で長い時を過ごすのです。どんな時を過ごすのか、知っているのは私一人です。私は見張り番として、次の間で他の者の出入りを監視する役目を仰せつけられ〝ただ今、ご祈禱中〟として侍女の者を追いかえすことも、しばしばあったのでした。

それにしても、なんということでしょう。こともあろうに大道商人をお屋敷にひきいれて、次の間に私を見張りにして桃源の夢をお結びになる女御様のお気持は、なんとしても理解に苦しむばかりです。今までにも、許敬宗と女御様とあやしいうわさが、口さがない者の間にとがありますが、女御様全部を知りつくしているということはありませんでした。

それにしても、新たに節懐義が加わっておのでした。

## 13

高宗帝のご病状は一進一退で、はかばかしくなく、医師のすすめもあって、再び長安にお帰りになることになりました。帝は、お車の中にお横になったままで、都へひきかえされたのです。

その一行中に、新たに節懐義が加わっておりました。

宮廷には、白馬寺の主、女御様のご相談役というご紹介で、節は蓬莱宮の内に豪華な部屋をたまわり、ここに移り住むことになったのです。

節はまた、わかりもしないのに、いろいろなことを女御様に進言し、女御様は、またそのとおり、ご実施なさいました。高宗帝ご病気平癒のための仏殿の建立とか、各寺院の経典は〝大雲経〟をもって、主典とすることか、節はご政治の方にも口出しし、宮廷の四方に緑、白、赤、黒四色に塗りわけた〝告密の箱〟を設けて、密告の利度を採用したり、職階の異動などもひんぱんと行ないましたので、役人たちも、みな節を恐れて、縮みこみまし

た。そのうえ、並はずれた腕力の持主ですから、従来などでもよく争いごとを起こし、無礼があったと称しては、相手の者を地に、たたきつけたりしましたので、役人、庶民ともども、みな、節を恐れ、女御様の甥で、勢力のあった武承嗣、武三思といった方々も、さながら従僕のごとく、節の乗った馬のくつわをとったほどでした。

永淳二年十二月六日、長い間、臥床中の高宗帝が遂に崩御されました。

皇位は太子哲様が継承され、中宗帝となられましたが、哲様は女御様の第二皇子です。第一皇子の弘様が皇太子であらせられたことは前にも申しあげましたが、母上の女御様とご意見の衝突があってから、原因不明のご病気でおなくなりになりました。で、第二皇子の哲様が皇太子となられ、高宗帝没後、中宗帝となられましたが、この方の在位が五十四日間。女御様のお指図でご退位となり、お末子の旦様が帝位をつぐと布告はされたのですが、一日も皇帝として正式のお席に出たことのないうちに、旦様は皇嗣というお名前に戻されてしまいました。

女御様は一たい、どういうおつもりで、こんなお指図をされたのか……。おそらく、女御様ご自身が皇帝になるというお考えが、お心のうちに、つきまとっていられたため、こんな即位、退位、癈位と次々かわる中途はんぱなご処置が、つづけられたのではないでしょうか。

果たせるかな、いくばくもなくして、長安の市民伝游芸を団長とする九百人の一団が遂に「天后にお願い申しあげたいことがございます」と、拝謁を申し出たのです。

請願の内容は〝唐室を癈して新しく周の国を立てることと布告はされたのですが、その周朝の皇帝として武天后が即位されること〟というのです。

そのときの女御様は、全人民の意志とは思えない……として、その請願は、お受けとりなさいませんでしたが、団長の伝游芸には鴛台侍郎の官位をお与えになりました。

それから三カ月後、今度は武承嗣に率いられた官民一千人の団体が宮廷に入り、女御様にお目通りを願って、六万人の署名をつらねた巻物を女御様にお見せして、同じ懇願をしたのです。女御様は、一たんはその団体をひきとらせましたが、その二日後、とうとう請願書に〝承認〟と、ご署名を与えられたのでした。

それより一カ月後〝唐を癈して周とする。年号を天授と改める〟という布告が聖神皇帝武則天のお名で発布されたのです。

ここにおいて女御様は、歴史上かつてない〝女帝〟として人民の上に君臨されることになりました。しかも、従来のどの皇帝にもなかった神としての皇帝、聖神皇帝の玉座にお


## 天星社刊

### ≪限定版グラビア写真集≫　在庫案内

**山原清子『刺青の魅力を探ぐる』**　一部一〇〇〇円（送共）　略号「美7」
◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フオト結集版。

**M写真集『女王様に飼育される日々』**　一部一〇五〇円（送共）　略号「M特」
◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。
◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いします。

すわりなされたのです。

私は、神であらせられる女御様にお仕えする身の幸福を、しみじみ感謝しましたが、しかし、少々心配なのは、あの節懐義のことです。高宗帝とまったく異なった、野卑な男の男むきだしの魅力におひかれになったのでしょうが、教養も常識もない男だけに、女御様が皇帝になられますと、その皇帝を意のままにしているのは俺だという分別のない自惚れから、どんな事態が生まれてくるか、はなはだもって不安の種でした。

しかし、女御様は、ご賢明なお方です。私などのなんのお役にもたたない者が、余計な心配をする必要はありませんでした。

一年ほど後のことですが、宮廷内で乱暴をはたらく節懐義を侍女三十人がとりかこみ、大きな網をかぶせて彼を身動きできないようにさせ、待ちかまえていた衛士が進みでて、網の中でもがく節を、太い金棒で一撃のもとに打ち殺してしまいました。

節懐義が、もう少しおとなしくしていれば女としてのご精力の、ありあまっていられる女御様でしたから、ご寝室内では勝手気侭にふるまって女御様を自由にすることが出来たでしょうものを、身のほど知らぬ振舞いが、遂に身を滅ぼす、ことになってしまったのです。

節懐義の死は、誰も同情する者がおりませんでした。当然のこととしてかたづけられ、その後、庶民の噂ばなしに節懐義の一物の大きさがこのぐらいあったとか、なかったとか好色ばなしの語り草になったくらいが、落ちでした。

女御様は、周朝の皇帝として、前例のない"聖神皇帝"と名のられ、その後、臣下の者の懇願により"金輪聖神皇帝"さらに半年ほどして"越古金輪聖神皇帝"また"慈氏越古金輪聖神皇帝"と次々に、ご尊号が変わりました。

その後、女御様は、お年を召しても、ご精力衰えず、ご自分の子供のような張易之、張昌宗の兄弟を、お可愛がりになり、蓬莱宮内に、それぞれ、お部屋を賜わりましたが、この二人は女のように優しい美青年で、いつも顔に紅をさし、口に鶏舌香を含んで女御様に接していました。女御様としては、ご自分は皇帝であり、男の皇帝が多くの妃嬪を持たれていたように、女の皇帝が男の資を持っていても差支えないではないか……というお考えのようでした。

その間、依然として私は女御様のおそば使いとして、お身のまわりのことなど、お勤めをつづけましたが、私も年をとって、身体が弱ってまいりましたので、それからしばらくして宮廷から、おひまを賜ることになりました。

私は最後のお願いとして女御様に"弥勒菩薩様のお足跡"を頂戴したいと申しあげました。女御様は不審な様子でしたが「釈尊の足跡が仏足跡として保存されてあると聞いております。女御様はお笑いになって、その弥勒菩薩であらせられますのお足跡を、私の仏足跡として長く奉持したいと存じますので」……と申しあげましたら、女御様はお笑いになって、お許し下さいました。

私は紅い器粟(けし)の花弁を丹念にすりつぶし、朱肉をつくって、その上に女御様の、おみ足をいただき、私の捧げる奉紙の上に、お踏みを願ったのです。

女御様のおみ足の裏が二つ並んで、鮮かにしるされた"仏足跡"を、私はおしいただいて拝領しました。

わが家の祭壇に飾って朝夕礼拝しながら私は女御様へ御奉仕した幾年月の、楽しい思い出にしたいと思っているのです。

（完）

睡眠薬常飲の少女

# キミいずこに

浜松アニキ

あらいかず・画

僕は今、この誌面を借りて、行方知れずの君に伝えたい。それは、きっと君がこのページを開くだろうことが、僕には予想できるからだ。

僕たちが初めて逢ったのは、君が高校三年の秋。人の世に興味のない風を装った君だったけれど、投げ遣りで、すね者で、自分本意にすぎなかったんだ。認めてもらいたい、見つめてもらいたい、愛されたいと、息がつまるほどに胸を燃やしていた君なんだ。

あと卒業まで四カ月という時、君は「学校をやめたい」といい出したっけ。ペシミストだった僕でさえ、君の何事にも無感動な態度が憎くかった。「やめたければやめちまえ」と、君に負けぬほど無造作に突き放した。

しかし本当のあの時の君は、ただ自分の置かれた現状を、ほんのチョットだけ、ねじってみたかっただけだと思う。それを自分の手では出来なくて、僕にとんだサイコロを振らせたものだ。僕は君の頼りになるアニキでありたいと思っていたのに、あの時点で君に軌道をはずさせてしまったようだ。

サドの「悪徳の栄え」を手にし、その種の理由から（と思う）自殺をはかった過去を語り聞かせては、僕に何かを訴え、何かを求めようとしていた君。その何かを察知しながら受けて立たなかったアニキを、君は意気地なしと思ったことだろう。

しかし、男くさい下宿へ一人で訪ねて来て安心しきり、放心した態の少女に、——信頼するアニキ——と呼ばれる未完成な僕が、いったい何をし得たろう。それが結局は君に安らぎを与えるのだろうとは推測出来ても、理性を持って嗜虐を試みるには、君はあまりにもたおやかで、誘惑的だった。僕自身、あまりにも心が乱れすぎた。内燃し、うっ積した感情は理性をはねとばして、君に苦痛のみしか与えなかったに違いないのだ。

アニキには、心理学徒としての活字に依る知識だけはあった。言葉だけなら、いくらでもあった。でも、机で学んだことば以外のものを求められたら、僕には、自己本位の暴力だけしか残らないんだ。

「K子、もう、自分では死ねないの。アニキが殺してくれたらいいんだけどな」

真顔だった。

いや、君はいつも笑わなかったし、僕も君といる時は、いつも腹が立っていて、乱暴なことばしか、口に出なかった。

「死にたければ殺してやろうか」

「できないくせに……」
四畳半一ト間の部屋の隅で小さくいう。
「なぜ、できないと思う？」
「だって、アニキはこの世の適応者だわ。普通の人間よ」
「普通の人間？」
僕はこの普通とか一般的といわれることが大嫌いだった。だからあの瞬間に、君のことばそのものに捕われて、君の真意を読む理性を失っていたんだ。一本のナイフが答であってはいけなかったのだ。
でもあの時はすでに、君の紺色のスカートの上には、ゾーリンゲンのシャープなナイフが投げられていた。
君は一瞬、キラッと目を光らせたね。僕はただ、君の顔から恐怖の色を見出せばいいと思っていた。しかし君の白いふくよかな手がそのナイフを持ち上げ、のろのろと、そのくせナイフ特有のピシッと直線に伸びる反動に負けながら刃を起こし、そして柄側を黙って僕に向けた時、僕は君の表情の中に見た。確かに感動らしいもの、燃える様な憧れがあったことを……。だが、僕の期待した恐怖の色はなかった。
僕はナイフを引ったくった。そして、君の制服にかくされた胸のふくらみの下に鋭利な刃がすいこまれると、噴き上がる血液のあたたかさをとっさに想い浮かべていた。
が、それは行動には移せなかった。僕は、君の制服の繊維の一本にすら、刃をあてることもできなかったのだ。
君はやっぱりあの時も、明らかに、落胆とアニキへの軽蔑の色をチラッとみせた。
「アニキには無理よ。でもK子のこんな話、聞いてくれるのはアニキだけだわ。これからも聞いてね」
真実の気持ではあったろうけれど、あんな労わりじみた言葉などは、君のものじゃなかったはずだ。馬鹿にしやがって……。
それから三十分ほど、二人は向かいあっていた。あの時の僕の頭の中には、悶えあえぎ被虐の中に恥溺する君の裸身があったんだ。それが、君にとっての幸福であり、酔い痴れるだろう。君は怠慢なのだ。自殺未遂以来、さすものであり、地獄への陥落ではなく、生甲斐を覚える乙女への復活のはばたきであればいいと願った。
翌年暮れは卒論作成の追い込みに入って、徹夜がつづき、君にも無数の統計値にソロバンを入れてもらった。
「……アニキにとっては、犯罪なのよね」
突然、そんな独りごとをいう君。
人形のように無表情な君と居ると、やっぱり何か得体の知れない腹立たしさが先に立ち原稿もはかどらなければ、君の内省をさぐる余裕も生まれはしない。
（ひと思いに、こいつの衣類をむしり取ってやろうか。そうすれば、少しは人間らしい感情を示すかもしれない）
アニキは腹で思い、君は、特有の勘でそれを探知しながらも、身動き一つしない。と、もう君に気付かれたと感じた時点から、それを実行する意味が、消えてしまうのだ。仮に行動に移したとしても、ロウ人形の衣をはぐ様に、君は無表情を造り通すだろう。
K子のバカヤロウ！　人並みの少女ならナイフの刃に身をすくめ、乱暴に衣類をはがされる我が身に恥じ、あるいは恐怖に失禁もするだろう。君は怠慢なのだ。自殺未遂以来、自らでは行動することができず、他人の怒りに身をまかせて、恥美的に、夜桜の音もなく散る様に、土に帰ろうとする。
大学を卒業して郷里の浜松へ帰った年の夏の終り。訪ねて来た君は、もう、どこからみてもフーテン娘だった。睡眠薬の常飲で、平生より唇の血色の悪いところを、さらに濁ら

せ、目も充血して輝きがなかった。（処女だろうか？）と疑った。僕は君を、中田島の砂丘に連れて行き、その人っ子一人いない砂丘に置去りにして帰った。腕時計は午前三時だった。数時間して君は電話してきた。

「アニキ、K子に死ねといったのね」

君の声は、昔ながらの無表情さで、内心がつかめなかった。だが確かに、置去りにしたら死ぬかも知れないという予感がしたから、あの時、僕は瞬間、時計を見たんだろう。自分の意識していなかった内心が、君の声を聞いて、はじめて分かった。正直なところホッとして僕は云った。

「できなかったようだね」

「ウン……」

君の答は神妙だった。

「ねえ。ジャズ喫茶、教えて」

「俺には、そういう好みはないんでね」

「今夜、逢ってくれる？」

「ウン……」

「迷惑そうな声ね」

「フン、俺を気遣うのかい？　アニキの気持なんか、どっちでもいいんだろ？」

「場所きまったら、また電話してもいい？」

終始、神妙だった。なにか心に決意した事があったのだろう。

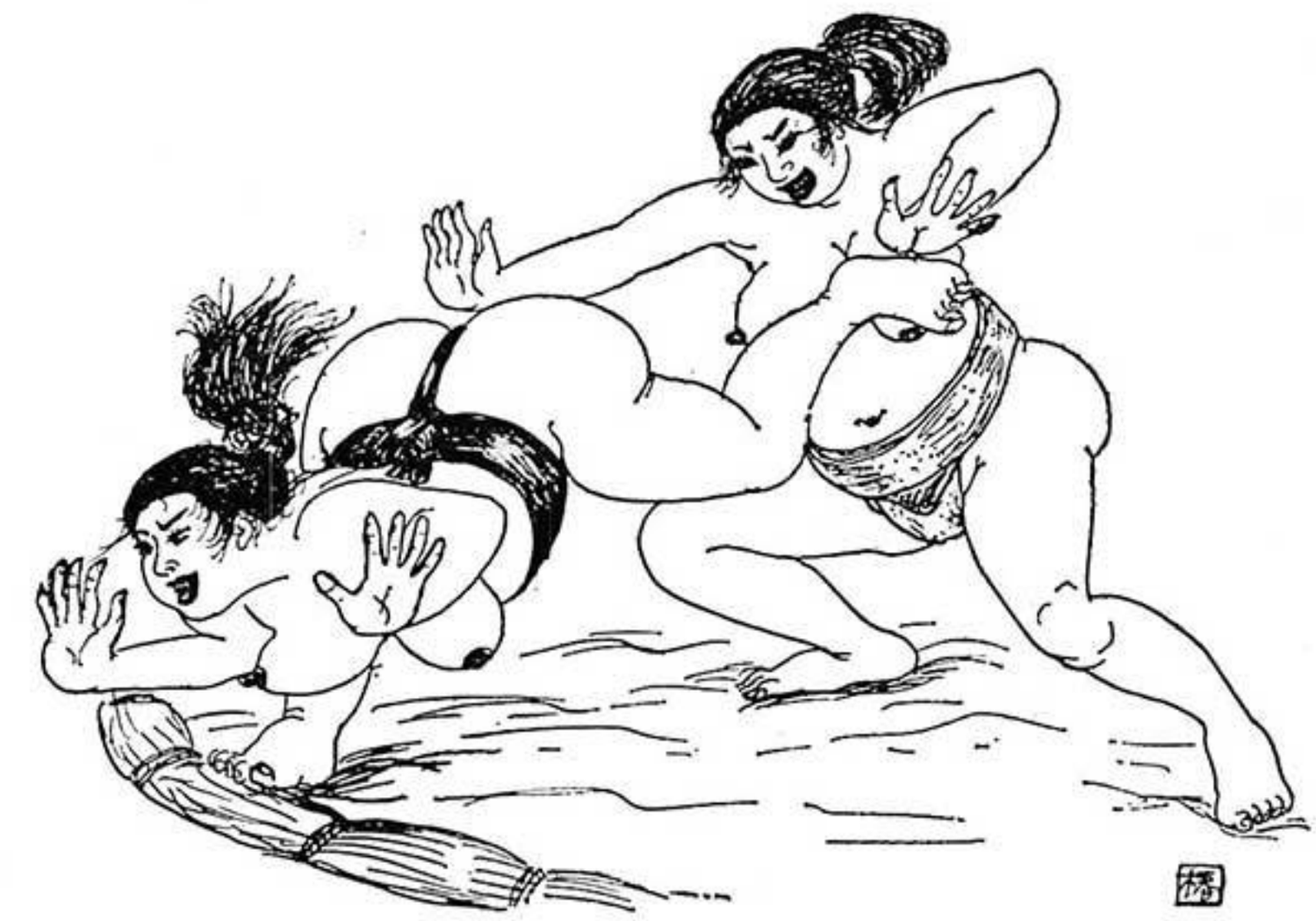
しかし、あれが最後だった。君は当然、アニキが約束を破ったと思い込んでいるだろう。

そうじゃないんだ！　君があのあと電話をしてきた時、僕は外出していたし、君のことづけの取りつぎ違いで場所が分からなくなってしまったからなんだ。約束だけは守るアニキだったことは、君が一番よく知っていただろう？　やっと君らしい人が長い間、待ってきのびる目標が、みつかったはずだ。そして何かを期待し、訴えたかった、はずだ。

可哀そうなK子。生きていて欲しい。

この本を読む意志があるなら、この世に生勇気も逡巡もいらぬ人のテープを持って船を見ただし、この世には、この世の大多数の人間が機嫌良く生活するためのルールがある。陰には陰、陽には陽のモラルがあり、一つの本能から生まれるものでも、時代により人により、肯定もされ否定もされる世界がある。君も一旦は人間社会に復帰し、怖れや、愛や悲しみや、恥かしさの本質を知り、その使いわけを覚えなくてはいけない。それができると確信したら、便りをくれ給え。〝K子だけに分かるアニキ〟だ。住所は知っているね。忘れたならば君の両親が教えてくれる。心配しているんだよ。便りを上げなさい。

中学の時、近所の青年に乱暴された事。父親が横暴で、よく母親をなぐったりけったりした事。君の持ち歩いたカバンの中の「悪徳の栄え」の事。僕に読んで欲しいと手渡した「聖少女」の内容の事。夜の横浜が見たいといい、見も知らぬ人のテープを持って船を見送った事。君の秘めた願望を解く鍵が、これらの中にあったのは、わからないではなかった。君は学生時代の僕の、傍若無人さの中に



☆古文書「新翁咄目録」より☆

# 宝暦美女相撲（上）

須田司

カット・椿寿郎

旧い友人Kが突然、私を訪ねてきたのは、春立つ日は日曜日の昼下がりであった。

彼は戦前迄はこの地方きっての古い商家の息子であり、私は同年で近隣に住んでいたのだ。土蔵の建並ぶ町家特有の薄暗い中庭に遊んだことなぞ今もって鮮明に思い出すことがある。その倉から長持一竿が数人の手で担ぎだされたのは昭和二十年三月十日東京大空襲から暫く経った日のことであった。母方の祖父の屋敷が五キロ程離れた田舎にあり、空襲の危険を感じだした大人達が父祖伝来の古文書などを疎開したのだ。不幸にもこの予感は当たって六月二十六日夜アメリカ機の落とす焼夷弾は一晩でこの町を廃墟と変えた。

その後、彼と私は違った道を進み、独立した私がこの町を離れて住んだ為に交遊は途切れていたのだが思い出してくれたらしい。彼の話によれば戦後長い間例の長持は放置されていた。ぼう大な量の古文書などに構う生活のゆとりが無く防虫剤を投げ込んでおいただけだという。而しその古い屋敷が高速道路の予定地にぶつかった為、取壊されることが決定した。どうしても長持の仕末をつけねばならない。ついては中学の歴史教師である私に一度見て欲しいというわけだ。私は、専門家ではないなどと、ぶつくさ弁解を交えながらも、知識を買ってくれたことに秘かな喜びをおぼえて、彼の車に同乗した。

その長持は立派なものであった。恐らく百年以上の歴史を経たものであったろうが一分の狂いも、みられなかった。安っぽい即成物

ばかりを見馴れた私達の目には、どっしり落ち着いた長持は寧ろ異様な代物に映ったのである。

中からは然し、ことさら珍しいものはでてこなかった。商売用の仕入帖やら売掛帖、借金の証文や書付類、数十冊の書物も大部分は近世の出版物らしかった。勿論、みる人がみればそれなりに価値のある物であろうが、友人の期待した様な時価数万の珍書など見当たらなかったのである。もとより地方町家の蒐集品に国家的珍品があろう筈もない。

「何もでなかったね」

友人は稍索然たる面持ちでいった。舌切雀のお伽話じゃあるまいし、

「お化けがでないだけよかったじゃないか」

私の皮肉も彼には通じなかった様だ。結局私は半ば答礼的な意味もあったが、和綴じの日記類を借受け、後は町の本屋に委せてその場を辞去したのである。

活字を読み馴れた現代人にとって、筆書きの和文を読むことは殆ど不可能に近い。古文字を解読する考古学者の苦心の程が解る様な気さえするものだ。私は職業的見栄半分でこの本を借りた自分に後悔しだしていた。若し自分の金で求めた本ならば、一生、埃をかぶったまま本棚のすみに眠っていたかも知れない。而し借りたものは、いずれは返さねばならぬ。その際（難しくて読めなかった）とは私の職業的誇りにかけても口にはだせないのだ。近頃なんのかんの、その比重を問われると、中学教師全体の名誉の為にも、この書物は解読してしまわねばならぬ。私の決意はオーバーで悲壮で、ばかばかしかった。

而し段々に馴れてくると読書のスピードも上がった。又この筆者が、むしろ字が達者でないのが助った。内容は日記とも紀行文ともつかない。そして読み進んで行くにつれて、興の味ある事柄を発見したのだ。それが実話であったのか、或いは空想の産物であったのかは、長い年月を経た今、探求するすべもないが、私は今、訳者の立場にいる。尚、この本の表題には「新翁暉目録」とある。

## 升屋新十郎

ことの起こりは、埒もないお国自慢から始まっていた。宝暦七年正月、江戸城は菊の間の出来事である。

「されど中納言殿、当国は男が強いのみではありませぬ。女人とてこれに劣らぬ豪の者が居ります。不知火の在にて『こう』なる娘、未だ曽て敗れたことなしと聞いております。先年も宇佐八幡宮奉納相撲の砌……」

細川候は大いに弁ぜられたものだ。

「いやいや」

と軽く手を振られた水戸中納言、

「それはお強いことだ。が、女相撲ならば、わが国が本場でありますぞ。何しろ、常陸女の力の強きこと、往時より有名であり……」

さすがに光圀公以来、民情に詳しいお家柄だ。細川越中守、徳川御一門に対抗する積りはないが、ことと相撲とあっては譲れない。なにしろ両候とも当時著名な相撲ファン。夫々に贔屓力士を召抱えられる程の有力なパトロンでもある。

しからば一度折をみて試合を致そう、と話は自然にそこに落着いた。勝てば結構、負けても笑っておればよい。もともと座興の女相撲、両候後日を約してその場を去られた。

さて、早速に側用人を召出された細川候、事の用向きをお伝えになるが、藩財政は火の車。たったそれだけの費用がだせないとは信じられない話だが、旱天続きの国許を抱えて逼迫はその極に達していたのだ。さりとて御下命もだしがたく、困った用人が相談できる相手は藩出入り商人『升屋新十郎』を措いて

他に無い。

ここに登場する、升屋新十郎こと通称『升新』は、当時代かくれなき天下の豪商としてて巨万の富を築いたかとみるや海運業に手をのばし、忽ち日本一の商舶隊を仕立て上げ、全国各地の主要港に支店を設け、米穀、材木生糸、海産物などの問屋を経営して、相場に応じて動かしている間に、その富は彼自身もはかり切れない程の莫大な額に上がったという今日の財閥の始祖の様な男だ。

彼の組織はだまっていてもどんどん金を吸上げてくる。このどうしようもない富を持て余し気味の新十郎、この頃四十半ば、金を使う方に苦労している彼は、江戸品川高台の別宅で優雅な生活を送っていた。

肥後熊本藩係りの手代から話を聞いた新十郎は、退屈払いの面白い趣向じゃわいと、この催しの取仕切りすべてを約束した。

「但し、素人ばかりでは能もあるまい。江戸で今評判の女角力、天津風と竜田川の両名をお加えになったら如何」

伝え聞かれた水戸、細川のお殿様に、勿論御異存のある筈もなく、却ってお喜びになった。何しろ日本一の富豪がスポンサーになったのだ。早速に準備を始められたのである。

瓢箪から駒がでた。ふとした話のはずみから、選び抜かれた六人の女力士が、鎬をけずって土俵上に死闘を展開したのは、この年の夏である。

## 不知火のお甲

肥後国宇土郡こうの浦在に生まれたお甲は当年二十四才、五尺五寸、十八貫、小麦色の均整のとれた体つきは「天草の流れ伴天連の血をひいているに違いない」など人々の噂をした程立派なものであった。やや青みがかった瞳や、ちょっぴりしゃくれた鼻からもそんな感じをうけるのであろう。牡丹の花弁の様な厚い口唇が大きすぎる為、美人の枠からはみでた感じだが、日本人には珍しくエキゾチックな容貌の持ち主である。

不幸にも幼時両親を疫病で失ったお甲ではあるが、その後、祖父万作の愛情を一身に受けて、さながら南国の太陽のように明るい娘にと育っていった。半農半漁のこの村の生活は、貧しくはあったが衣食住には事欠かず、特に魚貝類などの動物性蛋白に恵まれたせいか、お甲はすくすくと伸びていった。

この頃のしきたりでは、十五才以上の未婚男女は若者組、娘連中といった組織をもち、夫々に合宿して団体生活を愉しむ風があり、お甲も又その一人であったが、ある夜、夜這いに忍び込んだ村の悪童連を手玉にとり一躍名を、あげた。この事件が、其後のお甲にとって幸せであったかどうかは別にしても、既に彼女の大力ぶりの片鱗は芽生えていたのである。

祖父万作は、昔は近在に聞こえた草角力の名手であり、曽て志を立てながら、己れが果し得なかった悲願……宇佐八幡奉納試合に於ける優勝……を、並々ならぬ素質をもった孫娘にかける様になってしまったが、その天才教育は厳しかった。足腰を鍛える為に、毎日山頂の畑までの急坂を水荷を運ばせ、荒海で櫓を漕がせた。誰よりも早く冷たい春の海に潜って海草を採らせたのは、実益も大きかったが耐久力の鍛錬のためでもあった。夜には自ら手をとって実技を教え、こまかいテクニックや土俵上のかけ引きまで、万作の経験の総てを仕込んだ。やがて二年もたたぬうちにと育っていった。半農半漁の太陽のように明るい娘万作も驚く程の上達ぶり。ここに見事な女角力の生誕をみたのであった。

先ずは小手調べ相撲は体で覚えよと出場し

た村の草角力。力自慢の男衆も誰一人として敵わず、見事に優勝するお甲であった。

当時、女の裸体は今日考えられる程窮屈なものではなかった。未開だが、人々は極く自然に振舞って万事おおらかな時代であった。従って、お甲にそれ程の羞恥心があったとは考えられない。自我に目覚めない素直なこの娘は、ただ祖父を喜ばせたい為に、極めて自然に土俵に上がったに過ぎないのである。

而し当時といえども、娘の相撲は大きな話題を呼んだ。ただでさえ話題の少ない田舎の事だ。話はすぐに拡がって、お甲には、あちこちの町や村から招待の声がかかり、その都度、大の男を打破って賞品を持ち帰ったから家の経済は大いに潤ったという。

お甲、十九才にして、始めて宇佐神宮奉納相撲に出場する。

何しろここの神様は、全国八幡社の総元締だ。夏の神幸祭は大いに賑った。名物行事の奉納相撲は、その賞品の豪奢さも大したものであったが何よりも優勝の名誉が尊ばれた。いうなれば九州チャンピオンを決定するメイン・エベントで、この島の者は勿論、遠く中国、四国あたりから海を渡って来た腕におぼえの相撲巧者が技を競ったから、ここでの優勝者は江戸相撲でも幕下（当時の十両）に張出されるだろうといわれる位、程度の高いものだ。

お甲が土俵に立った時、数千の観衆の期待と興奮で場内は渦巻いた。きゅっと腰のくびれたその姿態からはさほどの重量感は感ぜられないが、豊かに隆起した胸、肩口から腕にかけての力強い線、雄大な臀部と、鍛え抜かれた逞しい足腰には若さと力が漲って、天晴れな娘角力ぶりである。さすがに緊張で上気したお甲の顔は美しかった。

相撲は然し、立会い一瞬にして勝負がついた。蹴たぐりの奇襲にお甲が敗れたのだ。かたくなって出足の伴わない弱点を狙われたのである。さすがに小娘にとって、この大会の壁は厚かった様であった。真似する娘も多く、後々まで『おこうがみ』の名が残っている。

捲土重来を期したお甲は、対戦時に脳の乱れるを嫌って番数を多くとり、更には、自分の長所を生かして投げ業の工夫をこらした。腕をみがきたい一心で、田舎相撲の巡業団に加わって九州各地を廻ったのも、この頃であった。

お甲の修錬の苦労が報われたのは、三年後の二十二才の折である。同じく八幡奉納相撲で順調に勝進んだお甲は、決勝で南九州きっての強豪生目村の豊五郎を、みごと上手投に葬って悲願を果たした。

この頃のお甲は連戦連勝、立上がると同時に左の上手をぱっととって引きつけ機をみて左からの投げをうちながら右下手捻りを加えると、大抵の相手は殆ど残せなかった。投げのタイミングが絶妙だったからである。お甲の倍近い大男がまるで魔術にでもかけられたように土俵の土に埋まったものだ。ただ一度お甲はある花相撲で牛飼いだと名乗る少年に敗れたことがある。この怪童こそ後の五代目横綱を張った小野川であるといわれるが、はっきりはしていない。

当時お甲は、これを解き、うしろに束ねて水仙色の手絡で巻いた。さすがに娘らしい情感が溢れてこれでも『おこうがみ』の名が残っている。

然し、この頃よりお甲はあまり熱心に相撲をとらなくなった。一応目標に達したこともあるが、その勇ましい土俵ぶりとは反対に、もともと娘らしい心情をもったお甲だ。年もつもって漸く本来の自分の姿を取り戻したというべきだろう。祖父の万作でさえ「お甲を世間並みの娘に育てておけば」という苦い後悔があった。お甲の獲得した賞金や賞品で家

は富んだものの、そのあまりにも高い盛名を恐れて婿の来手がないのだ。何時の間にやら世間では「お甲に勝たなければ婿に入れぬ」という風説が、まことしやかに信じられているのだ。派手なみかけとは反対に「本当は優しい娘なのに」と万作は口にはだせない。愚痴れば、青春を相撲に打込んだお甲を不幸にするだけである。お甲が相撲をとらないと、何やらほっとしている様子の祖父を見るにつけ、この娘の心も痛むのであった。

お城からのお召がかかったのは、こういう折である。少々の口実などでは無論、断わり切れるものではない。が、万作の重い口から事の仔細を聞いたお甲はすべてを承知した。

「相撲はともかく、お江戸の見物ができる」このへんの気持も全く普通の娘と変らない。

やがて、升新の特別仕立ての廻船が差向けられてきた。まさに大名ぶりの扱いである。お甲は舷側に立って渚の見送人に手を振っている。村をあげての盛大な送別であった。

「爺っちゃん、心配することはない、すぐ帰ってくる。土産いっぱいもってくるってな。相撲のこととは、おらはちっとも後悔してねえだ。それが証拠には、こんな立派な船で殿様みてえに送ってもらえるでねえか。はけど相撲はこれで最後にしたい、勝っても、負けても。婿さんのことも心配ねえだ。きっとよか人が見つかるたい。そしたら三人で仲よく暮らそ」

お甲はいつまでも故郷の山へ、浜辺へ手を振り続けていた。

## 江戸女角力

その頃、江戸では女相撲の最盛期を迎えていた。天津風お竜を頂点にした片浪一門と、看板力士に二代目竜田川お勝を持つ小倉一門が、夫々人気を競っていた。年一回、浅草随念寺境内で催される合同の勧進相撲には、怪我人を出す程の大入を続けたといわれる。

特に『天竜』とならび称された二人の大関は、数多くの女力士でも力量抜群で、実力もほんの入門したての小娘の一カ月に稼ぐ給金が当時の下女奉公半年分に匹敵したというからこたえられない。当時の女性花形職業だ。

といって誰にでもできるといった仕事でもない。片浪はなるべく見目よい娘を採用した。しかしこの隆昌ぶりに到達する迄には幾年もの月日を要した。

持病の為に相撲界を断念せざるを得なくなった片浪丹兵衛は、ある日、東両国の盛り場で見世物小屋を覗いたのだ。舞台では大力娘の力芸が始まっていた。

当時この種の見世物は珍しくもなく、盲人相手のハレンチ相撲とか、ただ畸形じみた巨大なヌードを見せるだけで金をとるといったものが、この一座である。

発足したての頃は、伝手を頼って娘を集めるのに苦労したのが、今度は応募者を厳選する様になった。何しろ給金がよかったのである。

人脈ができると、当時の女性花形職業だ。

人気商売だから当然とはいえ、この営業方針が又当たったのである。この頃、芝居の他に目ぼしい娯楽に飢えていた大衆が新鮮なお色気に勝負のスリルをミックスさせた女角力に魅了されて、興行はいつも大入りで賑った。

何しろこの商売のもとでは人間である。而も

条件が仲々に難しい。片浪親方は全国にスカウトを派遣して（実際には旅商人に委嘱したのだが）素材の発掘に努めさせた。

他方、聊か慌てたのは小倉一座である。もとから女相撲めいたショーを売物にしていて「たかが相撲とり上がりに、何ができるものか」と横目にみていたが、片波一座が夜逃げするどころか、ますます時の間にやらこちらのお客をとられていることに気がついたのだ。「これは」とばかり褌をしめ直し、座の再建に取組んだ。興行界に古く顔が利いて、よいコネを沢山もっている小倉屋だ。既存の群小女角力を吸収し、或いは力持娘を引抜いたりして一大女相撲団を作り上げた。この中の一人に、初代竜田川おせきが居たことが小倉屋に幸いした。

下総の水呑み百姓の娘に生まれたおせきは成人するにつれて百姓仕事がいやになってきた。三人前ぐらい働いても、年貢が重くて米の飯など正月くらいにしか食べられない。思い切ったおせきは家出同然、さして遠くない江戸にでた。そしてまっすぐきたのが両国の或る女角力の一座である。何と驚いたことにこの小娘は自分を生かすべき途をはっきり知っていた。この男勝りの気性と行動力をもった娘のとびこんだ世界は、彼女自身にぴったり適合したのだ。根っから格闘技が好きであったこと、雄大な体格に恵まれたこと、負けず嫌いの激しい性格。彼女は自分のもって生まれた長所を生かして、めきめき頭角を現わし遂に押しも押されもしない小倉一門の看板力士となった。

両座が江戸市中の人気を二分していたある日、否とはいえない興行界の大ボスから合同相撲興行の話が持込まれた。エース竜田川を擁する小倉側は大乗気、一方の片浪側は未だ陣容不足の不安が残ったが、断わり切れる相手ではなかった。

初めての、催しである。町の人気は沸騰した。初めは一日の予定が続々つめかけた観衆を捌ききれず、三日間に日延べされた。評判通り竜田川は強く、片浪側のくりだす力士達を次々に圧倒した。片浪親方は切歯扼腕したが、実力の差は如何ともしがたかったのだ。而し興行収入は非常なもので、両者相談の上、今後毎年一回宛七日間の合同興行を行なうことが協定された。銭に弱いのは昔も今も変わりないが結果的にはこれが双方にプラスした。新しい刺戟を受け競争心を煽られた両座の女力士達は稽古に励んだので、技術が大変に向上し、取組みの内容も、男性なみに見応えのあるものに変わってきたからである。

合同興行で小倉側に苦杯を喫した片浪一座は、打倒竜田川を目標に一座をあげてとりくんだ。その強化策の一環として有望力士を育成するわけだが、雪の越後は加茂の在近く、大力で評判の百姓娘りゅうの存在が浮かび上がったのは丁度その頃である。後年、女相撲界の女王として君臨した天津風お竜である。

お竜の家の先祖は、昔帰農した大阪方の牢人と伝えられており、その血筋のせいか、この家系には屢々大力の持ち主が出現した。お竜の大力ぶりも越後の国では夙に著名で聞こえていたのだ。片浪側の使者が当時では破格の二十両の支度金を積んだのは、その抜群の資質もさることながら、お竜の美少女ぶりに驚いたからでもある。何のためらいもなく江戸にでたお竜は、親方の指図で江戸相撲は漣部屋に預けられた。表向きは下女奉公でも、連日廻しをつけ男弟子に交って激しい稽古をうけた。事が内密に行なわれたのは片浪親方が竜田川攻略の秘密兵器としての実力がつくまで温存したかったからである。

こうして数年、今や体もできて幕下なみの

実力を備えたお竜が天津風と名乗って始めて土俵に立った時、見物客は、あっと驚いた。誰もその存在を知る者もいなかったし、第一こんな美貌の女力士を今迄見たことがなかったからだ。

五尺五寸余り、二十貫近い堂々たる体躯は竜田川に比べて遜色なく、いかにも雪国の生まれらしく白磁の様なその肌から鈍光を放ち巾広い胸からむっくり盛上がった双丘の上にうす紅をさした乳首が殊の外艶やかである。鼻梁こそやや短かめであるが、くろぐろ張った眉と大きな皓い歯がまぶしく、紅唇は濡れた瞳と大きな皓い歯がまぶしく、紅唇は濡れて先ずは一級の美女であった。観衆はその素晴らしい曲線の下に強靱な力が秘められているのをみて、又もや驚倒したという。

然し相撲は年期とは、よくいったものだ。その天津風をもってしても当時全盛を誇る竜田川を倒すには尚歳月を要したのである。この頃、「人気の天津か、実力の竜田か」と人々に喧伝された二人の取組は、大層な人気を集めた。三度目の対戦で、これ迄一度も勝てなかった天津風が見事に雪辱を遂げた時、人々は大いに熱狂したという。

この辺りから天津風の独走時代が始まる。そして無敗の連勝記録を、どんどん、のばしてゆくのである。

一方、天津風に女王の座を追われた竜田川は持ち前の負けん気からその後何回も奪還を図って挑戦したが遂に果たせなかった。さすがの竜田川も三十才を超えては、自ら力の衰えを感ぜざるを得なかったのだ。程なく現役を引退した竜田川は後進の指導に当る。打倒天津風の夢を若い力に託そうと考えたからである。特に姪のお勝を養女に迎え彼女に苛酷な迄のスパルタ教育を施した。この試錬によく耐え抜いたお勝は成人して二代目竜田川を襲名する。数年の後、お勝は長年の宿願であった天津風を倒して、彼女の連勝記録にストップをかけたのである。ここで江戸の女相撲は二回目の『天竜時代』を迎え、その黄金時代に入ったのである。

宿命的なライバル、天津風と竜田川お勝の凄絶な遺恨相撲について、ここで詳述する暇はないが、以上が、この物語に先だつ江戸女相撲界のあらましである。

富商升屋新十郎の代理者から、莫大な礼金と引かえに、この話が持込まれた時、天津風お竜は既に三十四才、竜田川お勝は二十六才になっていた。

## 漁場争い

城中では売り言葉に買言葉、大層な広言をなされた水戸侯ではあったが、もとより女角力の精しい事情など御存知の筈もない。早々に家臣を領内の四方へ走らせて事実をお調べになった所、生むは案ずるよりも易し、城下の北方茫洋たる鹿島灘を望む僻村で女角力が行なわれていることが判明した。

現在の茨城県日立市の近く、小さな岬を境に北に上郷部落、南に扶桑部落があり、それが漁場の領有をめぐって悶着を起こし、対立していた。丁度岬の真東に絶好の漁場があり ここの漁業権のはっきりしないのがもめごとの原因であった。両部落が別々の利害関係にある網元に属していたことも、又、紛争に輪をかけたのだ。豊漁期が一年おきにきたから隔年制をとるわけにもいかず、仲々解決の困難な問題であったが、結局相撲をとって勝った部落が、向こう一年間の漁場の優先権を与えられることに話がついた。もともと相撲好きでその水準も高かった常陸人はこの解決案に皆、納得した。

但し相撲をとるのは男ではない。血の気の荒い漁師のこと、その勝負の結果如何によっ

ては後に尾を引いて、ろくなこと起こるまい。幸いこの辺の女達は男並みによく働いて力も強く、又海女も多いことだから裸になるなど屁とも思わない。村の長老連にはさすがに知恵が働いた。何しろ向こう部落とも大力がかかった相撲勝負である。両剣なものであ娘を選抜して、その強化策は真ったという。こうしてこの地方盛り上がり、これが数十年ものとして続くのである。

然し、この物語の時代には新発され、又漁獲方法も進歩して村の対立関係は左程深刻なものてきていた。従ってこの女相撲も、曽ての険悪な空気が徐々に解消されてレクリエーション的行事に変わっていったのは当然であろう。ただ両村の対抗意識は今尚底流に支えら燃烈なものであったから、そのれて幾多の名女力士を生んだの七時雨（ななしぐれ）おりん、二十八才、現在上郷村網元次男源次の嫁で二子の母親でも村の出身で、身売り同然な旅籠をしていたところを、来合せたにスカウトされた。澄んだ目を笑顔のよく似に色が白い。豊頬で顎が縊れ、合う鄙にはまれなきりょうよし。暗い育ちを感じさせない人柄の良さで彼女は人から愛された。然し一旦土俵に立つや、丸い躰を生かしての吊り寄り抵抗できる相手は少なかった。みかけによらず運動神経もよかったが、重心の低い彼女の体つきは相撲をとるために生まれてきたようなものといえよう。

彼女が上郷村と関係を持ったのは、ここの争い相撲のコーチ役として招かれて来村した時に始まる。ここ数年、相手方に分のない上郷村の網元源十が伝手を辿って契約したものだ。彼女は源十の家に留まって地元の娘選手に稽古をつけたが、その適切な助言で娘達の技量は、うんと上達した。コーチとしても彼女の頭は、よない、おりんばかりではなかったが辛抱できないのは相手村に名目として地元から出場させたいものだ）なども考えている。

一方負けた扶桑村一同、村をあげて名誉回復を図る。もう漁場権喪失による経済的な実損は少なかったが、おりんを大将にもった上郷方の意趣返しだす迄もなくついてしまったのだ。折角嫁にきた地元の村の人にいい所を見て貰おうと張切っていたおりんは落胆したという。この程度の相手なら自分一人でも勝抜けそうな自信があったからだ。

案の定、おりんの大いに上がってこの年の相撲大会で久方ぶりに扶桑村に制勝した。夫々十数人ばかり対抗勝抜き戦形式がとられたが、勝負の結果は大将の乗りだす迄もなくついてしまったのだ。折角嫁にきた地元の村の人にいい所を見て貰おうと張切っていたおりんは落胆したという。この程度の相手なら自分一人でも勝抜けそうな自信があったからだ。

一方負けた扶桑村一同、村をあげて名誉回復を図る。もう漁場権喪失による経済的な実損は少なかったが辛抱できないのは相手村に揶揄されることであった。話題の少ない漁村の事、この相撲の話は一年中、持ちこされるのだ。漁の行き帰りに野次られて特に若い者は口惜しがった。而しこれは仕方がない。昨年迄はこちらが同じことをしたからである。扶桑村は翌年は二名の、翌々年は三名の本職の女角力を雇って挑戦してきたが、いずれもおりんの壁を破ることはできなかった。以後この方法は廃止された。物入りで仕方なかっもめに攪われた一座の親方だが、これも金で解決できぬではなし、何よりもおりんの決心が固かったので親方も不運と思って諦めなければ仕方ない。



れなきりょうよし。暗い育ちを感じさせない人柄の良さで彼女は人から愛された。然し一旦土俵に立つや、丸い躰を生かしての吊り寄り抵抗できる相手は少なかった。みかけによらず運動神経もよかったが、重心の低い彼女の体つきは相撲をとるために生まれてきたようなものといえよう。

彼女が上郷村と関係を持ったのは、ここの争い相撲のコーチ役として招かれて来村した時に始まる。ここ数年、相手方に分のない上郷村の網元源十が伝手を辿って契約したものだ。彼女は源十の家に留まって地元の娘選手に稽古をつけたが、その適切な助言で娘達の技量は、うんと上達した。コーチとしても彼女の頭は、よない、おりんばかりではなかったが辛抱できないのは相手村に名目として地元から出場させたいものだ）なども考えている。

一方負けた扶桑村一同、村をあげて名誉回復を図る。もう漁場権喪失による経済的な実損は少なかったが辛抱できないのは相手村に揶揄されることであった。話題の少ない漁村の事、この相撲の話は一年中、持ちこされるのだ。漁の行き帰りに野次られて特に若い者は口惜しがった。而しこれは仕方がない。昨年迄はこちらが同じことをしたからである。扶桑村は翌年は二名の、翌々年は三名の本職の女角力を雇って挑戦してきたが、いずれもおりんの壁を破ることはできなかった。以後この方法は廃止された。物入りで仕方なかっ

たのである。以来あせらず、ゆっくり新人達の力のつくまで待とうと作戦を切りかえた。それに近頃は勝ち馴れた上郷村の連中が、もう野次ることに飽いた為でもある。

扶桑村が打倒おりんの最先鋒として期待をかけたのが、「おくめ」「おせい」の姉妹である。年子のこの二人の母親おときも、曽ってはこの村の女力士の一人でもあった。おりんよりも一時代前の人でここの相撲で始めて五人抜きをやってのけた女であった。ひとこころは扶桑村の守護神とまで、もてはやされたほどの黄金時代を作った海女でもある。後におりんに散々敗れたこの村の年配連中が「おときさえ若ければ」と口惜しがった程の女丈夫であった。そんな女の娘であるが血統のよいサラブレッドに村人が期待をかけたのも当然であろう。村をあげて姉妹の応援を惜しまなかった。お蔭で食生活にも恵まれた二人は若木の様にぐんぐん伸びていったのである。後に江戸迄相撲修行にだされる二人であるがこの時の費用もすべて村の合力によったことからみても、いかに村人がこの二人に期待をつないだのか、よくわかる。やがて村の総力の結晶とでもいうべき二人は成人して、おりんに挑戦してくるのである。

おくめ、おせきを大将と副将に据えた扶桑村はいつになく活気づいていた。不思議なもので皆実力以上の相撲をとって上郷方は次第に追込まれてきたのだ。こんなことはここ数年見られなかった現象であるが、おりんは平静に土俵を見ていた。むしろ心中では（丁度よい機会がきたものだわ。今日こそ私の実力を皆さんに見て貰おう）と、自信満々であった。これ迄何人抜きをする様な華やかなチャンスが訪れなかったのである。

折しも、わっと上がった大喊声。こちら側の副将が敵の五将に敗れたのだ。すれ違いにおりてくる味方に犒いの笑顔すら浮かべた、おりんが土俵に上がった時、大観衆は沸きたった。両村の老若男女は勿論、今日ばかりは噂を伝え聞いて近郊近在から大群衆が繰りだしてきたからだ。

既に二児の母であったおりんではあるが、鎖骨もかくれる程むっちりあぶらづいた肉体美は相変わらず、ただ乳房が下がって乳輪も黒ずんでいたが、それが却って、人妻らしい情感を滲ませて見事な年増ぶりであった。

最初の相手はおりんの怒濤の様な寄りになすすべもなく土俵を割っていた。二人目は左からの上手投に横転し、三人目は高々と吊りだされて、さすがプロの飯をたべたおりんだけに、立会いと差し身のよさは段違いで相手に相撲をとらせないのだ。

愈々おせいの出番がきた。背はおりんより一、二寸も高いだろうか。長身は鍛えられて資肉は少ない。赤銅色に日焼けした肌は滑らかな光沢を帯び逞しい海女の生活を語っていた。円錐型の乳房が戦斗的にとがり、太腿とふくらはぎに、強健な筋肉が浮かび上がり、まるで敏捷な女豹だ。目尻のややつり上がった顔から未だ幼さが抜けきっていなかったが、野性味あふれる美少女である。

両者同時に立上がったとみるや、おせいはノド輪もまじえて猛然と突張ってでた。おりんは得意の出足を挫かれて一時は棒立ちになる程激しいものであった。が、すぐ立直って応戦するのであった。而しこの戦いはおりんに不利だ。相手がリーチが長いし回転も早い。忽ちおりんの白雪のみなぎるような胸は紅潮し、乳房がひしゃげた。何とか廻しのほしいおりん、突張りをかいくぐってとりにゆくが、おせいの動きは機敏で仲々つかまらない。片やおせいたらしいくらい突いても崩れない相手に業をにやし、うっかり叩いたのが悪かった。そのスキにつけ込まれて、左を差されてしまっ

た。而し、ここで一呼吸おいたのが、おりんの苦戦の原因となった。さすがのおりんも激しい前哨戦で息が上がっていたのである。

ガップリ左四つに組んで互いに機を窺う。おせいはぐっと腰を引いて長期戦の構えだ。これは勝とうとする態勢ではない。なるべく持久戦にもちこんでおりんの疲れを待つ戦法だ。万一負けても無傷の姉が控えている。この戦法に気がついたおりん、強引に上手から投げをうつが、おせいの腰は意外にしぶとく足を送ってよく残す。さらばと廻しを引きつけて吊りにでれば、強い足で外掛けに防いでこれも許さない。攻めあぐねて、さすが体力に自信のあるおりんも疲れてきた。三人倒して後のこの大相撲である。汗がしたたり呼吸も荒い。あせりのみえるおりんを敏感に感じとったおせい、勝つチャンスとばかり上手投をうった。待っていた様におりん、残して下手投に打ち返せばおせいの長身はどっと崩れ落ちた。若いおせいは、功を焦って自ら墓穴を掘った恰好で敗れはしたものの、観衆はその善戦をたたえて拍手を惜しまなかった。

大将おくめが登場してきた。さすがに姉だけあって肉がのり、一段と逞しい。（これは妹よりも一枚上手だわ、何か策を）一目で相手の力量を見抜いたおりんは考えた。二回目の仕切りで早目に手をついたおり、「やっ」と誘いの声をかける。つられたおくめ、中途半端なまま立上る。

この立会い一瞬の有利さで一気に俵までもってゆこうというおりんの作戦だ。而しおりんは、自分の体の疲れを計算に入れるのを忘れていた。出足にいつもの鋭さが無かったのである。

おくめは充分な余裕をもって回り込み、土俵中央で右四つにおりんを組み止めてしまった。おりん得意は左つ、これでは不利と差し手を抜いて双差を狙えば、又すぐ巻きかえされてしまう。このあたり、おりん持前のスピードを欠いていた。両者互いに投げを応酬するが決まらず、四つに組んで数呼吸。

おくめは妹の轍は踏まず、じわりじわりと攻めつけている。今やおりんも疲労の色が濃い。汗にまみれて、火の様な呼吸を吐いている。髪を乱した必死の形相も凄艶で、これがいつも笑みを含んで勝っていたあのおりんかと想像もできない。（こんな小娘に負けてたまるか）無敗の女王の誇りからおりんは最後の攻勢にでた。満身の力をしぼり寄り進む。これを若い力で寄り返したおくめ、再びおりんの寄る出足を利用して切れ味のよい上手投を放った。重い腰がぐらりと傾く。

「それっ」とかけ声を発しておくめ、再度の投げは強烈だ。遂に力つきたおりんの白い体は、どっとばかり崩れ落ちたのである。

頼みの姐御を倒されてしゅんとする上郷方と対照的に総立ちで歓喜する扶桑陣営。夜を徹して祝勝会が始まるのだ。やっと数年ぶりに悲願を達成したのであるから無理もない。

而し手強い相手ではあった。作戦が図に当って五人掛かりで漸く討ちとったものの、一対一では未だ勝てそうもない。二人の殊勲者はその翌日から、来年に備えて稽古を始めるのである。

殿様よりおぼしめしが伝えられた頃には、二人の実力は、おりんとほぼ対等に戦える域にまで上達していたが、残念乍ら姉のおくめは、このお招きを拝辞せざるを得なかった。右足首を捻挫して相撲のとれる状態ではなかったからだ。妹のおせいは何時もの快活さもなく、その長身に何やら心細げな影を落としながら出発した。同じ頃、おりんも子供に心を残しながら江戸へ旅立ったのである。

――（未完）――

カット・小川茂正

# 娘十八土蔵の奥で

□

水田真紀子習作シリーズ□

水田真紀子

「親分、しょっぴいてめえりやした」

ドヤドヤっと、三人の荒くれ男に、こづかれるようにして、若い女がくずれこんできました。

「おお、御苦労」

長火鉢の前で、大あぐらをかいていた親分の顔が、ほころんで、

「うまくいったようだなァ」

キセルをポンとならして、立ち上がるので した。若い女の出現は、この部屋の中をパァッと明るくさせるような、はなやかさがありました。

「どうすんのサ、こんな所へつれてきて」

女は、うらめしそうに見上げるのでしたがその手は後ろ手に縛られているのです。

長年続いた、この地方のやくざの縄張り争いは、十手捕縄をあずかるこの須原の権太の方が、どうやら勢力をのばしてきていたのです。そして今、相手方の妹娘のお町を、こうして、さらってきているのです。

「フフ、聞きしにまさる、いいきりょうをしてるぜ」

縛られて自由のきかぬ女のあごに手をかけて権太は、好色そうな笑いを浮かべます。

「何すんのサ」

きらって顔をそむける拍子に崩れた襟元の白さが、こぼれるようにのぞかれるのです。

「どれ、きつく縛ってるかな」

後ろへまわって、結び目をしらべます。

「いやッ！」

おぞましい男の掌が、なぜるように伝わってくるのを、お町は身ぶるいをして逃がれようとするのでしたが、その白魚のような手は手首を交差させられたまま、荒縄でしっかりと縛られていて、どうすることもできないのでした。

「これ、そう嫌うもんじゃねえ」

後ろから二の腕をつかんで、引き寄せようとするのを、

「やめないか、けがらわしいッ！」
女は気丈に、たんかをきるのですが、縛られていては、のがれることもできません。ぎゅッと引き寄せられると
「いやッ、いやッ」
身を、もがくのです。
「フフフ、いい肌をしてるようだな。どうだい、俺の言うことをきかないか。可愛がってやるぜ」
「馬鹿ッ！　誰がお前なんかに……。さ、早くこの縄を、ほどきなよ」
赤くなりながらも、お町は必死で身を、もがいています。
「ア、アッ！」
権太が、のけぞりました。顔を押しつけていこうとして、思いきりお町にペッと、つばきを吐きつけられたのです。
「この女(あま)めッ！　下から出りゃ、つけ上がりやがって」
こめのかみが、ピクリと動きます。やわらかい若い
「野郎ども。その弓の折れを持ってこいッ」
「ヘイ、親分」
一人が差し出すのを、ひったくるようにして、とりあげると、
「お町。よくも、この俺に向かって、しゃれた真似をしやがったな。痛い目が、そんなにみたいのか」
言うなり、その弓の折れを振りあげると、お町の背を力一ぱい、打ちすえたのです。
ピシッ！　弓の折れは若い女の肌で、大きな音をたてました。
「あ、あッ！」
火のついたような痛みが全身を走って、お町は思わず、のけぞって顔を、ゆがめます。
「どうだ、痛いか」
権太の顔は歪むような笑いを、みせております。
「畜生ッ！　よくも、ぶちやがったナ」
気丈にもお町は、苦痛に顔をゆがめながらも毒づきました。その声も、しかし途中で打ち下ろされた弓の下で――。
「う、うッ！」
声にはならないのでした。
ピシッ！
続けさまに弓がなります。やわらかい若い女の肌に、その度に痛々しいほどの音があがって、お町は思わず、のけぞって唇を、かんでゆくのです。苦しそうな息づかいが、その音と重なって、この折檻をみつめている男たちの目は、喰い入るように、お町にそそがれています。
お町は逃れることもできず、少しでもこの痛みをまぎらわせるかのように、身をもがいて弓の下で喘ぐばかりでした。
「うッ！」
美しい眉をひそめて、もがいている姿は、とても男たちの心に火をそそぐのです。若い女が縛られて、それだけでも、あぶな絵のようなところが感じられるのに、それが弓の折れでピシピシとぶたれて、もがいているのです。
抱きしめたら、とろけてしまいそうな柔らかい女の肌が、ピシピシッと音をたてて、苦痛に呻いているのです。のけぞってこらえている苦悶の表情、苦しげな息づかい、そして耐えきれないような身のくねり。どれをとっても男の心を燃やさずにはおられません。
「うう」と悶える声。
ピシリッ！
「ああッ！」
ピシリッ！
「うーん」
ピシッ！
「あ、あッ！」
ピシッ！

「ううううッ！」

さんざん、ぶたれて呻き声を、あげさせられた、あげく、やっと権太が、くたびれてから弓の折れを投げ出した時には、お町は、もうぐったりとくずれ込んで、虫の息になっていました。

固く合わせていた、ひざも、もがかされてめくれあがり、白いふくらはぎが、男たちの前でチラチラするのを、かくしもできず、呻いているのです。

「どうだ、いうことをきくか」

そんなお町を、うながすように権太は、のぞきこみます。かすかに首が左右にゆれたようでした。

「何？　これでも、うんと言わねえのか。もっと、いじめてもらいてえか」

お町は、それから後ろ手の縄を一たん、ほどかれると、帯をとかれ着物をぬがされました。長襦袢まで無残に引きむかれても今は、湯文字一枚の素裸。そんなにされても、お町なのぐったりと、のびてしまっている、でした。

裸にされると背一面が、今の今、さんざんぶたれたあとが真ッ赤に染まって、痛々しい限りでした。そんなにされて尚この上、いじめられるのでしょうか。裸にされた身を後ろ手にまわされて、また縛り直されました。

「ううう」

もがく身を起こされると、今度は乳房の上下に縄をかけられ、二の腕も合わせて縛りつけられるのでした。左右から締めあげられて柔らかい女の乳房から二の腕は、くびれるまでに縄が喰いこみ、

「ああ」

息をつまらせて、締めあげられた縄目の苦痛に身をもがくお町の姿は、たとえようのない悩ましさが見られるのです。

若い娘が素肌をあらわにされたあげく、柔らかい肌が荒縄で、きつく縛りあげられていらかく、たまらないほど引きしまるのでした。はちきれそうな二の腕の肉に荒縄がくびれこんで、見るからに痛々しい縄目で、これでは気丈な男でも、こんなにきつく締めあげられては息がつまることでしょう。

女の肌は柔らかく、たまらないほど引きしぼられるのです。むっちりした乳房も、この上下を締めつけられているのために形を変えるほど、締めつけられていす。ただ、その上下からは、はちきれそうなふくらみが盛り上がり、まだ男を知らない桜色の乳首が、その先でふるえているのが、男たちの目に妖しい魅力を見せているのです。

「ううう」

ちょっと肩をこづかれても荒縄が肌に喰いこんで、顔をゆがめて息をつく、お町なのでした。そんなにされて、お町は縄尻をとられ追いたてられるように後ろ手のまま、権太にこづかれて、裏の土蔵へつれてゆかれたのです。

「おめえたち、これで好きなように女郎でも買ってきな」

バラバラッと銭をまかれて、

「ヘッヘッ、親分、おたのしみで」

「馬鹿野郎」

それでも後ろを振りかえり消えてゆくのでした。差かしい湯文字一枚の裸にむかれて、ちぎれるくらい締めあげられた後ろ手のお町は、こうして土蔵の中へつれこまれました。

権太の家の土蔵の中は、うす暗くて最初はっきり分かりませんでしたが、裸ろうそくの光に馴れて目をあげたお町は「アッ！」と驚いたのです。二、三日前から行方しれずになり、みんなが必死になってさがしていたのお市が、そこにいるではありませんか。しかも姉は一糸まとわぬ素裸にされて、お町と同じように後ろ手にくくられて転がされてい

るではありませんか。

「まあ、姉さん」

思わずかけよろうとしましたが、自分も縛られている身。縄尻をつかまれていては、かけよることもできません。たぐりよせられると、キュウッと縄目が素肌を責め、弓の折れで、さんざんぶたれた背ながが、火がついたように痛んで「ううッ！」と後ろへ、のけぞるのです。

「お前さん。つれてきたのかい。おや、妹娘も、なかなか、いい娘じゃないか」

気がつくと、権太の内儀が横に立っているのです。

「これでどうやら、二人そろって面白くなってきたぜ。おめえの方は、もう準備はいいのかい」

権太は後ろから、お町の肌を撫ぜるようにしながら、言います。

「あたしゃ、もう疲れちまったよ。もう、さんざん遊ばせてもらったからサ。今度はこの娘で遊ばせてもらうとしようよ」

あごでお町を、しゃくるのです。

「ハハハハ、よかろう。好きなようにさせてやるよ」

まるで玩具のように、お町とお市を交換するのでした。

姉娘のお市は、もうこれまでに、さんざんいじめられてきたらしく、島田の髪も、すっかり崩れて、白い肌のあちらこちらに赤く、あざが残っているのです。それが、全く一糸もつけない、まる裸にされて転がされているのです。その、あまりのむごたらしさに、

「姉さん！」

お町が呼びかけますと、やっと気がついたのか、お市は力のない目をあけましたが、そこに、お町の無残な姿をみつけますと、うなずくのです。

「まア、お前までが……」

「ホホホ」

お内儀は、さもうれしそうに笑うと、

「それじゃ、支度をおし」

お町は、あまりの出来事に考えもつかず、じっと見守る中に、お市は自分から床の上にゆっくりと仰向けに寝かえったのです。

「お願い。妹だけは許して」

下から哀願するのでした。

「フフフ、何を言うのさ」

お内儀は、あざ笑って、

「二人とも、こんな姿になって今更、何を言ったって逃げられっこないんだよ。おとなしくしてりゃいいのさ」

お町の裸身を抱えるのでした。

「かんにんしてやって」

お市が訴えます。

「それじゃ、お前が一番いやがってた、あいつをもう一度、拝ませてもらおうか」

「えッ！」

お市の顔に恐怖の色がサァッと流れます。

「い、妹の前で？」

「いやならいいのさ。この娘にさせるから」

「いやならいいのさ。この娘にさせるから」

そう言われると、お市はうらめしそうに目を開いて唇をかみしめていましたが、それも束の間、がっくりとうなだれて、泣きながらうなずくのです。

「ホホホ」

お内儀は、さもうれしそうに笑うと、

「それじゃ、支度をおし」

お町は、あまりの出来事に考えもつかず、じっと見守る中に、お市は自分から床の上にゆっくりと仰向けに寝かえったのです。

「あッ！」

お町は思わず声をあげました。後ろ手に縛られた姉は一糸まとわぬ裸体を、足をのばして真ッ直ぐに仰向いたのです。顔をそむけてお市は、この姿勢をとります。お内儀は、その傍にあった踏み台をかませるのです。

お市の裸身は腰を支点に弓のように反りか

えって、下半身をこちらにもちあげさせられたのです。それだけでも羞かしい姿でした。かくすべき箇所もあからさまにつき出すようにみせつけられますと、お町まで顔を真ッ赤にさせて、うなだれてしまうのでした。

しかし、それだけではないのです。お市はまだその上に両足を思いきり、ひろげさせられ、女として、いちばん羞かしい所を自由にさせるような姿勢のままで、寝かさせているのです。どんなにつらいことでしょう。これから、どんなことをされるか、お町には分かりませんが、羞かしい姿勢にされて、弓のようにのけぞった裸体を、じっと晒しているのでした。

お市が、じっとしているのを、よいことにしてお内儀は、その羞かしい、ふくらみを片手で、つまみあげるのです。お市の体が慄えています。赤い唇のような色合いが、お市の白い肌の中から花びらのように表われますとお内儀は、その花びらを紅をつけるように、ほんとうの紅筆でこすり始めていきました。

「うウッ！」

お市の切ない悲鳴がもれて、全裸の肉体がピリリとゆれました。

「な、なんていう、ひどいことを」

お町は、姉のあまりにあさましい、いじめられ方に、キリキリと眉をあげて、がんじがらめに縛られている身を忘れて、かけ寄ろうとするのでしたが、権太に縄尻をとられて身をよじるのでした。

その間も姉のお市は、裸身を仰向けさせられ股を大きく拡げさせられたまま、お内儀の遊びの玩具に思うままにされていきます。

羞かしい仕打ちでした。若い娘が人前で、股をあられもなく拡げさせられ、一番敏感なところを、こうして筆の穂先で、いじられているのです。

「ウ、ウッ！」

こらえようにも辛抱のできないだるさが、お市の全身に次第に拡がってゆくのは、羞かしいという羞恥心を抑えきれず、妖しく腰をくねらせ始めます。

「ひどい」

お町は、姉に加えられる折檻に耐えきれず身をよじってもがきます。我と我が身の股のあいだに、おぞましい感触がじりじりと全身をしめつけてゆくのが感じられて、いやな悪感（おかん）に呻くのです。

しかし身をよじれば、二の腕の荒縄が肌に喰いこみ、乳房のふくらみが、ひしひしと痛んで、その息苦しさと身を締めつける縄目の痛みに、

「うーんッ！」

顔を、ゆがめるのでした。

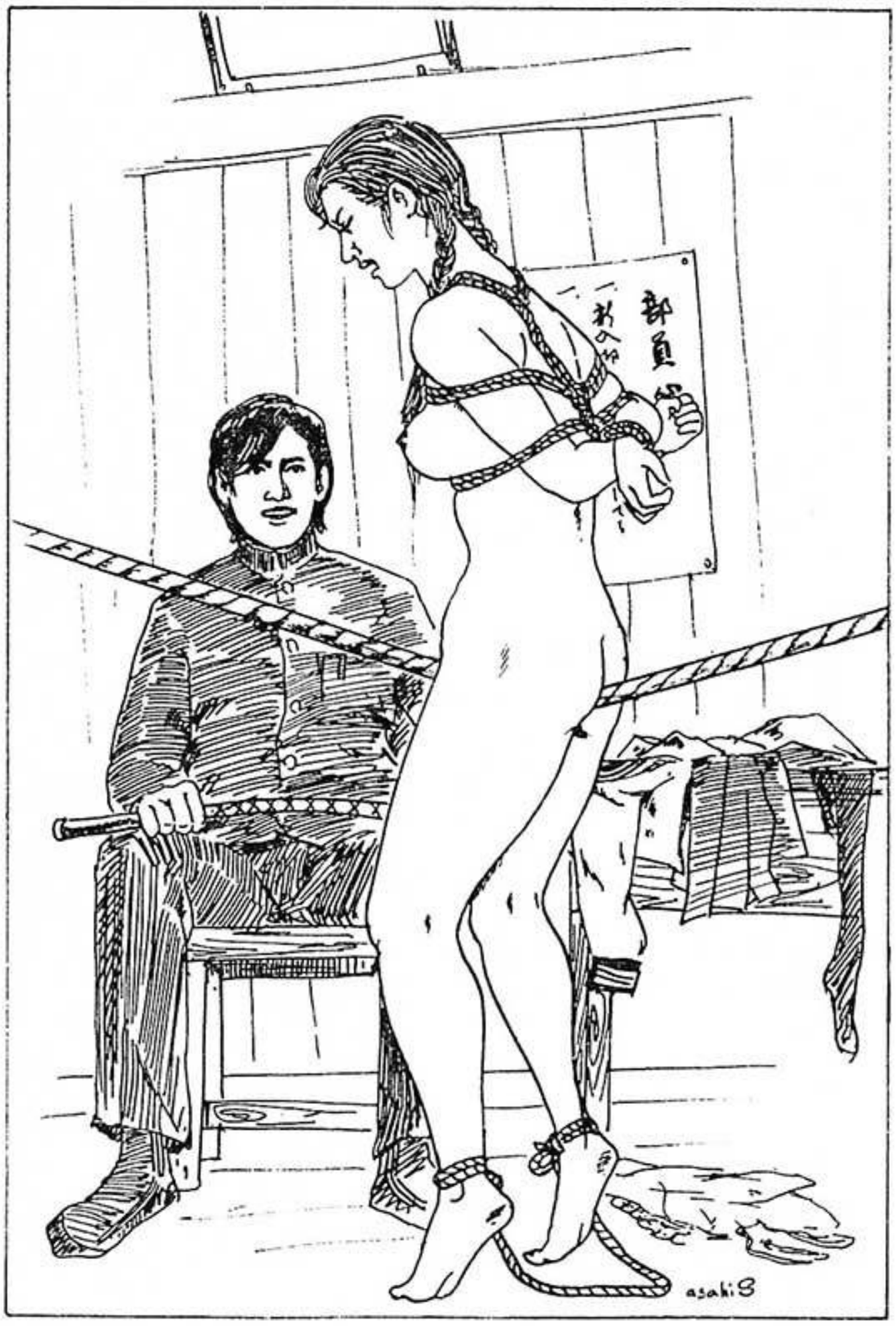
お市は、こうして若い娘の肌をいたぶられお町は縄目の痛さにもがくばかりで、二人の娘の呻きが、この殺風景な土蔵の空気を、いやが上にも興奮させて、お内儀は女の身に、この羞かしい折檻を加えることにより加虐者としての満足感に酔い、娘のやわらかい肌の手ざわりに、今は年増の嫉妬まで加わって、思いきり、いたぶってゆくのです。

また権太は、若い娘が全裸になった身を、こうしていたぶられ、のけぞって悶えてゆくところを、目のあたり見せつけられ、極度に興奮した、その捌け口を、これまた、引きすえられて素肌のまま縛られている、お町の肌を撫でたりしぼりあげたりして、こらえているのでした。

「う、う、あ、あ、あ……」

いじられ続けてお市が、せつない、ため息をもらし始めると、もう権太は、じっと辛抱していることが出来ず、そのうっぷんを、まぎらわせるつもりか、縄じりのあまりで、お町の背を思いきりピシリッ！　と、ぶつので

読者ギャラリー『デ　ー　ト　？』須　板　旭




した。お町は災難です。いきなり鞭うたれ、その痛さに、のけぞります。後ろ手の裸身がぐうッと反りかえるのをみつめていると、尚更たまらなくなり、ピシリッ！　と、改めて打ち下ろすのでした。

「あ、あッ！」

今まで、もうさんざん弓の折れで、気が遠くなるほど、ぶたれて一面に赤くなっているお町の肌は、音をたてる度に大きくのけぞって、悶えます。湯文字一枚の裸に引きむかれやわ肌に縄を喰いこませて後ろ手に縛られている若い女を、思いのまま、ぶって苦しませることができるのは、何ともいえない妖しい気持になってゆくのでした。

目の前では、もう一人の若い娘が、あられもない姿で羞かしい責めをうけているところが見られるし、権太も、たまったものではありません。ピシリッ！　ピシリッ！　と、お町を責めあげるのでした。のけぞって悶えるのに裳が割れてゆき、雪のように白い、引き度に裳が割れてゆき、雪のように白い、引きしまった娘のふくらはぎが、かくしようもなく拡がっていくのが、権太を一層、荒々しい気持に、かりたてるのです。

「やめてッ」

かぼそい声は、姉娘のお市でした。お町の痛々しい悲鳴がきこえては、けだるいような気持に陥ってゆくのが、ぐっと呼びもどされ不自由な姿に寝かされていながら、哀願するのです。

「妹を、ぶつのは、やめて」

そう言う間も、お市は筆の穂で、いじられ続けているのです。耳から入る、水を浴びせられるような妹の悲鳴が、お市を二重に、いじめてゆくのです。

「たまらないのなら、お前も悲鳴をおあげ。ぶたれたいのなら、あとでお前も、ぶってやるからさ」

お内儀は、うながすのです。お市が、かどわかされて来た、その晩から、こうして裸にむかれたまま、今日で三晩目です。お内儀の気の向くままに、いろんな姿態をとらされて

悲鳴をあげさせられてきているのでした。
「さ、早く、あの声をきかせておくれ」
ピッチをあげて責めたてます。しかし、ピシリッ！　と肌に鳴る鞭の音と、身も世もなく痛々しい悲鳴をあげている、お町の声が耳に入っては、その極致に到りません。理性と本能が、互いに気持を中和させて、お市は崩れそうで、なかなか、崩れませんでした。
「あ、あッ！」
お町の痛々しい声。
「うーッ！」
それにまじって、お市の呻き。縛りあげられた二人の娘は、このように夫々、されるままに跪かされました。
むち打たれるお町は、いつまでたっても苦痛は増すばかりでしたが、お市の方は、そうではありません。そのうちに、女の悲しい本能は、妹の耐えかねて上げ続ける悲鳴の中で
「いや、ああッ！　いや」
あられもない声をあげて、綺麗な鼻を大きくふくらませながら、四肢をつっぱって、
「うーんッ！」
と、反りかえっていったのです。
「畜生！　いい思いをしやがって」
自分がそうさせておきながらお内儀は、足の指先までピーンとのばしきっているお市の紅潮した裸身をみながら、いまいまし気に舌打ちするのです。
「馬鹿馬鹿しいったら、ありゃしない」
もち上がった、お市のふくらみを、叩くのです。
「あッ！」
ピクリッと腰がふるえ、お市が、うなりました。
「いい気になって何さ。これからは埋め合わせに、少しお前も痛い目をみせてもらうよ」
ぐったりと伸びた、お市の裸身を荒々しく踏み台から突き落とすと、うつ伏せのままに転がった足をまげて、足首をそろえて、くくります。そして後ろ手にしてあった手首と重ねて、縛りつけようとするのでした。
お市の裸身は両手を思いきり後ろ手のままのばして、足首はひざを折って持ち上げられて行くのでした。夫婦して太い縄をかけて、両肩もふくらはぎも床から反りかえるようにされ、後ろ側で手首、足首を一つに合わされて、くくりかえられてしまったのです。
若い女の肉体は雑作もなく、こんな不自然な姿勢に縛りつけることができましたが、それでも縛られたお市は「う、うッ！」と苦しそうな声をあげています。
「お前さん。いい気がすむのさ。それよか、ちょっと手伝っておくれな」
お町の裸身をみながら、いまいまし気に舌打ちするのです。
「ど、どうすんのさ」
けものを縛るように逆さに手足をそろえて、ぐっと反りかえらせて、悦くくられて、お太は、
「吊りあげるんだよ」
言われると、
「なあるほど。うん、こりゃいい」
その姿を想像して権太は、いそいそと寄ってゆき、夫婦して太い縄をかけて、やがて限界がきて床から持ち上がります。
「ううッ！」
床から離れた途端に、お市が呻きました。全身の重みが、自分自身の手首、足首を締めあげたのです。
い痛みが走りまちぎれるかと思うほどの激しそうな声をあげています。

キリキリとしぼられるにつれて、お市はうなりながら持ち上げられてゆくのです。持ち上げられると一層、体が曲がって頭を激しく振って「ううう」と、お市は悶えるのです。

痛い仕打ちでした。手足をこそ一つに合わされて締めあげられるのさえ、節々がつっぱってくるのに、こうして後ろであずけて宙に吊られると、自分の重みだけで手足がもぎとられるようにきしんで、体は、弓のように反って、ただ、もがくばかりでした。

目の高さまで持ち上げられて、縄の端をとめられますと、もうそれだけでは大きく反りかえったまま、宙に浮いているのです。

反りかえっているだけに両の乳房を突き出すような姿になって、下から見上げられる裸身を、かくそうと膝を合わせてみるのでしたが、そうすると、よけいに体がうに痛み、膝が自然に割れてゆくのでした。膝が割れると、宙に舞うたびにしぼり上げられた果汁の、とろりが、権太の鼻をつきます。

「畜生！　こたえられねエや」

かぶりつきたげな表情です。

「お前さん」

お内儀の声がとびます。

「それだけは自由にさせないよ」

「わ、わかってるよ」

唾を、のみこみます。

「乳房くらいなら、いじらせてあげるよ。ホラ」

指先で突かれますと、お市の裸身が宙に泳いで、向きを変えていきます。お町を抱きおこして正座させますと、そのまま、仰向けに床に倒しました。

「テヘッ！　やわらかいぜ、全く」

つまみあげられてお町の乳房が、ゆがんだまま

「あ、ゆるして」

細にくびれた。お市と違って、まだ湯文字

男の手ざわりに、上を向きましただけは腰を包んでいましたが、既に今までにこんなにされていてのたうってきおこしているので、ふくらはぎは殆どあらわになりつけられるように両の乳房をるだけに太腿が盛りあがって、ピチピチした肌をのぞかせているのです。

「この娘のは、どんなだろうね」

お内儀は、打ちすえられて、もう崩れるよりと前をまくられると固く合わされた太腿のつけ根に、お町のものが姿をみせました。

この時、お市は

「それは、いけない。約束がちがうわ。かんにんして」

苦しい息の下で叫んだのです。しかし権太

「あ、ゆるして」

乳房が躍っていきます。お内儀は知らん顔で、お町を抱きおこして正座させますと、そのまま、仰向けに床に倒しました。

細にくびれたお町の乳房が、ゆがんだまま上を向きましただけは腰を包んでいましたが、既に今までにこんなにされていてのたうってきおこしているので、ふくらはぎは殆どあらわになりつけられるように両の乳房をるだけに太腿が盛りあがって、ピチピチした肌をのぞかせているのです。

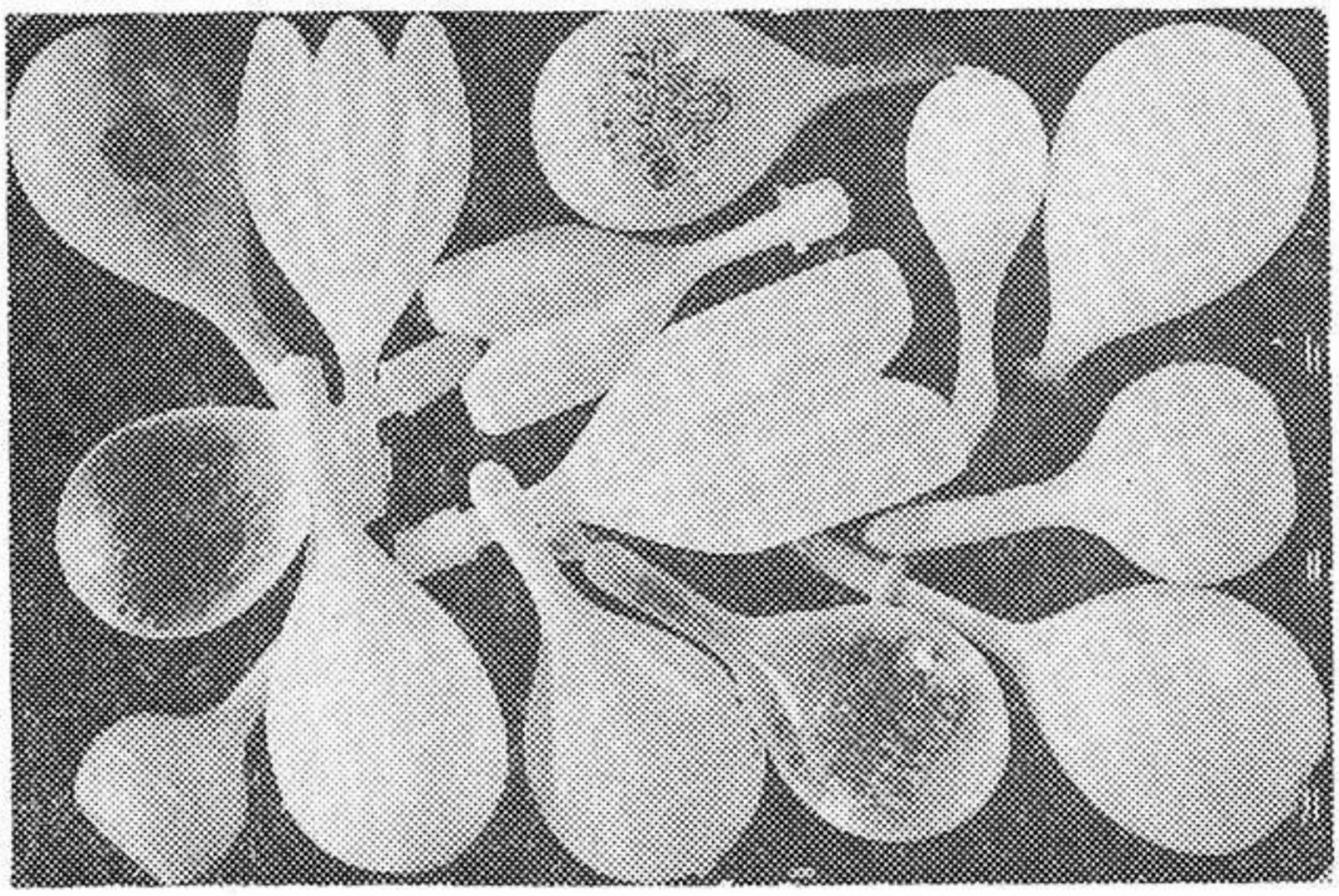
「この娘のは、どんなだろうね」

お内儀は、打ちすえられて、もう崩れるよりと前をまくられると固く合わされた太腿のつけ根に、お町のものが姿をみせました。

（おわり）

# 我が蒐集の記
# 浣腸のコレクション

清水　暗星



アブノーマルの世界で、コレクションといえば、女性の下着類や、毛髪のたぐいが多いようですが、中には、私のように、浣腸のコレクションを楽しんでいる人もいるだろうと思いますが、どうでしょうか。

私の浣腸趣味は、フェティシズムに起因したもので、こと浣腸に関するものなら、なんでも手に入れたいという願望があります。たとえば、新聞で時折、見かける「イチジク浣腸」という活字に「浣腸」の広告や、単なる「浣腸」という活字にさえ愛着をおぼえ、同じものが何枚になろうと、目にさえつけば片端から切り抜いて、保存してあります。

浣腸器類も、大きさ別、メーカー別に買い揃えてみましたが、コレクションの対象とするには、種類が乏しいし、浣腸に関する文献類も、医学書かSM雑誌以外では、なかなか見られません。どうしても一番、蒐集に適しているのが、イチジク型軽便浣腸ということになります。

しかし、切手や古銭のように、カタログがあって、お金さえ出せば買えるという品とは違い、何種類を集めたら完集になるのか、さっぱり分かりません。もっとも、医薬品は厚生省の認可なしでは製造できないので、その担当者にでも調べてもらえれば、浣腸界の全貌が摑めるかもわかりませんが、一般人には無理のようです。

私は止むに止まれぬ気持（欲望）から、自分なりに探し求めて研究し、一つ一つ、手探りで種類を増やしているのにすぎないのですから、コレクターとしては貧しい知識しかあ

りませんが、私の体験を発表させていただき同好の人達がいたら、協力をお願いしたいと望んでいます。

## 一

本誌が白表紙だった頃、栗瀬長氏が、各地に出張の際、その土地で買った軽便浣腸にマジックで、地名と購入月日を記入して保存している、というレポートがあり、面白く拝見しました。

確かにこの浣腸も、有名な製品が一部の地一品を除いては、小メーカー品が地方ごとに違った方だけに売られているので、本来の目的である便秘が直りたものが出廻っています。一般の消費者は、ので、薬屋で渡される品を無条件で買って行く傾向があるため、普通「イチジク」と他の製品の二種類を置いてあって、特に「イチジク」と申出のない客には、他のメーカーの品が売られているようです。

薬品関係の新聞「薬事日報」の発行社から毎年、医薬品の年鑑が発行されておりますそれに載せられている浣腸の種類だけで、三十数種。しかし、実際に私が入手した種類から推定して、おそらく百種以上はあるのではないかと思われます。

そして、それぞれの容量が、10g、20g、30g（ないのもある）の三種あり、二、三年も経てば包装やデザイン等の変更もするのでコレクションとしては、それなりに十分、楽しめるものであります。

## 二

私は、子供の頃から、浣腸には異常な興味を抱いていました。

そして育ったS市の郊外も、今では家が建並び、舗装された道路には、たえず車が行き来していますが、私達が小学校に通う頃は、途中は殆ど家らしい家もなく、田園が続いていました。時間の遅い時など、斜めに畑の、あぜ道を駈け抜けていったことも、何度かありました。

昔の田園には付き物の肥溜も随所にあり、ひからびた下肥の上には、数多くイチジク型をした浣腸のカラが見かけられました。私は通学の往き帰りに、それを眺めることが、いつのまにか、秘密の楽しみになっておりました。

前日、見た時には確かに数個あったはずのカラが、畑に撒かれてしまったのか、なくなっているのに気がついた日などは一日中、落ちつかず、いらいらしたりする事もありました。

当時の浣腸は、もう二度とは、ふくらで、一度使用すると、まず、胴のところが凹んだままになって捨てられていました。それなりに十分、楽しめるものでありました。

決まっていたように記憶しています。

或る時、一個の見慣れない形の浣腸を発見しました。それはピンク色のゴム製で、普通の浣腸の二倍ぐらいはあると思われるスポイト型のものでした。

私の母は、とても神経質で、トイレから出ても、必ず石けんで手を洗うようにと口うるさく言われていますので、いくら欲しくても容易には手が出せませんでした。人の使った浣腸のカラを、しかも肥溜から拾っていったことが知れたら、大変なことになります。私は二、三十分も、そこで未練がましく、それを棒でつついたりして遊んでいましたが、仕方なく家に帰りました。

しかし家に帰ってからも夜寝てからも、欲しさは益々つのるばかりです。夜半まで一人で、もじもじとしてしまったのか、なくなやっと『どんなことをしても明日は、あれを手に入れよう。そして、決して母に見付からぬ所に隠しておこう』と決心すると、間もな

く寝こんでしまいました。

翌朝、登校の時も、その場所にあることを確認していきました。

授業中も、どうか今日一日は、何処かの畑にでも撒かれてしまわれないことを、願い続けておりました。

下校時は、どうしても同級生の目がありま す。例の品があることを横目で確認して、何くわぬ顔をして家に帰り、魚を取りに行ってくると口実をつけて、バケツとタモを持って家を出ました。

その肥溜は道から巾二メートル位の小川をへだてた畑の一部に作られたもので、小川には巾三〇センチ位の板が渡してありました。あたりには、幸い人影がありません。手頃な二本の竹を探してきました。なにか、とんでもない悪い事でもするような気持で、頭がカッーと熱くなり、胸がドキドキします。それでもどうにか箸を使うようにして目的の浣腸を挟むと、とにかく小川の中に入れました。

小川の水は一寸、黄濁色に変わりましたがしばらくすると又、元の清らかな、せせらぎに戻りました。

恐る恐る手を近づけて、ふくらみを圧えてみましたが、意外にもゴムマリのような手ざわりで、凹みませんでした。よく見ると、嘴管の穴に何かが差し込んであります。それは細い釘のような物でした。それを抜くと、今度はスポイトのように、スウーと音をたてていえ浣腸に使うことはできず、綿花にその薬つぶれました。

水の中へ浸し、何回も何回も、ジュージューと水を吸入したり、排出したりして洗いました。よく見ると、その浣腸は茄子の形をしており「ナス浣腸」と字が読めます。よく水を切ってチリ紙に大切に包み、そっと家に持ち帰って自分の勉強机の抽き出しの奥深くしまい込みました。それ以来、時々取り出しては眺めて楽しみ、当時の私の最大の宝物でしたが、戦災で家と共に灰になってしまいました。

## 三

これは、まことに残念なことで、以後二十数年後の今日まで浣腸を探し求めてきましたが、ゴム製の軽便浣腸は、二度と手にすることはできませんでした。

それでも二、三個、入手して、まるでマスコットのように大切にしていたことを覚えていますが、黄色の小袋に一個一個、包装され、その裏面に簡単に使用法が記され、定価は20gg一個35円だったと記憶しています。

私が本格的に集める気になったのは、それから三、四年経って結婚してからでしたが、

## 四

昭和二十二年頃になって、再び「グリセリンや浣腸あります」という張紙を、薬局で見ることが出来るようになりました。

それでも、当時の物価から見ると決して安値ではなく、本当に病気や便秘で苦しい人なら、ともかく、いたずらに注入し、四、五分の排泄感を楽しむのには、少し金がかかり過ぎ、いくら好きでも、そうしばしば使用することはできませんでした。

それでも二、三個、入手して、まるでマスコットのように大切にしていたことを覚えていますが、黄色の小袋に一個一個、包装され、その裏面に簡単に使用法が記され、定価は20g一個35円だったと記憶しています。

私が本格的に集める気になったのは、それから三、四年経って結婚してからでしたが、

私は当時、或る光学会社の化学室に勤めて

おりましたが、研究用にすらグリセリンの配給が受けられず、果実から作られたという代用品が使われていました。その薬効の中に浣腸にも良いとされていましたが、代用品とはいえ浣腸に使うことはできず、綿花にその薬品をしめして、そっとトイレで真似ごとをして、僅かに浣腸の感覚だけに浸ったことを覚えています。

その頃は、もう相当の種類が発売されており容器は、どれもセルロイドで、薬液が蒸発しないよう、それぞれに工夫が凝らされ、イチジクは薄いビニールの膜で覆ってあり、使用後、上手にはがすと、浣腸の型をした膜がとれました。他の多くは、蝋で固めたようなのが多かったようです。その頃のアイデアとして、手を汚さないようにとの心遣いから、直径10センチ位の紙の中央部に穴をあけたものが入っており、使用する時、その中央の穴から嘴管だけを出して注入するよう、説明されているものが見受けられました。

## 五

昭和二十八年頃、イチジクが小袋包装から一個ずつの厚紙で出来た小箱入包装となり、古い製品は懸賞付で発売されたことがありました。買った浣腸の小袋に、自分の住所、氏名を書いて薬局に出すか、本社宛郵送すれば一等オルガンから末等イチジク浣腸一箱（十個入）まで多種でしたが、私の知る限りでは浣腸で消費者に（小売店に対しては何回もやられている）賞品を出したのは、一回限りであったようです。

小箱入り発売も、一年位で包装の一部を変えましたが、初期のものには、マニヤには忘れることのできない〝おみくじ〟型の使用方法の説明書が入れられていました。

『便秘には下剤よりも浣腸する方が理想的なことは、すでに常識となっております〝イチジク浣腸〟は創業30余年という伝統的のもとに改良に改良を加え、名実共に近代的家庭常備薬品として益々内外の皆様に御愛用を頂いております……但し最近セルロイド製のいちじく型をした浣腸がすべて〝イチジク浣腸〟だというように思い違いをしている方もあるようです。〝イチジク浣腸〟の文字のないものはイチジク浣腸ではありませんから、御買上げの際は、よく御注意下さい。

イチジク浣腸の特長

イチジク浣腸の使用法

①添附の針で尖端両側にある凹部に、必ず両側から孔をあけて下さい。

②孔を開けてから少し薬液を出すか、唾液をつけるかして尖端部を濡らすと、挿入が容易です。

③挿入は静かに、ねじるように奥深く。

④挿入したら浣腸全体をよくつぶして薬液を残らず注入して下さい。

⑤注入が済んだら浣腸器を抜き去り、肛門を脱脂綿か、柔らかい紙でおさえておいて下さい。やがて直腸が蠕動を起こし、はげしい便意を催します。しかし、この時、すぐ排便を出たり、ヒキツケを起こしたり熟睡出来なかったりします。また疫痢等の疑いがある時は勿論、他のどんな小児病の場合でも応急手当として先ず常備の〝イチジク浣腸〟をして医者を待つことが常識となっております。

御婦人の便秘は、お顔の皮膚を荒し、美容の大敵です。

御年寄の便秘は抵抗力の弱った体に老衰を促進させることになります。

お父さま方、学生さん方の便秘は頭を重苦しく、お仕事やお勉強に重大な影響を及ぼします。

イチジク浣腸の効能

便秘、及び便秘が原因となる発熱、ヒキツケ、頭痛、ガス膨満、眩暈等に有効。

お子さまの場合は便秘が原因となって熱が

せず出来る限り、がまんして下さい。そしてどうしてもこらえ切れなくなった時に手をはなし排便をして下さい（なお、冬期にはアンプルを温湯で温めると効果的です）

☆非常なガンコな便秘症は一度に二個、使用されると目的を達しします。またお子様に大人用を使用されても差支えありません』

まるで家庭医学の浣腸の項よりも丁寧に、しかも、図解入りで説明してあるこの能書きは、何度も何度も読み返しました。そして、この能書き欲しさに、この時、何個も何個もイチジク浣腸を買ったのを覚えております。

## 六

この頃、既に特異な存在だったのは、ハート十字浣腸です。軽便浣腸の主成分はグリセリンが常識となっておりましたが、ただ一つだけ、ハート十字は、稠厚牛胆〇・〇〇七%チモール〇・〇〇一%、塩化ナトリウム一五%、常水八四・九九二%、それに使用法が穴をあけるのではなく、嘴管の先についている小豆大の部分を折って取り去ると穴ができるというものでした。

現在も処方が、タウリン2g、グリセリン5g、塩化ナトリウム15g、ニトロフラゾン〇・〇〇一gと共に、主成分は食塩水ということになります。

浣腸薬としては、ドナン（タケダ）などは本誌でも何回も紹介されておりますがこの外ソルビタール（昭和化学）、三研浣腸液（三和化学）、浣腸液「ベンツ」（広貫堂）、ウリノール（東亜製薬）などがありますが、やはり、日本ではグリセリンが最も一般的で、軽便浣腸になっているのは、ハート十字浣腸以外は全部グリセリンではないでしょうか。

浣腸薬といえば、医者の使う健保の点数表を見ると、流動パラフインやメチルセルローズも浣腸薬となっているのが、興味深く思えました。

## 七

軽便浣腸界にとって大きな変化は、やはりポリエチレンの普及ということだったと思います。容器のコストと、作業工程の簡素化は一挙に解決され、いままでのような蒸散に対する配慮も必要なくなりました。

使用感もセルロイドの硬さからみればソフトで、肛門を傷つける心配もなくなったわけで、次々とポリエチレンに変えられました。

私が一番早く見付けたのは、昭和二十七、八年頃だったと思います。薬局浣腸（大正製薬）でした。それまではコレクションとして保存するには、薬液が入ったまま置くと、だんだん変色してくるので、注射器で先端部に小さな穴をあけ、そこから吸い出して、原形を保つように薬液を抜き取っていました。しかしポリエチレンには復元力があるので、たとえ一度、使用しても原形に戻るし、液が入ったまま保存しても変色することがありません。

それに一度、使用した容器に再びグリセリン液を吸入させて使用することも出来ます。

又、その頃までは子供用10g、大人用20gと決まっておりましたが、重症用30gのものも発売されるようになりました。普通、ガラスの浣腸器を使用して浣腸しても、30ccは注入するのですから、何も重症でなくても30gが普通で、本当に重症なら二、三個、同時に使用するべきでしょう。その為か、その頃まで一個単位で売っていたのが、殆ど二個箱入という、二個単位の小売法に変わりました。

一個で用が済めば、一個は次の便秘の時にというアイデア商法で、お客としても、どうせそのうち、使用することだしということで、難なく受け入れられたようです。

私が不思議に思うのは、どうして富山の薬屋が浣腸を扱わないかということです。

一年間には、どんな人でも多かれ少なかれ便秘することもあるでしょう。そんな時、手近に浣腸があれば、使用されること間違いないと思います。若い女性などで、羞かしくて買うのを、ためらう人があるとすれば、置薬に入っていれば、喜んで使用されると思います。

私達マニヤにとっても、置薬屋は、仕入価格の安い品（二流品）を使うようですから、名もない、ローカルの製品が入手できるでしょうから、大いに喜ばしい限りです。

軽便浣腸の中で例外は、便秘の治療以外の目的、即ち、蟯虫の駆除剤があることです。代表的なのはウリノール浣腸で、食酢とグリセリンの混合物が入っています。

形は一般の浣腸と変わりませんが、注入量が普通の浣腸の量では不足するので、40ccのものまで発売されています。

使用感は、40cc注入してもグリセリン50%のように強い排泄感はなく、そのうち注入したことを忘れてしまう程ですが、コレクションとしては、ジャンボで花形といえます。

## 八

マニヤにとって、ガラス製の浣腸器と共にイチジク型軽便浣腸も、フェチの対象となっていることは前にも書きましたが、新しい形の浣腸も又、楽しいものです。

確かに洗練された、あの美しい曲線美はありませんが、真剣に研究している人がいると思うと、楽しい事です。昭和三十五、六年頃エスエス製薬からウサギ浣腸が発売されました。形はピンポン玉にウサギの耳のような嘴管がついたものですが、使用する時、底を押し込むとピンポン玉の中央から中に折れ曲り上部の容器にピタリとついて液が残らないというもので、逆流しない。嘴管が長いので深部に達する。注入する力が強い。などの特長で特許を持っているようです。このウサギ浣腸も、浣腸そのものの型は変えませんが、包装は何回か変更し、特に最近、機械による自動包装になってからは、箱が大きくなったり小さくなったりして、収集マニヤにとって忙しいくらいです。

昨年は、思いがけず「ヒヤ浣腸」というのが発見できました。これは、ウサギ浣腸よりもっと浣腸らしくない形をしていて、人間の肺の形とでも言ったらよいか、10gと30gは二つの房から成っております、20gは三つの房から成っています。「クスリ小事典」では、イチジク浣腸等の卵形に対し、ヒヤ浣腸は、しゃもじ形だと書いています。

もっと、この浣腸に興味が深かったのは、ポリエチレンの浣腸器一個ごとに、大阪市の住所と女性名の製造責任者名が表示されていることです。他の浣腸も、会社名と住所は略記されていますが、そのまま手紙を出す事も可能な住所が書いてあるのは始めてでした。

とにかく、こんな形の浣腸を考え出し、特許をとって自分の事業としている女性に大変興味が湧きました。もしかすると、私達と同じように、単に商品として、以上の興味を持っている女性ではあるまいか？　等々……。

数日間、手紙を出すか出すまいかと迷ったあげく、思い切って次のようなことを書いて郵便を出してみました。

「私は軽便浣腸に興味を持っており、もう十年以上も各社のものを集めています。こんな物に興味を持つ人は非常に少数かも知れないが、私の知っているだけでも十数人はありますす。浣腸製造責任者として、どうかこのような人が現存することを、ご認識いただければ幸です。

『ヒヤ浣腸』という名前は『クスリ小事典』という本で知りましたが、当地の薬局では、どうしても入手出来ない。メーカーに小売り

してくれと依頼することは筋違いだと承知しておりますが、ぜひ入手したいので同封の小為替で送っていただけないか？　若しどうしても駄目なら、何処かの小売店に廻して送って下さるよう、ご手配願います」

と書いて、五千円の小為替を同封した。

「ついでに、浣腸を研究している貴女に是非次の事柄に、ご返事願いたい。

一、ヒヤ浣腸の名称の由来

二、ヒヤ浣腸の着想の動機

三、ヒヤ浣腸の一個一個にお名前を入れている理由

四、その他参考になる事項」

以上の質問を書き添えました。

暫くたってから同姓の別の女性名で書留便が届きました。もう開けなくてもわかっています。メーカーに小売りを頼む方が無理なんだ。と自分に言い聞かせながら封を切ってみると案の定、美〇子が暫く不在のため私（裕〇）が代わって返事を書く詫びと、私共で作ってはいるが販売能力がないので、別の製薬会社と契約を結び、製造した物は全部、その会社に売り渡す事になっているので、たとえ一個でも私共の所からお売り出来ないから了承して欲しい。もし容器に興味があるなら、少し位送ってあげても一泊しなければ行くことができずは返させてもらう。とにかく、お金というような事が書かれていました。そして

一、名前は販売をするのであること。

二、着想は、イチジク型には何か改良する余地はないかと、私たちが、いろいろ考えたもので、①立てられる。②奥まで注入できる。③液の残り方が少ない。④胴部が肛門に密着する不快さがないなどの利点をあげて特許をとったこと。

三、一個一個に名前を入れたのは、薬事法の定めに従ったまでであること。

など、くわしく書いてありました。とりわけ、奥まで注入できるという説明では「イチジクや、その他のメーカー品と同時に上に向けて、つぶしてみてください。私共の浣腸の方が、はるかに高くまで水が達します」……等々。

私は、この手紙を読み、何とかこの女性達にお目にかかってみたいものだ、という気をおこしました。

## 九

「ヒヤ浣腸」のメーカーであるその工場は大阪市にありました。しかし、私の家からではどうしても一泊しなければ行くことができず諦めるともなく忘れておりました。

先日、名古屋に出張し、思ったより早く仕事が済んで、駅のベンチに腰をかけて一服しながら、ふとポスターを見ると、それは私鉄のノンストップ特急を宣伝するものでした。

〝大阪まで二時間十分〟

というのが目に、とびこんできました。

『そうだ、どうせ家は一泊する予定で出掛けてきたのだし、宿泊代ももらってある。この際、大阪に行ってみよう』

決心がつくと、駅構内の本屋で大阪市街図を買い、手帳にメモしてあった浣腸工場の町名を探してみました。それは鶴橋という駅から数キロの地点でした。

『どうせこの私鉄も鶴橋に停まる。そこで下車して、車を拾えば何とかなるだろう』

そんな気持で乗車券を手に入れると、人波の中に入っていきました。

鶴橋で下車し、流しのハイヤーを拾うと運転手に町名を告げ、その町に入ったら、どこでもいいから降ろしてくれとたのみました。

そこは、町工場が無計画に建ち並んだという感じの町で、主婦のアルバイトらしい女工さんが、行ったりきたりしていました。

私は手帳をとり出して番地を覚えると、民家の標札と見較べながら、目的地に、だんだん近づいていきました。番地が十の桁まで合ったところで、一寸した商店街に出てしまいました。『まさか、こんな街の中に工場があるとは思えないのに』と思いながら、その近くを行ったり、きたりしてみました。

どうしても、それらしきものが見つかりません。近くの家で聞けば簡単ですが、人に言えない秘密の楽しみを求めての場所探しですから『まあ、仕方がない二、三軒、薬局に立ち寄って、この辺でどんな浣腸を売っているか調べてみよう』と思い、商店街の端から薬局に寄っては浣腸を求めました。

私が浣腸を買うのは、欲しいのが見つかると、それぞれ何個か買うのですから、どうしても一般の客としては不自然になります。

「浣腸を下さい」と入っていくと、必ずと言っていいくらい「大人用ですか？　小人用ですか」と聞かれます。

私は、いつも「救急箱に入れておくから、いろいろ」と言うことにしています。

こんな調子で、二、三軒の薬店を廻りました。次に入ったのが、その土地名を店名にした薬局でした。中から出てきたのは、六十を過ぎたと思われる品の良い老婆でした。私が例によって、「浣腸を下さい」と言うと、何か一寸ためらっていましたが、「これで良いですか」と言って『ヒヤ浣腸』を差し出すではありませんか。

はっ、として老婆の顔を見ると、不審そうに私を見つめていましたが、ふと目についた免状には、ヒヤ浣腸製造責任者として表示してあった女性名が書かれていました。

一瞬、私の頭には色々のことがらが交錯しました。

製造所と書かれてあったのが、工場ではなく薬局であったのか？　薬局でありながら、どうして私の送金した金を返してきたのであろうか。製造責任者は、女性とはいうものの、こんな老婆であったのか？　等々。

しかし、却って老婆の方が気安く尋ねられるという気もして、来意をつげました。そして約三十分くらい話をしましたが、要点をまとめると、

浣腸の考案者は、この老婆であること。しかし娘が製造責任者となって、近隣の都市で工場を経営していること。容器のデザインが決まるまでには、種々の苦労があり、特にこんな変わった型の容器を作るのを引受けてくれるポリ工場を探すのに苦心したこと。人体実験には、老婆自身や娘さんも使用してみて改良したことなど、私には楽しい話ばかりでした。

これが、若い女性自身の口から聞けたら申し分ないわけですが、これだけでも、わざわざ大阪まで来た甲斐があったと思いました。

どうせ大阪に来たついでにと、気の向くままに電車に乗り、歩き、薬局を見付けると浣腸を買い、大阪駅近くの旅館に着いた時には洗面用具しか入っていなかった鞄が、一ぱいに、ふくらんでいました。少なくとも、この一日で五種類以上、新種がみつかったはずです。今夜は一人で十分、楽しめると、ひとり上機嫌でありました。

## 十一

風呂を浴び、夕食を済ませて、いよいよ買い集めた物を整理し始めました。

二流メーカーの品には、一流品の名称を、もじったようなものが多く、イチジク型などと、わざわざ表面に書いてあるのが、二、三種ありました。その中に思いがけず、面白いものを見付けました。それは「ノーベルキャ

ップ浣腸」というもので、見かけは何等他の浣腸と違いはありませんが、使用法を見ると◎ノーベルキャップ浣腸は、他浣腸薬とちがい、穴をあける必要はありません。キャップを引き抜き、そのまま肛門内に挿入して、お使い下さい。先端部には穴がありませんが、アッパクすれば液が出ます。

肛門内のネンマクは、やわらかく特に幼児はキズが付き易いため、ノーベルキャップ浣腸は、特に先端部に穴キズを作らず、なめらかな状態のまま使用していただける（実用新案）容器が使用してあります。

と書かれています。

容器から液を出すための穴については、各社とも色々と考案がなされ、以前は殆ど釘が添付されていて、使用する時に穴をあけるというのが多かったのですが、穴があいている所にゴムのキャップを覆せてあるもの（ハート十字浣腸が塩化ナトリウムという例外を除いては、グリセリンと多少の添加物であり、その濃度も50%が標準とされておりましたが、薬効を高める意味で55%というのを、時々見かけるようになりました。

添加物としての少量の防腐剤、腸の蠕動促進剤などの「チメロサール」「ヒビテン・ジグルコネート」「デヒドロ酢酸ナトリウム」「塩化ベンサルコニウム」「オロナイン」「チモール」など、一時は競って使われていたようですが、添加物が人体に有害だと騒がれる昨今、又、グリセリンと常水だけに戻りつつあるのは注目すべき傾向だと思います。

資料不足で、まだリストを作るまでには至っておりませんが、皆様のご協力で将来そのような一覧表が作れたらと夢みております。

人の嫌がる「浣腸」という単なる医療行為も、十八世紀にはヨーロッパでエロチックな風物詩として上流社会の人に楽しまれ、現在はSMの世界には欠くことのできない行為として誌上を賑わせ、又、私のようにフエチの対象としてや、コレクションの対象として、これを求めて旅行したりまでする存在となっていることは、不思議なような気がします。

可愛らしいこの小さな浣腸も、一旦、使用した場合、大の男も数分後には、どうしようもない苦痛に悲鳴を上げさせる不思議な力を持っていることを思うと、何ともいえぬ魅力が感じられます。

面白くないことを、長々と書きましたが、たとえば何人であっても、共鳴していただける人があれば、しあわせだと思います。どうか同好者のご協力をお願いします。

## 十二

薬液については、ハート十字浣腸が塩化ナトリウムという例外を除いては、グリセリンと多少の添加物であり、その濃度も50%が標準とされておりましたが、薬効を高める意味で55%というのを、時々見かけるようになりました。

添加物としての少量の防腐剤、腸の蠕動促進剤などの「チメロサール」「ヒビテン・ジグルコネート」「デヒドロ酢酸ナトリウム」

# 団鬼六作 花と蛇 決定版

◎瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号『花決定版』＝定価一、〇〇〇円（送200円）＝

の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

―〈内容主要見出し一覧〉―

第一章 発端
第二章 恐ろしい陥穽
第三章 美人探偵登場
第四章 華麗な浣腸図
第五章 救援者来たる
第六章 救援の失敗
第七章 餓狼への好餌
第八章 悪魔の哄笑
第九章 恐怖の地下室
第十章 翻弄される美女
第十一章 淫蛇の執念
第十二章 美姉妹危し
第十三章 色事師難
第十四章 美津子受難
第十五章 花落微塵
第十六章 密室のショー
第十七章 脱走の失敗
第十八章 華やかな宴
第十九章 地獄屋敷へ新顔
第二十章 翻弄されるカップル
第二十一章 一千万円の身代金
第二十二章 身代金奪取の失敗
第二十三章 涙の宣誓文
第二十四章 連命の逆転劇
第二十五章 奇妙な三々九度
第二十六章 飼育される白い動物
第二十七章 悪魔と悪女の悪業
第二十八章 悪鬼達の残忍な所業
第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末
第三十章 悪鬼達の修羅場
第三十一章 落花無残の修羅場
第三十二章 淫らな美女の調教
第三十三章 すさまじいショーの展開
第三十四章 汚水にまみれた宝石
第三十五章 華々しき美女の屈伏
第三十六章 対峙する美女と美女
第三十七章 あくどい陥穽
第三十八章 羞恥図絵の展開
第三十九章 清純な令嬢の屈服
第四十章 人身御供の令夫人
第四十一章 深窓の美少女とズベ公
第四十二章 小夜子への執拗な調教
第四十三章 変性色事師の登場
第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 激しいスターへの訓練
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人
第五十二章 淫靡な時代劇ショー
第五十三章 華々しきショーの展開
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪党一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の涕泣
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続く
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい犠の到来と静子の狂態
第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演
第七十二章 女盛りの妖美な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。
〒558 暁出版株式会社宛

カット・志羽利也

# 六回完結Ｓ小説 パノラマ島秘譚

〈その完結〉

藤見郁

## 朝食儀式

〝夢の城〟には、その性質上、化粧室とよばれる部屋が、各階に設備されていた。

いま美香が呻吟しているのは、地下一階の浴室のとなりにある化粧室だった。

巨大な三面鏡の前にすえてある拘束椅子の上に、美香はシコの手によって、二重三重にくくりつけられていた。つまり美香は、湯あがりのからだを、すぐこの化粧室へ運ばれてきたのである。

その拘束椅子は、ちょうど理髪店にある散髪台を連想させた。

入浴をすませたばかりの美香は、ネグリジェに似た、うすい生地の透明な化粧着をきせられていた。

美香の両手首は背後にまわされ、革手錠でひとつにつながれている。その手錠は椅子の背中の部分に、接着する仕掛けになっているのである。

つづいて乳房の下側に、幅十センチほどの革ベルトがまわされ、そのまま背後の椅子に直結される。乳房の上側にも、同じような厚い革ベルトが締められた。

上と下から圧迫されて、乳房はやや三角形に盛りあがり、前へ異様に突きだした。

足首には、これも椅子に装備されている金属製の足枷が、がっちりとくいこんだ。さらに太腿の上にも幅の広い革ベルトが巻きつき強く締めつける。

たかが顔に化粧をほどこすくらいで、このように大げさで、ものものしい拘束をほどこ

す必要はないのだが、これも美香に対するシコのひそかな復讐のひとつだった。

巨大な鏡は、まるで包囲するような迫力で美香の上半身を三方からうつしだしている。その三面鏡のなかにうごめく自分のみじめな姿に、美香はまた新しい悲しみがこみあげてくるのだった。

自分を拘束していくシコの手に、なにかの怨念があることを、美香は身のすくむような思いで感じていた。

なんのためにシコは自分に意地悪をするのか、どこまで苦しめれば気がすむのか、美香には、わからなかった。

しかし、Qがほめたように、シコの手によける化粧は、たしかに慣れていて巧妙だった。シコの指さきは、三面鏡の前に並べられてある各種のクリームや化粧品を、びんからすくいあげて、まるで奇術師のような繊細な動き方をした。

おそらくこのメーキャップ法も、Qの好みと指示によって、きびしく教えこまれたものであろう。

美香のくっきりした目、鼻、唇、顎の形の美しさに、適切な陰影と色彩を加えて、この少女の美点を、いっそうあざやかにデフォルメしていた。美香の顔に対するシコのひそかな復讐のひとつだった。

巨大な鏡は、まるで包囲するような迫力で美香の上半身を三方からうつしだしている。その三面鏡のなかにうごめく自分のみじめな姿に、美香はまた新しい悲しみがこみあげてくるのだった。

自分を拘束していくシコの手に、なにかの怨念があることを、美香は身のすくむような思いで感じていた。

なんのためにシコは自分に意地悪をするのか、どこまで苦しめれば気がすむのか、美香には、わからなかった。

しかし、Qがほめたように、シコの手によける化粧は、たしかに慣れていて巧妙だった。シコの指さきは、三面鏡の前に並べられてある各種のクリームや化粧品を、びんからすくいあげて、まるで奇術師のような繊細な動き方をした。

おそらくこのメーキャップ法も、Qの好みと指示によって、きびしく教えこまれたものであろう。

美香のくっきりした目、鼻、唇、顎の形の美しさに、適切な陰影と色彩を加えて、この少女の美点を、いっそうあざやかにデフォルメしていた。美香の顔は、いちどに花が咲いたように派手に、華やかになった。

D子の奉仕によって、思う存分欲望を満たしてきたQが、この化粧室へ現われたとき、ちょうど美香の化粧は仕上がっていた。

「ほう、これはみごとだ」

ドアをあけて、室内に一歩足をふみいれたとたんに、Qは感嘆した。

三面鏡にうつっている美香の、あでやかにいろどられた別人のような顔に、目をみはったのだ。

「シコのメーキャップは、あいかわらず、うまいものだな」

Qは、率直にほめた。

とくに美香の口紅の色が、みずみずしく艶をふくんで、思わず吸いつきたくなるほど魅力的だ。

Qは、ごくりと生唾をのんだ。

「さあ、それでは美香の美しい顔を前にみながら、朝食をとるとしようか。いちだんとうまいことだろうな。けさはひさしぶりに、食堂へ行ってたべようかな」

上機嫌にうなずきながら、Qがいった。

「かしこまりました」

シコは手早く、美香の全身にぎっちりと喰いこみ、肌にまといついている拘束具を解いた。そして、美香を化粧椅子から立たせると化粧着をぬがせた。

つぎに、やはり透明な生地でつくられたブラジャーを胸にあて、パンティをはかせた。

美香は、その下着の上に着せてくれる衣服を期待したが、駄目だった。つまり、あたえられたのは、下着だけだった。

ブラジャーもパンティも、しかし下着の役目を果たしていなかった。透明な生地のために、かえって誇張されて目立った。

シコは、その美香のからだを、こんどは移動椅子の上に腰かけさせた。美香は腰をずらして拒否した。

「いやです。歩いていきます。もうこんな椅子に縛りつけないでください。お願いです、美香は自分の足で歩いていきます」

美香は泣きながら哀願した。

しかし、シコの耳にその言葉は、はいらなかった。無表情に機械的に、美香を移動椅子に固定した。

両手首を前にして革手錠でとめ、両足首は金属製の足枷を、ぱちんとはめた。腕と胸には、幅の広い革ベルトがまわされ、椅子の背中で固く締めつけられた。さらに、むきだし

ている左右の太腿の上も、革ベルトでおさえつけた。

たとえ一分間でも、美香の手足を自由にしておくのがくやしい、といった感じの、敏速で病的なシコの行動だった。

「ああ……」

乳房の下にまわされた革ベルトが呼吸をしめつけ、美香は赤くぬられた愛らしい唇をひらいてあえいだ。鼻の穴が心もち上をむいてひろがる。

そのあどけない可憐な表情を盗み見ながらシコは快感にふるえているのだ。

Qはさらに、その快感以上のものに酔いながら、やさしく美香にいった。

「がまんするんだよ、美香。美香はわたしのだいじな宝ものだからね、逃げられたら困るのだ。だから、こうして、いつでも用心してくくりつけておくんだよ。また、どういうわけか、美香は固定されている姿が、とてもよく似合うんだ。とてもかわいらしく見えるんだ。不思議だねえ」

食堂は、一階の東側にあった。

シコは美香をくくりつけた移動椅子を押して、地下一階の化粧室を出た。Qもそのあとからつづく。

移動椅子は、波の上をすべる小舟のように快適に、廊下を進んだ。

食堂の内部は、テーブルが十ばかり整然と並べられ、デザインも装飾も照明も、ちょうど高級レストランの感じだった。あかるく清潔で、壁の内側に装置されたステレオからは上品で静かな音楽が流れている。

ここは、この〝夢の城〟で生活している女たち、つまり、A子、B子、C子、D子、E子、F子、G子たちが三度の食事をとる部屋なのである。

したがって、Qがこの食堂へ姿を見せるのは、めずらしいことであった。

美香は移動椅子からおろされ、つぎに、食事用の給食椅子に坐ることを命じられた。

美香がその椅子に尻をおろすと、シコはすぐに美香の両手を背後にまわして、革手錠でひとつに固定した。

それから両足首には、プラスチック製の透明足枷を、かちりとはめた。さらに太腿の周囲も、幅の広い革ベルトで、筋肉がへこむほど縛りつけた。

この給食椅子が、数分後には美香をまた羞恥と屈辱の底にうごめかせることになるのだが、美香はまだ知らない。

やがて美香の目の前に、小さなテーブルが運ばれてきた。それは、美香のために特別に用意されたテーブルらしかった。

さすがに空腹をおぼえていた美香は、思わず、そのテーブルの上をみた。

美香の顔がゆがみ、紅潮をはじめた。赤くぬられた唇を噛みしめた。

テーブルの上に並んでいるのは、ひと目でそれとわかる育児食だった。美香の顔が赤くなったのは、その育児食をみて屈辱を感じたためである。

皿にはいっているオートミル、やわらかそうなビスケット、コップに入ったアップルジュース、そして小型保温器には、哺乳びん入りのミルクがはいっている。

「だいぶおそくなったが、それでは、これから朝食にしよう。おなかが、すいただろう。おとなしくしていなければ駄目だよ。わたしが、たべさせてあげるからね」

テーブルをはさんで、美香とむかいあって坐ったQがいった。

「自分でたべます。手を、手をゆるめてください！」

美香は、顔を赤くしたまま、泣き声でいった。肩を左右に動かしたが、手首に噛みこん

でいる革錠や、胸を締めつけている革ベルトが、ゆるむはずはなかった。

「だめだよ。美香は赤ちゃんなんだからね。赤ちゃんは自分ではたべられない。わたしがたべさせてあげるよ」

「いやです。いや、いやッ」

美香は恐怖に近い声をあげ、首を横にふって哀願した。

「わからない赤ちゃんだねえ。そんなにわがままを言うんだったら、お仕置きをしなくてはいけないかな」

美香の坐っている給食椅子の下から、巨大なスプーンのようなペダルが一本、Qの足もとまで、のびている。

Qはそのペダルの上に右足を軽くのせると膝に力をいれて、ひょいと踏んだ。

同時に、

「うッ！」

とうめいて、美香は背骨をのけぞらし、全身を硬直させた。美香の臀部に、下から固いものが突きあがったのだ。

それは、ゴルフボールほどの固さと丸みをもった突起物だった。つまり、美香が坐っている椅子の内部に仕掛けられていて、Qがテーブルの下のペダルを踏むと、それはバネのように、いきなり突き上げるのである。

思いもよらない、下からの攻撃だった。しかもこの攻撃は、美香の羞恥心を、まともに襲うのだ。

「フフフ……わかったかね。だから、わがままを言ってはいけない。美香は赤ちゃんなんだから、わたしの言うとおりにしなさい。そうすれば、痛い思いや羞かしい思いをしなくてもすむんだ」

美香がはいているのは、すけて見えるほどうすい生地の小さなパンティだけである。感覚的には、はいていないのと同じであった。だから、ゴルフボールほどの突起物は、神経の敏感なところを、直接、下から突きあげるのである。

「ハイ……」

くやしげにうつむいた美香の目から、涙がこぼれた。卑怯で、そして残忍な趣向ばかりが、とりそろえてあるのだ。

「フフフ……わかったらしいね。しかし、たくやしげにうつむいて、唇を噛みしめる。頬べたくないのなら、無理にたべなくてもいいんだよ。滋養浣腸という方法も用意してあるからね。栄養のあるジュースを注射するのだ。いいかね、美香のお尻に、栄養を注入する。ふといガラスの注射器で、それから……」

「やめてください！」

美香はヒステリックな声をあげた。涙がまたあふれた。なんという屈辱！

「たべます、たべますから、そんなおそろしいことを言わないでください！」

涙を流しながら、美香は哀願した。

「フフフ……よろしい。わかればよろしい。それでは、せっかくお風呂にはいった肌を汚さないように、ヨダレカケをかけようね。ほら、むこうの壁にかかっている大きな鏡をみてごらん。このヨダレカケは、美香にとてもよく似合うんだよ」

シコが美香の背後にまわると、器用な手つきで、そのヨダレカケを美香の首から胸もとへかけた。

白いレースがついていて、たしかに乳幼児むきのかわいらしいナプキンだった。しかしこの屈辱に、美香の表情は大きくゆがんだ。

が、けいれんした。

その表情を観察しながら、Qは左手をのばして、美香の髪の毛をやさしく撫でた。

「いい子だ、いい子だ。さあ、お口をあけなさい。このオートミルから、たべようね」

Qは、オートミルの皿へスプーンをさしこんだ。そして、ひとさじ、すくうと、美香の口の前へ運んだ。

しかし、美香は唇をひらかない。屈辱の思いが、また胸の底に火のように熱くこみあげてきたのだ。

「だめだねえ、世話のやける赤ちゃんだ」

いいながら、Qはテーブルの下のペダルをまた軽く踏んだ。

「うッ！」

固い突起物が、肛門のあたりへ、こつんと突きあがり、それがねじるように回転するのを感じ、美香はうめいた。

突起物のねらいは正確だった。美香はあわてて口をあけた。すると、突起物はすぐに沈んだ。まるで生きているもののようだった。

「フフフ……いい子だね。そら、もっとアーンして」

スプーンにすくったオートミルを、Qは美香の口のなかにいれた。

美香は口をとじ、そのあたたかくやわらかいたべものを、舌の上にのせた。

空腹のせいもあったが、それはおどろくほど美味だった。頬の内側が、じいんとしびれた。美香は味わいながら、オートミルをのみこんだ。

しかし食事にまで幼児用のものがあたえられるとは思っていなかった。しかも、口まで運ばれて、たべさせてもらうのである。

私はもう十七歳なのに！

屈辱が、また熱く胸にこみあげた。

「はい、口をあけて」

オートミルのなかにスプーンを沈ませながら、Qがいった。

尻の下に隠されている突起物がおそろしくて、避けることはできなかった。

美香は、また口をひらいた。

「よろしい、フフフ……まったく美香は、かわいいね」

Qは右手でスプーンをあやつり、左手でグラスにつがれた食前酒の白ブドウ酒をのみはじめた。

スプーンのオートミルは、四度五度と美香の唇に運ばれた。

六度目のとき、美香は、

「もういりません、おなかが、いっぱいになりました」

といって唇をとじ、顎を左右にふった。

「ばかを言ってはいけない。この食事はね、美香のからだに合った栄養やカロリーが、ちゃんと計算されているんだ。だから、全部たべなければいけないんだよ」

Qは、テーブルの下のペダルを、こんどは強く踏んだ。

「ひいッ！」

と、美香は胸をそらした。突起物がするどく突きあがり、そのままバイブレーターのように回転しているのだ。

尻を浮かして逃げようとしたが、太腿の上をベルトで縛られているので、避けることはできなかった。

「もう一度、踏みなおそうか、フフフ……」

Qが笑いながらいった。

「たべます、たべます！」

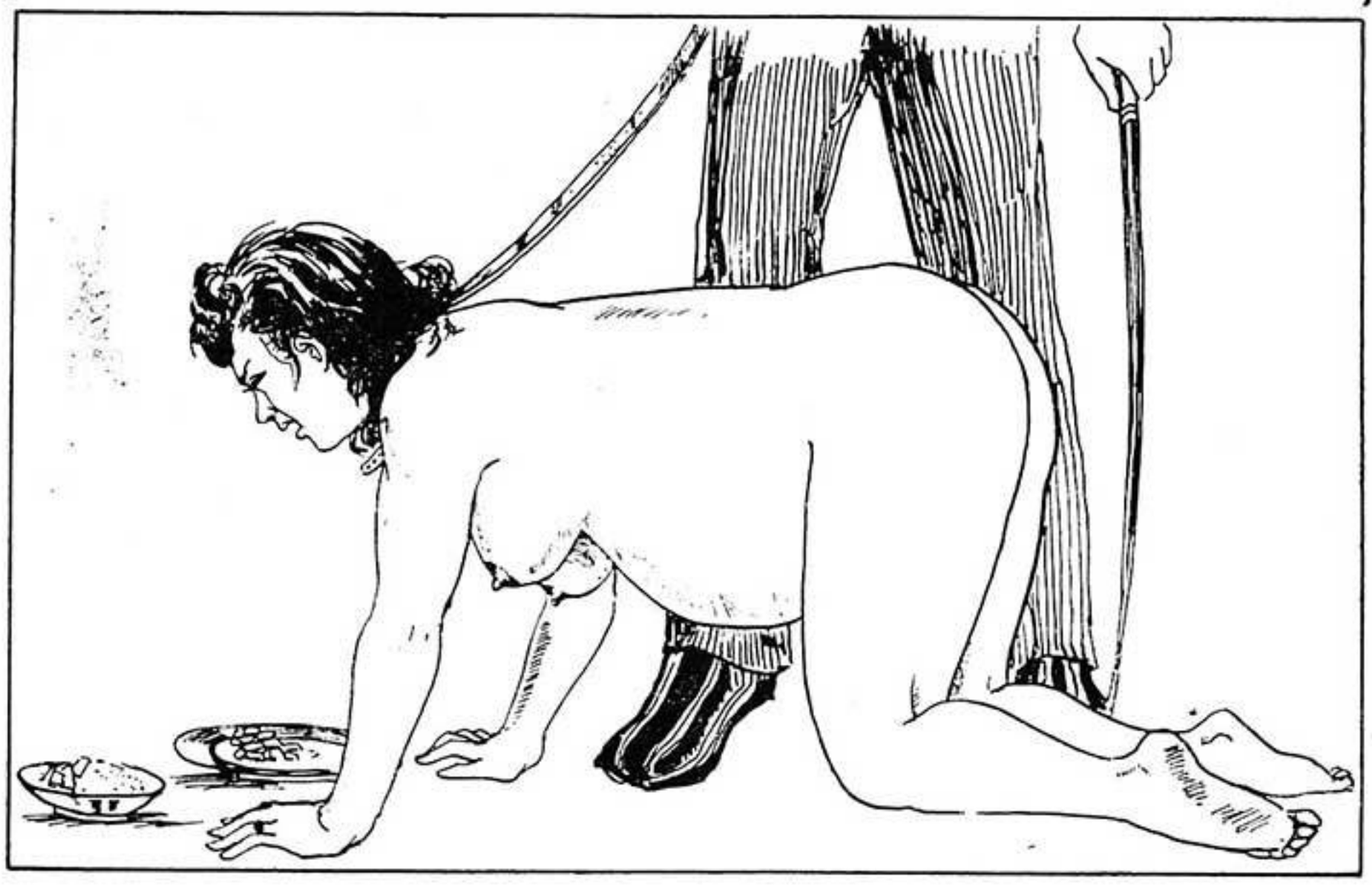
美香は、のどの奥から悲痛な声をあげ、涙を流しながら叫んだ。

尻の下で回転していた小さな突起物は、椅子の内部へ沈んだ。

「フフフ……さあ、おたべ。オートミルは、もうすこしだ。このオートミルには、栄養がたくさんはいっているから、少量で十分なんだよ。美容食でもあるんだ。それでは、つぎにミルクをのもうね」

Qの手が保温器にのびて、哺乳びんをつかんだ。

読者ギャラリー　『妊婦用被虐ランチ・タイム』　須田　旭



だ。

ちばん傷つけたのが、その哺乳びんだったの

ライドを、い

美香は目をとじた。美香のプ

肉がひきつれた。手足を拘束された上に、男の手から哺乳びんにはいった屈辱に、美香の全身られる、というミルクをのませは氷のようになった。

百八十ＣＣ入りの哺乳びんの先端に、シコが、ゴムの乳首をとりつけた。そして、Ｑに手渡した。

「さあ、もう一度、口をあけて。アーン」

Ｑは腕をのばして哺乳びんの乳首を、美香の口もとに近づけた。

美香は、目をとじた固い表情のまま、唇をひらかない。

「そうかい、まだ、わからないのかい。しようのない赤ちゃんだねえ。それじゃまた……」

Ｑの右足が、かなり強くペダルを踏んだ。

「ぐうッ！」

という声をあげて、美香は背骨をのけぞらせた。

椅子の下の突起物が、激しい回転と共にせりあがってきて、こんどは美香のパンティを突き破ったのだ。

屈辱だけではすまされなかった。恐怖が、脳髄までつらぬいた。

「のみます、のみます！」

美香は、うわずった声で、あわてて叫んでいた。水鳥のように白いのどがのびて、ふくらんだ。その白いのどの周囲に、粘りけのある汗が光っている。あぶら汗だった。十七歳の汗は、すでに女のにおいを発していた。すくなくとも赤ン坊の、においではなかった。

「フフフ……」

と、Ｑは目を細めて笑った。そして、ペダルにのせた足をひくと、グラスのブドウ酒をうまそうにのみほした。

十七歳の赤ン坊は目をとじ、おそるおそる唇をひらいた。白い歯が可憐だった。

Ｑは、哺乳びんの先端を、その唇のあいだにさしこんだ。それは、どこか性的な行為を連想させた。

口腔内にあまいミルクの香りが充満し、それまで拒否していた美香だったが、こんどはむさぼるように、のみはじめた。

のどはかわいていたし、ますます空腹になっていたので、ミルクはやはり美味だった。

たちまちのうちに、美香は百八十ＣＣのミルクをのみほした。もっと欲しい気持になっ

た。しかし、それは言えない。

「フフフ……よくのんだね。だいぶおなかがすいたとみえる。それでは、つぎにビスケットとジュースだ」

Qの手がジュースのコップにのびると、もう美香は口をひらいていた。

Qはコップのふちを、美香の唇に寄せた。

のどを鳴らして、美香はアップルジュースをのんだ。やや酸味が強く、気が遠くなるほどの、うまさだった。

ほとんどひと息に、美香はジュースをのみほした。数個のビスケットも、音をさせながらたべた。

「フフフ……食欲がさかんだね。だけど朝食はこれでもう終わりだよ。量はすくないけれど、カロリーと栄養は、ちゃんと計算されているから、これで十分なんだよ。おいしかっただろう。この夢の城の調理士は、世界でも一流だからね」

いいながら、Qの足がまた軽くペダルを踏んだ。

「うッ！」

とうめいて、美香は背筋をのばした。ふいをつかれた美香は、ショックで気が遠くなりかけた。

Qとしては『これでおしまい』といったような、軽い気持で踏んだのだが、美香には慣れることのできない苦痛だった。

しかし、Qはすぐにペダルを放した。

「よろしい。シコ、お嬢さんを、さきにベッドまで運んでいきなさい。きょうは午前中だいぶ運動をしたから、午後は静かに寝かせておくとしよう」

「かしこまりました」

シコは、こたえた。

「わたしは、ひとりでゆっくり食事をするとしよう」

「それで、あのオシメはどういたしましょうか？」

シコはきいた。

「オシメは、しなくともよい。美香の部屋に移動トイレを運ばせておきなさい」

Qは命令した。

「はい、かしこまりました」

シコは不満だったが顔にはださず、ていねいに一礼した。

そういつもオシメばかりさせていては、かえってそれに慣れて、羞恥心がうすれてしまう。Qは、そのことを心配したのだった。

羞恥心のない、ずうずうしい女になってしまったら、美香がいくら美少女であろうともう魅力はない。それでなくとも、Qは飽きっぽい男なのだ。

びんで運ばれてきた白ブドウ酒の、ほとんどをQは、のみほしていた。

やがてQの目の前に、一キログラムはありそうな巨大なピンク色をした焼きたての肉が運ばれてきた。血のしたたりそうな厚い肉のかたまりである。

しかしその肉は、牛でも豚でも鶏でもなさそうだった。Qは、その豪快な肉塊に、ナイフをいれ、フォークを突き立てた。

Qの朝食はゆっくりと時間をかけて、これから始まるのである。

## 快楽への招待

たっぷり一時間以上を費して、朝食とも昼食ともつかない食事を終えたあとで、Qは自分の部屋へもどり、ベッドへひっくりかえって二時間ばかり熟睡した。

目をさましたQは、パジャマ姿のままでサイドボードの上にある電話機をとった。そして、ダイアルをまわした。

相手が出るまでに、三十秒ほどの時間がか

かった。
「ああ、もしもし」
と、Qはいった。
「鴨上さんですか？」
「鴨上です」
と、電話のむこうで、おちついた静かな声がこたえた。
「鴨上幸助さんですか？」
と、Qはくりかえして慎重にたしかめる。
「鴨上幸助です。あなたは？」
と、相手の男も、慎重にいった。
「Qです。パノラマ島のQです」
やや声を低めて、Qはこたえた。
「ああ、Qさん」
と、鴨上幸助は安堵の声をだした。
「じつは、このあいだ、ちょっとお話した、新しい赤ン坊が誕生したことについて……」
「ああ、待ちかねていましたよ」
と、鴨上は、はずんだ声をあげた。
「基礎訓練は大体終わったので、そろそろ剃毛式をやろうと思うのですが、鴨上さんのご都合のほうは、いかがかと存じまして」
「ほう、それは楽しみだ。ちょっと待ってくださいよ。ええと……そうですね、今週いっぱいは予定がつまっていて、残念ながら動きがとれません。来週でしたら、一日、なんとか、からだをあけることができそうです。いや、Qさんのお招きでしたら、たいていの用事は、ほうりだしてでもお伺いしたいのですが、そうもいきませんので……」
鴨上は、軽く、品よく笑った。
「来週ですね、結構です。それでは、来週になったら、また電話をさしあげましょう。こんどは鴨上さんのお好みにぴったりの美少女でしてね、きっとご満足いただけると思いますよ」
「それはますます楽しみだ。いや、来週早々こちらからお電話をさしあげますよ。そしてはっきりした日を、お約束します。しかしこれは、いますぐにでも飛んで行きたくなりました」
鴨上は、また軽く声をあげて笑った。静かな口調だが、いかにも期待にみちた、楽しそうな笑い声だった。
鴨上幸助、六十五歳。鴨上工業株式会社社長。
鴨上工業は、資本金八百億円、年間売り上げ数千億円、全国に四十の工場と十万人の従業員を擁し、業界を代表する超一流会社である。
東京駅前、都心のど真中に、三十階建ての威容を誇る鴨上工業の本社ビル。
その十階にある社長室のデスクの上には、三本ほどの電話機が置かれてあるが、そのうちの一本が、交換台を通さないで、直接外線とつながるプライベートの電話機であった。つまり、他人を介さず、直接、鴨上幸助と、しゃべることのできる電話である。
この電話番号を知るものは、日本におよそ三十人、日本以外の国に二十人ほどしか、いない。
Qは、この秘密電話によって、鴨上幸助と話しあったのだ。鴨上が、いかにQを信頼しているか、この一事だけでわかる。
それは、ほかの者では絶対にあたえることのない、ぜいたくな快楽を、極秘のうちにQが鴨上へ提供しているためである。
Qは鴨上との電話を切ると、また眠くなった。なんだか眠い日である。
ベッドの上にからだを投げだすと、思いきり手足をひろげた。こんな動作をするときのQは、いかにも若々しかった。
目をとじて睡眠のポーズをとったが、すぐに思いついて、ベッドサイドのインターホンのスイッチをいれ、シコに声をかけた。

「はい、シコでございます」
すぐに、かん高い声が機械的にひびいた。
「美香はどうしている？」
「ベッドでおやすみになっておられます」
「もう眠ったか」
「はい、お眠りになったようでございます」
「オシメはしなかっただろうな」
シコが美香に対して抱いている嫉妬と復讐心を、Qはちゃんと知っている。
「おいいつけどおり、オシメはしませんでした。ネグリジェだけの、きわめて自由な姿で寝ていられます」
シコの返事は冷静である。
「そうか。よろしい。それでは反省室へ行って、女たちの縄を解いてやれ。あの女たちも腹がすいただろう」
Qは、インターホンのスイッチを切った。
そして、両眼をとじた。
しかし、鴨上幸助を招いての剃毛式の光景を思い浮かべると、もう興奮して眠れなかった。Qにとっても、楽しみの日である。その日がきた。
鴨上幸助は、供をひとりつれて、快晴のパノラマ島へ、ふらりとその品のいい痩身を現わした。
供というのは、三十歳前後の体格のいい、いかにも頭の切れそうな青年秘書だった。
Qは、その青年の労をねぎらうために〝夢の城〟のなかの女をひとり提供した。
相手にえらばれたのは、A子であった。A子は青年を案内して、二階の自分の部屋にとじこもった。ネグリジェだけの、きわめて自由な姿でいた。
美香の周囲には、極端に裾のみじかい白衣を着た三人の看護婦が、それぞれ手際よく、〝剃毛式〟の準備をしている。
三人の看護婦は、E子、F子、G子であった。この〝夢の城〟に住む美しい奴隷女たちである。
この日のシコは、さながら女医といった恰好で、さっそうとしていた。小柄なシコの肉体から、なにやら精気がほとばしるようであった。精気というよりは、怨念といったほうが適切かもしれない。もちろん美香に対する怨念である。
Qと鴨上幸助の姿が、室内には見えなかった。
しかし、Qと鴨上は、ベッドに縛りつけられた美香を眺めるのに、最も適した位置に坐っていた。

# 剃毛式

美香は、浴衣に似た裾の長い白衣を着せられ、その裾をすっぽりとまくりあげられていた。
これは、全裸にされるよりも、むしろ、羞かしいもので、
「ゆるして、かんにんして！」
美香はおびえ、しきりに哀願をくり返していた。
美香の周囲には、極端に裾のみじかい白衣を着た三人の看護婦が、それぞれ手際よく、〝剃毛式〟の準備をしている。
三人の看護婦は、E子、F子、G子であった。この〝夢の城〟に住む美しい奴隷女たちである。
この日のシコは、さながら女医といった恰好で、さっそうとしていた。小柄なシコの肉体から、なにやら精気がほとばしるようであった。精気というよりは、怨念といったほうが適切かもしれない。もちろん美香に対する怨念である。
Qと鴨上幸助の姿が、室内には見えなかった。
しかし、Qと鴨上は、ベッドに縛りつけられた美香を眺めるのに、最も適した位置に坐っていた。

美香が寝ているその足のほうの壁が、一面の鏡になっている。この鏡が、いわゆるマジックミラーであった。

Qと鴨上は、そのマジックミラーの裏側に据えてあるソファに腰をおろして〝剃毛式〟の始まるのを待っているのである。

この席からは、美香のかわいい足の裏が、すぐ目の前に見えた。まさしく〝特等席〟であった。

鴨上老人は、ご満悦だった。青年のように浮き浮きしていた。もともと血色のいい健康な老人だったが、さらにつやつやとした桜色の若々しい皮膚になっていた。

Qが言ったとおり、美香はQの好みにぴったり合った清潔な美少女だったからである。

「Qさん、あなたはまったく、わたしの好みを、よくご存知だ。あの娘だったら、わたしは百点満点つけてやってもいいよ」

すっかり上機嫌になって、鴨上はサイドテーブルの上のブランデーグラスを手にとり、背中をまるめて、なめるようにのみ始めた。

その鴨上老人の興奮状態をみると、Qもまた、妙に興奮してくるのである。

室内では、シコがまったく女医気どりで、看護婦姿の女たちに、あれこれと指揮していた。

美香の皮膚に直接手を触れて剃毛するのはシコなのであった。

「ゆるして、ゆるして、もうゆるして……」

きれぎれの声で、美香は哀願をつづける。

あばれたために、白衣の襟が大きく乱れて美香の乳房が、さらけだした。

そのふくよかな愛らしい乳房が、恐怖にあえいでいる。あおむけにされたために、乳房は、ややひらたくなっていた。そのひらたくなった乳房に、かわいい淡紅色の乳首が、ぽつりと、とがっている。

「お願いです、たすけて！」

大の字にされたまま、美香は、もがいた。いくらもがいたところで、手首と足首を縛りつけた革紐が、より力を増してくいこむだけである。

自分に襲いかかろうとしている非情な運命を、美香はまだ知らなかった。なんのために女たちが白衣をつけているのか、美香にはわからない。緊迫した空気が不気味だった。追いつめられたような気持で、美香は力のかぎり、もがくのだ。

Qが、テーブルの端についているボタンを押した。室内に、チャイムが鳴りひびいた。

それは〝剃毛式〟を開始せよ、というQの合図だった。

シコの顔が緊張して白くなった。めがねがするどく、光った。

シコの右手の指が、ベッドの下方についているボタンを押した。するとベッドは、わずかに震動を始め、きわめてメカニックな動き方を開始した。

美香の下半身が、じわじわと浮きあがり、ちょうど産婦人科の診察台のような形に、ひろげられたのである。

「ううう、ううッ！」

美香は腰に力をいれて抵抗し、恐怖のうなり声をあげた。

その声や物音は、精巧な集音マイクによって、鏡の裏側のQと鴨上がいる小さな部屋へ明確にひびく。

鴨上は、ますます背中をまるめ、ソファからのりだして、いよいよ開始された剃毛式を観賞するのだ。

美香の縛りつけられているベッドとマジックミラーとの距離は、わずか二メートルほどである。

半身を高く宙にさしあげたまま、ベッドの震動は停止した。

シコの合図で、E子がひげ剃りブラシにシェービングクリームをこすりつけた。それを白いカップのなかで、十分に泡立たせる。

E子は、ベッドの側面にまわると、そのブラシの泡を、美香にぬりつけた。

「ぎゃあッ！」

という悲鳴が、美香のどからふきあがった。美香にとって、これは不意うちだった。太腿から膝にかけて、猛烈にふるわせた。すきとおるように白い太腿の皮膚が、あざやかなバラ色に染まった。

この不意うちにも、美香は避けることができない。E子はていねいにブラシをこすりつけた。シェービングクリームのこまかい泡に美香は、まみれた。

その白く盛りあがった泡の上に、F子がむしタオルをのせた。

「うおッ！」

という吠えるような声をあげて、美香は白い腹を波うたせた。かなり熱い、むしタオルだったのだ。

しかし、まだ美香は自分の身に、なにがおきるのか、わからなかった。

G子がテーブルの上にカミソリを一挺用意した。シコが、そのカミソリを注意ぶかく手にとった。細い器用そうなシコの指だった。

美香の上から、むしタオルが静かに取り除かれた。

白い泡は、ほとんど消滅していた。

シコの手ににぎられているカミソリを、シコは見た。しかし、そのカミソリの使用意図を、美香は察することができなかった。

それは当然だった。これから〝剃毛式〟が行なわれるということなど、美香はすこしも知らされていなかったのだ。信じられないのだ。こんなことがあってよいものなのだろうか。

シコが、美香の目をみつめながら、冷静にいった。

「動かないでね。動かないでいたりすると、皮膚を傷つけてしまいますからね」

シコの胸は、残忍なよろこびにふるえていた。しかし、それを美香に、はるかに超えていた。わからないから、いっそう恐怖にだすことはゆるされるのだ。

美香の泣き顔にだすことはゆるされるのだ。

「動かないでね。動かないでいたりすると、皮膚を傷つけてしまいますからね」

シコの胸は、残忍なよろこびにふるえていた。しかし、それを美香に、はるかに超えていた。わからないから、いっそう恐怖にしめつけられるのだ。

美香の泣き顔にだすことはゆるされるのだ。

シコが、すこしタオルが静かに取り除かれた。

美香の上から、むしタオルが静かに取り除かれた。

白い泡は、ほとんど消滅していた。

シコの手ににぎられているカミソリを、シコは見た。しかし、そのカミソリの使用意図を、美香は察することができなかった。

それは当然だった。これから〝剃毛式〟が行なわれるということなど、美香はすこしも知らされていなかったのだ。信じられないのだ。こんなことがあってよいものなのだろうか。

シコが、美香の目をみつめながら、冷静にいった

読者ギャラリー　『皮革の乱舞』　黒田　縛

きこえる。

集音マイクによって、その音は、すべてQと鴨上の耳にとどいている。

「ひいッ、ひいッ！」

と、美香はしゃくりあげるようにして泣きだした。

鴨上は身をのりだし、その美香の可憐な表情と、しだいに剃り上げて行くカミソリとを交互にみつめている。唇は意志を失ってだらしなくひらかれ、よだれが流れだしていた。両眼だけが、異様な光を帯びている。

Qは、泣きもだえる美香の姿態に陶酔しながら、心の一方では、そんな鴨上の変化を、注意ぶかく観察していた。

いまのQは、ホストであるユーモラスではなく、まじめな顔でカミソリを動かしているシコも、鴨上を招いて、こんなショウを見せ、よろこんでいるQも、ユーモラスであった。いや、この〝夢の城〟もパノラマ島の存在も、すべて、ひどくユーモラスだった。性的なものの存在は、本質的に天真らんまんであり、ユーモラスだった。

それにしても、鴨上の反応は率直であり、人に快楽をあたえるという行為に、純粋なよろこびを感じる。

鴨上は早くも百二十パーセント、安心して溺れていた。それを見て、Qも満足する。他幸助を百パーセント溺れさせなければいけない。

鴨上は早くも百二十パーセント溺れさせていた。両眼だけが、異様な光を帯びている。

Qは、泣きもだえる美香の姿態に陶酔しながら、心の一方では、そんな鴨上の変化を、注意ぶかく観察していた。

いまのQは、ホストであるユーモラスではなく、まじめな顔でカミソリを動かしているシコも、鴨上を招いて、こんなショウを見せ、よろこんでいるQも、ユーモラスであった。いや、この〝夢の城〟もパノラマ島の存在も、すべて、ひどくユーモラスなのだ。

シコは、無事に仕事を終えた。

ていねいに剃ったのだが、時間にすれば十五分とかからなかった。

E子が、やわらかいガーゼで、残っている泡を拭きとった。青白い神秘的な皮膚が、幽遠な姿で現われた。

さらにF子が、ひげ剃り後の薬用クリームを、たんねんにぬりつけた。

マジックミラーの裏側で眺めていた鴨上老人が、思わず、

「ほう」

という感嘆に似た声を発した。そして、Qに顔をむけて、無邪気な微笑をうかべた。

Qも同じように無邪気な微笑を返した。この意志は通じたのの微笑だけで、ふたりの男の意志は通じたのである。

美香はもう、手足をひろげたまま、すすり泣くだけであった。ときどき白いのどが、ヒクヒクと病的にひきつった。

「無事に終わりました」

と、マジックミラーにむかって、シコが報告した。その声が、Qと鴨上の耳にひびく。

「よろしい」

と、Qはこたえ、シコに軽くうなずいてみせた。しかし、Qと鴨上の姿は、シコには見えない。

「いかがですか」

と、Qは鴨上老人にいった。Qには自信があった。しかし、鴨上の口から、改めて賞讃の言葉をききたかったのだ。

「いや、けっこうです。まことにけっこう」

鴨上は、のどぼとけをふるわせて言った。

「もちろんですとも。そのために、このパノラマ島へお招きしたのですからね。ただし、ご自由になさるのは、この〝夢の城〟のなかだけですよ。東京へつれて帰りたい、とおっしゃられても、それは困ります」

Qさん。東京へつれて帰りたくとも、わたしのほうでもできない。こんなことが世間に洩れたら、大変なことになるからねえ」

「そのかわり、このパノラマ島のなかでしたら、なにをされるのもご自由です。どうぞ、ごゆっくり」

ふたりの会話のあいだに、美香はベッドからおろされ、移動椅子にくくりつけられていた。目をひらいていたが、放心したような表情で、美香はされるがままになっている。

「さあ、起きてください、美香さん」

シコの声にすこし動いた美香の顔は、涙にぬれて白く光っていた。なにかの仏像を想わせるような、諦観しきった清純な顔だった。

覚醒剤を注射しなければいけないかな、とQは一瞬、思った。

Qは薬の力を借りることを、どんな場合でもなるべく避けるようにしてきた。しかし、きょうは特別だった。この工業界のナンバーワン、鴨上幸助のご機嫌をとりむすぶために、すこしぐらいの犠牲は、しかたがない。

シコに命じて、美香に注射をしよう、とQは思った。赤ちゃんになるのはいいが、人形になってしまっては、つまらない。人形はまったく抵抗しないからである。

## 白桃の蜜

この〝夢の城〟における最高級の客室は、四階にあった。

一流ホテルの、どんなに豪華な部屋よりも

ぜいたくな趣味と設備を凝らした、寝室とつながっている部屋だった。

寝室の中央に、巨大な船のようにどっしりと据えてある、ダブルベッドの上に、すでに美香は運びこまれていた。

淡いピンク色のネグリジェを着せられ、小さな花模様のついた愛らしいパンティをはかせられていた。つまり、ごくふつうの少女が寝るときの服装をゆるされているのだ。

ガウンに着替えた鴨上が、ドアをあけて室内に、はいってきた。ブランデーをのんで、わずかに酔っていた。

応接セットが置いてある居間を通り、寝室のドアをあける。

ベッドの毛布が、なまめかしい形に盛りあがっている。毛布の端から、美香の上品な形をした鼻筋がみえた。

その可憐な横顔がみえたとき、鴨上の胸に熱いものがこみあげ、両足の膝が立っていられないほど、しびれた。

こんなに期待し、興奮したのは、何年ぶりのことだろうか。

幸福だ、と鴨上は思った。だおうと、いまのわたしは幸福だ足を用心ぶかく踏みしめながらやいた。

ベッドに近寄って、鴨上は声をかけた。

「わたしの赤ちゃん、もう眠ってしまったかね」

美香は返事をしなかった。ベッドのなかで四肢を固く縮めていた。

さっきシコに剃られた屈辱に、まだ神経が集中していた。痛くはなかったが、気のせいか、ヒリヒリしているような気がした。

ショックだった。羞恥にまみれ、美香は、ほとんど絶望的になっていた。

「赤ちゃん、こっちを向いておくれ。赤ちゃん、そうだ、名前は美香ちゃんといったね。いい名だ。美香ちゃん、こちらをお向き。わたしがかわいがってあげよう。こわいことなんか、なんにもないんだよ」

業界切っての超一流会社の社長が、うす気味の悪い猫なで声をだして美香をよぶのだ。

それでも美香は、背中を石のように固くまるめて、こたえなかった。

鴨上は、美香のかだらの上にかかっているクリーム色の毛布をめくった。

淡いピンク色のネグリジェに身を包んだ美香が、いっそう四肢を硬直させる。

「おお、かわいい寝巻を、着ているね。だけど、わたしは、そんなものは嫌いだ。赤ちゃんは、そんなものを着ないほうが、よっぽどかわいいんだよ。この部屋は、美香が裸になっても風邪をひかないように、ちゃんと温度が調節してある。だから、そんなよけいなものは、早くぬいだほうがいいよ」

鴨上老人の手が、美香のネグリジェのホックにのびた。そして強引に、左右にひっぱった。プツン、プツンという、はじけるような音がして、それは、かんたんに、ひらいた。

「ああ」

抵抗しようとしたが、美香にはもうその気力がないのだ。手足の関節がはずれてしまったような無力感に支配されていた。

「赤ちゃん、わたしの赤ちゃん、さあ、こちらをお向き。わたしに、そのかわいい顔をみせておくれ」

鴨上は、美香のかたくまるい頬におそるおそる指さきを触れた。すべすべしていて、うっとりするほどやわらかく、弾力があり、若さそのものの頬だった。

ふいに、あらあらしい青年のような激情が鴨上の血のなかに沸いた。

「赤ちゃん、あああ、わたしの赤ちゃん！」

あえぎながら、細いしわだらけの指が、小

さな花模様のパンティにかかっていた。
「ああ、ゆるして、たすけてッ……」
赤ン坊というよりも、美香は巨大な果実になった。皮をむかれた白い果実だった。
新鮮な甘汁がいっぱいつまっているその果肉に、鴨上老人は齧りついた。
「ぐうッ！」
と、白い果肉は反転してもだえた。それまでぐったりしていた肉体が、鴨上の攻撃に反応して、よみがえったのだ。注射が効いてきたのかも知れない。本能的に美香はその危険を知っている。
「お願いです、やめて、やめてください……ああッ……う、ううッ！」
この白いあたたかい果肉は、どこをたべても新鮮で、甘美な味がする。
鴨上老人は、ますます興奮し、夢中になった。上から下まで、のどぼとけを鳴らしながら、なめはじめた。
老人の舌は灰色で、異様に長かった。その長い舌を、なにか爬虫類の動物の触覚のようにのばしていた。
灰色の長い舌は、首をふって逃げる美香の唇の上をなめまわし、耳の穴のなかに、さしこまれ、耳たぶを歯で噛んだ。さらに、のどから乳房へと、おりていく。
「ああ、いやッ、いやッ、もう、やめて……ああ、たすけて、お願いです、あッ、あッ、ゆるしてえ！」
美香の両手が本能的に肌を守って、老人の舌の攻撃を防ぐ姿勢になる。
「じゃまだ。その手を、どかしなさい」
首を横にふって、老人がいった。
しかし、その手をはなせば、灰色の舌は、当然ねらって責めたててくるのだ。本能的に美香はその危険を知っている。
「しょうのない赤ちゃんだねえ。それでは、このじゃまな手を、くくってしまうよ」
老人は、ベッドの枕の下から、縄の束をとりだした。これは、あらかじめQに言われていた段取りであった。さっき鴨上の耳に、Qはそっと、ささやいたのだ。
〝すこしでも抵抗したら、すぐに縛っておしまいなさい。縄は枕の下に、手頃なのを用意してあります〟
鴨上老人は、縄の束をくるくると解いた。そして、もう一度、美香にいった。
「その手をどかしなさい。いうことをきかないと、この縄でくくってしまうよ」
しかし、美香は老人に背中をむけ、前からだを折って最後の抵抗を示した。
鴨上のくぼんだ目に、卑猥な色が走った。こうこなくては、おもしろくない。あまりに素直にされては、おもしろくないのだ。適当な羞恥、適当な反抗、それが老人の心をかきたてる。
鴨上は、美香の細い手首をつかむと、背後にねじりあげた。もう片方の手首をつかみ、ひとつにすると、縄で縛りはじめた。
老人とはいえ、男の力だった。しかも鴨上は、ベッドの上にとよじのぼって、生き生きとその作業を始めたのだ。
「ああ、いやッ、やめてッ……うう、痛い、やめてください、たすけてッ！」
しかし弱いものだった。もう片方の手首をつかみ、美香の抵抗は、しかし弱いものだった。さっきの〝剃毛式〟の衝撃は、美香にとって、あまりにも大きかった。
老人は、手首をくくり合わせた縄を前にまわし、乳房の上へかけてひきしぼった。かんたんなうしろ手縛りだったが、美香の上半身の自由は完全に奪われた。老人の手つきは、きわめて不器用だったが、熱心にそれをやった。
老人の攻撃を防ぐ美香の手は、背後に強く

縛りあげられてしまったのだ。その意味で、美香は赤ン坊になってしまった。

「ひひひひ」

と老人は、うれしそうに突きだした、のどぼとけを鳴らした。

鴨上幸助の尊厳で柔和な表情は消え、情熱的な好色老人の顔になった。

美香はうつぶせになろうとして、最後の力をふりしぼった。絶望の心と、抵抗しようという決意が、美香の内部で交互にくりかえされる。

老人は、両手でしっかりと美香をおさえつけ、再びその清潔な果実に襲いかかった。

「あ、ああッ、ううッ、や、やめてッ、たすけて！……ひいッ、ひいッ！」

美香は大きく、のけぞった。

老人は惑溺し、犬のように鼻と口をうごめかせた。老人の顔は、自分のよだれと唾で、もう、ぐちゃぐちゃに、ぬれていた。

「う、う、う……わたしの赤ちゃん、あゝん……かわいい、かわいい赤ちゃん……赤ちゃん、あゝん……かわいい、かわいい赤ちゃん、あゝん……かわいい、かわいい……」

たまらない、かわいい……」

よく見ると、鴨上老人の目からは、涙がでているのだった。涙とよだれと唾が混然となって、老人の顔は、べとべとに光っていた。

海中にもぐった海女が、ときどき水面に顔をだして呼吸するように、老人はこの素晴しい果実から鼻と口を放し、首を横にふってうめくのだ。

「美香……わたしの美香……かわいい、かわいいよう……美香、わたしの赤ちゃん、わたしの美香！」

鴨上幸助の頭脳から、いまは一片の理性も消え失せていた。

理性というものがひとかけらでもあったらに焼けただれた。そのくせ、手足のさきは、つめたく死んだようにしびれている。

この快楽の波に溺れきることはできない。

もう駄目だった。美香は心を閉じ、熱いが事業の鬼とよばれて恐れられている鴨上幸助の、これが裏側の姿なのだった。この徹底した惑溺の時間があるからこそ、年間売り上げ数千億円の仕事が、できるのかも知れなかった。

しかし、いけにえに供された美香のほうは失神寸前にまで追いつめられていた。

両手を背後に縛られたまま、十七歳の全裸の美少女は、広いベッドの上でのたうちまわった。しかし、やがて体力の限界がきた。

美香は疲れ、肩の力をぬいた。腕の骨がぬけるようにだるかった。折りまげ、突っぱっていた足の抵抗もやめた。もう声もでなかった。

暗い、深い穴のなかに落ちこんでいった。

鴨上老人は、舌なめずりしながら、ゆっくりと白い果肉を抱きしめた。

うふふふ、これからだ、これからだ、これから、本当の楽しみが始まるのだ……。

老人の目の前に、恍惚と陶酔と、そして痴愚の世界が横たわっていた。

その世界へ、さらに深く沈むための行動を老人は、そろそろと開始した。

――（完）――

――〇――

〈編集部より〉六回に分載しました「パノラマ島秘譚」は、本号を以て、完結致しましたが、藤見郁氏のバトンタッチを風流極道軒氏にお願いし、九月号より『紫蘭の門』を新連載の予定です。御期待下さい。

# 力メラ・ルポ

# Mの天使とその瞳

塚本鉄三

一年中で一番よい季節である五月を迎え、身も心も伸々と羽を拡げたい気持である。

「この頃、塚本鉄三はカメラ・ルポを書かないが、一体どうしているのだ」という愛読者からの便りを見せて貰った。案外、隠れたファンもあるものだなァと感心した。

編集部宛で来ている、そうした通信をわざわざ私に見せて呉れたのも、多分に私にルポを書いたらどうだという勧めもあってのことだろう。

そう改って言われてみると、しばらく御無沙汰していた私も、なんとなく腕がもぞもぞしてきて、書いてみたくなってくるから不思議である。

いざ書くとなれば、決して書く材料には事欠かないつもりである。

緊縛写真の方は折にふれて、結構写すことは写しているのであるから、ここ一年ぐらいの期限を切って数えてみても、相当の枚数に達している。だが、緊縛写真を写される御本人が、若し告白の文章を書かれるというのだったら、私は大賛成である。

これは誰でもというわけには参らないが、筆の立つ方だったら、大いに書いて欲しいものである。

一時、「書きますわよ」という言葉がはやったことがあったが、M女性がM女性の立場から告白の文章を書くということは、Sファンの男性としては大変参考にもなるし、又楽しみでもある。

私が『片えくぼのマリア』と題して書いたルポの主人公、川路叢子さんも「私は文章を書くのが好きだから、今までの経験を書いてみますワ」と言っていたので、私も大いに期待していたのだが、実際のところは、私のカメラルポや辻村氏のカメラハントの主人公に

この原稿を書いている現在、まだ七月号は発売になっていないが、荒尾慶子（あらおけい）さんという美しい若妻の方が告白を書いていらっしゃれるということを聞いて非常に嬉しく思った。

荒尾慶子さんは、淑かな近代的美人であるばかりでなく、素晴しいプロポーションの女性なので、こういった方が堂々と告白の文章を書いて下さるということは、写真を撮影する立場にある私達も大いに愉快になるというものである。

辻村氏のカメラハントで大活躍をした谷山久美子さんから、「五月の連休は身体があいているから、ぶっ続けで責め抜いて頂いて、写真を撮ってほしい。どんな厳しい責め方でも辛抱する」という便りを貰った。

彼女をモデルにしたなら相当烈しい責め方でも可能だと食指が動いたのだが、残念なことには、私はすでに今年の一月頃からの予約があって奥能登方面への観光旅行に同行することになっていたので、折角の彼女の依頼に応ずることが出来なかった。

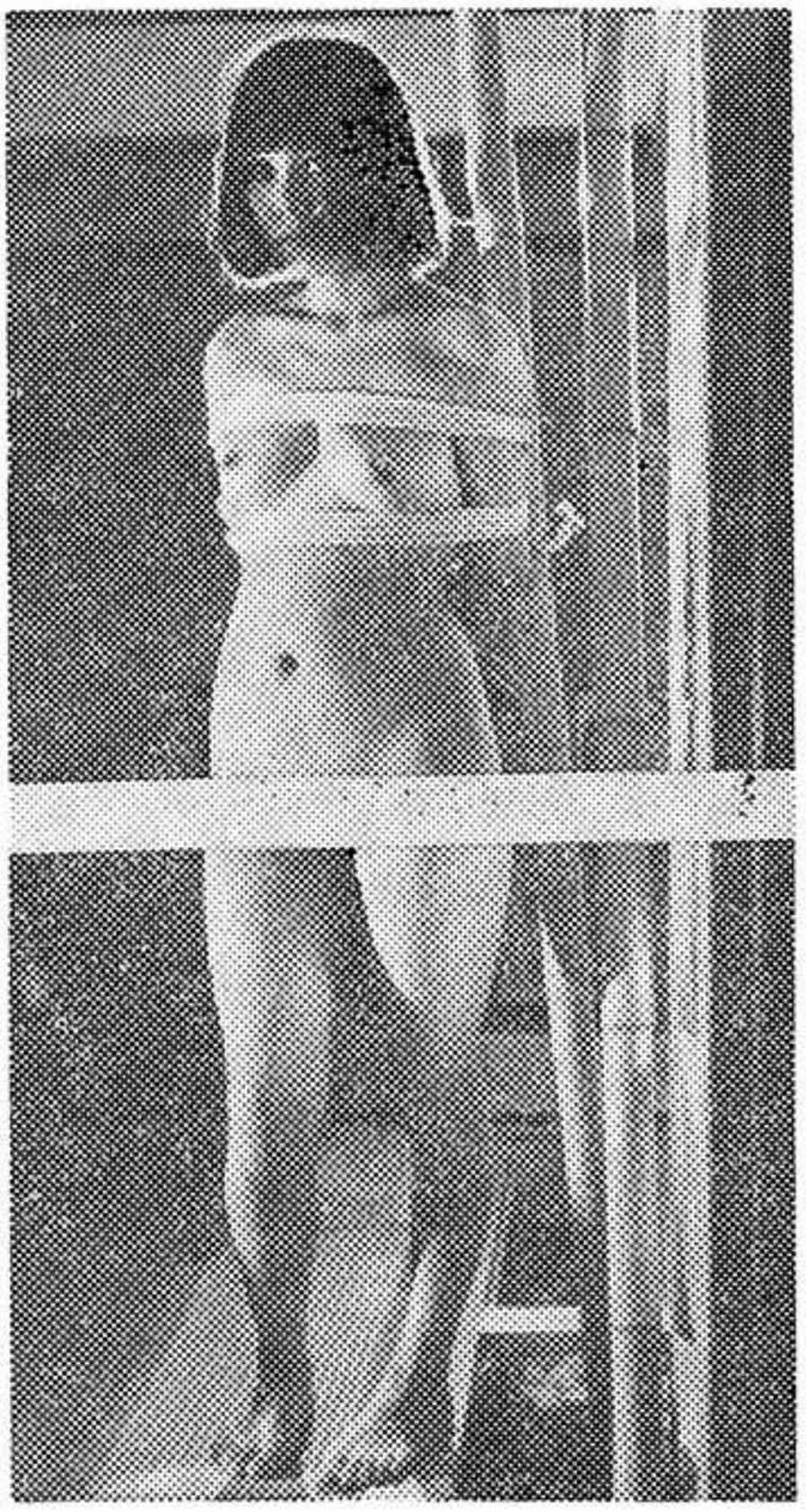
谷山久美子さんといえば、この前に責め写真を撮影したとき、彼女の依頼は、「私はオバアちゃんだけど、やはり女性なんですもの美しく写して頂戴ネ」ということであった。

私はライティングに工夫をこらして、出来るだけ美しく写るよう苦心したのだが、仕上がった写真を見ると猿ぐつわに濡んだ彼女の表情は、まことにM女性らしく可憐に見えたし、送ってやった写真を見た彼女も大いに気に入ったらしかった。

先日の日曜日、私は所用で万国博会場の周辺道路を通って驚いた。夢よ再びというあの一年前の万国博会期中の雑踏が、今も繰り返されているのだ。聞くところによると、五十円の入場料で、日本庭園が開放されているとのことだったが、一日に百万人近くの観客が殺到して人津浪とまで言われた、あの日本民族のエネルギーを爆発させたような熱気がなつかしく思い出された。

万国博といえば、万国博見物で来日した北欧系の美人シーラー・ケニー嬢を緊縛し、そのルポを本誌に寄稿したのも、ほん昨日のことのように思うのだが、あれから早くも満一年、経ってしまったのだ。

アメリカ館、ソ連館をはじめ殆どのパビリ



オンは撤去されてしまっているが、太陽の塔や日本館などの一部がうらぶれた形で残っているのが、当時のあの大盛況を知っているだけに一入淋しく眺められる。いつも万博会場の周辺道路を車で走る度に、そんな感じを受けるのである。

そして、アメリカへ帰ったケニー嬢はどうしているだろうか、とふと思ったりする。在米の奇クの読者の方から、「シーラー・ケニーさんのアメリカに於ける住所を知らせ」という便りが来たりして、一時は白人の美女を縛ったということで大変な騒ぎであったが、あれから勘定しても、大分の女性を責めたり縛ったりして写真を撮影したことになる。

沖縄美人の座間明子さんも忘れることの出来ない女性であったが、急な帰国という、アクシデントがあって、愈々これから本調子というところで立ち消えになったのは惜しい。

渡部好美夫人や三浦純子夫人の写真を撮ったのも、思い出の一つだが、好美夫人の御主人である光雄氏から、「カメラ・ルポを書くのなら家内を提供するから、二人で共同で責めてみないか」と言われておりながら、未だに立派な告白の文章を書いておられるので、今更私の出る幕でもないだろう、という気持から食指が動かないのかもしれない。

そんなところへ、編集部から一つの取材を依頼された。

五月号の読者通信に載った、大阪市北区の深田菊子（ふかだきくこ）さんが、是非写真を撮ってほしいと言っているので、カメラ・ルポの執筆をかねて出張して呉れないかというのである。

なんでも、彼女は読者通信の反響で、大分方々の愛読者から通信を貰ったらしく、その人達に送るためにも、自分の緊縛写真が必要になってきたそうである。

私はまだ五月号に載った深田菊子さんの読者通信というのを読んでいなかったので、早速その個所を開いて見た。

○

私は二十二才になる女性です。羞恥責めの好きな若いS男性を求めています。私は自虐しか経験はありませんがSMは大好きです。文を書くのは苦手ですので私の好きな単語を並べてみます。仰臥、嗜虐、哀願、迸る、芳香などですが、単語だけでは、どうも無理です。やはり言葉でないと、私を知っていただけそうにありません。好きな言葉の羅列は、新鮮な尿の匂い、甘い快美感、ふくよかな股の内側、厚い牛皮の褌、自分の示す数々の反応、などです。変な女性でしょう。人色々といいますけど本当に変わった大阪女です。思いきって申し上げますと私を素っ裸に縛り上げて。どんな恥かしいポーズでもとる決心でいます。変なことを書きましたが、至って真面目です。（大阪市北区・深田菊子）

○

一読したところでも、Sファンの男性だったら、呼びかけてみたいという気のする読者通信である。編集部宛に送られてきたというカラーのスナップ写真を見せて貰う。真っ赤な超ミニのワンピースを着て咲きかけの躑躅の前で写したその写真は、露出も適度で綺麗な仕上がりであった。

そして身長一六三センチ、体重五三キロと言っている素晴しいプロポーションの女体がにこやかに微笑みかけているのだ。

「この読者通信に対する読者からの反響も大きくてね、彼女も驚いているそうだよ。でも彼女は全然文章を書く気がない、というより書けないんだね。だから、一つ君に読者を代表してルポしてもらいたいと思うんだ」

編集部から、そういった依頼を受けてみると、久々に私も重い腰を上げて書いてみようかという気持になった。

「世の中にたえて桜のなかりせば――」と古人も歌っているように桜の花の咲く季節になると、とにかく世の中があわただしくなる。

私も三月の末から四月にかけては、なんとなく忙しかった。

仕事ばかりではなく遊びも含めて毎日のスケジュールが、いっぱい詰まっていた。

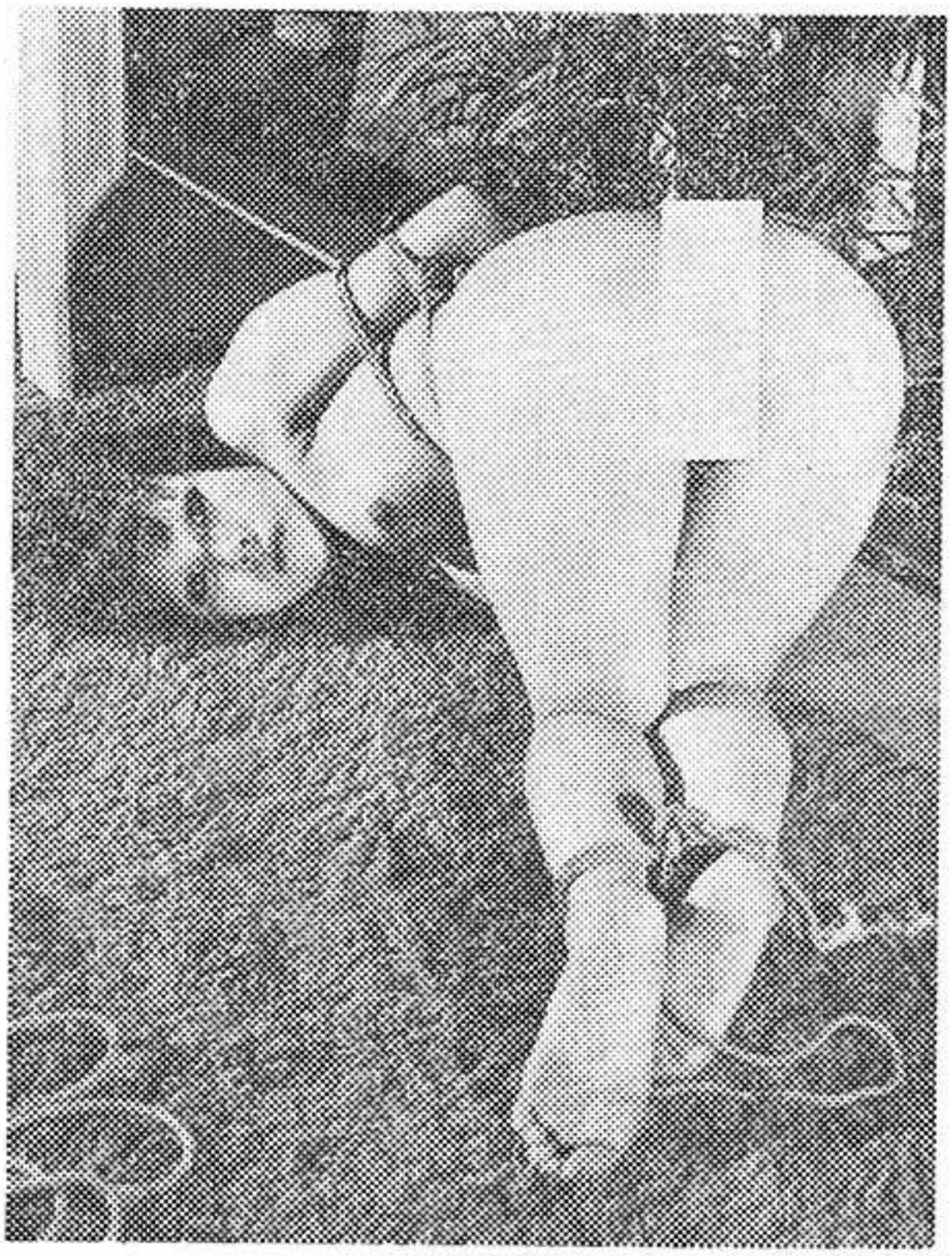
そんなわけで、編集部の方から「深田菊子さんの方はいつでも身体があいているそうだから、貴方の都合のよい日を知らせて呉れたら、直ぐ手配をする」と言われていたのだが、やっと閑をみつけて彼女と逢うことが出来たのは四月の中ば過ぎであった。

キタからタクシーで来た深田菊子さんを長居公園で待ち受けて私の車に乗り移って貰った。すでに編集部の手で段どりして呉れていたので、スムースに事が運んだ。

横縞の清楚なワンピースに色白で大柄な肢体を包んだ彼女は、際だって美しかった。

私はSファンの読者の方々に代って、彼女を縛り、責め、そして、彼女のそんな状態を写真にして報告する義務があるのだ。

先ず彼女の希望で、公園の中でスナップ写真を撮影した。気分的にも、しこりをほぐして、これからの責め写真撮影にも好影響を与えるので、私の方も野外でのスナップ撮影は歓迎である。



公園の樹々は新緑のしたたるばかりの若葉が陽に映えて、殊に樟の新芽がまばゆいほど美しい。車を園内の道路に停めて、躑躅の満開の花を背景にスナップする。

通りかかった若い男たちが、ピューピューとひやかしの口笛を吹いたり、弥次をとばしてゆく。通りすがりの人達にも、際立って、目立つ存在なのだろう。

私はシャッターを切りながら、彼女に男から言葉を掛けられたり、言い寄られたりしたことがあるかと聞いてみた。

「そんなこと、しょっちゅうなのよ。電車の中で悪戯されたり、あとをつけられたり。なかには、しつこく私の前に立ちふさがって、一緒にお茶を飲もうなんて誘う、あつかましい男もいるわ」

それだけ、また彼女は魅力的なのだろう。

「水着姿でも撮ってほしいと思って、水着も持ってきたの」と、紙袋を見せたが、公園では少し無理だし、まだプール開きには早すぎる。ここは室内で撮ることにする。

公園の中でカメラの前に立って、人がやかしが集まり、見物の人が冷ズをとっても、彼女は堂々とポーい。カメラ度胸、満点である。

水着姿にでもなりかねない彼女の態度である。いや、場合によってヌードにさえなりかねて、そうした方が人の集まりに辟易しさすがに、読者通うそうに車に彼女を乗せや文句として、『仰かう。

快美感』などという普通では一寸使わない言葉を挙げるだけの積極的な女性であると感心した。

車中で、いろいろと話しかけてみた。

満開の牡丹のような、あでやかな若い女性を助手席に乗せて走る私も、いささか面映ゆい気持である。

いずれは素っ裸にと考えるのだが、超ミニのワンピースの裾から真っ白い膝小僧をチラチラさせられると、やはり気になって仕方がない。

といって、彼女の方は全く天真爛漫、なんでも喋るし、饒舌でさえある。

雲雀の囀るような甘い声で楽しく喋る。プライベイトのことでも、自分の身体のことでも一切、隠すということを知らない。

純真というのか、純粋というのか。こういうのを汚れを知らぬ天使というのだろう。

これが今日的な若い女性の姿なのだろう。私達の若い時には、こうしたことは、一寸考えられなかったことである。若い女性の生理のことやセックスのきわどい話も、何の抵抗もなく喋るのである。

走り出して暫くして、トイレへ行きたいと言い出した。これも全く彼女らしい物おじしない態度で、はっきりと意志表示をする。

尿意を催したからトイレへ行きたいと言っただけの話で、遠慮することもないし、まして羞かしがる風も、さらさらない。

最寄りのドライブインへ立ち寄りコーラを飲む。彼女は一直線にトイレへ。

西名阪道路の料金所のゲイトを越すと、そこからはもう平面交差なしの制限最高速度70キロの快適なハイウェイである。

駱駝の背のような二上山のなだらかな起伏が斜め右前方、指呼の間に眺めることが出来る。大阪府と奈良県の境も、もうすぐ目の前である。

緑に映える山が、ぐんぐん迫ってくる。

読者通信では二十二才と書いていたが、満でいうと二十才、今年、成人式を迎えたばかりだという。

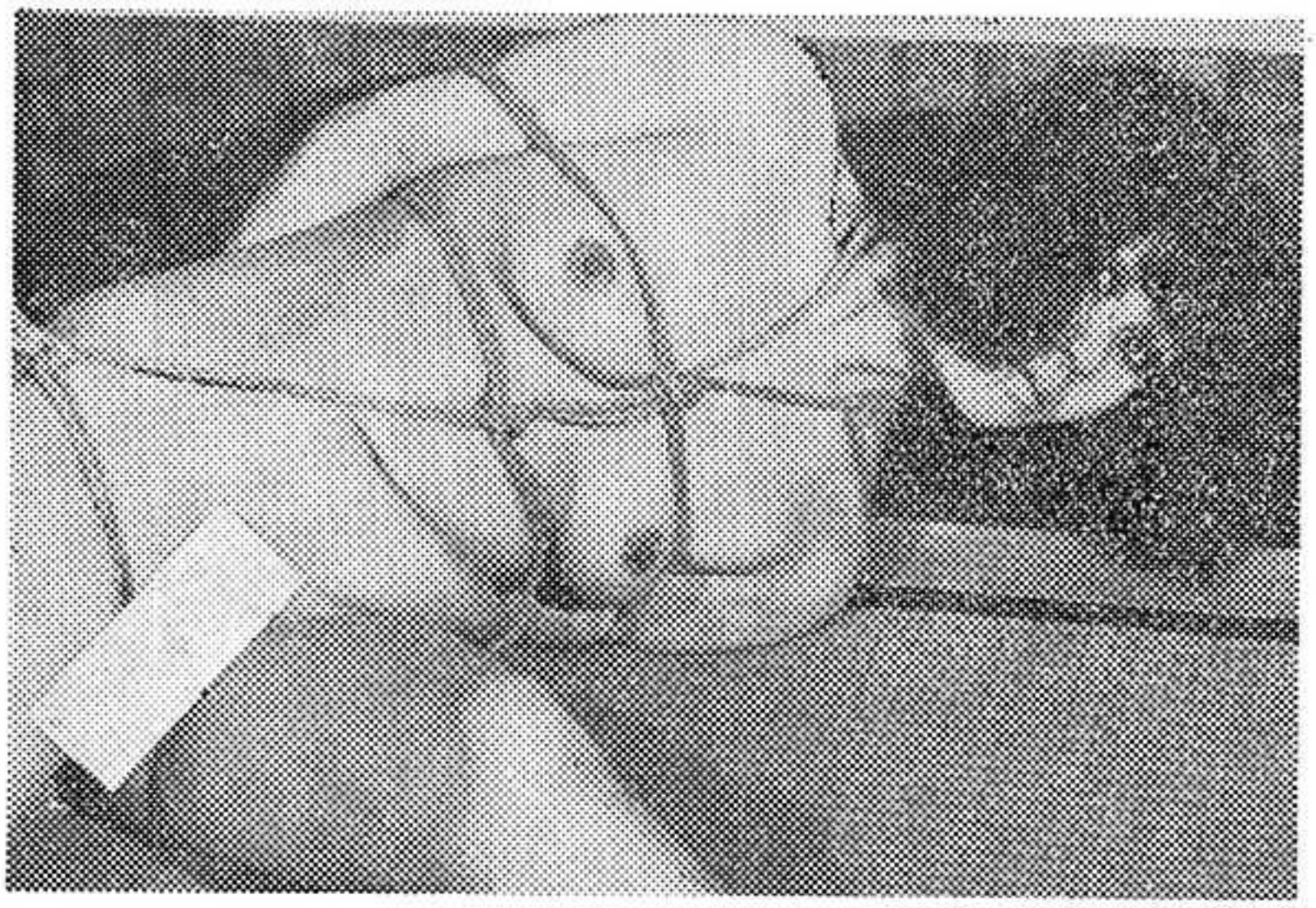
大阪生まれの大阪育ち、生粋の大阪女だという深田菊子は、大阪市内のことだったら、よく知っているが、他の都市へは余り行ったことがないので、よく知らないという。

高校を出てからビューティスクールに半年ばかり通ったので、そこでお化粧の仕方など習ったという。円らな瞳に、ツケマツ毛が鮮かなのも、そのせいであろう。

色が白く、肌が若々しくてなめらかなので特別に厚化粧する必要もないほどなのだが、それでも、おカッパにしたソフトタッチのしなやかな毛髪にも目立たないが、なにがしの手を加えているのだろう。

ボーイフレンドは沢山あったし、白人のフレンドもあったという。

貴めや縛りもセックスの中の一つのフィーリングだという彼女。



大胆で奔放、快楽主義者の手本のような女性だが、それだけに洋装の着こなしや化粧には個性的なセンスがあり、身だしなみも清潔で好感が特てる。

奇クは今年の二月に初めて手にして興味を持ったとのこと。

自分の主張をはっきりと前面に打ち出す彼女の態度は、なかなかしっかりしている。初対面の私に対して自分の身体の性感帯のことなど、顔赤らめることなく、極めて事務的に喋る態度なども、二十才の若い女性らしくないのだが、聞いている私には、それも純粋にみえる。

私のような大正生まれの者には二十娘の心理や態度が一見して不可解に見えるのだが、彼女等には、それがあたりまえで、戦前派の行動こそ、不思議きわまりないものに見えるのかもしれない。

私は今年の二月、一人の二十娘にひっかかって、ひどい目にあったことがある。

年甲斐もなく助平心を起こした上での失敗談なので口にするのも恥かしいのだが、カメラハントやカメラルポが、いつも成功ばかりとは限らない証左に一つ書いてみよう。

その日は風が強くて寒い日だった。

曽根崎の料亭で会合があって、おひらきになったのが十時過ぎ。表通りへ出てタクシーを拾おうとしたが、あいにく、その時刻では空車は通らない。

仕方がないので、ぶらぶら歩いて大阪駅の方へ向かった。あきらめて地下鉄に乗る者、駅前のタクシー乗場へ行く者、阪神電車に乗

ろしい。だが、キャッチガールというのは看板娘だけあって、みんなそれ相応に美しい。だから、トゲのある美しいバラとわかっていても、つい引っかかってしまうのだ。

しかし反面、この危険で美しい毒花の中に凄いアバンチューがあってもひそんでいる事も多いのだ。殆ど客がいない。

五人ばかりの若い女が手持無沙汰にたむろする一軒のバーへ入った。

いずれの女も若くて綺麗に見えたからだ。

よき鴨ござんなれ——とばかり、五人の女が殺到したが、私は一番若くて美しい手前から二番目の女に、ビールを注文した。

背は余り高くはないが色が白い。

身体中を締めつけたような、きりっとした着物の着こなしは一分の隙もない。

歯切れのよい言葉は、どうやら大阪弁ではないらしい。

齢は二十才か一か、多くても三は越していないだろう。

着物の中にかくされた彼女の裸身をいろいろと想像して私は生唾を飲みこんだ。

胸が大きく膨らんで胴でぐっとくびれ、そして、お尻がぷりぷり躍動している——。

「どうだい、写真のモデルを探しているんだ

る者と、そのあたりでバラになった。

私は一人で阪急駅裏の歓楽街へ向かった。

どうせ帰りはガード下にたむろしている雲助白タクで家まで帰るつもりだったので、もう一杯飲んでゆこうと思ったのだ。

「おコーヒー一杯飲んでいって——」

と、うるさくつきまとうのはキャッチガールか、こんな女に連れ込まれたら常識的にはつまらぬ散財になってしまうことが多い。

散財のうちはいいが、変なのに引っかかると腕時計から背広まで取られてしまうから恐

一軒のバーに連れ込まれた。

この時は、まことに男性天国の名に恥じない超サービスぶりで、あらゆる快楽を満喫したばかりでなく、帰り際に「あしたのお昼、ここへ来て。待ってるわ」と云って渡されたアパートの住所へ、翌日、のこのこと半信半疑で訪ねてみると、ちゃんと昨夜の彼女が居るではないか。

「私、ひとりでいると淋しくてかなわないのよ。特に雨の降る日なんか——」

と、囁きかける、そのキャッチガールの猛

が、一つ、なってみないかい」

思わず商売意識をまるだしに、私は言葉を口から出していた。その前に、お世辞にでも、彼女の身体のことを、素晴しいとか美しいとか賞めてから、そんな言葉を吐けばよいのだが、アルコールが頭の中に回ってくると、どうも、そんな回りくどいことが面倒になって単刀直入になってしまうのだ。

「あら、私、お昼は絵のモデルをしてるの」

「その絵のモデルというのは、ハダカなんだろうネ」

「もちろん、素っ裸よ」

これで話が面白くなってきた。

そこで私は、私の求めるモデルは単なるヌードではなくて、〈縛り〉を伴うものであることを説明したところ、「そんなの平ちゃらよ」というわけで、忽ち意気投合した。

私が非常に乗気なのを見すまして、彼女は一つの提案をしてきた。

「明日一日、私の言うことを聞いてくれたら明後日の一日は、私は貴方の言うことなら、なんでも聞くわ」

と言うのである。

「貴方の言うことなら、なんでも言くわ」なんという、うまい殺し文句だろう。

この殺し文句で、私は彼女の申出を全面的に快諾した。多分に私も酔っていた。

その翌日の午後。

待合せの喫茶店に彼女は先に来て待っていた。昨夜の和服とはがらりと変わった洋装でどこのお嬢さんかと思うほどの情楚な美しさである。お化粧も余り、どぎつくない。

今日一日は彼女の言う通りに行動するという約束なので、私は彼女に主導権を譲って、行先も彼女に一任した。

先ずタクシーで松坂屋へ行き、イタリヤ製の靴とシルバーゴールドのネックレスを買った。心斎橋をぶらぶら歩いて芝翫香でフランス製だという小さなハンドバッグを買う。

青い城で夕食。

食事を終えて外へ出ると、すでに外は暮れていてネオンが、またたいている。

大阪の夜の街をドライブするのだといってタクシーを拾って、あてもなく三十分ばかり走らせて、再び出発点の大阪駅へ戻った。

明日、再び同じ喫茶店にて落ち合うよう約束をして中央コンコースで別れた。

その翌日、約束の時間になっても、待てど暮せど彼女は喫茶店に現われない。

バーに電話しても留守の者では要領を得ない。その殺し文句で、私は彼女の申出を全面的に快諾した。多分に私も酔っていた。

その翌日の午後。

待合せの喫茶店に彼女は先に来て待っていた。昨夜の和服とはがらりと変わった洋装でどこのお嬢さんかと思うほどの情楚な美しさである。お化粧も余り、どぎつくない。

今日一日は彼女の言う通りに行動するという約束なので、私は彼女に主導権を譲って、行先も彼女に一任した。

先ずタクシーで松坂屋へ行き、イタリヤ製の靴とシルバーゴールドのネックレスを買った。心斎橋をぶらぶら歩いて芝翫香でフランス製だという小さなハンドバッグを買う。

青い城で夕食。

食事を終えて外へ出ると、すでに外は暮れていてネオンが、またたいている。

大阪の夜の街をドライブするのだといってタクシーを拾って、あてもなく三十分ばかり走らせて、再び出発点の大阪駅へ戻った。

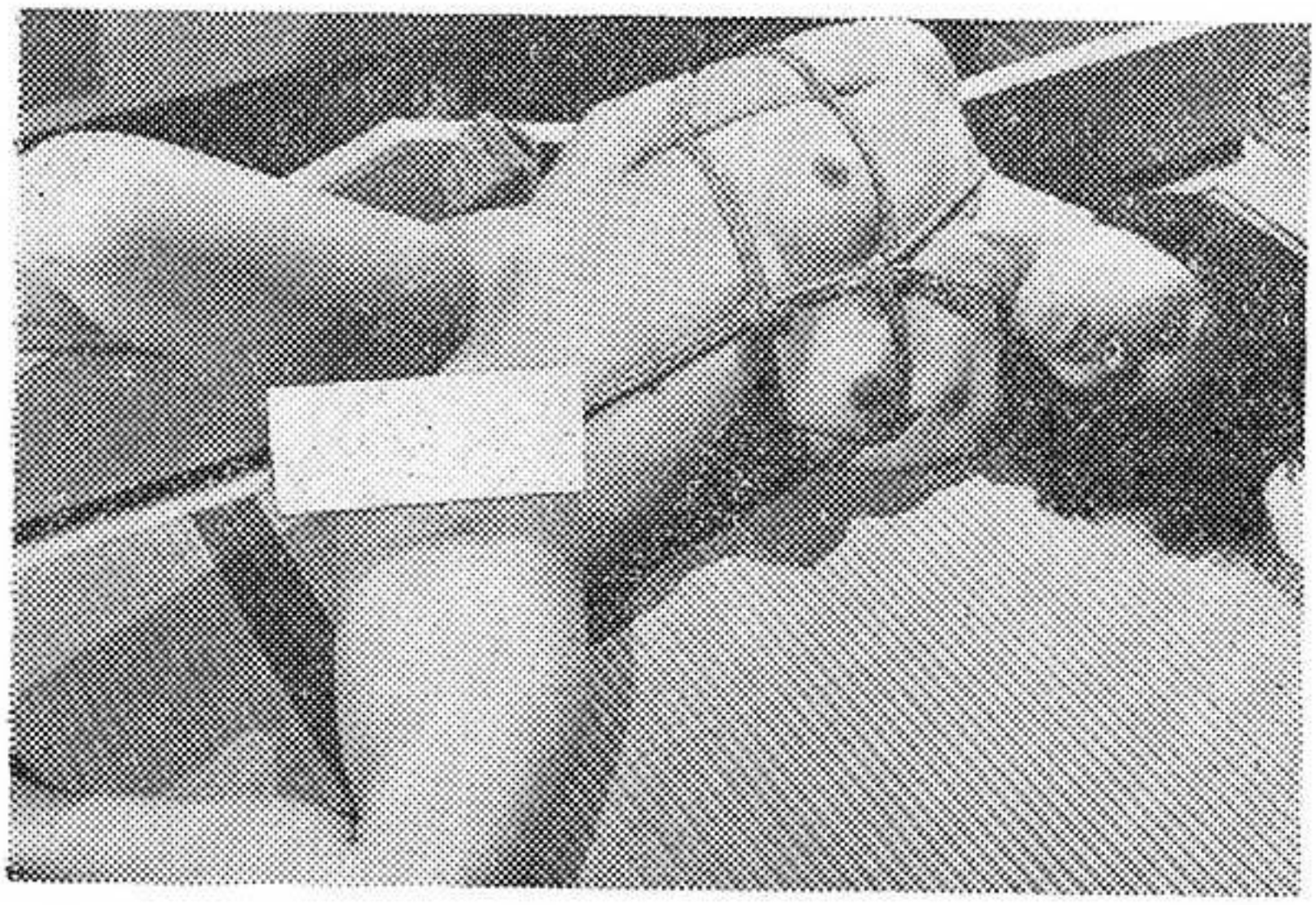
明日、再び同じ喫茶店にて落ち合うよう約束をして中央コンコースで別れた。

その翌日、約束の時間になっても、待てど暮せど彼女は喫茶店に現われない。

バーに電話しても留守の者では要領を得ない。その夜、ママに聞いてみると、彼女は私が行った夜限りで店はやめて、今は東京へ帰っているという返事である。

「やられた！」と思ったが後の祭である。

鼻の下の長いオジサマ族を欺まして、彼女は東京行きの列車の中で、にんまりと微笑んでいたことだろうと思う。



二十娘の手練手管に完全にしてやられたお粗末な失敗談の顛末であるが、「私の言うことは、なんでも聞いてほしい」という要求の実際コースが、小娘らしい質素さであったのが、余り過大に要求してはインチキがばれるとでも思ったのか、もしそうだとすれば、大した知能犯であるといえる。

閑話休題。

さて、話を深田菊子さんの方へ戻すとしよう。同じ二十娘にしても、菊子さんの方は、住所氏名もはっきりしていて信用のおける人だから安心である。東京から流れてきたキャッチガールと同一視することは出来ない。

大阪生れの大阪育ち、生粋の大阪女だと彼女は自称していた。そして、読者通信の中でも「私って変わった女でしょう」と一風変わった自分の性癖を自覚しているような口ぶりではあるが、一向に飾り気のない風である。

言葉つきは純粋の柔らかな大阪弁で、私の耳に何の抵抗もなく、快く響いてくる。もっとも私は東京生れで、決して大阪生れではないが、若い女性の大阪弁は、当りがやわらかくて、聞いていて心なごむ思いがする。

西名阪有料道路の終点である天理で料金を支払い、名阪国道の山道を暫く走ると、目指すモーテルは、すぐである。

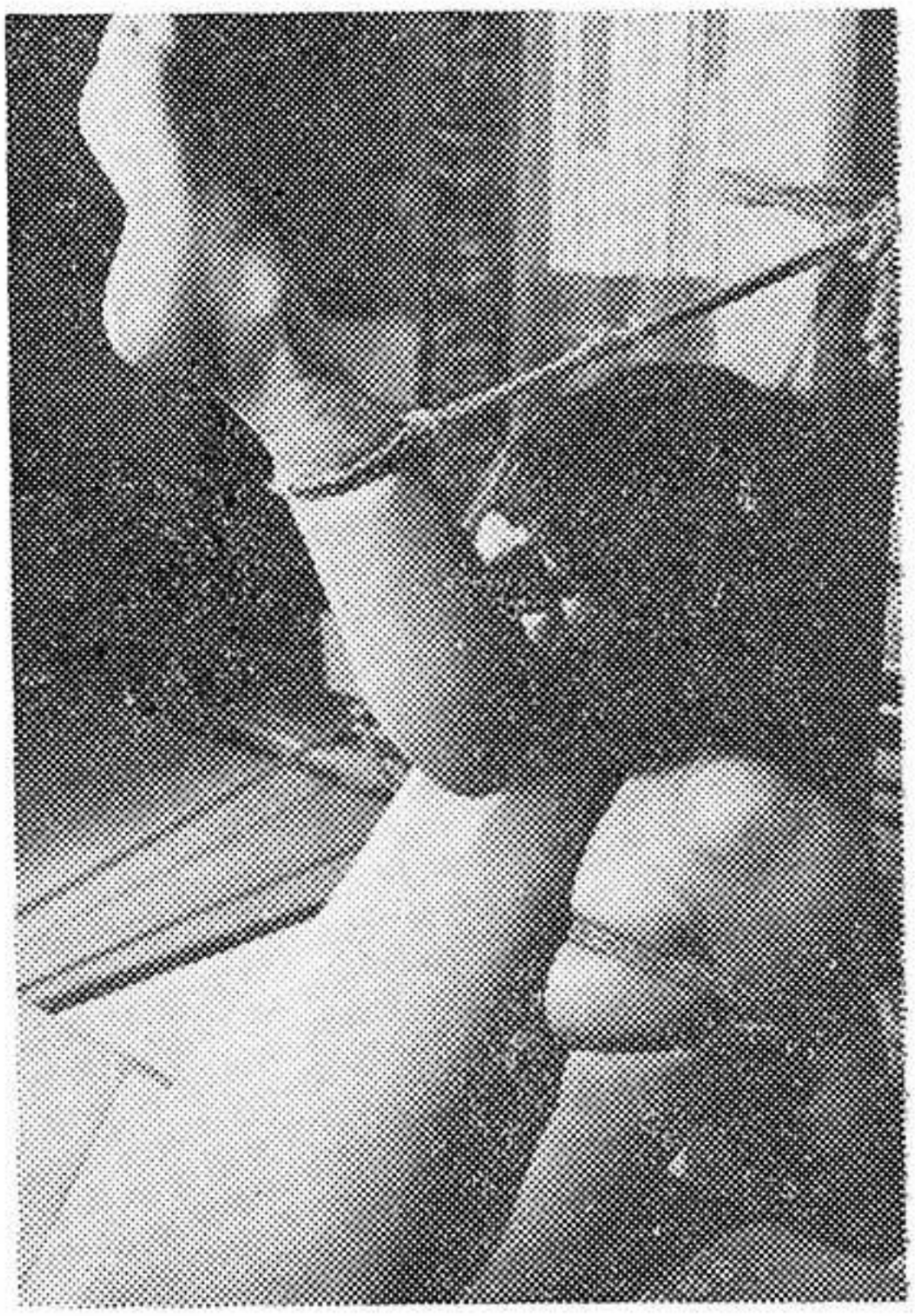
深田菊子嬢は素直で、きさくな、よい娘さんである。大阪を出てから約四十分間、初対面の私に少しも倦きさせないくらい次々と自分のことを喋りまくり、自分の性癖のことや、今までの経験を話すのである。

読者の人が、仮に彼女と始めて逢ったとしても、決して手持ち無沙汰にさせることはないだろう。若い女性を縛って、プレイをしたいと願うSファンにとっては、その欲求は熾烈であればあるだけ、ある反面、いささかの後めたさというものを感ずるは、忽ち着ているものを全部脱いで、真白い伸びやかな肢体を私の目の前に晒した。

シミ一つない背面のなだらかな起伏、きゅっと締まったお尻の恰好が可愛らしい。

前面を見せた。娘らしい小さなお椀を伏せた乳房が可憐な蕾をのせて羞らっている。

左右の上腿部に種痘の痕が大きく残っているのが、玉の肌だけに惜しい。



こうした傾向は、モーテルに入ってからも私の目を奪った。

浴室の湯をひねって部屋に戻ってきた彼女は、

彼女は自分の身体の各部分を示して私に説明している。殊に最も秘密の部分など、開股の姿勢で私に解説してくれるのだ。

彼女こそ、〈可愛い天使〉であると、私は心から、そう思った。

天が奇クのファンに対して授け賜った縛りのエンゼルでなくてなんであろう。私はこのエンゼルのことを読者の皆様に出来る限り正確に伝える義務があると思った。

やがて、湯が浴槽に満ちて、彼女は、そのままの姿で浴室へ向かった。

縛りプレイもセックスの一つのフィーリングだと割り切っている彼女。そして、縛られて愛されたときが最高だったと告白する彼女。

Sファンが紐を片手におずおずとする心使いは彼女に関しては不必要だろう。

〈羞恥責めの好きな若いS男性を求めています〉と言っていた彼女。

私のような年輩の者だったら、彼女に嫌われないかと思ったが、それも杞憂だった。

私のような年輩の者だったら、彼女に嫌われないかと思ったが、それも杞憂だった。

S男性と書いただけなのか、そこのところはわからないが、中年の男性でも、彼女は自分と同じ世代のパートナーとして全身を投げかけてきてくれるから安心である。

湯気のほかほかと立ったままの、剝玉子のような深田菊子が姿を現わした。烏の行水というにふさわしい、早さである。

湯上がりのままのバスタオルさえ身にまとっていない無防備の姿である。若しかりに、小鳥に襲いかかる鷹のように、逸りに逸って紐を片手に飛びかかっても、彼女は一向に驚かないという悠々たる態度である。

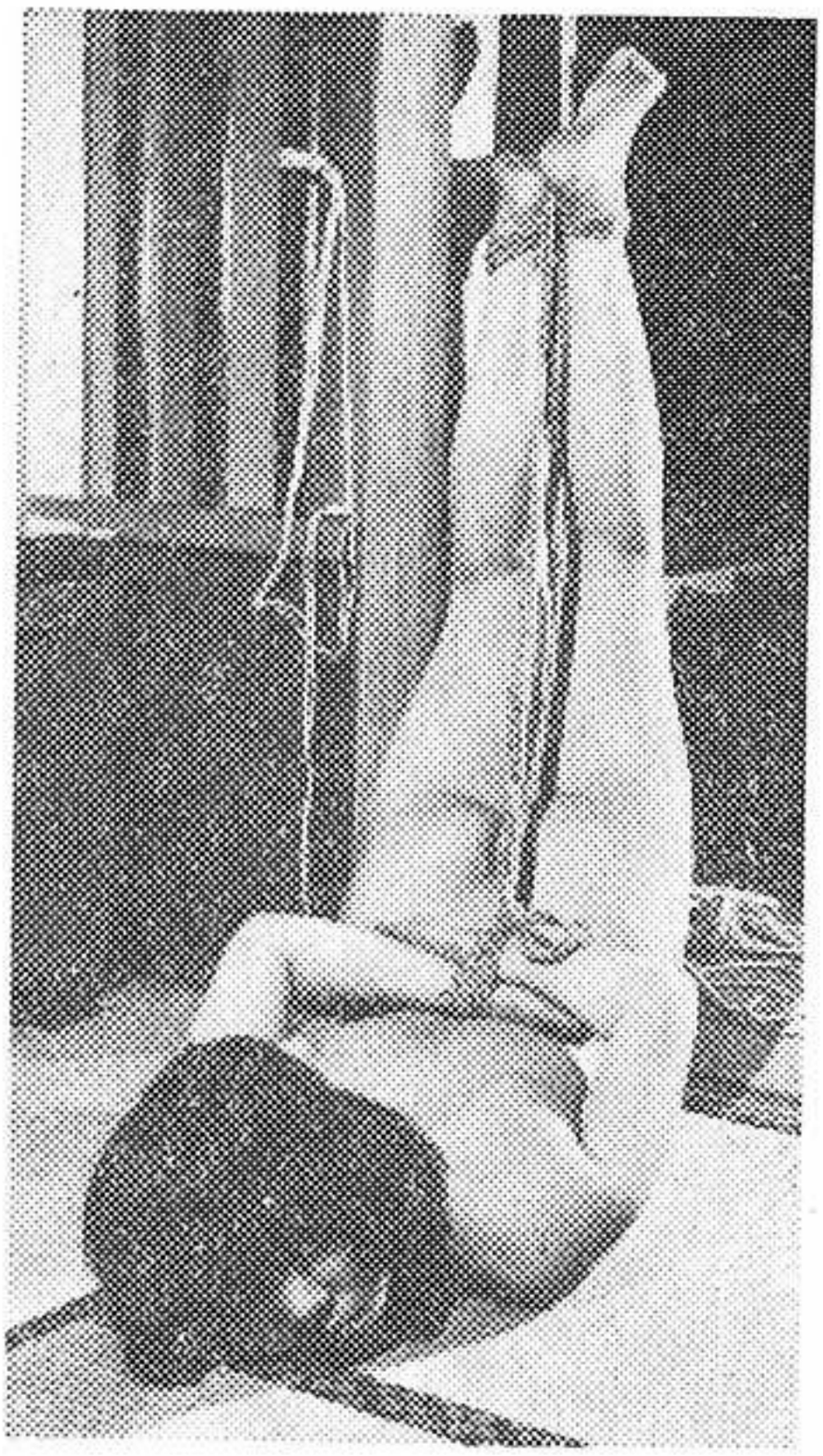
責めのプレイだとしたら、ここらあたりから舞台が進行してもよいのだが、残念ながら私の方の撮影の準備が整っていなかった。

三灯のストロボを同調させるため、ライトの位置をきめてからエクステンションコードを配線しなければならない。それに各ストロボの本体にはACコードを電源からつなぐ必要がある。ABCの三灯の中、AとCには夫々各一台のカメラをコードで、連結させておく。

写真集向のフォトを撮影せよという命令なので、一台にはカラーリバーサルとしてエクタクロームを詰めておく。カメラはマミヤプロフェッショナルC3、レンズは標準のセコール105ミリを一応つけておいたが、都合によって80ミリと65ミリに直ぐ交換出来るよう準備し、透視ファインダーを装着する。

大体、このカメラは重くて弱っているのだが交換レンズを持ち歩くと更に重量と、かさ

が増すので、外へ出る時は負担である。
モノクロの方はゼンザブロニカのS2にニッコール75ミリのレンズをつけてネオパンSを入れた。
三脚は二個準備していたが、一応手持ち撮影するつもりである。
35ミリカメラにストロボを装着して動きのあるポーズを撮るために、アサヒペンタックスにカコのエリートⅡをつけて控えに置く。以前に国産のカメラのシャッターや巻き上げ機構の故障で泣かされたことがあるので、いつもローライとライカを予備に持っていたことがあったが、最近は国産でも、そういう故障は少なくなったようだ。しかし撮影の途中でそういうトラブルが起こったとしたら、もしスペアを持っていなかったら全くお手上げである。だが、外へ撮影に出るのだから、そう何台も持って行くわけにはいかない。
最近は67判や69判の一眼レフが、幾種類も出回っているが、私達としては、やはりそうしたカメラの原版の大きさに魅力を感ずる。印画紙に引き伸ばしても印刷しても大きなネガは、それだけのことは確かにある。だが、携帯のことを考えるとカメラの大きさと重量には、ほとほと弱る。
そんなことを考えながら撮影の準備を終わって縄の束を取り出す。
素裸のまま三面鏡の前に坐っていた深田菊子も、すでにお化粧が終わったらしく顔をこちらに向けて、私の準備の進み具合を見守っている。
〈私を素っ裸にして縛り上げて――〉
と彼女は読者通信で書いていたが、目の前の彼女は、この部屋に入ってきたときから自分で素裸になり、そして、ずっと、そのまま素裸なのである。
私が素っ裸にしようにも、もともと素裸なのだから、手の施しようもない。
余程自分の身体に自信があるのだろうか。或は彼女が自分で言うように〈本当に変わった大阪女〉なのだろうか。
とにかく〔羞恥責め〕が彼女の望むところでもあるし、また私の今の目的でもある。
私は縄を手にして立ち上がった。
ふくよかで、ふっくらとした手首である。
握ってみて、その白さが初めてわかったような肌の色合であった。
抜けるように白い、という表現では言いあらわせないナマの白さであった。
羞恥責めにするにしても、先ず両手の自由を奪わなければならない。
彼女のしなやかな両腕を背後で組合わさせて縄を掛けていった。全面的に縛り手を信用しきった、まかせきった物腰であった。
縄は更に二の腕から、乳房、胸へとまつわりついてゆく。縄が通ると白い肌に赤味が帯び、ぼうっと、にじんだように広がる。
さて、いよいよ、これから深田菊子に対す



る羞恥責めが開始されるのである。

私は彼女が特に〈羞恥責め〉を求めているということを聞いていたので、前以て、次のような小道具を準備しておいた。

エネマシリンジ。一〇〇CCガラス製浣腸器。五〇CCシリンダー。一〇〇〇CCイルリガートル。小型バイブレーター。

辻村隆氏は専らバイブレーターを愛用しておられるようだが、私は身体の方が元気なので、そういった小道具の御厄介になることは今まで殆どなかった。今回は余りカサ張るものではないので電気カミソリと共に、ギャジットバッグの底に忍ばせておいた。しかし、特に彼女が希望しない限り、これを使用するつもりはなかった。

後手高手小手に縛り上げた彼女を引き回して配置したライトの下へ立たした。

弘田三枝子ばりの、つぶらな瞳をいっぱいにみひらいて、深田菊子は縛られた全裸の姿態を惜しげもなくライトの前に晒した。

アスパラのコマーシャルをやっていた時分の弘田三枝子は、ぽちゃぽちゃとした色白で可愛かった。変貌した日本の法律では、公開さえしなければ撮影することと自体は、一向に差支えないのであるから。

彼女は、すべてをさらけ出しても、羞らいはなかった。本当は、いささかの羞らいがあった方が、より刺戟的なのだが、天真爛漫な無垢の娘さんであるから、全くそうした抵抗はないのである。

私はF8に絞ってシャッターを切った。

千二百分の一の閃光が一瞬三方から白い裸身を浮かび上がらせたが、彼女は、たじろいだ風もなく瞬き一つ、しなかった。

なかなか大した度胸のM女性である。

『SMが大好きです』と公言した二十娘、そして堂々と『私を素っ裸にして縛り上げて』と言っている大阪女。

彼女の話によると、今年の二月、京都へ遊びに行った折、駅の近くの売店でふと奇クを

階でやったように、文章による描写は、如何になるものでも制限しないということと、画や写真のあるべき個所は削除しなくてもよいという位には、或いは近い将来、実現されるかもしれない。

その時に備えて、撮影だけは深田菊子の羞恥責めの実態を、如実に捉えておこうと思った。現在の日本の法律では、公開さえしなければ撮影することと自体は、一向に差支えないのであるから。

手にしてから愛読するようになったそうであるが、それ以来、彼女の頭の中を占めて大きな役割りを演じてきたのはSMに関しての話題であった。

一六三糎、五三瓩の女体は、完全に一人前以上の大人であるが、満二〇才といえば、彼女の可愛い顔が示すように、あどけなさの、まだまだ残っている年頃である。

それが奇クの記事によってSMに理解と関心を示したというのだから、深田菊子の女体の中に、齢に似合わぬ妖しいときめきが、いち早く蠢動していたのかもしれない。

彼女の書いた、あの五月号の読者通信に対して、非常な反響があったというのも、マニアのみが知る、或る種の索引力が、あの文中に潜んでいたのだろうか。

今、目の前で、全裸で縛り上げられている深田菊子は、あの読者通信を書いた、当の本人なのだろうか。この姿からだけでは、いささかも想像は出来ないのだが——。

初対面で、素っ裸にひんむいて、高手小手に縛り上げさせる。しかも、詳しい説明一つするではなし、忽ちにして羞恥責めに入ってゆくのである。

奇クのSファンであったら、とても、これらえられないような垂涎のパートナーである。

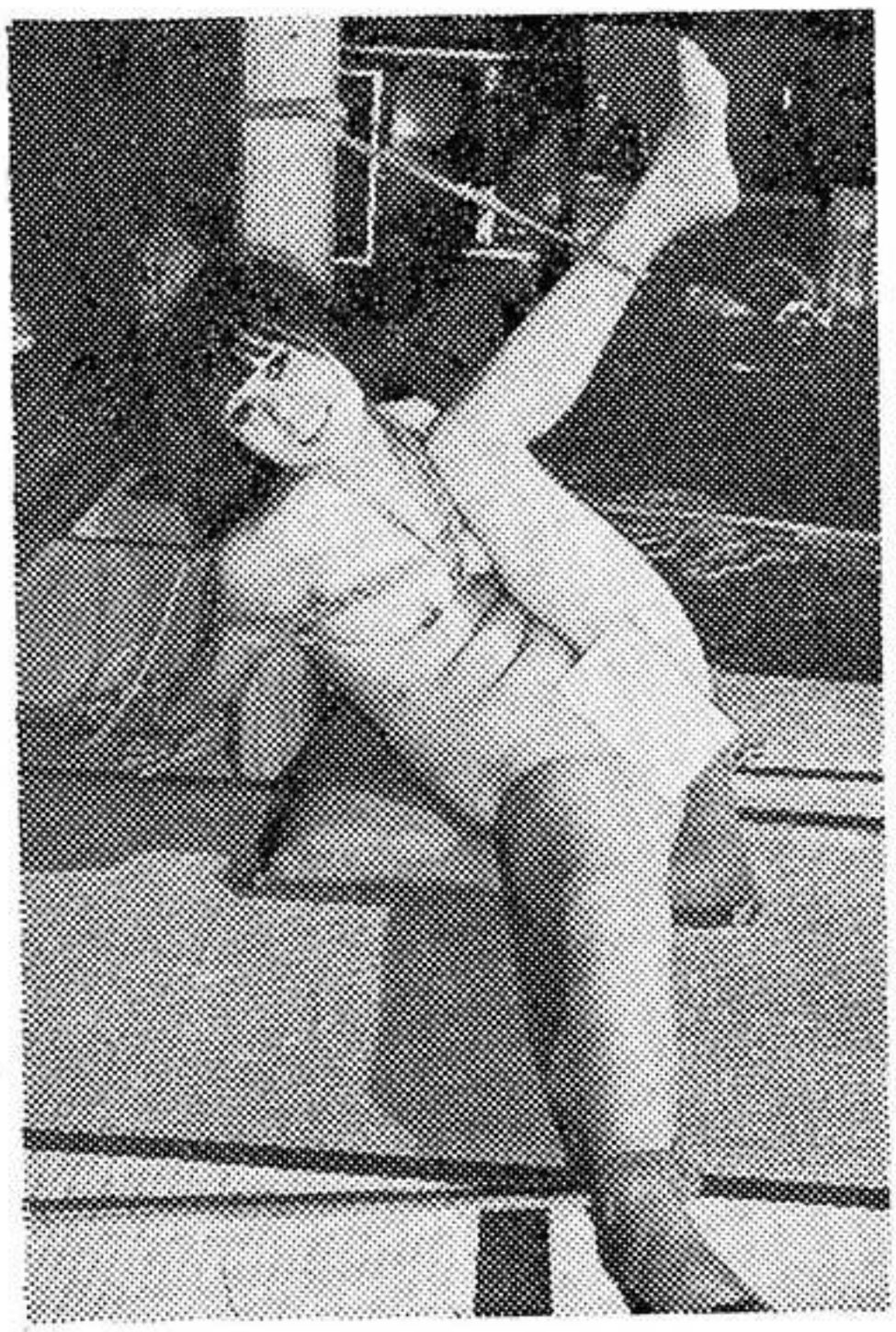
やはり、奇クの〈読者通信〉なればこそ、このような稀少価値のある女性と対面することが出来るのである。

もし、これが、ありきたりの女性であったら、百万遍、口を酸っぱくして説明し哀願したところで、理解して貰えるかどうかそれは疑問である。

彼女は至って素直で従順だった。

私の命ずる言葉に従って、易々諾々としていろいろのポーズをとった。

これから行なう〈羞恥責め〉のことを考えて私の胸は、わくわくした。



完全に両手の自由を奪われた深田菊子は、私の行なう、どんなあくどい責めに対しても、それを拒むことは出来ないのだ。そして、私は彼女の全裸に対して、好き放題のことを思いのまま行なうことが出来るのだ。

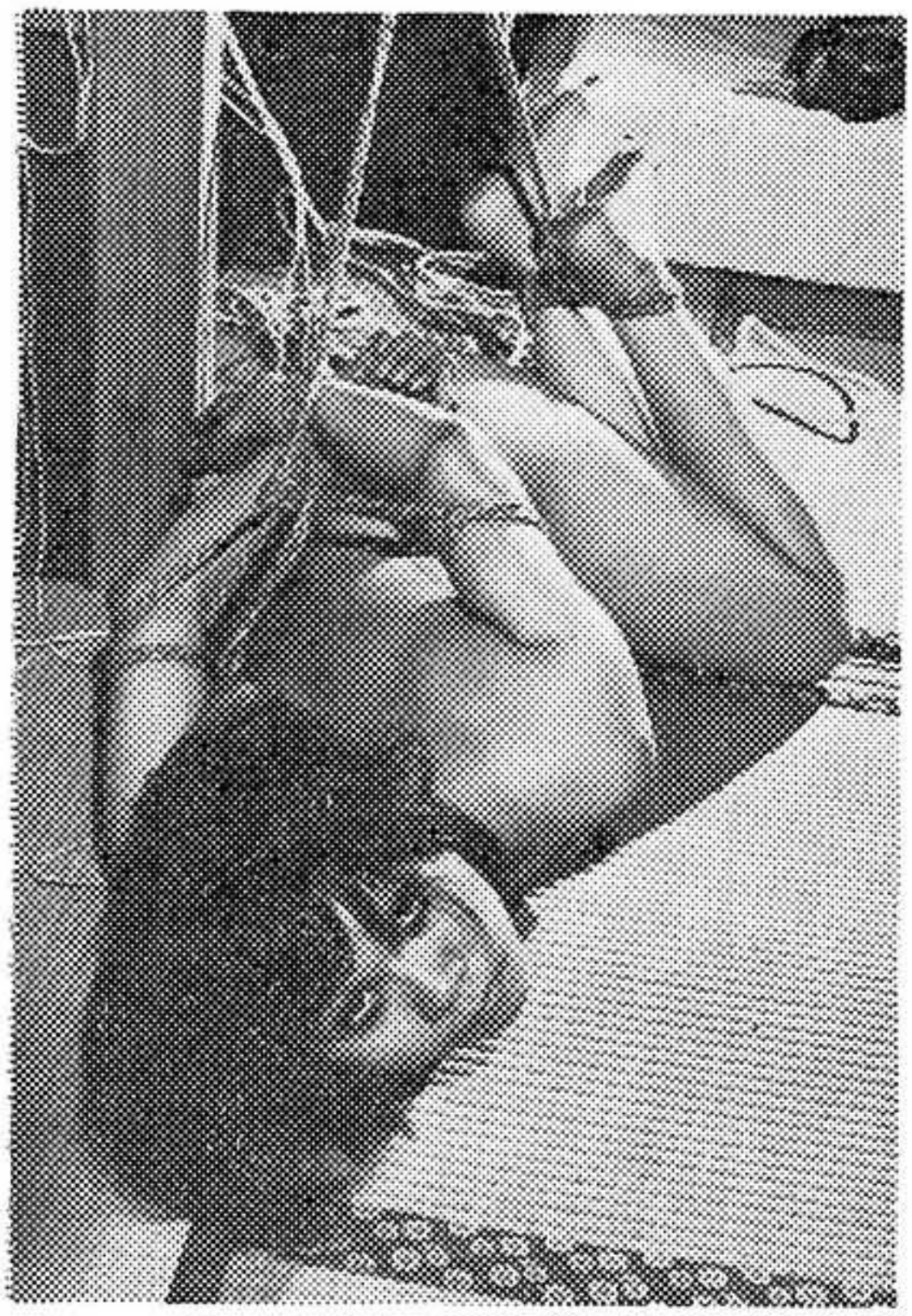
私は殊更、彼女が羞恥にまみれるような開股のポーズを言葉で要求した。

カメラを手にしたままの私は、彼女が身体を動かしてポーズを変える瞬間を狙って、シャッターを切ったりした。

決して、直接手を下すことはしなかった。

いや、二台のマミヤレフとゼンザブロニカという重いカメラを首からぶら提げていたので手を出したくても、介添えすることすら出来ないのが実情であった。

右足を高々と挙げさせる開股ポーズを命じたら、彼女は柔軟な肢体に物を言わして、長い脚を一直線になるまで伸ばした。普通だったら「いやーん」と言って拒絶するところであるが、深田菊子は、むしろ誇らしげにさえして、秘奥をあからさまにさらけ出し



て、無邪気に開股ポーズをとった。

彼女が自ら誇らしげに思うだけあって、美しく汚れなき薔薇の花であり菊花であった。

SMプレイを楽しむパートナーとして、深田菊子は全く最高の女性ではないかと思う。気の弱いSファンであってもたら、大威張りで開股責めや羞恥責めを加えることが出来るだろう。

もうそれからは、緊縛ポーズといえば開股ポーズであるといわんばかりに、開股ポーズの連続であった。よくも、これだけ、倦きもせず、開股ポーズばかりを撮ったものだと、自分でも感心するくらい、何枚も何枚も、憑かれたようにシャッターを切った。

写真集の臨時増刊号に掲載するため、カラー写真をエクタクロームで撮った。スライドでなく色刷印刷の製版原稿にするのだから絞りを半絞りほど絞って、F11とF8の間ぐらいにした。

これは何れ発刊される写真集の第二集を見て頂きたい。この写真集には、第一集の時と同じように、辻村隆氏と私が一文を書くことになっている。

マミヤレフに入っていたカラーフィルムを撮り終えると、ネオパンSSを入れた。レンズを80ミリから65ミリに交換し、蛇腹をいっぱいに伸ばしてレンズを繰り出し六六判いっぱいに接写した。絞りはF22。

繊毛の一本一本も刻明に描写する鮮鋭なピントでクローズアップした。

羞恥責めに入ってからはライトの熱気に混じって彼女の甘く香ぐわしい体臭が、むんむんと部屋中に立ちこめた。

百聞は一見にしかずという。

私の下手な説明よりも、その時に撮影した写真を見て頂くとよいと思う。極く一部ではあるが誌上に掲載して貰うよう、この原稿と共に写真を同封した。

深田菊子については、まだまだ書きたいことも多いのだが、これからも、次々と撮影の機会もあると思うし、また、浣腸責めやバイブ責め、剃毛責めなども実施したいと考えているので、何れ再びカメラルポとして、採り上げたい考えである。

一回の撮影で百数十枚も変わったポーズのシャッターを切りながら誌上に掲載する分量が僅かに過ぎないのは残念であるし、また、四つ切りに伸ばした印画紙焼付写真の鮮明さや迫力のことを考えると、何らかの方法で、御覧に入れたいという気持が動く。

読者のSファンを代表して、『読者通信投稿者』の深田菊子嬢を探訪した私が、禿筆のため十分意をつくせなかったのは残念であるが、いずれ次の機会に、詳細なルポルタージュを書く機会があると思うので、そのときを期待して頂きたい。

はなとへびはなとへびはなとへびは

い情緒的な眼差しを、悦子に向けて云った。
「逃げましょうよ、奥さん」
「えっ」
悦子の言葉に、夫人はハッと美しい顔を硬化させる。
「ジョーにブラウンという黒人の大男がいよいよ明後日には、ここへ来るのよ。そんな連中と奥さんをからませるなんて、この屋敷の連中は、まるで悪魔よ。ね、逃げましょう。今、機会よ」
悦子は、カーテンの外をのぞき、すばやく夫人の縛めを解きほどこうとする。
夫人は、むしろ狼狽して、
「いけないわ、悦子さん。もし、私が捕まれば貴女にまで迷惑がかかってしまいます」
「今、そんな事云ってる時じゃないわ。乗るか、そるかよ」
悦子は、声を低めて、病院にいる遠山が、今、危篤状態に陥っている事を告げた。
「えっ、それは本当ですかっ」
夫人は愕然として、悦子の顔を見上げた。
「今朝ね、川田と千代がこっそり廊下で話し合っているのを私、聞いたのよ。遠山が亡くなるのも時間の問題だと笑い合っていたわ」
遠山は、すっかり衰弱し切っているが、神経だけは正常にもどって、うわ言に、静子、静子はどこにいるのだ、と、うめきつづけているという。
静子夫人は、ハラハラと涙をこぼした。
遠山がそんな状態にあるとは夢にも思わなかった。
「悦子さん。静子を一眼でいい、遠山に逢わせて。ね、お願い」
夫人は、大粒の涙を白蝋のような頬に流しながら必死になって悦子に哀願するのだ。
「だから、ここを逃げ出すより方法はないのよ。いいわね、奥さん」
悦子は夫人の縄をとくと、用意して来た緋の長襦袢を、さっと夫人の乳色の肩にかぶせた。
ひょっとすると、遠山は死ぬのかも知れない。そう思うと夫人は、せめて一眼でも彼に逢いたい衝動がこみ上がり、血走った気分になったのだ。
「あの窓から逃げるのよ。さ、奥さん早く」
悦子は、急いで窓を開けようとしたが、その時、さっとカーテンが開いた。
鬼源の、どすのきいた声を浴びせられた夫と、強い口調で云った。
「よ、何してやがるんだ」
悦子を必死になって、庇おうとする夫人は美しい瞳で、きっと睨むように悦子を見る。
「よし、わかった。じゃ、静子一人でズラかろうとしたってんだな」
「逃げようっていう量見なのか」
鬼源がギョロリと眼を剝いた。
川田や千代もかけつけてくる。
血の気を失って突っ立っている夫人と悦子を交互に見ながら
「悦子、手前、静子を逃がそうとしやがったな」
と、川田が怒気を含んだ声を出した。
「ち、ちがいますっ」
夫人は必死になって顔を振る。
「私が自分で縄をとき、悦子さんを突き飛ばして逃げようとしたのです」
悦子は、違うわ、と首を振った。
「私が奥さんをけしかけて無理に逃がそうとしたのよ。悪いのは私よ」
「何を云うのよ、悦子さん」
静子夫人は悦子の言葉を、さえぎった。
「静子が勝手に逃亡を計ったのよ。私を、かばうために嘘はいわないで頂戴」
と、強い口調で云った。
悦子を必死になって、庇おうとする夫人は美しい瞳で、きっと睨むように悦子を見る。
「よし、わかった。じゃ、静子一人でズラかろうとしたってんだな」

鬼源は、冷ややかに云った。

「そうです。もとよりお仕置きは覚悟の上ですわ」

静子夫人は自棄になったように云いきり、鬼源の方に敵意のこもった瞳を向けるのだ。

「よし、このお仕置きは、あとでゆっくり考えてやる。今はそれより、ニグロ二人を相手にする調教が先決だ」

長襦袢を脱ぎな、と、鬼源に云われて、夫人は、ゆっくりと脱ぎ、元のままの素裸となる。川田と森田がつめ寄り、夫人の柔ぐいと背後にねじ曲げた。夫人の両手を、ひしひしと麻縄をかけられる夫人を見た悦子は、たまらなくなってかと泣き出すのだ。軟な肩に顔を押しつけて、許して、奥さだ。

「こんな事になってしまって、許して、奥さん」

「何を云うの悦子さん。私が悪いのよ。もう何もおっしゃらないで」

夫人の美しい象牙色の頬にも涙が幾筋もしたたり流れる。

「さ、行きな」

と、夫人をきびしく後手に縛り上げた川田は、どんと白い背を突いた。

冷ややかな美しい横顔を見せて夫人は川田に引き立てられていく。

京子の口は、きびしく猿轡をかまされている。

## 姉妹コンビ

床の間の柱に立位で縛りつけられている美津子は、銀子や朱美達が部屋の中へ入ってくると、さっと顔を横へねじった。

「美津子、逃亡を計った罰として、お姉さんとコンビを組ませる事に決定したわ」

美津子の潤んだ美しい黒眼が恐怖に大きく開く。

「姉思い妹思いの姉妹をコンビに仕上げればもう二度と逃げようなんて気は起こらないと思うわ。いいわね、これから姉妹仲良く息の合ったコンビを組むのよ」

「嫌っ、嫌です」

美津子は狂ったように首を振った。

「姉妹をそんな風にするんなんて、あんまりだわっ。嫌よっ、そんな事、絶体に嫌です」

「ところが、お姉さんの方は、ちゃんと承知したのよ」

銀子と朱美のうしろから、これも一糸まとわぬ素肌を高手小手に縛り上げられた京子が清次や五郎に肩や背に手をかけられて引きずりこまれて来る。

京子の口は、きびしく猿轡をかまされている。

美津子は京子を見た途端、悲鳴に似た声をはり上げ、姉のあまりにみじめた姿に全身に悪寒のようなものが走って、思わず眼を伏せた。

京子は猿轡をかまされた顔を、ぐったりと落とし、小さく慄えている。

京子もまた、美津子の視線を浴びる事を恐れるように必死に顔を、そむけているのだ。

京子の腰には細いビニールの紐が、まるで褌でも緊めたように結びつけられていて、前に異様なものを取りつけている。

美津子はそれを二眼と見る勇気はなく、真っ赤な顔になってうつ向いてしまったのだ。

「ね、お姉さんは清次さん達に充分、詫びを入れて、妹とコンビを組む決心をしたのよ。この道具が何よりの証拠じゃない」

と、京子の前のものを手でたたいた。

強烈な電気に触れたように身震いして一層深く首を垂れてしまう美津子を見て、清次達はゲラゲラ笑い出す。

「それじゃ、清次さん。京子の方を、次の間

に連れていって。今度は美津子の方の支度にかかるから」

銀子に云われた清次は、よし、わかった、と京子の縄尻を引いて、次の間へ引き立てて行く。

フラフラと歩く京子は涙に濡れてギラギラ光る眼を、ふと美津子の方に向けた。

（美津子、もう駄目だわ。姉さんと一緒に畜生道へ落ちて頂戴）

ひたと美津子を見つめる京子の悲痛な眼の色が、そう語りかけている。

（わかったわ、お姉さん。美津子もお姉さんと一緒に地獄へ落ちます）

美津子も、姉の眼を悲しげに見つめながらそう心の中でつぶやいた。

壁一つへだてた次の間へ京子を引き立てて行った清次達は、天井から吊り下がっているロープの下へ京子を押し立て、縄尻をつないだ。

それは春太郎達の手で、すでに用意されたもので、京子が一本のロープにつながれて、そこに立つと、別のロープを持ち出し、椅子を使って天井のパイプにつなぎ止める。

がっくりと首を垂れている京子の眼の前へバラリとロープが吊り下がった。

「これに美津子を、つなぐってわけか」

清次が春太郎に云った。

「そう。最初はスタンドプレイ。キッスから教えて、ぴったり連結させる」

春太郎は、この企画がよほど気に入ったとみえ、楽しそうに語るのだ。

姉妹仲良くお尻を振り合いながら頂上を極め合うまで続行させるのだ、と春太郎は痺れた思いで、しゃべりつづけるのだった。

「成程、そいつは面白いや」

五郎は笑いながら京子の猿轡を外した。

京子は猿轡をとられても固く口を噤み、眼を閉じ合わせている。

もはや狼狽する気力も失せて、冷ややかな横顔を見せながら、京子は深く首を垂れているのだ。

「へへへ、京子。お前と美津子の姉妹コンビはこれから森田組の呼びものになるんだ。そのつもりでレズのこつを、しっかり妹に教えなきゃ駄目だぜ」

清次は、京子の顎に手をかけて、せせら笑った。

京子の固く閉ざした眼尻から涙が一滴二滴糸を引くように流れている。

これから演じなければならぬ魂も凍るばかりの恐ろしい行為――何時か鬼源達に強制されて静子夫人と女同志の行為を演じた事を京子は、荒々しい悲しみの中で、ぼんやり思い出している。今、自分の肉を割って喰いこむばかりにきびしく取りつけられた道具も、あの時のそれと、そっくりだ。

鬼源に叱咤され、鞭打たれ、連結された肉体をのたうたせて、夫人とからみ合ったあの時の混乱した情景が、まるで昨日のように京子には思い出されるのだ。

全身に脂汗を浮かべ、むさぼるように夫人の舌を吸い、共に自失した、あの妖気めいた地獄図――しかし、あれ以来、静子夫人は京子にとって忘られぬ人となった。しかし、あの時の我れと我が身をズタズタに引き裂くような底知れぬ恐ろしさと悲しさを、実の妹の美津子と共に味あわねばならぬとは――。

京子は遂に耐え切れなくなったように、さっと顔をねじると、眉根をしかめ、ひきつったような声で、

「実の、実の姉妹で、こんな恐しい事を。あゝ嫌、嫌ですっ」

わっと京子は、号泣し始めた。

「今更、何を云ってやがる」

と、五郎は鼻で笑った。

「お前は俺達に妹とコンビを組みますと、はっきり誓ったんだぜ。今になって約束をしぶるなんて京子姐さんらしくないじゃないか」

五郎は三郎と顔を見合わせて北叟笑む。

「そうよ。男を足で蹴り飛ばす鉄火娘にしちゃ、少し情ないじゃないの。しっかりなさいよ、京子姐さん」

と春太郎は、泣きじゃくる京子の白い肩をうしろから抱きしめるようにしてクスクス笑った。

「いくら嫌だといったって、今日は女同志、フランス式が出来るまで仕込んだからね。今更、何と云み上げるつもりなんだって、こっちは受けつけやしないわよ」

春太郎も夏次郎も以前、京子に足蹴にされた恨みがある。それを清次達と一緒に晴らす事が出来る悦びを噛みしめて、残忍な云い方を京子にするのだった。

――一方、隣の部屋では、銀子と朱美が柱に縛りつけられている美津子に、色々と因果を含めていた。

「もうこうなれば、美津子も腹を決めなきゃ駄目よ。お姉さんの方は、すっかり決心したんだからね。あんた達のように仲のいい姉妹なら、きっと、いいコンビが誕生すると思うわ」

銀子は、美津子のカールされた黒髪に紫のヘアーバンドを優しさをこめて緊めてやりながら、云うのだった。

数本の麻縄に緊め上げられた柔らかい胸の隆起の蕾のように赤い乳頭に朱美は、そっと接吻して、

「それが運命というものよ。京子と美津子もお姉さんとコンビが誕生すれば、私達、今までみたいなここへ清次さん達が来たら、はっきり答えて意地悪はしないわ。うんとお姉さんとコンビを組んで森田組のためにますとわね、銀子姐さん」

「そうよ。何時までもこんな風に素裸にしときゃしないわよ。着るものも着せてあげる」

銀子は、洋服ダンスを開けて、セーラ服をがこの屋敷へ最初来た時、着ていたスカ銀子は、濃紺のセーラ服や襞のついたスカートを美津子の眼の前で、ひらひらさせる。美津子はそれを見ると世にも哀しげな表情になって、顔をそむけた。

そんな物を以前の自分は着ていた女高生であったなど、何か信じられない思いがする。

「だけど、美津子は、ここへ来た時にくらべると、すっかり女っぽくなったわね」

柔らかそうな腹部や、なめし皮のようになやかな両腿にも白い脂肪が霞み出し、女っぽさが滲み出ている美津子を、銀子と朱美は頼もしげに見つめるのだった。

それに、ぴったり閉じ合わせている両腿の辺りの淡く柔らかい翳りも、妙に艶々して悩ましさを増して来たように思われる。

「いいわね。美津子もお姉さんと同じようにここへ清次さん達が来たら、はっきり答えて頂戴。お姉さんとコンビを組んで森田組のために働きますとわね」

銀子や朱美に幾度となくつめ寄られ、ねばりつかれて、心身ともにくたくたになった美津子は、ハラハラ涙をこぼしながら、はっきりと、うなずいて見せた。

「お姉さんが覚悟なさったのなら、美津子も従いますわ。清次さん達の気のすむように、なさって頂戴」

はっきりと口に出して美津子が云うと、銀子は手をたたいて喜んだ。

美津子はそれを見ると世にも哀しげな表情になって、顔をそむけた。

「よく云ってくれたわ。これで私も、ほっとしたわよ」

美津子は、もうどうともなれと観念し、すすり上げながら、その中に自虐の快感めいたものを味わっている。

「それじゃね、美津子。今、ここへ清次さん達を連れて来るけど、もうメソメソしちゃ駄目よ。森田組の商品として、また、鉄火娘、京子の妹として貫禄を見せてほしいのよ」

それはどういう事ですの、と、美津子は濡れた美しい黒眼をしばたかせて気弱に銀子の方を見た。

銀子は、ニヤリと笑いながら陰険な要求を始める。

女高生などとは信じられぬ淫らな女である事を清次達に印象づけろというのだ。

「ね、いつか、美津子、吉沢さん相手にすごい色っぽさを発揮したじゃないの。私達もあの時、美津子の演技のうまさにびっくりしたわ。あの調子で清次さん達を有頂天にさせてほしいのよ」

銀子がカールされた美津子の黒髪をかき分けて、耳に何か、ささやきかけると、美津子は、ぞっとしたように身を慄わせ、悲しげに眉をしかめて、うなだれる。

「京子だって、逃亡を計った罰として、自分から清次さん達に詫びを入れ、苦しい浣腸を耐えたのよ。美津子だって同罪なんだから、それ位の詫びは清次さん達に入れてもらいたいものだわ」

と、銀子は云い、美津子の可愛い臍を指で面白そうに、はじくのだった。

## 美津子の覚悟

用意が出来たからすぐに美津子を連れて行こう、という清次達を銀子はおさえて、

「ま、そうあせらなくても、いいじゃない。だれかが云ったように、清次さん、と、清次の横にしなだれかかるように身を寄せる。

「全く純情そうな顔をしているけど、あれでなかなか、したたか者よ。今だってさ」

床の間の柱に立位で縛りつけられている美津子の前には酒や肴が用意してある。

銀子は、哀しげに眼を伏せ、顔を伏せている美津子を面白そうに見ながら、

「こりや有難いな」

と、顔をくずす清次に銀子は近づいて、

「それに美津子が清次さん達に、さっき姉と一緒に逃げ出そうとした事のお詫びが云いたいというのよ」

「ほう。そりゃ感心だ」

と清次は、えびす顔で五郎達を見廻し、美津子の前に、あぐらを組んだ。

「京子は前の道具をブラブラさせながら妹の来るのをお待ちかねだぜ。さ、早く兄貴に詫びを入れな。すぐに京子とからませてやる」

五郎はビールを引き寄せ、清次のコップに注ぎながら云った。

「京子の妹だけあって、なかなか美人じゃねえか」

可憐で清純な美少女を前にして、清次達は面白そうに、はじくのだった。

「こう、唇で舌をしめし始める。

一寸、ここへ清次さん達を連れて来るけど、もうメソメソしちゃ駄目よ。森田組の商品として、また、鉄火娘、京子の妹として貫禄を見せてほしいのよ」

と清次が云ったので、銀子は、買いかぶった手が出せねえ感じだな」

ちゃ駄目よ、清次さん、と、清次の横にしなだれかかるように身を寄せる。

「全く純情そうな顔をしているけど、あれでなかなか、したたか者よ。今だってさ」

床の間の柱に立位で縛りつけられている美津子の前には酒や肴が用意してある。

「こりや有難いな」

と、顔をくずす清次に銀子は近づいて、

「それに美津子が清次さん達に、さっき姉の体と同じように剃り上げてやろうと思って剃刀を取り出すとね、それをするなら清次さん達、男の手でしてもらいたいというのよ」

へへえ、と清次は呆っ気にとられた顔になった。

「俺達の手で剃ってもらいてえというのか。こりゃ面白い」

津子の前に、あぐらを組んだ。

そいつは気もそぞろになって、三郎と一緒にフラフラ立ち上がる。

「剃刀を出しな。俺達が仕上げてやる」

五郎はビールを引き寄せ、清次のコップに注ぎながら云った。

「京子の妹だけあって、なかなか美人じゃねえか」

来て、ぴったり閉ざしている美津子の足首の

前へ置いた。

「ちょいと、美津子、黙ってちゃだめじゃない。何とか、おっしゃいよ」

銀子は清次にビールを注ぎながら、うなだれている美津子に云った。

「駄目じゃないか、泣いたりしちゃ」

美津子が小さく肩を慄わせて、シクシクすすり上げ出したので、傍にいた朱美が、いらいらしながら美津子の肩を揺ぶった。

自分のあまりのみじめさに、思わず胸がこみ上がった美津子であったが、気を取り直したように、さっと顔を上げた。

雪白の頬に涙の筋を浮かべて、ギラギラ濡れ光る黒眼を前に向けた美津子は、比類のないほど美しく冴えて、男達の眼に映じるのである。

「もう美津子は二度と逃げようとは致しませんビを結んで、これからは森田組のため、一生懸命、働くつもりですわ」

美津子ははっきりした声音で云った。

「気に入ったぜ。その心がけを忘れるんじゃねえぞ」

と清次は片頬を歪めて大声で云う。

「姉も清次さんにお詫びしたいというのですから、美津子もお詫び致しますわ。お仕置きをお受けします」

そう云った美津子は、泣き出しそうになるのを必死にこらえながら、

「姉と同じような体になりたいの。残らず剃って頂戴」

五郎が剃刀を取り上げる。

「へへへ、そいつは俺が、仕上げてやるぜ。一本残らず、きれいにな」

五郎がそっと身を沈めると、美津子は甘くすねたようになよなよと、まだどこか幼さの残っている双臀を揺ぶった。

「待って。まだ早いわ。お仕置きをお受けしてあげてよ。両手をこう後手に縛られていると、したくても自分じゃ出来ないじゃないの」

と、銀子の黒髪の頭が、仕上げてやるぜ。

真っ赤に上気した顔をねじって、唇を噛みしめている美津子は、銀子や朱美に迫られてたたかせながら、五郎の血を吐くような思いで顔を起こす。

「どうしたい。お嬢ちゃん。心配しなくたっていいさ。傷がつかねえよう俺が上手に仕上げてやるから」

「剃る前に、お願い、なさって」

と、カスれたような声で美津子は眼を伏せながら云った。

美津子は何か云おうとしたように、美津子は「銀子おねえさんが云ったように、美津子はとてもお慄せなの。ねえ、お願い、剃る前に皆さんで悪戯して頂戴。いいでしょう」

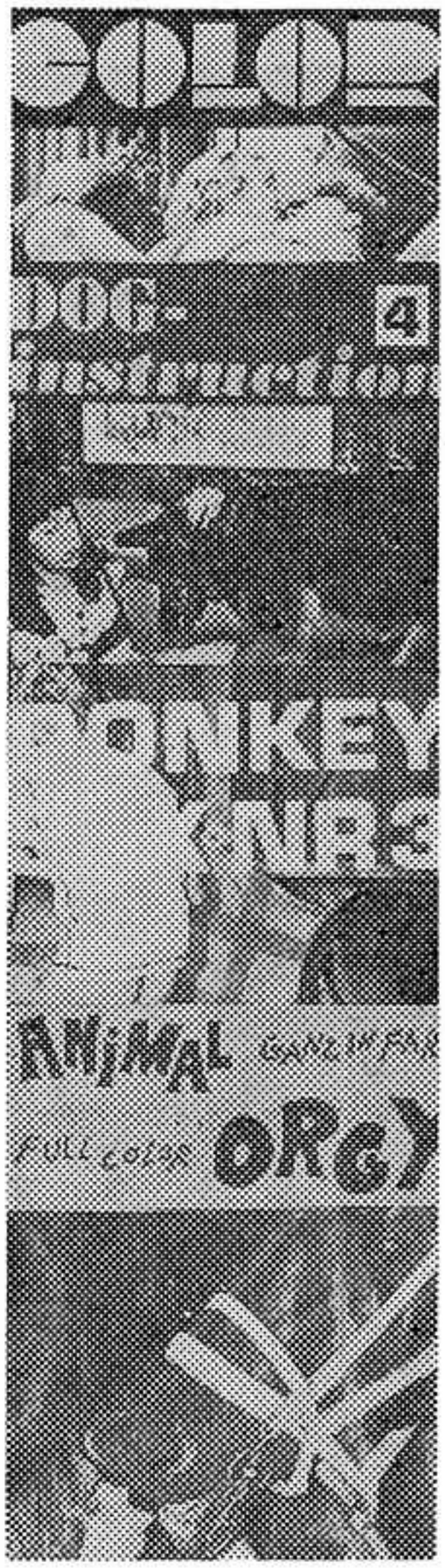
美津子は甘えかかるように、五郎の眼を見つめるのだった。

――（未完）――

随想

# ポルノ思いつくまま

長谷田亀治




ひところ好事家の垂涎のマトだった北欧のポルノも相等数が出回り、希少価値が次第に薄れてきた。現地でも〝一旗組〟の弱少出版社が軒並みにつぶれ、ブームは去ったーといわれるが、それだけに生き残った大手出版社間の競争は激烈をきわめ、質の向上は目を奪うものがある。俗悪、露骨なファックものがだんだん影をひそめ、ムーディなシュールレアリズム的なポルノが出回り始めた。

サービスも満点で『気に入れば代金を送って欲しい。不必要なら返品してもらってもよい』と代金後払いで定期的に配本してくれる業者や、どこで住所や名前を調べるのか、請求もしないのにカタログを送ってくる業者もある。とんでもない喰わせものをつかますサギ師まがいの日本の業者にくらべると、彼等はなによりも信用を重んじ、きわめて良心的だ。注文すれば2―3週間で送ってくるし、品切れのさいは、ちゃんと、断わってくる。代金をネコババされるケースは、まずない。

ただ残念ながら日本は関税法第6条によって〝公序良俗〟に反する出版物や物品の輸入を禁じているので、税関外国郵便係でチェックされ、没収のさいは立て続けに没収された。もツイてないとその都度、税関から通知がくる。こんなものは無視してもいいが、一本80ドルもするフィルムが二本引っかかったときは、さすがに頭にきて、税関まで出かけて、没収に立ち合って？　きた。始末書に印を押すだけでも、罪に問われるわけでもないが、その口惜しさ、無念さはたとえようがない。『没収したフィルムや雑誌をどうするのか』と聞くと『ある程度貯まったら焼却処分にする』というのだ。むろん、こんな答は額面どおり受けとれない。『それなら焼却にも立ち合うから、そのとき改めて連絡してくれ』といやがらせをいってやったら『そんな必要はない』と、木で鼻をくくったような返事だ。

おのれらだけ目の保養をしやがって……』と怒髪天をつく思いにかられたが〝法〟の前にはしょせんゴマメの歯ぎしり。すごすごと引き揚げざるをえなかった。

こうしたリスクも考えると、一冊6―7ド

ル、送料2ドルのポルノ誌や、200フイートもの80ドル、100フイートもの40ドルのフィルム（むろんいずれもカラー）も結構高いものにつく。それにマルク、スイス・フランとともに〝三強の一つ〟といわれる日本円の実力評価が北欧では意外に低く、日本円で送金する場合、1ドルあたり450円という不当な換算率になっているからバカバカしい。円の切り上げが必至の情勢だけに、ポルノ業者にも認識を改めてもらわねば、やりきれない。

最初にもふれたようにスエーデン、デンマークの本場では弱小出版社は自然に淘汰された。大手どころと最近の傾向など、気付いたままを紹介してみよう。スエーデンではなんといっても『プラベイト・プレスAB』が有名だ。社長のB・ミルトン氏は〝プライベイト〟の発刊によって、一介の水道配管工からわずか五年の間に資産20億、欧州各地に別荘を持ち、自家用機で飛び回るリッチマンに成り上がった。昨年、万国博開催中に観光と市場調査？　をかねて来日し、大阪中之島のグランドホテルに滞在した。面識のある私は、さっそく会いにいったが、その時お土産に、お手のもののポルノを数冊もらった。『よく持ち込めましたね』と聞くと『税関で発見されたが〝日本の友人との堅い約束によって持ってきたものだ。没収されると私は約束を果たせない。責任を、とってくれ〟と抗議すると係官も困ってしまって形式的に一冊だけ没収してOKしてくれた』という。同胞には冷たく厳しい税関吏も外人観光客には、国際親善？　のためか、ずいぶん甘いものだ。もっともミルトン氏は『残念ながら日本へは〝プライベイト〟を輸出することは不可能だ』と肩をすくめていた。

ミルトン氏は〝プライベイト誌〟に対する批評を求め、『いいアイデアはないか？』と私の考えをきいてくれたが、とにかく自分の仕事には実に厳しく、かつ忠実だ。日時は失念したが、昨年、NTVがロケ隊を送り氏の仕事ぶりを取材したことがある。これは11PMの時間に全国ネットで放映されたので、ごらんになった方も多いと思うが、その時も、わけではないが娼婦の髪型、室内の装飾などに当時がしのばれ、夢幻的なふん囲気をかもし出している。また最新のモーターードライブ（一秒間に3コマ撮影）でフラッシュエラチオによる、その瞬間をみごとにキャッチし、連続写真で紹介するなど、ざん新なアイデアも披露している。

『プリンス・プレスAB』は、『プライベイト』のカメラマンが、独立して作った出版社だ。〝プライベイト〟は、発刊当時は月刊だったが、いまは不定期で二カ月間隔くらい。ページ数も42ページ―54ページ―62ページと増えたが、使用紙の質が落ち、鮮明さがやや薄れてきたのは惜しい。最新号（17号）では野外に宇宙船のセットを組み、モデルに映画バレラのジェーン・フォンダのような奇抜な使わず、デズニータッチのアニメポルノだ。〝プシィ・アンド・プリック〟という意味深貞採帯まがいの宇宙服？　を着せて船内できれいなファックをやらせていた。宇宙時代にふさわしいアイデアだ。

この〝プライベイト〟の強敵は『ブック・センターAB』発行の〝エロ〟だろう。カメラワークが素晴らしくレイアウトもアカ抜けている。まだ4号と日は浅いが、次号が待ち遠しくなるような内容だ。とくに各号に〝ガッド・オールド・ディ〟というページを設け古きよき時代のヨーロッパ各地の売春窟のさまざまなファックの写真（むろんモノクロだが）を複写して紹介しているのは興味深い。いまも昔もファックのやり方に変わりがあるわけではないが娼婦の髪型、室内の装飾などに当時がしのばれ、夢幻的なふん囲気をかもし出している。また最新のモーターードライブ式の速写カメラ（一秒間に3コマ撮影）でフエラチオによる、その瞬間をみごとにキャッチし、連続写真で紹介するなど、ざん新なアイデアも披露している。

『プリンス・プレスAB』は、『プライベイト』のカメラマンが、独立して作った出版社だ。〝プライベイト〟と〝エクスプローラ〟の二種を発行。ミルトン氏の影響か、その流れをくんで、さらりとしたノーマルなファックを美しいモデルを使って素直に表現している。異色の存在は『DUO社』だろう。モデルをに宇宙船のセットを組み、モデルに映画バーバレラのジェーン・フォンダのような奇抜な使わず、デズニータッチのアニメポルノだ。〝プシィ・アンド・プリック〟という意味深

長なタイトルをつけ、主人公のピーター青年のさまざまな色道修業をシリーズもので描こうというもの。アニメだけにいくらでも誇張でき、思わず吹き出したくなるようなシーンにお目にかかる。ちょうどディズニー描く白雪姫と王子様がファックしているシーンを思い起こしていただければ、ぴったりだ。

スエーデンにくらべると、デンマークのポルノは、強烈そのもの。胸が悪くなるようなものも多い。最大の出版社は『ロドックス・トレーディング』ここは〝カラークライマックス〟（CC）〝セックス・オージー〟（SO）〝ポルノ・クラブ〟（PC）という三種の定期刊行誌（いずれも三週間ごとに発行）を持っているばかりか、不定期の単発もの数十種を乱発している。CCが、もっとも古く44号、SO26号、PCは10号と比較的、日は浅い。CCは創刊当時こそ全身墨汁をぬりつぶしたようなニグロ男を主役とした四人のグループセックス（第1号）ブロンドモデルのマウス、ワギナ、アナルを男性三人が同時に使用する惨酷セックス（第2号）などおもしろいものが多かったが、これだけ手を広げ過ぎては、ゆっくり企画を練る余裕もなく、最近ではやっつけ仕事の焼き直しものも多い。なにしろこのほかにも8ミリシネ、手札型フォト、35ミリスライドまで手がけており、このモデルになれば前記の商品全部に利用されるから、よほどモデル料をもらわないと引き合わない。まったくユダヤも顔負けの商魂ぶりだ。

この社はシリーズものではマンネリが目立つが、単発ものでときどきいいものがある。最近では婦人科の内診台を使って極端なポーズをとらせ、膣鏡で文字通り最深部を撮影した〝セックス・ドクター〟花弁の特に肥大したモデルを選び、すっかり剃毛したうえ、鎖でつるして革ムチでしばき上げ、全身を血みどろにしてしまう〝スレーブガール・テラ〟〝アナル・セックス〟等々……いずれもモデルが若くて美人なので魅力的だった。

『エキスポ・パブリッシュ』は〝スペルマ〟を発行しているとみえ、実に雄々しく振舞って、ぴったり息の合ったファックをみせていた。

この他〝インターコース〟〝イクスクルーシブ〟など定期的に発行されているもの、不定期の単発ものなどたくさんあるが、いずれも似たり寄ったりで、とくに独創的なものは見当たらない。各社ともマンネリに陥っているのは歴然としており〝エロ〟のような斬新なポルノに刺激されて、業界がどう変わっていくか。今後が大いに楽しみだ。

ただ『フナに始まってフナに終わる』釣りマニアの心境はポルノの世界にも通じるものがある。けたたましい乱交、浅ましい獣姦、あるいはレズもの、ホモものも結構だが、超一級のモデルを使い、素晴らしいカメラワークを駆使した一対一のオーソドックスなファックこそ最高のポルノだと思うのだが、どんどの出版社も一石二鳥をねらって、雑誌用のスチール撮影に並行して8ミリシネでも撮影して販売しているが、この〝アニマル・シリーズ〟の8ミリには傑作が少ない。なにしろ人間の意志の通じない動物だけに、フォトはともかく、動きのある8ミリではどれもこれも大根ばかりだ。じれったい思いをさせられたあげく、犬などあっという間に終わってしまう。ただロバはいつも〝ショウ〟に使われてよく馴らされているとみえ、実に雄々しく振舞って、ぴったり息の合ったファックをみせていた。

この他〝インターコース〟〝イクスクルーシブ〟など定期的に発行されているもの、不定期の単発ものなどたくさんあるが、いずれも似たり寄ったりで、とくに独創的なものは見当たらない。各社ともマンネリに陥っているのは歴然としており〝エロ〟のような斬新なポルノに刺激されて、業界がどう変わっていくか。今後が大いに楽しみだ。

ただ『フナに始まってフナに終わる』釣りマニアの心境はポルノの世界にも通じるものがある。けたたましい乱交、浅ましい獣姦、あるいはレズもの、ホモものも結構だが、超一級のモデルを使い、素晴らしいカメラワークを駆使した一対一のオーソドックスなファックこそ最高のポルノだと思うのだが、どんなものだろう。

カット・室井亜砂路

連載創作

# 幻想帝国

(五)

花影叢

「東京の政府内において、日本の大陸政策の要(かなめ)をにぎったとみられる拓相、石原莞爾将軍の当地における代理人、甘粕正彦拓務省参与官（元憲兵大尉。満州映画会社代表、というより満洲国のかげの実力者としてきこえている）が語ったところによると」

とフランク・ドゥナンはシカゴに電送する記事をタイプした。

「五族協和――日鮮満漢蒙の協和、満洲建国の理念による極東の新秩序の建設こそ唯一の方針がシベリア占領地域にもあてはまる、そのまま延長されるという公式の声明である。

目的であり、急務である、とのことだ。すなわち既定の日本の大陸経営

注目されるべきは、五族および極東という人種、地域の限定である。支配下に入ったロシア人を五族のうちに数えるか、権威ある解答は得られなかった。極東についてはバイカル、新疆地方は入るのか？

日ソ撃突以来、アムール中流域ではブラゴヴェシチェンスク市攻防の激しいたたかいがあり、阿南惟幾将軍の第四軍（約二〇万）が包囲、一週間かかって赤軍が殲滅された。この一戦で同地域はほぼ制圧され、それから目だった大規模の戦斗はない。アレキサンドロスコエ、スボボドヌイなどシベリア鉄道沿いの要地は無血占領され、街にも、たたかいの痕はみられない。

ゼーヤ河（アムール支流）上流に退いたソ連軍は、ダムを拠点にした要害にたてこもりパルチザン攻撃を用意しているようだ。同地の攻略、抵抗戦は、いずれ春の雪どけあとになるであろう。

ここスボボドヌイ市では、新しい支配者を

むかえた市民たちは、用心して通りへ出てこない。家並は、氷と長い夜にとざされて死んだように静かだ。越冬に用意した、暖房用の石炭と食料をへらしながら、ロシア人も家のなかで、じっと春を待つ姿勢である。

静かな市民地区にくらべて日本軍の駐屯地を中心とする街、通りは祭りのような賑わいだ。満洲から、ぞくぞく送りこまれる鉄道復旧作業の労務者、圧倒的な羊皮外套の兵たちの往来。

ソ連軍は退去にあたって住居施設は手をつけなかったが、鉄道は破壊した。軍政当局はさっそく、ゼーヤ河鉄橋の復旧工事にとりかかっている。その工事にロシア人を使っているところは発見できない。

馬車で到着する移住者のむれと、もとからの住民は、まったく接触せずにやっている。無言でむかえられた元気者の渡り鳥たちは、委細かまわず姦しい活気を、炊煙とともに吹きあげている。

総力戦といわれる現代のたたかいに、またひとつ異なったタイプの対立と経過があらわれようとしている。

やがて、おとずれる春の女神は、無言のロシア人、姦しい征服者のどちらへ、ほほ笑みの風を送るであろうか?」

ポータブル・タイプライターの手をとめ、記事を読みなおし「現場感をぬいたら、ありだ。」と自己評価し、ドゥきたりの通信記事だな」ナンは考えこんだ。問題の提示だけで、何ひとつ、掘り下げがない。

開戦当時、ドゥナンは天津にいた。

三八年に天津商工会議所会頭ダイオット氏が誘拐された事件があり日英間の大陸における、さや当てが奇怪な事件の背景にあった。日本側の責任者として当時、北支軍参謀長の山下奉文という将軍の名に接したのも、それがはじめてである。

それまで主に上海にいて取材活動していたドゥナンが、以後の日本軍撤退などの第一線になった天津に腰をすえていたわけだ。

緊張状態の日米関係で、記者が入国をゆるされることは、まずないと思ったが、打診の意味もあり、満洲への査証を申請しておくとどういう風の吹きまわしか（むろん、ワシントンに対する、東京のゼスチュアに違いないが）薄気味わるいほどの天津領事の態度で、たちまち査証がおりた。

「従軍記者として優遇する」

という。

日本政府の思惑はどうあれ、勇躍、船便を大連まで求め、満鉄ご自慢の特急列車でハルピン黒河、あわただしい動きをしめしている日本の基地の街もかけ足で通り、アムールを馬橇で渡り、荒廃した街ブラゴベシチェンスクから馬車でスボボドヌイ入りした。

ミズーリ河流域のカナダにまで広がった大農園地帯のようで、大地は固く凍てつきナダより厳しいようで、大地は固く凍てつき馬車のひびきだけが広漠たる平原に、たよりなく拡散して行く。人間の影が、まるで見えない——たまさかの部落へ寄っても、家は扉を固くとざし、訪れる者を寄せつけようとしないかのようだった。人と、細い煙にあうと日本軍の屯営地で、風景にくらべて、あまりにも矮小な人の動く影であった。歩哨のきらめかす銃剣の光が、日中でも暮れかけているような死んだ土地に、血みどろな斗いがあったことを示唆しているが、血もここでは、たちまち凍ってしまうだろうし、人間の争いは卑小だ。スボボドヌイで足どめをくってしまった。

『ヤマトホテル』に一室とれたが、それからどうにも動きがとれない。ホテルには記者団

が陣どっていてクラブを作っている。外国系七人、日本紙が四社。足どめを焦るふうもなく、一日の大半をバーの、とまり木にのせ、とぐろを巻いている。仕事は軍政事務所に報道係がいて、公式発表の戦況、山ほどの資料をくれるが、これでは、突っこんだ記事にはならない。

毎夜のように宴会があり、記者も招待される。拓務省、満鉄などのおエライさんの顔みせだ。

支那式の接待とは違い、形式的な挨拶がすむと勝手にグループにわかれ浮かれさわぎ、ほっておかれるのはいいとして、ドゥナンは坐って料理、酒を飲むのがどうもにがてだ。ママゴトのような容器と食物。日本人は曲芸のように小さな器の酒を、さも、うまそうにすするが、感心するだけでドウナンがやると膝へ大部分、こぼれてしまう。

東京でゲイシャハウスに招ばれた事があったが、その時は物事にひどく気のつく、態度の立派な中年女がいて、ドウナンにすぐさまタンブラーを持ってきてくれた。箸が使えないとみると、料理を口にまで運んでくれる芸者がいる。

ウィスコンシンの田舎町で育ち、少年の頃から身の周りに人手を使ったことなどない習慣のドゥナンにとって、日本の社交界は、まことに異国趣味そのものの面白味はあるものの所詮、なじめない。感覚的にだれもかれもが対等の人間どうしではないことに嫌悪感をいだく。

日本人の宴会のしかた、つきあい方に、はじめは皆目、わからないところがあった。中国でいう夜郎自大というのとも、また違う神がかりな民族主義——島国国家が、まず存在し、島のなかの島が、また一国家で、人間は個人としてはいず役わりとして生きている。首相は首相でしかなく、教師は教師、芸者は芸者という役にいじらしく？　真剣にとりくんでいる。そんなものは演技に過ぎない、とわからなくもないらしいのだが（英訳の近代文学に矛盾を意識とし捕えているところが、ままあり、この小さく、ととのった愛らしい人種にも、やはり悩みはあると納得した）とにかく役ぶりに真剣すぎて、それを、あっさり否定されれば、狂ってねない勢いなので閉口する。

役の配列、クロスワードパズル的な彼らのいう「筋目」にしたがって動くと、困難であった取材が急に楽になる。しかし筋目をたどると、思いがけない不愉快な目にあったりする。A新聞の記者と同行した時は、毎日胸がむかついた。

トーキョーだかホクリクだか知らないが、同じ記者どうしが突如神と虫けらに変わる。ニューヨークに出て来てドイツ人の知りあいができ、何かのおり、彼らの抜きがたい国家主義に行きあたり、鼻白んだ事があるが、それはそれとして、ドイツ人とならば話は通じる。一対一の人間として。日本人の島と、ドイツの島（ラント）意識は似ていて、やはり非だ。ドイツ人はラント以外の世界の存在を知り、認めている。日本人は、おのずから島に生きて、島以外の存在を知らない。突きはなしていえば、自分の世界にのみ生きる狂人である。発狂集団が危険な戦争技術をおぼえ、支那をおどし、ロシアにおどりかかり、アメリカに眉尻をつりあげている。

ナチスの邪悪なことはユダヤ人狩りで明らかだが、はっきょくは西欧機械文明の、わく内での、もめ事である。

が、日本となると機械戦とはいいながら、底流は異質文明の対決という様相がある。機械が日本人の肉をたたきつぶしても、インディアンを屠殺するような目ざめの悪いものにな

る。科学文明は手を汚し呪われたものにおちる。歴史は、あらゆる文明が殺人者であったことを語っているが、ドゥナンとしては、それを、みずからの世代にうけいれる事はできない。ウィスコンシンの滅んだインデアンの道に、きざまれた少年の心が、それを赦さない。

記者としての功名心も強いが、それ以前のインデアンの道からつづく意識が、ドゥナンをシベリアに駆りたてている。

黙りこくっている旧市街のロシア人に接触を求めようとするのだが、どうもうまくいかない。ロシア語ができないハンデもあるが、とにかく行き逢わないのだ。辻々に日本兵の歩哨が立ち、警戒は厳重だ。気配だけで、たちまち飛んできて、せっかくドアをたたいても妨げられる。銃剣を無視すると、今度は憲兵だ。一人や二人ではない。

けっきょく、うろつくだけで公式発表以外の記事になりそうなカケラもつかめない徒労の毎日なのだ。

クラブの記者連中は呆れるくらいに皆のんびりしている。もっとも外国系はドイツ占領地の新聞、通信社が5人で、日本人の接待にもっぱら鼻毛をのばしている。日本人記者はエンピツを持った兵隊というところで、お話にならない。

ぱりぱりのナチストだが、エーリッヒ・アンケという男が若手だけに真ッ正直なところと馬力があり、情報交換の相手として多少は役にたちそうだ、と目をつけた。

娼婦街を見てきて、久し振りにひらめくものをおぼえ、記事をまとめながら、思案はそのことを、うろついていたのだ。

下手にとりかかると、また憲兵の幕が、すばやく降ろされ、話しをきける相手も物をいわなくなる。

エーリッヒを利用する、てだ。

彼をたてて行けば、憲兵もドイツ人には甘いから敵中突破が可能だ。彼も新聞記者ならば思想はどうあれ、娼婦街の「謎」には、とびつくに違いない。

思案がまとまると、早速ホテルの室内電話でたしかめたがエーリッヒ・アンケは不在。コートを手にとびだし、一階のバーをのぞき街路へ出た。

行く間もなく電報局へ来てしまう。建物はソ連式の官庁で、すこぶる立派だが、事務はいかにも閑散としている。電報を、たくする用に送ってくれたのでね」

バーへ戻ると、往きに背中を見た、クラブでは、ご老体あつかいにされているスエーデン人記者のフリュードリッチ・カンプが、ひとりつくねんと、依然としてカウンターに、もたれている。

「めずらしく出はらってますけど、お偉方の記者会見でもあるンですかね」

ときくと、

「いや、例の宴会だろ。もっとも拓務省から新任の役人がやってきた、とかいっとった」

「あなたは？」

「宴会は、ごめんだ。このバーのスコッチも口にあわんが、頼んでおいたら白酎を、わしに頼りない相手だ。いずれ検閲の、どうのこうの、いう先に憲兵事務所へは、つつぬけなのだろう。具合の悪い送電はやめて、用紙をまるめて捨ててしまえばすむ。信書の神聖とか契約の大事とか、戦争中の日本人には通じない。

それでもコピーには、受けつけ印をおして返してよこす。

「パイチュウ？」

「高粱酒だ。なれない者には、こいつの方がね」

満蒙の生活は長い、というカンプの経歴をドゥナンは思いだした。スウィン・ヘデン探険隊にも参加した、というのだ。

プラチナブロンドの眉が、赤い顔にとけて見える。記者というより、やはり探険家が、いかにもふさわしい、老いてなお頑健な体躯だ。寡黙で、クラブではドゥナンと異なった意味で場違いな印象を人に与えている。記者としての相互利用は別として、ドゥナンとしては隔意なく好意のもてるカンプだった。

宴会、ときくと、席へエーリッヒ・アンケをつかまえに行く気も失せた。アンケは宴会が好適な精力のはけ口で、日本人と騒ぐのが気に入っていたから、いずれ酔い痴れるまで飲むだろう。今晩は「パス」だな、と思いかけて「待てよ」と、ひっかかった。

「あなたは駅から土木事務所へ行く道筋の街をご存じですか?」

北京官語を使う二人の会話だ。

「例の街かね?」

「ええ」

「行ったことはないが、さっそく、できたという話は、きいている」

手応えあった!

そうだ、目前の老人こそ、満洲からつづく裏街道のオーソリティなのだ。ドゥナンは楽な気持になり、ひるま通ってきた観察を述べた。中心的な命題も、うちあけた。

日本はナチスのユダヤ人対策に範をとり、ロシア人の移住、奴隷労働の徴発をねらっているのではないか、という疑いがドゥナンのなかで、つのってきていた。

理由は拓務省の不必要なまでの進出。鉄道復旧への異常な熱のいれ方。支那では鉄道確保に現地人を遠慮なく徴発した。ロシアではロシア人を使わず、困難な輸送条件にもかかわらず、満洲から労務者を送りこんでいる。占領地行政の秩序から、そうしているという、より何か隠された政策を感じさせる不自然さを、いまのところ説明する材料がない。

語っているうちにドゥナンにとって、疑問点が整理され「x」が、はっきり形をとって現われてくるようだった。

娼婦街に住民が、いなくなったはずである。どこへ移されたのか?

「なるほど」

とカンプは、あいづちを、うった。

「しかし、わしは君のように第一線のパリパリじゃない。大陸通が買われただけの頼りない、にわか特派員だ。そう大げさに日本の大陸政策などといわれても、記事の書き方も、ようわからんわい。雑文の報告ていどが、わしのガラじゃな」

「記事のスタイルは各人、違って当然です。シベリア・スボボドヌイ、朝鮮人娼婦ものがたり」

ドゥナンは、くいさがった。

「どうやら君は、わしを娼婦街の案内者にしたてたいらしいな」

「おいやですか?」

カンプは白酎をあけた。

「よかろう。老骨がお前さんの役にたつというなら、物おしみすることもあるまい」

探険家は、出発の腰をあげた。

○

「カチューシャだ」

とカンプは女を紹介した。

「ハルピンのキタイスカヤでは、これで大した姐御だ」

「やァ」

とドゥナンは、あけっ放しな声で奇遇を、よろこんだ。

「いらっしゃい」

女は、おちついている。ひるまの、だれた姿は、なかった。うすら青い照明の下で、ド

レスからぬきでた腕と肩が、中年女の艶をうかべて、神秘的な魅力を、たたえている。

「ご主人は？」

ドゥナンは、きいた。

「主人？　いやだ、主人なんていませんよ」

「でも」

「あの人は、ただの知りあいです」

「知りあい？」

ドゥナンには納得いかなかったが、女がそういう以上、そういう事にしておくほかはない。

「ハルピンからいらっしゃったのですか？　僕は、つい二週間前に通過して来ました」

こういう場所では場ちがいになるな、と思いながらドゥナンは丁寧な北京官語を使ってカチューシャに対等の社交を求めた。

しかし、女は話に、のってこない。しかし、むしろドゥナンには、作意せず、思いついたままの言葉で、質問に答えた。率直に、フランクに自分を語ることが、相手をひきだすコツでもあり、人を結びつけることだと、ドゥナンの話の途中でる。カチューシャも、ドゥナンは信じていご気嫌である。カンプは、ウィットを入れて、なかなか機智にとんだ、い大陸的な風貌だが、二人のやりとりを不快に思っていないことは、悠然とすすめるグラスの手に、あらわれていた。親密な空気が、カウンターの二人の男と一人の女の間に、たちまち醸しだされた。

日本調の、いやに器用に、まとまったブルースのダンス曲が、とぎれ、フロアショウがはじまるらしく、店の一角が整理された。

20フィート×50フィートぐらいの店で、カウンターは入口近くにある。ボックスの客席は薄暗く、五組ほどの背広服や詰襟服の日本人の男たちの客がいて、例の宴会調で席ごとに気炎をあげたり、女を抜かして秘密めかした耳うち話に、ふけったりしていた。

南支那風の胡弓の鋭い、しかし銀糸のように繊いひびきが雑然とした店内を一瞬、ひきしめた。水をうった気配を縫って、弦の吐きだす糸は嫋々と、つながり流れてくる。

照明がフロアの一隅に集まって、カウンター辺りは闇になった。

姑娘が、あらわれた。繊足の腰をゆらめかせて、ふらりふらりと、胡弓のくりだす音にあやつられて進むように、光の中央まで歩み進んだ。

丸い小さな顔。細い頸。眼が、うつろだ。阿片に酔っているようでもある。

と、

「バシ！」

皮鞭が木の床に鳴る裂音が、胡弓の悲鳴を切断して、ひびいた。

男が、あらわれた。今では珍しくなった弁髪を後頭部に下げた。肉体労働できたえぬいたような黒光りする肌の東北人らしい男だ。諸肌ぬいだ筋肉を誇示するように、肩を怒らせ鞭をかまえる。

胡弓の悲愁が、ひときわ高く冴える。

「バシリ」

鞭の重量感を見せて、ゆっくり弧をえがき床をうち、床が鳴る。

少女が、はたかれたように伏せる。

胡弓と鞭の伴奏にのった舞踊劇であった。

少女の青い生肌があらわれて、ドウナンは目を、そらした。

「お気に召さないようね」

ドゥナンは答えずにグラスをなめた。上海でも、これに似たフロア・ショウをクラブやキャバレーで見た事があるので、劇そのものはショッキングなものではない。

未熟な少女のからだが、サディスティックな嬲りものにされて行く過程を劇は表現している。演じているのは芸人で、ドラマはフィクションに過ぎないのだから道徳的に、とやかくいっても、はじまらないこともドゥナンは、ある程度、知っている。生活ということがある以上、芸は売らなければならない。

しかし、その事も、けっきょくドゥナンには不快なものだ。どうにもならないことがわかるだけ、不快が増す。

「気が弱いのね。それとも、あなた清教徒のコチコチ？」

とカチューシャが、まだ、ふざけ気味なのも、さっきまでは、それが親密な気を作ったのだが、今は急速に冷え、心が離れて行く。

「このくらいで驚いちゃ、駄目よ。まだ前座なのだから」

女は鈍感に押してくる。

鞭が少女の肩甲骨のあらわれた背を、うちはじめた。少女のからだが跳ねるように、鹿がとんで逃げるように鞭はあうられて、宙をひらめく。鞭が追う。少女が逃げる。上着がむしられ、ズボンが落ちる。骨まで透けて見えそうなからだが、身ひとつになり、やがてうずくまってしまう。鞭が威し、床が鳴り、やがて、少女を襲う。

「ビシ！」

黒い、いまわしい蛇体がうなりをあげ、少女の全身を、ひと巻き、ふた巻きし、少女は弓なりに反って、胡弓のひびきを口から、ほとばしらせた。

股の亡びる時、都に美しい楽が流れた。繊く哀しい、淫らな音調であったという。聖人が、これを亡国の楽として禁じた。しかし、楽がいでて国が亡んだのか、国の亡ぶ時、悲痛、そして淫靡な音を人が欲したのか、

「鳥の死なんとする時、その声かなし」

と詩人は、うたっているが、東洋人の音楽を聞く耳はなくも類にもれず、東洋人の音楽を聞く耳はないが、東洋全体の停滞を表わしているようにドゥナンの、いささか抑えたため内攻したような音もデカタンスが主調に、きこえるのだ。

と、鞭をふるった男が妙なチョッキを着てにしても、こちらの亡国の民、白系露人のカチューシャの神経は、これが商売とはいえ、ふてぶてしい、と思いかえした。

ショウは一段落していた。

「あの芸人たちはハルピンから来たのかね」

とドゥナンは記者意識に、もどった。

「知らないわ」

とカチューシャ。

「ハルピンじゃないな。あの娘は、抗州から南の産だな」

とカンプ。

レコードのブルースが鳴りはじめた。日本人の女が声を震わせて、うたっている。こちらも退廃的だが、芸まで行かない、なまの動物的な躍動感がある。ふてくされているようだが底の方で楽天的に酔いにまかせている。

いったいにアメリカ人はそうだが、音楽的素養が欠けている。単純な二、三の歌と、バンジョウぐらいのこれも単調な楽器の音を知り、無器用にフォーク・ダンスを踊るくらいのことで、別にその上を目ざさない。ドゥナンも類にもれず、東洋人の音楽を聞く耳はないが、東洋全体の停滞を表わしているようにも音もデカタンスが主調に、きこえるのだ。

と、鞭をふるった男が妙なチョッキを着てあらわれ、何やら先のふくらんだスキッチようの棒を片手にくるくるまわし、片手の鎖を引いた。鎖につれて白いけもの——熊のようなものがあらわれた。それが、女であった。

ロシア人と一眼でわかる、巨大な、なま白いからだが、首輪に引かれて、のそのそ這ってあらわれた。

ブルースが酔い痴れた調子で高まる。動物園の檻のなかの、けものを追うように、男が女のうしろに回り、棒で尻をついて、つき動かす。突かれても、いっこうに驚くようすもなく女は、あいかわらず、のそのそと這って、ようやく舞台の中心に進んだのだ。

いったんとまり、立ち上がり、手と足を鍵型にひらき、日本の相撲とりがやる一種の見世物の形をつくった。女というより、やはり白熊がサーカスの音楽につれて曲芸をやりだすように見えた。毛皮をもたない、脂肪のかたまり、そのものの妙な白熊だ。やはり見世芸、などというものでもない。

物である。

「ハイ、これはシベリアは極北、カムチャッカでとれました白熊女。もとより人語は解せませんが、年ごろ、生来もちまする精力過多こそ身の因果」

と満人らしからない流暢な口上を男はのべたのだが、ドゥナンには無論、通じない。日本人客が、ざわめいた。

あからさまにゲラゲラ笑う連中がいる。

男が棒で、女体の中心点、重そうに垂れた乳から下部を指し、卑猥なことを喋るらしくそのたびに爆笑が、わく。

実際には悲惨なことなのだろうが、奇妙にユーモラスな女体開帳なのだ。

美人ではない。薄い栗色の毛、同色の瞳、うぶ毛を剃ったかと思える、光を反射する、ツルツルの肌。怪偉な眉鼻、歯をむきだしている口、と見えるが、よく見ると、首輪から連結された轡が口を割っているのだった。首から上だけが、拘束されている女体だった。手足は、まったく自由に動かせるはずなのだが、それを滑稽にひろげているのだった。

あるべきところの影が欠落していた。熟れ過ぎて腐臭を、ただよわしているような、からだつきとアンバランスな少女のものに部分が見えるのだった。

男のもつ棒が無遠慮にふくらみを分けた。爆笑が一段と高くなってきた。まったくちなさが笑いの筋をとった者が多いようである。

女体に感情の動揺はみられない。

いのが、奇怪な迫力となってきた。まったく人間ばなれした鈍さが、女の手足を形のまま保たたせているのか？　想像を絶した鍛練の結果が、あらわれているのか？　うかがいしれない。

棒の動きは、さらに非情である。

ドゥナンは、今度ははじめから目をそらさなかった。女が白系の芸人であれば、当然の見世物だが、肥った肌に奇妙に荒れた生活の、くたびれがない。ぱんぱんに、農夫的な労働の成果を思わせるような張った肌。

女の無骨な容貌さえ、そうみると農夫的である。北欧系は髪がうすく、赤ら肌が多いがスラヴは毛の濃淡さまざまだ、という先入観がある。

白系露人は大体が革命以前の貴族、その寄生階級である。土に根ざした生活観がうすく根なし草的に人事の谷間で、ただよう生き方をとった者が多いのも、うなずける。ユダヤ人は別として白系には、やはり共通のタイプが、あった。

白熊のような女は、みるからに土くさい。

純重に首輪と棒で、あやつられるままに、のそのそと姿勢をはてとみるより、生来の無骨さが、あらわれるとみた方が自然な気もする。

「ハイ。ベアーちゃん、這い這いね」

男の合図で、また、のそりと動いた。うしろへむき、上体をたおし、手を床につく。足はガニ股にしたままだ。唯々諾々と、したがうのが、見た目に、いっそう動物的な印象をあたえる。

巨大な腰郭が上になった。まうしろから、むこうに倒された胴体が、のぞいている。たぶんたぶんと、ゆれて音たてそうな乳房までみえる。

人間が肉の上に皮膚をかぶった動物だとすると、その上皮の最後のとめの縫い目の線がまともに照明を、もとにあらわれた。

ポコッとへこんだところが、その上部にある。棒が、へこみにあてられた。ぴったり先端が、ネジ穴にあったネジ頭のようにあわさり、男が何事か説明した。

ドッと陽気にかえった笑いが、わいた。

それまで熱心に女の動きのを、この女に問うべきではない、とドゥナンでも逃がすまいと見つめつづけていたドゥナンは、そこで目をそらした。

「今度は馬鹿に熱心ね。ご執心?」

カチューシャの目と、あった。ドゥナンは、たじろぎをおぼえて、熱くなった。

「年増好きなのね、あンた」

と見当ちがいのことを女は、いって、したり顔に片目をつぶってみせた。ハルピンあたりで使うらしい、くずれた言葉をドゥナンは、はっきり解しかねる。

どうにか直感でわかる。

「あの娘は、芸人じゃないだろ」

と思わず無用心に問うた。

「あら、どうかしら」

とカチューシャは、とぼけた。そんなことようすを見せながら、とぼけても、女の最後にとった姿態の顔より、こちらの方が正直のできごとである。

ひくまもないうちに、白い肌にしみついた色素の縞「そっぽを向いたじゃない」

するりと女の手が、くぐもった声で、ささやいた。ムッと熟れた肉と、化粧品のないまざった匂いが濃厚に近づいていた。ドゥナンは、インタビューの時の卒直、強心臓を忘れて、内心うろたえた。

そうなのだ。充血し、熱くなった存在感は彼も感じる。

好奇の目で女体を見ていたつもりはない。ロシア女を、どちらの系へ分類するか、重要なポイントになりそうなので、自分の全知識を集め、目をこらしていたのだ。

そのうち肉塊の存在感そのものが分類をこえた、ひとつの実在の主張をドゥナンに、うったえはじめてきた。すると、奇妙な欲望がいつの間にかドゥナンの意識をはなれて、感能したのである。

うしろめたい昂進であった。

目をそらしても、女の最後にとった姿態のイメージが脳に灼きついてのこり、あらわにされた各部分、白い肌にしみついた色素の縞などが、いっせいにうごめきはじめ、気味の悪い変身をとげながら、ドゥナンを包みこみにくる。

アブストラクトなイメージ。それ以前にデンといすわった存在。

「少し酔ったかしら?」

と酒の酔いかはない。今は取材中なのだ。と、しきりにささやく職業意識がある。ば、不覚というほかはない。

やはり、少し混乱していた。

ぎこちなく、こわばった瞳の隅に、男のかざす棒が、臀部そのものに深く突きささっていく動きの途中が、うつった。不思議な、というより奇怪であった。快不快感をこえた、不思議なマジックの世界が、ひらけて行くよ

うだ。

男が手を離すと、臀部に棒を屹立させたまま女体は白い小山となり、いすわっていた。

ドゥナンは、あわてて視線を戻し、グラスのバーヴォンらしいウィスキーに、口をつけた。その時に、カチューシャが、まぎれもなく現在のドゥナンを、すばやく熟練した手並みで、つかまえてしまったのである。

○

さほど酔っているはずはないと思うのだからだが、いうことをきかない。脳のシンがのぼせあがり、はやりたつ。

ドゥナンが目をロシア女の、みせ物に集中している間、カチューシャはバーテンダーに目ばせを送り、バーテンダーは、ちょうど空になったドゥナンのタンブラーに、ちょうど空をとり、リキュールのような濃いトロリとした液をいれ、ウィスキーと撹拌して、もどしてよこしたのだ。ドゥナンは、それを知らずタンブラーをあけた。

しばらくたって不都合な状態がやってきて女の手が、そえられた。

「行きましょう」

女の、なまあたたかい息が、耳をくすぐった。ドゥナンは判断力もなく女に、ことわることさえ忘れていた。

階段を上がり、部屋に入った。むっとくるほど暖房のきいている部屋だ。窓際に大きなベッドがある。ダブルというより、三、四人は寝られそうな、造ろ物である。

女は、ドゥナンに腰かけさせ、ズボンをぬがせるように、ボタンに、手をかけた。階段をあがり、廊下を来るにも、どうにも不如意でしかたのなかった圧迫感が、女の手によって開放されている。

ドゥナンの家はカトリックだが、父の代から信仰を失っていた。教会は尊敬すべき存在だが、そこで跪く習慣はドゥナンも持っていない。都会にでてからは、なおさら信仰とは遠ざかった。

伝統のピューリタニズム、建国の理想主義をドゥナンは理解しうるというよりは存在しうるという考えに同調せざるを、えない。清教徒のコチコチか、とカチューシャはきいたが、ドゥナンは性に関しては禁忌は何ももっていない。

ニューヨークで駆けだし記者時代に、画家で室内装飾デザイナーであったマリヤ・グーデンスキーと知りあった。マリヤはポーランド移民でユダヤ教徒だった。困難を知っていたのか、動乱のアジアにやって来て、マリヤに操をたてていた。結婚は口にしなかった。

金をだしてくるわけではないが、清教徒なみの生活を送っている。のぞんだわけではないが、なれない細い少女のような姑娘を抱く気にろ物である。けだるい感じが全身を支配しているのだ。

それがいまは、ほとんど呆然と、女のなすままになっていた。頭のどこが痺れていて眠気のような、ちがグロテスクにもりあがり、ひたいに汗がひかりはじめた。美しいみものではない。こんな者と自分が、いきなりかかわりを持ちそうなのが不思議であった。しかし不思議を感じるだけで、それ以上の思考力は鈍い痺れのなかに、まきこまれてしまっているのだった。

女は喉をのけぞらせて、少し喘ぎ、上目づかいにドゥナンを、うかがった。憑き物がしたジプシーの瞳のように、一瞬の炎が瞳の奥に燃えた。

少し、あとずさって立ち上がると、乱暴な舞いを、からだをくねらせて、

ドレスをぬぎ、下着をとり、投げ捨てて、跪くとドゥナンに這い寄ってきた。

唸るように、スラングらしい言葉を吐き散らし、頭をふって髪をおどろに乱し、今度はほんとうにズボンをひきおろしにかかった。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と、どういうわけか、あやまりながら、手の方はズボンをひきちぎらんばかりの力をこめるのだ。

さすがにドゥナンも、薄気味わるくなってきた。が、婦人を手荒にあつかう手段をとるすべをドゥナンは知らない。せいぜい身をかたくして拒むのだが、女の手はそんなことでためらってはいない。ズボンをむしりとり、ベッドの上へ追いあげると、くるりとうしろをむいて、くねりくねり臀肉をこねた。

いきなり突きだされた尻の、巨大な肉のかたまりには辟易したが、ドゥナンもまた、痺れた脳のどこかに、好奇心のきざしてくるのを覚えていた。

女にばかりイニシアティブをとられているのが面白くない。ドゥナン自身も、その時は自覚していなかったが、かつてないほどの攻撃的——というより抵抗意識が生れ、ドゥナンはふいに身をおこすと、尻をおしのけた。

ロシア語らしい言葉で叫んだ。どけられた尻をふるわせて押してきた。

「踏みつけて。踏んで」

と今度はわかる言葉でいい、女は足を、あがかせた。恥しらずともいいようのない女の痴態である。ドゥナンは、ショウでみたロシア女の四ツ這いになった姿を思いだしがドゥナンの内部で、たちまちに道化るほどの奇形を、あまりにも、卑屈さをみせて、いらだたしさを覚えた。

「よし、踏んでやろう」

肉塊に足をかけて体重を預けると、腰がひしゃげるように沈み、ベッドのクッションに平たくくっつき、蛙のさまをみせて、ひらいた足を泳がせる。

「これよりか？　くそ。もっとか」

とドゥナンも乱暴なもの言いになり、いい捨てて足に力をこめた。

女は、もがいた。押しつぶされたような声をたて、手足を、むだにあがかせた。

カチューシャ、となる前のエカテリーナ・ラストチェンコは、十六才の時にはハルピンのナハロフカに母と住んでいた。駅の裏の操車場と、鉄道工場に囲まれた、しめっぽい街だった。ハルピンの他の街と違う、即製の小屋のような家が広い路のすみに、かびのようにかたまって建っていた。

その一年前、夏のレースのついたドレスを着こんだリーナは、ホルワット将軍の主催する園遊会に招かれて、ハルピンの小社交界へデビューした。しかしそのデビューが運命の転機の最後の華の夜であった。

ホルワット将軍は在満のロシア軍、義勇軍をひきつれてザバイカルに進出した。革命に干渉した日本軍が将軍の尻押しをしていたたかいが、どうなったものか、リーナはよく知らないが、家族はチチハルに移り、ザバイバルに入るのだ、という事だったが、急に風むきが変わり、鉄道が支那軍に接収され、社宅から追いだされた。満洲里まで行くと、ロシアは赤軍が勝利した、という。ともかくハルピンにひきあげようとしたが、帰りの汽車の座席がとれず、ハイラル附近で支那軍の掠奪をうけた。身ひとつで、ほうほうのていでハルピンにひきあげてくると家がない。もともとが鉄道の持ち物だったのだが、鉄道ご

と支那軍に接収されていた。
知りあいをたどって、ようやくナハロフカの小屋の一室に住みついたのだ。
建物の主人が親切な人で、いろいろ面倒をみてくれた。出征した父の消息は、しかし、ない。母は家主に金を借りたようだった。男の親切は、しかし罠であった。借金の返済をせまられて母は働きに出た。唇を赤くぬり、安物のドレスを来て、夜になるとでかける母に同情するより、嫌悪と恥ずかしさしか感じないリーナは、まだ世間知らずだった。そのリーナは、とっくに家主に目をつけられていた。

ナハロフカは、鉄道裏の修理工場と線路にとり囲まれた湿地帯で、シベリアからの亡命ロシア人、支那の黒竜江将軍の兵と、革命後急に増えたハルピンの人口があふれて、目はしのきく者が、鉄道用地を不法占拠してレンガ積みの長屋を建て、流亡の民に借しつけていたのだ。

貧しい家の娘、女房は、神経を逆なでするようなカヤのキャバレーや怪しげなバー、あいまい屋に身をおとす者が大部分だった。平康里（ピンカンソー）とリーナに、そんな事情はわからない。陸軍将校で伯爵（ロシアの爵位は、子孫全員に伝えられるので、実質のともなわない貧乏貴族が多かったが）の父、教会、学校生活など昨日に変わる今日の長屋ぐらしが、ただもう不満で恥ずかしく、街も歩けない。そんな心理につけこんで家主リーナの処女を奪か甘言を使い、けきょくリーナの処女を奪った。母が怒り、家主に抗議した。と男は、せせら笑い、母をなぐり、踏みつけ、柱へ縛りつけてしまった。そして、更にその眼の前で、リーナを犯してみせたのである。

家主に金を借りていたのが致命的だった。さんざんリーナはもてあそばれたうえ、支那人街の郭に売りとばされた。

あくどい色彩と、神経を逆なでするような楽器の音が流れる、ある支那将という街で、リーナは一年くらした。いろいろな芸をしこまれた。犬を相手にする技。局部で道具をあやつる技。ようやく、ある支那将軍の旦那をもって、少し気がやすんだと思う間もなく、将軍が暗殺され、また巷へ、ほうり出された。

自尊心。潔癖。そんなものを持っていては生きていかれない。ロシア女の多い埠頭区へもどり、バー勤めも、その頃のことだ。

酒や麻薬に溺れて行く女が多かった。一、二年でボロのようにくずれ破れ、冬がくると駅や路端で、だく死んで行く。

幸か不幸か、リーナはアルコールが体質にあわなかった。この世は金、という平俗な覚悟に到着するのに、さして時間はいらなかったが撤しきることとは、むずかしい。それからも人に利用されつけてしまったという事をきかないと鞭を尻にくらい、尻の皮が千枚張りになって、ようやく目がさめてきた。

日本人が多くなった。旅行客で金をおとして行くのは、たいてい日本人だ。日本人の旅館の主人と知りあい、この男が退役陸軍曹長で実は日本軍の密偵であった。男の援助と血の出るような思いでためこんだ自分の金で、小さなバーを、ひらく事ができた。

それからは男に情報を提供するのと、女の世話をするのに無我夢中で働いた。そのころから店の名をとって「カチューシャ」と呼ばれている。

十年。娘リーナの面影は、もはやない。母も死んだ。ナハロフカの強欲家主は一財産つくって、上海に移住した。今は何でも日本の神戸にいる、という。

日本軍の満洲占領。ノモンハン。日本人の増えるにしたがい、カチューシャの商売もひろがり、ハルピンでは、ちょっとした顔の名物女になった。

金は危険を考えて、横浜正金銀行、ナショナル・シティ・バンクなどに分散して預けてある。スパイに協力し、情報が肥えてくると、戦争がまぢかなことは、はずせない予想として、威勢のいい日本にどうも信用がおけなくなってくる。まア稼ぐだけ稼いで逃げだす算段だ。

シベリア戦線がひらかれるや、さっそく慰安婦のかり集めが行なわれ、カチューシャにもその筋から協力を要請してきた。少し危ないかな、と思ったが、ボロイもうけを目の前にして怖けづくのは、信条にそむく。

動くのは実際は、おっくうになってきている——冬はペチカを前にトロリ居眠りをし、夏は、南太平洋の島でのような生活。それが夢にあらわれる。からだを灼くかけているのだ。しかし、戦争の帰趨が心配で、もうひとふんばりしなければならないところだった。

むくむくと自分のからだとも思えないくらいに肥えてきたからだも、今のところは動かしていないと、あの腐った水のたまっている路地や、暗い部屋が、一年ほどしか住んでいないにもかかわらず、よく夢に現われる。名前も普段は、忘れている家主の男が鞭を持ち、尻を責めてくるのだ。実際に尻をうたれたのは支那人街で、相手は満洲人の男だったのだが、夢では家主が責め手になってくる。どういう事か、下半身だけ、むきだしで、それがひどく恥ずかしい。高くかかげた尻を男が突きたたき、からだがカアーッと燃え、目醒め、正午近くの陽がベッドの枕もとに、さしていたりする。

「いやだよ。恥ずかしいなんて年ごろかい」

と、ひとり言を言ってみるが、妙にその恥ずかしみと重なり、よみがえり、チメンタルな悲しみと重なり、残っている。娘時代のセンに胸にやけつきをカチューシャは甘やかしはし、からだが何かを求めて、うずく。

そんな夢が、一度や二度ではないのだ。

何かしら、自分の生きた十年がまちがって、見世物にされ、恥ずかしい恰いて、鞭うたれるあるいは客を待ちながら石段好でダンスし、アルコールでるぶるふるえていたあの姿のまま、人にうち捨てられて死んでしまった方が、しあわせだったのではないだろうか？という、少し考えればナンセンスにしか過ぎない、苦痛はただの苦痛で、いやなものにきまっているのにそんな疑問が、ふっと鮮かな啓示のようにうかび上がるのだった。

「縁起でもない」

と、うち消しても、からだの燃えかすは、なかなか灰にならない。

平康里の私窟児時代、街角の女時代を通じての、同じロシア女の仲間がいるが、女手ひとつで店をもっているのはカチューシャだけだ。いわば出世頭だから、女たちが自然に寄ってくる。若い娘も次から次へと地獄の門をくぐってくる。

そんな女達をカチューシャは甘やかしはしない。むしろ、他の店などより、きびしく取り扱う。女主人（マダム）などとなめられては、たまらないという対抗心だったが、この頃は女たちにお仕置きするにも妙に、いらいらするのだ。

ぶてぶての肉塊になっている女たちのからだが、いやな感じで、いまいましい。日頃はいい気になっていると思うと、にすわって、ぶるアルコールで憎たらしい。若い女の肌は若いなりに、やは

り憎い存在だ。で、必要以上に力んで、うちのめし、やきを入れてしまう。と、それが商売上の限度を越えたことで自己嫌悪につながってくるのだった。

「マダムも男が欲しいのさ」

などと陰口をきかれると、一瞬に沸騰してしまう。逆上して荒れ狂う。たしかに男がいて、適当になぐさめてくれればいいのかもしれない、とさめて自認するが、やはり、めったな男はもてない。

イワノフぐらいなら、おたがいに化かしあいの程度が、ほぼ、わかっているからいいのだが、まず、近づいてくる男のすべては、人を利用してかかる手合いだ。こんなのに体をまかせ、鞭など持たせようものなら、尻の毛まで抜かれてしまうのが、おちだ。

やはり一財産つくって、自分の思う通りになる男を、どこかで、さがすことだ、と考えが、ひとめぐりする。

少し、しんどい、からだに鞭をいれ、馬車に乗せ、黒竜江を越えた。ロシア！　その土地そのものには何の感慨もない。ハルピンより、ひときわ寒い旅路が、こたえた。

スボボドヌイで、ようやく開業にこぎつけ女も、ひと通り揃った、今日、フランク・ドゥナンに逢った。少しびっくりした。子供のような目で人を見てくる。しかも分別ついた人間のおちつきと、物腰の精悍さ。日本の若手の軍人のように気負っていない、男としてはいない。リーナは衝動にまかせて口に含んだ。

イワノフが、ちょうどあらわれて、出逢いをうちきられてしまった。あとで惜しい気持がした。もう少し、男のタドタドしい北京語の声をきいていたかった。

思いがけず、ハルピン時代からの知りあいのカンプが、その彼を連れてあらわれた。奇妙な、ものなれない胸のときめきをおぼえて、リーナは彼の手をにぎったのだ。

○

衣裳をはぎとって、ほうり出していた。

「ああ、かんにんして」

リーナは四ツ這いになり、男の腰に手をおいて、身をふるわせた。

こんなつもりはなかった。醜態だ。意識のどこかで衝動をひきとめようとかかっているのだが、男に飲ました広東産の媚薬をまちがえて自分が飲んでしまったように、からだに火がついてしまい、どうにもとめようもなく夢ごこちに狂ってしまうのだった。

男は、おどろいているようだが、いやがってはいない。リーナは衝動にまかせて口に含み、ほほずりした。

ここまで我慢して、ようやく這いあがってきたが、もう駄目だ。たとえ落ちて行く先が地獄の炎であっても、手は離れかけている。崖のふちから手が離れる。離れた。

落ちて行く。まっくらななかに赤熱のかたまりになって自分の肉が落ちて行く。

リーナはとりだした縄で、自分を縛りあげ鞭うってくれるように、と男に頼んだ。

「荷物のようにくくって。ぎゅうぎゅうに、中身のはみでちゃうくらい強く。お願い。ぴしぴし、たたいて。お尻、お尻をふんづけてたたきのめして」

うわ言のように、いいつづけた。

そのとおりにされ、リーナは押しつぶされる蛙のように、のたうち、もがき、鞭うたれるために、巨大なふたつの肉塊を、おもむろに高々とかかげたのだった。

――（未完）――

# 私のSM傾向断片

菅野守男

古くて新しい読者です。と言いますのは、私が奇ク誌を初めて見たのは、忘れもしない高校一年の時でした。もう今から八、九年も経つでしょう。

父の書斎の陰の方の本棚の上に裏側、つまり書名が分からないように並んでいました。二、三十冊もあったでしょうか。

その中の一冊を何気なく取ってパラパラと頁をめくった時の、あのドキッとした感覚が、頭のテッペンまで駈け上がったのは未だに強い印象として残っています。

その本を持ち、便所へ入り、ガタガタと震える手で眺めたものです。足がガクガクして立っているのも、やっとでした。

その後、ずっと機会を狙っていたのですが、或る日、両親が用事で珍しく揃って外出しました。チャンス到来とばかり、私は両親の寝室に忍び込みました。そして、ベッドの上にある戸棚に奇ク誌がズラッと並んでいる（何故か本は全部そこに移されていました）のを見て、妖しい興奮が身体の中心から突き上げてくるのを、いち早く感じました。

もっとも私がS的要素を持つようになったのは、小学生の頃、両親の寝室で遊んでいて（奇ク誌ではなかったと思います）同種の雑誌のグラビアを見た時に始まります。

父子二代、多分に遺伝的要素もあると思われます。その時のグラビアは天井からぶら下がっている一本のブランコの様な角材に半裸の女性が、まるで狸が運ばれる様な恰好で縛られていました。その頁の裏側にはゴム紐を使っての縛り方の図解があったようです。

しかし、その時は母に見つかり「いけませんよ、子供がこんな本を見たりしては……」と言われて子供らしくデングリ返りをしてゴマ化した事を覚えています。

（今の小中学生が少年少女雑誌の中で、素晴しいSM的要素を吸収しているのを見ると、羨ましい限りです）

その後すぐに、私はコタツの中にもぐり込み、昔懐かしいキューピー人形をゴム紐で縛って遊んだものです。

私は日本式の縛りは余り好きではありません。（嫌いというわけではありません。日本には世界に誇る伝統的捕縛術まであったのですから）外国の様式、即ち黒い皮で全身をきつく締めつけられ、十何センチもある高い尖ったハイヒールを履いている絵、写真などを見ますと、自分でも性的欲望を抑えるのに苦労します。

頬に喰い込む黒光りする皮の猿轡、素敵に整った美しい鼻をグイッと押しつぶす細い黒皮バンド。その下、ゆがんで喘いでいる、可愛い鼻の穴。これ以上は不可能と思われる位、胸をまるで蜂の様にキツク締めつける黒皮のコルセット。また黒皮のマスク、黒皮のブラジャー。全身を掩う黒皮の拘束衣、更にその上を這い回る細い蛇の様な黒皮紐。股の付根までである美しく黒光りするハイヒール、ロングブーツ。

巨大なヒップを一寸剃刀を当てれば、忽ちピリッと裂けてしまいそうに厳しく形良く整える黒皮ガードル、皮手錠。長くて肩口までピチッと吸いついた様に密着する黒皮手套。等々、フェティシズムの傾向もある私にとって、総ての皮製品は直接セックスに繋がります。

特に歩行も困難な程の高いハイヒール、その為に足首が不自然な程緊張している様な絵や写真を見ると、もうたまりません。

私の父の所蔵している古い奇ク誌には四馬孝先生の素晴しいタッチで皮革具に拘束されている絵が多く載っていて、私の目を大いに楽しませてくれました。

夜の街路で水商売の美しい女性が、濃い化粧をして高いハイヒールを履いて歩いているのを見るとその日は何故か非常についている様な気がして、思わず知らず、その女性の後姿をじっと目で追っている私です。

詩

# 私はロープ

縄木縛太郎

私は縄、無造作に束ねられて仕事を待つ一筋のロープ。
私には自ら動く力はない。ただ主人の意に添い忠実に働くのみ。
私の主人は、芸術を尊び、私は一つの美を創り出す準主役。
私の仕事は美の素材を絡み、柔らかき小山を創り出すこと。
私に噛み込まれた素材は、もだえ、呻き、涙を流す。
私は、素材の涙と汗でしっとり濡れながら力の限り職務を果す。
私は、主人と素材に感謝される雰囲気を感じて満足出来る。
私は、美意識に欠ける素材を嫌う。素材に恨まれるのは辛い。
私の主人は、私を大切に扱ってくれる。芸術家はやさしい。
私は、快く私を受けとめる素材に、美と恍惚を与え得る。
私の仲間にも不運なのが居る。悪い主人に買われたのが……。
私は、力一杯、働く。やさしい主人の為に。創り出す美の為に。
私は、より愛されたい。主人にも、美の素材にも。プレイという名において……。

私の手製拘束具

# 『太股錠』

佐原陽一郎

洋画ファンなら御記憶の方もあると思うのだが、ひと昔も前のフランス映画で「雌猫」というのがあった。
フランス地下組織の女スパイに扮したフランソワーズ・アルヌールが、ドイツ軍に捕えられるのであるが、スカートをまくられて、両方の太股に、手錠を大型にしたような拘束具を、はめこまれるシーンがあったのである。
なにしろ映画のことであるから当時、ドイツ軍が現実にそんな拘束具を使っていたものかどうかはわからない。しかし、それ以来、私は「太股錠」の素晴らしさに魅了されてしまい、なんとかして手に入れたいものだと思うようになってしまったのである。
探し歩いたが、むろん見当たるはずもなく、玩具の手錠を製作しているプレス工場を訪ねてプレイ用具としての価値を説いたこともあったが、金型代に五十万円以上もかかるとかで、どこも、作ってくれそうな所はなかった。
だが、私はどうしても諦めきれず、ついに手製の太股錠を考えつき、苦労の末に製作したのが、この写真のものなのである……というほどの大仰なものではないが、一応は、それらしい形を得て、満足しているのである。
なんのことはない、材料は革製の赤い犬の首輪で、それに短い鉄の鎖を付けただけのものだが、中央に小さな錠前を掛けるようにしてある。歩かせるとずり落ちそうな感じだったが、きつく締め上げれば簡単には落ちないことが分かったし、プレイの内容によって、後手に縛った縄に、鎖を直結することにしている。
こんなチャチな道具立てでも、縄尻をとって引き廻すと、女囚は前屈みのヨチヨチ歩きになるし、ミニスカートが更に、たくし上がって、あられもない姿を見せてくれ、けっこう私を満足させてくれるのである。
それにしても、ナチスドイツの「幻の太股錠」が、日本に渡来するのは、いつの日であろうか。

——〈第八十六回〉——

辻村　隆

被虐モデル志望のH・K子さんを塚本鉄三氏と一緒に撮った。

H・K子さんも誌上発表は困るという女性で、そのくせM性はかなり激しく、私達の緊縛は強烈をきわめ、バイブ、ローソクの洗礼で、絶え間なく、歓楽に陶酔したのであったが、何分にも今日が始めてとあっては約束を破るわけにもゆかず、いずれ発表の時期を待機するより、仕方なかったのである。

二十六才、一度結婚したが独身で、パート・タイムの電器メーカーの手仕事をしている肉感的な女性である。

私はその後、高村浩子とは会っていないが塚本氏は彼女を撮ってゆき夫人が、すっかり二人の子供みて、いよいよ激しく昂揚してゆくM性に、内心タジタジとしたそうである。胸や二の腕に、索溝のように赤黒く縄の傷痕が残っていたが、彼も又、プライバシーに関しては、何も訊ねなかったそうである。

私の発表したハントが、彼女に幸か不幸かの、いずれかの行為をもたらしたことは確かであった。しかし弁解めくが、それは、あながち私のハントのせいばかりでもない。何故なれば、その以前に彼女自身が、みずからの告白の手記を発表したのであるから——。そこに、彼女の自虐のM性を、ひしひしと感じるのである。

×　×　×

あどけなき妊婦、富田由美子は無事、女児を分娩し、母子共、至極、健全だと、彼の夫から連絡をうけた。

袖振り合うも他生の縁。ましてや、裸身を縛ったハントの縁に、聞かねばそれ迄だが、聞いた以上放ってもおけず、某日、心ばかりの安産祝を携えて、奈良市西郊の鶴舞団地を訪れる。

富田由美子は折よく在宅していた。産院から戻って一週間目で、夫の母親が手伝いにきていて、うさん臭げにみつめるのに辟易して数分で引き退った。車の駐車してある広場まで見送りに来てくれたので、産後の、今ひとたびのSMプレイの誘いをかけたら、ポッと頬を染め、

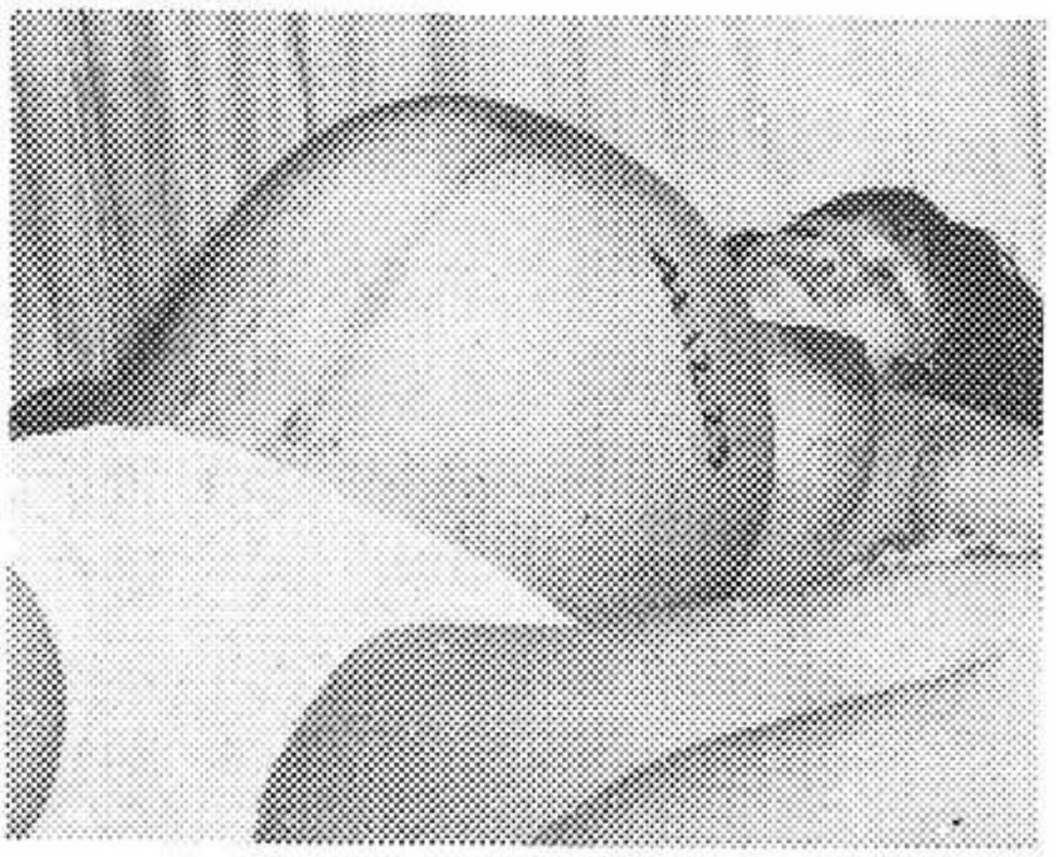
「でも、赤ちゃんを放っても行けませんもの、ダメですわ、当分」

と婉曲に断わられた。旦那とプレイしたのときいたら、微かにうなずき、カメラ・ハントが凄く刺激剤になって、彼は、臨月間際まで、かなり執拗にプレイを求めたそうであった。産後は、母の同居もあって思うに任せないが、早々に母に帰って貰いたいらしい彼の口吻は、早く二人きり、いや今は赤ん坊と三人の水入らずになってゆっくりプレイに耽溺したいらしいと、彼の言動にかこつけて、言ったが、本心は案外、彼女の方が早く水入らずに、なりたいのではなかろうか。

若い母親になった富田由美子の表情に、あの時の、あどけなさは影をひそめ、すっかり、なまめいたオンナの色香が漂っていた。所詮、当分は無理かも知れないにしても、二人のSMプレイがエスカレートしてゆくにつれ、いつか再び、機会は、巡りくるかも知れない。団地の昇降口に佇んで、じっと私達を見つめている母親の姿に私は、あわただしく車に乗り込んで去ってゆかざるを得なかった。バックミラーにうつる彼女の顔は心なしか物足りなげであった。ハントのこと、プレイのことについて或は、いろいろと喋りたいこともあったのではなかろうか。

×　×　×

妊婦フォトの先駆者、増田喜代司氏から、久々に便りがあって、可愛らしく発育した双生児のお嬢ちゃんが、顔も服装もそっくりで仲良く手を組んで二人、並んだカラーフォトが同封してあった。みゆき夫人が、すっかり二人の子供に手をとられ、近頃はもうプレイも全然、御無沙汰勝ちで、どうも心淋しく、東京方面のプレイメイトで御存知の方がいたら、よろしく紹介して欲しいというのであった。妊娠四カ月ぐらいから臨月まで、鼻責めを中心にして、SMプ



レイをまじえ、母胎の膨張する変化の様相を、刻明に撮り続けた彼の好意で、私も又、幾度か訪れ、みゆき夫人の、ソーレツその極の大太鼓腹を撮ったが、懼らく、こんな偉大な妊婦腹には今後はお目にかかることもないだろう。ましてや、出産きりぎりの、臨月腹双胎妊婦の緊縛となると、これはもう、空前絶後かも知れない。

いっぺんに二人の子供の親になって、流石に閉口したのか、その後、妊娠したとは聞かない。いやしないように、二人協力して細心の努力を払っているに違いない。

×　×　×

渡部夫妻の家を訪問した時、阪東太郎氏の奥さんの緊縛フォトや妊婦フォトを拝見し、プレイを通じて、彼等の交遊を知ったが、その、阪東太郎氏の奥様の、妊婦フォトが七月号に掲載されていて、一入懐かしく眺めた。近ければ、渡部氏夫妻等と一緒にダブル・プレイなども撮ってみたい方々であるが、奥様が妊娠の今、そうもなるまい。

私の妻も前後四回、妊娠、出産しているが、昭和二十二年、二十三年、二十五年、二十七年と、続々と子供の産まれたあの頃は、戦後間もなくでロクなカメラもなく、況してや、自家ＤＰＥなど、およそ想像もつかなかった時代である。しかも生活に追われて、とても妊婦フォトを撮るなどという心の余裕もなく、次々生まれてくる子供と家族の糧を求めることで精一杯であった。今にして思えば、せめて家内の臨月腹フォト一枚なりと撮りたかったと、残念に思っても、それも時代の流れであろうか。長女の生んだ子供が一年目の誕生を迎え、二女が七月に出産予定で、現在八カ月を過ぎた大きなオナカを抱えて、元気である。肉親の情の不思議さで、長女、二女の妊娠に対し、一向に、ハント的な妊娠フォトの意慾の湧かないのは、それだけ私のココロも健全な証拠であろう。

×　×　×

私が撮った妊婦ＳＭフォトの第一号は、何を隠そう、昭和三十九年十一月号で、臨月腹妊婦フォトモデルの簡単な手記をよせた、田中美佐子さんである。あの時、私は遥々九州まで田中夫妻を訪れて激しい感激と昂奮に胸慄わせて、妊娠九カ月の美佐子夫人を撮らせて戴いたのであった。

田中美佐子さんのことについては、いずれ「緊縛フォト第二集」の特別号で触れるつもりで、未発表のフォトも掲載する予定であるが、現在、田中氏は会社の勤務上の転勤で、尼崎市に在住で、夫人は既に二児の母である。妊娠九カ月の、臨月の妊婦フォトなど、到底、掲載不可能だと諦めて、ハントも書かなかった、あの頃にくらべ、あれから七年経った今、正に世の中は変わってきている。思えば懐かしくも、田中夫人の手記の発表の十一月号が、私のＳＭカメラ・ハントの産声を挙げた号であって、青木順子さんを紹介してい

×　×　×

今月の楽我記は妊娠に始まり、妊娠に終わってしまった。

渡部氏夫妻も現在、二児の親で今の処、バスコントロール中であるが、若し、今ひとたび出産することあらば、細大もらさず、妊娠のＳＭの記録をとりたいといっている。生命の誕生の神秘さに、男は、やはり一種の、いうにいわれぬ関心があるのではなかろうか。

清水の舞台から飛び降りるような、一大決心で、わが妻の妊娠九カ月の緊縛フォトを撮らせた田中氏も、七年経った今、とうとうと侵入するポルノグラフィ的時代の変化に苦笑し、美佐子夫人を十昼夜かかって口説き落とした、あの頃が懐かしいと、感慨深げに書いておられた。

緊縛も、妊婦フォトも、ＳＭプレイも、稀少価値が尊いのであって、最近のように、こう平然と罷り通っては、最早、私の出る幕もなくなりそうで、段々、カゲは薄くなる一方である。

## 写真集に望む

## 古書店街ブラツ記

鈴木　容

久方ぶりに神田の古本屋街を見てあるいた。

かなり前に、SM関係の書物を扱っている本屋の記事が貴誌に出ていたが、その時よりは、二軒ほど、SM誌を大々的に扱っている店が増えた事は、同好者の一人として大変嬉しい事である。増えた一軒はゾッキ本の流れをくむ本屋で、すずらん通りの中程にある。

ただ店員が若い女性なので、どうも買いづらいのが欠点である。やはり店員は、〝かれた〟感じの老人がいる店が求めやすい。

数年前から見ると、SMの写真特集の花ざかりと云ってもよい程であるが、それらの写真集のほとんどが、定価の三割引前後の値段で販売されている。ところが、その中で貴誌発行の一九七〇年臨時増刊号は、早くも特設ポスト（ビニールの袋に入って、自由に見られない）入りしてしまい、読者にとって大変不便なものになってしまった。但し、そのように表紙だけでも見られるのは二軒だけであった。そして、特設ポスト入りした貴誌は早くも金二千円也の高値がつけられている。株式で使う特設ポストは最悪であるが、ある意味で、このような価格がつく貴誌は、愛読者にとって嬉しい〝最悪の現象〟と考えられる。

何故このような現象を生じたのだろうか？　私の思い当たるままに書けば、その写真の仕上げ方に差がある。貴誌の場合は予測であるが、かなりの枚数の写真が、6×6判で撮影されているのではないだろうか。大変美しい。その次に読者、すなわち見る者が、どのようなポーズを欲しているかを、長年の経験を持つ編集者が的確なカンでとらえている為、読者の求めるものと一致した強味が感じられる。

又、モデルへのファンの支持、関谷夫人や、渡部夫人、川路夫人等の人気である。

このような条件が重なりあって特設ポスト入りしたのではないだろうかと思う、私の一人よがりかも知れないが……。

又、ここで要望したい事は、関谷夫人や、渡辺夫人のように（その他にもあるが）その緊縛のポーズが、二ページにまたがる事は、せっかくの美感を失う結果になると思うので、次回の発刊の際は是非、考慮して欲しい。

それに次回からは、マニアの作品も募集して、優れた夫婦プレーなどの作品を、一つのものにしてページをさいて欲しい。それにしても、次の作品が早く企画される事を祈る読者の一人である。編集者諸氏の御健闘を望む。

純子のプレイ・フォト　三浦　敬一

わが緊縛美感

## SMへの憧憬

川田　鬼吉

私が奇クを初めて知ったのは、去年のいつだったかは忘れたが、カメラ・ハントに村上喜美さんが登場していた号であった。私が中学時代より、無意識的に抱いていた情景が、ハッキリした形となって、それも写真付で述べられているのを知った時のショック。

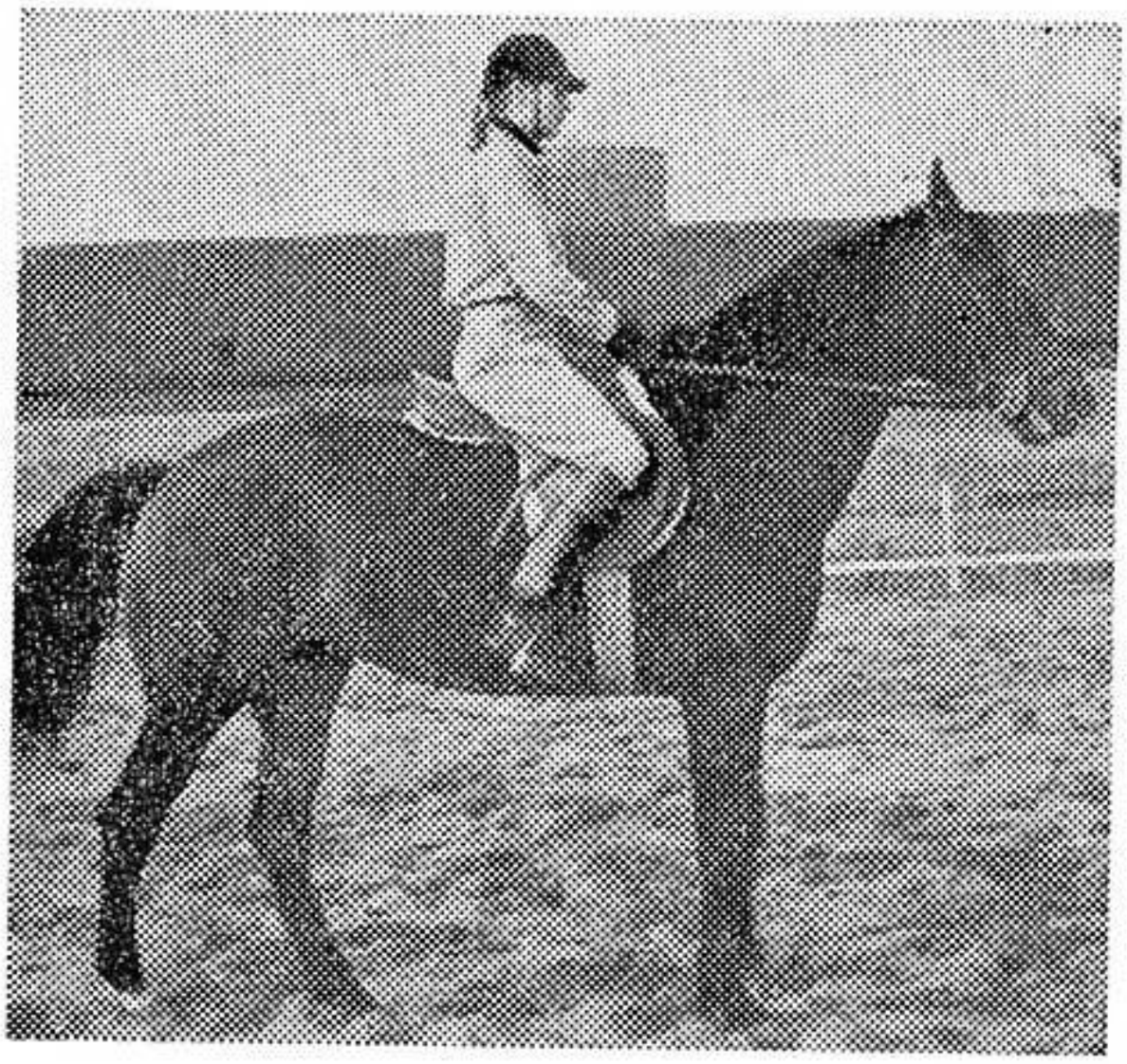
それまでの日々、ヒョッとしたら自分は性的不具者ではないかと思い悩んでいた黒雲が、一度に吹

## 雌犬の歌

〈短歌〉

北川まりこ

今宵より雌犬になるわがための
首輪と鎖店頭に選る
店員は知らず首輪はわが首を
鎖はわが身つなぐものとは
畜生に衣服要らぬと申されし
素裸になり飼主を待つ
四つ這いになり板の間に蹲る
夫の帰宅のベルの合図に
もの言えぬ雌犬われは素裸を
夫にすりよせ愛撫を乞えり
尾を振って夫に喜び示したし
この雌犬は尾なきを悲しむ
雌犬われ口に咥えて靴揃う
主の脱ぎしドロドロの靴
素裸に首輪と鎖つけられて
われ正銘の雌犬となる
首輪つけ鎖をつけて四つ這いの
雌犬われを引き廻し給う
嫌がるを無理にと首輪引張って
お庭の散歩四つ這いのまま
性別の鑑別受くと四つ這いの
尻高く挙ぐわれは雌犬
テーブルの脚に繋がれ食事する
主を待てり四つ這いのまま
食べ残し琺瑯引きの皿に盛り
雌犬われに喰えと申さる
手を使うこと許されず雌犬は
皿に直接口当てて喰う
水飲むも器を持つを許されず
水盤の水舌でペロペロ
鞭打たれ水を掛けられ足蹴され
雌犬われは芸を仕込まる
雌犬の別名メリーと名付けらる
メリーと呼ばれワンと答える
啼き声が下手だと云われ泣声で
ワンワンの外云えぬ悲しさ
となり家の犬啼きだせり雌犬の
われに答えて啼けと申さる
足裏を舐めよと云われ靴下を
口で脱がせて舐める雌犬
足指に挟みて呉れしビスケット
雌犬われは口寄せて喰う
人間の女に還り眠りたし
首輪を外し愛撫受けたし
獣姦の趣味は持たぬと雌犬を
ベッドの下につなぎ給えり
飼主は眠り給えり雌犬も
ベッドの下に眠る外なし



## 麗しき女神の乗馬

佐野寿

スイスのフォトモデル、イレーナ嬢の乗馬姿です。怖いくらいに整った美しさには圧倒されました。馬術は一分の隙もない完璧さで、特にギャロップが見事でした。女神ともいえそうな、こんな麗人を背にしてはこの彼女の愛馬ならずとも、激しい乗りこなしをされるほど畏服するでしょうし、喜悦することでしょう。

きとんでしまったような思いにさせてくれたことは忘れられない。

以後、よき慰めになったことは当然であるが、貴誌に掲載される写真を見て、いつも感じることだが、やはり縛りかたがゆるいと思えてならない、

このことだけが、私には非常に不満なのである。緊縛の美しさというものは、深くくびれ込んだ縄と、それと対照的に、グイと盛り上がってくる肉体との、比較の美しさに他ならないと思う。勿論、プレイとしての好みから、意見を異にする方も多いだろうけれど、私の好みからすれば、この意見は絶対的なものである。

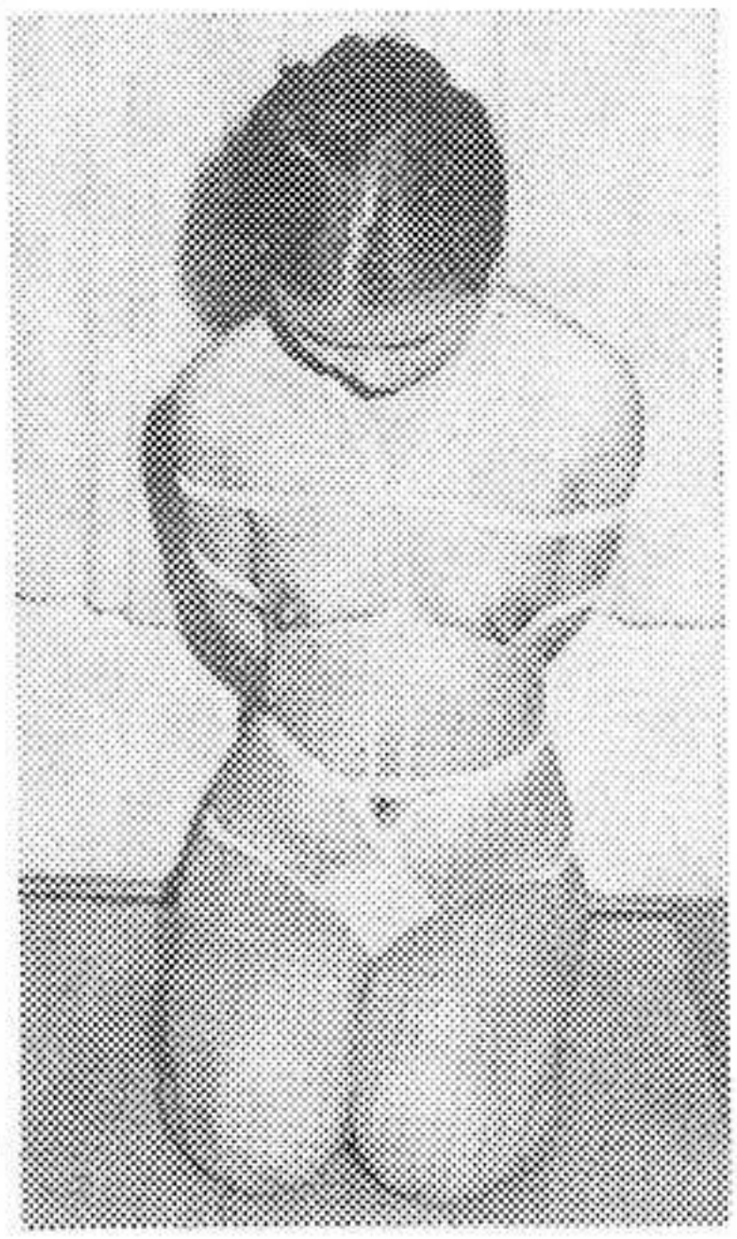
ついでと言ってはなんだが、もう一つ付け加えれば、シンメトリカルな縄掛けが望ましい。このことによって、緊縛された女体の美は一層ひきたつ筈だ。この点、六月号の城氏の写真は素晴らしいものだと思う。特に6番の写真の美しさには魅了された。

SMなるものを知ってまだ日の浅い私などが、このように経験深い先輩に注文がましいことをいうのは出過ぎたことだろうが、緊縛美の極致を捜し求める者の切実な願いとして、採り上げてほしい。

フォトの思い出

# 妻とのプレイ

小田原一郎



毎号の〝夫妻プレイ〟記事が楽しみで、これによって新たなプレイ意欲が湧くのですが、思い返してみれば、始めの頃は変態だの異常だのと文句ばかり並べていた妻が、よくここまで理解し、協力してくれるようになったものだと思います。

五年前、二十二才で私の妻となった彼女を、半年ほど経った時にバストの小さいことをからかったところ、妻は、乳房の上下を腰紐で締めて、大きくなったわと、茶目気タップリに突き出してきたことがあったのです。

これが、何時か縛りプレイに導入したいと思っていた私にとってのチャンスとなり、説得のキッカケになったのですが、ただ、妻の気持を損わぬことばかりに気を遣い、気忙しく縛っていた当時とくらべて、充分に考えながら縄掛け出来るようになった現在は、ずいぶん妻の理解度が進んだものだと、しみじみ感謝せざるを得ない気持です。

写真の現像処理は、プレイ記録を残したい為だけに始め、器具も一通りは揃えたのですが、未だに未熟で、下手な処理しか出来ず、目下研究中のありさまです。三月号の朝野裕氏の発表写真は、大いに勉強させて頂きました。更に氏の作品を見せて貰いたいものです。

六月号の拙稿、妊婦写真は、羽鳥水江さんのご期待に元気付けられて送稿したのですが、この当時もっと数多くのプレイ写真を撮りたかったのですが、初妊娠のことで妻も不安がり二回のプレイのみで終わったのですが、間もなく次の機会が訪れそうなので、今度は月を追って撮りまくろうと考えています。その節には、同好者諸氏のご助言を願いたいものです。

カメラ・ハント台北の巻（六月号）は、辻村氏の女性尊重、我意の強行を制した想いやりが滲み出ていてプレイの真髄を教えられた思いがしました。アバンチュールとロマンチズムに溢れた好篇に魅了されましたが、再度の訪台よりも、彼女を日本に招待して、氏の実力を充分に発揮したプレイ振りが拝見出来ないものかと、勝手なことを考えてしまいます。

さて、今回同封の写真は撮り溜めの中の一部です。

何年もにまたがるプレイ写真を眺め直すと、女体の変りようの激しさには目を瞠るものがあり、今更ながら驚かされるものです。

菱縄のものは、初めて股間縛りを敢行した時のもので、嫌がるのを強引に縄がけした思い出があるのです。激しく逆らったために縄ずれが出来、四、五日間、軟膏の世話になった曰くつきのプレイ記録ですが、これにコリたとみえ、以後、観念してか、股間縛りの時には、おとなしくしているようになりました。

## マニア記＝独り楽しむ縛り＝

早木夢二

慶子と夫婦プレイを楽しみながら、これはまた、なんという不逞なことであろうかと、時々我ながら呆れ果てるのだが、彼女の留守を見はからっては、独りで菱縄縛りをして楽しむというのだから、始末が悪い。

独りで縛るのだから慶子に縛って貰う時のように、後手高手というわけには行かない。両手だけは仕方がないからフリーにして、上半身と下半身に菱縄をかけ、股間に回した縄を、後ろの腰の辺りに縄止めする。

二の腕にも縄をかけるが、独り縛りの場合にはどうも旨く行かなくてどうかすると縄が緩くなる。

正座のものは、出産後、初めてのプレイだったのですが、私の晩酌の肴として、縛ったままで一杯やる、相手をさせました。子供のことを気にしながら、二時間ぐらいの間、縛られ酌婦となった妻はそれでも、結構、楽しんでいた様子が窺えた時のものです。

（焼付が軟調に過ぎるもの三葉を割愛しました＝編集部＝）

ることがある。

殊にこの頃のように上と下に菱形を作るのが習わしとなってくると、その各々の菱形の大きさ、釣合いが気になってきたりする。しかし、それも、その日その日の気分次第で上の方が大きかったり、下の方が大きかったりする。

私は、いつも独りで縄がけをするときは、鏡など使わなくて、ただ、自分の目推量（こんな言葉があるか知ら）で縄がけして、一応完了したところで、鏡の前に立つのである。

その時の、パッと鏡の中に現わした、一糸まとわない全裸の、きっちり菱縄をまとって、いく分、上気して赤みを帯びた顔と御対面した刹那の感じ、照れくさいような、その中にこそ私ひとりが常々と、黙々と、いそしんできた生命の息吹きを感じるような、ある種の煩わしさを覚えて、私は思わず「ああ……」と呻くと、両手を後ろで高々と縛り上げ、ぐっと胸をそらし、ぴっちりと張りついた菱形の縄が、かすかな肉の息づいているのにつれて、ぴくぴくと、うごめいているのに、あかずに見入るのである。

その内に、私は慶子との拷問プレイの時の、全裸でお白州に引き出された囚人だという気持になって、思わず、

ああ、いいお縄です！

呻くように呟き、いよいよ昂ぶって行く情感の中で、

お役人さま、お役人さま。

拷問を、拷問を……。

と口走ったりするのである。

そうなると、かけ縄が総体にだらしなくなってくるので、私はどちらかといえば完全主義者？　だから、二の腕にも、きっちり縄がけしたいのだが残念ながら割愛して本体だけ、念入りに縄がけする。

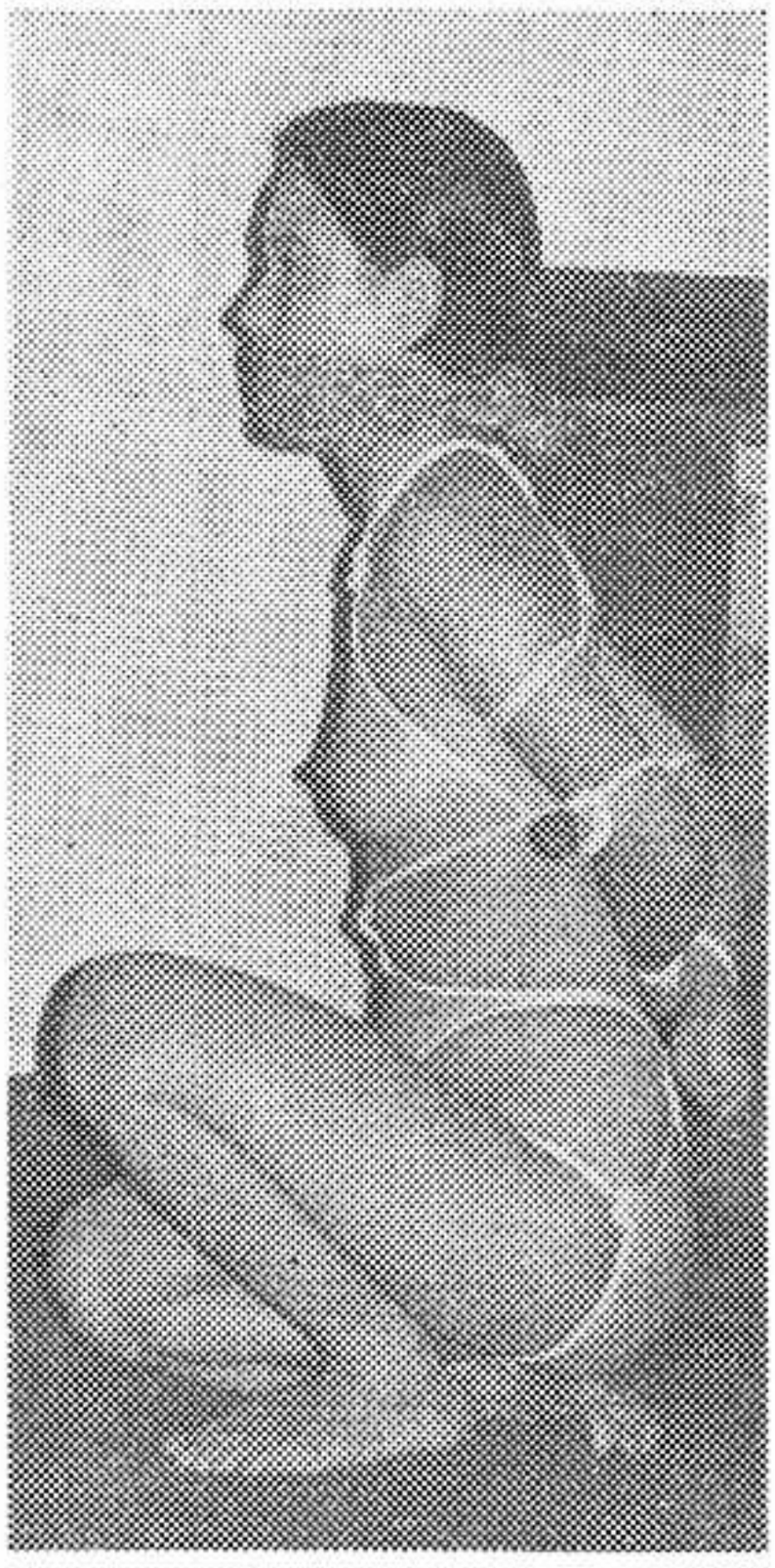
両手は、せいぜい後ろに回して合わせ、高手小手にくくられている感じを、出すようにするのである。

縄がけというのは、旨く行く時と、そうでない時とあるものだ。折角、苦心して縄がけしたのに、菱形が、どうもシンメトリカルでなかったり、縄の結び目が、不恰好によじれていたり、しばらくすると、どこからか緩んできたりす

悦楽の使者

# 雲のいざない

城　章夫



荒尾慶子よ。ぼくは雲だ。めくるめく陶酔と惑溺の国へおまえをいざなう白い雲だ。ぼくはおまえに呼びかける。慶子よ、「流れる雲に身を托して」むかしの夢をとりもどすがいい。

本誌の一月号と六月号に載せられたぼくのカメラ・ルポは、おまえの目にとまったことと思う。あのなかで、ぼくはぼくの緊縛の美学について、かなり卒直に語ったつもりだ。ぼくは、縄で縛られ括りあげられた女の肉体に、こよない美をみとめる男なのだ。ひしひしと縄で縛られ、身の自由をいっさい拘束されたとき、女はもっとも愛らしく、美しくなる。その美を引き出し成就するために、慶子よ、ぼくは、おまえを縛ってやろう。

縄が、おまえのからだの上でシンメトリカルな美しい幾何学模様を描くように。縄が、柔らかく弾力のある肉に喰いこんでおまえの美しさをいっそう高めるように。慶子よ、ぼくはおまえのからだに入念に縄をかけよう。

おまえの好きな股間縛りは、ぼくもまた、もっとも好むところのような、そんな股間縛りを、してやろう。

それと猿轡――この二つは、緊縛の美学にはなくてはならぬ要素だというのが、ぼくの持論だ。だから、おまえの可愛い口にも、しっかりと、猿轡をはめてやろう。「許して！」と叫んでも、それがちっとも言葉にならないように、おまえのすべすべした頬がぷっくりとふくらむほどに、固く猿轡をかませてやろう。

さてそれから、どうやっておまえをいじめてやろうか。鞭で打ったり叩いたりすることを、ぼくは嫌悪し、軽蔑する。それは、極めて原始的で野蛮なやり方だと思うから。ぼくはもっと精妙で洗練された、心理的な責め方を愛する。おまえの心を辱かしめでくすぐり猿轡の奥でおまえが被虐の歓びを噛みしめるような、そんないじめかたをしてやろう。

荒尾慶子よ。ぼくは雲だ。倒錯した悦楽と歓喜の夢をはこぶ白い雲だ。ぼくは、おまえに呼びかける。慶子よ、ぼくは待っている、おまえからの優しい答えを――。

## 編集部だより

○臨時増刊〔写真集〕第二集の発刊を熱望する便りが多く、辻村隆氏並に塚本鉄三氏に依頼して目下ハントとルポの文章を書いて貰っているところです。写真の方もカラーを含めて、新しく荒尾慶子、前田真知子、富田由美子、高村浩子、谷山久美子、深田菊子の諸嬢を撮影済ですので、いずれ近い中印刷に着手したいと思います。

○先月号のこの欄にお知らせしたように、久方ぶりに川野香代というサジスチンが登場、早速編集子が面接したところ、豊富な経験もあり写真撮影もOKというので楽しみにしていました。しかし女王様のM男性に対する条件が至ってきびしく、急に格好の対象を見つけることが出来ないまま徒らに日を過ごしてしまいました。

○十六才の時から女装して水商売に入っていたという二十才になる青年から便りを貰いました。告白を書きたいのだが文章は生来苦手とのこと。一流作家並に口述して貰って代筆でもするより仕方ありませんが、差し当り〔読者通信〕

# 六月号読後感　初読者の弁

坂本晃一

先日、初めて貴誌を発見、世に緊縛愛好者の存在することを知りビックリしましたが、六月号の読後感を一言

〔ほめる点〕

①　渡部好美さんの告白＝こういう告白が出来る人は羨ましい。ただ、三ページという短かさと、一枚の写真がかんじんなところで切れているのが残念。後者は「ワイセッ罪」があるから仕方ないにしても……。

②　水田真紀子習作シリーズ＝本当に女の人が書いたものかな、と疑いたくなるような文の流れ。かゆい所に手の届くような文章はやはり女性のすばらしさだが…。

〔けなす点〕

①　カメラ・ハント＝他の号の緊縛写真の良さは、両性合意の上にも、男上位が確定していることにあると思う。ヤング向けの週刊誌などに出ているヌードには、〝私はいい体してるでしょう。あら貴男、またオナンしてるの？〟といってるような感じがある気がするが、緊縛写真から受ける小生の感じは、本当に自分が主体となっているようで、非常に好感が持てるのだ。

さらに欲をいえば、縄を、ただヌードの小道具として使うのではなく、各部分強調のためのものとして、女体の美を出すべきだと思う。今の緊縛写真には、縄は小道具の域を出ていないものが多いように思われる。

○

〔貴誌発展向上のために〕

①　M女性の告白を多く載せることを望む。人数の多いことよりも、もっと長いもので、写真と共に掲載してほしい。

②　グラビアの復活。全裸での緊縛のみならともかく、山本五郎さんの和装縛り写真など、和服の美しさはどうしてもグラビアが必要だと思う。

以上、生意気に文句を書かせていただきましたが、向上を願うためと、御寛恕下さい。

『くつわ装着』
絹川美代子

○

を読んでいないから、この号に限ってのことだが、写真に緊縛感が全然感じられない。これは余計なことかも知れないが、台湾女性を使ったのは残念に思う。台湾独立青年同盟の人の話によれば、台湾が「男性天国」であるのは、外貨を稼ぐためであって、男に充分サービスしない女は、金門・馬祖の軍用慰安所に送られて、一生、出て来られない、ということです。こんな点から考えると、何か割切れないものを感じ、どうせならモデル志望者を中心にやってもらった方がいいような気がする。

②　青春の陥穽＝小生がM男は大嫌いの故に……。

○

①　緊縛写真の良さは、両性合意にあると思う。どなたか有志の方、代筆してあげて呉れませんか。

○編集者に会いたいという便りがよく参りますが、特別な用件も書かず莫然と逢いたいだけでは、誰も至って忙しい身体ですので、返事に困っております。

○投稿原稿の採否を即決で求められる方がありますが、抜群の傑作原稿でしたら予定した分と入れ替えてでも早く掲載したいという熱意は持っていますが、応募原稿の採否を即決で返答するという時間的余裕は持っておりません。

○M男性モデルの方を募集したわけではありませんが、先月号のこの欄でサジスチン川野香代さんのことに言及しましたら、早速沢山のM性の方から便りが来ました。若し御希望の方があれば連絡先を通知しておいて下されば機会がある節は、お誘いします。

○高村浩子さんはお仕事の関係で中々休みがとれないようですが文章の方は書いて呉れるそうです。荒尾慶子さん、前田真知子さんも続きやその後を書いて下さるとのことです。後続の女性愛読者の方々の登場を、読者の皆様と共に心よりお待ちしております。

〈短歌〉

## 変身のよろこび

中村純

身にまとう女の下着ここちよく
鏡にうつるわが変身は

○

変身の化粧なまめきよろこびは
女としての責めに泣くとき

○

猿ぐつわひと鞭ごとに滲みでる
被虐の嗚咽部屋にこもりぬ

○

目隠しの暗黒のまま恥かしき
拷問に泣くマゾのよろこび

○

悦虐の果に飛び行く宙天に
わが桃源の夢ぞ流るる

○

〈大橋美代子さまに捧ぐ〉

ハリツケの柱背負いて縛られし
受刑のすがた美しくあり

○

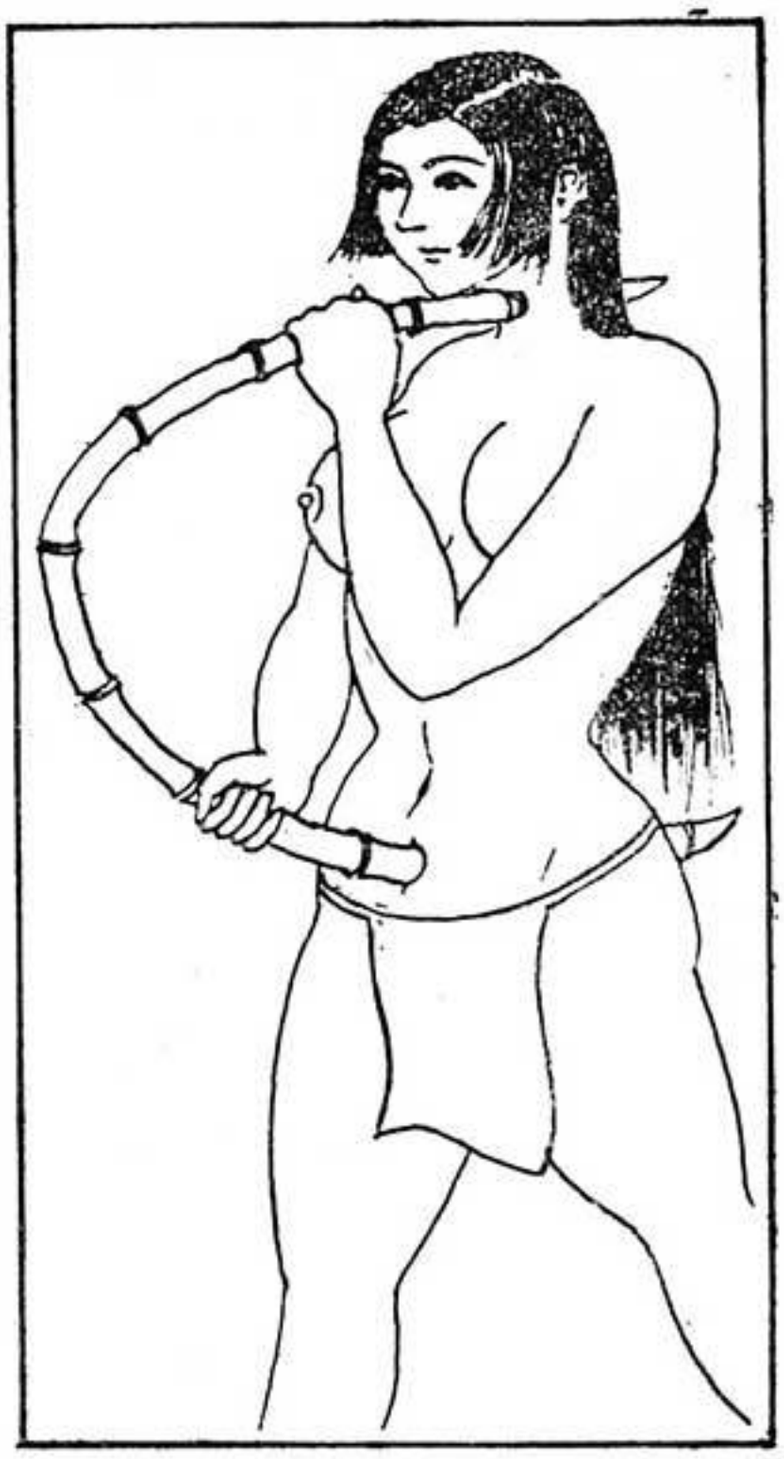
磔の美女悩ましく跪けども
隠すすべなし柔き艶肌

○

大の字に引き伸ばされし柔肌に
よろこびありと知る人ぞ知る

○

目隠しのハリツケ姿美しく
マゾにさまようヒトぞしあわせ



『串刺自決』　桐原紫門

## 最近の・・・・
## 緊縛シーンから

東山映史

最近の緊縛映画から、目立った興味深い作品をピック・アップしてみよう。

大映の秘録ものシリーズ、女牢ものの「秘録長崎おんな牢」が面白かった。

安田道代から新人の川崎あかねが抜擢されて、あいのこの女みつを、文字通り体当りで演じてサジスチンの目を楽しませてくれる。

先ず巻頭から、牢内のハリツケの処刑シーンを見せる。そして、放火、主殺しの容疑で投獄されたみつの拷問シーンが、みもの。

吊るし責めでグルグル回転させられるが、それでも白状せず、ウツツ責め、前手カセをはめられての拷問など、囚衣をめくられ、妖艶な姿態をさらす。凄まじかったのは、南蛮渡りと称せられるロウソクの波渡り責めである。半裸で豊満な乳房の上を荒縄でギッチリと四巻き緊縛され、後ろ手に縛られている。そして口にローソク立てをくわえさせられ、細い板の上を這っていく。頭上にも、またローソク立てをのせられて、ゆらゆらさせる。板の下は、ガラスの破片が敷きつめてある。妊婦の遊女上がりのあやめが力つきて落ちそうになると、みつがかばって自分も下に落ちる。

みつは無実の罪で、菱縄縛りでキツチリ縛り上げられ、ハリツケになる。スチールには半裸の処刑姿はないが、緊縛感はある。

独立プロでは最近、売り出してきた青山美紗の緊縛シーンを十分に見せてくれた。

山荘で閉じ込められた彼女が、逃げようとして捕えられ、後手に縛られ乳房の上下を緊縛される。そして松平康に犯されるが、後手が下じきになり、痛そう。「オシッコに行かせて……」と言うが、「そのままで行け」と突き放される。便器の上に後手緊縛で跨がったところを覗かれるシーンが見もの。だった。まだセリフや演技に稚いところがあるが、それだけに楽しい。

その点、「花と蛇」よりの「肉奴隷」の緊縛シーンがよかった。バーのマダム静子が誘拐され、地下の土蔵の中に閉じこめられる。腰巻一枚で柱に縛りつけられ、排尿シーンをとられる。正に羞恥責めの圧巻である。そして皮製の貞操帯をはめられ、肉の奴隷として飼育されて行く。団先生お得意の構成である。

洋画では「奴隷の復讐」が、吊るし責めのシーンを、ふんだんに見せてくれた。

## 私の情感

# お灸と若肌

亀山敏雄

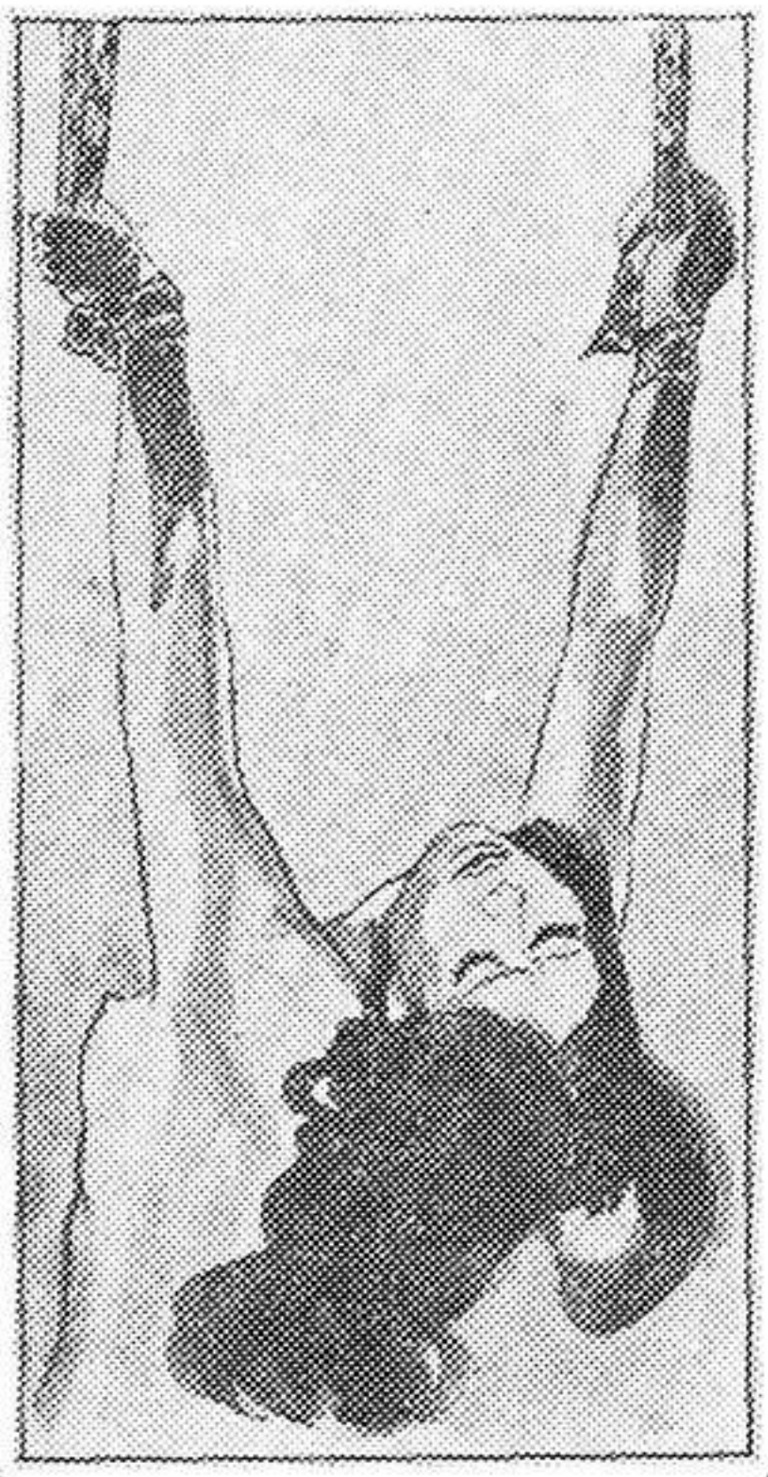
お灸の跡。この頃では、若者の背中に殆どそれを見ることは出来なくなった。まことに淋しいことである。老人の疲れた背中では、いくらマニアの私といえども余りパッとしないが、艶やかな、きりっと締まったハリのある背肌に形の整った灸跡がキレイに並んで浮き彫りされているのは、実に美しく魅力あるものとして、私に夢を与えてくれる。

灸跡は、私にとってセクシャルな幻想の根源ともいえる魅惑の星なのである。

お灸が、単に治療のためばかりではなく、古くから懲罰的な手段にも用いられ、お仕置としてすえられた者が相当に居るだけに、なおさらその瞬間の情景を想像してしまうわけであるが、お灸そのものの熱さから連想される私のひそやかな悪魔的情感が、キレイな肌に印された小さな灸跡によってかき立てられてしまうのだ。

現在の若肌には殆ど見られない灸跡だけに、ごく稀にそれを発見した時の私の受けるショックと感激は、われながら驚くほど大きくなっているようだ。

なぜ、お灸をすえる人が少なくなったのだろう？　お灸の跡は、すばらしい夢を内包する、美しい記念碑であると思うのに……。



『苦悦の懸垂』　府和糸男

## M女性を求め

# 縛りの善悪

公原務

私は現在25才ですが、三年程前から一度女性を縛ってみたいと念願しながら、まだ果たしておりません。願望は強いのですが、ある一面で、これを行なうことは現代の生活から外れた悪行為ではないか？　という気持が出てきてならないのです。心の内では常に善と悪との闘いが起きているのです。

しかし、もし縛りそのものが悪としても、M女性が私の前に来て「どうか縛ってください」と望んで、縛られて幸福を感じるなら、善に変わるのではないかと思っております。

結局は、私の、はかない夢なのかも知れませんが、毎月の誌上で見られる、夫婦プレイの記事などを読むにつけ、願望しながら出来ない自分がしごく惨めな人間に思われてきて仕方ありません。

現在私は、田舎の両親からよく縁談を持ち込まれておりますが、気が進まないので断わり続けています。M性でない女性とは結婚しないつもりだからです。

前記のように、縛って愛したいという願望の強い私が、悪の自責にかられることなくその願望を果たすためには、それを善に変えてすべき受入れてくれる女性、つまり縛られて愛されることを望むM女性でないと、結婚してもうまく行くはずはないと思うからです。

自分から、縛って欲しいと申し出るような女性が、そうザラに居るはずがないことは、よく分かっていますが、貴誌に投稿されているM女性たちのことを思うと、決して絶望する必要もないと考えています。

人間は、自分の持つ欲求を無理なく満たすことに努力すべきだと思う私の頭の中は、今、お気の毒な荒尾慶子様のことで一杯になっているのです。

結婚後わずか六カ月で、御主人を亡くされたという荒尾様は、今後どう生きてゆかれるのでしょうか。そのM性も、お独りではどうしようもない、じれったさに悶えられることでしょう。

強い願望を果たせずに苦しんでいる私には荒尾様の辛さが本当によく分かる気がします。キューピットは現れないものでしょうか。

# 短信往来

## 再び、みさ子さんへ

中宮　栄

いつかは陽の目を見させて戴けるだろうと懇望の短信が、六月号によって実現したことは一読者の身にとって誠に幸せな心地です。

ただ欲を申せば、既述した通り第一信が、お目に届いていないのが残念です。（機会がありましたら、生原稿を私信として読ませて頂きたいものです）

今度の、貴女の「過去告白記」で、SM関心事の急速度な強まりも、むべなる哉と思いました。内心、凄まじいお方だとも思いますが、ここで私のほうが物怖じては全く竜頭蛇尾を地で行くも同然、折角のチャンスを一方的に放棄することにもなりましょう。特に、何が物怖じる原因かといえば、さほど興味がなさそうだった現在の貴女の男性パートナーが、今や、〝特訓欲〟をむき出しにし、同時に、貴女自身が知らなくても、独占欲を抱き出しているのではないか……と感じられる事です。言葉を悪く変えて申せば〝ヒモつき〟にされ、おどらされているのではないかとの疑いです。

さて、益々意欲が盛んになっておられる貴女と、御主人と調教者との関係を、この際、念頭にせず考察するならば、「奴隷牝」の願望は、現実生活として体験されるまで、多くの読者を煽動し続け、悩まし狂わせる、有難迷惑な人気者になるでしょう。「ストップ・ザ・サノ」の喚声が湧き、小康を得た後の、その先の暮らしぶりの方が待たれるようになるに違いなく思います。

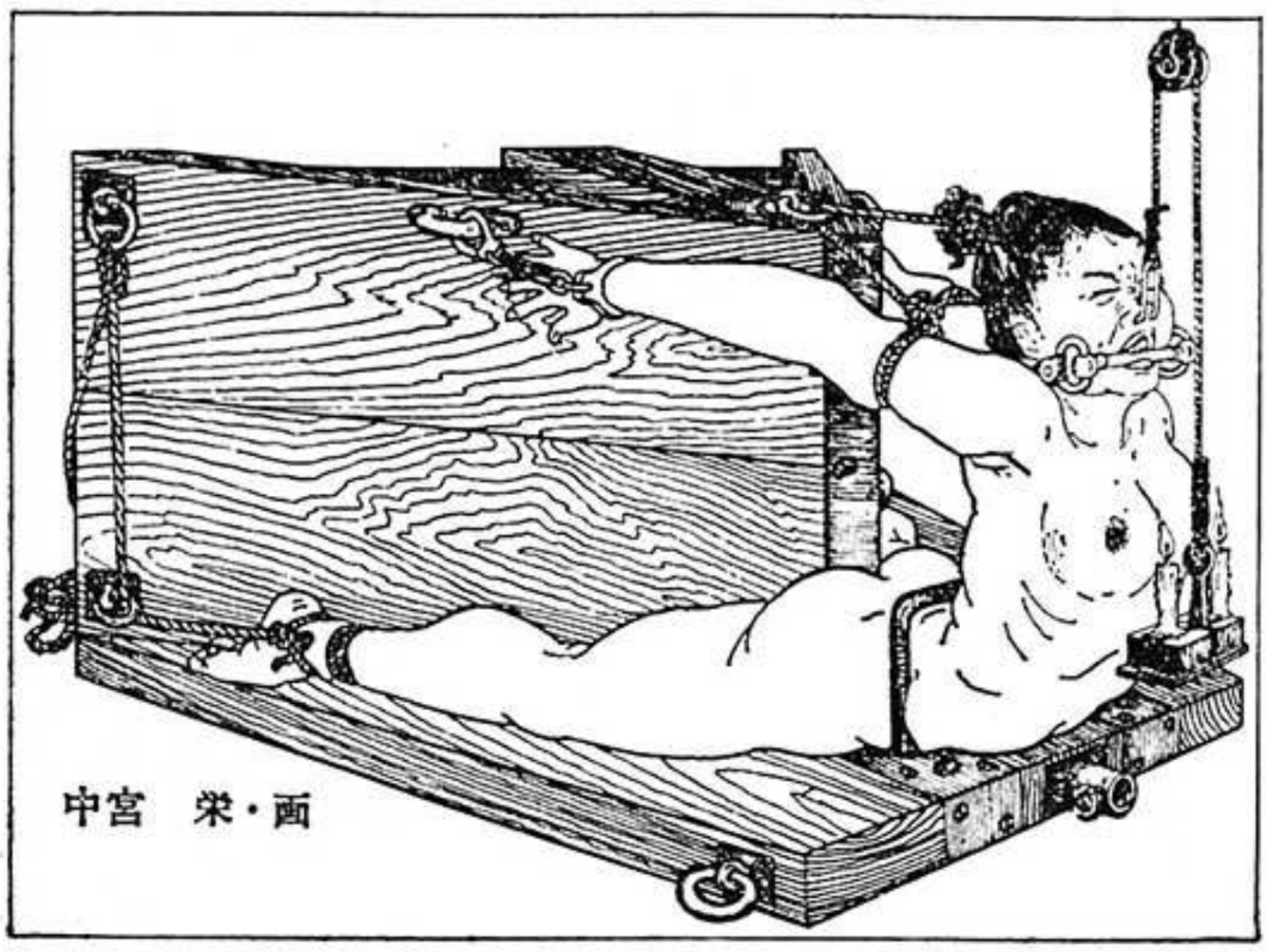
確かに、目下の調教師的存在のお相手氏は「変わった女」という見方だけで歩調を合わせているのかもしれません。投げやりな縛りと、別な男性目的で上の空なムード。写真で知る限りでは、どう見ても、貴女の一人相撲のようです。城山ほずみ嬢と同一人物だったとは、思いもよりませんでしたが、自負する〝グラマーな肉体〟を、今後、どう天稟の資質に助けられて魅惑化して行くかを検討して、馴致成果を続けて「奇ク」に披露したいと考えています。

奇ク誌は、全般的に〝縄〟の魅力が主ですが、そこへ皮、金属、合成樹脂系の美装で、座敷牢的雰囲気から洋風サロン的雰囲気で奴隷牡（コンパニオン）の登場に夢をはせるのです……。ミコの華麗なる変身を真似るわけではないのですが、乳房の豊かさを、強調して蜂腰のように胴部を締めつけ、贅肉をとった観賞用人体へと、飼育期間を通じて変えさせた時、マニアなら「やった！」と歓声をあげるでしょう。

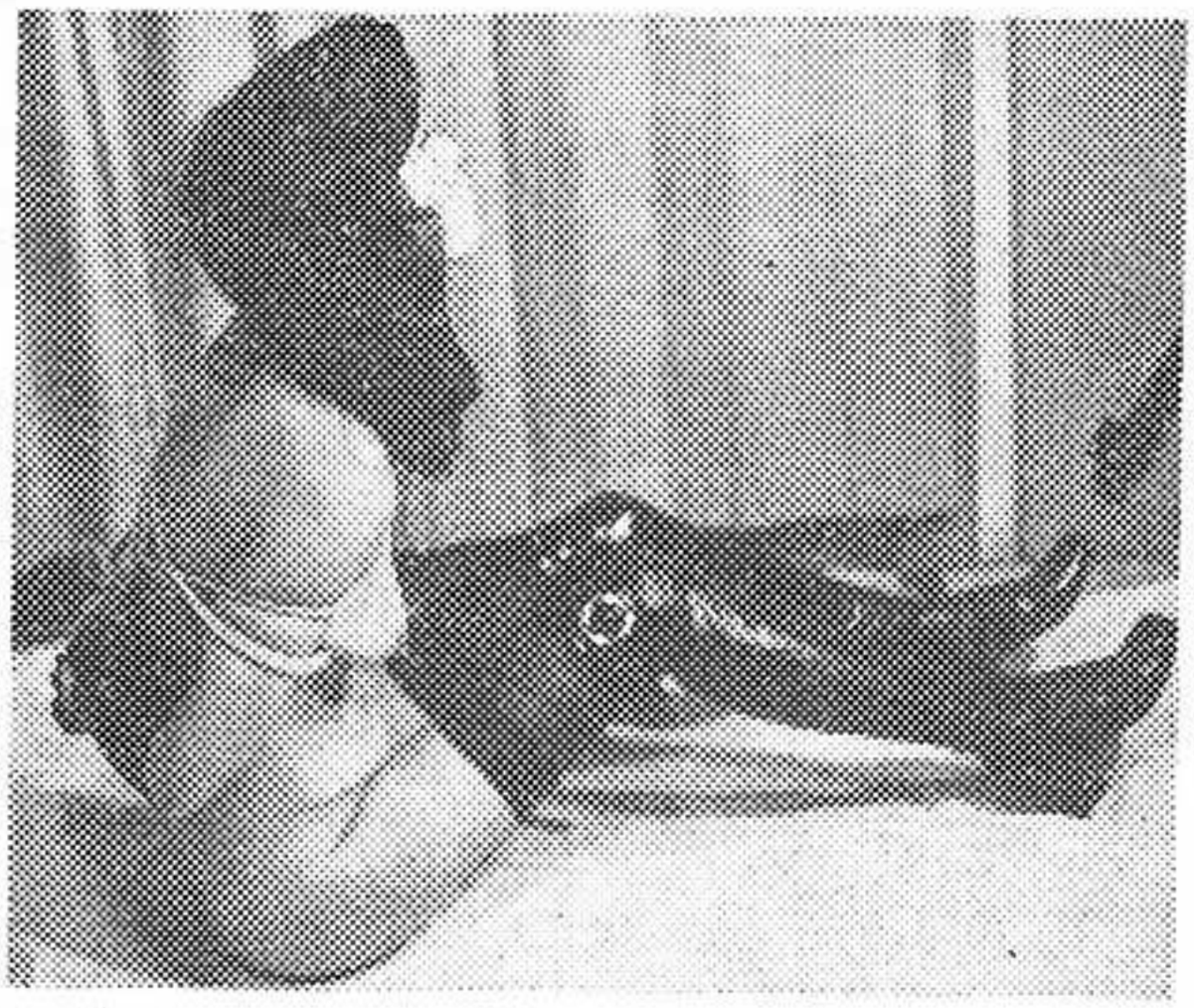
恐らくそうなるとM的関心に飽いて、SM女王の王座を狙う不敵さで、奴隷牝からの一躍出世の機会を待ち、私からは遠い世界へ、離れて行くことになるのでしょうが、それもアブ世界の栄光なのかもしれません。

保身から、今の世の中では自虐的悦楽の方が無難と思うのか、どうも「ヤプー」志望の温健（？）な種族が多いようです。拍車の鳴るブーツを履いて君臨するようになっても、女の老けは問題にされないようですし、再々度の変身は女ならではの活路です。それにしても、のっけから妻帯子持ちの男性という立場で呼びかけたのですから、あなたに対する制約感はおのずと存在するわけですし、今後の交歓と進展は、面識を得てからのことにまかせるだけです。

短信の筈が、いささか駄長の傾向になりました。それと云うのも貴女の文章中〝リンチ〟の描写が



中宮　栄・画



# 妻をお貸し致します

東京ＹＹ生

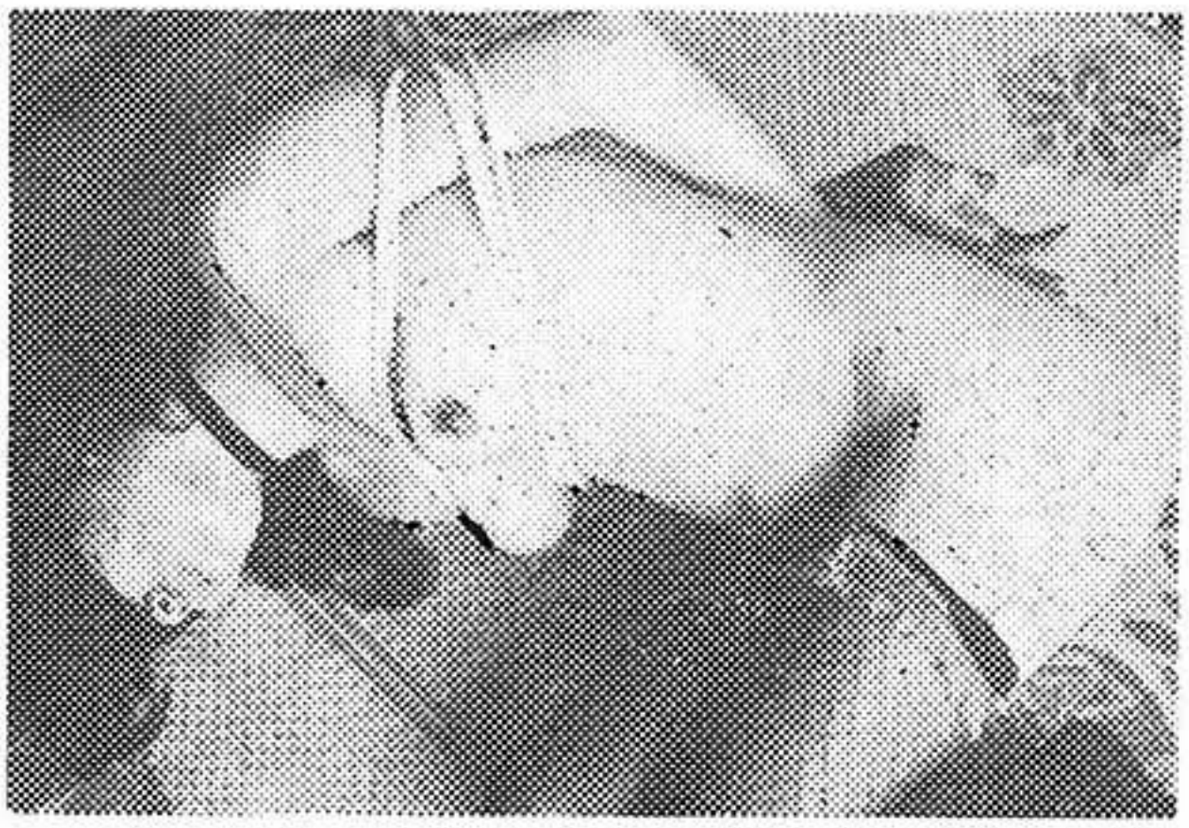
三回にわたってモデル募集に妻を応募させましたが、やはり関西と東京という地理的なギャップもあり、且つ妻が一子の母ということもあって、なかなかうまくはゆかぬものです。

そこで小生が飼育旁々一生懸命、この妻を写したり責めたりしているのですが、辻村様のカメラハントのようにはまいりません。これが本当の経験不足というのでしょうね。

フォトは最近のものです、御笑覧下さい。

時々、投稿するこのような写真が、辻村様あたりのお眼にとまりご指導願えないものかと（もちろん妻は喜んでお貸し致します）考えたりしております。

なにはともあれ、先輩ご同輩楽しく頑張りましょう。なお小生好みの欧米スタイルとでも申しましょうか、皮のロングブーツに皮手袋またはハイヒール等々でのプレイ、同好の方おられませんでしょうか。また、その様なスタイルでプレイしたいＭ女性の方、お便りお待ちします。



あって、実録見聞をレポートする気にされたのです。私刑とＳＭプレイは、同位置で論ずる対象ではありませんし、この際は、「貴女もそんな事を知っている……。私もだが」程度のお話でしかないようです。光景目撃の感想から、私だったら悦楽に変えることが出来るのにとの羨望が聞かれたように思え、被虐欲の強さに一段と恐れ入ったのですが、それによって、犯罪的行為と遊戯的性欲発散の方便との差異の認識が、おありになるという得心が得られたこともお伝えしておきたいのです。何しろ犯罪行為は人命無視ですから、記述中にあったホステスが悶絶したとしても、加害者達は死体を遺棄して、手錠を刑事にかけられるまで知らぬ振りをするでしょうし、腹いせを十分に晴らすことだけが目的ですから、残酷極まりない、こらしめをすることに無我熱中するのです。その、〝見せしめ〟に立ち会わされた貴女が、願望夢想の頂点に回想のリンチ光景を置くとしても、プレイでは、堪能の極致をマイナスして考えて置くべきでしょう。

併載のイラストは、見せられた写真の記憶が生々しい内にスケッチしておいたもので、絵としては完成していません。このような写真が好事家相手に流れていたとしたら、恐らく、高値で売りつける〝資金源〟のためにプリントされたものでしょうし、それだけでも〝特殊な社会〟だと知れましょう……ＳＭブームに便乗した。

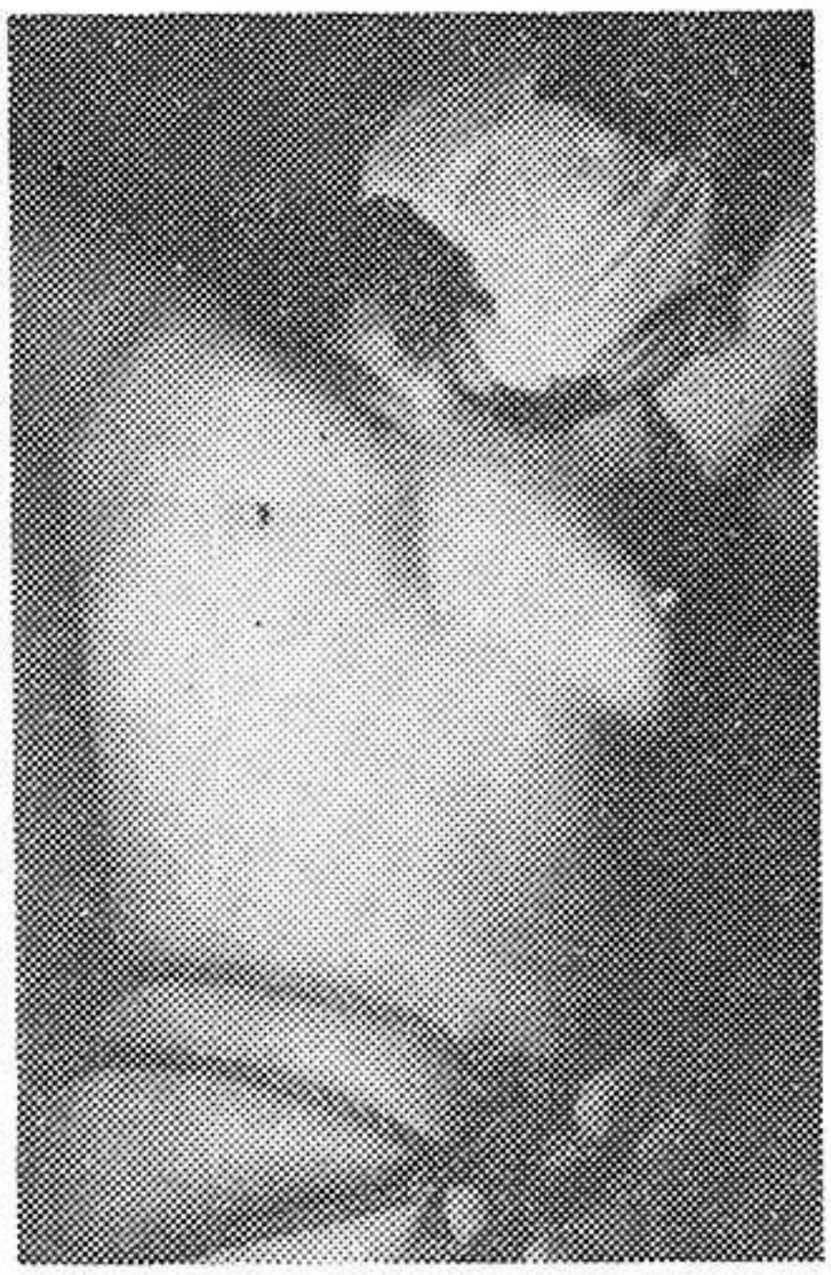
貴女の望む〝すばらしい男性〟ぶって便りして来ましたが、風を装うだけであったと思われてしまう時が来るかもしれません。でも踊り場へ立つまでの、階段の一段をつとめることとなれば、こうしてお便りしてきた事も無益ではなかったと思うでしょう。

御機嫌よくお過ごし下さい。

柴利好氏へ

# 「奴隷妻」について

小竹一浩



『夫の行為を一途に受け容れ、苦痛や屈辱を愉悦の快楽にまで昇華できる妻こそ、本当の意味の「奴隷妻」である』との、柴利好氏の論旨には全く同感で、そうでなければSMPなど無理でしょう。

唯、私は「奴隷」という言葉は余り好きではありません。スレイブ・プレイとでも云えば、大分ニュアンスが近づく感じですが、奴隷の語感からは、悦虐、共に楽しむ、羞恥、甘え等のイメージが湧かないようです。勿論「奴隷妻」と云えば響きも良く、素直な妻という感じのあるのは確かで、他に適語がないので私も使ってはいますが、何か良い語はないものでしょうか。そのものズバリの「プレイ妻」では面白くないですね。

ユキの胴鎖については、大分以前に初めて簡単なT字状のものを一昼夜着用させてみましたところが、外した跡は見事なミミズ腫れで、ユキも痛痒さを訴えていました。腫れのひくのを待って、次は二日、そして一週間、遂には一カ月と慣らしていきました。肉体の違いとはいえ、女性は確かに鈍感（ゴメン）で忍耐強い様です。

では、折角慣れたのに何故そのまま続けさせなかったかというと、

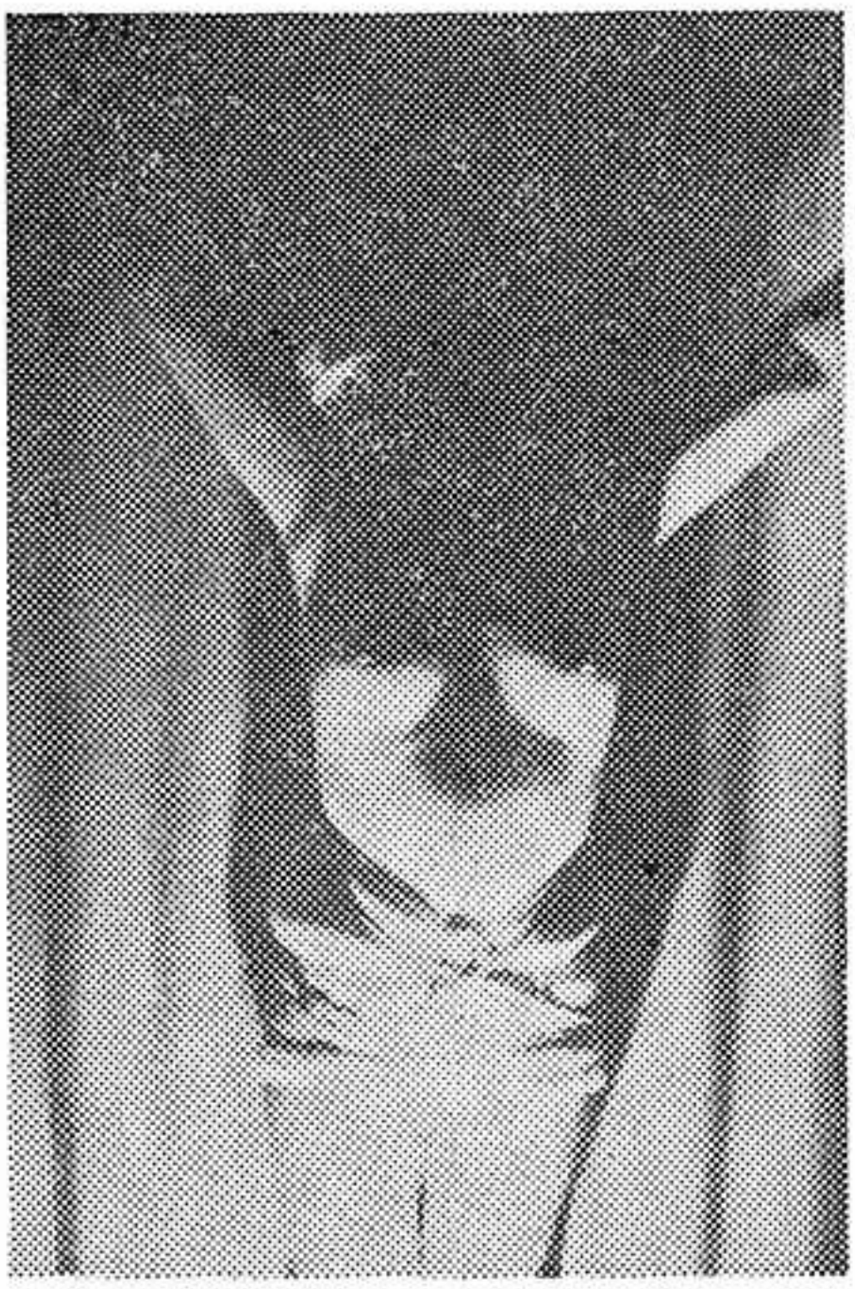
一、社会生活に伴う諸心配。

二、これ以上続けると、内出血の為に肌が変色し、痕跡を留めることになると思ったこと。

三、これが最大の理由だが、マンネリ防止の為ということ。

の三点です。これは私のSMP（特に夫婦プレイ）に対する基本的姿勢なのですが、刺激の足りないプレイは、気の抜けたサイダーの様に味気ないと思っています。といって、より強い刺激を追えばキリはなく、遂には破局を迎えかねないのですから、同じプレイでも新鮮さを残すよう、鎖に限らず紐類でも、二昼夜以上常用さすことは最近全くやっていません。プレイタイムに新鮮さが感じられるように、普段は極く平凡な夫婦で居ることを心掛けています。

「自由な時間さえも、常に奴隷妻としての証を肌身に感じ……」というのは、余程、空闇に悶えるマゾ女性か、新婚ホヤホヤでなければ、却って逆効果ではないかと思うのですが如何……？



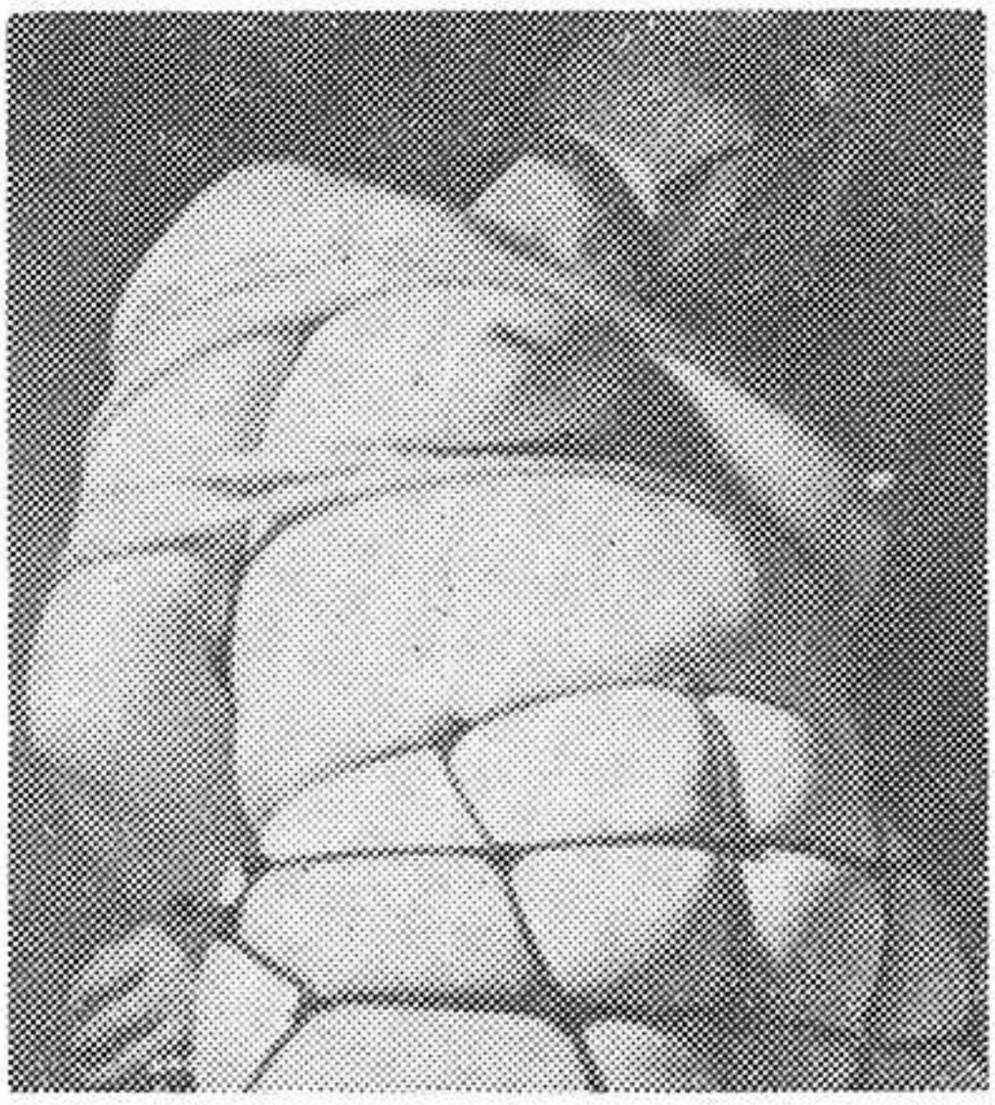
つまり、全日制奴隷では、プレイタイムに入っても、妻にとっては単なる延長感から、刺激も責め甲斐も薄らぐということです。十数年を経た古狸のヒガ目だと云われればそれまでですが……。

尚、鎖の背面二カ所の留め方ですが、おっしゃる様にノート・リングも時折り使用しますが、これだと、その日の気分で締め上げたり緩めたりするのに調節が面倒な為、私は柔らかい針金を使っています。少し長目の針金を一方につけて置き、他方の鎖に通して、自由に締め具合を加減するのです。

六月号の御質問については、余り場数を踏んでいないので、主にユキについての私観をお答としますが、「小竹一浩式緊縛」とは、恐れ入ります。肥えた牝豚なので皮肉に喰い込んでいるワリには耐えられるの

でしょう。それに、緊縛と云ったところで棒などをテコ代わりにするか足を掛けての荷造り式でもやらない限り、とても吊るしの時のような喰い込みは出来ないものです。従って、全身が麻痺するというのは、特殊な責め（逆海老ｅｔｃ）以外、殆どあり得ないようで、まず、痺れは腕だけと考えても良いでしょう。如何に緊縛に慣れた女性でも、腕の痺れない人はなく、唯それを快感に変え得るかどうかの違いと思います。

ユキが、解縛後、すぐに酒肴の仕度にいそしむのを御不審のようですが、逆吊り等の直後は別として、決して無茶なことではありません。尤も、麻痺しきった腕に触れると非常に痛がりますが、構わず揉みほぐし、台所へ追い立てた方が回復は早いようなのです。また、寝かせておくより、立たせた方が良く、全身、ロープの撚り目の鮮かな縞馬の様な裸身で動き回るのも一興です。



次に、御質問の縄跡ですが、普通のロープによる緊縛では、例えクッキリ残っていても意外に早く消えるものです。但し縄の間に肌を挟んでしまうと赤黒く皮下出血し、その跡は早くて五日位、吊り等で出来た場合は一カ月近くも消えずに残るようです。去年、ユキの左足首の痕跡が、大分長い間、消えずに困ったことがあります。

だいたい、赤黒くなった縄痕は消えにくいのですが、この赤黒い筋の所々が、ブチの様に薄い色に変ってくれれば消える前兆です。従って皮下出血の度合は、赤色の濃淡で判別しています。

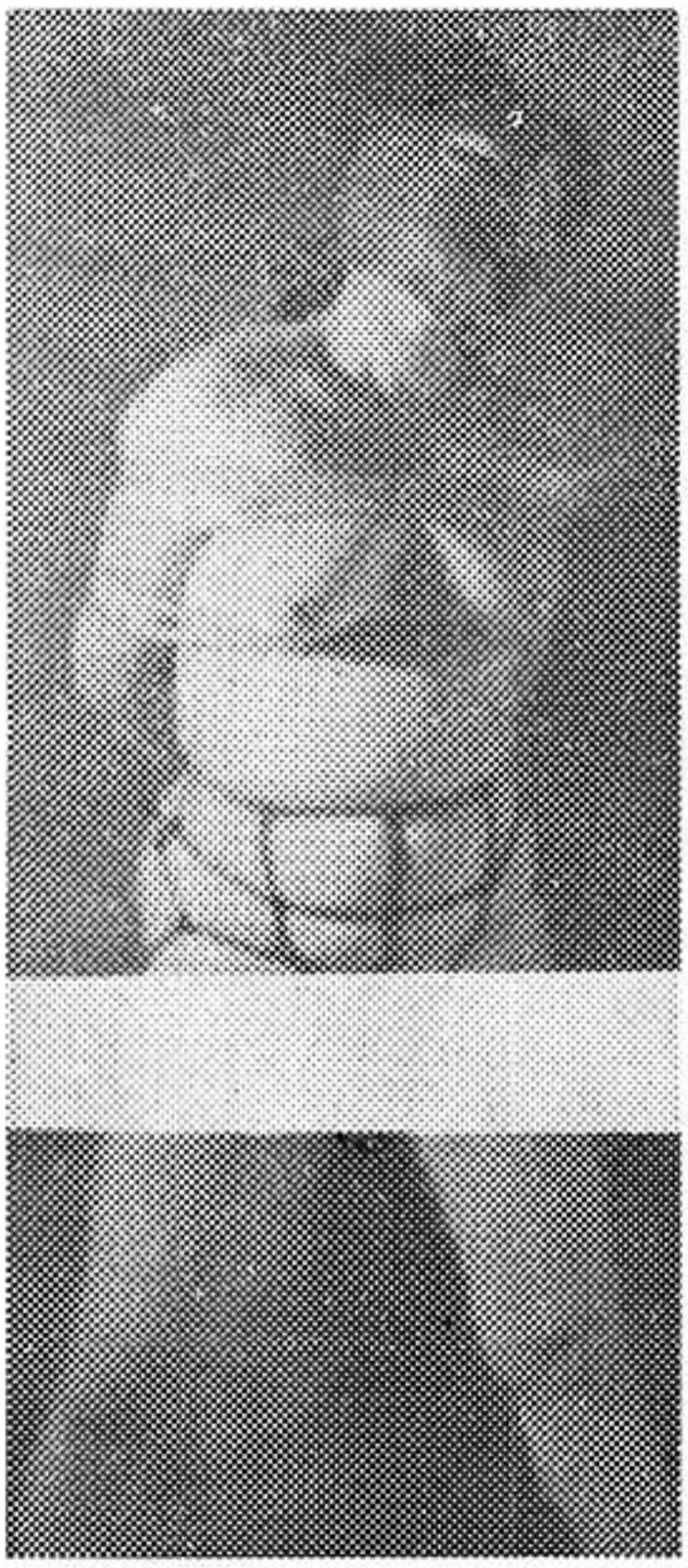
余談ですが、私は、開股吊りは当然ですが普通の逆吊りの場合でも、両足を一緒にして一本のロープで吊ることはしません。万が一ロープが緩んだり切れたりして、頭から落下したらそれこそ大変なので、必ず両足別々にロープを掛けることにしているのです。

十有余年も縄を手にしていながら、じっくり観察したことも研究したこともない不熱心さの為、御期待に添えるようなお答が出来ませんが、再度の機会を約し、勘弁して頂きます。

尚、文中に「吊る前の縄掛けは強くても緩くても、吊ってしまえば同じである」とお書きのようですが、少しく異論がございます。「吊り」にも前戯が必要だと思います。マゾ気を昂める為にも、ある程度まで陶酔させてから吊らねば、とても辛抱出来るものではありません。つまり、単なる縛り以上に、吊りでは精神的なものが、肉体的苦痛まで左右するという、プレイ常識が必要とされます。従って私は、甘いプレイで軽く責めた後に、強い緊縛に切替えて数分間責め、心の下準備をさせてから吊りに掛かるという段取りを考えているわけです。

心の昂ぶりもないのに、緩く縛られたままいきなり吊られたのでは、どんなマゾ女でも肉体的苦痛のみで、とても耐えられるものではないだろうと思いますが如何。

色々勝手なことを書きましたが感謝心こそあれ、弁駁の気はサラサラありませんので、今後とも宜敷くお願い致します。



## ＜最新撮影＞異色美人モデル緊縛フォト選

**Y組新百態**　大手札型印画紙（9×13糎）極鮮明焼付

各組　一枚一組（送料共）

四組四枚　五〇〇円
十組十枚　一〇〇〇円
二十組二十枚　一八〇〇円
五十組五十枚　四〇〇〇円
百組百枚　七〇〇〇円

（郵便番号　545—91）

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆


1 台上に晒す全裸（三浦　純子）
2 開股バイブ責め（三浦　純子）
3 尻挙げ開脚責め（三浦　純子）
4 二つ折り臀挙げ（三浦　純子）
5 麻縄強烈柱縛り（三浦　純子）
6 エビ責め縄猿轡（三浦　純子）
7 海老縛り閹責め（三浦　純子）
8 正面エビ強烈責（三浦　純子）
9 喘ぐ縄猿轡痛め（三浦　純子）
10 痛苦に耐える女（三浦　純子）
11 鴛づかみの黒髪（三浦　純子）
12 二折りの引回し（三浦　純子）
13 開股正面逆立責（三浦　純子）
14 豊満を縛る魔手（座間　明子）
15 沖縄美人の表情（座間　明子）
16 高らかに笑う顔（座間　明子）
17 股間縛りに喘ぐ（座間　明子）
18 美しき全裸縛（座間　明子）
19 後手縛りを誇る（座間　明子）
20 開股縛りに諦観（座間　明子）
21 緊縛に悶える足（座間　明子）
22 白肌をくびる縄（前田真知子）
23 鏡に映るエビ責（前田真知子）
24 全裸の美女に縄（前田真知子）
25 さらけ出した女（前田真知子）
26 絖肌を柱に晒す（前田真知子）
27 首縄菱亀甲縛り（前田真知子）
28 柔肌に喰い込む（前田真知子）
29 裸女を押込める（前田真知子）
30 光に映える白肌（前田真知子）
31 逆反り弓吊り責（前田真知子）
32 責に諦観の美貌（前田真知子）
33 開股責めの序曲（渡部　好美）
34 蝋涙責めに哭く（渡部　好美）
35 悦虐の開股縛り（渡部　好美）
36 閹中の股間縛り（渡部　好美）
37 全裸緊縛の愉悦（渡部　好美）
38 爛熟した女体責（三浦　純子）
39 ムチ打ちの洗礼（三浦　純子）
40 愛妻飼育の過程（三浦　純子）
41 股間縛りの正面（三浦　純子）
42 海老責に喘ぐ顔（谷山久美子）
43 強烈二折り責め（谷山久美子）
44 赤裸の尻を暴く（谷山久美子）
45 アニマルの表情（谷山久美子）
46 苦痛に反る足指（谷山久美子）
47 極限の苦痛襲う（谷山久美子）
48 悦虐悶えの果て（谷山久美子）
49 緊縛最高の悦楽（谷山久美子）
50 歯で咬んだ猿轡（谷山久美子）
51 責めるの許して（谷山久美子）
52 苦悶の末の頂点（谷山久美子）
53 椅子開股で晒す（谷山久美子）
54 強縛愉悦の極み（谷山久美子）
55 大の字開股縛り（谷山久美子）
56 情容赦ない麻縄（谷山久美子）
57 厳しき後手縛り（谷山久美子）
58 ムチ打ちに泣く（谷山久美子）
59 条痕を尻に残す（谷山久美子）
60 哀悶非情な麻縄（谷山久美子）
61 女性自身を晒す（谷山久美子）
62 柱に二女の連縛（好美・叢子）
63 責め疲れた二女（好美・叢子）
64 全裸の二女陳列（好美・叢子）
65 高手小手を開陳（好美・叢子）
66 椅子開股の二人（好美・叢子）
67 連縛双丘の珍景（好美・叢子）
68 羞恥に悶える女（叢子・好美）
69 美しき床の飾り（叢子・好美）
70 羞らう美女二人（叢子・好美）
71 正面相対の連縛（叢子・好美）
72 股間縛りの併立（叢子・好美）
73 尻も何も丸出し（好美・叢子）
74 捕われの全裸像（渡部・川路）
75 一体にした緊縛（渡部・川路）
76 点火した蝋燭責（渡部・川路）
77 足挙げ正面棒責（川路むら子）
78 棒縛り羞恥責め（川路むら子）
79 三本の棒で拘束（川路むら子）
80 麗しき首縄旅情（前田真知子）
81 伸びやかな肢体（前田真知子）
82 一糸まとわぬ女（前田真知子）
83 灯篭の前で縛る（前田真知子）
84 Mを恋する表情（前田真知子）
85 無垢の肌に麻縄（前田真知子）
86 美は麻縄を超越（前田真知子）
87 白肌と汚れた縄（前田真知子）
88 金髪は縄に動く（シーラケニ）
89 後手縛りで開脚（シーラケニ）
90 両手挙げ美肌晒（シーラケニ）
91 日本式胡坐縛り（シーラケニ）
92 碧眼に驚きの目（シーラケニ）
93 白人の肌を縛る（シーラケニ）
94 金髪碧眼の女性（シーラケニ）
95 高手小手に縛る（シーラケニ）
96 諦観白人の表情（シーラケニ）
97 投げだした全裸（シーラケニ）
98 卓上の一輪の花（シーラケニ）
99 畳の上に転がる（シーラケニ）
100 縛った異国の女（シーラケニ）

〔最新版〕美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙（9×13糎）極鮮明焼付

各組 一組一枚（送料共）

| | |
|---|---|
| 四組四枚 | 五〇〇円 |
| 十組十枚 | 一〇〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一八〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 百組百枚 | 七〇〇〇円 |

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚ですから、お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆


1 正面強烈亀甲縛（大島 照代）
2 美貌は鞭に泣く（関谷富佐子）
3 襲う影に慄のく（佐々木真弓）
4 弾む裸身に縄目（佐々木真弓）
5 柱縛りで鞭打ち（関谷富佐子）
6 縛られて困るわ（金原奈加子）
7 私を襲わないで（左近麻里子）
8 縛られて嬉しい（中河 恵子）
9 麗わしの縛女体（中河 恵子）
10 蒲団の上に狂う（関谷富佐子）
11 豊満女体の縄目（大島 照代）
12 二つ折りの裸身（川越美佐子）
13 痛打に哭く美貌（関谷富佐子）
14 長身の脚を伸す（佐々木真弓）
15 若肌は縄に美し（長井葉津子）
16 恥らいの女体美（中河 恵子）
17 何故私を縛るの（金原奈加子）
18 感泣する胴縛り（ローズ秋山）
19 猿ぐつわの悦虐（関谷富佐子）
20 荷造り縛りの女（中河 恵子）
21 足指はくの字に（佐々木真弓）
22 麻縄の柔肌責め（金原奈加子）
23 美しき亀甲縛り（左近麻里子）
24 柱縛りの隙間見（長井葉津子）
25 緊縛全裸の極美（左近麻里子）
26 海老責めの苦悶（佐々木真弓）
27 全裸の縄は輝く（佐々木真弓）
28 猿轡と縄に泣く（川越美佐子）
29 縄に喘いだ童顔（長井葉津子）
30 出臀を晒す縛り（佐々木真弓）
31 後手吊りの全裸（長井葉津子）
32 首膝縄にあえぐ（長井葉津子）
33 大の字で晒す裸（関谷富佐子）
34 全裸緊縛の哀愁（佐々木真弓）
35 高手小手の全裸（佐々木真弓）
36 真迫の縛プレイ（ローズ秋山）
37 豊満な裸身縛り（左近麻里子）
38 竹棒責めに悩む（大島 照代）
39 亀甲縛りで寝る（左近麻里子）
40 縄目に喘ぐ表情（中河 恵子）
41 開股縛りの正面（中河 恵子）
42 猿轡に喘ぐ緊縛（左近麻里子）
43 縛りの肌を見て（金原奈加子）
44 私は縛りが好き（金原奈加子）
45 強烈縛りを味う（金原奈加子）
46 麗身を横たえて（左近麻里子）
47 二つ折に弾む胸（佐々木真弓）
48 柔肌に縄は厳し（長井葉津子）
49 柔肌に痛む麻縄（左近麻里子）
50 全裸の女体引廻（中河 恵子）
51 開股縛りを諦観（左近麻里子）
52 突き出したお尻（中河 恵子）
53 あどけなき緊縛（金原奈加子）
54 首縄股間縛の女（長井葉津子）
55 強烈後手で括る（佐々木真弓）
56 恥しい縛り初め（金原奈加子）
57 海老縛りで悶ゆ（関谷富佐子）
58 猿轡と縄に泣く（川越美佐子）
59 縄に喘いだ童顔（長井葉津子）
60 出臀を晒す縛り（佐々木真弓）
61 後手吊りの全裸（長井葉津子）
62 首膝縄にあえぐ（長井葉津子）
63 大の字で晒す裸（関谷富佐子）
64 全裸緊縛の哀愁（佐々木真弓）
65 高手小手の全裸（佐々木真弓）
66 真迫の縛プレイ（ローズ秋山）
67 豊満な裸身縛り（左近麻里子）
68 足吊りで晒す肌（長井葉津子）
69 美体は縄に映る（中河 恵子）
70 逞ましき臀部晒（左近麻里子）
71 両手吊りに喘ぐ（長井葉津子）
72 左近麻里子の裸（左近麻里子）
73 開股縛りの羞恥（中河 恵子）
74 捧げられる女体（中河 恵子）
75 鉄砲責めの女体（左近麻里子）
76 麗わしの肌に縄（佐々木真弓）
77 後手縛りの連続（ローズ秋山）
78 開股の股間縛り（大島 照代）
79 強烈な縄目の女（川越美佐子）
80 逆エビ責め地獄（ローズ秋山）
81 豊麗な裸身の美（関谷富佐子）
82 羞らいの流し目（佐々木真弓）
83 肌に喰い込む縄（長井葉津子）
84 胴締縛りと猿轡（長井葉津子）
85 投げ出された裸（金原奈加子）
86 正面の亀甲縛り（左近麻里子）
87 開股縛りの女体（左近麻里子）
88 後手縛りの全裸（中河 恵子）
89 柱に晒す強烈縛（長井葉津子）
90 羞恥の脚挙げ姿（佐々木真弓）
91 豊かな乳房誇示（佐々木真弓）
92 美しい女の縛り（佐々木真弓）
93 股間縛りに羞う（長井葉津子）
94 ホステスの緊縛（佐々木真弓）
95 椅子坐開股縛り（中河 恵子）
96 無防備な両手吊（関谷富佐子）
97 息づまる猿轡（川越美佐子）
98 人身御供の乙女（長井葉津子）
99 両手吊で晒す肌（金原奈加子）
100 爪先立つ強烈縛（ローズ秋山）

〔優秀緊縛写真特選集〕
〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景　大手札四枚一組　大塚啓子　略号（むら）　五〇〇円
足挙げ開股責め　大手札三枚一組　梨花悠紀子　略号（あけ）　四〇〇円
猪吊り三態　大手札三枚一組　梨花悠紀子　略号（いの）　四〇〇円
責め衣縛り　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（せめ）　四〇〇円
強烈エビ責め　大手札三枚一組　玉田美佐子　略号（ねむ）　四〇〇円
後手首の高縛り　大手札三枚一組　玉田美佐子　略号（ねへ）　四〇〇円
椅子またぎの責め　大手札三枚一組　玉田美佐子　略号（ねと）　四〇〇円
全裸脚挙げ縛り　大手札三枚一組　長野良子　略号（てい）　四〇〇円
全裸アグラ縛り　大手札三枚一組　長野良子　略号（てへ）　四〇〇円
全裸屈伸縛り　大手札三枚一組　長野良子　略号（てほ）　四〇〇円
強烈エビ責め　大手札三枚一組　松本アサ子　略号（まと）　四〇〇円

吊り打ち　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号（やり）　四〇〇円
股間縛り法悦境　大手札三枚一組　絹川文子　略号（あけ）　四〇〇円
踊り子緊縛　大手札三枚一組　絹川文子　略号（ぬこ）　四〇〇円
月経帯のまま縛り　大手札三枚一組　遠藤百合子　略号（ゆす）　四〇〇円
縄目に悶える夫人　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号（ほく）　四〇〇円
髪を引き回される夫人　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（りこ）　四〇〇円
膨満正面縛り　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号（ほむ）　四〇〇円
マニヤ全裸緊縛フオト　大手札三枚一組　長野良子　略号（へな）　四〇〇円
強烈エビ縛り　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号（もい）　四〇〇円
乳房責の苦悶　大手札二枚一組　関谷富佐子　略号（もろ）　三〇〇円
全裸ムチ打ち　大手札四枚一組　関谷富佐子　略号（もた）　五〇〇円
強打に泣く裸身　大手札四枚一組　関谷富佐子　略号（むち）　五〇〇円

裸身の晒し　大手札三枚一組　関谷富佐子　略号（わあ）　四〇〇円
全裸股間縛　大手札四枚一組　関谷富佐子　略号（せら）　五〇〇円
双胸の強調縛り　大手札三枚一組　長野良子　略号（そう）　四〇〇円
動感海老責地獄　大手札三枚一組　一塚啓子　略号（とう）　四〇〇円
色褌の開股縛り　大手札三枚一組　長野良子　略号（いふ）　四〇〇円
鼻責めのアップ　大手札三枚一組　大塚・東浦　略号（きせ）　五〇〇円
乳房しばり　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（はす）　四〇〇円
木馬責三態　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（うい）　六〇〇円
鼻責めと緊縛　大手札五枚一組　大塚啓子　略号（うは）　四〇〇円
椅子責めの果て　大手札三枚一組　長野良子　略号（へな）　四〇〇円
檻に入れられた女　大手札二枚一組　大塚啓子　略号（いす）　四〇〇円
浴室の全裸刺青　大手札五枚一組　山原清子　略号（もの）　三〇〇円

鼻いじめ三態　大手札三枚一組　山原清子　略号（はね）　四〇〇円
鼻責め万華鏡　大手札八枚一組　山原・鈴木　略号（はた）　一一〇〇円
碧玉裸身緊縛　大手札三枚一組　刑部典子　略号（のん）　四〇〇円
くすぐり責め地獄　大手札三枚一組　大塚・東浦　略号（きす）　四〇〇円
灼熱の蝋涙責め　大手札四枚一組　大塚・東浦　略号（きせ）　五〇〇円
豊満な乳房を責める　大手札五枚一組　大塚・東浦　略号（きそ）　七〇〇円
女奴隷を飼育する　大手札五枚一組　大塚・東浦　略号（きて）　七〇〇円
凌辱されるマゾ女　大手札五枚一組　大塚・東浦　略号（きと）　七〇〇円
鼻責め悦楽　大手札二枚一組　大塚・東浦　略号（きな）　三〇〇円
全裸強烈羞恥縛り　大手札三枚一組　東浦ひかる　略号（なの）　四〇〇円
猿ぐつわにあえぐ裸女　大手札三枚一組　東浦ひかる　略号（なむ）　四〇〇円
全裸の緊縛姿態開陳　大手札四枚一組　遠藤百合子　略号（ゆり）　五〇〇円

# M資料分譲品一覧

○新人S女性出現○

逞ましき股に挟まる　大手札四枚一組　一〇〇〇円　略号（あと）

素足の脂がべっとり　大手札五枚一組　一二〇〇円　略号（あて）

縛った男をムチで料理　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（あさ）

女王様の人間便器になる　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（あす）

蠟涙の雨を全身に浴びる　大手札四枚一組　一〇〇〇円　略号（あせ）

尻の下につぶされた男　大手札二枚一組　六〇〇円　略号（あた）

エビ責めに弄ぶ女　大手札六枚一組　一四〇〇円　略号（あそ）

神酒を与える女神　大手札六枚一組　一四〇〇円　略号（あち）

咽喉輪を股責極楽　大手札四枚一組　一〇〇〇円　略号（あつ）

素足の足舐と嗅香　大手札五枚一組　一二〇〇円　略号（あこ）

M男性を尻に敷く　大手札六枚一組　一〇〇〇円　略号（まく）

人間犬の芸仕込み　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（あえ）

女の尻に顔がつぶれる　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（あく）

足指に挟んだ菓子　大手札二枚一組　六〇〇円　略号（あの）

男を縛って弄ぶ女　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（あに）

尻責めと股責め　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（あぬ）

大男の訓練風景　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（みら）

男を刺し殺す美女　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（みむ）

男を尻の下に敷く　大手札十枚一組　一二〇〇〇円　略号（みう）

女の足下にうごめく顔　大手札六枚一組　一四〇〇円　略号（みれ）

汚物を戴く男　大手札六枚一組　一四〇〇円　略号（みわ）

男を馬にする美女　大手札五枚一組　一二〇〇円　略号（みか）

人間椅子の御褒美　大手札五枚一組　一二〇〇円　略号（みお）

飼犬に餌を与える　大手札四枚一組　一〇〇〇円　略号（みた）

浣腸器で男を弄ぶ女　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（みつ）

股で絞められる首　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（みね）

芳香を嗅がす尻　大手札二枚一組　六〇〇円　略号（みな）

人間馬の調教プレイ　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まの）

足舐めの奉仕と強制　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まわ）

股責めにあう男の顔　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（また）

女に縛られて弄られる　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まな）

踏みにじられる顔面　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まひ）

肩車に奉仕する青年　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まは）

男を縛って玩具にする　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まて）

首を太股で絞めあげる　大手札三枚一組　八〇〇円　略号（まや）

灰皿にされた男　大手札四枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そに）

裸女の長靴に悶ゆ　大手札四枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そほ）

美女に飼われる犬の生態　大手札三枚一組　八〇〇円　絹川文代　略号（そろ）

美女の手で縛られる過程　大手札四枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そち）

女御主人に使役される男　大手札四枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そと）

むしゃぶりつく素足の味　大手札三枚一組　八〇〇円　絹川文代　略号（そぬ）

凌辱と美女のなぶり者　大手札五枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そは）

素足を舐める構図　大手札四枚一組　一〇〇〇円　絹川文代　略号（そり）

M男性を尻に敷く　大手札六枚一組　一〇〇〇円　略号（そへ）

す。思うように、いじめて下さい。
（岡山県・松岡一男）

○

全国、なるべく大阪近郊の露出癖、露出狂、またはそれらに興味、好奇心をお持ちの方。私は、そういう女性が大好きです。実際に私の前で羞かしいことをして下さい。写真に撮ってあげましょう。貴女は私の露出ヌードモデルです。
（大阪市・今村清）

○

ゴムマニヤ、オシメマニヤの皆様。御無沙汰いたしました。しばらく沈黙を守っておりましたが、この期間、大変貴重な経験を重ねました。たまたま東京へ出張していたときに、フェチ、マゾに理解あるサジの気を持った娘さんに会うことが出来全く思いがけず、突然、プレーを五時間にわたり、行なうことが出来ました。ロープ、クサリ、手錠、オムツカバー、オシメ、メンスバンド、ズロース、パンティ・ストッキング、浣腸器、ローソク、エネマ、犬の首輪、ムチ、その他をフルに活用していただきました。あらかじめ私が丹念に作っておいた筋書通りに徹底的に五時間にわたって責め上げられマゾ、フェチとして全く冥利に尽きる最高の陶酔に浸ることが出来ました。とにかく、私が今まで本の中から知り得た凡てといってよいようなものです。全く私には考えもつかなかった強烈な、素晴らしい経験でした。さすがは東京です、色々な人がおりますね。マゾの皆様、絶望することはありません。待てば海路の日和です。
（山口県・安田隆夫）

○

大阪市北区の深田菊子様。五月号で貴女のお便り拝見しました。私は二十四才の独身、平凡な公務員です。ぜひ、友達になって下さい。お会いして語り合いたい。そして緊縛プレイや、その他、あらゆる羞恥責めをしてみたいと思います。
（京都・黒田祐介）

○

私は二十二才で大のSM的浣腸マニヤです。女のくせに同性の羞恥心を思いっきり、かきたてることに興味を抱いています。お友達がほしくて思いきって、お手紙を出しました。平常は他の女性と外見なんら変わることのない十人並みの女性ですが、心の中には、いつも浣腸のイメージが巣喰っていて、どうしようもないときは一人で空想したり独演したりしています。やはりガラス製の浣腸器は、あの感触が、ふるいつきたいほどの魅力があります。私は百CCグリセリン浣腸器、六百円。千CCオイルリガートル、九百円。エネマシリンジ、三百八十円。十四号のカテーテル、百円。総ゴム米国製携帯用洗滌器、七百五十円。洗滌用スポイト、五百円。紙オシメ二包、三百三十円。浣腸用スポイト二百円。などを持っております。浣腸器を挿入される羞恥から排泄をこらえて悶える可愛い同性は最高です。施術するばかりでなく、私も被虐者側にまわってみたいと思います。私と意を共通する方、よろしくお指導下さい。
（東京・高木桂子）

○

奇ク愛読の女性の方々へ。私は排泄物崇拝者です。ぜひ、あなたのものを、お恵み下さい。お声をかけていただけたら、どこへでもとんで参ります。
（東京・馬場房雄）

○

私は四十三才で家政婦をしてお

りますが、先日、部屋の掃除をしているとき、奥様の鏡台の下から貴誌が見つかりました。ページをくってみると、私と同じような趣味の方がおられることを知り、心強く思いました。そして、それ以来、ずっと奇クを愛読させていただいております。私の傾向は、主に浣腸と下着です。同性の中年過ぎの方、お便り下さい。できますれば下着交換を望みます。

（東京・宅間澄子）

○

SMは決して賤しいものではありません。人間というものの根本を問う内面心理への接近の第一歩でもあると思います。ただ、それを覗き興味的に扱っているところに異常だと思われてしまう要因があるのだと思います。もっと人間の存在性を問うような視点から、あるいは美というものを考慮した視線から追求すれば、SMの世界の本来の姿が浮かび上がってくるのではないでしょうか。人間を忠実に表わすという点でSMは、その基型になると思います。好奇心に終わらせず、ある理論的なものとして確立させることが大切だと思っています。

（新潟市・田中宏一）

○

私は三十才の貿易従事の会社員です。初心者ながらSMに興味を持ち、本誌を読んでいます。大阪の深田菊子さん。喜びを共にしたいと思っています。私は体が少し弱いせいか、環境のためか、SM両方に興味を持ち、ロマンチックに酔っております。妖艶な静子夫人、妖麗な刺青、体いっぱいの美しいアクセサリーの美女、肌の香り、体毛等々初心者ながらSM的な愛を望んでやみません。

（神戸五郎）

○

高村浩子様。貴女の告白を拝見し、早速お便りいたします。私は現在、やっと二十才になったばかりの青二才です。私は二年ほど前からSMに関心を持ちはじめましたが、残念なことに現在まで経験がありません。貴女のようにMの方であれば、自縛とか自分で自分をいじめるような行為もできましょうが、S性の傾向が強い（自分ではそう思っています）私は、ただ空想するだけです。何事においても経験なくしては、そのものの本当の姿というものは摑めず、中身のない薄っぺらなものにすぎません。それで、ぜひ貴女と実際にプレイをしてSMの本当のものを感じたいと思っております。

（福岡市・高田和義）

○

5月号のカメラ・ハント美女妊婦の富田由美子夫人は、その後どうなったのかと気をもんでいる。妊娠7カ月のハタチの初産婦というだけあって、そのういういしい羞恥は素晴らしかった。岸田今日子によく似たネバッコイ甘美さが忘れられぬ。辻村氏が多忙なら、ぜひ好機を逸さないように見事な臨月妊婦腹を撮影しておいて欲しい。許されることならば見栄も外聞も打ちすてて、カメラの助手として奉仕したいと思っている。ぜひ、この奴隷を撮影の雑用と責めに使って頂きたいと思う。

（神戸・乃美対造）

○

イタリア版「0嬢の物語」というキャッチ・フレーズに魅かれてレナート・ギョッドの「愛奴」早川書房刊、ハヤカワ・ノヴェルズを読んでみた。広告の文句にたがわず、これはマゾヒストの遊びを心理的な面から徹底的に微に入り描いた珍しい小説だ。こういう本が、まっとうな文学作品として書店に並ぶようになったとは、ご同慶のいたりである。ただ愉快なのは、訳者がこの名著をSM文献として理解していないことであり、永遠の謎である女性心理の核心をさぐる透明な心理小説、などと定義づけていることである。もっとも女性心理はマゾヒスティックなものという哲学が訳者にあるのなら、これはこれで皮肉になるのだが、大真面目な解説を読むと、それほど粋な訳者ではないらしい。したがって、訳文がお上品になりすぎているのも気になる。しかしそうした難点があるにもかかわらず、読む者をマゾヒズムの真髄へと、みちびいてくれる。近頃、読んだコクのある小説として、皆様に、ご一読をおすすめする。

（川崎・ウマスキーノ）

○

私は本誌を購読し始めて、まだ二年余りで、昔の本誌のことは、

**＝御送金についてのお願い＝**

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もありますので、ご利用下さい。尚、便宜上「切手代用」にても結構ですが、必ず一割増にてお願い致します。

よくわかりませんが、既刊号の中にも多くの傑作があることと思います。たとえば今、話題になっている「家畜人ヤプー」なども、本誌の生んだ名作の一つだと思いますす。我々のように本誌購読年数の少ない者のために、はたまた本誌創刊以来のオールド・ファンのために、ぜひ再録をお願いします。
（山田二郎）

○

奇ク増刊緊縛集を受け取りました。ずい分、石粉を使った、ずっしりと重い紙ですね。先ず嬉しくなりました。早速、開け、昼休みと、夜、仕事を終えてから、見ました。佐々木真弓さん、長井葉津子さん、前田真知子さんなどが好きになりました。特によいのは二十二頁のと百二十二頁で、他に七十三頁―八十頁が、好いと思います。特別な美人は、いないようですが、八十三頁のように、お尻が大きく見えるのが、特に美しく感じました。
（高知・芳村宏）

○

最近の本誌は紙質の向上が目につく。そして以前に増して読みやすくなった。しかし、ただ一つ欲をいえば、もう少しページ数をふやして二百八十ページぐらいにしてもらいたいものだ。内容の方を見てみると巻頭の城章夫氏の「二度目の撮影行」は前回に掲載されたものと、内容的に余り変わらないが、こまかいところまで、よく記録されているのには感心させられた。できれば次回は、浣腸、バイブレーター、ムチ打ちなどのレいただきました。私はムチ打ちとか縄での縛りには余り興味がございませんが。お浣腸やオシメ、それにフェチというのでしょうか、下着に興味を持っております。私は一人住まいの気安さから夜寝る前に毎日、お浣腸をして、オシメをあて、しばらく我慢して、堪えられなくなってから排泄しております。こんなことは人には言えず、私一人の秘密にしたい気持なのでございますが、一方その反対に、他の人にお浣腸されてみたいという願望がございます。同性の同じ趣味の方とおつき合いして、下着の交換など行ないたいと思っております。
（紅かほる）

## 安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しう〉

髪吊りで強烈ムチ打ち
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈した〉

片足首引きつけ縛り
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しち〉

尻立て鞭打ち艶姿
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しつ〉

柔肌に炸裂するムチ
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈して〉

エビ縛りの鞭打ち
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しと〉

貞操帯着用鞭打ち
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しや〉

痛打にもがく美女体
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しゆ〉

あぐら縛りの羞恥責
大手札四枚一組　五〇〇円
安井喜久子　略号〈しよ〉

片脚挙げで晒す裸身
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とは〉

強烈エビ縛りで苦悶
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とに〉

膝頭縛り開股竹棒責め
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とへ〉

竹棒開股足首縛り
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とほ〉

股間縛りの裸身表情
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とち〉

菱縄縛り猿ぐつわの表情
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とり〉

乱痴戯騒ぎの結末
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とぬ〉

菱縄縛りで床に喘ぐ
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とる〉

浣腸責めの甘い恐怖
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とか〉

浣腸液の注入直後
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とま〉

強制浣腸の各姿態
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とみ〉

浣腸責めの美態開陳
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とめ〉

浣腸を待つポーズ
大手札三枚一組　四〇〇円
中河　恵子　略号〈とも〉

ポートをしてもらいたいものだ。カメラ・ハントと並んで、本誌の二本柱である「花と蛇」は最近、よく言われているように、マンネリ化してしまって、進歩なしの足踏みの態というところで、ここらで一服の清涼剤が欲しいものだ。「パノラマ島秘譚」と「幻想帝国」は、文法的に非常に近い使われ方をしているので、離して掲載してあるのはいいと思う。高村浩子さんは文章も大変上手で、飼育してその体験など書いてもらえたら大変、面白いものができると思う。できれば私は御主人様になってみたいと考えてもいるのだが……。三、四カ月前は夫婦プレイ特集のような形になっていた本誌だが、最近は又以前のような地味なSM誌のパイオニアとしての道を着々と歩み続けているということは、我々愛好者として、心強いばかりだ。今後とも編集部の努力をお願いする。

（吉岡隆二）

○

荒尾慶子未亡人様へ。貴女の告白体験文を拝見し、深く御同感と共に御同情を申し上げます。束の間の喜びは、哀しみを、より深いものにします。恰もこの世の終わりかのように、お思いだったことでしょうけれど、この世には、数多くの、まだまだ貴女よりも、もっと不幸な人々がいるということです。その中の私も一人でございます。貴女より不幸な身の上でした。そのわけは、私が学生時代に同級生の一人を恋してしまったからです。愛を打ち明ける前に、彼女は去って行ったので、私の恋は片恋で終ってしまったが、いまだにしばしば思い浮かべています。私には貴女のお考えが痛いほど、よく手にとるように分かります。だから気休めの、なぐさめの言葉等、かけません。時に解決してもらうより仕方がないと思います。時が何もかも解決してくれるでしょう。時にまかしなさい。甘い甘い愛の6カ月の夫婦生活は、荒尾慶子という主婦の貴女にとって生涯の最良の月日だったことでしょう。だが人生は、貴女にとってまだまだ只今からも追って廻ることですし、生きている間は、思い出だけで人生を過ごすわけにはいきません。何か心の寄りどころがなくてはなりません。人生は二度とないのだし、できれば、もう一度最良の日と人を、お摑み下さいませ。夢の中で、しばしば亡き御主人を思い浮かべることだと思いますが、お思いだったことと思いますが、

可憐表情の全裸縛り　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆめ〉五〇〇円

立縛り正面裸晒し　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆえ〉五〇〇円

両手吊り全裸晒し　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆひ〉五〇〇円

雁字搦目後手縛り　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆあ〉五〇〇円

股間縛り柔肌責め　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆも〉五〇〇円

猿ぐつわ開股責め　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆに〉五〇〇円

豊満な臀部強烈責め　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆほ〉五〇〇円

強制全裸開股責め　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆみ〉五〇〇円

股間縛りで悶える　大手札四枚一組　金原奈加子　略号〈ゆろ〉五〇〇円

全裸縛りに羞らう　大手札三枚一組　金原奈加子　略号〈ゆへ〉四〇〇円

私の妊娠腹を見てね　大手札四枚一組　中河　恵子　略号〈ゆわ〉五〇〇円

縛られた妊婦横臥す　大手札四枚一組　中河　恵子　略号〈ゆよ〉五〇〇円

被虐に燃える全裸妊婦　大手札四枚一組　中河　恵子　略号〈ゆぬ〉五〇〇円

尚も見せたい妊婦腹　大手札四枚一組　中河　恵子　略号〈ゆる〉五〇〇円

股間縛り首縄正面　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よれ〉四〇〇円

両手吊り正面晒し　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よそ〉四〇〇円

全裸高手小手の麗身　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よの〉四〇〇円

全裸股間縛りの媚態　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よや〉四〇〇円

強烈な変型エビ縛り　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よい〉四〇〇円

正座猿ぐつわの仕置　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よふ〉四〇〇円

凄絶海老責め地獄　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よえ〉四〇〇円

女体二つ折り縛り　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よぬ〉四〇〇円

あぐら縛り全裸晒し　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よあ〉四〇〇円

イルリの浣腸責め　大手札三枚一組　長井葉津子　略号〈よた〉四〇〇円

す。貴女は、類まれな大和撫子だと思います。そして、亡き御主人を愛されていたことも分かりますが、暮して行くためには一日も早く心の傷を癒さなければなりません。私の好きなものは、胡坐縛り、股間縛り、開股縛り、剃毛、バイブ等、色々な責めです。貴女の亡き御主人のようにはゆかぬと思いますが、私が貴女のパートナーとして立候補いたします。ぜひとも私をお選び下さい。そして生き甲斐のある時を過ごしましょう。

（和歌山・児島嘉明）

○

私は女性に辱かしめられることを夢みている小柄な20才の男子です。つぎのようなことをされたらどんなにすてきでしょう。こういうことをして私をなぐさめて下さる方、どうか返事下さい。三、四人ぐらいの若い女性に大の字にされて、いじめられるのです。口の中にパンティの汚れたものを入れられ、顔の上に跨がれて息がつまるほど押えられるのです。その他浣腸をされたり馬になって這い廻らされたり、私が倒れ込んでもなお、いじめぬかれるのです。そして、ついには私が気を失ってしまうのです。奥さんや娘さんで欲求不満を解消するために私を飼育して下さる方、お便り下さい。

（宮城県・奴隷男）

○

高村浩子さんへ。貴女の告白文拝読しました。私も現在は妄想の世界に毎日を送っています。男と女の違いで、まだまだ現実の世界には相当の道程があると思いますが、そのうちに貴女との交際が実現することを望みながら、毎号、貴女の記事の出てくるのを楽しみに待っておりますと共に、私の妄想の世界に貴女を呼びよせて色々とプレイいたしております。たとえば部屋の真中で、身体につけているものを一切、除き、何時間も何もせずに眺めて裸のはずかしさを味あわせたり、ときには高手小手に縛り、風呂の湯舟に坐らせて水を注ぎ、だんだんに風呂の水が沸いてくるのを、ぐっと我慢させる忍耐のいる責めをやるのが、私の得意とするものです。他にも色々と妄想の世界で出来得ることも現実には無理なものがあるでしょう。貴女の告白文にありましたように、ときには私は他人には出来得ないことを貴女にだけ実行してみたいのです。私も貴女同様、内気な性格ですので、派手に文章を

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中
大手札三枚一組　四〇〇円
東浦ひかる　略号（かみ）

強制空気浣腸
大手札三枚一組　四〇〇円
東浦ひかる　略号（かく）

百ccのポンプ浣腸
大手札三枚一組　四〇〇円
東浦ひかる　略号（かな）

浣腸責の極致
大手札三枚一組　四〇〇円
東浦ひかる　略号（かむ）

女体浣腸シリーズ
大手札十二枚一組　一五〇〇円
梨花悠紀子　略号（れち）

強制女体浣腸三態
大手札三枚一組　四〇〇円
絹川文代　略号（きか）

イルリガートル浣腸
大手札十二枚一組　一五〇〇円
梨花悠紀子　略号（いるり）

太い浣腸器で浣腸
大手札三枚一組　四〇〇円
東浦ひかる　略号（かふ）

自分で浣腸をする女
大手札三枚一組　四〇〇円
遠藤百合子　略号（ゆか）

浣腸器と女
大手札三枚一組　四〇〇円
絹川文代　略号（ほの）

エネマ・シリーズ
大手札四枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号（ふい）

イルリの嘴管挿入
大手札五枚一組　六〇〇円
大塚啓子　略号（るは）

女体浣腸プレイ
大手札三枚一組　四〇〇円
大塚啓子　略号（ほは）

迸ばしる浣腸液
大手札三枚一組　四〇〇円
大塚啓子　略号（ほい）

浣腸後の排便
大手札五枚一組　六〇〇円
大塚啓子　略号（へき）

便意に苦悶する女体
大手札五枚一組　六〇〇円
大塚啓子　略号（へか）

浣腸される清子
大手札三枚一組　四〇〇円
山原清子　略号（かろ）

浣腸に興ずる女
大手札八枚一組　一三〇〇円
山原清子　略号（かへ）

浣腸に悶える女
大手札十枚一組　一五〇〇円
山原・東浦　略号（かも）

イルリガートル
大手札七枚一組　一二〇〇円
山原清子　略号（かに）

グリセリン溶液注腸
大手札六枚一組　一〇〇〇円
山原・東浦　略号（かて）

書いたりはできません。しかし惨忍性は人一倍、持っています。よろしければ仲間の一人に加えて下さい。私は決して現在、巷に多く見られる急造の、SMマニアではありません。
（縄本縛太郎）

○

巷にはSMを扱った月刊誌、週刊誌の氾濫している中で、いぶし銀のような光を放っている奇ク誌に「妄想の自画像」を発表された高村浩子様。私は本誌を読み始めて三年目ですが、プレイは、いつも空想だけで経験はありません。貴女の手記を読み、フォトを見たその日から、貴女を他の人に渡したくないという欲張りな思いに駆られ本日ペンをとった次第です。三年間、奇ク誌を参考に、私なりに研究してきました。その縛り方責め方を貴女に加えてみたい。貴女が望んでいる「花と蛇」の小夜子、静子夫人のように、あらゆる羞恥責めを加えて私の奴隷にしたい、などと考えています。貴女を責めていることを想像し、胸をときめかしながら、あなたのお便りをお待ちします。
（三重・西浦）

○

阪東太郎殿。貴御夫妻の充実したSMプレイぶり、いつも楽しく拝見いたしております。七月号には甘美な妊娠腹を発表して下さりありがとうございました。ぜひ御妻女のM飼育調教のいっかんとして、今後もどしどしと種々なる羞恥責めのフォトを発表下さいますよう、お願い申し上げます。同じく七月号で紀川正信殿が御妻女の和式便器上の美しい裸身を発表されましたが、妊婦の和式便器上の屈折肢体は、特に華麗かと存じます。よろしく御考慮ねがえれば幸いです。定められた期間を有意義に活用して、ぜひ、おもいきったフォトを御発表下さい。
（神戸・国川栄一）

○

私が始めて貴誌を手にしたのは今から五年ほど前のことでした。本屋の中で雑然と積まれた本の中に貴誌があり、それを手にした時の、何とも言いようのない羞かしさを、今も描くことができます。頁をくっていくうちに、団鬼六先生の「花と蛇」に出合いました。そうした先生の作品を一気に読み終えたときに、自分の心の中にある一つの変化がおきたことを覚えています。漠然とした広がりを持ちながら、それでいて、ある一つの方向に動いていく……そんな心の動きに出合ったのです。そうして心は強く一つのある定まった方向へ走りはじめたのです。ですから私の出発は、この「花と蛇」にあったのです。そうして、この作品を読んでいく中から、次第次第


浣腸と便意の苦悶　大手札三枚一組　遠藤百合子　略号（のけ）　四〇〇円
高圧空気浣腸　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（むい）　四〇〇円
浣腸場面大写し　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（むは）　四〇〇円
施される浣腸　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（むろ）　四〇〇円
浣腸をする女　大手札三枚一組　遠藤百合子　略号（ゆか）　四〇〇円
自ら施す浣腸　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（ぬる）　四〇〇円
浣腸器を弄ぶ女　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（ちぬ）　四〇〇円
浣腸を施される女　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（ちり）　四〇〇円
浣腸後介添排便　大手札六枚一組　山原・東浦　略号（かね）　一〇〇〇円
シリンダーにて浣腸　大手札六枚一組　山原・東浦　略号（かた）　一〇〇〇円
イルリガートル嘴管挿入　大手札六枚一組　山原・東浦　略号（かち）　一〇〇〇円
アーヌス浣腸幇助　大手札四枚一組　山原　清子　略号（うも）　五〇〇円
浣腸に興ずる清子　大手札四枚一組　山原・東浦　略号（かの）　七〇〇円
浣腸される浣腸マニア　大手札四枚一組　山原　清子　略号（うわ）　五〇〇円
浣腸悦楽独りプレイ　大手札五枚一組　美木乃々子　略号（ぬる）　六〇〇円
施される浣腸の美味　大手札五枚一組　美木乃々子　略号（ぬか）　六〇〇円
挿入された嘴管　大手札四枚一組　大塚啓子　略号（るて）　五〇〇円
襲いくる浣腸器　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（ちら）　四〇〇円
女体浣腸独り遊び　大手札二枚一組　大塚啓子　略号（るち）　三〇〇円
浣腸器を弄ぶ女　大手札三枚一組　大塚啓子　略号（ると）　四〇〇円

に漠然としたものが一つの形をとり、心がはっきりと縛りというものを意識したのです。絹川文代さんの肢体にあこがれ、大塚啓子嬢の縛りの姿に教えられていったようです。単なる心の戯れから、はっきりと一つの形を帯びて、縛りの世界へと心は、はっきりと定住していったのです。だが、残念なことにある事情により本誌と遠ざかってしまったのです。それは、今考えると大変なハンディキャップになっているように思われるのです。そうして、再び本誌を手にしたのは、神田の本屋街です。今まで抑えていた感情が、空高く吹き上げていったようです。再び貴誌と対面したことは、私にとり大変な喜びであったのです。夢中になって読みました。一頁の読み残しもせぬようにと、心に言いながら読みました。以前と違い読み物の豊富さに思わずうれしくなったり、告白の手記の中から、自分も早く一人前のプレイヤーになりたいものだと思ったりして読み続けました。その中から高村浩子嬢の肢体に出合い、思わず心がふるえました。白い猿轡からのぞく、うつろな瞳、そして縄だけが知る体の秘密を思い、思わず胸の高鳴るのを感ぜざるを得ませんでした。自分の心の中で抱いていた女性の姿に近い彼女の肢体と表情に、思わずバンザイと、いいたくなるほどです。ぜひ彼女の頒布写真を、おいておきたく思っております。

（志賀真佐男）

○

神戸の淋しい女性の方へ。本当に御同情申し上げます。御主人を交通事故で失い、二才の娘さんをお育てになる為にホステス稼業。どうか強く生き抜いて下さい。貴女は一寸した動機からMの女性として貴女の心を満たしてくれる男性を心待っておられる様子ですが充分、御注意されて、偽善的な男性の犠牲になり、本当のSMプレーでなくして、将来をあやまることのないよう願っております。

（岡山・早川敏男）

○

七月号の香代女王楽のお呼びかけに私もマゾの一人として、お便りさせていただきます。私は女王様に奉仕することだけがマゾの生きる道と思いますが、なかなか女王様のお呼びかけがなく、ひとり淋しく空想をして自分をなぐさめていました。けれども今回、香代女王様のお呼びかけがあり、私は

〔異色緊縛 女性フオト集〕
〈光沢印画紙極鮮明焼付〉

首縄高手小手全裸縛り　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いき〉

縄の痛さに耐える表情　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いめ〉

股間縛りは凄く締まる　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いあ〉

卓上の緊縛裸身は躍る　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いて〉

両手吊りの全裸体縛り　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いた〉

投げだした被縛女体　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いま〉

麻縄は白人の女体を裂く　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いゆ〉

縛られるのいや！　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いせ〉

私の裸をジロジロ見ないで　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いし〉

日本式後手縛りの痛さ　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いそ〉

白人女性をいたぶる魔手　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いや〉

金髪美女も縛られて台なし　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いも〉

異国女性の被虐の表情を狙う　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いむ〉

美しき白人緊縛の姿態　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いけ〉

逆エビ責めの外人女性　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いひ〉

雁字搦目で椅子に縛る　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いえ〉

落花狼藉のしとねの上で　大手札三枚一組　五〇〇円
シーラ・ケニー略号〈いう〉

妖艶な縛られぶりの沖縄美人　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほへ〉

股間縛りの痛さに開股か　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほけ〉

悶える厳しい縛りの明子　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほて〉

椅子で演ずる明子の痴態　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほと〉

観念して縄に身を任す　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほあ〉

縄は豊満な柔肌をくびる　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号〈ほさ〉

女王様の奴隷として御奉仕いたす覚悟をきめました。私はM百パーセントの男性で身長百五十八センチ、体重五十二キロです。一生貴女様の奴隷としてお飼い下さい。一生女王様の犬として、また馬となりときには人間便器として羞かしめて下さい。肉体的にも精神的にも女王様の前に、くいなく捧げるつもりでございます。（マゾ茂）

○

初めてお便りします。ふとしたことから本誌を愛読するようになり、もう三年余りになります。小杉千恵さんや佐野みさ子さんの文が、とても正直に表現されていて楽しくなります。私なりの方法で心ゆくまで羞かしめてあげたいと思っています。お便り下さったら私の気持や性向を、ぶちまけてしまうつもりです。「花と蛇」は好きな小説ですが、どうやら最近はマンネリ化して同じような事の繰り返しのように思われます。もっと奇抜な工夫で発表して下さい。所謂、ポルノ小説とは異質なものですが、SM小説もエスカレートさせて、更に巾の広いところを見せて下さい。私は妻子ある四十才の公務員ですが、同好の方お便りをお待ちします。（貫戸績夫）

○

荒尾慶子様。6月号で「流れる雲に身を托して」の告白文を拝見し、大変感動いたしました。私は22才の男性です。未経験でありますが、貴女の告白文を読んで自信ができました。貴女の抱いている感傷を消して差し上げたいと思います。如何でしょうか。三重県に住む私ですから、貴女には少々遠いかと思いますが、吉報をお待ちいたします。（三重・石田一郎）

○

私は奇クを十数年来、愛読いたしております女性です。現在、私は美容院を経営いたしておりますが、先月、夫が亡くなり全くの自由な身になると、自分のS性を満たすための男奴隷が欲しくなりました。亡夫はノーマルな人で、私の気持などに気づかずに亡くなりましたので、今まで私にはSの経験はありません。しかし、自分では強烈なS性の持主と思っております。私は相手の気持など無視して、私の思いのままに相手を痛める、気品ある美青年で、秘密を守れる者に限り、私の奴隷として私の足下に侍ることを許してやりますから、お願いの手紙を出しなさい。ただし、その中で私の気に入った者だけ会ってやります。手紙は、詳しく書くことを命じます。私は三十八才で、脂ぎった肌の、肥り気味の大柄な、そして、きつい顔をした女王です。（大阪市・佐藤満代）

○

紀川正信氏の四月号のプレイフォトを見て、全く驚きました。それは私どものプレイと余りにも酷似しているからです。特に、黒のストッキング姿で臀部縛りなどは外出時に良くやるスタイルです。前に車中でのフォトがありましたが、屋外フォト等、他にもありましたら、拝見したいものです。今後ともよろしく。先日、少し変わ


美しき抜群の正面を晒す　大手札三枚一組　四〇〇円
座間　明子　略号＜ほゆ＞
悦虐にむせぶ美貌のひと　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほし＞
責められて恍惚境をさまよう　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほひ＞
足挙げ縛りと開股縛り　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほも＞
超羞恥責めの極致　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほせ＞
股縄は何んでも知っている　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほす＞
鼻責めの悦楽境地　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほめ＞
鼻を愛撫する責め　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほん＞
蠟燭責めと臀部打ち　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほみ＞
喰い込む股間縛り　大手札三枚一組　四〇〇円
渡部　好美　略号＜ほに＞

ったSM日記を書こうと、地下鉄や街中をユキと歩きまわり、瞬間的なシャッターチャンスで数枚、撮ったのですが、誠に出来が悪くもう一度、計画してみようと思ってます。とにかく難しさを改めて痛感した次第です。うっかりフラッシュをたくわけにもいきませんので、暗い所では無理だし、といって余り明る過ぎてもまずい。人の往来の切れ目を狙うのだからスリルだけは十二分に味わえます。真夏になってはコートが着られないので、この梅雨中になんとかやってみるつもりです。（小竹一浩）

○

34年ごろから奇クを愛読しているM男性ですが、現在まで未だ経験はありません。一度でいいからS女性の奴隷となって、あらゆる責め苦を受けてみたいと思っている折柄、川野香代様のお話を聞き応募いたします。よろしくおねがいします。（熱海市・山田行男）

○

前略御免下さい。私は随分前から本誌を愛読させていただいております。最近、SMブームで、書店にも数多く、この種の雑誌が出ておりますが、本誌ほど読者の身になって企画されている雑誌は他にありません。さて七月号で川野香代様が責められたいM男を求めておられるそうですので、早速お願い申し上げます。人間には、いろいろの性格があり、人に言えぬひそかな好みや趣味があります。私も、その変わった性格の一人でございます。私は多分にマゾ的で女性にドレイにされることを一番の幸福に思っているのです。サド女性に思う存分、残虐な行為や恥辱を受けられることを、いつも夢に描いて過ごしております。私自身、私こそサド女性に奉仕するために、この世に生まれてきた男と思っております。ムチ責め、浣腸責め、ローソク責め、また人間馬人間犬、人間便器など、女王様の思いのまま、御満足していただけるように、自由にお使い下さるだけで嬉しいのです。若く美しい川野香代様にM男として使用していただければ、死んでも満足です。私のような中年の男では高嶺の花で、お願いしても不可能であることは百も承知でありながら、申し出ずにはおられないのです。どうかこの私の気持をお察し下さい。（姫路市・ドレイ志願の稔）

○

荒尾慶子様。貴女の文を読ませ

## 編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　五〇〇円　金原奈加子　略号＼さめ／

両手吊りの臨月妊婦　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さも／

若妻初妊娠の哀歓　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さい／

妊婦の全裸縛り全身　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さに／

妊婦腹の緊縛側面　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さみ／

強烈縛り妊婦責め　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さま／

若妻の緊縛妊孕美　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さろ／

臨月腹の全裸晒し　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さち／

膨満の妊婦乳房責め　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さむ／

躍動する妊婦の裸像　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さほ／

妊娠という異常美の女体　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さへ／

見てほしい臨月腹　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼さと／

妊婦全裸の全身肢体　大手札三枚一組　四〇〇円　金原奈加子　略号＼ささ／

全裸正面の縄掛け　大手札三枚一組　四〇〇円　小池美喜　略号＼れろ／

柔肌の高手小手縛り　大手札三枚一組　四〇〇円　小池美喜　略号＼れほ／

後手首を縛られた少女　大手札三枚一組　四〇〇円　小池美喜　略号＼れへ／

飼育された美少女縛り　大手札三枚一組　四〇〇円　小池美喜　略号＼れと／

縛られた美女二人　大手札三枚一組　四〇〇円　小池・松山二嬢　略号＼とそ／

全裸の美女を連縛する　大手札三枚一組　四〇〇円　小池・松山二嬢　略号＼とれ／

白肌に喰い込む縄目　大手札三枚一組　四〇〇円　松山真樹子　略号＼とわ／

一糸まとわぬ柔肌縛り　大手札三枚一組　四〇〇円　松山真樹子　略号＼とら／

開陳した華麗縛り肢体　大手札三枚一組　四〇〇円　松山真樹子　略号＼とゆ／

縄に喘ぐ諦観の相　大手札三枚一組　四〇〇円　松山真樹子　略号＼とえ／

ていただきました。貴女が、たとえ、わずかな間でも一緒に過ごされ愛し愛された、いや言葉では言いあらわす事はできるはずがありませんが、御主人との悲しい離別の悲しさの内にあって、御主人人が貴女を愛した故に、貴女に残された、また貴女の奥底から引き出された、羞恥に対する責めの願望を、御主人を愛された故に持ち続けられる貴女にお会いしたいと思います。人を愛し、その愛した人と、慟哭とともに別れなければならなかった者同志として貴女にお会いしたいと思います。貴女の愛した人の代わりにはならないと思いますが、貴女の心のすき間を少しでも埋めてみたいし、また、私の心の淋しさを貴女に会って晴らしたいと思います。

（大阪府・長田久）

○

第二の春日ルミを目指す美しい川野香代様が、男性を責めるのが何より大好きとのことですので、小生は勇気を出してお便りさせていただきました。小生の年令では大変、失礼美しい川野香代様には大変、失礼だと思っておりますが、どうかよろしくおねがいいたします。小生の手足をロープで縛って、うんといじめて下さい。

（京都・木代重雄）

○

私は今年で丁度、二十年余り、本誌を愛読しております四十才の男性です。こう書きますと、SMともに相当なベテランのように思われるでしょうが、私達のSMプレーは非常にソフト・タッチで続けて参りました。また私はSM両方好みの男性の一人です。SMプレーには色々ありまして、程度、好みも、また人それぞれ違うと思いますが、毎月、奇クで拝見します先輩諸氏の、すさまじい限界ぎりぎりのようなプレーは、みごとなものと思います。でも、SMに関心を持ちはじめた初歩のSM同好者には、なかなか入り込みにくいと思いますが、私達が続けて参りましたソフト・タッチのSMプレーは、非常に楽しい、ほのぼのとした、誰でも初歩の同好者の方も何の抵抗もなく入り込め、知らず知らずのうちにSなりMなりのよさが分かってきます。レズとSM両方のプレーができる私達複数プレーは、体験したことのない方には分からない、一対一のプレーでは、とうてい味わうことのできない一種独得の味があります。レズ

| | | |
|---|---|---|
| SとMの甘い一瞬 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 松山・小池二嬢 | 略号〈とさ〉 | |
| 縄に通う愛情の焔 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号〈とけ〉 | |
| 相愛の極致を描く二女 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号〈とな〉 | |
| 鞭に狂う悦虐表情 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らて〉 | |
| 鞭打ちにうねる肢体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らあ〉 | |
| 足吊りの被虐肢体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らえ〉 | |
| 美しきマゾの境地 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こよ〉 | |
| 乳房強烈膨隆責め | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こわ〉 | |
| 海老責めに苦悶する | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こお〉 | |
| 全裸の緊縛全身晒し | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こぬ〉 | |
| 煙草責めに喘ぐ女 | 大手札二枚一組 | 三〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こる〉 | |
| 羞恥の足挙げ責め | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子 | 略号〈こそ〉 | |
| 卓上の股間縛り狂態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈この〉 | |
| 猿轡の臨月妊婦縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈こや〉 | |
| 臨月腹の革紐股間縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈こふ〉 | |
| 脈打つ全裸の臨月腹 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こへ〉 | |
| 二つ折りで責める女体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こち〉 | |
| ホステスの緊縛姿態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こに〉 | |
| 羞恥に悶える全裸緊縛 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈ころ〉 | |
| 鞭打ちにうねる肢体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らあ〉 | |
| 足吊りの被虐肢体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らえ〉 | |
| 美しきマゾの境地 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こよ〉 | |
| 乳房強烈膨隆責め | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こわ〉 | |
| 海老責めに苦悶する | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こお〉 | |
| 全裸の緊縛全身晒し | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こぬ〉 | |
| 煙草責めに喘ぐ女 | 大手札二枚一組 | 三〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こる〉 | |
| 羞恥の足挙げ責め | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 長井葉津子 | 略号〈こそ〉 | |
| 卓上の股間縛り狂態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈この〉 | |
| 猿轡の臨月妊婦縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈こや〉 | |
| 臨月腹の革紐股間縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 中河恵子 | 略号〈こふ〉 | |
| 脈打つ全裸の臨月腹 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こへ〉 | |
| 二つ折りで責める女体 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こち〉 | |
| ホステスの緊縛姿態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こに〉 | |
| 羞恥に悶える全裸緊縛 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈ころ〉 | |
| 鞭に狂う悦虐表情 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 関谷富佐子 | 略号〈らて〉 | |
| 緊縛艶姿に映えるライト | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号〈とよ〉 | |
| 柔肌と柔肌のレズ狂態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| ミキとマキ | 略号〈とや〉 | |
| 臀部強調後手縛り | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 佐々木真弓 | 略号〈こほ〉 | |
| 緊縛艶姿に映えるライト | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号〈とな〉 | |
| 柔肌と柔肌のレズ狂態 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| ミキとマキ | 略号〈とや〉 | |
| 抱擁する美女二人 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| 松山・小池二嬢 | 略号〈とさ〉 | |
| 縄に通う愛情の焔 | 大手札三枚一組 | 四〇〇円 |
| マキとミキ | 略号〈とけ〉 | |

## 次号（九月号）は七月二十五日に発売いたします

プレーは知っているがSM複数プレーは知らない方、経験したいと思いながら、なかなか実行できない方、また初歩の方、お便り下さい。ボーリングやドライブを楽しむような気楽な気持でSM複数プレーの醍醐味を御教授させていただきます。レズ・プレー愛好の女性の方、ぜひ一度、私を加えた複数プレーを楽しんでみませんか。

（京都・3H生）

○

一年ほど前、ふとしたことで手に入れた本誌を読んでいるうちに私はその魅力にとりつかれてしまいました。それから一年、私は身も心も成長いたしました。しかしSMのことは一時も忘れることができません。私は年上の女の人に責めていただきたいと空想しています。美しいお姉様。どうか私をSMの世界へおみちびき下さい。私は未熟者ですが、念願をかなえて下さるようおねがいいたします。

（愛知県・斎藤一男）

○

いつも素晴らしい内容の奇クを楽しみに続ませていただいています。長年の実績と、真のSMの心を持つ者への理解からの発刊は、他の類似出版物と遥かに異なる点ですから奇クはSM誌の王者といえましょう。今後とも胸躍らす素晴しい企画をお願いします。渡部様。六月号にて渡部好美という活字を見つけ、思わず胸の躍るのを覚えました。と申しますのは昨年の十月号にて辻村先生のカメラハントの中で、渡部様の御姿を拝見して以来、私の心の底深く沈んでおりました〝SM〟の炎が赤々と再び燃え出したのです。それからと言う毎日は、渡部様御夫婦がプレーをなさっておられる姿、また苦しさにもだえる好美様の霞んだ御顔が、私の脳裡に灼きついて離れません。あるときなど、御主人に対して異常なほどの嫉妬を感じることさえ、あります。そうした心苦しい日が過ぎた過日、書店にて渡部様の告白文を拝見いたしましたことで、私は心の落着きを取り戻したのでございます。最近では、好美様の写真または文を読んでおりますと、目の前に好美様がおられるような錯覚さえ感じます。私は今のところ、あまりプレーには経験が浅いのですが、浣腸プレーは私の特殊方法で楽しんでおります。どうか色々御指導たまわりたい一心です。私のこの気持ちが御理解ある御夫婦の元に届くことを祈ります。

（京都・好美ファン）

○

神戸の淋しい女様。私が是非、あなたの望みをかなえてあげたいと思っています。私の好きな責めは縛りで、中でも股間縛りが大好きです。貴女のふくよかな乳房の上下に、太目の白い縄をくい込ませ、高手小手にキリリと縛り上げます。そして別の縄でウエストをしめ上げ、おへその下で止めて、縄尻を貴女の股の下に廻します。私は、その縄尻をとり「歩け、女奴隷」と命令します。もちろん貴女の口の中には猿ぐつわを噛ませます。それから鼻責めや足挙げ責めや、その他、種々の羞恥責めをしてみたいと思っています。貴女はどんな責めを、お望みでしょうか。貴女を年上の女奴隷として、いたぶってあげましょう。

（京都・山岡幸一）

○

突然ながら御免下さい。先生がセックスについての御相談、御指導にのって下さるということを知りましたので、このようなお便りを差し上げました。私は四十七才の男性でございます。二才下の妻との間には、四人の子供がおります。生まれつきの性格でありましょうか、少年の頃より女性上位の写真、絵画、記事に異様に興味が湧き谷崎文学などは良く愛読いたしました。またサーカスで、女性団員が男性団員の肩や背に乗る場面がありますと、幾度となく見物

に行ったのであります。青年期になりますと、若い女性のお尻の下敷きになりたい、そして無理矢理、排泄物を呑まされたい、と空想するようになり、またそのようなことを空想することにより、おなことを空想することにより、おは正常な夫婦生活を送ってしたが、三、四年たってから、妻を口説いて始めて今までの夢を実現しました。その後、十年近く、子供達が大きくなるまで、主として浴室等でセックスの前戯として小水飲用など行なっておりましたが、美しい妻も若くなくなり、子供達も勉学のため夜遅くまで起きているので、何時となく、そのようなことが出来なくなり、夫婦生活も以前ほど情熱がなくなりました。丁度そのようなとき、たまたま上京して知人に紹介された若い女性と交際することとなり、ひょんなことから私の心中を打ち明けたところ私の夢を実現してくれました。そして夢とともに情熱もまた、よみがえり、帰宅して妻を驚かせました。しかし、その情熱がさめかけたとき、再び上京して彼女に会って来ると、再び不思議にも若さが回復してくるのです。それからは最近まで年に数回、私は若さを仕込みに東京に通ったようなものでした。彼女の御小水が私には、どんな霊薬にも勝る、若さを保つための秘薬でございました。しかしその彼女に最近、縁談があり、彼女を幸福に出来る力のないことは充分、承知しておりました私は、心許りのお祝いをして彼女と別れました。そして私は、また以前のような情熱のない生活に逆戻りしました。男性としての幸福を願います私は、先生の御力におすがりして、この悩みを解消したいと思い御相談いたした次第でございます。以上は私が某セックス・コンサルタントに出そうと思って書いた手紙ですが、果たして満足する回答が得られるかどうか迷った末、未だ出さずにおります。若し数多き読者の方々の中にこの私を治療して下さる御方がおられましたらお便り下さい。

（富山県・高岡久人）

## 本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少なものもありますから、お早い目にお注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は〈小包〉にて発送の御負担を願います。多数一括してお求めの際は〈小包〉にて発送申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

昭和40年7月号（送共三二〇円）
昭和40年8月号（送共三二〇円）
昭和40年9月号（送共三二〇円）
昭和40年10月号（送共三二〇円）
昭和40年11月号（送共三二〇円）
昭和40年12月号（送共三二〇円）
昭和41年1月号（送共三二〇円）
昭和41年2月号（送共三二〇円）
昭和41年4月号（送共三二〇円）
昭和41年5月号（送共三二〇円）
昭和41年6月号（送共三二〇円）
昭和41年7月号（送共三二〇円）
昭和41年8月号（送共三二〇円）
昭和41年10月号（送共三二〇円）
昭和41年11月号（送共三二〇円）
昭和42年5月号（送共三二〇円）
昭和42年6月号（送共三二〇円）

昭和42年9月号（送共三七〇円）
昭和43年1月号（送共三七〇円）
昭和43年2月号（送共三七〇円）
昭和43年3月号（送共三七〇円）
昭和43年4月号（送共三七〇円）
昭和43年5月号（送共三七〇円）
昭和43年6月号（送共三七〇円）
昭和43年7月号（送共三七〇円）
昭和43年11月号（送共三七〇円）
昭和43年12月号（送共三七〇円）
昭和44年2月号（送共三七〇円）
昭和44年3月号（送共三七〇円）
昭和44年4月号（送共三七〇円）
昭和44年5月号（送共三七〇円）
昭和44年6月号（送共三七〇円）
昭和44年7月号（送共三七〇円）
昭和44年8月号（送共三七〇円）
昭和44年9月号（送共三七〇円）

昭和45年4月号（送共三七〇円）
昭和45年5月号（送共三七〇円）
昭和45年6月号（送共三七〇円）
昭和45年7月号（送共三七〇円）
昭和45年8月号（送共三七〇円）
昭和45年10月号（送共三七〇円）
昭和45年11月号（送共三七〇円）
昭和45年12月号（送共三七〇円）
昭和46年1月号（送共三七〇円）
昭和46年2月号（送共三七〇円）
昭和46年3月号（送共三七〇円）
昭和46年4月号（送共三七〇円）
昭和46年5月号（送共三七〇円）
昭和46年6月号（送共三七〇円）
昭和46年7月号（送共三七〇円）

## ＜編集後記＞

○好評だった「則天武后」＜真砂十四郎＞と「パノラマ島秘譚」＜藤見郁＞の二篇が、本号を以て完結致しました。御両所の労を深謝し、次作のご発表を待ちたいと思います。

○次号より「紫蘭の門」をひっ提げての風流極道軒氏の御登場を予定しておりますが、うちあけたところ、この原稿は十カ月余りも以前にお寄せ戴いたのを編集部に於いて暖めていたものです。もっと早く掲載したかったのですが、現在本誌の頁立てからみて、連載ものが多きに過ぎるのではないかと思ったからです。勿論、いいものでさえあれば、連載、読切りを問う必要はないようなものですが、やはり一号一話形式のほうが、気分転換にもなり、新鮮さが感じられるから妙です。

○最近特に大作をお寄せ下さる方が増え、千枚前後のものだけでも数篇山積。これを載せたら続きを送るからといわれる予告的なものは数多くあり、編集部としては誠に心強いのですが、やはり長距離となると、どうしても息切れし、足もつれが生じるようです。告白や体験手記ならともかくとしても、読ませることのみが目標の創作では、この足もつれは見過ごせない失点になるようで、やたら長い大作を志される向きには特に御留意下さるよう、お願い致しておきます。

## 〔懸賞原稿募集〕

＜体験、告白、手記＞

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

＜創作、小説、物語＞

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

＜感想、論評、批判＞

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千円以上の賞金を呈します。

＜(映画、雑誌)通信＞

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の〔懸賞原稿募集〕を致しております故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

＜読者通信原稿＞

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の栞☆

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重に包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

予約に限り
一月分(1冊)三五〇円＜送20円＞
三月分(3冊)一〇五〇円＜送共＞
半年分(6冊)二一〇〇円＜送共＞

奇譚クラブ　定価　三五〇円
八月　号
(第二十五巻第八号)
(通刊第二百八十二号)
昭和四十六年七月二十日　印刷
昭和四十六年八月一日　発行
編集人　杉原虹児
発行人　吉田稔
印刷人　北村俊夫
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
郵便番号558
発行所　暁出版株式会社
＜振替口座大阪四二七八三番＞
(昭和三一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四二年四月二一日
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しておりますす関係上、十八才未満の方には絶対販売下さらないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。